辻堂さんの冬休み

ららばい

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

辻堂さんの純愛ロードのその後の話を妄想で保管した話。
黒髪の愛ルートを終え、大と愛はラブラブしながらも季節外れの湘南の冬の嵐に巻き込まれる。
そして激情の冬を越し、別れと出会いの春は訪れる。
その時間の流れの中、不良娘たちは各々の進み方を決めた。

目次

プロローグ
1話：冬休みの他愛ない日 ―― 1
乾梓の純愛ロード
2話：江乃死魔の綻び ―― 25
3話：ツツパるもの ―― 44
4話：青春な奴ら ―― 64
5話：意地 ―― 89
6話：タフな奴ら ―― 132
7話：一方通行の仲間関係 ―― 169
8話：大のためなら ―― 208
9話：梓との約束 ―― 242
10話：所有権 ―― 273
11話：悪意 ―― 317
12話：不良だから ―― 355
13話：よからず ―― 395
冬休みのひと時
14話：惚れるワケ ―― 435
15話：新年を迎えて信念を新たに（前） ―― 481
16話：新年を迎えて信念を新たに（後） ―― 512
17話：バカップルな奴ら ―― 543
18話：幸せな奴ら ―― 578
冬の終わり、春の嵐
19話：腰越マキの憂鬱 ―― 620

20話：アットホームな奴ら ―― 663
21話：ブラックハーテッド乾梓 711
22話：フレンズ アゲイン ―― 776
23話：ワイルドライフ腰越マキ 833
24話：インドミタブル片瀬恋奈 870
25話：夢枕（前編） ―― 934
26話：夢枕（後編） ―― 972
27話：先に進むために ―― 1019
28話：飛行機雲 ―― 1053
エピローグ ―― 1098
29話：純愛ロード ―― 1165
番外編だよ辻堂さん！
30話：ラッキーアンドアンラッキー！（前編） ―― 1202
31話：ラッキーアンドアンラッキー！（中編） ―― 1227
32話：ラッキーアンドアンラッキー！（後編） ―― 1276
33話：三つの『あい』でI love 愛（前編） ―― 1306
34話：三つの『あい』でI love 愛（中編） ――
35話：三つの『あい』でI love

愛（後編）

36話：ワンデイ！

13861347

プロローグ
1話：冬休みの他愛ない日

空が青くて、どこまでも飛行機雲が続いていて、まるで子供のような気持ちを思い出すと彼女は言っていた。

「といっても、もうロケット雲消えてるよね」

育った過程で空に浮かぶあの長い長い白いモノを飛行機雲とロケット雲と二種類の呼び名が別れる。

さっき愛さんのメールで快晴の空に飛行機雲が浮かんでいると届いていたがどうやらメールに気づいたのが遅すぎてその間に消えたらしい。

残念だ。

というより今回のメールで重要なのはこの飛行機雲のことではなく愛さんがどういう目的で俺にメールしたのかである。

最も、そんなことはメールの内容を見た瞬間わかったわけだが。

携帯電話を取り出してショートカットに登録している人物に直接電話をかける。

ちなみにこの携帯電話、履歴の大半、その殆ど全てが見る限り全て愛さんで占められている。
つまりは顔を合わせていない日はほぼ確実にどちらかが電話するパターンだ。
そこで心配されるのは電話料だが、やはり俺たちにぬかりはない。
すなわちカップル割引である。
俺が恥ずかしがる愛さんにしつこくねだり続けた結果なんとか電話ショップにてカップル割引を申請した。
あの時の愛さんのテレ具合は可愛いったらなかった。
『よ、大。さっきのメールみたか?』
2コールで愛さんの声がこちらに届いた。
素晴らしい。
どんなに離れていても距離なんて関係なく彼女の綺麗な声が聞こえるなんて。
やはり携帯電話は素晴らしい、僕らはいつも以心電心、二人の距離つなぐテレパシー。
文明の利器たるものこうでなくては。
「ごめんね、ちょっと見るのが遅れたみたい。今空見たけど何もないや」
『そっか、残念』
「でもさ、ロケット雲見れなかったのは残念だけどさ

今愛さんの声が聞けている俺は果てしなく幸せ者なんじゃないかと思うんだ」

『・・・・・ふふん。そりゃあ間違いだな』

おっと、ここでまさかの反撃。

『何故ならアタシは今大の声を聞けて世界で一番幸せな気分だからだ。

こ、これ以上のものがあってたまるかってんだ』

言っている愛さんも少しテレが入ってるんだろう、少し雄雄しさがない。

ならばこれには答えて応えなければなるまい。

生憎と俺は愛さん程硬派でもなければ羞恥心も一般人以下の自信がある。

これは恐らく誇っていいものの筈だ。

長谷先生に語れば多分ご褒美に拳骨の一つはもらえるレベルの俺の誇りだ。

「ふふ、それは違うよ愛さん。確かに愛さんは今世界で1番幸せかもしれない。

だがそれはあくまで世界規模だ、今の俺は宇宙規模で幸せを感じている。

然るにこの俺こそがベストオブハッピーということになる！」

『ぐぬぬ・・・・・・』

勝った。当然の様にビクトリー。

俺が愛さんを好きという感情を勝るものなんてこの世にあるわけがないのである。

まさに何を今更というレベルだ。

林檎を噛めば歯茎から血が出る程度の当然さだ。
勝利の喜びと虚しさを感じながら事前に用意しておいたアイスコーヒーを飲む。
苦い、これ失敗してるじゃん。
あれ・・・・・途中姉ちゃんがドリップしてるところで何かしたのかな？
勝利とはかくも苦いものだったか。
『ねぇ辻堂さん。これなんてどうかなー？』
『え、あ。ミィちょっと待っててくれ、今電話中なんだ』
どうやら彼女の方は烏丸さんと遊んでいたらしい。
確かに少し耳を傾けてみれば他にも委員長や片岡さんの声もする。
「ごめん、遊んでたみたいだね。それじゃあそっちの用事の邪魔しちゃ悪いし切るよ」
『ごめんな大。また夜かけ直すからさ』
「うん。楽しみにしてる」
そう言って携帯電話から耳を離そうとすると
『あ！　ちょっと待ってくれ大！』
大きな声でお呼びがかかった。
どうしたのかと再び耳を傾ける。
『アタシだって大と同じくらいかそれ以上幸せなんだからな！』

そしてこちらの返事を待たず切られる電話。
・・・・・言い逃げとは、これは許されんな。
明日の愛さんをとっ捕まえて延々と耳元で愛を囁くプレイをお見舞いしなければなるまい。
それこそ愛さんが余りの恥ずかしさに悶絶して、照れ隠しのアッパーカットを放ってくるまで囁き続けてやろう。
この長谷大、容赦せん。
「一緒に遊んでいたハズなのにメール受信した途端存在を忘れられた僕に言うことはないか？」
「ごめん、いやホント申し訳ない」
この瞬間までヴァンの存在を完全に忘れていた。
そうだった、さっきまで冬休みの課題を手伝って貰っていたんだ。
「まぁ十人並みな個性だったヒロにも目立った個性が現れ始めたという現状を僕は友達として喜ぶべきなんだろうな。
少し悪い方の個性な気がしなくもないが」
こういうヴァンの意外と寛容な所が大好きだ。愛さんの次に。
「せっかく手伝ってくれてたのにごめん。じゃ、続きしようか」

「ああ。といっても僕は初日と今日の朝で終わらせているんだがな」
「流石だ、ヴァンらしいね。じゃあ俺は俺のペースでやるから暇になったら本棚の漫画でも読んでてよ」
そう言って早速宿題に取り掛かる。
幸い量は少し多いものの問題のレベルはそれほど高くない。
これならば俺も3日くらいで終われそうだ。
「ヤンデレ彼女か・・・・・・ふむ」
「あ、それお勧め。ヒロインの設定が愛さんに似ててさー」
「いいからヒロは課題に集中しろ」
「残念。ところで思うんだけどさ、漫画を一々勧めてくる人って正直対応に困るよね。こっちは興味なんて欠片も無いものを進められても食指が簡単に動くはずもなし、ありがた迷惑というか。
でも自分の好きなものを共有したいという気持ちをないがしろにするのもはばかれると言うかうんたらかんたら」
「やかましい」
にべもなく黙らされた。
ヴァンは取り敢えずと言った具合で漫画のページを開き流し読みしていく。

「ふむ。確かにこの不良、色々と辻堂に似ているな。まぁ辻堂はここまでテンションの高い人間ではないが」

愛さんは12月現在までで俺とは当然として、ヴァンを含むクラスの全員とある程度仲良くなっている。

きっかけはやはりあの学園祭なんだろう。

あの可愛い格好での参加はもとより俺たちのクラスの企画そのものを身を挺して守ってくれたあの姿にうたれて彼女への認識は大きく変わった。

今じゃ彼女が教室に入れば大抵のクラスメイトは挨拶するし、片岡さん、烏丸さんや委員長に至っては彼女の机に集合して昨日のテレビのこととか他愛のない会話をしたりする。

以前までは彼女をまるで狂犬のように扱っていたのが、今では最強の番長だけど実は可愛くてちょっぴり照れ屋な女の子を扱う空気に変わったのが俺たちのクラスの現状だ。

ヴァンもまだ愛さんを不良（よからず）と言うものの、その言葉に刺はなくそもそも愛さんの硬派な性分を気に入っている節もある。

要はきっかけだったのだろう。

このきっかけを起こしたのが俺だと自惚れるつもりはないけれど、それでももっと愛

さんには友達を作って欲しい。
　そのきっかけを作れるようにと俺はいつも考えている。
「そういやさ、ヴァンのほうは一条さんと何かないの？」
「む、なんだいきなり」
　恋愛に興味ないと思っていたヴァンも結構前から商店街とかで一条さんと歩いているところ見るようになった。
　それが気になってそれとなく関係を聞いてみたらどうやらヴァンは一条さんの事を一目惚れしたらしい。
　ヴァンは個性的な人が好きだから正直意外でもないんだけど、それでもやはり驚いた。
「そうだな。今日の夕方ごろに彼女と合流して勉強を見る予定だ」
「へぇ」
　確かによく一条さんの勉強を見ていると聞いているが。
「下衆い質問かもしれないけど、聞きたいことがあるんだ」
「ヒロは相手を不愉快にするような事は言わないだろう。言うといい」
　つまり答えてくれるということだろう。
　ヴァンの友情を改めて確認できた。

「その、一条さんとはどこまでいった？」
「・・・・・・ふむ」
予想はしていたが答えは用意していなかった反応だ。
ヴァンは考えるように顎に指を添える。
「駅弁、だな」
「あ、タンマ。そのネタはもうすでにやったからいいや」
「なんのことだ？」
まあ一々人の恋路に干渉しようとするのも俺のキャラじゃない。
ヴァンや一条さんだってちゃんとペースがあるだろうし本人達が満足していればそれが一番なんだろう。
もちろん相談をされたら全力で手助けするけど。
友人の恋路を意識したら自分の彼女が恋しくなった。
早く夜にならないかな。
愛さんとお話がしたい。

「そのさ、声だけじゃ満足できなくて・・・・・・えぇと。
悪い、こんな時間にアポ無しに来るなんて迷惑だよな・・・・・・」
「迷惑？　ははっ、俺と愛さんの間にそんな概念なんて存在しないよ。
さて甘えん坊な愛さんは俺が余すことなく可愛がってあげないと」
夜、電話をまだかまだかと待ちわびてたら電話ではなく愛さん本人がうちに来た。
流石に夜に来るという行為が少々非常識なのは愛さんも理解しているのだろう。
若干入りづらそうだ。
「姉ちゃんなら今日は飲みに行ってるからさ、遠慮しないで上がってよ」
「お、おう。おじゃまします」

「へぇ、あの堅物とティアラがねぇ。予想外」
「そっかな。俺はお似合いだと思うけど」
寒い中わざわざ来てくれた愛さんに淹れたてコーヒーを出して一息ついてもらう。
手も冷えているのだろう、熱いカップをギュっと握る愛さん可愛い。
「だってアイツってヤンキー嫌いじゃねぇか。そんなのがあのヤンキーバリバリのティ

アラとって」

言われてみれば一条さんは喧嘩大好きだ。

「けど一条さんはカツアゲもしなければ理不尽な暴力も振るわないし、性格も一本気で凄くいい人だと思うよ」

そういう人じゃないとヴァンは好きにならないだろう。

ヴァンは性格に少し問題があるもののそれでも人を見る目はあると思う。

ということはきっと一条さんのことをヴァンは僕が知っている事以上に知っているんだろう。

自己満足的にヴァンの恋愛を応援してると横で愛さんが不機嫌そうにしていた。

「どったの愛さん？　そんな顔も可愛いよ？」

「ありがと、お世辞でも嬉しいよ。でもさ、彼女の前で他の女を褒められると何か不思議とイラってきて」

ふむ。なるほど。

「嫉妬した愛さん頂きました。堺さん、星は当然三つですよね！」

「うっせぇ！」

本人も一条さんに嫉妬した自覚があるんだろう。

少し凹んだ顔うつむく。

「あのね愛さん、俺が好きなのは愛さん一人だけだよ。
ラブってるのが愛さんだけで、ライクってるのがヴァンや一条さん。
だから愛さんが心配することは欠片もないわけで」
「わかってるよ、アタシだって大に愛されてる自覚あるし・・・・・・」
つまり頭ではわかっているのに何故か嫉妬してしまったわけか。
愛されてるなー俺。
だがここでこの問題は放置しない。きちんとこれをフォローしなければあの日、俺と愛さんが別れる原因と同じ物を作ってしまう。
自分が八方美人でいつも愛さんをヤキモキさせているのわかっている。
けれど俺はそれを一生直す事はできないと思う。
だから俺は考えた。互いに歩み寄るだけではなくて、変えることのできない性分があるのならそこはツッパって貫き通そうと。
「また俺のせいで愛さんを寂しくさせたみたいだね。ごめん」
「謝るなよ大、これはアタシの心が狭かっただけでお前が謝る必要なんて」
「それでも謝るよ。どんな理由だあるにしても結果として愛さんを悲しませた。
それは良くない。そして愛さんを悲しませた原因もわかってる。
だからこそ謝るんだ」

謝るだけじゃ何も解決しない。
だけど誠意を込めて謝れば少なくともその気持ちが本気であることは伝わる仲なはず。
「いつもいつも愛さん以外の人にまで良い顔してごめん。でもこの性格は一生直せないと思う。
だから、本当にごめん愛さん」
彼女は前に言った。
俺の一番好きな部分を将来愛せる自信がないと。
その言葉は復縁した今でも俺の心に残っている。
「でも愛さんにはこんな俺を愛して欲しい。わがままかもしれないけど」
自分を変えることは簡単じゃない。ましてや俺のこの部分は変えようがない部分だと思う。
だからこそ俺は直すとは言わずただ謝る。
愛さんはコーヒーカップをテーブルに置いて真っ直ぐ俺の瞳を見る。
俺はそれを真正面から受け止めた。
「許さない」
「・・・・・・え?」

真剣な顔で見ていた愛さんの顔が突然として意地の悪い笑みを浮かべたものに変わる。

一体何をされるのかと身構えたとたんいきなり愛さんに押し倒された。

「んむっ！」

そしてそのまま唇を奪われてしまった。

一瞬わけがわからなくなるものの、１０秒もあれば落ち着くもので

彼女が息継ぎのために一旦唇を離す頃には大分整理がついていた。

「今のはアタシを嫉妬させた罰だ。次からもアタシを嫉妬させるたびに同じことするからな」

つまり、今回の件を許してくれたということだろう。

「まいったな。そんなこと言ったら愛さんにキスして欲しいがために他の女の子を褒めてしまっちゃうじゃないか」

「う、確かに・・・・・・」

「いけない子だ。もう俺は愛さんに身も心も独占状態だというのに」

もはや最近は人目すらはばからずこのバカップル状態を超えたバカ状態をするのに抵抗が無くなってきた。

でもまあいいやとそのまま愛さんを押し倒そうとすると。

「ダイー！　ちょっと風呂貸してー！」
想定外の乱入者が。
「・・・・・・どうぞ」
俺を押し倒していた愛さんをぐるりとひっくり返して俺が押し倒したタイミングで窓からマキさんが入場。
「やっぱ恋奈とやるとロクなことにならねぇわ。ほれ見てみ、制服も顔も血まみれになっちまった。
あ～、これ洗って取れんのかな。ったく面倒クセェ」
そう言って胸元を広げるマキさん。
谷間が強調されて超セクシー。
あの、彼女の前でそういうのやめてください。
「ん？　あぁ悪い。お楽しみ中だったか」
特に俺たちの姿を見ても動じず軽くちら見する程度で部屋から出ていくマキさん。
だがドアノブに手をかけた瞬間俺の下にいる愛さんの雰囲気がかわった。
「腰越コラ、タココラ。待てやコラボケ」
「あぁ？　なんだよいきなり。ってか口汚すぎんだろ」
俺をそっと優しく押しのけて立ち上がるやいなや背中を向けるマキさんに詰め寄る

愛さん。
その愛さんに恒例行事と言わんばかりに凄まじいメンチを切るマキさん。
間違いなく一触即発の空気だ。
「テメェの事だ。この部屋に入る前に今アタシがここにいる事ぐらいわかってただろうが。
知ってて入ったな？」
「文句あるかよ？　私は別にお前なんかどうでもよくて用があったのはダイと風呂だけだ。
私がお前に遠慮して用事を曲げるタマだと思ってんのか？」
「はっきり言わなきゃわかんねぇか。事あるごとにここに来んな！」
ブチギレた愛さんが自分より少し背の高いマキさんの胸ぐらを掴む。
だがマキさんは対して動じる事もなく不意に笑った。
「あ～、そういうことね。
悪いな辻堂。せっかくお楽しみだったのに水を差しちゃってさ」
マキさんの言葉に愛さんは一気に顔を赤くした。
「だがなぁ。流石の私でもそういうえっちぃ事してるのは気配や鼻じゃわかんねえぜ。
そりゃダイが栗の花の匂いでも出してりゃわかるけどさ」

結構マジな顔でマキさんが愛さんを諭す。
っていうかやめて。女の子同士で下ネタ話すような展開は男として苦手なの。
俺はまだ女の子にロマンを感じていたい年頃なの。
「そ、そうじゃねえ！　大を一々頼るのをやめろって言いたいんだよアタシは！」
「あぁ、そっちね」
愛さんも真顔でそんなことを言われたからかアタフタしながらマキさんを怒る。
とはいえさっきまであった威圧感はなくて、むしろ和やかな感じ。
マキさんは愛さんの言葉を受けて少し考えた後。
「やだ」
そう言ってペシっと愛さんの手を払い除けて風呂に向かっていった。
フリーダムな人だ。
「・・・・・・・」
愛さんはその流れに一瞬唖然とした後、正気に戻った。
「ま、待てやゴラァ！」
「あ、愛さん!?」
そのままマキさんを追って彼女まで風呂に向かっていった。
『おわぁ！　もう脱いでんのかよ！』

『なんだついて来たのかお前。丁度いいや、私の背中流せ』
『はぁ!?　ざけんな何でアタシがそんな事を!』
『いいじゃねえか、先輩命令だ。ほれ脱げ脱げ。洗いっこしようぜ～。じゃないとダイを襲っちまうぞ?』
『おわあああああ!　脱がすなバカ!　あ、やめろマジで!』
『へぇ、恋奈の馬鹿よりやわっこくてデカいじゃん。良い感触だぜ』
『あふぅっ!　や、やめてくれお願いだから!』
・・・・・最近は愛さんとマキさんも妙に仲がいいんだよな。
流石に一緒にお風呂なんてのは今回が初めてだけど。
『ダイー、お前も一緒に入るかー?』
『来るな!　来るんじゃねえぞ大!』
行きませんよ。
・・・・・めちゃくちゃ行きたいですけども。
何気ない冬休みの二日目はこんな感じで過ぎていった。

一度喧嘩して別れてから俺が愛さんに八方美人な点を受け止めてもらったこと以外に変わったことがある。

「せっかくのデート邪魔すんなボケェ！」

「ぎゃーーーーーーー！」

消し飛んで星になったヤンキー（江ノ島産）に黙祷。

「ったく、それじゃあ行くか大」

「待った。それよりもいつもの確認」

変わったこと。それは辻堂さんが喧嘩をしても俺自身あまり辻堂さんを責める気がなくなった事だ。

いや、当然といえば当然である。

俺自身直せなくて彼女に受け入れてもらったものが八方美人な性格。

だからこそ俺も彼女のヤンキーな部分を受け止めるようになった。

そう決めたら単純なもので、別にデート中でも軽い喧嘩程度なら受け止めれるようになった。

まあ流石にいい気はしないけど。

「怪我なんてしてねぇよ。ほら」
俺が愛さんのヤンキーな部分を受け入れる際にひとつだけ約束したことがある。
それは絶対に怪我をしないで欲しいということだ。
「うん、喧嘩前と変わらない綺麗で細い手だね。
じゃあこのまま手をつないで行こうか」
「うん」
この約束をした日から愛さんは無闇に恋奈さんを煽らなくなったし、マキさんにもよほどのことがない限り自分から殴りかかることはなくなった。
相手が強かったりやたらしぶとかったら怪我のリスクが上がるからだろう。
だがそうやって少しづつ喧嘩を回避していたら今となっては殆ど喧嘩しなくなっていた。
まあ今日みたいに俺が絡まれて殴られそうになったら愛さんは問答無用で星にするけど。
俺がかかわらない喧嘩だと基本メンチで相手を気絶させて、それでも迫ってくる相手には必要以上に手間をかけずあっさりと倒すようになった。
結局俺たちの関係は付き合って変わったけど。
俺たちの悪い点は付き合う前と何も変わってないことになる。

それでも少しづつ、ゆっくり俺たちの気持ちは近づいて行っているのなら無理して変える必要もないのかもしれない。

「そういやさ、大」

「ん？　何かな」

繋いだ手の温度を堪能していると横に並ぶ愛さんがふとこちらをみて声をかけてきた。

「明日さ、前からずっと勝負しろって五月蝿い奴と喧嘩する約束があるんだ」

「それって我那覇さん？」

「ああ」

特に驚くことはない。

どうも一度愛さんにボロ負けした我那覇さんはそれでもへこたれず、強くなるたびに腕試し感覚で愛さんに挑んでくるらしい。

けれど挑み方は始めの頃のように強いる感じではなくどちらかというと決闘の申し込みのような堂々としたものだったりする。

「いいんじゃない。愛さんが我那覇さんと喧嘩したいなら俺が止める理由もない」

「そ、そうか・・・・・じゃあ明日予定通りアイツと喧嘩する」

と、俺の了承を得たものの愛さんは俺が不機嫌になってないかとチラチラと顔色を

伺ってくる。
　挙動不審な愛さんも可愛いな。
　だが流石にデート中に彼女をいつまでも不安がらせるのはベストじゃない。
　この件は今すぐ解決しておいたほうがいいか。
「愛さん。知ってると思うけど俺は不条理な暴力が嫌いです」
　だがそもそも彼女の喧嘩はイコール暴力となるのか？
「でも愛さんは理不尽な暴力なんて絶対にしないし、何より今回の件は俺からしたら喧嘩とは思えない」
「喧嘩じゃなかったらなんなんだよ？」
「そうだね、決闘とか稽古とか腕試しって感じだと思う」
　明らかに我那覇さんは愛さんに喧嘩を売っていない。
　喧嘩を売るってことは明らかな敵意のある人間が行うことだ。
　けれど我那覇さんは愛さんにそんな感情を向けてはいないし、愛さんも我那覇さんに悪意や敵意があるとは思ってないだろう。
　二人の間にある感情はもっと爽やかなものだ。
「ん～・・・・・確かに喧嘩って感じじゃないかも」
　愛さんも合点がいったのか難しい顔をする。

だがすぐに考えがまとまったらしく、笑顔で口を開いた。
「まあ難しい事は考えずいつも通りさっさとアイツをぶっ飛ばせばいいんだろ。同じことだよ」
身も蓋もない。
「結果的には、まぁそうなるね」
喧嘩も決闘もやってることは同じ暴力だ。
だが決闘は喧嘩と違い単純に自分の実力を試す行為。
俺はそれが喧嘩と同じものだとはどうしても思わない。
「とりあえず明日頑張ってね。応援してるよ」
「おう。大の応援があれば恋奈のとこの雑魚狩りだってハイスピードスコア叩き出すぜ」
「過度の暴力は推奨しません」
「じょ、冗談だよ。そんな怖い顔しないでくれよ」
愛さん自身はまだ決闘と喧嘩の違いを見出していない。
けれど彼女は無意識に喧嘩を減らして決闘する頻度が増えてきている。
喜ばしいことだ。
「でもさ、絶対怪我だけはしないでね」

「ああ。約束は守るよ、絶対に」

お互いの信頼を確認しながら俺達は再びデートの続きを始めた。

湘南の冬は去年より心も手も暖かかった。

乾梓の純愛ロード
2話：江乃死魔の綻び

「委員長どうしよう！　大に怒られる、約束破っちまった！」
『いきなりどうしたんですか辻堂さん。まず状況を説明してください』
「喧嘩するとき絶対怪我をしないっていう約束破っちまった！　どうしようどうしよう！
うあああああああ！　これじゃあ大に顔向けできないし下手すりゃ振られるかも・・・・・うえええええええん！」
しくじった。
今日我那覇と喧嘩したのはいいが、しくじった。
アイツ前やったときより思った以上に上達してて初弾をかわし損ねて頬に軽く擦り傷ができたのだ。
喧嘩を終え、頭が冷静になった途端大慌てで頼れる委員長に即座に電話した。
「どうしよぉ委員長～。もうだめだぁ、この後大の家に行く約束してるのにこれじゃあ行けない～」

『一応聞きますけど、辻堂さんに傷を負わせる相手って誰だったんですか?』
「我那覇っていう声シブい巨人」
『その我那覇さんってもしかして女の人でした?』
「ああ、スカート履いてるし多分そうだと思う」
どうやら委員長は我那覇の名前に心当たりがあるらしい。
『ちょっと今日喧嘩することになった過程を教えてもらえますか?』
「いいけどそんな事聞いてどうすんだよ」
『そんな事ではありません、重要なことです』
仕方ない。めんどくさいけど最初から話すことにした。

その後、アタシは委員長から特に助言をもらうことなく家を出た。
どうも委員長は私にはわからない結論に至ったらしく
『大丈夫です。長谷君なら多分その怪我見ても怒ることはないです』
との事だった。
はっきり言って心配で仕方がないけど委員長がそういうのならきっと大丈夫なんだろう。

「全く、愛さんの女神のような顔に傷が残ったら人類規模の損害だよ」
「は、恥ずかしいこと言うんじゃねえ」
驚いた。
まさか愛さんが不意とはいえ怪我を負わされるとは。
我那覇さんも武闘家として毎日腕を練磨しているということだろう。
何かを頑張ることはいいことだ。
「ごめん、大」
「ん、なにが？」
「いや。怪我しない約束だったのに」
「あぁそのことね。気にしなくていいよ」
昨日約束した絶対に怪我しない約束を破った負い目があるのだろう。
愛さんはシュンとした顔でうつむく。
「別に我那覇さんも愛さんへ悪意をもって付けた傷じゃない。
単純に自分の腕を確かめたいのと愛さんと手合わせしたいだけだったんでしょ」

その結果の怪我は決して恥じるものじゃない。
勲章みたいなものだ。
「試合に怪我はつき物だよ。はい、消毒おわり」
「し、試合って。アタシとアイツは喧嘩したのであって」
「それでも俺からしたら二人の喧嘩は決闘とかそういうのにしか思えない。
現に愛さんも我那覇さんも終わったあとはスッキリしたでしょ?」
「あ、あぁ。勝ったアタシは当然だけど負けたアイツもやたら嬉しそうにしてたな」
そりゃ湘南最強の一人の愛さんにカスリ傷を負わせれたんだ。上達を実感できて嬉しかっただろうな。
「負けた方もスッキリしてるのならそれは喧嘩じゃないと俺は思う」
「よくわらない」
俺が好きじゃないのは悪意のある暴力だ。
人を脅す事を目的としたもの。
だが今回の件は明らかに違う。だったら俺が怒る理由もない。
愛さんの頬にできた擦り傷はどうも消毒するくらいで止めたほうが良さそうだ。
絆創膏も必要ない程度の薄皮が切れた程度だし。
簡単な処置だけですまし、応急箱をしまう。

「それじゃあ今日はどうしようか。お出かけでもする?」
「ああ。今日は江ノ島の方行ってみないか? ちょっと気になることもあるんだ」
気になることっていうのが何なのかわからないが、愛さんが行きたいというのなら断る選択肢もない。
「わかった。それじゃあちょっと厚着するかな、今日は風も冷たいし」
取り敢えず最近買った比較的厚めかつ自分のサイズより少し大きいジャケットを着る。
これ一着で寒さを殆どカットできるからあとは首周りだけだ。
とはいえタートルネックは好みじゃないから首周りを温めるならもうマフラーくらいしか選択肢がない。
ということで既に出しておいた姉ちゃんが編んでくれた落ち着いた色のマフラーを首に巻く。
だが愛さんはお気に召さなかったらしく少し怪訝な顔でマフラーを睨む。
「それって長谷先生が編んだやつだよな?」
「そうだね」
マフラーもセーターも簡単に作っちゃう器用な姉ちゃん。自慢の家族である。
「・・・・・アタシもやってみようかな、編み物」

意外な言葉が出た。
さて、ここはどう答えるべきか。
愛さんは正直不器用だからとても編み物に向いているとは言えない。
「愛さん。編み物は凄く根気がいるし、時間もかかるよ?」
「知ってるよそんな事。でも彼氏が別の女の編んだマフラーをお気に入りにしてるのが不満」
「他の女って、姉ちゃんは家族だよ?」
「その家族が大をただの家族として見てるなら良いんだけどな」
どうも愛さんは思うところがあるらしい。
「まあ今年は我慢する。どうせ今から編んだって今年の冬は終わっちゃいそうだし」
愛さんも俺と同じ結論に至ったらしく取り敢えずはお流れとなった。
今度からは愛さんの前ではこのマフラーは避けたほうが良さそうだ。

「愛さん、もしかして愛さんって暑い時に鍋食って寒い時に滝にうたれたがる面倒くさい人?」

「そんなマゾっ気アタシにはねぇよ」
「だったらなんでこんな」
こんなクソ寒い日にいつもの所でシラスアイスなんて季節外れなものを。
「うっさい。嫌なら食わなくていい」
愛さんは拗ねたような顔をしながら生臭いアイスを食べ進める。
だがやっぱり寒いのだろう、プルプル震えているしこれは良くない。
そもそも何でこんな冬真っ只中なのにこの店はアイスなんて置いているのか。
仕方ないと俺はアイスを一気に食ってから座ってアイスを食べる愛さんの後ろに回り込んで一緒にジャケットをかぶる。
こういう事をしたいがためにサイズにあっていないのを選んだのだ。
密着するようになった愛さんは少し照れが入った顔をしながら少し恨みがましそうに俺を見る。
「食べづらいだろ」
「ゆっくり食べればいいよ。それにしても愛さん冷えすぎ、風邪ひいちゃうよ」
「そりゃこんな寒い日にアイス食べたらそうなるだろ」
「なんで愛さんはそんなにそのアイス好きなの？　コレ正直あまり美味しいとは思えないんだけど」

そう言うと愛さんは更にブスっとした顔でこっちを見てくれなくなった。
「どんなに不味くても、これはアタシにとって思い出の味なんだよ」
それだけ言って喋らなくなった。
だがこれだけいってもらってようやく俺も合点が言った。
そういうことか。
「初デートの時を思い出すから?」
「知るかバカ」
恐らくこれが答えだろう。
確かに思い出してみれば愛さんは江ノ島に来るたびにこのアイスを食べたがる。
でも愛さんもこのアイスを美味しいとは思ってないだろう。
つまりはアイスを食べるのは味覚以外の何かを求めるからだと思ったのだが。
「愛さんロマンチスト」
「うっさいアホ」
まさかここまで初デートのあの日を大切に思っていてくれてるとは思いもしなかった。
愛おしくなった俺はジャケット越しに愛さんを抱きしめる。
愛さんも満更ではないのか抵抗はせず、でもこちらを見ることもなく黙々とアイスを

食べ続けた。
シラスソフトは初恋の味。
ふむ、甘いハズなのにその味を細かく理解しようとすると途端に青い味が鼻につく。
初恋もそんなものなのだろうか。
きっと今が幸せだからこそ現状では甘味しか理解できない。
「愛さん、アイスたべたらどうしようか」
「・・・・・・・」
愛さん、どうやら拗ねちゃってる。
無視を決め込むつもりらしい。
「愛さん?」
「・・・・・・ぶー」
困ったな、拗ねている愛さんも可愛いが流石に愛さんを不機嫌にするつもりはなかった。
仕方あるまい。
今日1日かけて彼女のご機嫌をとるしかない。
これもカップルの醍醐味というやつか。

吹きすさぶ風に顔をしかめながら俺達は海辺を歩いていた。
「大。最近この江の島や他のところでやたらヤンキーが目につくと思わないか？」
二人並んで歩いていると愛さんは何の脈絡もなく聞いてきた。
「そうだね。確かに今年の秋頃からカツアゲされたって話をよく聞くようになった」
このカツアゲが明らかに例年より件数が増えているらしく、ウチの学園でも冬休み前に注意するように生徒に促した。
俺は幸いにしてまだヤンキーに絡まれてはいないもののウチのクラスでも数人既にカツアゲされているらしい。
「でも何で今年はこんなに件数が目に見えて増えているんだろう」
少し考える。
だが答えに近いヒントのようなものが直ぐに見つかった。
去年と比べてヤンキーの情勢が変わるほど影響のある存在。
「江乃死魔だろうな」
どうやら愛さんもその答えに至ったようだ。
マキさんや愛さんもその気になれば情勢なんて好きに変えられほどの影響力をもつ。

けれど二人はカツアゲを良しとはしない。
たとえその部下がやったとしてもマキさんは一匹狼だし愛さんの舎弟である稲村の方々は愛さんの言いつけをやぶるとは思えない。
片瀬さんがカツアゲを扇動してるとは思えないけど・・・・・・
「恋奈の奴、無闇に数だけ舎弟を増やすから御しきれなくなってる」
今年の湘南の秋は何も起きなかった。
たまにカツアゲの現場を押さえたマキさんがキレて江乃死魔の数を一気に間引くことはあるものの大きな抗争は一度もなかったらしい。
だからこそ江乃死魔のメンバーは着々と増え続け、今や７００人の大台へ突入したと愛さんは言っていた。
そしてカツアゲの被害はそのメンバーの増員と比例して増えている。
「今日アタシがここに来た目的は江乃死魔の動きを確認するためでもある」
うちの学園の番長は何だかんだで面倒見がかなりいい。
稲村の生徒が被害に遭っているのが琴線に触れたのだろう、今回の件を結構重く受け止めているみたいだ。
「具体的にはどうするの?」
「そうだな・・・・・・ん～」

愛さんも細かい事は考えてなかったらしい。
少し思案を巡らせる表情を作る。
その時
「・・・・・ん？　愛さん」
「どうした？」
今いる海辺から少し離れた今は閉じている海の家のところに４人の人影があった。
それだけなら気に求める必要はなかったんだけど
「あれって片岡さんと烏丸さんだよね」
「ああ。間違いない」
明らかにガラの悪い、つまりヤンキーな二人に連れられていた。
正直あまり想像したくないが
「明らかにカツアゲ、最悪レイプかもな」
愛さんは意外なほど冷静な声質で四人が入っていた海の家を見ていた。
「助けないと」
いくらなんでもクラスメイトが暴行されるのを無視するほど馬鹿じゃない。
焦って走ろうとする。
「待て、ここはアタシが行く」

すると愛さんは俺の肩を掴んで一歩前にでた。
正直ここで彼女に任せるのは男らしくないとは思うが状況が状況だ。
おとなしく俺は下がる。
「恋奈の馬鹿が・・・・・・どう落とし前つけさせようか」
友人二人が被害に遭ってるのを見て間違いなく愛さんは切れている。
声は冷静なもののその眼光は絶対に俺に向ける類のものじゃない。
「ごめんな大、ちょっと待っててくれ」
「うん。二人をお願い、愛さん」
「ああ」
俺に優しくほほ笑みかけてそのまま凄まじい速度で海の家へ走っていった。
そして数秒後、ヤンキーの叫び声が海辺に響く。

「昨日は腰越、今日は辻堂。まさか二日続けて三大天の二人がくるとは思わなかったわ」
愛が江乃死魔本拠地に単身で乗り込むと奥にいた恋奈は堂々とした態度で迎え入れた。
だが彼女の周りには護衛のように体格のいい江乃死魔の精鋭が控えている。

その姿に欠片も臆することのない愛は手にしていたものを彼女の足元に思い切り投げつけた。
「腰越のつもりじゃねぇけどよ。今日はお前ら江乃死魔を潰そうかと思う」
「そう・・・・・・」
愛さんの完全に切れている様子をみて恋奈は目を伏せる。
「この馬鹿二人もやっぱりかしら?」
足元に投げつけられたものは先ほど片岡、烏丸の二人を襲おうとした暴漢である。
事件自体は愛に未然に防がれ、二人は顔の形が変わるほどボコボコにされている。
だが愛はそれでも気がすまないらしく殺意を含んだ視線でその二人を睨む。
「その馬鹿共がアタシのダチを襲おうとした。そしてコイツ等はお前の舎弟だ。
だったらこの落とし前は誰に付けてもらえばいい」
場が凍りつくほどの声色で恋奈を言及する愛。
取り巻きも完全に怯え竦みもはやここが誰の本拠地なのかわかったものではない。
だが恋奈はそれに怯むこともなく真っ直ぐ愛の目を見る。
「お前ら、下がりなさい。私は辻堂と二人になって話すことがある」
恋奈の一声で取り巻きが逃げるように基地から出始める。
全員愛の横を通り過ぎる際、誰ひとりとして彼女の目を見れる猛者はいなかった。

誰もが牙をむく狼に触れたくないのである。

「腰越に何か聞いたのかしら？」
「あぁ、昨日忠告された。アイツらしくもない」
昨夜、マキと風呂を共にした際に愛はマキに忠告をされた。
最近の江乃死魔が全く統率が取れていない事。
それによる身内の被害を気にするようにと。
実際マキが気にしろといったのは大の事だけだろう。
彼女にとって大以外の人間はどうなろうが知ったことではなく、助ける義理もない。
大を守りたいがためにらしくなく愛に忠告をしたのである。
「そう。それじゃあ話は早いわ」
恋奈は堂々とした態度で椅子から立ち上がり愛の前へと進む。
「さっきのメンバーは見たでしょ？　それで江乃死魔の現状はどんなものか把握できると思うけど」
「そうだな。いつものデカイのや総裁天、お前の主戦力が根こそぎいなかった」
彼女を取り囲んでいたものはどれもが江乃死魔における二軍的な戦力ばかりだった。

しかもその戦力すら殆どの者が頭や体に包帯をまいており散々たる有様である。
「アンタの考えている通りよ。昨日腰越にやられたわ。
原因は今日と同じ、私の設けたルールを無視して恐喝をしてる所を腰越に捕まったみたい
全く、身内の不祥事ほど迷惑なものは無いわ。」
そしてそのままマキは江乃死魔に乗り込み恋奈達を襲った。
主戦力はほぼ全て病院送りにされ残るのは人外な耐久力を誇る恋奈と前線で戦わなかった腑抜けだけ。
恋奈は自嘲するように笑い愛に声をかける。
「アンタはどうするのかしら。ここで腰越のように大暴れしてみる？
正直私はどっちでもいいわ」
「やけに自暴自棄じゃねえか」
恋奈の余りに投げやりな態度に愛も拍子抜けする。
事前に舎弟に被害が出ないように散らしたのがせめてもの抵抗だったのか。
「はっきり言うわ。むしろアンタや腰越に一度江乃死魔を潰してもらったほうがいいとすら思ってる」
本気なのだろう。

愛は口を開かず次の言葉を促す。

「江乃死魔のリーダー格の中に一人裏切り者がいる。それが誰だか突き止めてはいないけれど。

そいつを炙りだすにはもう一度壊滅するくらいの打撃を受けてあえて誘導するしかない」

自分の身を削って腐った部分を切り落とす。既にそうせざるを得ない現状を恋奈は自覚している。

「どうする辻堂。判断はアンタに委ねるわ、江乃死魔を潰すか泳がすか」

恋奈自身も考え抜いて出した答えである。

それほどまでに江乃死魔の組織系統は腐り始めてきているのだ。

「・・・・・・今江乃死魔を潰したとして。次に今の戦力に戻るのはどのくらいだ?」

愛の質問も予想していたのだろう。

恋奈は少しだけ考えて答えをだす。

「どれだけ甘く見積もっても二ヶ月はかかるわ」

一度壊滅した組織に求心力はない。

更に最初からやり直すとして彼女についてくるであろうメンバーはハナとティアラくらいだろう。

それだけのリスクを抱えて再びマキと戦える戦力を揃えるまでの過程は並大抵じゃない。

「間違いなく腰越の卒業までには間に合わない」

愛の言いたいことを理解している恋奈は嘘偽りない答えを吐く。

「でも仕方ないわ。今回は私の力不足によるもの。

こんな足並み揃えることすらできない江乃死魔じゃ何人揃えたところでアンタや腰越を相手できるともおもえない」

だからここで止めをさされるのも仕方ない。

だが愛は余りにもいさぎが良すぎる恋奈の態度に舌打ちする。

「白けた。テメェの尻拭いくらいテメェ自身がしやがれ」

愛は恋奈から視線を外してそのまま拠点の出口へ歩き始める。

「・・・・・それができれば苦労しないわよ」

本気で悩んでいるのだろう。

恋奈は今にも泣きそうな顔でうつむく。

だが愛が面倒をみる義理もない。

そのまま拠点を去る。

「仲間を疑うなんて、そんなことするくらいなら潰された方がまだ・・・・・」

恋奈はまるで子供のように涙を溜めてその場に立ち尽くした。

3話：ツッパるもの

江乃死魔のヤンキーを愛さんに任せた俺は一旦彼女と別行動することにする。
俺がすることはまず愛さんが助けた片岡さんと烏丸さんを家に返すことだ。
だが俺が話しかけても二人は泣くばかりで会話が成り立たない。
それどころか腰が抜けて二人は海の家から動けない状況。
さてどうしたものかと途方に暮れる。
こうなれば時間を待つしかないかとその場に腰を置いて二人が落ち着くのを待つ。

そして二十分程経ち、二人が落ち着いたのを見計らって声をかける事にした。
「二人共、怪我はなかった？」
「う、うぅ・・・・・・」
烏丸さんはヤンキーに慣れていないのかいつまでも怯えている。
よほど恐ろしかったのだろう。
だが少し垢抜けている片岡さんの方はまだ目が赤く、ぐずっているもののちゃんとこ

ちらを見てくれた。
「つ、辻堂さんは？　どこいっちゃったの？」
「愛さんならあの二人を返しに行ったよ」
どこにとは言わない。
確実に江乃死魔へにだろうが、ここでそんな名前をだして二人を怯えさせるわけにはいかない。
けれど片岡さんは分かっているのだろう、焦ったように俺に詰め寄る。
「だめ！　恋奈ちゃんは関係ないの！」
彼女がここで片瀬さんの名前を出したのか引っかかった。
だが横にはまだ泣いている烏丸さんがいる。
ここで迂闊に江乃死魔の話をしようものならまた彼女は怯えるかもしれない。
さて、どうするか。
いや、考えるまでもなかった。
怯えるクラスメイトと自分の探究心。どちらを優先するかなど簡単なことだ。
「送るよ。またさっきみたいなのに絡まれないとも限らない」
片岡さんはさっきから落ち着かない様子で片瀬さんの名前をつぶやく。
間違いなく彼女は何か知っているのだろう。

「片瀬さんの事は愛さん次第だ。メールも繋がらないしもう俺達じゃどうしようもない」
「そんな、恋奈ちゃんは何も悪いことなんてしてない・・・・・・」
既に俺の声が殆ど届かないほどに彼女も困惑していた。

「そっか、江乃死魔には手を出さなかったんだね」
「正直後悔してる、今からでも潰したほうがいいかもしれない」
愛さん自身は今回の対応がぬるかったと思っているようだ。
だが俺としてはやはり知人が傷つくのは避けたい。
片瀬さんが愛さんとやりあわなくてホッとしている。
「片岡さんも喜ぶと思うよ。最後まで片瀬さんのことを心配してた」
「そりゃあアイツなら安心するだろうな」
愛さんはどうやら片岡さんと片瀬さんの関わりを知っているようだ。
・・・・・俺だけ乗り遅れているようで少し凹む。
だが愛さんは話についてこれない俺に苦笑いしながら答えてくれた。
「ミィは元々江乃死魔のスパイだったんだ」

特にネガティブな感情を感じさせない、まるで他人事のように愛さんは言った。
なるほど、だからあそこまで片瀬さんを気にしていたのか。
「だけど夏の段階でその活動も辞めてたようだけどな。
何にせよアイツはもう恋奈とはそういう関係じゃ無い筈だ」
「じゃあただの友達ってことかな?」
「かもな」
愛さんも片岡さんや烏丸さんを無事助けれた事でホッとしているのか、普段より柔らかい。
だけど、今日の件で二人がヤンキー嫌いになって愛さんとの関係がリセットされる事もあるんじゃないだろうか。
「愛さん。二人にはもう電話とかした?」
「ああ。泣きながら有難うって言われ続けたよ」
・・・・・どうやら俺の心配し過ぎだったようだ。
彼女たちは愛さんがヤンキーどうのこうの関わらず既にそこに友情は存在していた。
ふと、二人の問題が解決したら別の疑問が湧き上がった。
「今後の江乃死魔はどうなるのかな」
まるで想像つかない。

片瀬さんがあれほどまで自身の能力で大きくした集団を、自分の口で潰されても構わないというなんて。

つまりはそれだけ彼女は追い詰められているのだろう。

「知りたい？」

愛さんにはこれから江乃死魔の進むであろう結果を大方想像ついているらしい。

気になった俺は大人しく頷く。

「冬休みの間に腰越に潰されるだろうな。

今回は主力だけ潰したのがいい証拠、次は見逃さないっていう警告だアレは」

確かに、マキさんが切れたのなら今回みたいに中途半端に相手を見逃すとは思えない。

壊滅させている途中に白けたか、それか忠告みたいなものなのだろう。

「だが江乃死魔の指揮権は既に恋奈には無い。

そりゃ抗争になりゃ言うことは聞くだろうがカツアゲや売り、買いを止める程じゃない」

つまり、このまま片瀬さんが江乃死魔をもう一度まとめられなかったら近いうちに再びマキさんに襲われ次こそ壊滅か。

一般人である俺にとってタチの悪いヤンキーグループが潰れることはいい事の筈だ。

なのにその事を良い事とは思えない自分がいた。
何故だろうとは思わない。既にその理由はわかってる。
「大、少し顔が怖い」
「え？　あ、そうかな？」
「せっかくのやさしい顔が台無しだ」
愛さんは子供をあやす様に俺の顔を抱きしめる。
暖かくて、柔らかい感触に強ばった意識が解される。
「愛さん。俺、力になりたいと思った人ができたんだ」
彼女に言う台詞ではないと思う。
だけど俺は彼女に隠し事を出来るとは思えないし、嘘をつきたいとも思わない。
だからこそ、それが彼女を傷つけることになっても本音を伝える。
「それはアタシがやめろといってもやりたいこと？」
意地悪な質問だ。
「愛さんのお願い以上に優先するものはないよ。
でも、愛さんにやめろと言われない限りやめない」
だから意地悪な答えで返す。
そのヘソ曲がりな回答に愛さんは微笑んだ。

「言わねーよ。そんな大馬鹿なお人好しだからアタシは好きになった」
そう言ってもっと強く俺の頭をぎゅっと抱きしめる愛さん。
わかってる。良く思うはずがない。
だけど俺の意思を尊重して自分の我侭を抑えてくれてる。
「でも約束してくれ。危ないようだったら絶対にアタシを頼れ。
大には怪我をして欲しくない」
「うん。約束する」
そう言って愛さんの胸から頭を上げ、艶を帯びた愛さんの唇にキスをする。
「んん・・・・・・」
その声は誰のものか。
少なくとも俺の出せる音じゃない。
「大、絶対に恋奈に目移りするなよ?」
喧嘩狼は存外に独占欲が強いらしい。
憂いを帯びた瞳が俺の嗜虐心を煽る。
「俺には愛さんだけだよ」
そう言ってベッドに愛おしい彼女を優しく寝かせ、上にかぶさった。

その数分後、長谷大の部屋の窓には一人の姿があった。
「ったく、相も変わらずお熱いことで」
腰越マキは部屋の中の二人が行為の中にいることを呆れた目で見ていた。
だがその瞳の色には僅かな羨望と嫉妬、情欲の色もあった。
それを自覚し、マキは軽く舌打ちをする。
「我ながら好き勝手した生き方をしてる自覚はあるけど、はぁ」
どうして自分は大を愛から奪うことにここまで踏みとどまっているのか。
自分らしくない臆病な感情に自己嫌悪する。
彼が愛以外には一定以上の関係から前には進まないからか。
それとも自分が無理やりにでも大を組み伏せることに抵抗があるからか。
どちらにせよ自分らしくない理由だ。
欲しいものは奪う、気に入らないものは潰す。
つまり愛を叩きのめし大を無理やり奪えば良いはずなのだ。
だがそんな事をしても大の気持ちまでは奪えないだろう。
何より、自分は彼に敵意を持たれたくない。
彼には敵や味方というものじゃなくもっと別の関係が欲しかった。

どれだけ悩んでも答えは出ない。
いつまでも二人の出歯亀するつもりもない。
自分を見ず、愛ばかりを見ているのならマキは即座に大に見切りをつけただろう。
だが、愛とよりを戻した後も大のマキに対する応対は変わらない。
変わらないからこそ・・・・・自分の大への気持ちも褪せない。
そういった複雑な感情をマキは抱いていた。
彼とあって何ヶ月も経った。
彼と出会って最初の頃よりもっと愛着がわいた。
だというのに、彼は自分を見る目を変えず愛を見つめ続ける。
その事に気がつけば不愉快になる自分の心があった。
汚い。実に汚いこの感情を吐き出すこともぶつけることもできない臆病な自分に嫌気がさす。
しがらみから逃げて家出をしたはずなのにまた別のしがらみに囚われた。
自分はどうしたいのか、何をしたいのか。
それに答えは出せず、マキは悩み続けていた。
「寒いな」
一人で過ごす湘南の冬は、体を、何よりも心を冷やした。

「で、辻堂の彼氏が何のようなワケ？」

その翌日、俺は江乃死魔の拠点に単身で乗り込んだ。

本来ならこんな大胆不敵なまねをすれば俺なんて問答無用でボコボコにされるだろう。

だが今は状況が違う。

恋奈が余りにも孤立していた。

江乃死魔のリーダーである彼女が明らかに江乃死魔内で孤立しているのである。

拠点には最低限の戦力しか置かれておらず、俺が愛さんの彼氏という立場だけあって殆ど障害なく通された。

余りにもそれはおかしい。

防衛意識が低すぎる。

「一条さんは？」

「一昨日腰越に両腕とアバラ折られて入院中よ」

後で見舞いに行こう。

「じゃあハナさんは？」
「・・・・・・・」
答えがない。
だが考えれば分かる。
一条さんがいない今、彼女を確実に守れる戦力が無い。
そしていつマキさんが再び襲撃にくるかわからない。その時は軽い怪我じゃすまないかもしれない。
それを危惧して遠ざけたのだろう。
彼女は余りにも身内に甘すぎる。
「乾さんは？」
「うるさい、答える義理もないわ」
もう答える気はないらしい。
他にもマスクをつけた・・・・・・良子さんだっけか。彼女のことも聞きたかったんだけど。
「じゃあ俺が片瀬さんの質問に答える番だね」
なぜ俺がこの江乃死魔に単身で来たのか。
単純な答えである。

「俺は」

我ながら馬鹿すぎる決断だと思う。

愛さんを裏切る行為だと思う。

それでも、それでも俺は

「片瀬さんの力になりたい」

彼女の力になりたかった。

俺は余りにも愛さんの心に触れすぎた。

だからこそ見え始めたものがある。

不良とはいわゆる個性だ。

何かを貫いた結果それが一般人にとって迷惑行為に当たる行為をした者。すなわち不良だ。

だけど、少なくともその何かを貫こうとする姿勢は程度こそあれやはり美しい。眩しい。

片瀬さんの思い描いた湘南最強のイメージはそれこそ傍から見たらただの暴走族の集まりだろう。

でも俺はこれまでの片瀬さんの頑張りをある程度知っている。

知っているからこそそれが中途半端な姿勢の努力ではない事を理解している。

そのこれまでの努力を、こんな一部の裏切りによって潰されるのは・・・・・・

「何よ。哀れみのつもり？」

「そんなんじゃない」

既に誰を信頼していいのかもわからなくなりつつあるのだろう。

普段の冷静さも影を潜め、まるで人に怯える猫のようだ。

そこまで追い詰められていたのか。

今日この瞬間までまるで気づくことができなかった。

いや、今までにその匂いはあったのだ。

夏の頃から既に江乃死魔では彼女の命令である恐喝行為禁止を破る奴がいた。

その頃から彼女は悩み始めていたに違いない。

「じゃあ何。辻堂に何か命令でもされたわけ？」

「愛さんは関係ないよ。ここに来たのは俺の意志だ」

「はぁ？」

呆れた顔をする片瀬さん。

当然か。彼女は愛さんの敵である。

そんな関係なのに俺が片瀬さんに肩入れするとなるとそれは何か裏を勘ぐるに違いない。

「馬鹿じゃないの。それに私は別にアンタに助けなんて求めてない」
毛嫌いするように寄せ付けない態度。
だが俺はへこたれない。
「知ってる。けど片瀬さんに拒否権は無いよ」
俺の偉そうなセリフに片眉を上げる片瀬さん。
「俺は君におせっかいをしに来たんだ。もう一度言う。
俺は片瀬さんの力になりたい」
俺の気持ちを聞いた片瀬さんは怒りを含んだ目で俺を睨みつける。
当然か、お前がどう言おうとおせっかいすると言ったんだ。
そりゃあ怒るか。
だが俺も半端な気持ちできた訳じゃない。
こんな形で江乃死魔が終わるなんて片瀬さんは当然として愛さんも望んじゃいない筈だ。
「・・・・・うっさい」
「こんなくだらない事で江乃死魔が潰されるのは嫌だ。
片瀬さんだって、片瀬さんこそそう思わない？」
彼女が生み、彼女が育てたのが江乃死魔だ。

育った結果は当初の彼女の思い描いた姿とはかけ離れたものだった。
だけど、その姿が彼女の望んだものじゃなくても、だから潰してやり直そうなんて。
それは余りにも片瀬さんにとって辛い選択なんじゃないか。
親が子を殺されて仕方がないなんてそんな馬鹿な事はない。
親に愛されなかった俺だからこそ。
江乃死魔を愛している彼女の姿は眩しかった。
「俺は片瀬さんを尊敬してる。たったこの短い機関で湘南最高の勢力にしたこと。
その巨大な組織を束ねる能力、仲間を、組織を大切に思うその気持ちを」
だから、潰すというその最悪の選択だけはやめてくれ。
育てた姿が気に入らない物だったからって、簡単に手放さないでくれ。
「俺は君の力になりたい」
何度だって言う。
「うるさいんだよ・・・・・・」
ぼそりと、本当に聞こえるかどうかの音量で片瀬さんはそうつぶやいた。
「うるさいんだよ！　誰がテメェに助けを求めた!?」
蓋を切ったように声を張り上げる片瀬さん。
周りの取り巻きも何事かと俺たちに視線を集めた。

だがそんな事をまるで気にしなくなった片瀬さんは憤怒し俺の胸ぐらを掴む。
「そんなに今の私は情けないか!?　ヤンキーですらないツッパるものすら持たないテメェに何が分かる!?」
誰もが見たことのない彼女の生の感情に周りは気圧される。
だが俺はこの生の感情を受け止めないといけない。
「分かるよ。俺だってツッパるものはあるんだから」
「彼女の喧嘩すら認められない狭量のアンタが何を言ってんだ！」
そうだ。
俺は前に辻堂さんをそれで泣かせた。
俺が余りにも狭量で、なのに彼女の意思は何も汲み取れず。
それで大切な彼女と一度縁を切る羽目になった。
あの日、悲しげに目を伏せ俺の背中から目を外した愛さん。
あの選択は間違いだったんだ。
どんなに相性が悪くたって、世界一合わなくたって、それを気にする必要はない筈なんだ。
愛さんへの気持ちをツッパり通す度胸があの時の俺にはなかった。
だからあの時屋上で涙を零した愛さんを抱きしめられなかった。

あの時の後悔は一生向き合う事になるだろう。
だがその失敗を一度のり越えたからこそ、得たものがあった。
「そうだね、俺は狭量だよ。未だに愛さんが喧嘩すればいい気はしない。
かと言ってこの八方美人な性格も全然治せていない。
あの頃から全く成長してないよ。でもね」
だからこそ。
自分や愛さんを結局変えることができなかったからこそ
「そのままの気持ちを理解できるようになった」
俺はどれだけ年を重ねても他人のおせっかいをするだろう。
愛さんとどれだけ長い時間一緒にいても愛さんのヤンキーな部分には慣れないだろう。
それでも俺は愛さんを愛している。
この気持ちは絶対に間違いじゃない筈だ。
重要なのは慣れる、歩み寄るという変化じゃない。
その人物の本質を受け止める覚悟なのだ。
「片瀬さんはこんな形で江乃死魔を潰したいわけじゃないでしょ」
「当たり前よ・・・・・どれだけハナ達と頑張ってここまでやってきたと思ってるのよ」

俺の襟を掴む手は震え、声も同じように震えている。
「だから俺は力になりたい。他意はない」
これが俺の生の気持ちだ。
これで彼女に届かなかったのなら、それはもう俺と彼女は相性が悪いということになる。
だが俺はそんな事欠片も気にしない。相性が悪いから諦めるという選択はもうしない。
この気持ちが通じるまで訴え続ける。
「クソっ、畜生っ・・・・・・」
俺の襟を掴んだまま片瀬さんは俯く。
既に先ほどの怒りの感情は消え、今のその姿こそ彼女のむき出しの姿なのだろうか。
「私は、私はどうすればいいのよ・・・・・・」
考え抜いて、それでも答えは出ず。
それでもまた考え抜いて答えはこの瞬間までなかったのだろう。
内部の裏切り。それも信頼を置く幹部の誰かが裏切っているのだ、これは余りにも身内に甘い彼女には辛い問題だった。
「片瀬さんが仲間を疑うのが辛いなら、関係のない俺が疑う。

片瀬さんがこれ以上傷つく必要は無い。俺がきっかけをつくる」
彼女に必要なのは悲しくも今は仲間じゃない。
仲間を我が子を罰する他人なのだ。

それから数分後、俺は片瀬さんから一つのリストを貰った。
内容は裏切り者と思わしき人物のリストである。
だがこのリストが余りにも酷かった。
江乃死魔の半数のメンバーの名前が載っていたからだ。
なるほど、彼女は必死に内部の問題を対処していた。
規則を破ったものに罰則を与えた履歴も細かく書かれている。
だが一人を修正しても別の数人が規則をやぶる状況だった。
このリストを作るうちに徐々に焦燥していったのか。
流す感じでリストを読み進めると最後の方に気になる文があった。
それは
『乾梓が規則違反の先導者である可能性が有り』

片瀬さんは、既に答えを出しつつあったのだ。

4話：青春な奴ら

「遅いな、片瀬さん」

江ノ島へ続く橋の最中に立ち、安物の腕時計を見れば時刻は14時を二十分過ぎていた。

確か約束の待ち合わせ時間は14時丁度のはずだけど。

メールを送ろうかと携帯電話を開ければ彼女のアドレスを知らないことに気づく。

ふと一瞬自分は待ち合わせ時間や場所を間違えたのではないかと薄ら寒いものを感じ始める。

どうしたものかと首を捻っていると不意に後ろに気配を感じて振り返る。

そこには複雑な顔をしてこっちを睨む片瀬さんがいた。

「待たせて悪かったわね」

「いや、今来たところだよ」

テンプレートな会話をし、それじゃあ行こうかと本日二度目の江ノ島へ向かった。

俺は今日午前中に彼女の拠点へ押しかけ何とか協力させてもらえるようになった。

そのリストをみて気になった事をまさかメンバーの前で相談することもできず、こう

して時間を空けてプライベートな時間で聞くことにした。
誘った時に片瀬さんがやたら慌てていた気がするがなんだったんだろう。
「言えない・・・・・・実は先に来てたのに声をかけれず隠れてたなんて」
先に進んでいると横に彼女の姿がない。
振り向いてみると彼女は合流地点から動いていなかった。
「どうしたの、忘れ物？」
何か俯いてブツブツいっている彼女に若干戸惑いながら声をかけるが片瀬さんはこちらをギロリと睨んだ。
「な、なんですか？」
「何でもない。行くわよ」
早足で俺の隣まで来た片瀬さんはそのまま俺を通り過ぎて行った。
どうやら今回は彼女が先導してくれるみたいだ。
といっても落ち着いて会話できる場所を目指しているだけだが。
そういえば。
「片瀬さん片瀬さん」
俺の声掛けにイラついたように片瀬さんは反応する。
「うっさいわね。一回呼べばわかるわよ」

怖いなぁ。
何か俺悪いことしたっけ。
「その服オシャレだね。凄く似合ってる」
「う、うっさい！　さっさと足を動かせ！」
服装を見れば時々街中で出会う片瀬さんのお気に入りらしい服装ではなく、今日は見たことのない物だった。
どちらかというと今日の方が高そうな服に見える。
女の子の服のことはよく知らないけど。
「で、どこに行くのかな」
「江ノ島に居たんじゃ誰に聞かれるかもわからないんだから商店街の方いくのよ」
そう言ってからこちらから視線を外して再び進んでいく片瀬さん。
「ちょっと待ってよ。そんなに早く歩くと疲れるし――――」
「あいた！」
言わんこっちゃない。
慣れない大股歩きをした彼女は盛大に自分の足が引っかかって転ぶ。
頭から行ったけど幸い顔は腕でガードしてた。
「く、うぅ・・・・・・いったぁ・・・・・・」

そりゃ痛いだろう。コンクリートの上にモロにコケたんだ。
しかも今は冬、風の冷たさが痛みを更に強調する。
片瀬さんはこけた姿勢のまま少しプルプルしていたが
「痛くない！」
相変わらずのタフさであっさり立ち上がった。
「痛くないわけないでしょうに」
ため息を吐きつつ彼女の前にたつ。
そしてそのままどこか怪我をしていないか目で確認する。
「ほら、少し肘すりむいてる。ちょっとそこのベンチに座って」
「痛くないんだからいいでしょうが、ウザったいわね」
「なんて憎たらしい事を言う口なんでしょうこの子は」
少しすりむいた程度なら良いんだが、血も出てる。
これじゃあ綺麗な服を汚すし、何より女性の肌に傷跡を残しかねない。
痛くない程度に彼女の手を引っ張ってベンチまで無理やり連れて行く。
抵抗するものかと思ったが、意外にも彼女はそれに素直に従ってくれた。
リュックから応急セットを取り出す。
「なんでそんなもの常備してんのよ」

「俺の彼女が喧嘩していつ怪我するかわからないからだよ」
　もっとも、前の我那覇さんの件やマキさん関係以外で愛さんが怪我をしたところなんて見たことはないが。
　何にせよ持っておいて損することはない。
「へ～、アンタって裁縫もするんだ。主婦みたい」
「人のカバンの中をチェクするのは淑女の行いとは言えません」
「た、たまたま見えたのよ！」
　中に一緒に入れてたソーイングセットも見られたらしい。
　見られて困るものじゃないから別にいいけど。
「ほら、腕見せて」
　そう言うと片瀬さんは少し嫌そうな顔で長袖を捲る。
　そこで俺は絶句した。
「片瀬さんってさ、ドラゴンの血とか飲んでないよね？」
「レディに失礼だろうが！」
　見れば怪我なんてどこにもなかった。
　あれ～、おっかしいな。さっきまで肘からポタポタ血が滴っていたのに。
「まあ取り敢えず傷があったであろうところを消毒だけでもしておくよ」

く。

俺はそれを受け取ってアルコール綿で傷口のあったところや、血で汚れている肌を拭

ブスっとした顔で腕を差し出す片瀬さん。

「勝手にしなさいよ」

「アルコールは周りの熱を奪って揮発する瞬間に一番消毒効果があるから冬にはきつい消毒薬だよねー」

「だったらさっさと済ませなさいよ。実際に寒いんだけど」

こりゃ失礼とささっと済ませて道具をしまう。

それを確認した片瀬さんは特に何を言うこともなく再び袖をおろし立ち上がった。

「一応礼は言うわ。アリガト」

「どういたしまして」

ぶっきらぼうな礼だけど心はこもっている気がした。

片瀬さんらしい感謝のしかただ。

「それじゃあ行こうか」

俺はそう言って彼女の手を掴む。

「ななな何しやがる!?」

それに拒否反応を示すように抗議する片瀬さん。

「いや、またこけちゃいけないし」
「私はガキか?!」
「いいから行くよ」
「引っ張るなー!」

そんな若い二人を遠くから見つめる二人の影があった。
「イチャイチャしやがってイチャイチャしやがってイチャイチャしやがって」
結構な距離を二人から空けたところには喧嘩狼、辻堂愛の姿があった。
普段通りのラフな格好ではあるが探偵気分を出すためか似合わないサングラスまでつけている。
「何で私まで」
その嫉妬に狂った愛の横には困り果てた顔でよい子がため息を吐いていた。
「あの、辻堂さん?　私これからお母さんの仕事の手伝いもあるし」
「あぁぁ!　大が恋奈の手を握った!　畜生この野郎!」
「聞いていない。辻堂ってこんなキャラだっけか」
先日マキに襲われて痛めた首筋をさすりならよい子はヤレヤレと首を振った。

「辻堂・・・・・さん、そんなに殺気を出してたら感づかれるぞ・・・・・じゃなくて気づかれるわよ?」

「殺気!　出さずにはいられない!」

蛇口全開にしたように彼女の周りには殺意の波動が充満していた。

周りを通った人間は片っ端から得体のしれない命の危険を察知してその場から離れるし

彼女の上を通った鳥は即座に気絶して空から地面へ落下しまくる。

「あらあら」

よい子もこれには笑いを隠せず両手を合わせて軽く笑ってしまう。

言い換えればもう笑ってないとやってられない状況でもあるからだ。

見れば先には若々しくデートをしてるように見える大と恋奈

その後ろをついていく血涙を流しながら殺意の波動を垂れ流す愛。

そして彼女が通った先は気絶した鳥の落下場。

あまりにも混沌とした風景によい子はもうヤケになりつつあった。

「何で俺がこんなこと。でもヒロ君が恋奈と辻堂の修羅場巻き込まれちゃいけないし」

何だかんだで恋奈のように身内に異常に甘いよい子であった。

ちなみによい子が巻き込まれた経緯はこんなんである。

『あら辻堂さん。ヒロ君なら今日は江ノ島へ行くって言ってたから家にはいないと思うわよ』
『ごちゃごちゃ言わずに付いて来やがれ！』
『ちょ、どこへ!?』
余談だがよい子さんを捕まえた理由は単純につけていたことをバレた時の言い訳要因である。
大はよい子の言葉なら無条件で信用するため、彼女と一緒に行動するだけでリスクが激減する。
恋する愛のパワーは真っ直ぐだが方向性はワケがわからない所に向いているのだ。
まぁ実際のところ例え愛が一人で見つかったとしても大は笑って済ませるのだが。
少し空回っているあたりが辻堂愛らしかった。
「あんなに大が優しくしてやってんのに何だ恋奈のあの態度！
くそ、やっぱり今から乱入して台無しにしてやろうか・・・・・・」
「ガキかお前は」
既にバグっている愛も愛だが最早性格が安定していないよい子も大概だった。

結局いつも行っている喫茶店で俺達は腰を降ろすことにした。
注文するメニューもやはりいつも通り。
俺も片瀬さんもコーヒーとサンドイッチなどの軽食だ。
「あの～、片瀬さん？」
「・・・・・・・」
気まずい。
どういうわけか知らないが手を繋いだ所から片瀬さんが全然喋らなくなった。
声をかけようがどうしようが無反応。
時折後ろを気にするように振り向くくらいでそれ以外にアクションがない。
「め、メリーゴーランドってあるよね？
あれって実はｍｅｒｒｙ　ｇｏ　ｒｏｕｎｄの略、つまりメリーゴーラウンドっていうのが本来の呼び方なんだよ？」
なんて、さっきからどうでもいい豆意識とかギャグを言っているのだが。
「どうでもいいわ」
つれない。
「お客様、お待たせしました」

「ありがとうございます」
片瀬さんのご機嫌取りに右往左往していると店員さんが注文した品を持ってきた。
手馴れた手つきで品物をテーブルに並べ、あっさりとした、けれど丁寧なお辞儀をしてその場を去る。
こういう何気ない動作だけでも店のレベルというのは測れるものだ。
などと偉そうな事を思いつつ、出されたコーヒーをブラックのまま俺と片瀬さんは口に付けた。
うん。こんなもんだろうな。
別に喫茶店というがコーヒー専門店というわけでもない。
特に不味くも美味くもない平均的な店のコーヒーだ。
「・・・・・・苦い、不味い」
悲しいことに片瀬さんには合わなかったらしい。
「別に俺に合わせてブラックで飲まなくていいから砂糖とミルク入れなよ」
「うっさいわね」
そう言いながら適量に味を変えて片瀬さんはもう一度コーヒーを飲むがやはり美味しくはないようだ。
もともとコーヒー党でもないのなら別のメニューにすればよかったのに。

「コーヒーは嫌い？」
「別に、嫌いでも好きでもないわ」
実に日本人的な回答である。
だがなんとか会話になるようになってきた。
「じゃあさ、今度ウチに来ない？」
「なんでそうなるのよ」
「自宅でコーヒーを豆から淹れられる環境作ってるんだ。味はちょっと自信あるよ」
「・・・・・・なんでドヤ顔なのよ」
また俺は変な顔をしていたらしい。
どうにもコーヒーを淹れてる時も変な顔してるらしいが語ってる時もとうとうこの悪癖が現れ始めたか。
少し気を付けようなどと反省していると
後ろから何か凄まじい殺気に襲われた。
「うおおおお!?　な、何だ!?」
振り向いても特になにもない。
数人の客がいるだけだ。
「辻堂の奴、気づかれてないと思ってるのかしら。バレバレだっつの・・・・・・」

何やら片瀬さんがムスっとした顔で何か呟いていたがよく聞こえなかった。

「何ナチュラルに家に誘ってんだよ大の馬鹿っ
　既に腰越だけで手一杯なのに余計なことを！」
「あらあら、ヒロ君らしいわね～」
　二人の死角になるテーブルには愛とよい子が座っていた。
　幸い二人のテーブルから距離は殆ど空いてなく、同時に店内はそれほど騒がしくないため耳をすませば大たちの声は普通に聞こえるのだ。
　愛はギリギリとマグカップを握り締めながら歯噛みをする。
　それを面白がりながらよい子は暖かいグリーンティーを飲む。
「まっず。やっぱ大のが一番だな」
「店内でそういうことはいわないの」
　失言を漏らす愛をたしなめるよい子。
　まさにやんちゃな妹としっかりした姉の様子だ。

コーヒーを半分ほど飲んで歩いた分の体力も回復した頃、ようやく俺達は本題に入ることにした。
「ひとつだけ、質問いいかな」
とは言っても聞くことは正直一つだけだ。
「乾さん、今どうしてるの?」
既に片瀬さんは誰が首謀者か特定している。
無論確証がないから今まで踏み出せなかったのだろうけど。
片瀬さんは肩肘をついて窓の外を見る。
言おうか迷っているのだろう。
だがそれも数秒だけの事だった。
「長谷大。私は本当にアンタを信用していいのかしら?」
最後の確認をするように片瀬さんはこちらを見る。
本当に江乃死魔の問題に踏み入る覚悟があるのか。
そして本当に自分を裏切らないのか。
なるほど、この確認は俺に対して安全を心配したものか。
これに頷けば俺は恐らく俺の身に危険が迫るかもしれないのだろう。

だからここで引き返す選択肢を片瀬さんは俺に与えた。
鈍ければそれすら気づかなかっただろうけど俺はなんとか気づけた。
だが、それは無用な心配だ。
「ああ。絶対に片瀬さんを裏切らないよ」
胸を張って答える。
その選択に迷いはない。無論得体のしれないものを敵に回す恐怖心はある。
けれどそれ以上に自分の心には何があっても折れない覚悟があった。
その答えを聞いた片瀬さんはクスっと笑う。
今日初めて見せてくれた笑顔だ。
「そう。馬鹿ね、わざわざ危険なことにばかり首突っ込んで」
「そんな性格だから愛さんと付き合えるようになったんだ」
「この雰囲気でノロケ混ぜてくんなや」
ようやく俺達らしいノリになってきた。
「それで、梓の事だったかしら」
話してくれるらしい。
俺は余計なことを言わず頷く。
「梓は腰越にやられてティアラと一緒に入院中よ」

何と。確かに今日江乃死魔行った時に姿は見えなかったから心当たりはあったんだが。

だが毎回愛さんやマキさんと戦う状況になったら真っ先に逃げて、しかも逃げ切る彼女がやられたのは意外だった。

「ちなみに怪我の程度は？」

「左腕の骨折と軽い打ち身」

以前、夏のテスト週間の頃に久美さんと帰っていた際、一度若干本気になった乾さんに襲われたことがあった。

その実力は手刀でぶっとい木材をまるで紙切れのように叩き切るレベルだ。

だけどあれでもまだ全然本気を出してなかったんだと俺は思う。

その底知れない強さに俺は引っかかっていた。

けど俺が気になっていた所はこれでおしまいだ。

後は自分の足で情報を集めることにする。

その日、別れる時間になるまで俺達はあえて江乃死魔の話をせず他愛ない日常的な会話を楽しんだ。

俺はその間の時間はとても楽しかったし、片瀬さんも心から笑ってたと思う。

そして片瀬さんを現在宿泊しているらしい江ノ島のホテル前へ送り届け別れるとき
彼女は背を向ける俺を呼び止めた。
「長谷、アンタ何でそんなに私に関わるわけ？」
ずっと引っかかっていた疑問なんだろう。
似たような質問は既に今日の朝にもされた。
けれど、それでも納得がいってなかったのだろう。
「何でだろうね」
「・・・・・・はぁ？」
今年の夏からの付き合いだ。
時間としては短いのかもしれないけど、それでもその短い時間の中で彼女の人となりは理解している。
身内に甘くて、見栄っ張りで、根性がある女の子。
もちろんヤンキーをやってて権力を傘にして悪どい事もするけど、そのマイナス面を帳消しにするほど彼女の性格を俺は気に入っていた。
「俺は片瀬さんみたいな人は好きだ。だから力になりたいだけ？」
「いや、疑問形で言われても」

いまいちしっくり来る言葉が見つからない。
片瀬さんも満足できた答えじゃなかったらしく渋い顔だ。
「まあ良いわ。今日でアンタの性格は完全に理解できた」
そう言って俺の目の前に立つ。
「私は長谷の事嫌いだけどね」
「そう、残念」
互いに笑い合う。
「私にビビらないし、憎たらしいし。何より気持ち悪いくらい偽善者だし」
酷い言いようだ。
「でも、何で辻堂がアンタを好きになったのかはようやくわかった。
悔しいけど辻堂の目は確かだったのかもね」
愛さんを褒められるのはこの上なく俺にとって嬉しい事だ。
思わず目の前にいる片瀬さんの頭を撫でてしまう。
「馴れ馴れしいっつの」
撫でる手はあっさり取り除かれたが、別段彼女は不快に思っていなかったようだ。
「それじゃあ今日はこれまでね」
そう言って片瀬さんは俺に背を向けた。

どうやら今日はこれまでのようだ。
時間も既に19時を切っている。
「またね、片瀬さん」
返事は無い。
仕方ないかと笑い、俺もその場をあとにしようとする。
「今日は色々な意味で嬉しかった、ありがとう長谷」
驚いて振り向くと片瀬さんはこちらを向いていた。
「じゃあね！」
だが俺が振り向いて目があった途端に片瀬さんは顔を真っ赤にして一気にホテルの中へ走り去ってしまった。
・・・・・・可愛いと思ってしまったことは愛さんには内緒にしておかねば。

住み慣れた我が家に帰るとそこは地獄だった。
いや。風景はいつもと変わらない。
別に物が壊されていたり、人が倒れているわけでもない。

ただ、恐ろしい殺意が充満していた。
発生源はどこだと考えるが、直様気づく。
これ、俺の部屋だ。
今日はリビングで寝ようかなと思ったが、放置してしまうと更に悲惨な事態をおびき出しかねない。
諦めて階段を上がり、自分の部屋に入る。
「おかえり、大」
「・・・・・・」
帰って自室に入ったら愛する彼女がいた。
それだけ見れば最高のシチュエーションなのに全く嬉しくなかった。
小便ちびりそう。
「どうだった、今日のデート。楽しかった?」
何も答えられない。
正確にはデートではなく片瀬さんと二人で楽しくお茶しただけなんだが。
あ、デートだわこれ。
「ごめんなさい」
余計なことは言わずただ謝る。

もちろん立ったままなんて恐れ多い事はしない。
できる限り伏せて、更に人体におけるもっとも重要な頭部は直接地につける誠意を見せる。
なるほど、土下座とはこうも謝罪を表す表現として完成された行為だったというわけだ。
「・・・・・・」
愛さんは俺のこの近代稀に見る美しさの土下座を見ても何も言わない。
ふと、足音が俺の方へ向かっている。
前は見えないから愛さんがどんな顔をしているのかはわからない。
このまま踏み潰されるのかと考えるが。
「大、起きろ」
「うん」
俺の両肩を持って愛さんが起き上がらせた。
そこでようやく見れた愛さんの顔は
「アタシを抱きしめろ、出来る限り情熱的にだ」
俺の良心を酷く傷つけるに足りる物だった。
できる限り俺の愛情が伝わるように強く。

けれど愛さんが痛がらないように加減して抱きしめた。
愛さんは俺に腕を巻きつけて首筋に顔を押し付ける。
愛さんの髪のくすぐったさに俺は少しこそばゆい気持ちになるが、それでも愛さんを抱きしめ続けた。
それを数分続けた後、
「あむ」
何の前触れもなく凄まじい激痛が俺を襲った。
「痛い！」
慌てて愛さんを引き剥がす。
痛みの発生源は俺の首筋。
つまりさっきまで愛さんが顔をつけていたところだ。
っていうか何が起きたのかなんて考えるまでもない。
ガブリと結構な力で噛まれたのだ。なんでや。
疑問を浮かべた顔で愛さんを見ると、してやったりみたいな顔をしている。
「大。アタシは大には何か足りない物が一つあると常に疑問に感じていたんだ」
胸を張って語りだす愛さん。
「速さ？　それなら既に乾さんに言われた後だけど」

「話のコシ折るなよなー」
　これは失敬と首をすくめる。
　愛さんは仕切り直すようにコホンと咳払いをするともう一度胸を張る。
「大に足りない物、それは私の所有権をアピールするものだ！」
　だから俺の首筋に歯型をつけたのだろうか。
　現在の痛みを鑑みるに歯型どころか肉を噛みちぎられたかのような痛みだったんだが。
　首筋をさするとニチャっとしたような僅かに粘性のある液体の感触が。
　出とるがな、血。
「・・・・・・やりすぎた、ごめん」
「あ、いえ。俺の方こそすいませんでした」
　互いに謝罪。
　一応片瀬さんとの事で愛さんを寂しい思いさせたのは事実だ。
　その事には本気で申し訳ない。
　取り敢えず首筋の血を拭ってもう一度愛さんを俺の方から抱きしめた。
　愛さんもそれに抵抗はせず、抱きしめ返してくれた。
「ごめんね愛さん」

「寂しかったんだぞ、馬鹿大」
まるで子供のような事を言う愛さんに暖かい気持ちが沸く。
「アタシだけを見て欲しいって前言っただろ」
「うん」
俺達が一度喧嘩別れをする時に言った言葉だ。よく覚えてる。
「あんな我侭を真面目に受け止めろとは言わない。
けど、それでもアレは本気だったんだぞ」
あの時の愛さんは今までの冷静な態度を完全に捨てて生の言葉を吐いた。
けれどあの時の返事を俺は未だに返していなかった。
丁度いいかもしれない。だったら今ここで返事をしよう。
「俺はね、愛さん。
正直そのお願いは聞けない」
無理だ。
愛さんが自分の喧嘩好きを変えれなかったように俺はこの性格を変えれない。
今回みたく片瀬さんを見てしまう事だって今後あるだろう。
「でも、どんな事があっても俺は愛さんの味方だし。
何よりいつか近い将来に愛さんと結婚したいと思ってる」

俺の一生は愛さんと共に有りたい。
愛さんのいない将来なんて想像できないししたくもない。
愛さんもそうであって欲しいと思うのはエゴかもしれないけど、そう思うほど俺は愛さんに心底惚れ込んでいる。
「こんな所で結婚の約束かよ」
そういって愛さんはクスリと笑う。
「ムードもあったもんじゃなかったね」
本心だったが、少し気が早すぎた言葉だったかもしれない。
言ったあとに恥ずかしくなって顔を赤くしてしまう。
これは恥ずかしい。
「アタシもちゃんと返事しないとな」
何を？　と愛さんを見ると優しく笑いながら愛さんはこちらを真っ直ぐ見ていた。
「そういつか遠くない将来、こんな私でよければ結婚してください」
そういって俺と同じように顔を真っ赤にする愛さん。
今夜は互いに恥ずかしさを分けあって、互いに将来を決めた夜だった。

5話：意地

色あせたセピア色の思い出。それは誰にでもある物だろう。
起きている時は意識すらしないため、そんな古ぼけた物を思い出すこともない。
けれど、何かふとしたきっかけで思い出す事があり、それを懐かしいと感じる。
記憶の引き出しの奥にしまった思い出。
それは何よりも大切な思い出なはずなのに、気がつけば忘れていた記憶。
『じゃあもう会えなくなっちゃうね』
『そんなことないよ』
以前まで住んでいた、腰越マキの実家である寺には二人の幼い子供の姿があった。
『だって遠くへ行っちゃうんでしょ。
仲のいい子がいなくなったら私一人になっちゃう。
お父さんもお母さんもいないし』
この二人は誰なのだろうと考える。
だが夢の中の曖昧な意識では思考がまとまらない。
『爺ちゃんや婆ちゃんがいるじゃない』

『その二人しかいないんだもん』
だというのに、夢の中だというのに何故だろう。
『うーん』
『じゃあいつかマキちゃんもおいでよ』
この二人の会話は何よりも自分の胸に痛みと懐かしさを押し付ける。
『へ？』
『婆ちゃん達が許してくれたら、うちにおいでよ。
一緒の家族になろう』
美しい思い出は、やはり色褪せていて。
なのにどんな現実よりも自分の心に問いかけるものだった。
私は、腰越マキはどう進めばいいのだろうか。
二人の子供は、未来にどんな形を見たのか。
このマキという女の子はこの後どうあろうとしたのか。
自分の事のはずなのに、何も教えてはくれなかった。

「ダイ。お前は子供の頃の夢って見るタイプ？」

恒例行事となった朝食の時間。

今日の朝も元気いっぱいなマキさんにはたくさんのおにぎりを食べてもらってた。

自分もその中から少しつまんで食べるが、朝一にそれほどの食欲はない。

取りすぎるとマキさん怒るし。

「どうでしょうね。

もしかしたら見てるのかもしれないけど、夢を覚えていないタイプなんですよ、俺」

悪夢とかのように心に刻み込むような強烈な夢なら目覚めた瞬間は断片的に覚えてる。

だけど立ち上がって背伸びでもしたらやはり一瞬で記憶から消える。

殆どの人がそうだろう。

「ふーん。つまんねぇの」

「そういうマキさんはどうなんです」

そういうからには自分は覚えているのかと聞いてみるが、マキさんはそれを無視して色々な中身のおにぎりをガツガツ食べる。

手抜きかと少し心配したがいらぬ考えだったようで一安心だ。

それから数分たって殆どを腹の中に納めたマキさんは米粒のついた指をペロリと舐

める。
　最初の頃は行儀が悪いと注意したものの、その度に知らんぷりされるので途中からはもう注意しなくなった。
　何よりこういうワイルドさもマキさんらしい。
「私は普通だよ。覚えてるものもあれば、忘れる事だってある」
　へぇ。
　マキさんが見る夢ってどんなのだろう。
「今日とかも夢とか見たんですか?」
「まあな」
　空になった皿の横に置いた暖かい緑茶をズズっと啜るマキさん。
　その仕草は妙に洗練されたもので、時折マキさんはこんな感じで育ちの良さを見せることがある。
　実は家出した良家のお嬢様なんじゃないかと疑ってしまうものだ。
「どんな夢みたんですか?」
「教えない」
　ばっさりと切り捨てられた。

だがなんだろう、今日のマキさんは正直いつもと違う感じがあった。
夢見が悪かったのだろうか？
いつもより少し弱々しいというか、大人しい感じだ。
それでもワイルドだけど。

「ダイ、どっか行くの？」
「ええ、ちょっと病院の方へ知人に会いに」
今日は珍しく愛さんとは会わない日だ。
どうもお父さんが出張から帰ってきたらしく久々の家族水いらずでお出かけをするらしい。
一応一緒に来ないかと誘われたけど、流石に家族旅行にまで一緒に行くと愛さんの両親にも迷惑だろう。
丁重にお断りした。
だから今日は1日江乃死魔の問題について立ち回ることにする。
「江乃死魔の奴か」
「ええ。そういえば聞きましたよマキさん。

一昨日一人で江乃死魔を半分壊滅させたらしいじゃないですか」
通りでお風呂借りに来たとき血まみれだったはずだ。
「嫌味かよ」
「別にそんなつもりで言ったわけじゃ」
俺の喧嘩嫌いを察してマキさんは少しイラついたように吐き捨てた。
だが俺自身はそんなつもりで言ったわけじゃない。
「しょうがねえだろ。最近の江乃死魔は余りにも目障りすぎた。
だから問題の奴を潰そうとした、文句あるかよ」
気に入らないから７００人を超える族を潰そうとした。
そしてそれを実現する実力がマキさんにはある。
その人間離れしたスケールに笑いがこみ上げる。
「ありませんよ。むしろマキさんがそうしてなかったら昨日愛さんが同じことをしてました」
「汚れ役を請け負ってくれて有難うってか？」
今日のマキさんはやたら意地悪だ。
「違います。結果は変わらなかったと言いたかっただけですよ」
そのせいでティアラさんや乾さん、見ず知らずの不良達は殆どが病院送りになった。

だけどこれは江乃死魔が撒いた種である。
今回マキさんが切れたのだってやはりカツアゲによるものだろう。
知人が病院送りにされたのは正直笑えない。
しかし不良をやるのならそういうリスクもあるんだ。
いつ喧嘩で怪我するかわかったものではない。
今回がいい例だった。
「で、誰に会いにいくわけ。あのデッカイの？」
「いえ、乾さんです」
「乾？　誰だそれ」
相変わらず興味のない人間の名前は覚えないらしい。
そんなマキさんに苦笑しながら説明する。
「ほら、あの足の早くて江乃死魔の幹部の――」
「ダイ」
言いかけたところでマキさんが急に声色を変えた。
一体どうしたのかと顔色を伺うと、マキさんは凄むような目つきで俺を睨む。
「アイツに関わるのはやめとけ。アレはお前には合わない」
珍しくマキさんが人の交友関係に口を出した。

普段は誰がどうしようと無関心なはずなのに。
「もしかしてマキさん、乾さんが今どんな立ち位置か知ってる?」
俺の問いにマキさんはやはり表情を緩めず頷く。
「あの調子にのったカス共の親玉だろ」
マキさんは時折今回みたく異常に鋭い所がある。
もしかすれば恋奈さんが乾さんを特定するより先に気づいていたのかもしれない。
「アイツはお前が思っている以上に不良だ。それもタチの悪い方の」
そりゃそうだろう。
恐喝を煽動するような人種だ。
悪くないはずがない。
「アイツに関わるとダイ、確実にお前は痛い目を見ることになるぞ。はっきり言う、アイツには関わるな」
ここまでマキさんに言わせるとは。
「聞けません、俺は片瀬さんと約束したんです。俺は今日乾さんに会います」
今更臆して逃げるなんて選択肢は俺にはない。
結果どんな事があっても受け止める覚悟はある。

そんな俺の気持ちを察したのかマキさんは大きくため息をつく。
「まあ私も言ったところで聞くとは思ってなかったけど」
そう言ってからもう一度俺の目を真っ直ぐ見た。
「何で私が一昨日中途半端に江乃死魔を壊滅させたか知ってるか？」
マキさんは気分屋だ、途中で戦意の薄い片瀬さんに白けたからかと考えるがそれも違う気がする。
考えてもどれも正しい答えとは思えず、口をつぐんでいるとマキさんは答えを教えてくれた。
「そもそも考え方が違う。
私は江乃死魔を潰しに行ったわけじゃない」
「え、でも実際にマキさんは江乃死魔を」
半分潰したようなものじゃと言う前に
「乾ってのを捕まえて潰すまでに巻き込んだ人数が江乃死魔の半数だったって事だ」
それはつまり。
マキさんは周囲を巻き込みながら喧嘩するタイプだ。
倒れたモノや人を武器にしたりもするし、踏み台に使ったりする。
けれどそもそもそれは大多数と喧嘩することになった際の事だ。

マキさんが倒す相手を一人に絞ったのならその圧倒的なステータスの高さで一瞬で他に被害を出すことなく勝負を一撃で終わらせるだろう。
それほどまでに理不尽な強さをマキさんは持っている。
だというのに、そのマキさんがそれだけの時間や被害を出さないと倒せなかったレベルだということか。
「アイツは私や辻堂ほどじゃない。だが久々だったよ、恋奈や辻堂以外で私をワクワクさせたのは」
よほど乾さんとの喧嘩が楽しかったらしい。
それくらいマキさんを満足させた乾さん。
自分はとんでもない危険な人に会いにいくのだと否応なしに意識せざるを得なかった。
「まあ余りにも目についたから相応の落とし前はつけさせたがな。
これでしばらくデカイ動きはできないだろう」
成程、それで乾さんのわざと片腕を折ったのか。
だけど引っかかるものがあった。
自分も不良の世界には多少理解してきた気がする。
もしかすると乾さんは

「アイツはダイが考えている以上に調子に乗ったことをしすぎた。
怪我をした今こそ相応の報いが下る時かもな」
今マキさんが言ったように現状最も危険な状態なんじゃないかという不安が残った。
「アイツの事なんか知ったことじゃないけど。ダイ、お前は無茶な事するなよ」
「わかってます。自分の出来る範囲の事しかしませんよ」
乾さんと俺の扱いの違いに少し笑いながらマキさんに大丈夫だと告げる。
マキさんも俺の答えに多少満足したのか軽く微笑んで立ち上がった。
「私のメシ作ってくれるお前が病院送りなんてなったら困るからな。
そんじゃまた夜な」
「ええ」
いつもの軽口を叩いてから部屋の窓から外へ出るマキさん。
その後ろ姿を確認してから俺も病院へいく準備をする。
マキさんが言うにはどうやら俺の想像以上に厄介な人みたいだ。
少し気が重くなるが、しっかりしろと自分の頬を叩いた。

大と別れた後、マキは即座に大の家の屋根上に登った。

「ったく。何で私がこんな面倒なことを」

何ということはない、彼女は今日の目的を果たすために一旦大と別れただけで結局目的そのものは大だった。

正確に言えば大の護衛となるが。

そもそも今日彼女がそのような似合わない行為をしているのか。

それにはちゃんとした理由があった。

昨夜、愛は大と別れたあと自宅に帰る前にマキに会いに行った。

マキは家出をしているため正確な住処がなく、愛も彼女を見つけるのはかなり手間取ったが。

取り敢えずは夜遅くなるまでには遭遇することができたのだ。

そして訝しがるマキに向かい愛はこういった。

『アタシがいない間、大を守ってやって欲しい。頼む』

そう言って愛はマキに頭を下げた。

プライドの高い愛が同族嫌悪を抱くマキに頭を下げたのである。

マキの知る限り辻堂愛がこのような事をしたのは初見である。

無論、マキは辻堂愛は互いに生理的に嫌いあっている。

大がマキや愛と波長が合うのとは対照的に二人は恐ろしく合わないのだ。

だからこそ、その愛が自分に頭を下げることの重さをよく理解できる。
マキは珍しく困ったように逡巡する。
『勿論礼はする。旅行先の美味い名物沢山買ってくる』
人が珍しく真面目に考えているのにコレである。
まあ、悪くないというか良い条件だが。
とりあえずはマキは結果として愛の願いを聞き入れた。
もともと大はお気に入りである。
守ってやること自体は吝かでもない。
お土産も欲しいし、時間も持て余している。
良い暇つぶしになるだろうと実の所乗り気でもあるのだ。
そんなこんなでボーっとしていると護衛対象である大が玄関から出てきた。
このまま病院へ向かうのだろうか。
いや、気の利く大の事だ、恐らく乾梓のお見舞いとして何か商店街で買い物をしていくかもしれない。
大のこれからする事を想像して、何だかんだで楽しんでいる腰越マキであった。

お見舞いの品として商店街でケーキを買ってきた。
本来なら果物を持っていくのがセオリーなのだが、乾さんは別に病気しているわけじゃない。
それに彼女は見た目も性格も今時の女の子だ。
だったら形式にこだわらず人気店のケーキの方が喜ばれるだろう。
病院の受付の女性に面会の許可をとって古ぼけたエレベーターに乗る。
目的の階につくとエレベーターは停止し、ゆっくりと重厚なドアを開く。
あまり来ることのない病院だが、別段複雑な構造でもなく乾さんのいるであろう病室はあっさりわかった。
「ええと。うん、この部屋で間違いないな」
受付で教えてもらった番号と部屋のプレートに書かれた番号を照らし合わせる。
番号は完全に一致し、それではと扉をノックしようとすると、既に中に誰かいたのか複数の声が聞こえた。
『最悪だよ！　お前らが皆殺しセンパイに目をつけられやがるから！』
『すいません・・・・・・』
『あーもー、最悪な展開だよっ！』
怒鳴り散らす乾さんの声と、それに怯えたように謝る聞き覚えのない男性の声。

どう見ても穏やかな雰囲気じゃない。

『もういい、テメェら帰れよ。二度とあずの前に顔みせるな。江乃死魔から抜けろ』

『そ、そんな!?』

『本当ならぶっ殺したいくらいなんだけどね。そんなことしちゃ恋奈様に気づかれかねないし

江乃死魔抜けて他のグループにでも潰されればいいよ』

・・・・・・どうしたものか。

『聞いてんのテメェら。さっさとあずの前から消えろっていってんだよ!』

完全に切れている様子だ。

物にもあたっているのだろう、さっきから物を投げ散らかす騒音が酷い。

同時にこちらに向かう足音が。

慌てて扉から離れて距離を置く。

そして様子を伺っていると、乾さんのいる病室から顔を包帯まみれにした不良が3人程出てきた。

会話の流れを聞くに彼らがマキさんにカツアゲしているところを見つかり、江乃死魔が半壊する原因となった人たちだろう。

三人は何かに怯えるかのように縮こまり、エレベーターへ乗り込んでいった。
俺はそれを確認したあともう一度乾さんの病室の前に立つ。
そしてノック。
『だれっすか』
先ほどの怒りが抜けていない。
今の声だけでも明らかに苛立ちの質がある。
だが俺が怯える理由もない。
「長谷大です。乾さん、入ってもいいかな?」
『・・・・・・・どうぞ』
許可が取れたのでさっそくドアノブを回し扉を空けた。
「・・・・・・・」
酷いな。
まず目に映ったのは入口の前の割れた花瓶。
そして次に映ったのはぐしゃぐしゃに潰れた林檎だった。
まるで大地震が起きたあとのように部屋の中のものは全て壊れた状態で床に散乱していた。
「何の用っすか」

部屋の窓際にはパイプベッドが置かれており、その上で乾さんは不貞腐れて座っていた。
「今の人達は？」
「詮索しないで欲しいですね。長谷センパイには関係ないことっすよ」
いつものような軽い感じは一切なく、今の彼女からは誰彼構わず威嚇するようなタチの悪い不良の雰囲気が漂っている。
「関係あるよ。だって、俺は江乃死魔のカツアゲを扇動してる主犯を見つける約束を片瀬さんとしてるし」
「・・・・・・はぁ？」
ここでようやく乾さんはこちらを見た。
だがそれは明らかに敵意と警戒を持った質の目つきだ。
「だからこうして俺は今日ここに来た」
「つまり、長谷センパイは自分のこと疑ってるって事っすか」
「有り体に言うとそういう事になるね」
先ほどの3人の不良のやり取りが決定的だった。
片瀬さんの想像通りやはり乾さんが主犯格だったのだろう。
正直な所、あのやり取りをそのまま片瀬さんに伝えて俺は乾さんと会わず帰っても良

かった。
だが、それでも出来うる限り片瀬さんにも乾さんにもダメージが少なく、遺恨の残らない形で今回の問題に決着をつけたかったのだ。
「盗み聞きしたようで申し訳ないけど、さっきの話も聞かせてもらったよ。
本当に残念で最悪な気分だ」
元々彼女が危険な性格をしている事は今までの体験で薄々気付いていた。
けれどまさかここまで悪どい事をするほどの性格だったとは思ってもいなかった。
「乾さん。せめて自分の口で片瀬さんに謝って欲しい」
俺の言葉に乾さんは苛立ったのか、殺意の篭った目で射抜いてくる。
だがそれも一瞬のことで、突然乾さんはこちらを馬鹿にするかの様な態度で鼻で笑った。
「どういう風にあやまれば恋奈様が許してくれるんですか?」
「許す許さないじゃない。俺は片瀬さんの信頼を裏切ったことを謝って欲しいんだ」
まるでこちらの意思が伝わっていない。
「許されないのなら謝ったって無駄じゃないっすか」
この子はここまで曲がった性根をしていたのか。
苛立ちがこちらにまで伝染し、徐々に俺まで感情的になってくる。

「君のしたことがどれだけ片瀬さんを悩ませたのかわかってるのか？
彼女は自分から江乃死魔を潰されても良いとまで言うほど追い詰められていたんだぞ!?」
「へぇ、恋奈様がそんな事を」
乾さんは僅かに驚いたようだが、それも少しだけ。
すぐにまた薄い笑みを浮かべて挑発的にこちらを見る。
「だからどうだっていうんですか？
何か勘違いしているようだから言いますけどね、自分らは不良なんっすよ。
したいことだけをして、やりたくないことからは逃げる。
そんな人間に何を求めてるんっすか？」
頭に血が上る。
これほどまでに他人に怒りを覚えたのは初めてかもしれない。
彼女は全く反省などしておらず、それどころか開き直っている。
ダメだ。これ以上彼女と話しているとこっちまで何か価値観を歪まされてしまいそうだ。
もう話すことはないと俺は彼女に背を向ける。
「そう、だったらもういいよ。

今回の件は俺の口から片瀬さんには伝えておく」
「ちょ、ちょっと待ってください。それは困るっすよ」
だったらどうしたいのか。
自分から謝るのも、他人の口から自分の悪事がばらされるのもだめ。
余りにも我侭なその態度に次第に我慢の限界が来そうになる。
「簡単に解決できる選択あるじゃないっすか。
先輩が恋奈様の代行できたのならこう報告すればいい、あずは無実だったって」
「いい加減にしろ！」
もうダメだ。
我慢の限界だ。
「君は罪の意識をもつ気すらないのか!?」
怒りに身を任せて彼女に詰め寄る。
俺は別にフェミニストでもない。
女性を怒鳴る事に罪悪感はあるものの自分の怒りをぶつけれない男じゃない。
「君のやった行為は俺にとって絶対に許せない事だ。
不条理に人を傷つけ、信頼している仲間を裏切り、その罪から目をそらす」
吐き気がする程の気分だ。

頭に上った自分の血でフラフラする。
「だから絶対に見逃すことはできない」
はっきりと強い意思を込めて乾さんの目を睨む。
どれだけ言っても彼女には届かないだろう。
それほどまでに俺と彼女は相容れない。
だが言わずにはいられなかった。
「はぁ。見てくださいよセンパイ、このだっさいギプス」
彼女は先程までずっとシーツにくるんでいた左腕を見せた。
その細い腕には明らかに不釣合いな無骨なギプスがあった。
これがマキさんに折られた腕なのだろう。
「こんな状態で今自分が江乃死魔から追い出されたらどうなると思います?」
・・・・・・成程。
次はこういう手でくるのか。
「察しの通りっすよ。多分あずは恨み持った奴らにここぞとばかりに襲われるんじゃないっすかね」
「だからどうしたというんだ」
「いえ、特に意味はないっすよ?

ただ長谷センパイはそういうの平気な人なのかなって思っただけっす」
どこまで彼女は人を侮辱すれば気が済むのか。
「マキさんから聞いたよ。君、実はかなり強いんだってね。
そんな君なら片手でも自分の身くらい余裕で守れるだろう」
「そうかもしれないっすね。でも、もしかしたらもあるかもしれない」
試すような声色で俺に囁く。
もういい。もう沢山だ。
「あぁそうだ。自分、今日の夜に退院する予定なんっすよ」
つまり、今日の夜。俺の答えを聞きたいというわけだろう。
「・・・・・・・」
俺はこれ以上彼女と言葉を交わす気もない。
その言葉を無視して病室から出て行った。

そしてその夜。
俺は片瀬さんに全てを伝えた。
といっても別に彼女が何をしたとかそういう詳細ではない。

単純に、やはり乾さんが主犯格だったという事だけを言った。
それを聞いた片瀬さんは一瞬、酷く悲しそうな顔をしたあと即座に切り替えた。
そして、互いに集会の時間まで声を一度も交わすことなく、その時間を迎えた。
集まったのはやはり本来の江乃死魔の人数の半数。
一条さんはハナさんをかばった傷がまだ癒えず入院中らしい。
つまり今日ここにいる幹部は良子さんと乾さんだけということになる。
ふと、視線を感じる。
誰かと周りを見渡すと乾さんと目があった。
おそらくは俺が片瀬さんに何か言ったのか気になるのだろう。
その視線は焦りや怒りに近く、嫌な汗が背中を伝う。
「長谷大。随分顔色が悪いようだが」
「あ、リョウさん。お久しぶりです」
乾さんの視線を遮るようにリョウさんが隣に来た。
それがわざとなのか偶然なのかはわからないが何にせよ助かる。
「今回の件、お前には手間をかけた。嫌な思いをさせてすまなかったな」
そう言って俺の横から動かないリョウさん。
「いえ、俺が自分からしたいと言った事ですし」

「本来ならば俺達がすべき行動だった。
だが、身内の不祥事は身内が摘発するよりも関係のない人間が言ったほうが意外性が高い」
だから今まで何もできなかったのだろう。
何よりも既に今の江乃死魔は誰が味方で誰が裏切り者かもわかったものじゃない。
恐らくリョウさんが自分で動いても誰かがその行為を乾さんに漏らしていたはずだ。
「結果は、やはり・・・・・だったか?」
「はい。既に片瀬さんに伝えた後です」
「そうか」
リョウさんも大方想像は付いていたのだろう。
結果を聞いても特に同様の色はなかった。
「乾さんどうなるんでしょう」
「間違いなく恋奈に江乃死魔を抜けるようにいわれるだろうな」
それは間違いないだろう。
だが、俺が心配しているのはそのことじゃない。
「抜けたあとは、そうだな」
俺の質問の本意も分かっていたのか、続く答えが出てくる。

「今までに立場や恐怖で従えていた江乃死魔の奴ら、その他のグループに襲われるのは確実だ。
アイツは以前から必要以上に他人を痛めつけるクセもあったしな」
一度湘南の頂点をとったリョウさんが言うのならそれは確実なことなのだろう。
「だが、少し引っかかる事があってな」
「何がです?」
「お前は暴走王国というグループを知っているか?」
確認するように聞かれる。
だが申し訳ないことに聞いたことない名前だ。
素直に首を振る。
「今年の秋頃から湘南の小さいグループに喧嘩をふっかけては勝利し、その度に金品を奪っていくグループだ」
「それがどうしたんですか?」
「不自然なんだ。奴らは毎回江乃死魔のターゲットであるグループを毎回先回りして潰して回る。
まるでこちらの情報があっちに漏れているかのような動きをしている」
成程。

つまりリョウさんはこう言いたいわけか。
乾さんがその暴走王国の一員なのではないかと。
「その暴走王国のメンバーとかは知っているの？」
「ああ。リーダーもそのメンバーもある程度特定できている」
つまり、今日乾さんが江乃死魔を追放されて暴走王国に戻る可能性が高い。
そして今まで江乃死魔の影に隠れていた暴走王国がこれを気にどう動くのかが想像つかないのがリョウさんの悩んでいる点だろう。
「その暴走王国のリーダーってどんな人？」
俺のその質問にリョウさんは少し悩む素振りを見せた。
教えるべきか迷っているのだろう。
「我那覇葉」
「え？」
名前だけつぶやき再び口を閉じるリョウさん。
我那覇さん？
そんな馬鹿な。彼女は不良というより武闘家のはずだ。
実際話した事も何度かある、とても相手が不良とは言え倒した相手から金品を奪う人だとは思えない。

そんな人がそのグループのリーダー？　馬鹿な。
「な、何かの間違いじゃ？」
「確かな情報だ」
それでも疑わしい。
何より言っているリョウさん自身も釈然としていない顔だ。
「・・・・・・始まるぞ」
この話は時間切れだ。
片瀬さんがいつもの拠点の最奥に立つ。
そして、大きく息を吸い込んだ。
「今日は残念な知らせがあるわ」
「・・・・・・っ」
片瀬さんのそのセリフだけで俺がどういう答えを出したのか理解したらしい。
リョウさんが間にいるはずなのに乾さんの敵意を持った視線を感じる。
「怯えることはない。お前は正しい決断をした」
だがリョウさんはまるで俺を支えるように俺の肩に手を置く。
まるで怯える弟を励ます姉のような。
「はい」

その行為に勇気をもらった俺は胸を張った。
「お前達も心当たりがあるはず。
私の定めた規則を破った奴がこの中にいる」
既に彼女は誰が破って誰が守ったのか把握しているらしい。
リストに載っていた人間だけを順に睨んでいく。
あるものはそれに慌てる人もいて、逆に睨み返す人だっていた。
「無論、規則を破った馬鹿には相応の罰を与えるわ。
だけど、その馬鹿共にも今回だけチャンスをあげる」
片瀬さんはそのまま目を瞑り。
ひと呼吸置く。
「この江乃死魔に組みした後、一度でもカツアゲをした奴は今すぐ一歩前へ出ろ。
相応の罰は与えるけどそれで江乃死魔から追放するのだけは許してやる」
そこでようやくここに残る江乃死魔の約３５０名ほどの大群が大きく揺れる。
今この江乃死魔に残っているのは、先日のマキさんから逃げて怪我を負わなかった連中が殆どだ。
言い換えれば規則を守った人ほど果敢にマキさんに立ち向かったらしく、その人たちは例外なく一条さんのように病院送りとなった。

だが今日、俺が乾さんへ面会しに行ったのと同様片瀬さんはその勇敢なメンバーには一人一人見舞いに行ったらしい。

「・・・・・・出てきたのは半数以下か」

横のリョウさんが苛立つように呟く。

片瀬さんに言われて前に出たのは３５０人中おおよそ１２０人ちょい

・・・・・明らかに大半が出ていない。

何より――――

「乾さん」

彼女も前に出なかった。

「いい子ね。今前に出た奴はここに名前を書いて今すぐここから離れなさい。後日直々に私がヤキ入れするけどこの江乃死魔に残ることは許してやる」

例え自分から名乗り出たとはいえ規則を破った行為への罰からは逃れられない。

そこを見逃してしまうと規則にはなんの重みもなくなる。

むしろグループから追放されないこと自体が甘すぎる処置かもしれないが。

二十分ほどで先ほど名乗り出たメンバーの署名は終わった。

そしてここに残ったのは結局２３０人のメンバー。

そのほとんどが苦い顔をしてうつむいている。

恐らく殆どが規則を破った人間だろう。
そのメンバーを片瀬さんは睨みつけるように見渡す。
「本来なら今ので話は終わりだった。だけど私の想像以上に腐ってる馬鹿が沢山いるわね」
俺とリョウさんは初めから疑われる事もないため、片瀬さんには一度も睨まれていない。
だが、実際に彼女に睨まれた人達は殆どが顔を真っ青にしている。
後悔しているのだろう、さっき前にでて名乗り出ればよかったと。
「そうね、それじゃあ最後のチャンスをあげるわ。
お前たちが今後どちらにつくか。見ものね」
何を言うつもりなのか。
「この中にお前達をそそのかした裏切り者の扇動者がいるわ。
そいつの名前をこの紙に書いたやつだけ、さっきの馬鹿共と同じ処置にしてやる」
そこで更にざわつき出す周囲。
まさかこの取引を出してくるとは思わなかったのだろう。
ほぼ全員が慌て始める。
「上手いな。これならば例え沈黙を決め込む奴がいても自ずとその空気で誰が諸悪の根

源か分かる」

リョウさんの言うことがわからず、どういうことなのかと首をひねったが、少ししてから気づいた。

残っている人間が明らかに共同不審になり始めたのだ。

その全員がビクビクしながら乾さんをチラチラと見る。

乾さんを裏切ったらどうなるのか恐怖を抱いているのだろう。

だがそのせいで乾さんが主犯格だということが丸分かりだった。

乾さんもそれに苛立ったのか周りに聞こえるように大きく舌打ちする。

「っち、誰も名乗り出ないか・・・・・・まあいいわ」

三分ほど片瀬さんは待っていたが、誰も前には出てこなかった。

だというのに何かに怯え続ける不良達の姿に片瀬さんは嫌悪感を覚えていた。

「もういいわ。二度もチャンスを逃す馬鹿は江乃死魔に必要ない。

一度でもカツアゲしたことある奴は今すぐここから消えろ、二度とその面を見せるな」

それだけを言い放ち片瀬さんは専用の椅子へ腰掛ける。

「嘘をついて残っても無駄よ。既に顔は割れてるもの。

それを承知で厚かましくも残った奴はただじゃ置かない」

片瀬さんがそう言うと俺の横にいたリョウさんが前に進む。
「お呼びのようだ」
つまりリョウさんや片瀬さんが直々に罰を与えるということか。
リョウさんの姿に怯えた裏切り者たちは次々に慌てるようにしてこの場から立ち去っていった。

騒ぎがおとなしくなり、数分たった後。その場には最初３５０人いたメンバーが３０人程度まで減っていた。
そして今残っているこの中にもまだ嘘つきがいるのだろう。
いや、実際に残っているのだ。
「梓・・・・・・」
ふてぶてしくも腕を組み、片瀬さんを見る乾さん。
だが本人ももう片瀬さんにバレている自覚はあるはずだ。
ここにきて残ってどうしようというのか。
「あ～あ、やられましたね。
流石に夏から始めて冬までの時間があれば誰が裏切り者かくらい特定できるっすよ

ね」

むしろ開き直った態度で、ゆっくり片瀬さんに近づく乾さん。

「今更隠しても意味ないからはっきり言いますね。

あずが今回のカツアゲを大半のメンバーに強制させてた首謀者っす」

「そんなことはずっと前から気づいてたわ」

「へぇ、気づいてたのに泳がしてたってわけっすか」

薄い笑みを浮かべる乾さん。

リョウさんは片瀬さんを庇うように彼女の横に立って木刀を軽く構える。

「まぁそんなことはもうどうでもいいっす。

それよりどうするんですか恋奈様？

裏切り者の自分、ここに残っちゃってますけど？」

「・・・・・・そういえばそうね」

そういって椅子から立ち上がる片瀬さん。

そのまま乾さんの眼前まで歩み寄りメンチを切る。

どちらかがいきなり殴ってもおかしくない。

「前々から気に入らなかったんっすよね。

不良にカツアゲするな？　ムカつくやつの家族を狙うな？　バッカじゃねぇの」

吐き捨てるように本性を徐々に顕にする乾さん。
「自分ら不良ですよ。世間体とか将来性を犠牲にしてるんすよ。
そんな奴らに一々綺麗な事ばかり強制させてどうするんだよ」
おそらくこれまででフラストレーションが溜まっていたのか、病室の時よりも語気が鋭い。
「好きなことをやりたいから、面倒な事から逃げたいから自分ら不良やってんだよ。
何かヤンキーを勘違いしてるんじゃないっすか恋奈様?」
まくし立てるように片瀬さんを糾弾する。
だが片瀬さんはその言葉を真っ向から受けても眉一つ動かさない。
「勘違いしてるのはテメェだろうが。
江乃死魔は私は作った組織だ、だったら規則は私が決める。
テメェもそれを承知でここに入ったんじゃねぇのか」
そうだ。
江乃死魔は結成当初から今と変わらない規則があった。
ならば明らかに乾さんの言い分は通らない。
「金絡みの問題は余計な恨みを買いやすいし組織を腐らせる。
現に今こうしてアンタの裏切りで江乃死魔は半壊した。

だから私はこの規則を敷いた」

病院送りにされた人間の中にもまだ裏切り者はいるだろう。

「それに従わない犬は私には必要ない。

結成初期からの付き合いだ、今出て行くのなら手出しはしないわ。さっさと失せろ」

片瀬さんにとってもそれは辛い選択なのだろう。

だが、その言葉を聞いて乾さんは今までにないほどの凶悪な顔を浮かべた。

「手出しはしない？　バッカじゃないっすか？」

「何を――――うぁ!?」

そして不意打ちのように乾さんは片瀬さんの腹部に拳を振るった。

臨戦状態だったのがよかったのか片瀬さんは食らっても然程ダメージはなく、吹き飛ばされはしたものの直ぐに立ち上がる。

「大体さっきからずっと疑問だったんですけど、誰があずを手出しできるんっすか？」

一気に片瀬さんに肉薄し、手刀の形をを作る。

まずい、あの抜き手は人の肌を容易に切り裂くほどの鋭さだ。

慌てて片瀬さんの間に入ろうとするが乾さんの早さが凄まじくとても間に合う気がしない。

片瀬さんも梓さんの本気を見るのは初めてなのだろう、唖然としたまま動けない。

迫る凶器、動けない標的。
最悪なイメージを頭が通り抜けたとき
「そこまでだ。図に乗るな」
乾さんの横腹に思い切り蹴りをリョウさんが入れた。
走った勢いがそのまま吹き飛ぶエネルギーとなり、乾さんは受身を降りながら吹っ飛ぶ。
だが見た目は派手だったが実質ダメージは無かったらしく、乱れた髪を流しながら乾さんは何事もなかったかのように仕切り直した。
「総災天センパイっすか。存在感薄くて忘れてましたよ」
とはいえ無視できない相手であることは理解しているのか、一旦片瀬さんから視線を外し標的をリョウさんに変える。
リョウさんは普段通り落ち着いた雰囲気で乾さんを睨む。
「っふ！」
そしてタイミングを計ったように一気に踏み出して殴りかかる乾さん。
それを的確に木刀で迎撃するリョウさん。
互いにクリーンヒットは一度もなく互角のように見える。
だが、攻撃と迎撃を重ねる事にゆっくりと実力差が目に付き始める。

「・・・・・片手でこれ程とはな」
リョウさんの攻撃は一向に乾さんにかすることもない。
だが乾さんの攻撃は徐々に彼女に触れるようになってきた。
「弱いっすねー。総災天センパイ」
リョウさんは本気で相手をしているが、乾さんはまるで遊んでいるかのように動く。
だが振るう拳にリョウさんは対処できず、ついに始めて直撃をもらう。
「つぐ、かは!」
吹き飛ばされ、受身をとって転倒はしなかったものの余程強烈な一撃だったのか悶絶する。
それを馬鹿にするかのように眺める乾梓。
「あらら、片手でしかもこーんなブサイクな重しまでつけてて。
本気も出してないあずに一撃も加えられないんだ」
左手のギプスをポンポンと手で遊びながらゆっくりと歩いてリョウさんとの距離を詰める。
止めをさすつもりなのか。
「もう江乃死魔なんてどうでもいいや。
今日ここで恋奈様を潰しておしまい」

そういって同じく小馬鹿にするように片瀬さんを見る。
リョウさんの邪魔をしないように距離を置いていた片瀬さんは歯噛みする。
「身内の裏切りで自分の組織潰れるってどんな気持ちなんっすかねー」
そしてついにリョウさんの前に到着する。
リョウさんは未だダメージが抜けないのか目は乾さんを見ているものの腕が上がっていない。
その姿に俺は、頭が真っ白になった。
「くたばりやがれ」
そういって手刀をリョウさんの胸に突き出した。
だが俺はその二人の間に今度こそ飛び込むことができた。
「つぐあ！」
「んなっ？」
洒落にならない痛みが走る。
明らかに肋骨が数本まとめて粉砕された。
現に乾さんの抜き手が俺の胸にめり込んでいる。
「ヒロ君！」
灼けるような痛みに耐え兼ねてその場で崩れ落ちる。

だが、まだだ。
リョウさんを庇えたのはよかったがまた危機は過ぎ去っていない。
一撃回避したたでけ未だリョウさんは動けない筈だ。
ならばもう一度と立ち上がろうとするが、折れた骨から尋常ではない痛みが発せられ否応なしに体の動きを妨げる。
「へぇ、長谷センパイも案外根性あるじゃん」
一瞬驚きこそしたものの、結果の惨状をみて乾さんはケラケラと笑う。
そして俺への興味を失ったらしく再びリョウさんへ向き直る。
「長谷センパイには同情するっすよ。
使えない仲間は自分の足を引っ張ることしかしないんだから」
それだけ言って、先ほどと同じように拳を振り上げた。
だが、その瞬間。足元で蹲ってたリョウさんが一気に立ち上がる。
その勢いのまま乾さんの振り下ろす手刀をギリギリ躱し、勢いカウンターのようにおお振りでリョウさんが乾さんの顔に拳を叩き込んだ。
想定外の一撃に乾さんは対処できず、転倒する。
「よくも、よくも私の大切な――――っ！」
いつもの冷静なリョウさんはそこにはいなく、息を切らし、凄まじい殺意を撒く総災

天がいた。
愛用している木刀すらその場に投げ捨て、好機を逃すまいと未だ立ち上がれない乾さんへ一気に走る。
だが乾さんも何時までも大人しくなっている筈もなかった。
リョウさんの気配を察し、直様体勢を立て直す。
だがカウンターでもらったダメージはかなりのものだったのだろう、足元がふらついている。
「やってくれるじゃねぇか！」
完全に切れた乾さんはそのまま迫り来るリョウさんの拳を尽く片手で弾き落とす。
すごい。
足が動かず、さらには片手にはギプスをはめているのにここまでリョウさんを翻弄するなんて。
片っ端からリョウさんの攻撃を防ぐ。
だがリョウさんも同じ事を繰り返すつもりもなく、徐々にペースを上げていく。
しかしクリーンヒットはいつまでたってもせず、乾さんのダメージも徐々に回復しはじめた。
そしてそれがしばらく続き完全に立て直した乾さんは再び足を使い始めた。

リョウさんが1度攻撃するたびに乾さんが二発の蹴りと打撃を入れる。
既に玉砕戦法に切り替えていたリョウさんはそれを中途半端にしか防ぐことができず、一撃は喰らうようになっていた。
「しつこいっすね。そんなキャラでもないでしょうに！」
だが一向に倒れないリョウさんに苛立ったのか再び振りの大きい攻撃を狙う。
リョウさんはそれを的確に躱し再びカウンターを乾さんの腹に入れる。
「つぐぅ！」
明らかに今のリョウさんはダメージを感じていなかった。
ダメージの総合量では圧倒的にリョウさんがくらっている。
だが疲弊しているのはリョウさんではなく乾さんだった。
カウンターをもらった乾さんは僅かに顔を歪めるものの足を止めることなくリョウさんへ攻撃を続ける。
しかしリョウさんは先ほどと同じように攻撃を喰らいながらも乾さんのトドメを狙う攻撃にだけは尽くカウンターを入れる。
それを数回繰り返したごろ、突如として乾さんが不自然なタイミングで距離を置いた。
余りにもダメージをくらいすぎたリョウさんはそれに追いつくことができない。

「もういいよ。いい加減うざい」
乾さんはそう言って大きく息を吸う。
完全に、乾さんの空気がかわった。
「本気、見せてやるよ」
そして一気に踏み出した。
瞬間、乾さんの姿を目で追うことができなくなった。
余りにも早すぎたのだ。
リョウさんも反応できなかったのか、明らかに動きの変わった乾さんの攻撃が直撃する。
凄まじい速度の突きがモロに鳩尾に入った。
「ぐぁ、かはっ」
急所を打ち抜かれたリョウさんは崩れるようにしゃがむ。
乾さんは既にリョウさんを侮るつもりもない。
即座に終わらせようと乾さんは一切口を開かず再び腕を構え、手刀の形を作る。
元々最初のクリーンヒットでリョウさんの体力は限界だった。
ここまで耐えた事が彼女の根性の凄まじさを物語っている。
既に体力は限界を迎え、負けるのは確定しているといのに、トドメをさそうとする乾

さんを射抜くその目はやはり鋭かった。
そのまま最初と同じ光景でリョウさんが仕留められる瞬間
「おいおいリョウ。お前らしくない喧嘩だったじゃん」
乾さんの手がその場にいなかったはずの人物によって握り止められた。
普段よりもより濃度の高い殺意を出すマキさんによって。

6話：タフな奴ら

「あ〜あ、だからコイツには関わるなって言ったのに」
乾さんの腕を掴んだままマキさんは呆れたようにその近くで倒れている俺に声をかける。
一見油断しているような態度だが、彼女の存在感は軽口を叩いている人の纏う雰囲気じゃない。
現に腕を握られている乾さんは一切身動きをしない上に、凄まじい握力で掴まれているのか苦悶の表情を浮かべている。
それに気づいたマキさんはまるで馬鹿にするかのようにゴミを投げ捨てる感じで手を離した。
「わりぃわりぃ。せっかく残してやった方の腕まで台無しにするところだったな」
そう言って自分がへし折った乾さんの左腕を舐めるように見る。
「それにしてもお前は私が思ってたより馬鹿だったみたいだな」
依然として軽口を叩きながらマキさんは乾さんやリョウさんのそばから離れて倒れている俺の前へ立つ。

そのまましゃがみ込み、首しか動かせない俺と目の高さを合わせた。
「ってい」
「あ・・・・・・ぅ」
目がチカチカするレベルの痛みが襲う。
あまりの痛みに歯を食いしばって目を閉じる。
マキさんがしたことはうつ伏せで倒れた俺をひっくり返しただけだ。
だがそれだけでも激痛になるほど今のコンディションは最悪だ。
「あちゃ、こりゃ数本イってるぞ」
マキさんは俺の折れたであろう肋骨を指先でなぞる。
案の定やはり折れているとの事だ。
当然だ、乾さんに打ち抜かれた瞬間明らかに自分の耳に骨がへし折れる音がしたんだ。
無事なわけがない。
あまりの痛みに脂汗が吹き出る。
気絶せまいと無理やり薄く目を開くと目の前のマキさんがさっきよりも近づいていた。
俺に跨る形になったままマキさんは俺の頬に手を添えると

「んむ!?」
強烈なキスをお見舞いされた。
一瞬痛みを忘れて別の意味で頭がスパークする。
そのまま唇を何秒かくっつけ、余韻を楽しむように一度俺の唇をペロリと舐めた後離れた。
「な、何を?」
しゃべるだけで胸がかなり痛いので酷いかすれ声になる。
だがそんな情けない俺をマキさんは満足気な顔で見下ろしたままつぶやいた。
「今のは男を見せたダイへのご褒美だ」
マキさんはしてやったりな顔をしたまま俺から離れた。
そして今さっきまでの優しい表情を一変、再び殺意をむき出しにする。
「・・・・・・最悪、よりによってここで皆殺しセンパイかよ」
まともにそれを受けた乾さんは冷や汗を流しながら一歩下がる。
「おいおい、また逃げるつもりか?」
逃がすまいと乾さんが下がった距離以上に乾さんに詰め寄る。
「腹黒いお前だ。私がダイとどういう関係だったかくらい知ってんだろ?」
凄まじい目つきでゆっくりと乾さんとの距離を減らす。

一歩踏み出すたびにそのまま襲いかかるイメージが目に浮かぶほどのプレッシャーだ。

「知ってますよ。辻堂センパイから奪いそこねたお気に入りでしょう?」

「ははっ。そうだ、それで間違いはない」

乾さんの馬鹿にするような一言にマキさんは動じることなく普通に返答する。

「人のお気に入りに手を出したんだ。今度こそ潰されても仕方ないよな?」

「え、うわ!?」

言った瞬間いきなりマキさんの姿は掻き消えて、消えたタイミングと同時に乾さんの目前にマキさんは現れた。

そしてそのままガラ空きの体に密着。

突然の事態に乾さんは反応すらできずまともにマキさんの拳を喰らう。

「ぐうっ!」

リョウさんが乾さんに殴られた箇所と寸分違わないところに拳で打ち抜く。

急所に直撃をもらった乾さんはやはりリョウさんと同じように崩れ落ちた。

酸素すらまともに吸えなくなる重い一撃なのか、目を見開いて痛みを堪える。

だがこれでも許す気はないマキさんは座り込んで痛みに震える乾さんの右腕を再びつかみ引っ張り上げた。

「何で私が一昨日テメェを潰そうとしたとき左腕だけで許したかわかるか？」
気絶しなかったのが奇跡なのだろう。
未だ視線が定まらない乾さんにマキさんは声をかける。
「今日のように立場を失ったテメェが最低限生き残れるように考えてやったからだ。
だがなぁ・・・・・・」
ふぅ、とマキさんはため息を吐く。
そして冷めた目でもう一度乾さんを見下ろし、
「自分の身を守るならまだしも、調子に乗って誰構わず牙を向きやがって。
馬鹿が、江乃死魔を潰すだけなら見逃しても良かったが――――」
ぐっと一気に手に力を込める。
「ダイが自ら負った怪我とはいえそれでもテメェが負わせた事実はかわらねぇ。
落とし前はつけさせてもらうぜ」
つまりは残る右腕も折るという事か。
「くそ、舐めんな！」
何時までも押されている乾さんではなかった。
先程まで怯えていたのが嘘のように逆上する。
右腕まで折られるわけにはないのだろう、必死の形相でマキさんに凄まじい蹴りを放

つ。

この無理な姿勢で放った蹴りですら並みの不良ならまるで見えない速度だし、喰らえば一撃でダウンするレベルだ。

だが相手はそんな不良とは比較にならない存在である。

「いいねぇ。やっぱ獲物は暴れてこそだ」

空いた手で容易く受け止めて逆に乾さんの腹にマキさんの膝が入る。

「がっ・・・・・・・!」

ケリ自体は見えていたのか急所に入る前に乾さんは慌てて喰らうポイントをずらした。

だがそれでもコンクリートすら蹴り砕く威力の攻撃を受けたのだ、乾さんの体から一気に力が失せる。

「さっきのリョウとの喧嘩みてたが、両手が使えなきゃお得意の関節技も精度が低い。だから足で攪乱しようにもギプスが邪魔で僅かだが速度も下がってる。前と比べて見る影ないぞお前」

今ので失望したのか、マキさんはため息を吐く。

「もういいや、潰れちまえ」

まるで虫を踏み潰すかのように乾さんの右手を膝で砕こうとする瞬間

「そこまでよ、腰越」
「あぁ?」
不意の声でマキさんが動きを止めた。
声の主は先程まで沈黙を守っていた片瀬さんだ。
だがマキさんはそれが気に食わなかったのか、片瀬さんを睨みつける。
「おいおい、私はお前の敵を潰してやってんだぜ。何で止める必要がある?」
「梓は、私が落とし前をつけなきゃ気がすまないからよ」
そういって俺とリョウさんを順に見る。
肋骨を数本砕かれた俺と、急所を打ち抜かれて未だダメージが回復せず立ち上がれないリョウさん。
その姿は彼女から見ればどう映ったのか。
「少なくとも、私の仲間がこんな姿になったのに私が大人しくお前にその獲物を譲る理由はない」
その仲間には俺も含まれているのか。
片瀬さんの目を見れば再び彼女と目が合う。
それが余りにもおかしくて、俺達は互いに微笑んだ。
「・・・・・・つってもな」

今まで掴んでいた乾さんの手を離し、頭をガシガシとかく。
「今お前が手を出したところで遅すぎる。漁夫の利を狙いたいってわけじゃないだろ？」
「ええ、手負いの梓をヤキ入れしたところでまるで私の気は晴れない。それに組織に対するしまりもないわ」
だから、と言葉を続ける
「今日の所は引きなさい、腰越」
憮然とした態度でそう言った片瀬さん。
その態度を心底気にらないような顔をする。
「断る。私は誰の指図もうけない」
話は終わりだ、と再び視線を乾さんに移した。
だが片瀬さんはさせまいとマキさんに詰め寄り服を掴む。
「いい加減にしとけよ、お前も今日潰されたいか」
既にイラつきは限界値まできていたのか。
今にも巻き込まんとばかりに片瀬さんを威嚇する。
しかしそれでも彼女は一歩も引かない。
だが、これは拙い。

このままじゃあマキさんが乾さんや片瀬さんを壊してしまう。
「あ、う・・・・・・マキ、さん」
自分の想像より圧倒的に低いボリュームで声が出た。
これじゃあマキさんに届くのも怪しい。
だが、マキさんはそれでも俺の声を確認してくれたようで訝しげに俺に視線を送った。
「痛いんだろ、無理して喋るな。
私はさっさとこいつ等を潰してお前を病院へ送りたいんだ」
そうだ、多分この現状はマキさんが俺を気にしての結果なんだろう。
だとするのなら、俺ならマキさんを止めれるかもしれない。
何とか、マキさんへ伝えたいことを口にしようとする。
だが想像以上に声が出ない。
痛みは大分慣れてきたとはいえ呼吸がままならない。
口を開こうとすれば痛みに襲われて、吸った空気が漏れる。
何故、今こんなに痛くて苦しいのにまだ無理をするのだろう。
そういった考えが自分の頭によぎる。
だがそれには既に答えがある。

苦しくてもここで伝えなければならない言葉がある。

「ごめん、マキさん」

ただ、謝った。

第三者から聞けば何に謝罪しているのかすらわからないだろう。

だが、今の言葉には意味がある。

あれほど気をつけろと言われたのに、それを聞かなかったこと。

危なくなった時に助けを呼べと言われたのにこんな様になるまでそれを求めなかったこと。

怪我をした俺のために振るう拳を今、止めて欲しいと願ったこと。

俺を心配してくれた彼女へ、俺は謝るしかない。

「・・・・・・わかってんじゃねえか」

その気持ちが届いたのか、マキさんは今までまとっていた空気を霧散させた。

つまりは引いてくれるというのだろう。

一度倒れている乾さんと敵意をむき出しにしている片瀬さんを見るが、もう興味を失ったように再び視線を外す。

そして俺の方へ振り向いて歩み寄る。

「無茶しやがって」

そうつぶやきながら俺の元へきてそのまま俺をお姫様抱っこの形で抱きかかえた。
少し恥ずかしいが、まさか病院へ連れて行ってくれる人に文句は言えない。
「やっぱ良いなぁ、お前」
そのまま俺を頬ずりしながらダッシュで拠点から飛び出す。
それは凄まじい勢いで、思い切り俺の体に衝撃が来るのだが不思議と痛くない。
まぁ何というか、マキさんのフロント部分には二つの高性能クッションがあるわけで。
「あの、マキさん」
「ん？」
どうやら本人は気づいていないようだ。
ならば紳士として指摘せねばなるまいて。
「その、あたってます」
何を、という顔をする。
だが俺が顔を赤くしているのを見て気がついたらしい。
「ダイなら許す」
ぶっきらぼうにそう言ってむしろ俺の顔に胸を押し付けてきた。
息が凄まじくしづらい代わりに幸せな感触といい香りが広がる。

愛さんに見られたら確実に殺される。
本当に今日は色々な意味でゾッとした一日だった。

「・・・・・・」
病院へ運ばれてそのまま俺は気絶するように眠った。
どうやらその日のうちに手術があったらしいが幸いか目が覚めることもなかった。
手術で使われた麻酔の効果も抜けてようやく目が覚めた時には俺は見覚えのない天井を最初に視界に入れた。
まあ単純に考えてここは病院だろう。
「・・・・・・」
目が覚めてまず俺がしたことは自分の体のコンディション。
未だ動けば結構な鈍痛があるものの、何もしてなかったら特に痛みはない。
そして次の確認が病室の把握である。
で、だ。
何で。

「何で長谷センパイがここにいるんっすか」
「俺の台詞だよ」
何で乾さんと同室なんだよ。
普通病院って同性の人としか相部屋ならないんじゃなかったか。
「乾さん、別に骨も折られなかったし入院する理由ないんじゃ」
「コンクリートぶち壊す人に蹴り入れられて痛くないで済むほどあずは人間やめてないっす」
そう言いながら隣のベッドに座っている乾さんは服を少し捲り上げる。
見ればそこには痛々しくもぐるぐる巻きにされた包帯が。
「内臓痛めたらしいっす。包帯とったら内出血で腹とかどす黒くなってますよ」
不貞腐れたように呟く。
ふむ。なるほど。
「自業自得だね」
「少しはオブラートに包んでくださいよぉ～」
知ったことではない。
互いにもう話すことはないのか、俺と彼女の間にあるカーテンを閉められた。
まあ俺自身も疑問はあるが彼女と話したいテンションではない。

時刻もまだ朝４時。
俺はもう眠いことはないが、乾さんはそうじゃないかもしれない。
「おやすみ」
正直乾さんのことは好きじゃない。
昔、愛さんに感じた『相性がわるい』とかそういう次元じゃない。
本当に単純明快に考えが合わないのだ。相性以前の問題である。
「・・・・・・おやすみっす」
だが、それでも彼女を嫌いには慣れない自分がいた。

余談だが、この悪意に満ちた部屋割りは片瀬さんの思惑だった。
どうやら俺がいればマキさんや愛さんのプレッシャーに押されて乾さんは悪いことできないし
俺で同室に乾さんがいれば彼女が何かした際に俺の方から片瀬さんに連絡する事になっているんだろう。
片瀬さんのその権力を使った手法には恐れ入った。
ただこれ間違いなく俺の感情は蔑ろにしてるよね。

辻堂愛は激怒した。
かの皆殺し腰越マキを問い詰めなければならないと決意した。
「何でアタシが1日留守にしてる間に大が入院するハメになってんだよ！」
家族旅行中、余りにも大が心配になった愛は残り2日あったはずの予定を全て無視して親を置いて先に帰った。
無論両親が愛の前でいちゃついてばかりでウザかったからというのもあるが。
何にせよ愛は湘南へ戻ったのだ。
戻ったのだが。
「仕方ねーだろ。いくら私でもリョウとあいつの喧嘩にダイが割り込むとは思ってなかったんだよ」
めんどくさいとばかりに言い訳するマキ。
だが許さんとばかりに目つきを鋭くしてマキに愛は詰め寄る。
「あいつって誰だよ!?　つうかどこの病院だ！　今すぐ行く！」
「え～、お前、行くの？」

「彼女が彼氏に会いにいくのは当然だろうが！」
「そりゃそうだけど」
流石に約束やぶった負い目があるのか今日のマキはあまり愛に反論しない。
お土産も既にもらったあとだからというのもあるが。

「自分がいうのもなんですけど、骨を折った張本人と一緒の部屋に入院させられるってどんな気持ちっすか？」
「いいから自分のベッド戻ってよ」
今日目が覚めた時からやたら乾さんが張り付いてきて正直対応に困る。
まあ病院は余りにもすることがないっていうのが原因だと思う。
テレビを見るには受付で有料チケットを買わないと見ることができない。
更には俺も乾さんも別に読書趣味もあるわけじゃない。
有り体に言えばぶっちゃけ暇なのだ。
「何かセンパイ冷たくないっすか？」
「そりゃ骨へし折った張本人を暖かく迎えることはできないよ」

そもそも今俺が座っているベッドが実は乾さんのベッドだったりする。
しかし、どうやら俺が使っていたところが窓際で、自分のが壁際なのが気に入らなかったらしくゴネられた。
終いには色仕掛けまでしてくる始末だったので、交換は受け入れたが。
「ですよねー」
「じゃあ聞くなや」
マキさん、愛さん、片瀬さんとも明らかに違うタイプの彼女には少し辟易する。
この構ってほしがり症はどちらこと言うと姉ちゃんに近い。
「逆に聞くけどさ、片瀬さんにチクった俺と一緒の部屋になって不愉快じゃないの？」
「別にセンパイが来る前から恋奈様には気づかれてたっぽいしどうでもいいっす」
やけにあっさりだ。
根に持たれたかと思ったが。
「江乃死魔からも追い出されて、自分に恨み持った奴らに襲われる危険もあるのにこのコンディション
更にはどうやら自分の通帳まで恋奈様には抑えられたし」
どうやら色々と今までの悪事の清算が回ってきているらしい。
「子飼いにしてた奴らも一人残らずいなくなった。

流石のあずももう悪いこと出来ないっすよ」

そう言うものの彼女のいうことは今ひとつ信用できない。

「まぁ一応まだあずには江乃死魔を潰す手段もあるけど、それも皆殺しセンパイや恋奈様にはバレてるみたいだし」

「暴走王国ってグループかな？」

「やっぱり知ってたか」

はぁ、とため息をつく乾さん。

「そこのグループのスパイだったの乾さんって？」

「ん～、スパイでもないけどあながち間違いでもないっす・・・・・・」

これ以上は言いにくいことなのか、歯切れがわるい。

だったらこれ以上する話でもない。

早々に話を変える事にする。

「そろそろ愛さん来るみたいだけどどうする？」

「え、っ？」

今日の朝、愛さんから電話があったので今回の顛末をそのまま話した。

それを聞いた愛さんは凄まじい激怒だった。

このあとを考えると気が重くなるばかりだ。

「それ早く言ってくださいよ！
長谷センパイの骨へし折ったの自分なんだから辻堂センパイにあったらどんな目に合わされるか！」
慌てて俺のベッドから離れてカーテンを閉める乾さん。
どうやら着替えて出かけるみたいだ。
窓際で着替えているので逆光でカーテンに乾さんのシルエットが浮かぶ。
セクシーである。
だが、着替えている途中にふと乾さんの動きが止まる。
「・・・・・・ちっ」
そして聞こえる舌打ちの音。
影を見た感じ窓の外をみて何かに気づいたからのようだが。
しかし動きが止まったのは僅かな間だけで、再び彼女は動き出す。
すぐに着替えが終わり、勢いよくカーテンが開けられた。
「・・・・・・そんじゃ辻堂センパイが帰った頃に自分も戻るっす」
「う、うん」
少々険しい顔に俺は思わず怯む。
だが、そんな俺を乾さんは気づいたのか

「そんなに見られちゃ恥ずかしいっすよ～」
なんて軽口を言ってそのまま病室の出口へ歩く。
そのままノブに手をかけて出て行った。

「ん～。やっぱ長谷センパイは結構良いいなぁ」
病室から出て、目的地である場所へ歩きながら呟く。
さっきの自分が言いたくないことを察してわざとらしく話題を変えたことも良い判断だ。
何だろうか、長谷大の纏うお人好しな雰囲気も好みだし実際の性格もやはり好印象だ。
こう、甘えたくなる感じだ。
だからこそ先日のアレは酷かった。
実際自分は長谷大を傷つけるつもりはなかった。
彼に手を出すということはその彼女である辻堂愛は勿論、彼を贔屓している腰越マキにすら挑戦状を叩きつけるようなものだ。

自分はそんなつもりなど毛頭なかったし、これからもするつもりはなかった。
そりゃあ恋奈様にチクられた恨みはあるが、先ほど彼に言ったとおりどうせ近いうちに彼に関わらずバレていた事である。
とはいえ、その日の昼に彼に向かって本性を見せたのが痛い。
案の定長谷大は自分の事を明らかに好いていない。
毛嫌いこそしないものの余り自分と関わりたくはないようだ。
「結構あずは気に入ってるんっすけどねぇ～」
はぁ、とため息を吐く。
何だろうかこの感じ。
ため息を吐くものの今現在の自分は何か気分が軽い。
汚いことをして集めた金を失い、属していたグループを追い出され、その上ボコボコにされて左腕なんてまともに使えない。
そんな失うもののない現状だからこそ気分が良いのか。
なぜかはイマイチよくわからないが、まぁ今考えることは目の前の問題か。
病院から出て着替える際に目に映った路地裏に入る。
正確には目に映った路地裏というよりは路地裏に入った人間だが。
「おい、お前ら」

路地裏でたむろしている不良たちに声をかける。
だがこいつらは自分から声をかけずともしばらくしたらアッチからこちらへ押しかけてきただろう。
「おいおい、自分から来たのかよ」
「見てみろよあの腕、やっぱ噂は本当だったのか」
見たところ数は5人。
自分をみてニヤニヤと気色の悪い笑みを浮かべる奴、警戒するように距離を置くやつ。
様々な反応だ。
何にせよ誰からも自分が危険だと思うような奴はいない。
「自分に何か用っすか?」
わかりきっている質問をする。
「言われなくとも分かってんだろうが!」
「この前のこと忘れたとは言わせねぇぞ!」
そんな事を言われても困る。
なんせ自分はこいつ等の顔を知らない。
一々今まで潰した奴のことなんて覚えてられない。

「サーセンっす、あんたら誰っすか？」
仕方ないので正直にいった。
そして当然の如くブチ切れる不良共。
まぁそりゃそうだ。
「どうせ今のあずになら勝てると思って待ち伏せしてたクチっしょ？
いいよ、今日は暇だし相手してあげる」
左腕は使えない上に内臓まで痛めている。動くだけで体が軋むがこんな雑魚共に負ける可能性もない。
逃げるのも面倒な上に、病室まで押しかけられたら自分も長谷センパイもいい迷惑だ。
ここで潰しておくべきだろう。

「この馬鹿！　無茶するなっていつも言ってんのに！」
「言い訳のしようもないです」
愛さんはどうやらお怒りのようだった。
当然である。

彼女が旅行に行ったその日にここぞとばかりに厄介事に首突っ込んでそのまま病院送りだ、そりゃ怒るよ。

俺だって怒る。

病室に来た途端まずは俺に笑顔を見せて、その後俺の怪我を見るやいなや激昂。

今現在彼女を宥めることができず、右往左往していた。

「で、誰がお前にそんな怪我をする真似をした」

不意に真面目な顔をする愛さん。

というより番長の顔だ。

「えぇと・・・・・誰だろうね？」

言えば間違いなく愛さんが直々に報復しにいくだろう。

流石に乾さんもマキさんに散々懲らしめられているし、これ以上は可哀想だ。

だがこのはぐらかすような答えに愛さんの眉がぴくりと上がる。

「もしかして脅されてるのか？

くそったれ、だったら尚更許せねぇ」

「いやいやそうではなくて」

どれだけ俺を贔屓目してくれるのだろう。

ちょっとムズ痒い。

「いやぁ、その人も今は散々な目にあった後だしもう良いんじゃないかな？
俺も別にこの怪我のことは恨んでないし」
というよりこれはリョウさんを庇ってできた怪我だし、乾さんもわざわざ俺を狙ってのことではない。
「良くない、教えろ。今すぐにだ」
にべもない。
何故ここまで意地になっているのだろうか。
「よくも、よくもアタシの冬休みのラブラブプランを・・・・・生かしてはおけねぇ」
どうやら旅行から早く帰ってきたのも俺とデートしたいからだったようだ。
愛されている実感に涙が出そうだ。
「別に俺も動けないわけじゃないし、外出許可もあるよ。
だからデートなんて今日からでも行けるよ俺」
元気さをアピールするためにベッドから降りて立ち上がる。
スリッパを履いて直立した瞬間に、筆舌し難い痛みが襲った。
「む・・・・・うぅ。ほら、ね？」
「ほらねじゃねぇよ。ダメダメじゃねえか」
流石に誤魔化しきれなかった。

顔は痛みで脂汗まみれだし、この調子だと表情も酷いものだったのだろう。
「わかったよ、そこまで言いたくないのならもう答えなくていいよ。
だから無理せずベッドで横になってろ」
納得はできるはずもないだろう、少しすねた顔だが俺に休むことを命令する。
俺も想像以上に結構辛かったため素直にベッドに戻る。
ふう、と一息。
「隠し事してごめん」
「いいよ、恋奈か腰越あたりに聞けばあっさり言いそうだし」
だよねぇ。
片瀬さんは身内の恥だから言わないだろうけどマキさんなら普通に言いそうだ。
「でも、誰かわかった後でも暴力はやめてね。お願いだから」
本気でお願いする。
愛さんも俺が冗談で言っているわけではないと察してくれたのか、真面目な顔で目を合わせる。
そして僅かな逡巡を見せた後大きくため息を就く。
「わかったよ。大のお願いならアタシが断る事は無い」
いつか俺が言ったセリフだ。

「だけど、マジでもう無茶はするなよ。アタシが今どんな気持ちか分かってるだろ」
「うん、分かってる。もう絶対に愛さんに心配させるような事はしないから」
ちょっと目を離した隙に大怪我をしたのだ、そりゃもう心配で仕方ないのだろう。
俺だって一日間を空けただけでその間に愛さんが病院送りになってたら冷静でいられる自信がない。

「ふぅん。自分のこと庇うんだ」
少し早く帰りすぎた自分は取り敢えず病室に戻る前に扉に耳をつける。
そして案の定まだ辻堂先輩はいた。
しかし、どうしたものか。
長谷大ならば恋人の辻堂愛にあっさりばらしても仕方がないと思っていただけに驚いた。
「ん～、お人好しっすねぇ」
どうしてあれ程彼と相容れないような会話をしたり、喧嘩に巻き込んで骨折させた自分を責めないのか。

長谷大ならば自分に辻堂愛や腰越マキをけしかける事なんてわけない。
だから自分は彼の敵意を薄れさせるためにひたすら今日は誑かしていたのだけど。
どうやら自分は長谷大のお人好しっぷりを侮っていたようだ。
嫌いじゃ無かった。
何時までもここにいるわけにはいかない。
恐らくそろそろ辻堂愛も帰るだろう、その時に自分がここにいたんじゃ出てきた彼女と鉢合わせするだろう。
それは流石に不自然だし、拙い。
さっさと退散することにした。
そうだ、さっきの奴らから奪った金で長谷先輩に何かお土産でも買おうか。
少しワクワクしたもの感じながら足は商店街のほうへ向かった。

「やあぁぁぁぁだあああぁぁぁぁ！　アタシ今日は大とずっと一緒にいる！」
「聞き分けのないこと言ってんじゃないわよ辻堂さん！」
時すでに面会終了時間。

途中姉ちゃんも見舞いに来てくれて三人で仲良く談笑していたのだが。
面会終了時間を過ぎても帰らないどころか止まる宣言した愛さんを姉ちゃんが引っ張る。
「そりゃ私だってヒロのお世話は一日中してあげたいわよ！
下の世話だってやってあげる覚悟はあるわ！」
「いや、そんな事絶対に頼まないし」
「だけど諦める。お姉ちゃんは社会のルールを厳守するお姉ちゃんなの！」
当たり前の事だろう。
何言ってんのこの姉。
「うっさい！　アタシは彼女だ！　そんなルール知るか！」
「このクソガキ・・・・・・いい加減にしなさい！」
問答無用で愛さんの首根っこを掴む姉ちゃん。
珍しく聞き分けのない愛さんに俺は微笑ましい気持ちになるが、病院の規則を破ってるのは良くない。
心を鬼にして愛さんを今日のところは突き放すしかあるまい。
「愛さん、俺も一日と言わず死ぬまで一緒にいたいけど、今日の所は・・・・・・ね？」
「大・・・・・・うん、わかった」

俺の精一杯の突き放しが通じたのか、愛さんも素直に頷いてくれた。
「ね、ねえヒロ？」
「ん？　どうしたの姉ちゃん」
「私にも今みたいなこと言って欲しいなって」
ふむ。
「姉ちゃん、ちゃんと帰ったら歯を磨いて寝るんだよ」
「くそったれーーーーーーーーー！」
何故か号泣しながらダッシュで病室から走り去る姉ちゃん。
勿論愛さんを忘れることなく片手で引きずっていった。
そしてそれから数分後、入れ替わるように乾さんが帰ってくる。
「お帰りんこ」
「ただいまん・・・・・・何言わせるんっすか。ていうか、どんだけあの二人いすわってるんっすか」
結構待ったらしい、疲れた顔でそのまま自分のベッドに荷物をおいてそのまま俺のベッドに座る。
・・・・・・何で俺のベッドに座る。
「廊下まで辻堂先輩の声聞こえてたっすよ。明日婦長さんに怒られないといいですけど

ね」

ここの婦長さんはやたら説教臭い。

乾さんの言ったことを想像して明日が怖くなってきた。

「買い物してきたんだね」

「はい。見てくださいよこのパジャマ、可愛くないっすか?」

そういって自分のベッドの袋を漁って中からセンスのいいパジャマが出てくる。

まあ入院中は外出する時以外パジャマや患者着しか着ないし、だからこそパジャマを買ってきたのだろう。

「女の子の服のことはよく知らないけど、それは乾さんによく似合いそうだね」

当たり障りのない回答をする。

「そ、そっすか?　と、当然っすよー・・・・・・」

何か引っかかる反応が帰ってきた。

何故か乾さんは困ったように俯いて頬をポリポリとかく。

どうも落ち着きがない感じだ。

少し空気が気まずくなってきた。

とはいえ俺から彼女に対して話すような話題はないし、黙って彼女が何か言うまで待

つしかないのだが。
「それより長谷センパイ、何かお腹すいてないっすか!?」
急に話が変わって少し思考する。
晩飯なら先刻病院食を食べたばかりだが、さらに言えば愛さんと姉ちゃんの持ってきた弁当も食べて腹が痛い。
「空いているといえば、空いてるかな・・・・・・」
こういう時は何か食べて欲しいものがあるのだろう。
取り敢えず嘘を言ってみた。
別になかったらなかったらでそれはそれでいい。
なんて希望的考えはあっさり打ち砕かれ、俺の言葉に乾さんはすぐ反応して再びベッドの上で荷物を漁り出した。
「じゃーん。これ、食べませんか?」
「それは、メロン?」
「イグザクトリーっす」
でっかいメロンがやたら大きかったビニール袋から出てきた。
何やら目を凝らすと派手なラベルも貼られている。
あれもしかしたらやたら高価なものなのかも。

「いや、俺はいいよ」
「な、なぜに!?」
いや、だって流石にそんなお高いものは頂けない。
それにお腹もいっぱいだし。
「食べてくださいよ～、こんな大きなの流石にあず一人じゃ食べきれないっすよ」
「ん～、仕方ないね」
そう言って彼女の持つメロンを預かって簡易的に備え付けられた手洗い場へ向かう。
相変わらず胸は痛いけれど我慢は出来るレベルだ。
無論大きい動きをすると洒落にならない痛みがあるけど。
取り敢えず包丁で均等に切り分け、皿に並べてラップをかける。
「ほら、食べなよ。余った分はまた明日でも食べればいいし」
1日2日で食べきれる量ではなさそうだけど、まあ持つだろう。
冷蔵庫もあるし。
「そうじゃなくて、先輩にも食べて欲しいんすよ！」
やけに食い下がるな。
「俺はいいって」
手を洗って洗った包丁を拭ったあとベッドに戻る。

そしてメロンを乗せた皿を乾さんに渡すと、乾さんの反応が無かった。
どうしたのかと伺うと、
「・・・・・・やっぱり」
沈んだような顔をしていた。
「気づいてるんすよね。他の不良から巻き上げた金で買ったって」
「は?」
え、いや。
もしかしてこれさっき乾さんが外出した際に他のヤンキー襲って手に入れた金で買ったものなのか?
「そうだったのか」
「え。あれ?」
だとしたら
「だったら尚更俺はこれを食べられない」
早く受け取るように押し付ける。
申し訳ないがそんなお金で買ったものは俺には必要ない。
「気づいてなかったんですか?」
「ああ、今君が言って始めて知った」

「あちゃー・・・・・・」
　先走ったかとボヤく乾さん。
「俺はカツアゲなんて大嫌いだし、そういう方法で手に入れた金やそれで買ったものなんていらないよ。
　さっきも言ったけどやっぱりこのメロンは乾さん一人で食べて」
　それだけ言って自分のベッドからこちらをみる乾さんに背を向けて横になる。
　自分でも驚くぐらいに今の自分は不機嫌な顔をしているだろう。
　とても人に見せられるものじゃない。
「怒ってます？」
「少なくともいい気はしてないね」
　もともと彼女はそういう人種なのだ。
　今更俺が言ったところでカツアゲをする事をやめないだろうし、俺ももう止める気はない。
　勿論俺の知り合いが彼女の被害にあれば絶対に許さないけれど。
　ただ、もう彼女に歩み寄る事は諦めている。
「実はこれ自分がちゃんとバイトしたお金で買ったやつ・・・・・・なんて今更通じるわけもないっすよね」

明らかに落ち込んだような声だ。
少し露骨に態度に出しすぎたかと後悔する。
「もういいよ。それじゃああず一人で食べますよ」
ラップを開いてスプーンでひと切れ救って食べる。
そのままモグモグと咀嚼するような音が静かな病室に響く。
「・・・・・・い、今食べたいと正直に言ったら分けてあげなくも」
「いりません」
「ですよね～、うぅ」
更に落ち込んだテンションになる。
「じゃあどうしろってんですか!?　どうやったら食べてくれるんっすか！」
「逆ギレ!?」
いきなり逆上した彼女が俺のベッドにのしかかる。
そして目を合わせるために俺の頭をがしっと掴み、顔を合わせた。
突然の事に慌てるも、取り敢えず彼女の問には答える。
「そんな人のお金で買ったものは俺には必要のないものだよ。
そりゃ乾さんの自分のお金で買ったものなら喜んでいただくけど」
「ぬ、ぐぬぬ・・・・・・」

悔しそうに唸る。
何故か彼女がそこまで引っかかるのか知らないが俺は常識的なことを言っているはずだ。
そして彼女自身もそれを理解しているから言い返せない。
「汚いお金で買ったものには心がないものだよ。俺はそんなのは好きじゃない」
勿論ただ欲しいという欲求を満たすだけなら金の質なんてどうだっていいだろう。
だけど俺はそうじゃない。
なるほど、ここでも俺と乾さんの違いは目に付いた。
彼女は単純に金や物が欲しくて、俺は欲しいものに意味や価値を求めている
「もういいかな？　それじゃあもう俺は寝るね。お休み」
そしてどちらとも喋ることはなくなり、暖房の音だけが部屋に響く。
それが何分続いただろう。
俺が半ば眠りについた頃、乾さんの独り言のような声が聞こえた。
「・・・・・・どうせこれ以上失うものもないし、悪い事はもうやめ時っすかねぇ」
彼女の真剣な声がほぼ眠りに落ちた頭でもやけに透き通って聞こえた。

7話：一方通行の仲間関係

チクチクと病室内に音が響く。
無論実際はこんな音はしない。
だが針でボタンなどを縫い付ける時に聞こえる音を言葉で表すのならこの擬音以外はそうないだろう。
「長谷センパイって主婦みたいですよね」
「まあ実際家でも家事全般やってるしね、学生件主夫でも間違いはないよ」
縫っているのは自分のボタンではなく、乾さんの制服のである。
先日マキさんとの喧嘩でどうやら引きちぎれたらしく、今日外出する時に気づいたようだ。
彼女自身は裁縫は余りした事がない上にソーイングセットも持ってきていないらしいので俺が縫い付けることになった。
たまたま彼女の制服のボタンと似たものがあって良かったと思う。
「でもそんなに裁縫は手際よくない様子っすね」
「まあね。姉ちゃんはぬいぐるみを編んだりするけど俺は簡単なマフラーでも手一杯」

俺はどうも手先が器用な方ではない。
容量もそれほどいいとは思えないし、ヴァンの言うとおり十人並みな人間なのだろう。
黙々と彼女に声をかけられた時以外には口を開かず裁縫をする。
そんな空気が好みではなかった様子で、乾さんは手持ち無沙汰だ。
「暇じゃないですか？」
「そうでもないよ」
病室の中は暖房が効いていて暖かい。
更に部屋にはいい角度で日光も入りポカポカしている。
この裁縫が終われば昼寝でもしようか。
「ん～・・・・・・」
乾さんは退屈なのだろうか、俺のベッドに腰掛けて背伸びする。
やれやれ、そんなに退屈なら外に出ればいいのに。
「俺の事は気にせず外出しておいでよ」
そう言うと乾さんは背伸びの姿勢のまま俺のベッドにバタンとゆっくり倒れる。
「長谷センパイは今日予定とかあるんですか？」
仰向けでこちらを見る。

「俺は今日も愛さんが来てくれるから待ってる」
退屈な病院生活でも愛さんが来てくれるならそこは天国だ。
俺にとって病院内の天使は看護師さんなどでは断じてない。
愛さんこそがマイエンジェル。
「え～、またっすか。もういい加減外で待つのは寒いし暇なんですけど」
「別にここにいればいいじゃない」
「いやっすよー」
まあ、こんな密室で人が彼女とイチャチャするのを見せ付けられるのはたまった物ではないだろう。
乾さんが嫌がるのも仕方がない。
「ほら、終わり」
手早く縫い終わった制服を乾さんに渡す。
遠目で見てもほつれもないし、ボタンのデザインも違和感がない。
余程意識して見ないと別のものとは思わないだろう。
制服を両手で丁寧に受け取ると乾さんはそれを胸に抱き込む。
「ん～、何か暖かい気持ちっすね」
緩い笑顔を浮かべる乾さん。

何に対してそんな気持ちを抱いてるのかはわからないが、まあ喜んでくれたのならありがたい。
「ありがとうございました、長谷センパイ」
そう言って制服をハンガーにかけて吊るす。
「ところで辻堂センパイが来るのって何時からなんですか？」
「確か、昼の2時くらいだっけかな」
今の時刻はまだ朝の9時。
見れば外はかなり冷えているのか、温度差で窓が曇っている。
今外出した所で外の寒さに辟易して対して楽しくもないだろう。
「それじゃあ長谷センパイ、自分と買い物いきませんか？」
「え～・・・・・・？」
「露骨に嫌な顔しないでくださいよぉ～」
だって俺こんな怪我じゃ余り外歩くことできないし、何より寒い。
それに行きたいところがあるわけでもなく、何より愛さん以外の女の子とショッピングというのも愛さんを裏切った感じがして嫌だ。
「別に乾さんと外出するのが嫌なわけじゃなくて、単純に色々な意味で外出たくないんだ」

「いいじゃないっすか、リハビリとでも思えば」
簡単に言ってくれる。
「じゃあ聞くけど、どこ行くの？」
「え？　うーん、そっすねぇ」
どうやら乾さんも決めてはいなかったのだろう。
あさっての方向を見ている。
「じ、自分は長谷センパイと買い物がしたいだけっすよ」
と言われても。
どうやって断ったものか少し思案する。
だが思えば今まで一度も彼女のお願いなど聞いたことないし、たまには良いかもしれないと少し思う。
「そこまで言ってくれるなら、一緒に行こうか」
「マジっすか！　やりぃー！」
存外に嬉しかったのだろう、自分の両手を結んで一人でぴょんぴょん跳ねる。
やだ、可愛いじゃない。

その頃、辻堂愛は腰越マキの元へ訪れていた。
恋奈でも良かった用事だったのだが、あっちだと喧嘩から抗争へ発展しかねない。
やたら大が恋奈を庇うため、それは避けることにした。
「で、昨日言ってたアイツってだれだよ」
「朝の挨拶はお早う御座いますだろうが、ダイを見習え」
「・・・・・・オハヨウゴザイマス」
我慢しろ、今ここで腰越を殴り倒したら答えが聞けなくなる。
怒りで燃え上がる心を大へのラブパワーで抑える。
「で、誰なんだよ」
「教えない」
「大概にしとけよこのクソアマ」
即座にブチ切れて問答無用で腰越マキの胸ぐらを掴む。
「あぁ？　やるってのか？」
喧嘩っぱやい二人はそのまま火花を散らし合う。
そしてその二人を止める者がいなければここら一帯は更地となってもおかしくないのだが

「げ、腰越と辻堂・・・・・・」
「「あぁ!?」」
どういうわけか二人の喧嘩は本番へ入る前に誰かの妨害が入るのが常だった。
今回もその例に漏れず、二人のいた沿岸沿いに片瀬恋奈が訪れることになった。
水をさされた二人は凄まじい形相で恋奈を睨みつけるが、恋奈はそれを軽くいなす。
「あんたら、長谷が入院中だってのに前と変わらず元気ね」
ため息を吐く恋奈。
実の所彼女は自分が今回の江乃死魔の問題に関わらせたせいで大が怪我をしたと責任を感じている。
その為、昨日は行けなかったが今日こそはと今からお見舞いの品を買いに行っている途中だった。
しかもばっちり化粧をして服装も大が好みであろうものをチョイスしている。
その気持ちが恋心なのかは本人以外が知る由もない。
「うっせぇ！　ダイが入院したせいでこっちは優秀なシェフがいなくなって腹減ってんだよボケェ！」
普段から大の作ったご飯を冴子に内緒でもらってたマキは彼が入院してからまともな食事をしていない。

相変わらず彼の住居の近くにある道祖神のお供え物で飢えは凌いでいるもの、それでもやはりキュウリ生活は厳しい。
「腰越！　テメェアタシの彼氏を自分のシェフ扱いしてんじゃねぇよボケェ！」
「アンタも大概だと思うけどね。聞いたわよ辻堂。
アンタ昨日面会時間過ぎても帰らなかったから後で長谷が婦長に代わりに怒られたんだってさ」
「ばっかでー、彼氏に迷惑かけてんじゃんお前」
「んだとこのタコ！」
何が何やら。誰かが口を開けばそれが火種となって他二人のボルテージを上げる。
一人で破壊力を増し続ける爆弾のようだ。
「いや、でもちゃんと長谷に謝っときなさいよ。
あそこの婦長はまじで陰険だから長谷も結構嫌な思いしただろうし」
「え」
恋奈の言葉に愛は固まる。
「あの病院ってそんなウザイやついるのか？」
「ええ、まあ長谷なら上手いこと取り入れるかもしれないけど」
「あわわわわ、心配だ。大がそんな嫌な所に一人ぼっちで・・・・・・可哀想に、すぐ行

くからな大！」
「は？　ちょま」
恋奈の静止を振り切って猛ダッシュで走り去る愛。
残された二人はぽかーんとした顔で離れゆく彼女の背中を見る。
「辻堂ってあんなキャラだっけか」
「・・・・・・これはやばいかも」
マキは呆れたようにしているが、恋奈はこれから起こるであろう事態を想像して一人慌てた。

「センパイ、これなんてどうっすか？」
「どんなって、それで外出たら寒いでしょ」
俺達は外出するにあたって着替えることにした。
俺の方はいつも通りのジーンズに分厚いジャケットと無難な選択をした。
だが女の子している乾さんはそんなわけにもいかず、
「女子力ある服とはァー！　機能性よりもオシャレっす！」
と、ファッションショーが始まった。

今来ている服もこのクソ寒い真冬にも関わらず思い切り生足晒していて見ただけでこっちが寒くなる。
「レギンスやタイツでも履いたらいいんじゃないかな？」
「嫌っす、この服にそれは合わないんで」
メンドくせぇ。
何で女の子ってただ買い物行くだけでこんなに気合いれてるの？
愛さんもやっぱりこんなかんじなのだろうかと一瞬考える。
・・・・・そんな愛さんも可愛いなぁ。
「チェストォ！」
「痛い！」
不意に脳天に強烈なチョップを喰らう。
「何すんのさ」
「今は辻堂センパイより自分だけをみてくださいよ！」
こいつニュータイプか。
引くわ。
ヤケにハイテンションなまま再びカーテンを閉めて着替え出す乾さん。
さっきから服を見せては俺の感想を聞いて、再び着替えなおすというループだ。

もう何やらカーテン閉めている間はドラムロールが聞こえてきそうだ。
ふと、扉が開いた。
はて、誰か来たのかと扉を見つめ続けるとオズオズとした感じで顔だけ覗かせてくる。
誰かと思えば、
「愛さん？」
「ビンゴ、約束よりちょっと早いけどいいか？」
「うん。どうぞ」
俺も早く愛さんが来ないかと待ちわびていたのだ。
「ジャーン！　こんなんどうっすか!?」
「あぁ？」
「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
元気よくカーテンを開けた乾さんが凄まじい露出のミニスカを履いて現れた。
乾さんは開けた瞬間は凄い生き生きした顔だったのだが、いつの間にか俺のベッドに腰掛けていた愛さんを視認した瞬間叫んだ。
そして不意に声を止めて。
「幻覚っす」

そして真顔のままカーテンを閉めて布団にくるまった。
「おい、大」
「ん？」
愛さんは凄い困ったような顔をして俺を見る。
「もしかしてお前ってアイツと同室なの？」
「うん。片瀬さんが権力の力でそうしたみたい」
「へぇ・・・・・・」
そう呟いて立ち上がり、乾さんと自分の間にあるカーテンをあっさり開け、そのまま乾さんが入っているであろう布団を掴む。
「なんでテメェがここにいる!?」
「あずも恋奈様にハメられたんですよ！　どちらかというと被害者っす！」
ぐいぐい引っ張って引き剥がそうとする愛さんに負けじと布団にしがみつく乾さん。
「何で江乃死魔のお前が恋奈にハメられることがある!?」
「自分もう江乃死魔関係ないんで！」
「はぁ？　じゃあお前江乃死魔抜けたのか？」
「そうっす！　あずは今は一人の普通の女の子っす！」
器用にもすごい力で引っ張る愛さんに抵抗しきっている乾さん。

傍から見ていると面白いなぁ。
「じゃあなんでここに入院してんだよ」
「それは・・・・・・皆殺しセンパイにやられたからで・・・・・・」
「なに？　じゃあ腰越が言ってた大を骨折させた奴ってテメェか？」
一瞬、愛さんの動きが止まった。
あ、これやばい流れだ。
明らかに愛さんの纏うオーラが変わった。
「あれ、もしかして自分墓穴掘りました？」
亀のように布団から頭だけ出してこっちに質問する。
「うん。掘った墓穴に片足突っ込んでるね」
そう言うと、乾さんが顔を真っ青にして愛さんの方を見上げた。
「オラァ！」
「ひぃっ？」
ズドンとベッドが軋む。
なんて事はない、愛さんが今まで乾さんの入っていた布団に拳を叩き落としたのだ。
だが乾さんは間一髪、布団から緊急脱出して事なきを得る。
「テメェ・・・・・人の大切な彼氏に手を出して無事で済むと思うなよ」

「ややややるってんですか!?　容赦しないっすよ!?」
「いやいや、俺を盾にしないで」
乾さんは布団から脱出するとそのまま俺のベッドの上に飛び乗って速攻俺の背中にしがみついた。
威勢だけは大したもので、ガオー、と愛さんを威嚇する。
だが手足は震えているし涙目だ、とてもじゃないが今の乾さんじゃ愛さんとまともに戦うこともできないだろう。
仕方ないな。
「愛さん、俺と約束してくれたよね。手を出さないって」
「う、それは・・・・・・そうだけど」
そうだ、俺達は昨日約束していた。
俺に怪我を負わせた人にはもう手を出さないと。
「でもやっぱり、大をこんな目にあわせた奴なんて許せねぇよ」
歯を食いしばって乾さんを睨む。
可哀想に乾さんはビクビクと震えている。
「愛さんのその気持ちは嬉しい。けど、いいんだよ。もう解決したことだから」
もともと愛さんには喧嘩して欲しくないし、何より弱っている乾さんを愛さんが叩き

のめすってのは弱いものイジメみたいだ。
それは愛さんも望むところではないだろうし、俺も少し身近になった乾さんが大好きな愛さんに殴られるのは見たくない。
「で、でも。でもぉ・・・・・・」
拳を震わせながら涙目で訴えてくる。
その余りにも彼女らしくない弱々しい態度に体が勝手に動いた。
無意識に立ち上がってそのまま愛さんを抱きしめる。
「心配してくれたのに裏切ってごめんね」
既に昨日も謝り通したことだが、今日ももう一度謝る。
同時にあやす様に空いた手で愛さんの頭を撫でる。
愛さんもそれに気をよくしてくれたのか、甘えるような顔で俺を見つめた。
愛さんの純粋さを表す瞳に吸い込まれそうになる。
「愛さん・・・・・・」
「大・・・・・・」
「はいはーい、そういうのは他所でやってくださーい」
いかんいかん、また無意識に愛さんと二人だけの空間を作ったようだ。
見れば乾さんは凄まじく忌々しそうな顔をしてこちらを見ている。

そりゃ他人のバカップル振りなど傍から見ているだけではウザイだけである。
「邪魔すんじゃねぇ、潰すぞ」
「うぐ、ただのバカップルならまだしも最強のヤンキーが片割れだと始末に終えないっす」
何か訴えかけるように乾さんはこちらを見た。
まあ考えなくても何を言いたいのかは理解できるけど。
「愛さん、今のは俺たちが悪いよ」
「そりゃそうだけど、コイツに言われると何かムカつくんだよ」
「ふざけんなー！　自分が何したっていうんすか!?
むしろアンタらのバカ空間に巻き込まれた被害者ですよ!?」
どの口がほざく。
「相変わらず馬鹿やってるわね～」
「邪魔するぞ」
二人が取っ組み合いの喧嘩を始めたのでそれを一歩引いたところから見ていたら思わぬ客が現れた。
「あれ、リョウさんもう怪我大丈夫なんですか？」
片瀬さんは前回特に喧嘩には参加しなかったため無傷だが一緒に来たリョウさんは

乾さんと死闘を繰り広げた。
あの時のことを思い出せばとても無傷で済むはずはないのだけど。
「お前が庇ってくれたからな、大きな怪我はない。
一応最後にアイツに殴られた所は痣にはなっているが」
そう言って俺の頭を撫でてくる。
心なしか今日のリョウさんは上機嫌だ。
「本来ならば昨日のうちに礼を言っておくべきだったな。
長谷大、お前のおかげで助かった」
「いや、そんな」
改めて感謝されるとこっちも困る。
「だって、リョウさんは仲間じゃないですか。ね、片瀬さん」
「ん、まぁね」
はっきりと仲間だとリョウさんに言うのは恥ずかしいらしく、片瀬さんは歯切れ悪くそっぽむく。
だがリョウさんもその言葉に少々口を閉ざした。
しかしそれも僅かな間で、一瞬難しい顔をしたあとふと表情を和らげた。
そして再び俺の頭を優しく撫でる。

「お前には不良など向いていないと言った筈だがな」
「そうですね、俺は不良にはなれないと思います」
　互いに笑顔のまま笑い合う。
　リョウさんの表情はマスクのせいで伺い知れないけれど、それでも目や雰囲気できっと笑ってるはずだ。
「不良の仲間にはなれなくても、友人としての仲間ならありですよね」
「そうだな」
　伝えたいことは既に彼女に届いていたようだ。
　まるで小さい頃から一緒に育ったかのように互いの意思が通じ合える。
「不思議ですね。リョウさんとはずっと前から会ってた気がしますよ」
「なにぃっ？」
　ここにきてリョウさん、意外にもオーバーリアクション。
「そそそんなことはないぞ、お前の勘違いだ直ちに考えを改めろ」
　通じ合えたと思ったのにまさかの拒絶。
　一瞬自分とリョウさんは相性がいいのかもと期待した分余計にショックがでかかった。
「あぁいや、別にお前の事は嫌いではなくてだな！」

落ち込んだ俺を何故かフォローしようとするリョウさん。
やっぱり優しい人じゃないか、現金なもので彼女の人柄に触れてすぐさま機嫌が治る。
「あの、私もいいかしら」
横から居心地が悪そうに片瀬さんが軽く挙手をして会話に入ってきた。
「それで聞くけど、長谷。怪我の調子はどうなの」
「うん、肋骨が4本へし折れてるけど折れた骨が内臓に刺さることは無かったみたい。おかげで快適な健康ライフだよ」
毎日味気ない病院食を食べさせられて、娯楽ないから早寝早起きせざるを得ない生活なんてしてたら体は健康まっしぐら。
精神面も愛さんにさえ会えれば異常をきたすこともないし。
「ふ～ん。心配して損した」
「心配してくれたんだ」
揚げ足をとった瞬間片瀬さんが少し頬を赤くして目をそらした。
否定はしないんだ。
「ほら、お土産。とっておきなさいよ」
「ありがとう」

なんだろうと受け取れば、それはメロンだった。
というかこれ前に乾さんが買ってきたのと同じやつだ。
シールにも見覚えがある。
「美味しそうだねこれ。今から切るから一緒に食べようよ」
そう言って立ち上がると、一瞬ふらつく。
「おっと」
「あ、すいませんリョウさん」
「気にするな。というより病人が無理するんじゃない、俺が切ろう」
リョウさんは俺を優しくベッドへ戻した後、洗面台で包丁を握って流暢にメロンを人数分切り始める。
あの後ろ姿、どっかで見たことがあるんだよな。
「あ〜！　それ昨日自分があげたときは断ったメロンじゃないですか!?」
乾さんが突然会話に割り込んできた。
愛さんはどうしたのかと確認すれば、乾さんのベッドで何やら写真を眺めていた。
「愛さんに何したの？」
「ちょっと賄賂を送って見逃してもらいました。
それよりどういう事っすか!?」

どういうこととはメロンを食べるという事の話だろうか。
だったら単純な事。
「だって片瀬さんの贈り物だもん、食べたいじゃん」
「自分のは食べてくれなかったじゃないですか！」
「いや、だって乾さんの場合買った経緯がアレだったし・・・・・・」
そう言うと乾さんは悔しそうに口を閉ざす。
「どうせお礼参りに来た馬鹿からぶんどった金で買ったとかそう言う所でしょ」
「ん、まぁ。そうだね」
俺が肯定すると片瀬さんは大きくため息を吐く。
そしてジロっと乾さんを睨んだ。
「江乃死魔抜けてもまだそういう事やめてないのね」
明らかに失望感を含んだ声質だった。
それを向けられた乾さんは少し申し訳なさそうにした後、思いついたように言い返す。
「自分もう江乃死魔関係ないんですから文句ないでしょう?」
「そうね、でも今の反応を見たところなんとなく何か考え方が変わってきたのかしら?」
試すように言う。

乾さんはそれには言い返す言葉がないらしく悔しそうにうつむいた。
「金絡みで汚いことをすれば失うものは他の比較じゃない」
憮然として言い放つ。
「信用、尊厳、権威なんて全て形だけのハリボテに変わるしまるで良い事がない。
得るものといえばそうね・・・・・・恨みくらいかしら?」
こと金に関しては大富豪である片瀬さんの言葉が重い。
実際に金を持つものだからこそ説得力がある。
「梓の贈り物だってそう。長谷がそんな汚い金で買ったものを送られて本気で喜ぶと思ったの?
実際にそれを長谷に上げてアンタは長谷の信用をまた失ったりしなかった?」
ひと呼吸空けて再び口を開く。
「そんな汚い物と私が送った物を同列にするな、不愉快よ」
「・・・・・・・片瀬さん」
言い過ぎだと止めようとするが、乾さんの表情を見て踏みとどまる。
今までの乾さんだったらここで開き直っただろう。
だが何故か、彼女は今回に限って口を開かずただ黙って片瀬さんの目を見ていた。
「わかってますよ・・・・・・・」

不意に乾さんが口を開く。
「わかってますよ！　反省してますよ！」
しかしここにきて打たれ弱い乾さんは切れた。
顔を赤くして片瀬さんに詰め寄る。
「そうですね、今まで得た金は全部恋奈様に没収。
残ったのは今まで潰したやつの恨みだけ。身にしみましたよ！
だからどうしろってんですか!?」
口を開かず黙って乾さんを睨む片瀬さん。
しかしその目は俺には・・・・・とても他人を見ているものには見えない。
「これだけ痛い目みて、信用も失って、それを代償に得た金もなくなって
なのにどうしてあずはまだこんな泣きたい気持ちにならなきゃいけないんですか!?」
泣きたい気持ち。
その言葉に俺は引っかかった。
「その気持ちは、失ったものに対する後悔じゃないのかな」
「何ですかそれ、そんなのに後悔なんてあるわけないじゃないですか」
「そうかな。俺が思うに君が失ったのは人にとって何より掛け替えのないものの筈だけど」

信頼、それを失うということは人と人との繋がりを断つ事だ。
「仲間を失ったことに今の君は後悔してるんじゃないのかと俺は思う」
「何をいってるんですか、あずは一人でなんだって出来るんですよ。
足ばかり引っ張る仲間なんて初めからいらなかった！」
それがそもそもおかしいんだ。
「そこまでだ、余り大きな声をだすと外に聞こえるぞ」
リョウさんが片瀬さんと乾さんを仲裁する。
だが乾さんは苛立つようにリョウさんを睨む。
「総災天センパイだって最初は乗り気じゃなかったくせに今じゃ江乃死魔の仲間気取りですか？
落ちたもんですね、今じゃ辻堂センパイや皆殺しセンパイに負け越し、終いにはあずにすら敗れる始末。悔しくないんすか？」
露骨な挑発をする。
だがリョウさんは少し目を閉じる。
「悔しくても俺は守るべき部下がいる身だ、感情に任せた真似はできん。
だから江乃死魔の与するし、危険を顧みずお前達に喧嘩を売らない」
完全に割り切っている。それが彼女の答えなのだ。

大切な仲間を無闇に傷つけさせないために江乃死魔に下った。
一時の屈辱から逃れるために仲間を見捨てる真似は絶対にしない。
余りにも合理的で、人情に溢れた考えだ。
「そんな足手纏いなんて本当に味方なんて言えるんですか？
どう見ても総災天センパイは仲間のせいで自分のしたい事を縛られてるだけじゃないですか」
「お前は何も俺の事を知らないのに知ったような事を言う」
不意にリョウさんの殺気が増す。
だがそれも一瞬の事だ。
その雰囲気は僅かな間で消え去る。
「俺にとってしたい事は部下を守りながら湘南の頂点を取ることだ。
そして一度はその目的も達成した」
故に今の現状には後悔もないと付け足す。
だがその答えに乾さんは納得がいかないのか、歯噛みする。
「お前と俺とでは価値観が余りにも違う。話すだけ無駄だ」
ばっさりと切り捨て、乾さんを除く全員に小皿に取り分けたメロンを配る。
だが何故乾さんにだけ配らないのか気にしていると、リョウさんが冷蔵庫を空けて先

日乾さんが買ったメロンを出し、それを彼女に突きつけた。
「わかるか、これはお前が処分すべきものだ。
お前がしたいようにして手に入れたものだ。
自分で選んだものを他人に後始末させようとするな。責任を持ってお前が片付けろ」
つまり、自分の罪に他人まで巻き込むなということだろう。
彼女が望んで選択した結果、それがどんな結末を招こうとも他人を理由にするな。
その選択を選んだのならその代償も受け入れろと、リョウさんは言っている。
「もう一度言う。これはお前が処分しろ。
お前のして来た事は俺達にとって道に外れた行為だ。
その事に理解を求めようとするな、後始末に巻き込むな。迷惑でしかない」
乾さんの分のメロンを押し付ける。
そしてリョウさんの気迫に飲まれた乾さんは怯えながらもそれを受けとった。
確かに喧嘩の実力では大幅に乾さんがリョウさんを上回っている。
だがリョウさんの言葉には片瀬さんに次ぐカリスマ性がある。
彼女の言葉に誰も反論はできない。
乾さんは返す言葉もなく、ただただ肩を震わせる。
「なんだよ・・・・・・ワケわかんねぇよ」

そう呟いて一人病室から飛び出していった。

病室を飛び出した乾梓は混乱していた。
はっきり言えば彼女にも理解していたのだ。
汚い行為を繰り返してきた自分にはもう仲間などいないと。
そしてこうも思っていた。
仲間など自分には不要だと。
何でも器用に立ち回れる自分には足を引っ張るだけの味方など必要ない。
だったら全てを失った今、完全にしがらみから解放されて気分がよかったハズなのだ。
なのにどうして、どうしてここまで胸が痛いのか。
病院から飛び出して、近場の公園へ走る。
そしてそこのゴミ捨て場に持っていたメロンを皿ごと投げ捨てた。
長谷大のために買ってきたメロンだ。
だというのにその気持ちは伝わらず、過程にあった悪意だけが伝わった。

わかっていた。当然だ。
あの人のいい長谷大にとってそんな金で買ったものに価値はない。受け取るはずがない。
だがそれは彼だからだ。
世の中の人間なんて即物的な奴らばかりだ。
欲しい物がタダで手に入るなら平気で媚びへつらう。
欲しいものを買うために自分のように悪事に手を染める人種だって沢山いる。
そんな人間なんて自分を含めて信用なんてできるはずがない。
奴らは保身のために平気で仲間を裏切って、それでいて普通のことも手を抜くような足手纏いばかりだ。
だったら自分の答えの何がいけなかったのか。
仲間を足手纏いと切って捨てて、必要としない自分の何がいけないのか。
考えても答えは出ない。
ただ一つ、わかっている事はある。
誤った答えを出し続けて、好きなことばかりをして、嫌なことから逃げ続けていた自分だ、
だからきっと今出している自分の答えも誤りなのだ。

最早自分すら信じられない。
途方に暮れて一人歩き始める。
「お久しぶりです、先輩」
聞き覚えのある声に振り返る。
「ナハ、久しぶり」
「お元気そうでは・・・・・・なさそうですね」
乾梓の背後には巨漢の女性、我那覇葉が立っていた。
その存在感は凄まじく、行き交う人が通りすがるたびに彼女を振り返るほどだ。
だがその女性に敬語を使わせた乾梓は乗り気じゃないとばかりに適当にあしらう。
「みりゃわかるっしょ。見てよこれ。
左腕はダッセェアクセつけさせられて、腹なんて皆殺しセンパイに蹴られて真っ黒。
はは、腹黒いのは元からか」
自嘲気味に笑う。
だが目は一切感情が篭っていない。
「先輩。今日はお話があってきました」
「手早く済ませて」
「はい」

場所を移そうかと思ったがそれすら面倒くさい。
「暴走王国総長、乾梓先輩に聞きます。
今後どうなされるおつもりでしょうか？」
それはつまり、今後の湘南をどうするかということだろう。
「既に各地の名うての喧嘩屋は３０人、命令通りに集めています。
また、これから江乃死魔を壊滅させるのであれば今回の件で江乃死魔を離れた与太者共を吸収すれば数は揃えられるでしょう」
既には我那覇は数ヶ月前に梓に指示されていた命令を忠実にこなした後だった。
その手回しの良さに梓は困った。
「もういいよ」
「もういいとは？」
理解の悪い我那覇に梓は苛立つ。
「その喧嘩屋共は用無しってこと。
江乃死魔ももうどうでもいい、暴走王国はナハの好きにしな」
梓の投げやりな指示に葉は肯定の言葉を返さない。
「それは無理です。
奴らも何もせずただいきなり帰れと命令されて大人しく引き下がるような人種では

ありません」
きっぱりと言い放った。
例え尊敬する先輩であろうと真実は伝えなければならない。
「だったらナハがそいつら蹴散らして無理やり追い返せばいいじゃない」
「我一人では無理です。
無論一人一人ならば容易な事ですが、組まれると流石に分が悪い」
使えない。
内心毒づく。
「どうして、どいつもこいつも・・・・・・」
吐き気がする。
どいつもこいつも綺麗事ばかり。
自分の事すらまともにこなせない癖に他人のすることには文句ばかり垂れる。
「いいよ。だったらあずが全員潰して追い返せばいいんだろ?」
「先輩を侮るわけでは決してありませんが、五体満足ではない今の先輩では少々危険では?」
「余裕だよ、ナハが今言ったように各個に潰してしばらく喧嘩できない体にすればいい話でしょ。

そういう汚い手段はあずの得意分野だし」
我那覇は何も言えない。
先輩がイエスといえばどんなことであろうと自分も肯定する。
同じように今回も先輩がこれまで自分が苦労して揃えた戦力を潰すのならそれも仕方がない。
「我もお手伝いします」
元々我那覇自身も今の暴走王国は好きではない。
あまりにも実直すぎるほどの彼女だ。
カツアゲなどする気もないし、弱い者を一方的に叩きのめす事も興味ない。
単純に先輩がそうしろというから仕方なくしていただけだ。
「いいよ、もうあずは誰も頼らないから。
喧嘩屋共を呼び出ししてくれるだけでいいよ」
「・・・・・・わかりました」
自分の助力すら拒否された我那覇は釈然としないまま引き下がる。
だが今の彼女からは嫌な予感しかしなかった。
まるで何もかもに嫌気がさして、破滅願望を顕にしているようにしか見えなかったからだ。

その日の夜。
梓は今後の方針を考えていた。
自分は江乃死魔を抜けて完全に孤立している。
故にお礼参りに来る輩が後を絶たず、今日も我那覇と別れたあとに１０人単位で返り討ちにしたところだ。
無論このような雑魚どもなら梓の敵になる訳もなく、何の驚異もない。
だが暴走王国の喧嘩屋どもはそうはいかないだろう。
万全な自分ならば２０人まとめてかかってきても蹴散らせる自信はある。
流石に３０人全員となると無理だが。
しかし今は片腕が使えない上に体が重い。
前に腰越マキが言った通り速度は出ないし、関節技もまともに使えない。
こんな様では５人同時でも手こずるだろう。
そして喧嘩には予想外な展開が当たり前のように起こるものだ。

最悪の展開を考えないといけない。
「何か難しい顔してるね」
「別に、そんなことないっすよ」
顔に出ていたらしい。
カーテンを閉めておくべきだったと後悔する。
「乾さん」
「なんですか、今考え事をしているんですけど」
考えを中断されるのは不愉快なはずなのに、何故か人の良さそうな彼には不思議とそんな気持ちにならなかった。
むしろ行き詰まった思考を優しくほぐしてくれそうな、そんな期待すら抱く。
「ちょっとこっち来てくれるかな?」
ちょいちょいと手招きする彼に応じて足を動かす。
そしてスリッパを脱いで彼のベッドに腰掛ける。
何の用事だろうと首をかしげていると、大はゆっくりと梓の背後に回って肩に手をかけた。
そして労わるように肩を揉む。
「マッサージだなんて、どういうつもりですか?」

「ん～、肩がこってそうだなそうだなと思って」
曖昧な答えで濁しながら大は続けて梓の肩を揉み続ける。
「相変わらずテクニシャンっすね。凄く気持ちいいです」
「テクニシャンって・・・・・ちょっといかがわしくない？」
「そういうつもりで言ったわけじゃないですよ。長谷センパイはスケベっすね」
なんていつも通りの会話を楽しみながら梓は再び思考を始める。
だが今、背後にいる彼の存在を意識してしまってまともに考えが纏まらない。
それでも考えようとするもののやはりダメだ。
諦めた梓は別の事を考える事にする。
自分は何に今日はムキになったのか。
少なくとも自分は割り切った考え方をしていたはず。
なのに何故あそこまで感情的になってしまったのか。
思い出せば、その引っかかったフレーズは『仲間』だった。
「ねぇ、長谷センパイ」
「うん？」
誰よりもお人好しで。
友達も沢山いて、それでいて誰からも嫌われない彼ならば仲間なんて捨てるほどいる

だろう。
　そんな彼にこそ質問したいことがあった。
「長谷センパイは仲間ってなんだと思います？」
　彼はこの問いに何と答えるのだろうか。
　真面目に丁寧に、既に聞き飽きた味方の定義を教えてくれるかもしれない
　答えるのが面倒だから曖昧な返答かもしれない。
　どんな答えになるか、それが確認したかった。
　そしてその質問に長谷大は僅かに考えたあと答えを出した。
「体を張れる人が仲間かな」
　よくわからない。
「ほら、俺がリョウさんを庇った時みたく。
　あんなふうに身代わりになりたいと思える人こそ仲間じゃないのかな？」
　それはつまり
「それって、自分が対象相手の事を一方的に仲間と思ってるだけで相手は自分を仲間と思っていないこともあるのでは？」
　そう。つまり完全な一方通行の感情となってしまう。
　しかしその質問に大は笑って答える。

「そうかもね。でも、俺がイメージする仲間ってのはそういうものだよ。
それに、互いが共にそう思い合っていればそれは素敵な事じゃない？」
綺麗事だ。
だが、彼は現に良子の身代わりとなって現在入院するハメになっている。
つまり彼は良子の事を仲間だと思っている。
そして良子も彼が倒れたあと豹変してダメージ関係なしに梓に襲いかかった。
互いが互いを仲間だと思いあった結果あのような展開になったのだ。
「あずにはそんな人いませんよ」
自分が誰かの為に身代わりになるなんて考えられないし、自分になにかあったとしてそれを庇ってくれる人もいないだろう。
そういう生き方をしてきたのだ。
やりたいことをして、嫌なことから逃げ続けた結果性格は歪み、人間関係は破綻した。
ならば自分には長谷大の言う仲間などいないことになる。
「そんな事はないよ。
片瀬さんはマキさんに喧嘩を売ってまで乾さんを守ろうとしたじゃない」
「あれは恋奈様が自らあずをシメたいだけで」
「そんな事で片瀬さんは危険な真似を犯せる立場じゃない。

彼女だって江乃死魔のリーダーって立場があるんだ」
恋奈を仲間と思う大は乾梓の曲がった解釈を訂正する。
「乾さんを守るために江乃死魔を潰す覚悟があったからこそ、あそこで片瀬さんはマキさんに喧嘩を売った。
それだけは乾さんに誤解して欲しくない」
どこまでもお人好しな長谷大はそうやっていつも他人の行為を好意的に解釈する。
だが、その恋奈の真意に気づいた梓は何故か、先程まで痛かったはずの胸が今は痛くないことに気づく。
何故か、答えが少しだが見えそうだった。
「長谷センパイは自分の事を仲間だと思ってくれますか?」
聞かずにはいられなかった。
勿論否定されるだろう。
それだけの嫌われる事をした自覚がある。
だがそれでも知りたかった。
長谷大は直ぐには答えず、僅かに考える。
だが結局良い言葉が見つからなかったのか
「その時にならないと何とも言えないよ」

そう言って曖昧な答えを返す大。
しかし今回ばかりは梓でも気づくことができた。
彼が曖昧な事を言うのは照れて言いたいことを言えない時だ。
つまり、彼の真意はきっと――――――
「長谷センパイ・・・・・・お人好しすぎますよ」
「そんな事はないよ」
まだ時刻は21時を回ったばかり。
胸のつっかえが殆ど取れた梓は彼のマッサージを喜んで受け入れ続けた。
身体以上に、心がほぐされた、
まだ曖昧な感じでしかないけれど、自分の進むべき道が見えてきた気がする夜だった。

8話：大のためなら

「暇だなぁ」

大きく背伸びをする。

今日は本当にすることがない。

昨夜から乾さんは何か張り切っていて、朝に携帯電話に何か連絡が来たかと思ったら直ぐに出て行った。

そして愛さんは昨日乾さんから写真を貰ってからどうも暗くなっていた。

軽く話はしたもののどこか上の空で、結局今日来るかは聞いていないし、俺の方から尋ねるのも催促しているみたいで躊躇う。

もしかすれば他にも誰かが来るのかもしれないが、さてどうしたものか。

いや、待てよ。

そもそもなぜ俺がここで一日を過ごす必要がある。

別段誰とも約束をしていないのならむしろ俺はここに縛られる理由もない。

いつの間にか布団の虫と化していた自分に驚いた。

・・・・・出かけてみるかな。

今日はあまり怪我の痛みもなくて調子が良い。
空も快晴で気温も暖かい。
絶好の散歩日よりだ。
俺は今日一日、自分の好きなように過ごすことを決めた。

「あらあら、自分を相手するにはちょっと関節が外れ過ぎてるんじゃないすかねぇ?」
「あ・・・・・・うぁ・・・・・・・」
乾梓は人気のない裏路地で一人の人間の関節を外しまくっていた。
見れば相手している喧嘩屋は両足の股関節が既に外されていて倒れ込んでいる。
それだけならまだしも両腕も肘と肩両方まで見たところ関節が繋がっていない。
明らかにやりすぎている。
「女だからって油断してました? それとも怪我人だから手加減してました?」
既に唖然として身動き取れない相手の腹に足を置く。
そして急所の位置に思い切り力を入れた
「あ、ぎゃあああああああ!」
「良い声っすねぇ。デカいのは威勢だけかと思ったら叫び声も大きいじゃないですか」

相手がどれだけ悶絶しようが一切足の力を緩めない。
それどころかどれだけ力をこめれば相手が気絶するかを試している節すらある。
「許して欲しいですよねぇ？　じゃあずが条件をあげます」
そういって僅かに足から力を抜く。
そして底意地悪く微笑みながら言う。
「二度と江ノ島の土を踏むな。それが守れるなら見逃してやるよ」
明らかに見下した声質だ。
だが満身創痍の相手には願ってもいない提案だった。
「わかった！　二度アンタの前には現れねぇ！　だから――――ぐあああ!?」
言葉の途中で再び急所に蹴りを入れられて悶え苦しむ。
梓はその喧嘩屋をゴミを見るような目で吐き捨てた。
「ちゃんと聞いてなかったですか？　二度と『江ノ島』の土を踏むなっていったんですよ？」
「分かりましたっ、二度とここには来ません！　ですから！」
「よろしい、それじゃあご褒美に外した骨を繋げてあげましょう」
「は？　うげ！」
梓の要求を飲んだ喧嘩屋は即座に外された骨を矢継ぎ早にはめられてその痛みに失

神した。
梓が故意に外した関節を特別痛くするようにしてつなげたのだ。
その余りにも悲惨な光景を少し離れた所で見る人物がいた。
「これで5人目です。残り、25人。どうなされますか?」
我那覇葉である。
彼女は未だ高ぶっている梓に質問をする。
「う~ん。まだあずが暴走王国メンバー潰しまわってる噂が出回らないうちにもっと減らしたい所かな」
「承知です。では次の者を引き連れてきます」
武勇伝を持つ喧嘩屋を既に午前中で5人ほど潰した梓はまだ足りないと次を催促する。
我那覇も今日の梓はやたら気がノッていてまるで負ける姿が想像することできないでいた。
もし疲労を感じていたり、途中に一度でも喧嘩屋に反撃を貰っていたら梓を止めるつもりでいた。
だがこの調子ならば更に5人ほど片付けることもできそうだ。
彼女の能力を信じて彼女の要求を聞く。

我那覇は再び次のターゲットに連絡を送ろうと携帯電話を取り出す。
「あ～、その。ナハ」
「なんでしょう、先輩」
珍しく歯切れが悪い感じで我那覇を呼び止める。
我那覇もどうしたのかと彼女に振り向く。
「その、さんきゅっす」
若干のテレを含ませながら礼を言った梓。
それに我那覇は僅かな間愕然とする。
「その、先輩。我は・・・・・・」
我那覇も梓の普段との明らかな変わりように戸惑った。
明らかに昨日別れた時と性格が違う。
いや、喧嘩相手に対してのやりすぎなまでのサディストさはむしろ以前以上だったが。
「そっちまで照れないでよ、恥ずかしいっしょ」
そういってシッシと手を払って我那覇にさっさとするように指示する。
我那覇も未だ思考が纏まらないものの尊敬する先輩の命令に従い路地裏を出た。
それを確認した梓は一息つくように地べたに座った。

二日目からは残りの奴らも今日の事を察知して部下を連れたり徒党組んだりするだろうし、早めに全員潰さないといけない。
そう考えて今日中に我那覇にはあと5人は呼んでもらうつもりだ。
最初は自分でも体力的に無理ではないかと思ったが、実際に喧嘩を始めて見れば尋常じゃなく気分や身体がノッていた。
自分の体がまるで重くなく、集中力も冴え渡っている。
おかげで未だ無傷だ。
なぜここまで調子がいいのかと考える。
そして即座に答えは出た。
昨日の大のマッサージだ。
あれの御蔭かやたら体の調子が良い。
だが、はて。だったらなぜ気分までここまで良いのだろう。
そりゃ体の調子がいいと気分も良いだろうが、だからといって今程機嫌がいい事も今までなかった。
まるでパラダイムシフトを起こしたようだ。
その事に答えは見つからず、首をひねる。
だから取り敢えず

「長谷センパイのせいっすね」
身近な自分の癒しを理由付ける事にした。
そしてそれが正しい答えであることを彼女は心の奥底では気付いていた。
昨日の夜から自分の心は火照りっぱなしだ。
この感情がなんなのかはまだ把握できないが、少なくとも嫌な気持ちではない。
むしろ最高の気分だ。
「先輩、あと15分程で来るそうです」
「ご苦労さん」
自分のことや長谷大の事を考えていると、我那覇が既に連絡を終えたようで帰ってきた。
「その、先輩。先ほどの事ですが・・・・・・」
「いや、掘り起こさないでよ恥ずかしいな」
「しかし」
「やめなさいって」
今日は何故か自分を慕う後輩がとても可愛く見える。
見た目はアレだけど、それでも不思議と我那覇を可愛がりたくなった。
だから礼をいったのだが。

どうやら律儀な我那覇は先ほどの礼に対しての説明を求めるようで梓は困り果てた。
仲間の意味がわかってきた気がする。

同時刻

乾梓がいる路地裏から近いところに二人の姿があった。
愛と冴子である。
二人は、いや、愛は特に困ったように互いに江ノ島の喫茶店で話し合っていた。
「で、もう一度いってくれるかしら。先生よく聞こえなかったの」
心なしか冴子の方は言葉に若干刺がある。
その刺は鋭く愛にダメージを与えた。
「だから、大の写真とか持ってたら分けてくれないかなって・・・・・・」
言葉尻がどんどん窄んでいっている。
だが冴子は今度こそちゃんと聞こえたようで、疑問気な顔をした。
「何で、と聞くのはヤボのようね。まあ彼氏の昔の姿とか興味あるでしょうし」
「はい、そういう事です」
なぜ今更になって写真が欲しくなったのか。

答えは単純なもので、昨日梓に渡された写真が原因である。
梓を見逃す代わりに渡された写真には入院中の大が写っていた。
特にどうということはない、パジャマでスヤスヤと寝ているだけの画像である。
だが愛にとってはそれは凄まじい価値あるもので、その賄賂を受け取ってしまった。
この写真には愛の悩みであったあるものを解消するアイテムとなったのだ。
まぁ、悩みとは大に見てもらっていないと自慰行為で感じることができないというものだが。
写真を眺めながらしてみたら問題が解決しまくりました、マル。
そんな事を冴子にいう訳もいかず、理由だけは聞いて欲しくなかった。
というより、別にソッチの目的だけでなく普通に彼氏の写真が欲しいというのもある。
大のお姉さん兼幼馴染であるよい子や冴子の知る大を知りたい。
しかも最近になってはマキですら何やら昔の大を知っている素振りすら見せ始めていた。
まさか腰越マキに大について知っている事の量で絶対に負けたくない。
そのため今こうして将来義理の姉になうであろう人物に頭を下げている。
「あるわよ、写真。私の部屋にアルバムとしてしまっているわ」

疲れた時に即座に開いて彼女の癒しになっている一冊である。
「けれどそれを渡して私に何かメリットはあるのかしら」
「・・・・・・思いつかない」
でしょうねとため息をつく。
「まあ欲しいのなら分けてあげてもいいわ、どうせパソコンの方にもスキャンしてるし」
「まじっすか！　っしゃす！」
「そんな不良みたいな感謝の仕方はおやめなさい」
「へ、お高くとまりやがって」
途中から互いに何を言っているのかわからなくなったが、とりあえずは交渉成功だ。
愛はほっとして次に喜びに震える。
しかしそんな愛に冴子は教師の顔で一言。
「辻堂さん、前から言っておきたかったんだけど。
あなたやヒロはまだ高校生よ。あまり不純な行為をするのは関心しないわ」
会話の脈絡もない。
いきなりの説教に驚く。
「アタシは大と不純な行為をしているつもりはない」
「辻堂さんがどう思うかはここでは二の次なの。

周りがあなた達を不純異性行為していると言えばそれは事実になってしまう」
事実だ。
本人たちが結婚を前提に付き合って、そしてそういった性行為をしていたとしても周りから見ればただカップルが性行為しているだけである。
それは揺るぎない事実だし、言い訳のしようもない。
そして高校とは昔からそういう行為には重大な罰則が設けられるのが常だ。
稲村学園もやはり例外ではない。
「もし辻堂さんが高校生活中に妊娠でもしたらどうするの？」
「アタシは、学校やめてでも産む」
「姉からすればそれだけヒロとその子を思っていてくれての嬉しい答えかもしれないけど、先生からすれば最悪の答えだわ」
愛も何がいけないかは分かる。
「あなたが辞めてもヒロの罪が消えるワケじゃない。
だから異性行為はするなとは言わないけれど、そこのところは常に注意しておきなさい」
そして、何かあっても私はヒロの味方だけどと付け足す。
「・・・・・・わかったよ」

冴子の言っている事は紛れもなく正しい。
さらに言えばその言っている事は愛や大を想っての忠告だ。
これに反発することなどできるはずもなく、愛は素直に頷いた。
「良い子ね、それじゃあウチいきましょうか」
つまりは写真を分けてくれるということだろう。
待ってましたと愛が立ち上がった瞬間、彼女のポケットから大の写真が落ちる。
それを冴子は目ざとく見つけて拾った。
「これは」
そして固まる。
「・・・・・・見たところ今入院している大の写真ね。
これ、誰が撮ったのか聞いていいかしら?」
声自体はとても透き通っていて冷静だが、何故か彼女の雰囲気は愛の母親を彷彿とさせるものだった。
「大と相部屋になってる奴」
「そう、ちょっと用事思い出したので写真はまた今度ね」
「え、ちょっと」
何が彼女の琴線に触れたのかわからないが、写真を握り締めたまま凄まじい速度で何

処かへ走っていった。
ん？　握ったまま？
「うわあああああ！　私の大がああああああ！」
あの様子じゃ写真はぐしゃぐしゃだろう。
お気に入りの一枚を破壊されて泣きそうになる。
ただ、喫茶店の代金は全額置かれている。
つまりここは彼女のおごりなのか。
愛は複雑な感情のまま結局ワリカンで支払いを済ませて喫茶店を出た。
余ったお釣りは今度返すつもりである。
さて、予定もなくなったし大に会いに病院行こうかと江ノ島から出ようと思ったとき、不意にとある方向に気になる気配を感じた。

腰越マキは江乃死魔の拠点の上にある橋で黄昏ていた。
元々そんな大人しくしている性分ではないが、それでも黄昏ていたい気分だったのだ。
「・・・・・・・はぁ」

これで本日何度目のため息だろう。
少なくとも２０は超えている。
マキは右手に一枚の写真を持って佇んでいた。
その写真には子供の頃の自分と他にも歳の近い３人の少年少女が写っている。
以前実家に仕方なく戻った時に祖母に渡された写真である。
あの頃の弱くて奥手な自分は写真の端で居心地悪そうに視線を逸らしている。
しかしそんなのは自分だけで、他３人はそれぞれ笑顔だ。
写っている子供は間違いなく冴子、良子、そして大だ。
冴子はセンターに立って満面の笑みで大を抱きかかえながらピースをしている。
良子はその隣で控えめに立っているだけだ。
大は大で多少苦しそうにはしているもののやはり姉同様笑顔。
自分だけが笑っていない。
その写真を眺めてため息を吐く。
あの頃の自分がどんなだったかなんてまるで覚えていない。
けれど、未だおぼろげだが思い出してきている。
子供の頃の、綺麗な心でかわした綺麗な約束すら今はもう思い出した。
だが、どうやら大はそれを完全に忘れてしまっているようで。

約束を果たすことはできなさそうだ。
いや、例え彼がその約束を思い出した所で今大が付き合っているのは自分ではなく辻堂愛だ。
ならばもう彼とこの約束を果たすことは永遠にないのかもしれない。
心に、冬の風より冷たい風が通り抜ける。
「何やってんだお前」
海を眺めていると不意に背後から声がかかった。
誰かと振り向けば複雑な顔をした辻堂愛だ。
「何もしてねぇよ。みりゃわかんだろ」
今は誰とも話したい気分じゃない。
直ぐに愛から視線を外して海を見る。
「卒業前のアンニュイな気分に浸ってんのか」
無視する。
だが愛も無視されたまま引き下がる性格ではない。
愛はマキに並ぶように立った。
マキは愛に気づかれないように写真をポケットにしまう。
幸い愛はそれに気づきはしなかったようだ。

「そんな性格してねぇよ。っていうかこっちは腹減ってイライラしてんだ、さっさと失せろ」

「こっちだって最近まともに大と二人になれなくて苛々してんだよ、苛立ってるのはテメェだけと思うな」

その愛の一言に僅かな苛立ちを感じた。

「ひろしひろしって、お前はどれだけダイに依存してんだよ」

元々言うつもりは無かった言葉だ。

言ったマキ自身後悔した。

依存しているのは自分だって同じなのだ。

いや、自分の場合依存というよりは執着か。

「ああ、アタシは大に依存してるよ。だがそれがどうした、アタシ達は付き合っているんだ。

ならそれは普通の事じゃないのか？」

その通りだ。

愛も大も互いに依存しあっている。

けれどけしてどちらも付き合う以前より不抜けていない。

愛は喧嘩最強の肩書きを背負いながらも大の影響で家事や勉学にも成長が見られる

ようになった。
大は大で以前以上に精神面が成熟し、人間性が明らかに大きくなっている。
それを間近で見ているマキが知らぬわけもない。
だが、だからこそ苛立つ。
しかしそれは紛れもない八つ当たりだ。お気に入りの大、将来の約束をしたあの少年。
どちらも同じ存在で、その存在は既に愛のものとなっている。
既に手を伸ばしてもとうに間に合わなくなっていて。
後悔ばかりが後に来て。
なぜもっと早く思い出せなかった、そう思いつめる。
「・・・・・・っち」
口論すらまともにできそうにない。
喧嘩もする気にならない。
もはや自分を見失いそうになったマキは愛から逃げるようにその場を後にしようとする。
「ん？　何か落としたぞ」
ポケットからこぼれ落ちた1枚の古ぼけた写真を愛は拾った。

その写真の映像を見て愛は息を飲んだ。
「これは――――」
「それに触んじゃねえッ！」
奪い取るようにして愛の手から写真を取る。
愛もそれに抵抗せず大人しく返す。
「その写真は・・・・・・」
愛の問いにマキは答えない。
「お前が私の知らないダイを知っているように、私もお前の知らないダイを知っているだけだ。
お前だけがダイの特別と思うな」
そう吐き捨ててマキはその場を後にした。
その場に残された愛はあの写真の映像を思い浮かべる。
「明らかに、腰越と大だよな」
あと二人の姿は少ししか見れなかったためいまいち思い出せないが、目の前にいた人間と愛おしい大の顔までわからない愛ではない。
間違いなく、二人は過去に会っている。
その事実に愛は不安を覚えた。

まるで、既に犬の隣を得ていたのが自分だけではなかったという不安が頭によぎる。
「あれ、辻堂センパイじゃないっすか」
「ん？」
声の方を見れば乾梓がこの寒い中汗びっしょりで立っていた。
その隣には我那覇がいるが、彼女は軽く会釈するだけでその場を去っていった。
「このクソ寒い日になんでお前はそんなに汗臭くしてるんだよ」
「臭くないっすよ！　・・・・・・ないっすよね？」
ちょっと自信がないのだろう。
自分の体を犬のように嗅いで確認する。
「自分の体臭なんて自分自身じゃ臭いかどうかわからないですよね」
即座に諦めた。
「それより、えらく落ち込んでいるようですけど長谷センパイと何かあったとか？」
「何でここで犬が出てくる」
とはいえ当たらずとも遠からず。
「だって辻堂センパイって基本クールですけど長谷センパイ絡むとやたら表情豊かで繊細になっちゃいますし」
「人を観察してんじゃねぇよ」

鳥肌を立てて抗議する。
梓も別に悪気はないのでスイマセンと笑って謝った。
「まぁ辻堂センパイと長谷センパイが前みたく別れたとかになったら覚悟はしといたほうがいいっすよ。
あの頃とは周りの長谷センパイを見る目が皆違いますから」
どういう意味だと言いそうになる。
だが、そんな事は自分も理解していた。
「勿論、自分も見逃す気はないっすよ。
皆殺しセンパイ同様自分も長谷センパイのこと気に入ってますし」
えっへんと豊かな胸を張る梓。
「アタシと大が別れるなんて、もう二度とねぇよ。
嫌な事思い出させるな」
あの時の事は思い出したくない。
自分の元を離れていく大の姿は余りにも愛にとってもう思い浮かべたくもないものだった。
「そうですね、だけど二人が付き合っていたとしても周りの人間が諦めるとは限りませんよ?」

含みのある笑みを落とす梓。
明らかに愛を挑発している。
いや、果たしてそうだろうか？
確かに梓は挑発をしているのだろう。けれどこれは忠告でもある。
大は愛が思っている以上に魅力的な男性だ。
その人柄に愛は勿論、冴子やマキも彼を想っている。
そして彼女もまた、やはり大に興味を持ってしまった。
「長谷センパイを気に入っているからこそ言えることがあります。
自分だけが長谷大の心の中を占領できると思わない事です」
憮然として言い放つ。
「やりたい事をやって、他人の迷惑を顧みない奴が不良だ。
皆殺し先輩はヌルイんっすよ、長谷センパイに遠慮して身を引くなんて大馬鹿っす」
まるで愛をコケにするように邪悪な笑みを浮かべた。
「けど自分は違いますよ。さぼりたい、遊びたい、面倒なことはしたくない、自分の欲求だけを優先する単純な不良っす。
他人を顧みて自分のしたいことを諦めるなんてバカバカしい」
そうだ。

むしろ愛のような何か筋を通す不良こそ珍しい。
大半の不良は他人を顧みず、規則を蔑ろにし、罪を認めない。
単純に大きいだけの子供なのだ。
そして乾梓もその例に漏れず、そのタチの悪い不良だ。
「せいぜい長谷センパイに愛想つかされないようにしてください。
あずはチャンスさえあれば辻堂センパイを出し抜く事も――おっと」
言い切る前に愛が梓に拳を振るう。
だが調子が良い梓は並みの不良なら反応すらできない喧嘩狼のジャブを容易く掴んだ。
「ウザイんだよ。アタシが大を愛しているのと同じように大もアタシを愛してくれている自信がある。
テメェみたいな尻軽そうなバカ女に大は靡かねえよ」
「へぇ、言ってくれるじゃないっすか」
「何よりテメェみたいな女と付き合った男は例外なく破滅しそうだ。
そんな奴に大は任せれない」
それはつまり、梓が男をダメにする女だと皮肉をいっているのだ。
梓もその意味に気づいて目尻を上げる。

「残念っす、彼女なのに辻堂センパイは長谷センパイの性質をまるで理解していないんですね」

言い返すように言葉を吐く梓。

「誰かが長谷センパイをダメにするのではなく、長谷センパイがパートナーを成功させるのが正解でしょう。

彼に敵対すれば例外なく失敗するけれど、それは逆に言えば彼自身が成功を引き寄せる体質とでも言いましょうか」

確かに、江乃死魔は彼に関わるたびにロクな目に遭わず上手くいったためしがない。

だが自分は大に何か手伝ってもらえば総じて上手く行く。

勉強だって、人間関係だって。

梓も大のその本質に気づいているのだろう。

「つまり、自分が成功したいから大が欲しいってことか」

吐き気がする。

そんな大を利用することしか考えていない女などに断じて大は渡さない。

そもそも大は自分と結婚するところまで既に予約済なのだ。

梓は愛の吐き捨てるような言葉に憤慨する。

「成功とかそんなのどうでもいいよ。あずはただ単純に長谷センパイが好きなだけっ

す。

この気持ちはまさしく愛だと言ったところでしょうか」

「はぁ!?」

余りにもストレートな言葉に愛は呆気にとたれた。

だが梓はどこ吹く風、頬を赤らめながら先日の夜を思い出した。

「長谷センパイ・・・・・・こんな自分を仲間と思ってくれてるんですよ」

その言葉にどれだけの思いが込められているのか。

少なくとも愛が押し知れるものではない。

「自分も長谷センパイのためなら体張れます。長谷センパイのためなら辻堂センパイや皆殺しセンパイに喧嘩だって売れます」

一切の不純なものがない、真っ直ぐな目で喧嘩を売られた愛。

「やってみろよ。おら、この掴んだままの手をどうかしてみるか?」

未だ愛の手を掴んでいる梓を強気で挑発し返す。

だが梓は何かするわけでもなく、変わらず真っ直ぐな目で彼女を睨む。

「今はやりませんよ。今辻堂センパイとやりあったところで勝目ないし、例え勝っても長谷センパイが手に入るわけでもない。

それどころか辻堂センパイに怪我でもさせたら逆に長谷センパイに嫌われそうです

し、それは嫌っす」
そう言って愛の手を離す。
愛も戦意の無い相手を殴るのは主義に反する。
だが互いに敵意は緩めないため凄まじいプレッシャーが間に広がった。
だが、梓は時間が来たのか不意に腕時計を見てため息をついた。
「時間切れですね、自分そろそろ行くところあるんで」
目を伏せて再び路地裏に戻ろうとする梓。
だが歩いている途中に何か思い出したのか、再び愛の方を振り向いた。
「ムカつくけど今現在長谷センパイに一番愛されているのは辻堂センパイっす。
けど、自分は諦める気なんて欠片もないですから」
愛はその言葉に言い返せない。
「せいぜい長谷センパイに愛想尽かされてください、そうすれば自分が長谷センパイと幸せになりやすいんで」
つまり、梓も大を狙うと公言したのだ。
もう一度喧嘩別れしてみろ、次は自分がいただくぞと。
愛は梓のその大胆不敵な宣言に真っ向から立ち向かう。
「テメェらの入る隙間なんてこれっぽっちもねぇよ。

今も、これまでも、これからも変わりなくアタシ達は幸せなんだ」
愛の乙女な回答に梓は一瞬呆気にとられたあと、クスリと笑った。
嘲笑ではなく単純に面白いという笑いだ。
「なら分かる筈です。どれだけ、あずが長谷センパイと幸せになりたいと思っているか」
心の底から惚れた男と幸せになりたい。
乾梓が今抱く欲しいものはソレだった。
その思いを略奪愛だと侮辱する事もできるだろう。
だが愛にはそれができなかった。
そうだ、ただ遅かっただけなのだ。
梓が惚れた相手は既に彼女持ちだった。
単純に乗り遅れたのだ。
もしかすれば自分もこうなっていたかもしれない。
一番最初に別れを告げたあの嵐の日。
もし大があのまま愛を諦めていたら、大はもしかすれば別の女と付き合っていたかもしれない。
それこそ腰越マキが放っては置かなかっただろう。
だからこそ今の乾梓を軽蔑できない。

好きな相手が既に彼女持ちで、自分を見てくれることは無いと思い知らされてそれでも好きだと、思いを貫けるかなんて。

「・・・・・・テメェ、名前は？」

実の所、愛は彼女の名前を覚えていなかった。

元江乃死魔幹部とは言え、まともに覚えているのはリーダーである恋奈、そして例外としてハナ程度である。

「覚えてなかったんっすか、ショックっすね」

別に嫌味で言ったわけではない事は梓もわかっていた。

だから困ったように笑う。

「乾梓っす。二回は教えませんよ」

そう言って愛に背を向けて歩き始める。

その背中を見届けながら愛は大きく息を吸った。

「乾梓、テメェは今日からアタシの敵だ。

絶対大に関わることだけは負けねえぞ」

明確な敵対宣言。

だがこれは今までのようなシンプルな喧嘩で解決する敵対関係ではない。

もしかすれば明確な勝利など無いのかもしれない。

だが愛には梓にこう言うしかなかった。
同じ男を好きになった同士だ、ただ自分が大分先んじていて
もしかすると自分はゴールした後かも知れない。
それでも負けじと追いかける梓は愛にとって尊敬すべき敵なのだ。
梓は愛の声に反応することなく歩みを止めない。
けれど伝わったはずだ、自分がどれだけ大を大切に思っているか。
梓は振り向かない。
だが勿論愛の言葉は届いた。
だが、それでも梓は折れなかった。
自分の欲しいものを手に入れる。その欲求を今回ばかりは諦められないのだ。

その夜、愛は江ノ島から離れて自宅へ帰っていた。
途中大の病室へ訪ねようかと思ったが、時間が大分遅れていたため仕方なく諦めた。
家に帰ったあと電話することに決めたため急ぎ足で帰っていたのだが、
ふと、自宅の前で立っている人物がいる事に気づく。
一瞬誰だろうと目を凝らしたが、すぐさま理解した。
「大、なんでこんな所に!?」

「あ、こんばんは愛さん」
大急ぎで大と合流する。
だが大は既に長時間待っていたようで体が冷え切っているのかガタガタと震えている。
勿論本人は気づかれないように気丈に振舞っているが、それが余計に愛の母性を刺激した。
「なんで、連絡してくれればすぐ帰ったのに」
そう言いながら直ぐに自宅に連れ込んでリビングに上げた。
現在愛の両親は旅行なため誰もいないのである。
「いやぁ、愛さんドッキリさせようと思ったら想像以上に遅くなって」
大慌てでお湯を沸かしてお茶を淹れた。
それをすぐさま大に渡す。
「焦った意味でドッキリしたよ。
風邪ひいても知らないからな」
などと冷たいことをいうが、内心未だ大慌てである。
このまま泊まって行って欲しいがやはり彼を病院に送り返さないと拙い。
恋奈が言ったように自分の我侭でウザイ婦長に大が怒られるのは絶対にダメだ。

「大丈夫だよ。それに愛さんの顔を見たら元気出た」
屈託なく笑う大。
愛はその眩しい笑顔を向けられて顔を赤くする。
「それ飲んだら病院へ戻るぞ、送ってやるから」
「外はもう寒いしそれは悪いよ」
やんわりと断ろうとする。
だが愛はそれを許さない。
「ダメだ。あれだけ言ったのにそんな怪我をした大をもう信用しない」
「う、痛いところを」
耳にタコができるほど普段から気をつけろ、ヤンキーの厄介事に首を突っ込むなと言い聞かせているのに見事に突っ込んだのだ。
大に言い逃れができる要素もなく、必然的に愛の提案は通ることになる。
「しかしこの長谷大、茶を一杯飲むだけの行為に数時間かけるのも吝かではない」
「クソ迷惑だ、さっさと飲んで帰るぞ」
「愛さん冷たーい」
いつものような馬鹿らしくもそれでも心が満たされるほど楽しい会話をしながら今日の事を振り返る。

腰越マキや乾梓はやはり大の事を異性として意識している。
マキに至っては過去に何かしら大とつながりがあるのだろう。
自分の知らない長谷大を知るマキ。
「なあ大、お前って小さい頃に腰越と会ったことあるのか？」
「ん？　どうしたのいきなり」
「いいから、答えてくれ」
そう言われてもと大は首をひねる。
そして一分ほど考えるも思い出せないようで
「思い出せないね。マキさんくらいキャラクターが濃いのなら忘れる筈もないと思うけど」
その言葉に安心するも、引っかかったものを感じる。
そういえば、あの写真で写っていた腰越マキの姿は明らかに今と異なる。
容姿は当然として、引っかかったのはその表情の方だ。
今のように高圧的な感じは一切なく、多少引っ込み思案な雰囲気をしていたあの少女。
間違いなくあれは腰越マキの小さい頃だ。
ならば、あの写真を大が見れば・・・・・・

得体のしれない腰越マキと大のつながりを感じて愛は焦りを覚えた。
「大、アタシはどんな事があってもお前の事を愛し続ける」
「え、あ。いきなりどうしたの」
何の脈絡もない突然の告白に大は慌てる。
だが愛は既に内心穏やかではない。
自分がどれほど大の事を愛しているのか、本人にいくら伝えてもまだ足りないだろう。
けれどそれでも伝えずにはいられなかった。
「ヤンキーやめれなくて、嫉妬ばかりして、きっと何年経っても大に似合う普通の女にはなれないと思う。
でも、それでも大の事が好きだ」
不安を払うように思いの丈をやけくそにぶつける。
「どうしたの愛さん。好きって言ってくれるのは嬉しいけど、
何かいつもと違うよ」
余りにも余裕のない愛に気づいた大は優しく宥めるように愛を抱きしめる。
愛もそれに逆らわず子供のように強く抱きしめ返す。
「アタシは、アタシは・・・・・・」

「もういいよ。充分に愛さんの気持ちは伝わってる」
抱きしめられて尚想いを伝えようとする愛を諭す。
互いに沈黙となり数分が経過した頃、長谷大は決心したように愛につぶやいた。
「俺、今日は帰りたくないな」
「それ、男の大がいう台詞じゃないと思う」
即座にツッコミを入れる愛。
そしてその息の合った掛け合いに二人はクスリと笑った。
「でも今のは本気だよ。今日は愛さんとずっと一緒にいたい」
真剣な目で愛を見つめる。
愛自身もそんな凛々しい顔で見つめられればそれだけでたまらなくなる。
そもそも大のお願いを愛が断れる筈もなく、
「病院はどうするんだよ」
「俺の方から電話するよ」
「婦長に嫌味言われるぞ」
「愛さんと一日二人きりでいられるなら小さい代償さ」
あらゆると問いに即座に返答する大。
追い詰められる愛。

「・・・・・・愛さんは嫌？」
　不安がるように愛の反応を伺う大。
「嫌なわけあるかよ。怪我が心配なだけだ」
　そんな大に苦笑して優しく大を押し倒した。
「だから今日はアタシがしてやる」

　そのころ病室では
「お姉さま！　長谷センパイをあずにください！」
「私が欲しいわちくしょーーーーーーー！」
　梓の長谷大盗撮ファイルを押収した冴子が絶叫していた。
「ちょ、あんまり大声出さないでくださいよー。あ、婦長きちゃう！　隠れて！」
「何で私じゃいけないのおぉぉぉ・・・・・・ヒロのばかぁーーーー」
「話聞いてくださいよ！」
　酔ったように泣きながら大のベッドをクンカクンカする冴子に困り果てる梓がいた。

9話：梓との約束

「朝帰りってどういうことっすか!?　どういう事なんすか!?」
比較的早い朝、愛さんの家から帰ってきた俺はプリプリと怒る乾さんに問い詰められていた。
まさか愛さんとにゃんにゃんしてましたなどと言うわけにもいかず、乾いた笑いしか出ない。
彼女も俺の微妙な反応に何か気づいたのか俺の匂いを嗅ぐ。
「くんかっかー・・・・・・この匂いは辻堂センパイのもの。まさか!?」
「何で匂いだけでわかるの!?」
犬じゃあるまいし。
っていうか何でそんなに愛さんの匂いを知ってるんだよ。
愛さんの匂いは凄いいい香りだから俺は余裕でわかるけど。
そもそも帰る前に風呂を借りたし。
もちろん愛さんと一緒に入ったけど。
とにかく事実を見事に当てられて自分でも驚くほど動揺する。

乾さんはそんな俺を見て呆れたようにため息を吐いた。
「引っ掛けただけっすよ。まさか本当だったとは思わなかったですけどんな。
適当に言った事に釣られたのか。
我ながら情けない。
「でもまぁカップルなら普通の事ですし別にいいっす。
それよりも隠し事できない長谷センパイちょっと好印象かも」
ニマニマと笑いながら擦り寄って来た。
ちょっと怖い。
日に日に乾さんは俺とくっつく距離が近くなってきている気がする。
居心地悪くする俺に乾さんは知ってか知らずか構わず密着する。
だがその時間はそれほど長くはならず、不意に彼女の携帯の着信コールが静かな病室に響いた。
「ちぇっ、今回はここまでですね」
残念そうに呟いて急いで電話を取る。
その後乾さんは軽く相槌をうつ程度で何か会話する事もなく電話を切った。
携帯をポケットにしまって俺に振り返って

「それじゃあ自分は用事があるんで失礼するっす」
そう言いながらかけていたセーターを着る。
「今日はあまりお洒落しないんだね」
「そっすね。会うのはどうでもいい奴らばかりなんで」
辛辣だ。
そんな事を言う相手って誰なんだろうと一瞬考えるが
しかし俺は乾さんのプライベートなんて全然知らないため閃くこともない。
「何しに行くか気になります？」
「詮索はしないよ」
まさか他人の行為を詮索するなんて無神経な真似をする気はない。
「気になるのなら一緒に行きます？」
何処へだよ。
というか俺が一緒に行って大丈夫な所なんだろうか。
「合コンとかかな？」
「自分合コンは基本行かないっす。ってか男連れて合コン行くってどんなですか」
遊んでそうなイメージがあるから合コンとか行きまくってそうだがどうやら違うらしい。

そもそもこんな朝から行くものでもないだろう。
「自分、そんなに遊んでそうな女に見えます？」
心を読まれたらしい。
ブスっとした顔で俺をジト目で睨んでくる。
そしてその内容を正確に当ててきたので困る。
頷くのは失礼だし、誤魔化したところでバレるだろう。
「言っときますけどあずは処女っすよ。
ここは誰にも見せたことが無い所っす」
何てことを言いながらスカートをゆっくりたくし上げる。
そのまま下着まで見せるのかと思ったが、ギリギリのラインから上には上げなかった。
ホッとしたような残念なような。
「でも、長谷センパイなら見せてあげても良いかも・・・・・・」
「俺は彼女持ちです」
相変わらず何を考えているのかわからない。
まさか彼女の誘いに乗るわけもなく即座に断るが。
「一途ですね、そういう所も長谷センパイの良い所です」

屈託なく笑う乾さん。
まるでヴァンのような言い方に俺も釣られて笑った。
「さて、それじゃあ行きましょうか長谷センパイ」
「え、俺行くなんて言った覚えはないんだけど」
「行きますよ、長谷センパイ」
つまり断る余地はないらしい。
変なところに連行されなければ良いが。
半ば諦めつつ俺も着替えることにした。

「ンダラアアアアアアアアアア!?」
「オオン？　ツダッシャラアアアアアアア！」
凄い。
何かもう野生動物みたいな威嚇をする不良の群れ。
「ん～、もう情報が出回ってるみたいっすね。面倒だなぁ」
威嚇を向けられる乾さんはどこ吹く風で思案している。

というか何でこんな所に。

病院から連れ出された俺はそのまま江ノ島へ連行されて人気のない裏路地へ連れ込まれた。

そこには既に先客がいて、数人の不良と一人のやたら体格の良い大人の男性がいた。

乾さんがいうには喧嘩だけで生計を立てているいわゆる喧嘩屋らしい。

「テメェが昨日から俺のチームを襲ってるイカれた馬鹿女か」

その喧嘩屋らしい人だけはやたら落ち着いているようだ。

軽くストレッチをしながら乾さんに話しかけている。

「不意打ちじゃない上にそっちは複数なんですから負けても言い訳はできませんよ」

「いいねぇ。そういう気の強い女好みよ俺」

「あずはテメェみたいなチャラい男全然好みじゃないっすけどね」

何でこんなことになっているのか。

「長谷センパイ、絶対にあずから離れちゃダメですよ」

などと俺を気遣う乾さん。

ありがたい、でもこんな危険な所へ連れてきたのは君だよ。

「わかってる」

「ふふ、今の掛け合いって傍から見ればフォーリンラブってますよね」

こんな軽口を叩いているということは見た感じそこらの不良より強そうな彼らでも乾さんにとっては俺というハンデがいても勝てるレベルなのだろう。
だが、それでもちょっと心配だ。
喧嘩に巻き込まれるのはもう慣れているが、今の乾さんは負傷中だし安心して見れない。
そもそも何でこんな決闘まがいなことを乾さんがしているのか。
後で絶対に教えてもらう。
「そんじゃ始めましょうか」
乾さんはそう言ってトントンとステップを踏んだあと一気に取り巻きの不良に肉薄する。
「は？　うげっ！」
相手はまだ臨戦態勢すらとっていなかった。
不意を突かれた不良は反応すら出来ずに鳩尾に抜き手をくらって昏倒。
しかし気絶まではできなかったようで苦痛に歪んだ顔を浮かべた。
明らかにワザとだ、リョウさんの時の喧嘩を見れば今ので相手を仕留めれない乾さんじゃない。
「て、テメェ！　ぶっ潰す！」

残った不良や喧嘩屋も今ので乾さんが只者ではないのに気づいたのだろう、
ようやく本気の顔に変わった。
乾さんは即座に距離をとって俺の傍に戻る。
つまり俺を守りながら戦うつもりなのだろう。
「こんなことするのに何で俺を連れてきたの？」
聞かずにはいられなかった。
どう考えても足手纏いを連れてくる理由が思い浮かばない。
乾さんは俺に視線を移さず、そのまま答える。
「ちょっと体験したい事があるからっす。まぁ今は長谷センパイは自分の身の安全だけ考えてて下さい」
などと答えにならない回答だけ残して再び臨戦態勢を整える。
即座に取り囲むような形で陣形を作る不良。
俺ごと完全に取り囲んだ不良はそのまま攻撃のタイミングを伺う。
ならば乾さんから陣形を崩すように攻撃をするのがセオリーなのかもしれない。
しかし今彼女は俺というハンデがあるためここから動けない。
乾さんが動けない上に俺がまったく喧嘩できないのを相手も察してきたのか、
全員の視線が先程から何もしていない俺に向けられた。

「おいおい、一般人を巻き込んでんのかよ。
まさか俺たちがソイツを狙わないなんて思ってないよな」
「どうぞご自由に。まぁアンタらはこういうハンデつけてようやく勝負になるんすよ」
喧嘩屋は周りの不良たちにアイコンタクトを送った。
恐らく俺を優先して狙えとの事だろう。
なるほど、これはただの喧嘩だ。だったら卑怯と罵れない。
立派な戦術だ。
流石に周りの敵意を向けられて俺も内心落ち着かない。
「早く来てくださいよ、それともビビってます?」
「顔はいいのに性格は強烈だなぁテメェ。おら、やっちまえ」
乾さんの分かり易い挑発に乗った喧嘩屋が指で指示を出す。
それに応答した不良の一人が背後から一気に俺に襲いかかってきた。
振りぬこうとしたバットが俺に届くことはなく、乾さんはそれに一瞬で反応して蹴りで吹っ飛ばす。
蹴りの入りは浅かったらしく僅かなダメージで戦闘不能にはならなかったものの、蹴られた相手はげぇげぇ言って蹲った。
これもやはりワザと苦しむように気絶させなかったのか。

今のが開始の合図となった。
一気に取り巻いていた不良が動いたのだ。
３６０度あらゆる角度から攻撃が来る。
乾さんはそれら全てに反応して丁寧に防御と反撃を繰り返す。
しかし流石に片手で足手纏い持ちだとやりづらいのか、思うように攻撃に移れず殴り返した敵も戦闘不能なまでのダメージを負った人はいない。
とはいえこちらもは一切攻撃は受けておらず、未だ乾さんも俺も無傷だ。
改めて確認したが、乾さんは強すぎる。
愛さんやマキさんに準ずる強さではないだろうか。
「ふふ～ん、長谷センパイ今あずに見惚れているっしょ？」
「な、こんな時に何をいってるのさ」
余程余裕があるのか、相手から視線を外して俺に話しかけてくる。
その態度に相手は露骨に舌打ちをする。
目に見えて舐められているのだ。
「調子に乗るのも大概にしとけクソアマ！」
ボス格が冷静さを失ったように飛び込んできて乾さんに拳を振るう。
それが彼女に当たることはなく、手を使うまでもないと容易に躱された。

しかしそれは彼にとって予想通りなのだろう、空振った勢いそのままに彼女の後ろにいる俺に肉薄する。
「死ねクソガキ！」
やばいと本能的に感じた俺は両腕で頭を庇う。
「死ぬのはテメェっすよ」
しかしその拳が俺に届くことはなく喧嘩屋の男は横から乾さんに殴り飛ばされる。
明らかに反応速度と対応を実行に移す動きの速さが異常だ。
喧嘩屋の行動を後出しのように対応して間に合うなんて、
常人の限界とされるスペックを容易く越えた身体能力じゃないのか。
そのまま勝負が着いたのかと思ったがどうやら彼もやるようでギリギリ防御したようだ。
いや、それどころか何か今ので閃いたのか下品な笑いすら浮かべている。
再び目で周りに合図を送る。
一体なんなのかは俺には想像つかない。
乾さんも今一把握しかねるのか先ほどよりは僅かに構えが硬い。
どちらも動かなくなったが、それも直ぐに終わった。
不良全員が四方から同時に襲いかかる。

ここでようやく彼らの狙いが読める。
本来乾さん一人なら、襲いかかる不良のどれかに突っ込んでそのまま円陣から飛び出せばこの陣形は一瞬で崩れる。
しかし今回は殆ど身動きの取れない俺がいる。
つまり俺を庇う乾さんも自動的に動けなくなり、一気に同時にくる攻撃を俺を守りながら防がなければならない。
更に付け加えるならさっきとは違い、相手は全員俺だけを狙うのだろう。
よって俺を間に置いた不良の攻撃まで彼女は防ぐことがない。
なぜならその不良ごと俺まで殴りかねないからだ。
流石に拙いかもしれない。
けれど俺の心配をよそに乾さんは依然として構えをとったまま動かない。
どうするのかもわからない。
「おせぇんだよ雑魚」
そう呟いて一気に乾さんの姿がぶれた。
「はぁ!?」
そう驚愕の声を上げたのは誰だったか。
喧嘩屋の男かもしれないし周りの不良かもしれない。俺なのかもしれない。

ともかく彼女の動きに全員がまるで理解できなかった。
一瞬で取り囲む敵が吹き飛ぶ。
単純に凄まじい速度で順番に不良を叩きのめしたのだ。
ただその攻撃が余りにも速くて場にいる誰もがまるで反応できなかった。
一気に壊滅した陣形を唖然として見る。
明らかにそこいらの喧嘩自慢より強い筈の喧嘩屋すらも反応できず、路上で無様に這い蹲っている。
そんな彼らを見ながら乾さんはトントンとステップを踏んで、その後一呼吸。
凄い、日頃から湘南最強の愛さんを見ているせいでどんな強い人にあってもそれを凄いとは思わなかった。
けれど乾さんは違った。
愛さんやマキさんのように、人の常識の壁を超えている強さに近いものを感じる。
「ん～、やっぱコレ邪魔っす」
鬱陶しそうな目で自分の左腕のギプスを睨む。
明らかに隙だらけだ。
そんな彼女に近寄る奴がいた。
最初に吹き飛ばされて倒れていた不良だ。

彼は金属製のバットを片手に背後から音が出ないように走りよる。
彼の本気で乾さんへ殺そうとする目を見てまずいと感じた俺は声を出しながら走った。
「死ねやオラァ！」
「危ない！」
殆どヤケクソで乾さんと不良の間に立ちふさがる。
南無三、流石にバットのフルスイングで殴られたらただでは済まないだろう。
また愛さんに怒られるかなぁなどと現実逃避しながら目を瞑って覚悟をする。
しかし振りかぶったバットは何時までも俺に振り下ろされず、痛みも来ない。
はてどうしたのだろうと恐る恐る瞼を開けると
「そうそうソレです！　このシチュエーションを待ってたんですよ！」
なんて凄い笑顔で先程まで俺の背後にいた筈の乾さんが俺の前に立って不良を一撃で葬っていた。
少し離れた所で完全に気絶している。
その仕留めた不良には視線すら送らず、乾さんは俺にくっつく。
「ふふ、やっぱり長谷センパイってあずのピンチになったら助けてくれるんですねぇ～」
頬に両手をあててクネクネしている。

「もしかして今のをしたいから俺をここに?」
試されたのかと思い、ネガティブな感情が頭を上げる。
「だったら何が悪いっすか!?」
逆ギレである。
ワケわからん。
「だって仕方ないっしょ！　辻堂センパイや皆殺しセンパイにだって庇った事あるのに自分だけないって不公平ですもん！」
やだ、何を言っているのこの子。
頭が痛くなってきた。
「そういう事して・・・・・・狼少年になってもしらないよ」
少なくとも今後は俺は乾さんの事を疑うだろうし、次同じことがあったとしてまた俺が助けようとする事もないかもしれない。
いや。そもそも乾さんが喧嘩で俺を頼りにすることなんてないだろうけど。
「まぁまぁセンパイ怒らないで下さいよぉ～」
俺の腕を両手で掴んで胸に挟む乾さん。
で、でかい。
愛さんも同年代では凄いスタイルをしているが、乾さんは愛さん以上に胸に関しては

あるかも。

まぁお尻から足にかけてのラインの美しさは愛さんが一番ですけど。

「センパイが望むならご褒美あげてもいいんですよ・・・・・・・?」

「ご、ご褒美?」

悩ましげな上目遣いで俺と目を合わせる。

頬は心なしか赤らんでいる上に瞳は潤んで、眉は悩ましげに下げられて正直色っぽい。

ワザとだろうけどだからこそ純真な愛さんにはできない芸当だ。

「そうですよ、ご褒美」

そう言って腕を俺の首に巻きつけてくる。

やばい、これは男としてやばい。

ゆっくりとそのまま俺を前かがみにさせ、乾さんは背伸びをしていく。

そして互いの息を感じれるほど距離を近づけ、

「やっぱだめだよ!」

理性をギリギリ取り戻して彼女と距離をとった。

危ない、流石にここで断らなかったら間違いなく浮気になる。

ほっと一息ついて一体何故こんなことをと乾さんに問い詰めようと彼女に目を向け

た瞬間
「隙あり！」
「んが!?」
一瞬で距離を詰めた彼女に無理やりキスされた。
ムードは既に崩れ去ったあとだが、それでも彼女は諦めなかったらしい。
リップクリーム特有のしっとりとした感触を帯びた唇の感触。
凄まじい柔らかさである女性の唇に俺は硬直した。
そのまま10秒ほどフリーズしていると、不意に彼女は距離を置いた。
人差し指を自分の唇にあてて照れたように微笑む乾さん。
「んふ～、長谷センパイにあずのファーストキス奪われました」
しかもどうやら彼女の中ではどういうわけか俺が奪ったことになったらしい。

「って事があったんですよ。どう思います?」
「良い話だったよ。実に処刑のしがいがある」
拳をポキポキと鳴らしながら近寄る愛さん。怖い怖い。

「いやぁ、隠すのもアレだから素直に言ったけど何にせよだったか」
乾いた笑いしかでない。
流石に愛さんを裏切ったような負い目があったから自分から正直に言ったのだが。
取り敢えずぶん殴られるのを覚悟して身構える。
しかし愛さんはフリだけだったらしく、少し怒った顔をしたままではあるが病室の椅子に座った。
「もしアタシがお前のダチに不意打ちとはいえキスされたらどうする？」
想像してみる。愛さんが俺の知り合いに無理やりキスされたとして
「君がッ、泣くまで！　殴るのをやめないッ！」
イメージした男をひたすらに頭の中でボコボコにする。
即友情断絶かつ俺の怒りを思い知らさねばおさまりがつかん。
殴り合いで友情が生まれるなんて嘘っぱちだ、感情に任せて相手をボコボコにしたくてたまらない。
泣いても許さん。
「まて大、今まで見たことないほどに顔が怒り狂ってて恐い」
「うわあああああん！　ごめんよ愛さん！」
改めて自分が愛さんを盛大に裏切った事実に自己嫌悪にかられる。

同時に今の愛さんの言った例え話を想像してしまって凄まじい負の感情が溢れ出した。

やけくそとばかりに愛さんに抱きつく。

突然だから躱されても仕方ないと思ったが、優しく受け止めてくれた。

「反省してるならいいよ」

「でも、本当にごめんね愛さん」

頭を優しく撫でる愛さん。

それに心地よさを感じる。

しばらくその感触を堪能していると、すぐ傍からきつい視線が来た。

「あのね、私も来ていることを忘れてない？」

「うっせぇな、空気読めよクソ恋奈」

「読んでたらずっとアンタら最後までその空気だろうが！」

ひたすらに仲の悪い二人である。

「待って待って、それで今日はどうしたの片瀬さん？」

「どうしたのって何がよ？」

「いや、一昨日も来てくれたし今日も何か俺に用事があるのかなって」

「・・・・・・ふん」

何やら地雷を踏んだらしい、目に見えて不機嫌になってしまった。
「用事がないとアンタの見舞いに来るのは許されないのかしら？」
おっと、これは間違いなく俺の言い方が悪かった。
「ごめん、そういう意味で言ったわけじゃないんだ。
片瀬さんが用事なくても俺の見舞いに来てくれたというのなら、それは俺にとって凄く嬉しい」
間違いなくこれは俺の本音である。
用事がないのに来てくれるというのならそれは俺の事を少なくとも嫌ってはいないわけで。
片瀬さんに憎からず思われているのなら光栄な事だ。
「大げさに言い過ぎよ。アンタがどんな情けない様か見に来ただけ」
などといつもの様な憎まれ口を叩く。
「はいは～い、人の彼氏にツンデレしてんじゃねぇ」
「んなっ？　どこがツンデレしてるのよ!?」
「黙れ、今のテメェはギルティだ」
「ちょ。やめ！」
愛さんにアイアンクローされる片瀬さん。

「あがががが！　痛いマジでドリアン握りつぶすような女のコレはやばい！」
「あんなクセぇもの二度と割らねぇよ」
妙なギャグキャラ補正さえなければ今頃湘南の頂点にいるのは彼女かもしれないのになぁ。
まあどうせいつものように愛さんにどつかれても一瞬で治るのだろうけど
流石に目の前で知り合いがボロ雑巾にされるのは見たくない。
「そうそう。二人共に話があるんだ」
愛さんにアイアンクローされたままの片瀬さんと愛さんが俺をちらりとみる。
離す気はないのね愛さん。
「俺、明日の朝には退院なんだ。もともと骨折ってそんなに長い間入院するものでもないしね」
走ったりするのはまだ厳しいが、日常生活はもう問題ないレベルだ。
今日の朝回診にきた先生にそう言うと手早く退院の手続きをとってくれた。
これでようやく味気ない食事と退屈な日常とはおさらばだ。
「マジか大、やったな！」
「・・・・・ふぅん」
何やらまったく対照的な反応。

愛さんは本気で喜んでくれているらしく目を輝かせてくれている。
しかし対して片瀬さんは今にも舌打ちしそうな剣幕だ。
正直怖い。
「それ、梓知ってんの？」
「いや、まだ言ってないけど」
確か先生と話していた時は乾さんはコンビニへ行っていた筈だ。
「そう、じゃあ帰ってきたら教えてあげなさい」
何で、と一瞬思ったがなるほど。確かに同室で過ごした患者同士だ、そりゃ退院するのなら事前に伝えるのは礼儀である。
それに俺と乾さんも冬休み前より間違いなく仲良くなったはず。
だったら友人としても言っておかねばなるまい。
はて、友人にファーストキスなんて上げるものなのか？
乾さんは最近のギャルっぽい感じだからもしかすれば貞操観念などが薄いのかもしれない。
ってそんなわけがあるか。本当に薄いのなら俺とする以前から誰かとファーストキス済ませているだろう。
え、じゃあ何？　もしかして乾さんって俺のこと・・・・・・

「どうせ私と同じ理由で梓も怒るでしょうけど」
　少し落ちたトーンで囁く。
　けれど何か閃いたのか、言っている途中で少し期待した目でこちらを見た。
「ねぇ、アンタ江乃死魔に入らない？」
「え、でも俺」
「良いじゃない、リョウだってアンタ気に入ってるみたいだし悪いようにはしないわよ」
　甘言を囁いて俺に詰め寄る。
　そもそも俺はヤンキーになるつもりはないし、どこかのグループに入るつもりもないんだが。
「もしかしてもう辻堂軍団に入ってたり？」
「辻堂軍団いうな」
　愛さんが渋い顔で片瀬さんに言う。
「大はどこのグループにも入らねえよ。つうかアタシの目の前で彼氏を誘ってんじゃねえ」
　たしなめる程度の声色である。
　一応俺の意思を尊重するつもりなのだろう、別に片瀬さんの勧誘を本気で妨害している感じじゃない。

「愛さんの言うとおり俺はただの一般人だし、どこにも入る気はないよ」
別に江乃死魔が嫌いなわけでもなく、そもそも自分が不良の組織に入るというのが考えつかない。
片瀬さんには悪いけれどここは断らせてもらう。
俺のあっさりした答えに片瀬さんは困ったように眉を寄せた。
「そう、それじゃあ退院したらもう会う機会は殆どないわね・・・・・・」
心からそう思ってくれていたのだろう、声も本気で落ち込んでいる感じだ。
「そんな事はないよ。俺たちって用事とかきっかけがないと会えないような仲？」
俺はそう思わない。
これからも彼女と遊びたいし、また喫茶店とかで食事をしたい。
悩みがあれば聞いてあげたいし仲良くしていきたい。
「・・・・・・そうね、そうだったわ」
落ち込んで伏せていた瞳を上げて真っ直ぐ俺を見る。
「じゃあ今度アンタの家に行くから」
「何でそうなる!?」
愛さんが今のフレーズは聞き捨てならんと食いかかった。
けど片瀬さんは長い髪を手で払って見下すように言った。

「だって長谷が前に言ったもの、今度俺の家に来ないかって」
そういえば言った記憶がある。
コーヒーをご馳走したいという意味でなんだけど、言葉の意味が愛さんには間違って伝わっているんじゃないだろうか。
「それも濃いのをたっぷりといれてくれるのよね、長谷」
「濃いの!?　特盛!?　ちょっと待て！」
そうだね、俺のオススメのを濃い目で淹れてあげるよ
だから少し待とうか。
「私、楽しみにしてるから・・・・・・」
頬を赤らめて俺にてれ気味に微笑む片瀬さん。
その仕草にはドキっとくるものがある。
二重の意味で。
「ひろしいいいいいいい！　アタシというものがありながら、ありながらあぁぁぁあああ！」
「ちょ！　ちがっ!?」
ドキっと来るね、命の危険的な意味で。
般若がおる、これは俺を殺す目だ。

「いやいやコーヒーだよコーヒー!?」
「でも私はミルク多めが良いかも」
「そんなに大のミルクが欲しいのか！　このいやしんぼがっ！」
「片瀬さんストップストップ」
ダメだ、これはダメだ。
最早怒髪天を抜く。
愛さんの黒い髪が金色に染まって体からパチパチとしたオーラが漂い始めた。
俺の襟を掴んでガクガクと首が揺さぶられる。
痛い痛い、頭が飛ぶって。冗談じゃなくてマジで。

「今、なんて言いました?」
「明日の朝俺退院するよ」
時刻は午後19時。
俺と別れたあとも理由は知らないがどうやら不良達と喧嘩し続けてたらしい乾さんがシャワーを浴びて帰ってきた。

丁度いいと俺は片瀬さんに言われた通り退院の事を伝える。
「・・・・・・ワンモアプリーズ」
「俺、明日退院します」
「ガーン！　現実は非常に非情である！」
口でガーンと言った人を初めて見た。
「どどどうしてっすか!?　自分何かしましたか!?」
「いやいや普通に健康に近づいたから退院するだけだって」
そもそも同室の人が嫌だから退院なんてあるわけないでしょうに。
けど乾さんは今までに見たことないほど慌てている。
「駄目です、長谷センパイは冬休み終わるまでここにいるべきっす」
何故に。
骨折程度で冬休み全て入院生活とか嫌すぎる。
「いやいや、入院費だって馬鹿にならないし俺としては早くでないと家族に迷惑かかるから」
「あれ、知らないんですか？　ここの入院費は恋奈様が出してくれてるらしいっすよ」
「はぁ!?」
初耳だぞ!?

「長谷センパイは江乃死魔の問題に巻き込んだ詫びとしてでしょうね」
アレは俺が勝手にした事だから詫びとか必要ないんだが。
というより他人の金で入院生活してるならそれこそ早く退院しないと。
「っていうか今の口ぶりを考えるに君まで片瀬さんに入院費払ってもらってるの？」
「はい、自分の口座は全部恋奈様に押さえられて無一文なので入院費は仕方なく出してもらってます」
まあ、それは仕方ないか。
「なのでタダなんすよ。ね？　一緒に入院ライフ過ごしましょうよ～」
「駄目だ、今のを聞いて俺は明日絶対に退院する事を決めた」
「ヤブヘビ、余計な事言った・・・・・・」
明日退院したら入院費の明細もらって片瀬さんにお金を返して礼も言わないと。
「乾さんはもう少し入院続きそうなの？」
「ん？　自分も明日出ます」
さも当然のように言う。
「だって長谷センパイいないならここにいる意味ないですし」
「いや、怪我とか大丈夫なの？　ほら、内出血とかしてたらしいし」
「そりゃまだ痛いですけど入院するほどじゃないっす」

「じゃあなんでここにいる」
つ、疲れる。
「そんなことより長谷センパイ、退院したら自分ら会う機会なくなるっすよ！　ヤダー！」
片瀬さんの時と同じ流れである。
なるほど、あの時に彼女がつぶやいたのはこういう意味だったのか。
「そんな事ないよ。乾さんさえよければいつだってウチに来てくれていいし、歓迎する」
「・・・・・・おぉ～」
目をキラキラさせる乾さん。
そんなに今の言葉が嬉しかったのか。
「行くっす！　絶対行きますからね！」
ガシっと俺の手を握る。
初めて合わせた彼女の手は俺の想像以上に柔らかくて小さかった。
とても俺の肋骨をへし折った手とは思えない。
「うん。待ってる」
片手でしか俺の手を握れない乾さん。
だから俺は両の手でその右手を包み頷いた。

俺はもう乾さんの事を気に入っている。
マキさんは言った。彼女は俺には合わないと。
俺は思った。彼女と俺は絶対に相性が合わないと。
だがそれでも今は違った。
俺は乾さんの事は嫌いじゃない。
まだ彼女のしたことを許せないし、これからも彼女を肯定する事はないだろう。
けれど、だからといって彼女の全てが嫌いにはなれない。
俺をセンパイと慕い、江乃死魔を追い出されて尚片瀬さんを恋奈様と敬う彼女を俺は嫌いにはなれない。
悪事を働く人は相応の理由があるのは漫画やアニメの世界だけだ。
現実ではむしろ愉快犯、ただの興味本心など救えない動機が多い。
そして彼女もその救えない人種なのかもしれない。
しかしそれでも俺は。
「長谷センパイ、それじゃあ入院生活最後のお願いがあります。
あずの退院祝いだと思って聞いてくれると嬉しいです」
顔を真っ赤にして、薄く照れ笑いを浮かべて
それで何か勇気を持ったような目で俺を真っ直ぐ見る。

「今日だけ、一緒のベッドで寝させてください」
俺は彼女を嫌いになれなかった。

10話：所有権

パラダイムシフトという言葉がある。
その意味はその時代の価値観や常識の劇的な改変、認識の変化である。
子供の頃はどうしても食べられなかったものを数年ぶりに食べればそれが異常に美味しく感じた。
これも同じく規模は違うが個人のパラダイムシフト、またはパラダイムチェンジと言えるだろう。
認識の完全なる変化。はたしてこれはいい事ばかりなのだろうか。
俺は、その問題に向き合う必要が訪れるのかもしれない。
一人、他に誰もいない空虚な病室の一角で
隅に蹲って、余りにも寒気のする自分の体を抱きしめながら考え続けていた。

話は2日前に遡る。

朝、乾さんと別れを告げ退院した俺は真っ直ぐ自分の住み慣れた家へ帰った。
その足取りは軽く、早く会いたい人がいるからか気分も晴れやかだ。
心なしか胸も少しドキドキする。
修学旅行前日のような、そんな抑えのきかない軽やかな足は僅かな時間で自宅前まで俺の体を送ってくれた。
日数としてはそんなに離れていたわけでもないのに、それでも懐かしい感じだ。
それだけ俺はこの家に愛着があるということだろう。
弾む気持ちで扉のノブに手をかける。
そのままゆっくりと開けると
「お帰りなさい、ヒロ」
そこにはいつから待っていたのか姉の姿が待っていた。
「ただいま、姉ちゃん」
姉ちゃんの姿を見てようやく自分が家に帰ってきたのだと納得する。
俺にとって姉のその姿こそが緩い日常の象徴なのかもしれない。
「いつから待ってたの？」

「朝にヒロが帰ってくるって連絡があってからよ」
それって少なくとも3時間は玄関待機していたのか。
申し訳ない事をした、せめて病院を出る時間も言っておくべきだったと反省する。
「それじゃあ早速ヒロに命令があるわ」
ふんぞり返って俺を見る。
はて、何だろうか。
「お姉ちゃんの抱き枕になりなさい！　お姉ちゃんヒロが入院してからまともに寝付けてないの！
眠くて眠くて、それでも寝れなくてそろそろ限界なのよ！」
「は？　ちょ、ま」
腕を掴まれて二回に引きづられていく俺。
そのまま俺のベッドに投げ倒されると同時に姉ちゃんも転がり込む。
勢いそのままに姉ちゃんのふくよかな胸が俺の顔に押し付けられて息ができん。
「あぁん！　この感触、この肌触りこそヒロなのよ！」
胸をぐりぐりとして凄いやわっこい。
「もが・・・・・・」
「あん、こらヒロ。くすぐったいでしょ」

喋らないほうがいいらしい。
やたら色っぽい声を出す姉にドキマキさせられる。
そういえば、なんだかこのベッドに違和感を感じる。
何だろうと意識してみればすぐにそれが何なのかわかった。
匂いが違う。俺の匂いはこんなに甘酸っぱくない。
もしかして姉ちゃん、俺が入院してから毎日ここで寝ていたのだろうか。
「それじゃ、お休みヒロ」
宣言してそのまま数秒後心地よい寝息が聞こえてきた。
本当にまともに眠れてなかったのだろう、その寝顔は安らかだ。
起こすのも悪いと思いしばらくは動かないようにしよう。

ピンポーン、と聞きなれたインターホンの音が家に響いた。
いつの間にか俺まで寝ていたらしい。
少し瞼を開けば目の前には寝る前と変わらず姉の寝顔。
そういえば前に友達の家にいったときにインターホンを鳴らせばファミリーなマー

トの入店音だったときはクスっときたものだ。
だか俺の記憶ではむしろファミリーなマートの方がインターホンによく使われるメロディーを採用しているのかなと考える。
などと寝ぼけた頭で思考していると
ピンポーンピンポーンピンポンピンポンピンポピンピンピピピピピ!!!!
と、徐々に連打の速度が上がり始めている。
これは興味深い。
どこまで連打速度が上がるのか見ものである。
「ん～、うっさい。ヒロお願い・・・・・・」
「わかった」
眠そうに身をよじる姉にお願いされては仕方がない。
寝癖を手櫛でごまかし、欠伸を噛み締めながら玄関へ向かった。
「はいはい、今出ます」
依然として連打をやめない客に苦笑しながら扉を開く。
開いたのだが
「あれ?」
そこには誰もいなかった。

馬鹿な、開ける瞬間までインターホンが鳴り続けていたんだぞ、何故開けた瞬間にその本人を見失う。
不自然な状況に首をかしげて外に出てみるもののやはり誰もいない。
はて、これが俗に言うポルターガイストなのだろうか。
家の外側がらいたずらするなんてお茶目な実体のない同居人である。
ワケのわからぬまま家に戻る。
スリッパを脱いで眠気覚ましに水でも飲もうかとリビングへ入ればそこでようやく先ほどの客が誰なのかわかった。
「マキさん、こんにちは」
「おう、久しぶり」
マキさんの指定席となっているテーブル備え付けのチェアにマキさんが座っていた。
その入院前と変わらないマキさんの姿にホッとしたものを感じる。
「それじゃ少し遅いですけど、お昼ご飯でも作りましょうか?」
「分かってるな、それでこそダイだ」
そりゃご飯を待つ子供のような目で見られちゃ気づくさ。
相変わらずなマキさんだ。
「さて、冷蔵庫には何があるかな」

姉ちゃんは俺がいない間どんな食生活をしていたのかこれでわかる。
半ばワクワクした感情を抱きながら冷蔵庫の中身を確認してみれば
俺が入院する前とまるっきり変わっていた。
見た所俺の好きなものばかりで、言い換えれば俺のあまり好みではないものが一切ない。
もしかして今日は俺の退院祝いでもしてくれるつもりだったのだろうか。
「ごめんマキさん。ちょっと食材買ってくるよ」
「ん？　でもその中沢山あるじゃん」
「ん～、ちょっとこれに手をつけるのは躊躇うんだ」
マキさんは俺が何を考えているのかわからないのか、疑問げにこっちを見る。
「まぁ待つよ。いや、なんなら私が買いに行ってやってもいいぞ。
その方が速いし」
言いながら椅子から立ち上がり、俺の財布をかっぱらう。
「ありがと、でも何を買うかわかります？」
「・・・・・・肉？」
まぁ、別に肉オンリーでもいいが。
昼から肉だけしか使わない食事ってのも寂しい。

「来ていきなりまたこの寒い外に出すのもアレですし。
俺がささっと行ってすぐ帰ってきますよ」
マキさんの手にある俺の財布を受け取って自分の部屋に戻る。
相変わらずぐっすりと寝ている姉を起こさないように足音を消して服を回収。
そのまま廊下にでて着替える。
厚着もして、さぁ行くかと本日何度目になるのか忘れたが玄関にいくと先客がいた。
「マキさんは待っててくれていいのに」
「怪我人をパシらせるわけないだろバカ。
私も一緒に行く」
それじゃあ本末転倒な気がするが。
「沢山作ってもらいたいからな、荷物は多くなるぞ？」
それを持ってくれるということだろうか。
怪我人としてはありがたいが男としては少し情けない。
「半分とちょっとは俺が持ちます。これは譲れません」
俺の少しばかりのプライドを押し付ける。
マキさんもその俺の強がりには笑いを我慢できなかったようだ。
手を口に当てて上品な感じでクスクス笑った。

「男らしいというより男の子っぽい格好のつけ方だな。
そういうの好きだぞ、ダイ」

勝手知ったる人の家。
大とマキが買い物に出かけてしばらく経った後、
長谷大の自宅には本人から貰った冴子公認の合鍵を持って長谷家の鍵を開ける女性の姿があった。
そんな信頼の証とも言える鍵をもらっているのは現在一人、辻堂愛その人だ。
「流石にもう帰ってるよな。びっくりさせてやるぞ」
あえて大に確認を取らず、急に現れて驚かそうとする寸法だ。
他の同年代の男子と比べてジジくさいというか、大人びているというか。
主婦臭いというのが正しいのだろうか。
取り敢えず大体のことには動じない長谷大の驚いた顔を見たいという欲求が度々愛の心に現れる。
クールな喧嘩狼のらしくない子供心は長谷大にのみ見ることができる。

愛も彼以外には依然としてスタンスをかえず過ごしているが、どういうわけかそれなのに友人と呼べる存在は増えていった。
間違いなくその変化は大と付き合い始めてからのものだ。
自分が気づかないだけで本当は自分は変わったのかもしれないし、
男と付き合っている自分を見る他人の見る目が変わったのかもしれない。
両方かもしれないしどちらも違うかもしれない。
何にせよだ。
閑話休題。
抜き足差し足でリビングに入ってみるが誰もいない。
だったら自室だろうか。
取り敢えず持ってきた大の退院祝いの食材をテーブルに置く。
今日は夏からこの日まで頑張って磨き続けた料理技術を出し切るつもりだ。
大に自分の作った美味しいものを食べてもらいたい。
彼の入院中の食生活を聞いた時からこの計画を立てていた。
失敗してもいいように少し食材が多いがまあ大丈夫だろう。
さて、大はどこかと次は自室に向かう。
足音を消してこそこそと階段を上る自分をまるで泥棒のようではないかと考えたが、

直様その考えはパージ。
ゆっくりと少しだけ扉を空けて中を伺うとやはり大の姿はない。
代わりに少し寝苦しそうな冴子の姿があった。
はて、と思って部屋に入ってみる。
冴子はうんうん唸ってはいるものの目覚める気配がない。
「ヒロぉ・・・・・お姉ちゃんはね、弟が大好きなお姉ちゃんなの・・・・・・」
何やら聞き捨てならない寝言である。
だが肝心の弟に聞かれていないのでは意味がない。
将来の姉となるであろう冴子の問題発言を聞いて困りながらも彼女の乱れたシーツをかけ直した。
ピンポーン、と不意に家中にインターホンの音が響く。
客のようだ。
流石に家の人以外が出るわけにもいくまい、寝ている姉を起こそうかと迷う。
「先生、誰かきてるぜ。起きないと」
起こそうとはするものの、声は小さくて本気で起こす気はないようだ。
冴子もそれに僅かに反応しただけで直様再び寝息をたてる。
しかし客にはそれが通じるわけもない。

再び控えめな感じでインターホンが鳴る。
どうしたものか、もしかすれば重要な人かもしれない。
「ん～・・・・・・ヒロ、出て」
そのヒロなる人は今いないんだが。
愛は少し迷った後、覚悟を決めた。
少し早歩きで部屋を出て急いで玄関へ向かう。
「はい、辻ど・・・・・・違う。長谷ですけど」
できるかぎり柔らかい声質でしゃべる事を心がけつつ、目つきもできるだけ和らげる。
まさか人様の客にメンチ切るわけにも行かないのである。
「あれ、長谷センパイはいないんですか?」
「あぁ?」
客の方を見てみれば最近よく見る女の姿だった。
「ども、長谷センパイに来てもいいと言われたので来ました」
やたら清純そうな服装で固めた乾梓がその客人である。
どうやら長谷大の好みを考えての事らしい。
いつもつけているピアスも一切せず、黒や白、ベージュなどを基調とした地味めだが

可愛らしいファッションだ。
しかも脚フェチである彼の嗜好も理解してか知らずか黒のストッキングまで装備している。
完璧ではないか。
「ここは長谷ん家ではありません、帰れ」
バタンと無情にも閉められる扉。
梓はその行為に一瞬ポカンとする。
「ちょっと待ってくださいよ！　今長谷ですけどっていったじゃないっすか!?」
「うっせぇ近所迷惑だ迅速に帰れ」
「帰りません！　ってか何で辻堂センパイがここにいるんすか!?
長谷センパイどこに隠したんすか！」
隠してねえよと声を荒げそうになるが、ここで二階で眠る冴子を思い出す。
今のやりとりで起きてしまったかと玄関から階段の上を見るが、物音はない。
どれだけ深い眠りなのやら。
「マジで近所迷惑だ、取り敢えず入れ」
「まるで自分の家のような言い草ですね」
「将来の旦那の家だもの」

「・・・・・・マジふぁっく」
「んだとコラァー！」
ぶーたれる梓を締め上げようとするものの忍者のような素早さで愛の脇をすり抜け、
素早く靴を脱いで上がり込む梓。
想像以上の動きに愛の手は空を切る。
「ふはは、自分これでも逃げ足は他の追随を許さないんで」
「威張ることか！」
怒った愛にそそくさと逃げる梓。
即座にリビングに逃げ込む。
「あれ、マジで長谷センパイいない」
いたのなら自分が出るわけ無いだろうと愛は呟く。
「まぁいいか。これ冷蔵庫いれときますね」
「何だよそれ」
聞いたとたんえへんと胸を張る梓。
若干ウザイものを感じるものの愛は別に指摘しない。
「今日の晩飯っすよ。長谷センパイに調理してもらうつもりです」
「自分で作るという考えはないのか」

「嫁に飯を作ってもらって何が悪いんすか?」
「何の彼氏を嫁扱いしてやがるコラァ!」
愛と梓はギャーギャー言いながらも冷蔵庫を開いて持ってきた食材を片っ端から詰め込んでいった。
人の家の冷蔵庫を勝手に開いている段階で大変非常識な気がするが、沸騰した頭ではそこまで考えられなかったようだ。
「つうかその食材の金はどこから出てんだよ。また不良から巻き上げたヤツか?」
「同じ失敗は二度しませんよ。今回は前から貯めてたちゃんとしたバイトの金からっす」
流石にメロンの件で懲りたのか、その話題を出したとたん梓の顔も嫌そうだ。
愛もちょっと無神経だったかと思うが、まあここは確認しておくべきところなのだ。
「噂は聴いているぞ、暴走王国のメンバー潰して回ってるそうじゃねぇか」
「正々堂々やってますし、潰した相手から金もとってないですよ。やましいことはしてないっす」
別に皮肉をいったつもりはないのだが。
やたら刺々しくなった梓の態度に愛も少し困る。
「嫌味でいったわけじゃねぇよ、何で暴走王国を潰してるのか聞きたいだけだ」

愛のその言葉に少し探るような目で梓はみる。
「別に、自分のしたことの後始末ですよ」
吐き捨てる。
自分の撒いた種がまさかここまで面倒に成長するとは思わなかった。
梓はそのことを後悔しているし、今日だって暴走王国のメンバーを5人ほど潰してきたところだ。
「・・・・・・へぇ、総長は自分の後始末に奔走してるってことか」
「どこからその情報を?」
まさか愛に自分が暴走王国総長である事を知られているとは思わなかった。
「さぁな、まあ何にせよ無茶するな。大が心配する」
自分が総長であったことは特に愛にとっては重要ではないらしい。
梓も少し引っかかったものを感じるものの問い詰めることはしなかった。
「長谷センパイ、心配してくれますかねぇ?」
「するだろ、大の世話焼き具合を舐めんな」
愛も半ば諦めたように言う。
梓も口では言ったもののやはり大は自分を心配してくれるだろうと少しは思っている。

だからこそ二人は心配していた。
恋奈の件のように自分から危険なことに首を突っ込んで欲しくないものだが。
「そんなことより何で辻堂センパイがここに？　長谷センパイとデートの約束ですか？」
「だったら大がここにいないのもおかしいだろ。お前と同じ用件だよ」
「あぁ、だからあんなに食べ物持ち込んでたんすか」
ふと、二人は思うところがあった。
愛と梓、互いに似た用事ならどちらが優先されるのかと。
「アタシだろうな」
「そりゃそうっすよね」
愛が自分で作るのと梓が大に作らせるのなら優先するのは愛の方だ。
梓も特に不満を言うことなく同意する。
「自分もご同伴しても？」
「別に、好きにしろよ」
今回は冴子もいるし別にそういうイチャイチャを目的とした企画じゃない。
知り合いが集まってワイワイするほうがむしろ良いかもしれないとすら思う。
よって愛が梓を追い返す理由もなかった。

できるならイチャイチャしたい所だが。
できるなら寒い夜を人肌で暖め合いたい所だが。

ピンポーン、ともう数えるのも面倒になってきた。
取り敢えず長谷家に再びインターホンが鳴る。
「次はだれだよ」
「辻堂センパイに任せるっす」
「はいはい」
梓は最初から出る気もなく、冴子も起こすわけにいかないため再び愛が出る事になった。
駆け足で玄関へ向かい、自分の靴を履いてガチャリと戸を開ける。
「・・・・・・どうして長谷じゃなくて辻堂が出るのかしら。
来るところ間違えた事はなさそうだけど」
「げ、何でテメェが来るんだよ」
嫌な顔だ。
愛は渋い顔で恋奈を見る。

だがよく見れば恋奈の後ろにはよい子の姿もあった。
「まぁまぁ辻堂さん、取り敢えず外は寒いし中にいれてくれるかしら？」
「あ、あぁ」
よい子に言われれば仕方がない。
自分より長谷家と付き合いが長い彼女だ。
むしろよっぽど大の留守を預かる資格がある人物といえる。
「それで、長谷はどこ？」
「知らねぇよ。アタシが来た時からいないし」
3人が靴をぬいでぞろぞろとリビングに向かう。
「げ、恋奈様と総さ――――」
「おっとぉ!!!」
何やら口走りかけた梓に凄まじい速度で詰め寄って口を閉じさせるよい子。
モガモガと言う梓に恐ろしいメンチを切る。
「その名前で俺を呼ぶな、俺は良子じゃなくよい子だ・・・・・・・いいな？」
「も・・・・・・もが」
「そう、良い子ね」
今まで感じたことのない鳥肌が立つまでのプレッシャーに押されて頷く。

「何やってんだ？」
「何でもないのよー」
　愛の問いに普段通りの穏やかな表情で答える。
　既に恋奈にも同じように手回しを済ませたよい子はこれで一安心とため息をついた。
「で、二人まで何しにここ来たんだよ」
「別にどういう用事でもいいでしょ」
「あぁ？」
「何よ？」
「はいはい、人の家で喧嘩しないの」
　放っておいたらすぐ喧嘩を始める二人に困り顔で仲裁する姉貴分。
　睨みつけてくる愛にも別に動じることなくよい子は手持ちのビニール袋を愛に見せた。
「ほら、今日はヒロ君の退院日でしょ。だからお祝いに、ね」
　その袋にはやはり食材が入っているのだろう。
「私も同じ感じよ」
「自分にはないんっすか？」
「どの口がほざく」

「恋奈様冷たいっす」
恋奈と梓の相変わらずな掛け合いは無視して愛は頭をかかえた。
どうしよう、恋奈やよい子まで食材を持ち込みやがった。
とてもじゃないが今の長谷家の冷蔵庫は
「あら、既にぎゅうぎゅう詰めじゃない。どうしましょう」
「その中、最初から沢山入ってたのにアタシやコイツのも入ってるんだ」
「・・・・・・考えることは皆同じってわけね～」
よい子は困ったように手を合わせた。
愛も同じく困る。
というか四人も同じリビングにいて家主が一人もいない段階で何かおかしい。
「恋奈様、せめて通帳のあずがバイトで稼いだ貯金だけは返してくださいよー
手持ちのだけじゃ今月すげぇキツイっす」
「え？　あれもうカップラーメンに消えちゃったけど」
「ひっでぇ！　人のやることじゃないっす！」
憐れ梓は膝から床に崩れ落ちる。
そんな梓に恋奈は優しく肩に手を置いた。
「安心なさい、アンタには割のいいバイトを回してあげるわ」

「マジっすか!?　座ってるだけで時給１０００円超えるのですか!?」
「労働舐めんなクソガキ」
あまりのゆとりっぷりに一瞬でブチ切れる恋奈。
「漁業のバイトよ。朝早くから漁船に乗り込んで新鮮な魚引きずり上げてきなさい」
「嫌っす。乗り物無理ですし寒いし眠いのは嫌っす」
即答である。
確かに高校一年生の女の子にしてはあんまりなバイトである。
「そのバイト先って確かうちの母さんいるぞ」
愛のその一言に梓が硬直。
「辻堂センパイの親ってあの伝説の稲村チェーンじゃないですか！
知ってて選んだんですか！　あず殺す気ですか恋奈様！」
「偶然よ、偶然」
素知らぬ顔で視線を外す恋奈。
梓は必死で恋奈の胸ぐらを掴んで揺さぶりまくる。
「ま、まあ別にまだ決まったわけじゃない。金に困ったらそこに頼むと良いわ」
一応口添えしている程度なのだろう。
まだ採用されてすらいないわけで梓もほっと安心だ。

「そんなことよりこんなに食材どうすんのよ、マジで余りまくってるじゃない」
「そうね、これだけあればちょっとしたパーティーできるわ」
よい子も流石に困った感じだ。
「あれ？　何で鍵空いてるんだろう」
「ん？　この気に食わない臭いは・・・・・・」
4人が途方に暮れている所に待っていた人物の声が。
大は泥棒に入られたのかと警戒して家に入るが、玄関に丁寧に並べられた靴をみて誰がきたかわかったようだ。
「どしたの皆」
「お帰り、大」
まさか4人も来ているとは思わず驚きを隠せない。
「ごめんねヒロ君、事前に連絡しておくべきだったかしら」
「よい子さんまで、皆揃って何かあったの？」
「アンタの退院祝いよ。ほら、荷物よこしなさい」
左右から女性二人に挟まれて荷物を奪い取られる。
「辻堂センパイや自分もそんな感じっすよ。といってもあず達は朝に別れたばっかりですけどね」

空いた腕に梓が抱きつく。
意識して腕を胸の谷間に突っ込ませるあたり中々あざとい。
その行為に目ざとく気づいた愛は大の余った腕を引っ張った。
「テメェ大から離れろ、慣れ慣れしいんだよ」
「うっさいっす！　彼女だからって彼女面するんじゃないですよ！」
めちゃくちゃである。
「いや、彼女なんだから彼女面するだろ常識的に考えて」
マキもやはり同じ事を思ったのか冷静なツッコミを入れる。
これには愛も大も頷く。
「まぁ、ダイを独り占めされるのは私も気に食わないがな」
「え？　うわ！」
そう言って後ろから大の腰を持って二人から引き剥がす。
そのままお姫様抱っこで大を抱え上げて呆気にとられた二人にあくどい笑みを向けた。
「悪いな、ダイは私一人用なんだ」
「そんなのが通るか！　さっさと大を離せ腰越！」
「つってもな、実際さっきまで私の飯の為に買い物いってたし」

本当かと大に視線を向ける愛。
それに大は困ったような苦笑いを浮かべた顔で頷いた。
「ほらな、というわけで私はこれから大に飯を作ってもらう。どけお前ら」
不遜な態度で言い放つ。
流石に約束済みなら部外者が止めるのも筋が通らない、愛も梓も大人しく道を開けるが。
「こんな時間から食事始めたら晩飯入らないじゃない」
「そうね、せっかくだしもう少し待つのもいいんじゃないかしら」
恋奈とよい子がマキに立ちふさがる。
「待てねえよ。私はもう腹ペコなんだ、邪魔すんな」
にべもなく言い放つ。
少し意気地になったマキの様子にこれは駄目そうだと二人は困ってしまう。
「まぁまぁマキさん。マキさんの分だけ先につくるから落ち着いて」
そう言って大はマキの胸元からゆっくりと降ろしてもらい、自分の足で冷蔵庫前まで向かった。
そして買ってきた食材を入れようと普段通りに冷蔵庫を開けたとたん
「あぶぁ!?」

冷蔵庫から食材の雪崩が発生した。
マキを除く全員が少し申し訳ないように目を伏せる。
「何この食の倉庫。２週間位余裕で凌げそうなレベルじゃないか。
最初に開けた時より増えてるし」
様々な種類の食材を見て驚く大。
一体何だかわからないが、取り敢えずその壮観な冷蔵庫の中身に驚きを隠せない。
「それ、全員が持ち寄ったヤツ。好きに使っていいわ」
「マジで？　でもこんなにどう使えば・・・・・・」
自分を含めた六人でも一度に食べきれる量ではない。
「はいはーい！　あずにいい提案があるっす！」
困り果てた全員に乾梓が挙手をした。
彼女以外が不安な目で発言を促すと、彼女は豊かな胸をはって答える。
「闇鍋っす！　一度やってみたかったんですよ～」
ふむ、と全員がその提案を反芻する。
悪くはないかもしれない。
野菜、肉、果物、魚介類、卵など等様々な食材が揃ったのならある意味それを全部堪能してみたいものだ。

「いいかもね、皆もそれでいいかな？」
大が一番乗り気らしく、梓の提案に一番最初に同意した。
家主である彼がいうのなら仕方あるまいと全員も頷く。
「まぁ、大が言うなら」
「私も異論はないわ」
「あらあら、仕方ないわね」
取り敢えずは全員の同意となった。
夜は全員で鍋を囲む事が決定である。
「あれ、私の昼飯は？」
「夜が凄い量になりそうだから今は我慢しようマキさん」
「・・・・・・変なの出したら承知しねぇぞ」
口ではそういうものの、マキも闇鍋なるものを楽しみにしているらしく少し笑顔である。

「うめえええええ！　辻堂その肉私によこせ！」
「ざけんな！　テメェは肉ばっか食ってないでその白菜食えよ！」
　その夜、長谷家の食卓はかつてないほど賑やかだった。
「ヒロー、ちょっと具材足りなくなってきたわよ～」
「はいは～い、すぐ持って行くから！」
「はいヒロ君、取り敢えずこれで凌いでもらって」
「ありがと、流石惣菜屋の看板娘さんだ。手際いいね」
「そういうヒロ君だって専業主夫みたいよ」
「・・・・・・褒め言葉として受け取っておきます」
　よい子に渡された肉の盛り合わせと大量の肉団子を皿に盛って素早く食卓に持っていく。
　キッチンは現在料理に手馴れた大とよい子が担当しており、悲しい事に主役である大が食事にありつけない様となっている。
　彼の持ってきた皿を受け取った恋奈はそのことを少し悪く思っているのだろう、
「長谷、交代するからアンタがここに座りなさい」
「いいよ、後からゆっくり食べるほうが俺の性にあってるし気にせず食べてて」
「・・・・・・そう、まぁアンタがそういうなら良いけど。

我慢してるならはっきり言いなさいよ、いつでも交代するから」
その親切な恋奈に大はこそばゆいものを感じる。
「センパーイ、こっち来て一緒に食べましょうよ～」
「今長谷がそっち行ったらキッチンの人手足りないだろうが！」
呑気な乾さんにブチ切れる。
ズカズカと大股で歩いてそのまま握りこぶしを彼女に叩き込んだ。
「いったぁ・・・・・なにするんすか恋奈さまぁ」
「アンタね、何で長谷の退院祝いなのにその本人がキッチンいるのよ。少しはアイツ手伝うか交代しようとは思わないの？」
「思いません、自分今ヘルシーなしらたき食うことに夢中です」
「このバカタレは」
余りにも正論な事を言う恋奈に周りで食べていた他の人たちも慌てて彼女から目をそらす。
「腰越、アンタは手伝わないのかしら？」
「無理、私うどん以外作らない」
「女子力たったの3か・・・・・ゴミめ」
作れないでなく作らないといったあたり何か引っかかったものは感じるが、恋奈はお

構いなしに切って捨てた。
あまりの物言いに少しムッとするものの、それを抑えてまた鍋の肉を取る。
ちなみにこの闇鍋だが、ぶっちゃけ闇鍋していない。
食べられないものなど入っていないし、入れる具も全て大とよい子が丁寧に調理しているため単純に圧倒的な種類の具が入った水炊きだ。
ミンチ肉は手でこねつつ野菜を混ぜて肉団子に。
野菜も鍋にいれてすぐ食べれるようにキッチンにおいた別のナベで煮だたせている。
心遣いの行き届いたその食卓は否応なしに食べる側を楽しませた。

「ん～・・・・・・」
一人外に出て大きく背伸びをする。
少し骨がズキっとするものの痛み自体には慣れてきてそれほど辛くない。
既に時刻は２３時を過ぎており、調理に専念していた俺とよい子さんも遅れて食事を済ませた。
とはいえ俺もよい子さんもそれほど沢山食べるわけではないので鍋にはまだ大量の

具材が残った。
まあそれは明日愛さんが持ってきた卵やポン酢をいれて雑炊にするとしよう。
明日の食事のことまで考えている主夫臭い自分に苦笑する。
こんな考えも入院中ではできなかったことだ。
「しかし寒いな」
薄着で出たのが悪かった。
外は凄まじい冷気で、息を吐けば真っ白な蒸気が口から上がる。
それが冬らしくて風流というものだ。
少し子供心が起き上がった。
はっはっはと何度も連続で息を吐く。
その回数だけ立ち上る蒸気。
まるで機関車のようだと一人ごちる。
「なにやってるんですか?」
「乾さん、どしたの」
玄関からではなく、二階の俺の部屋から頭を出して声をかけてくる乾さん。
「ちょっと待ってください。よっと!」
器用に窓から屋根に、そして屋根から塀に飛び移って俺の横に来た。

地面に足を付けないのは靴を履いてないからだろう。
「身軽だね」
「皆殺しセンパイには劣りますけどね」
「あの人はもう何ていうか、忍者みたいだしね」
気配を消したり、人の死角をついて移動したり。
普通に現代社会におけるアウトローを超越した存在だと思う。
乾さんも俺の喩えに同意したのか笑いながら頷く。
「今俺の部屋どんな感じ？」
「総さ・・・・・・えぇと、よい子センパイ？　取り敢えずあの人が皆の抱き枕にされてます」
容易に想像がつく。
恐らくあの大きい尻を枕に姉ちゃんは寝ているだろう。
あれは実にいい尻だ。俺もケツ枕していただきたい。
「マキさんもヤンキー嫌いなよい子さんとは面識あったなんて意外だったな」
「え〟・・・・・・？」
「なにさ？」
何やら俺が変なことでも言ったのか、凄い変な目でこちらを見てきた。

「あ～、まぁ余計なこと言ったら自分血祭りに合いそうなんで今の反応は見なかったことで」

怪しいな。

まるで何か俺に隠し事をしているようだ。

そういえばマキさんも今日よい子さんを呼ぶ度によい子さんが慌てて口を抑えてたし。

何にせよ彼女が言いたくないなら詮索しないことにしよう。

気にはなるけど。

「しっかし今日は一段と寒いですね」

「うん、いい加減俺もきつくなってきた」

さっきから体がガタガタと震えて仕方がない。

風邪をひいてもアレだし大人しく家に戻ろうと振り返る。

門を潜ったとき、何かが降った。

「ん？　何か冷たいのが」

首筋に何やら冷たいものが落ちたのだ。

雨かと思ったがそれほど濡れた感じはしない。

だったら何だと冷たいものが落ちてきた方向、つまり空を眺める。

「・・・・・・そりゃ寒いわけだよ」
空には冬の代名詞、雪が降り出していた。
これだけ気温が低ければ不思議なことではない。
冬の湘南に雪は珍しいものでもない。
俺は特に何か思うこともなく大人しく家に入ろうとする。
乾さんにも濡れる前に早く戻るようにと声をかけるべく振り向く。
「――――っ」
息を飲んだ。
そこには物珍しそうに空を眺める乾さんがいたからだ。
手をお皿の形にして落ちてくる雪を受け止める。
しかし体温に触れれば粒のような雪は一瞬で溶ける。
彼女はそれを初めてみるような感じで眺めていた。
「そういえば、乾さんって沖縄育ちなんだっけ」
「はいっす。雪なんてここに来るまで見た事なかったですね」
ポツポツと振る雪を興味津々で見つめる子供っぽい姿だ。
「これって積もるんですかね？」
「どうだろうね、でもまだ積もるにはちょっと早いかも」

二月に入っているのなら積もるほどの雪が降ってもおかしくないが、流石に今はまだ早い気がする。

「自分雪合戦とかやりたいです」

「意外と子供みたいな所あるんだね」

「ふふ、それで辻堂センパイに石入れた雪玉をフルスイングで」

「それはマジで危ないからやめなさい」

主に君の命がだ。

絶対愛さんの性格上やり返すし、あの愛さんが握った雪玉なんぞ想像できない。超圧縮されて殆ど氷玉、もしくは鉄球並みの硬度になるのではなかろうか。

「そっすね、やめときます」

あっさりと取り消す。

若干拍子ぬけたものを感じながらも一応安心だ。

その後、俺達は特に話すこともなく、何かするわけでもなくただ空をみた。

街灯の光や各々の家の光が真っ暗な街中を照らし、雪を光らせる。

その風景は湘南に住んでいればさして珍しいものではない。

しかし沖縄で育った乾さんには俺とは別の風景が見えているのだろう。

「ねぇ長谷センパイ」

視線はこちらに向けず、声だけを俺に届かせた。
「自分、そろそろ不良やめようと思うんですよ」
「それはどうして？」
君は自分の好きなことをしたいから不良になったはず。
その不良をやめるということは、君はやりたいことを諦めて、やりたくないことに向き合わなければならない。
それは普通の人からすれば当たり前のことだ。
けれど彼女にとっては逃げ続けてきた当たり前の事。
「深い理由はないっすよ。子飼いにしてた連中もいなくなったし、自分も今となっては江乃死魔追い出されて独り身。
別に喧嘩が好きなわけでもなければ悪い奴らと群れたいわけでもない。
あずはもう不良続けてもする事ないし、メリットもないんですよ」
愛さんからも聞いてはいた。
乾さんはもうカツアゲをやめたのだと。
思い返せば先日俺を同伴させた喧嘩でも倒した相手を痛めつけこそすれ金品には手を出さなかった。
「それに、あずの好きな人は不良が嫌いみたいですし」

返す言葉に困る。
誰かと聞くのは間違っている気がする。
かといってすっとぼけるのも意識しすぎだ。
「ふふ、意地悪な言い方しましたね」
返答は求めていないのだろう。
彼女はやはりこちらに視線を向けないまま一人笑う。
「あずが今あるグループ襲ってるのは知ってますよね」
「ああ、暴走王国だっけ」
「はい、それで合ってます」
これも愛さんからの情報だ。
愛さんは俺に危険が及ばないように逐一こういうヤンキーの情報を俺に流してくれる。
勿論それがどれほどの組織なのかは口だけではわからない。
それでも今乾さんが敵対している組織はヘタをすれば江乃死魔すら潰しかねない大勢力とは聞いていた。
「でも、その暴走王国って乾さんの掛け持ちしてた所じゃ?」
以前俺は彼女に暴走王国のスパイなのかと聞いたときは曖昧なまま教えてはくれな

かった。
「正直に言います。あずは暴走王国の総長っす」
　驚きは無かった。
　そんな気はしていた。
　彼女ほど強い人がまさかただのスパイとは思えなかったのだ。
「でも、別に暴走王国で何かしたいわけじゃなかったんですよ。
　ただ、カツアゲをしやすくするため。江乃死魔を大きくするため。
　それだけのために使ってたグループです」
　暴走王国は強力な助っ人集団の寄せ集めだけあって各々の喧嘩は強いらしい。
　だというのにこの冬まで一度も表に出てきたりしなかった。
「もっとも、江乃死魔を切られた際に仕返しで潰す計画に使う事も考えてましたけど・・・・・・
　なんですかね、いざ切られてみると何だかそんな気も起こりませんでした」
　それは恐らく
「マキさんに手酷くやられたからかな」
「そうかもですね」
　憎しみの対象が片瀬さんではなく、自身を怪我させたマキさんに傾いた。

しかしそのマキさんが尋常ではない強さだ。
やり返そうにも並大抵のレベルでは逆に自分がより酷い反撃に合う。
それこそ自然災害に復讐しようとするものだ。
「あんな人外に恨みなんて持っても不毛ですしね」
乾さんも俺と同じ考えだ。
「で、喧嘩にも負けて組織からも追い出されて不良やめようかなと思ったら自分のグループが邪魔になったわけっす」
総長がグループを抜けるだけなら問題はないのだろう。
けれど暴走王国はその構成しているメンバーに問題があった。
いわゆる喧嘩屋の寄せ集め。
故に全員が同じ目的を持っているわけではない。
単純に喧嘩が好きな人もいれば、喧嘩して倒した相手から金品を奪いたいだけの人もいる。
そして一番の問題が彼らを『雇っている』という形式だ。
我の強いならず者をまとめるのに一番効率がいいのはいつだって金である。
乾さんはその暴走王国の約３０人に給料を払うことによってつないでいた。
このせいで乾さんは総長をやめるにやめられなくなったのか。

当然だ。
働いた分の金は払う義務がある。
故に給料を払わないまま総長を辞めるから、はい解散。
彼らはそんな簡単にはいかない。
だから片瀬さんに有り金を全部奪われた今、乾さんが彼らにとった行動が叩きのめすという答えだ。
冷静に考えれば雇った人間に給料を払わず、それにごねる社員を殴るという酷いものかもしれない。
しかし、彼らに限っては俺はそれは違うと思う。
彼らも罪のない人間を脅して金を巻き上げていたのだ。
そしてそれを生業にするのなら同類に叩きのめされても文句は言えない筈。
悪事には報いが必要だ。
ただ、少し筋が通っていない気がしてスッキリしないけど。
「恋奈様とはまるで別の考え方ですね。軽蔑しました？」
「どうだろうね」
江乃死魔を必死で守ってより大きな集団にしようとする片瀬さん。
暴走王国を邪魔だと切り捨てて自ら潰そうとする乾さん。

向かっているベクトルは限りなく真逆かもしれない。
「でも、一般人に迷惑ばかりかけるグループは嫌いかな」
「・・・・・・そのグループの総長ですね自分」
皮肉のつもりで言ったわけではないのだが。
若干落ち込んだようだ。
「でも責任はとります。きっちり暴走王国は壊滅させて、それからあずはヤンキーやめます」
責任。その言葉こそ彼女が逃げ続けたものではなかったのだろうか。
悪事を悪事と認めて、その清算をしようとするその姿勢こそ彼女が更生している証ではないのだろうか。
「うん。でも無茶はしちゃだめだよ」
「はい、自分も痛いのは嫌いだからやばかったら逃げますよ」
逃げ足は自信ありますし、と付け加える。
「そろそろ家に入ろう。沖縄育ちなら寒さに強いわけでもないでしょ?」
「はい、実はさっきから我慢してました」
ようやくこちらを見る彼女。
見れば顔は寒さのせいで赤らんでおり、手も真っ赤だ。

さて、それじゃあ来た所から戻ろうかと少しだけ乾さんから視線をはずしてふと思い出す。
「今屋根から登ったら危ないかも」
雪のせいで屋根は少し濡れている筈。
濡れた屋根は汚いし、何より滑って危ない。
「ですね、どうしましょうか」
塀に腰掛けたままニヤニヤとこちらを見つめる。
言いたいことはわかっている。
「・・・・・・はい、どうぞ」
彼女の方に近づいて背中を向ける。
まぁこの状況では俺が彼女をおんぶするしか考えつかなかったのだ。
乾さんもそれを待っていたらしく、身軽に塀から俺の背中に飛び移った。
その体は想像以上に軽かった。
「んふ～、センパイあったか～い」
「くすぐったいって」
腕をがしっと俺の首に巻きつけて盛大に密着する。
顔は俺の首筋にまで近づけているらしく彼女の息があたってこそばゆい。

「あれ？　この歯型って」
「あぁ。それ愛さんが前に付けたやつだね」
肉ごとちぎったのが本当の所だが、彼女から見たところちゃんと歯型になってるらしい。
「これは所有権アピールってところですかね。小癪な」
しかも愛さんの目的がちゃんと相手に伝わっている。
すごいな、何で首筋にある歯型だけでそんな所有権アピールとかわかるんだ。
などと考察していると、何やら乾さんが歯型のある首筋の逆側に顔を近づける。
一瞬嫌な予感がよぎるが――――
「あむっ」
「痛い！」
遅かった。
洒落にならない痛みが首筋に走る。
まさか乾さんを振り落とすわけにもいかず、身を硬直させて痛みに悶絶する。
その後数秒ほどしてようやく首から口を離したと思ったら、ペロリ噛んだ箇所をそのまま舐められる。
「何をすんのさ」

「ふふん、所有権なぞあずには知ったことないという革命の意思表明っす」
・・・・・・また返答に困ることを。
俺にどうしろというのだ。
俺が困っていることに気づいたのか、乾さんは空気を変えようと足をパタパタさせて俺に更にしがみつく。
「早く中に入りましょうよ、もう寒くて仕方ないっす」
「はいはい、仰せのままに」
外は寒かった。
ただ、例外として彼女が触れていた背中だけは暖かかった。

11話：悪意

辻堂愛は僅かに積もった雪の上を一人歩いていた。
向かう先は恋人である大の所ではなく、三大天である自分や恋奈、マキが集まりやすいところだ。
詰まるところ、彼女が向かった場所は江乃死魔の拠点である。

「遅いわよ、辻堂」
「仕方ねえだろ、こっちはこっちで用事があったんだよ」
今日もやはり人数が少ない。
梓の引き起こした騒動で江乃死魔のメンバーは激減した。
現在その数は３００人にぎりぎり到達するかどうかである。
もっとも、その人数でも既に湘南最大の組織なのだが。
「怖いねぇ、そんなにダイが心配なのか江乃死魔総長は」
「アンタは黙ってろ！」
江乃死魔拠点の椅子に既に腰掛けていたマキは恋奈をはやし立てる。

恋奈もその挑発に露骨に苛立ち、売り言葉に買い言葉と良くない空気が出始めた。
「やめろお前ら。喧嘩するんだったらアタシ帰るぞ」
「・・・・・・ふん、わかったわ。さっさと今回の要件を話すわよ」
愛が本気で帰るつもりなのを察して、本題に移る。
今回三大天が集まったのはある理由がある。
元々この愛、マキ、恋奈の３人は全員がヤンキーをしている理由、目的、そして各々の考え方が明らかに違う。
故に互いにソリが合う訳もなく、出会うたびに喧嘩が始まってもおかしくはない。
だというのにその面子が揃って話し合うということはそれだけ重要な事があるのだ。
「昨日、辻堂に言われた通り長谷の家の周りに監視を置いてみてわかった事があるわ」
「あぁ。アレお前の所の奴か、てっきり私は――――」
「長谷を狙っている奴らと思った。だろ」
マキの言葉を先取りしてかぶせる恋奈。
そしてそれがマキの言おうとしていた事と一致している。
「腰越の言おうとしたことは間違ってないわ。
長谷や梓を狙ってる奴がいないか確認するために昨日は監視を置いたんだし。
多分腰越が見た奴らの中には実際に長谷を狙ってた奴もいたでしょうね」

今日、その結果を知らせるために全員が集まった。
「結果としては最悪だわ。案の定長谷を狙っている奴は私の想像以上にいるみたい」
監視結果では大の家の周囲をうろつく不良が結構な人数存在した。
今日の朝には捉えた一部の不良を尋問した結果、
どうやらその数は既に手に負えない数にまで達していることがわかったのだ。
「梓の件で江乃死魔を追放された奴ら、そして暴走王国関係の奴ら。
両方が長谷を狙っているのはまず間違いないわ」
何故ここで狙われるのが大であって、元凶となった梓ではないのか。
単純なことだ。大には人質としての価値が余りにもあり過ぎた。
梓本人はおろか三大天全員と懇意にしている男。
その彼を人質にすればそれは強力なコマを手に入れるのと同意になる。
彼を餌に愛達を倒す事も可能かもしれない。
逆に人質として愛達を共倒れさせることだって可能である。
つまり、現在湘南の不良勢力を握るには三大天を直接倒すのではなく大を手に入れることが近道なのだ。
「そうか、それでその捕まえた奴らは他に何か知っていたか?」
「いえ、現在長谷を狙っているのはどこのグループにも所属できないはぐれ不良ばかり。

情報どころか各々が勝手に行動しているだけ、ただの烏合の衆よ。
暴走王国の奴らだって梓から身を守るための人間と思ってるくらいでしょうね」
つまり互いにつながりがない為、何時どこで行動を起こすかわからない。
形のない組織ということになる。
「どうする辻堂。
長谷は私の仲間でもあるわ、アンタが良いなら私は護衛を付けるつもりだけど」
恋奈は既に手を回している。
後は彼女の同意を得るだけだが
「メンドくせぇな。
そういうのはお前らだけでやってくれ、私は別の事をさせてもらうぜ」
ここでマキが口を挟む。
「用はそれだけか。なら私は帰るぞ」
「ちょ、待ちなさいよ」
聞く耳持たず、マキは恋奈の静止を無視して江乃死魔の拠点から立ち去った。
残った愛や恋奈もそれに呆気にとられた。
「ったく、アイツは。アンタはどうなのかしら、辻堂」
「アタシは・・・・・・」

珍しく愛が深刻な面持ちで答えを出せないでいる。
恋奈もその答えを急かすことはなく、黙して待った。
「いや、考える事はないか。頼む、恋奈」
頭は下げないが、それでも恋奈の提案は受け入れた。
ここで彼女の力を借りれば愛の面子は僅かだが傷つくだろう。
しかしそれ以上に、自身の面子などより大切なものがある。
「意外ね、てっきり断るものかと思ってたけど」
恋奈は愛の性格上絶対に自身の手助けを受けないと思っていた。
しかしそれは裏切られ、愛はその手を受け取った。
「面子ばかりに気を取られて、もし大が本当に怪我でもしたらアタシは多分一生後悔する。
だからお前にはアタシに言って欲しいことがあるんだ」
愛の試すような笑みに恋奈は少し困る。
だが僅かに考え彼女が何を求めているのか理解した。
「貸しにしとくわ。いつか返しなさいよ」
「ああ、その台詞が聞きたかった」
満足げに頷く。

助ける、庇う、手をつなぐ
そんなのは三大天には必要のない概念だ。
互いに嫌いあって、互いに憎み合っているのならその関係に似合う言葉は一つ。
貸し借り。
人情のない言葉かもしれないが、それでも今の二人にはその言葉こそ何よりも性分にあったものだった。
「それじゃあ、今日たった今から長谷には江乃死魔から護衛を付けるわ。アンタの方はどうするわけ？」
「アタシは今まで通りだ。今から大の所へいって、いつも通り過ごす」
「そう、まぁ辻堂が傍にいれば馬鹿共も襲ったりはしないだろうけど。今日長谷は外出しないって言ってたわよね？」
「あぁ、確か久しぶりに家でゆっくりしたいとか言ってた」
ここで恋奈は一つの懸念を抱いた。
確認はしたものの確証がない。
つまり今、この瞬間長谷大が一人で外出している可能性はゼロではない、と。
いや、そもそも自分たちや梓を狙う不良どもがどれほどの数なのかわからない。
その中で更に大を狙うものの数となると恋奈でも把握できない。

だが、恐らくは少なくない筈。
三大天や梓は既にはぐれ不良ごときでは相手にならないほど力がある。
故にその四人への恨みを晴らす、もしくは弱みを握るには大を狙うのが最も効果的だ。
不良共は相手の弱みを握ることにかけては素早い。
確実に大は現在危険な段階となっている。
「辻堂、アンタ長谷の携帯にコールしてくれない？　少し嫌な予感がする」
「・・・・・・ああ、アタシも何か思うところができた」
互いに同じ事を思ったのだろう。
愛は大の携帯電話に即座にコールする。
自分の携帯に耳をあてて相手を呼び出す電子音を聴き続ける。
しかしどれだけ待てども相手は出てこない。
「クソ、出ない！」
「落ち着きなさい、単純にマナーにしてるか忘れて外出しているだけかもしれないじゃない」
愛を宥めながらも恋奈自信焦り始める。
「アンタ達、今すぐ街中に出て長谷大を捜しなさい！　私たちも動くわ！」

恋奈は迅速に部下へ指示をだし、江乃死魔全員を動かす。
「アタシも大が行きそうな所片っ端から行ってくる、見つけたらすぐに連絡を頼む！」
愛は一人で湘南の住宅街へ駆け出した。

視線を感じる。
それも、一人ではない。
それこそ片手では足りると思えない程の眼の数だ。
昨日は浮かれていて気づかなかったが、多分退院した日からずっと俺に向けられていたのだろう。
「・・・・・・気持ち悪い」
明らかに敵意を持っている質だ。
恐らく、人気のない所へ行けばそのまま襲いかかられるかもしれない。
入院前とは余りにも違う現状に思考が追いつかない。
現在俺は愛さんの家に向かっていた。

先日の集まりでどうやら彼女は財布を忘れていた。
だから贈りにいっているのだが、明らかに選択肢を間違えた。
今からでも愛さんに連絡して少しでも早く合流すべきか。
そう考えて携帯をポケットから取り出そうとするも、そこにはなにもない。
なるほど、つまり忘れたということか。
自分の馬鹿さ加減に呆れ果てる。
振り向いて周囲を確認すればやはり一般人の姿しかない。
しかし間違いなく俺に視線を向ける人がいる。
焦る。
よく見る殺人鬼に追われる映画の主人公ってこんな気分だったのかもしれない。
どうするか。
このまま自分の家に戻る、どこかの店に入る、愛さんの家に進むの選択が俺にはある。
最も安全なのは店に身を置くことだろう。
だがそれは時間が経つにつれて逆に危険になる。
携帯が無い今、店で無為に時間を潰して夜にでもなってしまえばそれこそ危ない。
かといって戻ろうにも距離的には愛さんの家に行くのと大差ない距離だ。
つまり袋小路、既に俺は選択を誤っていたということだろう。

だったらせめて少し遠回りになっても人通りの多い道を進むしかない。
俺は覚悟決めて愛さんの家へ向かう事にした。

その結果、愛さんの家には誰もいなかった。
どうやら彼女の両親も未だ旅行から帰ってきていないらしい。
「・・・・・・拙いな」
ゴクリと生唾を飲む。
感じる視線は先ほどより気配が濃い。
俺が明らかに警戒しているのが伝わっているのだろう。
つまり、いつ強攻策でこられてもおかしくない状況だ。
どうする。
ここで時間を潰せばいずれ愛さんが帰ってくるだろう。
しかし、それはここに愛さんがいないと言っているのと同じ意味だ。
余計に彼らを焚きつける行為になりかねない。
実際のところ俺にはもう選択肢がなかった。
冬の寒さのせいで外には余り人がいない。

時間はまだ暗くなるまで余裕があるものの、行く場所がない。
よって距離や時間を考えれば俺はもう家に帰るしかない。

そして俺は案の定襲われた。
それはあっけない事だった。
人通りが途切れた場所に入ったとたん数人の不良に取り囲まれ、そのまま――

息が切れるほど走った。
いや、今なお走り続けている。
スタミナには自身がある。だが全力で走り続ければどんな超人であっても長くは続かない。
冬の冷たい風を口から一気に吸い込んで、更に探す。
心当たりのあるところは大方回ったが彼の姿はない。

大の家にも行ったがやはり外出中とのことだ。
「クソっ、どこに行ったんだ大のやつ！」
焦りが収まらない。
恋奈や自分が想像したイメージはあくまでもイメージだ。
実際に起きる可能性はそれほど高くない。
だが、現状を鑑みれば一笑に伏すことができるわけなかった。
殆ど調べ尽くした愛はここに来てふと思い出す。
自分は今日江乃死魔に向かう時に気づいたが、財布を大の家に忘れていた。
それに大が気づいたのなら恐らく彼は自分の家に持ってくるのではないか？
「調べてみるか」
息切れして、休憩を求める身体にムチをうって再び足を動かした。
そのまま凄まじい速度でまずは大の家に戻る。
そこから彼が通るであろう道をなぞって走った。
愛が走ればそこから自宅まで戻るのにさして時間は必要とせずあっけなく大を見つけれないまま目的地へつく。
しかし家の前にも彼の姿がない。
だったらと別の仮定をする。

もし彼が途中自分をつける不良に気づいていたら？
間違いなく喧嘩できないのなら人気の多い道を選んで通るだろう。
けどそれでもすべての道に人通りがあるわけはない。
どこかでやはり人目のない道を通ることになる。
つまり、遠回りする感じでここから大の家に向かえばいいのかもしれない。
そもそも大がここに来たのかすらも定かではないが、片っ端から探していない箇所を潰していくしかないのだ。
再び全力で比較的人通りの多い道を選んで大の家に向かう。
商店街や大通り、視界の良い道。
そして見つけた、人通りのない道。
近場には公園のある住宅地だ。
冬の住宅地は想像以上に人通りが少ない。
昼には大人は仕事に出かけているし、子供や主婦は寒いため家で生活することが主だ。
ここで全力で気配を探る。
マキのように野生のカンや鼻の良さはないが、それでも人の気配を察知する程度はできる。

「――――声が聞こえる、あっちか!?」
少し遠いところから何やら威勢の良い声が聞こえる。
まるで喧嘩でテンションが上がった時の不良の声のようだ。
まさか、いや。そんな。
嫌な予感に頭が真っ白になりながらもその声のした場所に走った。
僅かな時間で目的の場所へ到着し視線を動かす。
そこは明らかに子供すら使わない程人目につかない場所にある日陰の小さな公園。
不良が狡い事をするのに都合のいい場所だった。
「・・・・・・・・・・」
愕然として立ち止まる。
遅かった。
予感はあたってしまったのだ。
そこには、地に伏せたままピクリとも動かない大をなお痛めつける不良の姿があった。
「何を、している」
酷く冷めた声が口から出る。
「あぁ?」

その声に気づいた数人の不良は威嚇するような目で愛を見た。
そして愛を見た瞬間、全員が硬直した。
愛は感情のこもらない瞳で倒れている大を見る。
見ればその姿は悲惨で、頭からは大量の血が流れ、腕はありえない方向へ曲がっている。
幸いにして顔は守っていたのかそこだけ怪我はほとんどない。
しかし、程度など関係ない。
彼がリンチを受けたという事実しか今は愛の頭には無かった。
「や、やべぇ！　逃げろ！」
不良たちは顔を真っ青に染めて一斉に散りはじめる。
だがこの公園は本当に不良たちにとって都合のいい場所だった。
獲物が逃げられないように一箇所しかない出入り口以外は全て高いフェンスで覆われているのだ。
つまりどうあがいても愛の横を通らざるを得ない。
愛は慌て逃げる小物共を見る。
大を一方的に袋叩きにして、自分が傷つくのは嫌なのだろう。
「――――殺す」

生まれて初めて、相手に明確な殺意を抱いた。
手加減などする気はない。
いや、それどころか相手がどうなろうと殴るのをやめるつもりはない。

辻堂愛は大の入院している病院のロビーで立ち往生していた。
彼女は現在凄まじいほどの剣幕で立っている。
「・・・・・・畜生っ」
自分を殺したいとすら思う。
悠長に江乃死魔の手を借りている場合ではなかった。
そんな事をしているあいだに長谷大は自分の家の近くで襲われたのだ。
治しかけの骨は再び折れ、頭からは血を流し、一方的に悪意を向けられている彼の姿があった。
それを見た愛は完全に逆上し、彼を襲った不良を殺しかねないほどに痛めつけた。

いや、途中恋奈が来なければ死ぬまで殴り続けたかもしれない。
その不良は現在べつの病院で大以上の酷い怪我で入院している。
恐らく後遺症が残る程だろう。
死んでいないのが奇跡なレベルの怪我だったらしい。
恋奈や自分の見通しが甘かった。
大は三大天と仲のいい程度の繋がりならば恐らく今回の奴らに襲われなかった。
けれど梓とも懇意にしているというのが決め手になったのだ。
梓を逆恨みする奴は余りにも多い。
江乃死魔にいた時から彼女は敵対する相手には必要以上の制裁を与えていた。
また、子飼いにしていた者達にも暴虐な命令を繰り返していた。
江乃死魔を抜けさせられた今彼女に服従する理由もなく、それどころか追放された原因となった梓に恨みを持つものは多い。
更に最近の暴走王国の件。
今や梓を恨む不良は江乃死魔の１００人はくだらないレベルだ。
今回の奴らもそうだった。
梓への当てつけとして大を痛めつけたらしい。
馬鹿なやつらだ、三大天ともつながりのある大を襲って自分の身が無事で済むとでも

勘違いした結果の行動だろう。
「少しは冷静になったかしら、辻堂」
彼女の傍に恋奈の姿があった。
相手を殺すつもりで殴り続けた愛を止めたのが他でもない恋奈だった。
流石の恋奈でも殺人を犯した罪までなかった事にするのは厳しい。
できるのなら自分の手で大を襲った馬鹿共をなぶり殺しにしたいところだが、その気持ちすら抑えて必死に愛を止めた。
数度暴走した愛に殴り飛ばされたが、幸い異常にタフな体質のおかげで何度も立ちはだかることができたのだ。
「止めてくれて助かった、あのままだとあのクズ共を殺してた」
「アイツ等には相応以上の報いを与えるわ。
だから今はアイツ等のことより長谷の事を考えなさい」
恋奈も愛も基本は冷静な性格である。
だからこそ怒りも飲み込むことができる。
そんな怒りよりももっと大きな感情がある。
「大の様子はどうだった、意識は戻ったのか？」
そう聞きながら胸が落ち着かない。

もし、大がこのまま目を覚まさなかったら
もし、後遺症が残って一生苦しむことになったら
自分は冷静でいられる気がしない。
「安心なさい。目は既に覚ましてるし、精密検査でも骨折や打ち身が酷いだけで障害が残るような怪我はしてないと診断されたわ」
その言葉に心から安堵する。
ひどいのは見た目だけで程度はそれ程でもなかったらしい。
「それよりももっと別の所が酷い事になっていたけれど・・・・・・」
沈痛な面持ちでつぶやいた。
別のところとは何なのだ、愛は訳も分からず恋奈の次の言葉を待つ。
しかしいくら待てども彼女は口を開かない。
「辻堂、先に言っておくけど今長谷と会うのはやめておいたほうがいいわ。
どちらも傷つくだけかもしれない」
「どういう意味だよ。詳しく説明してくれ」
「・・・・・・あいうタチの悪い不良に襲われたのは初めてなんでしょうね。
今の長谷はそのトラウマで私たち不良のことを――――」

「大、アタシだ。入っていいか？」
恋奈に最後に言われた事を否定するように愛は急いで大の病室へ向かった。
ノックや声をかけても返事がない。
この中にいることは間違いないはずなのに、何故か居留守を使っているかのように応答がない。
「・・・・・・どうぞ、入って」
かなりの時間が経って聞こえてきたのは間違いなく大の声だった。
だが、こんな力のない声をした大の声は愛にとって初めて聞いたものだ。
音を立てないようにゆっくり扉を開いて入室する。
そして大の様態を見ようと彼に視線を送るが、大は布団にくるまってベッドの上に座っていた。
そのせいで顔以外は怪我の程度がわからない。
それどころか包帯まみれの顔も伏せられていて顔色すら把握できないのだ。
「ったく、心配させやがって」
空気を和ませようと軽口を叩きながら彼のベッドへ腰掛ける。

「恋奈から聞いた、後遺症とか残る心配はないんだってさ」
「そう」
彼を安心させるために言葉を選んだ。
けれど彼は変わらず陰鬱としたまま反応が薄い。
「怪我の方はどうだ、やっぱ痛いだろ？」
「別に、麻酔がきいてるからそれほどでもないよ」
普段の愛へ向ける反応ではない。
愛もこの拒絶するかのような淡白な対応をする大に心を騒がせる。
明らかに自分を避けているかのようなモノだ。
「大、どうしたんだよ。何かいつもと違うぞ」
怪我人に言う言葉ではないだろう。
けれど余りにも大らしくないその態度に愛は問わずにはいられなかった。
目も合わさず、相手の対応は雑で普段の大なら絶対にしない態度なのだ。
「・・・・・ごめん」
何に謝っているのか。
それすら定かではない大の返答に愛は余計に懸念を抱く。
だったら目で彼の内心をさぐろうと彼に近づいて、未だ一度もこちらを向かない顔に

手を伸ばす。
「な、何を？」
「大、怪我してるのにちょっと乱暴かもしれないけどゴメン」
僅かに大は抵抗するものの、愛が首を傷めない程度の力で無理やり顔を合わせた。
この瞬間悟ったものがある。
「大、お前」
即座に手を離す。
ようやくここで理解した。
大は自分を拒絶しているわけでもなく、適当な態度をとっているわけでもなかった。
単純に、怯えていたのだ。
愛と目を合わせたとたん大の目は、
何も知らない一般人が愛を見るその目と同じものになった。
つまり、怯え、恐怖。そういった質のものになった。
「おかしいよね、俺。なんで愛さんにまで怖がってるんだろう」
顔を合わせた瞬間から大の体はまるで病気のようにガタガタと震えだす。
両手で自分の体を抱きしめて落ち着かせようとするものの一向に収まらない。
それどころか余計にひどくなるばかり。

ようやく恋奈が言ったことを理解した。
大は確かに別の所に大きな後遺症を残している。
明確な人の悪意によって心に深い傷をつけられた。
愛はその事に深く傷ついた。
大が愛にとって他のどうでもいい人間のように自分を恐れた目で見た事。
大が自分に恐怖していること。
間違いなく不良である愛は大にとって心を追い詰める存在にしかならないという事実に。
しかし、それでも愛は構わずそのまま大を抱きしめた。
「ごめん、大。無神経な事した」
せめて体温の暖かさが伝わるようにと、シーツ越しではあるが体を密着させる。
依然として大の体の震えは止まらない。
大に負荷を与えないために顔を合わせることもしない。
ただ、温まるようにと抱きしめる。
「ごめん愛さん、俺」
「大が謝る必要なんてないよ。お前はただ巻き込まれただけなんだ。
アタシ達ヤンキーの馬鹿みたいな事情に」

大は抱きしめ返そうとするも両腕が折れていて動かない。
否、例え折れていなくとも恐らく大は腕を上げることはできなかった。
「約束するよ大。もう絶対にアタシはお前を傷つけさせない。
ゴメンな大。全部アタシ達の不始末のせいだ」
「違う、違うんだ愛さん」
愛は二度と大が不良に襲われぬようにすることを誓った。
しばらくは自分たちも少し時間をおいたほうがいいかもしれない。
それは愛自身にはとても辛いことだが、大のストレスにはなりたくない。
だが、大は愛が決定的に勘違いしている事を伝える。
「俺が襲われた事を愛さんが気にする必要はないんだ。
愛さんやマキさん達のような湘南最強の不良と関わっていれば俺はいずれ怪我をする。
そういったのは愛さんだったじゃないか。
それを知って尚俺は愛さんと付き合うことを決めたんだ」
だから俺のために愛が傷つく必要は無い。
「俺が襲われたのはある意味必然だった。
なのに俺はそれになんの備えもしてこなかった。

ただ愛さんに甘えていただけで、俺自身が何も積み重ねていなかった」
今回の件だってそうだ。
携帯電話を忘れなければ視線に気づいた時点で愛に連絡を付けることができた。
そもそも一人で外出するような無用心な真似をしなければよかった。
考えればいくらでも対処のやりようはあったはずだったんだ。
だというのに平和ボケした自分はそれを何一つ考えていなかった。
「俺が今愛さんに怯えているのも、俺が単純に臆病なだけで愛さんが自分を卑下する必要なんてない」
目を合わさなければ何とか怯えずに口は動く。
「だから何も愛さんは悪くない。
悪いのは俺一人で、むしろ愛さんが俺を責めるべきなんだ」
「・・・・・・・やめてくれ」
愛は大の言葉を静止させる。
「それでも、お前が襲われる原因はアタシ達不良なんだよ。
不良が勝手に恨みを買って、不良が勝手にお前に八つ当たりしたのが全てなんだ」
愛は大を引き離し、真っ直ぐ目を見て言う。

大はその目を僅かにそらす。
その余りにも大らしくない行為に余計に胸を痛めた。
大をこんなに傷つけて、心まで抉ったのは忌々しい不良だ。
そして愛自身もやはりその不良なのだ。
「その結果大はそんな目にあった。
お前が何か悪いことしたか？　お前が誰かを傷つけたか？」
その問いに大は答えることができるはずもない。
「恨むヤツの大切な人間を狙うような狡い真似をするのが不良だ。
そんなクズを擁護なんてするんじゃねぇ。
何も悪いことしていないお前が謝る必要なんてないんだ」
「それでも愛さんはそんな不良じゃない」
互いに平行線だった。
「愛さんはいつも筋が通っている事しかしない。
愛さんは不良かもしれないけど、それでも俺には今愛さんが言った不良なんかと一緒くたにできるわけがない」
愛と関わる前までは不良なんて単純に暴走した若者程度の考えしかなかった。
やりたいことをやって、嫌な事から逃げ続ける存在。

でも、愛はそんな不良と同列にしていい人間ではない。
不良に怯え激しく拍動する心臓。
ブレる思考能力。
落ち着かない精神状態。
相手を見れない瞳。
そんな情けない自分を焚きつけて、自分に逆らうように愛の目を睨むように見る。
「愛さんには不良全体を悪く言うのはやめてほしい。
俺にとって不良の象徴は君なんだ、筋を通して、自分の意思を貫く。
そんな不良の愛さんに俺は惚れたんだ」
「大、何を言って――――」
「余りにも俺は愛さんに関わりすぎたんだろうね。
気がつけば不良の危険さを意識しなくなって、どんな不良にだって分かり合える所があると慢心してた」
そう勘違いするほどに美しい在り方を示す不良である愛を見すぎていた。
「でも、分かり合う事もできない人もいる。
俺はそこを失念してた。愛さん、もし今回の事に諸悪の根源があるのだとすればそれは」

間違いなく。

「悪意を向けることのできる現状なんだ。

悪事を律する為に法律がある。規律を作るために規則がある。

今の湘南にはそういうのが無いのだと思う」

人でもなく、物でもなく。悪いのは規則の壊れている現状。

そんな、形のない物大は悪だと言った。

「なんでそんな目にあってんのに、アタシ達不良を責めないんだよ・・・・・・」

声が震える。

目を背けたのは今度は愛の方だった。

「不良全体が怖くなったから、お前は今アタシにすら怯えてるんだろうが

あれだけ殴られて、また病院送りにされて。

なのに何でそこまで平和主義を貫けるんだよ。ワケわかんねぇよ」

不良なんて嫌いだと行ってくれた方が愛はありがたかった。

これで心おきなく不良らしく大を傷つけた不良どもを片っ端から潰すことができる。

それでより愛は大に嫌われるかもしれないが、大が安全に暮らせるならそれは納得できた。

けれど思惑とは外れて大は襲った相手にすら恨み言を口にしない。

「不良は好きじゃないよ。これは今も前もずっと変わらない。
でも、それでも俺は不良の中に愛さんみたいな人がいる事を知っている。
だから不良全体を嫌いになることなんてできないよ」
弱いものを虐げ、強いものに媚びるのが不良だろう。
でも愛はそもそも媚びる必要がないほど圧倒的に強い。
その強さは肉体的なものばかりではなく、その人としての在り方が強かった。
故に大は愛に憧れているし、惚れ抜いている。
「愛さん。俺は愛さんの事が大好きだ。
不良を大好きになったから、そのせいで俺はこんな目にあったと君は言うのかもしれない。
でも、こんな目にあったからこそ俺がやっと自信をもって言える事がある」
既に我慢の限界は来ている。
冷や汗は止まらず、心臓も張り裂けそうなほど鼓動する。
「どんな目にあったって俺は愛さんの事を愛し続ける自信がある。
だからこれからも俺の彼女でいてほしい」
愛が初めて別れを切り出したあの日。
あの日からずっと大は思っていたのだ。

もし本当に愛が恐れていた事が起きればどうなるのかと。
そしてそれが今だ。
悪意をもった不良に襲われて病院送りにあった。
未だ全身は痛みを訴え、心は挫けている。
それでもまだ愛への恋心は微塵も消沈する気配などない。
「愛さんの恐れていた現状がコレだ。
そしてこうなって尚俺は愛さんのことが大好きなんだ」
一種の病気なのではないかと苦笑する。
なるほど、恋の病は想像以上の大病のようだ。
「馬鹿、そんな情けない様で何言ってんだ・・・・・・」
口ではいつものような憎まれ口を叩くが、それでもやはり声質は震えていた。
彼が不良へトラウマを持ったとき、別れることを覚悟した。
いや、愛は常に思っていたのだ。
もし、大が不良に襲われて間に合わなかったら自分たちの関係はどうなるのだろうと。
けれど実際に起きても自分たちの関係は何も変わらず
大は不良である自分に変わらず愛情を向け続けてくれる。

これほどの嬉しさを感じたのはいつ以来だろうか。
感動すると噂の映画を見てもなんとも思わなかった。
有名な小説を読んだって心が震えることはなかった。
だが、今は間違いなく心が満たされるほどに暖かい。
悲しみの種別ではなく、嬉しさの感情からでる涙が止まらない。
愛はもう一度顔を上げて大を見た。
大は変わらず真っ直ぐな目でこちらを見ているものの、既に一杯なのか顔つきが険しい。
無茶しているのが丸分かりだ。
愛はそんな大に母性を刺激されたのか、たまらない気持ちになってもういいと胸に優しく大の頭を抱き入れた。
「あ、愛さん?」
「そんな体で無茶すんな。大がアタシの事大好きなのは伝わったから大人しく今日はもう休め」
そのまま優しく大の頭を膝に移し、俗に言う膝枕をする。
「そっか、伝わったんならいいや」
「ああ、充分に伝わった」

大は大人しく瞼を閉じて、体を伸ばす。
両腕が使い物にならないため恐らくしばらくは日常生活に苦労するだろう。
その腕を見ただけで愛は胸にチクリとした痛みが走る。
だが大が気にすることはないと言った。
勿論そんな簡単に整理できる程の気分じゃない。
でも、大が願ったように間に合わなかった自分を責めるのはやめようと思った。
それから一分経たずして大の寝息が聞こえ始める。
麻酔の効果だろうか、それともトラウマで寝れなかったからだろうか。
両方かもしれない。
ともあれ彼が眠れたのならそれでいい。
寝癖でボサボサになった大の髪を愛は指で梳く。
それにくすぐったそうに身をよじる。
そんな子供のような彼氏の姿を見れば、彼に会うまであったぶつけようのない怒りや憎しみが小さい物のようにすら思えた。

病室に冴子が来たのと入れ替わりに愛は病院を後にした。
今後は両腕の使えない彼の為に冴子と自分ができるだけ傍にいる予定である。
流石に病院にまで来て彼を襲う馬鹿はいないだろう。
けれど用心として江乃死魔の誰かが病院を監視することにもなった。
まぁ愛自身も辻堂軍団の誰かが常に監視するように命令はしている。
病院から出た足は両親の帰ってこない自宅ではなく長谷大の家へ向かっていた。
会いたい人物がいるからだ。
そして長谷大の家が視界に入った頃、想像通りにそこに目的の人物の姿があった。
「よう」
「あ、辻堂センパイ。どもっす」
長谷家の門の前で梓は寒そうに座っていた。
彼女は愛に気づくと愛嬌のある笑顔で挨拶する。
多分今回の件など知る由もないなのだろう。
「長谷センパイならいないっすよ」
空をみれば朝はやんでいた雪がポツポツと降り始めていた。
梓はその雪をあいかわらず物珍しそうに見ながら言う。
「知ってる」

「そっすか」
　愛はそのまま梓の横に立って同じく空を見上げた。
「長谷センパイ遅いっすね。自分もうここに来て一時間位経ちますよ」
　何も知らない梓に愛は大の件を伝えるか迷う。
　だが隠したところですぐにバレることだ。
「大ならまた病院送りにされたよ」
「・・・・・・冗談っすよね？」
「冗談ならどれだけ良かったか」
　途端に梓が愛に食いかかった。
「何があったんですか!?　長谷センパイは今どこなんですか!?」
　今にも掴みかかりかねない雰囲気だ。
　梓自身自分が思っている以上に焦っているのか、冷静さがいきなり消え失せた。
「大はテメェに恨みを持った奴らに襲われたんだよ」
「――――なっ？」
　これは間違いない情報だ。
　恋奈の調べでは今回の奴らは以前梓に潰された事のある顔ばかりで、普段から梓への恨み言を口にしていると噂があったらしい。

梓は愛のその情報に口を開けなくなった。
嘘だとは言えるはずもない。
自分が相応に恨みを持たれていることは自覚している。
だが、まさか関係のない長谷大まで被害が及ぶなどとは思っても見なかったのだ。
「以前までのお前なら考えなかったか？　アタシの弱みを突くのに大を。
大の弱みを突くのにその家族を狙おうとか」
言い返す言葉もない。
その通りだ。自分は以前そういう手段を考えたことがある。
「今回はそれが行き過ぎた結果だ。
お前が憎いが恐ろしくて手が出せない、
だから大を代わりに殴ってお前への当てつけにしようとしたんだ」
改めて人の悪意の醜悪さに吐き気がする愛だった。
「・・・・・・長谷センパイは無事なんですか？」
縋るように見てくる。
「残念だが、助けるのが遅すぎた。
両腕はへし折れて、胸の骨折もまた砕けた。
頭も何度か殴られたようだが、後遺症はないようだ。

これを無事と取るかどうかはお前次第だが」
「無事なわけ、ないじゃないですかっ！」
愛の挑発に梓は爆発する。
「何で、何で長谷センパイが痛い目みないといけないんですか!?
これはあずの問題で、こんな事にならないためにあずは不良を抜けようと今頑張ってたのに！」
思考が纏まっていないのに口を開くからか支離滅裂になっている。
それでも何を言いたいかはわかった。
「それだけお前が今までしたことは人の恨みを買う行為だったってわけだ」
正論に梓は何も言い返せない。
「例え大が退院したとしてもまた同じことが起こるだろうな。
アタシや恋奈がそうはさせないけど、安心はできない」
「じゃああずにどうしろって言うんですか。
ヤンキーやめようが続けようが長谷センパイに迷惑かけるんじゃどうしようもないじゃないですか」
「いや、お前に恨みを持つ奴らを黙らせるのにいい方法はある。
そしてそれはアタシら三大天に手を出させなくする手段でもある」

ここまで言って、梓は薄々と気づく。
その方法とは恐らく
「乾梓、それを実行するかはお前が決めろ。
そうじゃなきゃ意味がない」
愛はそれだけ言ってその場を立ち去った。
梓は愛の背中を見て足が完全に動かなくなった。
愛が提案したその方法は『乾梓が三大天の誰かと決闘する』ということなのだろう。
これで梓が叩きのめされれば、梓に恨みを持つ奴はある程度納得できる。
更に勝負が激烈であればあるほど、もしくは一方的であればあるほど三大天の影響力も強くなる。
二度と三大天に関わりたくないと思わせるほどの喧嘩をすればいいのだ。
負けるのがわかった喧嘩をしなければならない。
それも、立ち上がることができなくなるほど体力の限界まで戦うのがいい。
そんな決闘、今までした事がなかった。
「・・・・・・答えなんて、もう決まってますよ」
恐怖なんてどうでもいい。
今自分にとって重要なのは二度と長谷大に危害が及ばないようにするという事だけ

だ。

自分の身は確かに可愛い。

けれどそんな我が身可愛さで大を見捨てるなんて選択肢はない。

梓は覚悟しなければならない。

自分を変える必要があるその事実に一人考え続けた。

12話：不良だから

「はっはー、久しぶりじゃねえか長谷。
恋奈様から聞いたぜ、梓の件では随分と世話になったらしいじゃんよ」
ガタガタガタと体が大震災状態。
病室で一人ボケっとしていたら何故か珍しい客が訪れたのだ。
一条さんやめてください、今あなたを見てもプレッシャーしか感じないのです。
「大丈夫かシ？　何か顔色悪いシ」
「ハナさんは相変わらず可愛らしいね」
「何か俺っちの時と反応違いすぎる気がするっての」
どうもハナさんだけは俺にとって不良のイメージが薄いらしい。
臆せず対応することができた。
腕が動かないのが残念だ、頭を撫でてやりたいのだが。
「今日はどういった要件で？」
突然来られてこちらは何も用意していない。
まあ今の体調じゃ分かっていても心の準備くらいしかできないのだが。

「あぁ、今日から長谷の護衛に江乃死魔の奴がつくことになったんだシ」
「勿論辻堂も同意済みだっての」
「何故に!?　俺の同意は必要ないの!?」
そういうのって愛さんよりも先に俺に言う方が正しいんじゃないのか。
まさかの今の俺に不良の護衛て、一体どうしたいのか。
というより何故江乃死魔が俺にそんな護衛を付けてなんのメリットがあるのか。
「安心しなって。今回は説明で俺っち達が直接顔出したけど次回からは長谷に姿は見せねえっての」
一条さんはいつものように豪快に笑っているが、問題はそこじゃない。
「江乃死魔に迷惑はかけられないよ。悪いけど護衛の件は遠慮させて欲しいなって」
「駄目だシ」
ばっさりである。
「どうせあたしらの護衛外しても辻堂軍団の護衛が代わりにつくだけだシ」
確かに。
今回の俺の迂闊さを考えれば最早愛さんや片瀬さんに信用してくれといっても無理があるだろう。
とはいえそれでも俺なんかのために護衛をする人が可哀想すぎる。

護衛しているあいだは暇だろうし、時間がもったいないだろう。
「それでも、護衛してくれる人には悪いよ」
「と、思うだろ？」
俺の言葉に待ってましたと言わんばかりに反応する。
「一時間長谷の監視するだけで恋奈様から特別にお駄賃で時給にして３０００円でるんだよ。
これほど美味しいバイトはそうないっての」
・・・・・・え？
「今江乃死魔では長谷の監視役したがる奴めちゃ多いシ。
そういうあたしらも今日はギリギリまでここにいて稼がせてもらう算段だシ」
何それ。
そのバイト俺がしたいくらいなんですけど。
っていうか稼ぎたいからってここにずっといられても正直迷惑なんですけど。
「それじゃあ暇だし早速ゲームでもすっかい。
ほれ、トランプやジェンガ。選り取りみどりだっての」
そう言って持ってきたリュックから俺のベッドの上に色々なパーティーゲームの道具を出す。

当然だが両手がふさがっている俺にできるゲームはない。
人生ゲームならできないこともないが、自分でルーレット回せないのじゃ楽しさも半減だ。
俺が渋い顔をしているを見て一条さんもそれに気づいたのだろう。
凄い気まずい空気が流れる。
「何してんの、早くやりたいゲーム選ぶシ?」
選べと言われましても。
困ったようにひっくり返されている道具を見る。
俺でも出来そうなゲームといえば将棋やチェスなどなら口で言えばいいが、でも一条さんとか苦手そうだし。
やるなら全員が有利不利のない運に左右されるゲームにしたい。
何やらポッキーが入っているのが気になる。
これって明らかにパーティでよくやるあのゲームを考えてのことか?
あのゲームなら確かに手は使わなくてもいいけれど。
「そのポッキー気になるシ?」
「いえ、全然まったく」
「懸命な判断だっての」

案の定だったらしい。
「俺ができそうなのは無いですね」
「まぁそうなるわな」
「両腕使えないのは不便極まりないシ」
一応俺を気遣ってくれるらしい、無理強いはしてこない。
だがこうなれば本当にすることがなくなる。
何時間ここで粘る気なのかはわからないが、空気が悪くなるのは避けたいところだ。
などと、そんなヘタレな事を考えているうちにコンコンと控えめに扉をノックする音が響いた。
「はい、誰ですか?」
「あずです。長谷センパイ、入っていいっすか?」
ここでハナさんや一条さんを見る。
そういえば乾さんが江乃死魔を抜けてからこの三人が顔を合わせたことってあるのだろうか。
入っていきなり一触即発の展開とかは避けたいのだが。
少し、探るように二人を見る。
「何だよ、入れてやらないのかい?」

一条さんはいつも通り。
ハナさんの方を見てもやはり同じ感じ。
つまり、どうやら二人は乾さんに遺恨を持っていないようだ。
「どうぞ、入って」
「失礼しまぁす」
相変わらず軽い感じな声質で言って入ってくる。
「うげ、ティアラセンパイとハナちゃんセンパイ」
「久々にあったと思ったら、失礼なやつだっての」
「全くだシ」
乾さんの方はどうやら割り切れていないらしく、二人の顔を見た途端露骨な反応をする。
対してハナさんと一条さんの方は梓さんが江乃死魔を抜ける前の対応と何ら変わりない。
「じ、自分ちょっと用事思い出したんで・・・・・・」
「待てコラ」
「うひゃあ!?」
バックオーライしている所に一条さんが乾さんの襟を掴んで持ち上げた。

乾さんも宙に浮かされれば抵抗できないようで足をバタバタさせるもののどうしようもない様子だ。
そのまま一条さんは乾さんを俺の隣の誰も使っていないベッドへ置く。
降ろされると同時に乾さんはビクビクと怯えるように縮こまった。
流石に江乃死魔を裏切った罪悪感があるのだろう。
いい事だ。
罪悪感があるということは自分の罪を意識しているということだ。
乾さんは以前とは違うということがわかって俺も嬉しい。
「やめてください、あずに乱暴するつもりでしょう!?　エロ同人みたいに！」
ただあまりにテンパってるのかめちゃくちゃである。
もう借りてきた猫みたいだ。
これにはハナさんや一条さんも困っていた。
「聞いたぜ梓、江乃死魔での一件。俺っち達を裏切ってた挙句恋奈様に手を出したらしいじゃねぇの」
ギクリと硬直する乾さん。
いきなり触れて欲しくない話をだされたようだ。
「しかもその後腰越に一方的に潰されて病院送りだったって聞いたシ」

「その話、勘弁してほしいっすぅ・・・・・・」
本当に精神的にきているらしく、既に怯え通り越して体が小さくなって見えてきた。
「ざまぁないっての」
「ざまぁないシ」
「ひ、ひっでぇ」
容赦ない二人の言葉に乾さんはとうとう半泣きだ。
よく見れば目尻に涙が溜まっている。
どうやら責めるのは好きでも責められるのは苦手らしい。
面白い光景なので俺は放置する。
「で、どうだい。江乃死魔に戻る気は無いのかい？」
「へ？」
思わぬ言葉に乾さんは言葉につまる。
俺としても予想外な言葉だった。
「あたしら揃わないとなんか寂しいシ」
ハナさんも乾さんがいなくなってから少ししっくりこないものがあったらしく、むしろ乾さんの再入には賛成の方向のようだ。
同じく一条さんもやはり同じ意見だろう。

「二人の誘いは嬉しいですけど、恋奈様が二人と同じ意見とは思えませんし・・・・・・」
悪事を暴かれた際、逆ギレして自分のグループのリーダーである片瀬さんに牙を向いたのだ。
そりゃ二人に誘われたからはい戻りますとはいかないのだろう。
「れんにゃなら別に戻りたいのなら歓迎してあげるって言ってたよ？」
「はぁ!?」
これまた意外だ。
いや、むしろ片瀬さんの身内に甘い性格を考えれば当然の流れなのか？
とはいえ、まさかあんなことをした乾さんを両手広げていらっしゃいとは思えないのだけど。
「ただし、江乃死魔の最下層。奴隷ランクからスタートって言ってたけど」
「お断りです」
だと思った。
「なんすか奴隷って！　自分も江乃死魔いたけど聞いたことないポジションじゃないっすか！」
「俺っちにいわれてもな」
「あたしも聞いたことないシ」

幹部が知らないってことは急遽つくった位置づけではないのだろうか。
奴隷・・・・・・ちょっと如何わしい響きがするのはなんでだろう。
頭文字に肉とかつけたらもうそれは成人指定をくらいかねない程の。
「そんなん嫌です。あず絶対戻らないっす」
流石に奴隷は嫌なのだろう。
断固として断る。
乾さんの気持ちはわからなくもない。
あれだけの事をしでかしたのだ、奴隷云々なくとも戻りづらいものはあるのだろう。
「まぁ本人が戻らないって言ってるのなら無理強いはしないけどよ。
少しは考えといてくれっての」
「あたしらも梓いないと寂しいのは本当のことだシ」
「むむむ、そんなキュンと来ること言われると心動かされるものが・・・・・・」
もうひと押しかよ。
案外軽いなおい。
「で、でも駄目っす！　あずは不良抜けることを決めたんですから！」
二人のトランペットを欲しがる子供のような目を振り切って言い放つ。
確かに江乃死魔に戻ったらそれはすなわち不良継続となるだろう。

俺の知らない所で乾さんは過去の清算を色々していることを愛さんから結構聞かされている。

そこまでしているのに不良継続したのじゃ何の為に今頑張っているのかわからなくなるのだろう。

「梓が不良やめるっての？」

「それ本気だシ？」

「本気と書いてマジっす」

「「本気で私に？」」

「恋しなさいっす！」

何を言っているのか俺にはわからないが、三人には何か通じるものがあったらしい。

凄い楽しそうにドヤ顔で俺を見てくる。

俺にどういう反応を求めているのだろうか。

「冗談は置いといて。不良やめて何かしたい事でもあるんかい？」

前に乾さんは不良を続けるメリットが無いと俺に言っていた記憶がある。

それを一条さん達に説明するのかと思ったが、乾さんは少し困ったようにしていた。

そして口を開かずチラチラと俺を見る。

何だろうか。

「どうしたの乾さん？」
「あ～、いえ」
この反応で何となく察するものがあった。
もしかして、不良を続けている一条さん達に不良のメリットデメリットを言うのが躊躇われるのだろうか。
確かに、不良をしている理由なんて人それぞれだ。
故に迂闊な言葉を選べばそれは相手の矜持すら否定しかねない。
野球が好きだから続ける高校球児に、自分が野球をやめる際に説明として野球を続けてもメリットなどないと言われればそれは傷がつく。
なにげに人の反応を気にする乾さんだからこそ、そこを気にしているのだろう。
「別に言いたくないなら無理しなくてもいいシ」
「もしかして不良じゃない彼氏でもできたとかかい？」
「うぇ!?」
ギクリとする乾さん。
その分かりやすい反応に二人はなるほどとニヤニヤしだす。
・・・・・ってか乾さんに彼氏か。
なにやら胸にざわついた感じがする。

「因みに、相手は誰だい？　俺っちの知ってる奴？」
「いやいやいや！　まだ付き合ってない上にこっちの片思いですし！」
「梓が片思いで踏みとどまってるとかありえないシ」
「確かに、梓は惚れた男にはガンガン行ってそのまま既成事実作りそうなタイプだってのの」
「自分そんな肉食系にみえてたんすか・・・・・・」
地味にショックだったらしい。
申し訳ないが俺も乾さんは肉食系だと思ってたので口を挟まない。
「で、相手は誰だシ？」
容赦ない追求に言いよどむ。
これは助け舟を出したほうが良いか。
「そ、そのぉ」
乾さんもやはり助けて欲しいみたいだ。
仕方ない、と口を開こうとした瞬間。
「なに長谷をジロジロ見てるんだっての」
一条さんのその言葉に言うタイミングを被せられた。
「ん～？　そういやれんにゃがやたら梓を長谷と近づけたがってるって噂が江乃死魔に

あるシ」

物は言いようなのだろう。

近づけるとは俺と乾さんの病室を一緒にした件のことだと思う。

あれは互いに監視や抑止力的な目的があってしたのであって片瀬さんが乾さんのキューピッド役をしているわけじゃない。

「もしかしてその意中の男って・・・・・・マジで?」

「違う・・・・・・とは言えないですけどぉ」

え、いや。え?

マジで?

確かに前から俺に好意的な事をしてきてたとは思うし、皆で鍋をした夜でも告白に近いことを言ってきた記憶はあるが。

「おいこら長谷」

一条さんが凄まじい怒り顔で俺に詰め寄る。

言いたいことはわかってる。

「二股とはいい度胸じゃねぇの」

「違うんです」

本当に違うんです。

だから俺の胸ぐら掴むのやめてくださいお願いします。
「違うんですよ、まだあずとセンパイは付き合ってないっす」
「まだって事はいずれ付き合う予定って事だシ？」
「女をキープするってどういうつもりだっての！」
火に油を注ぐ行為やめてください。
「俺は愛さん一筋です」
「じゃあ梓とは遊びって事かい？」
「センパイ酷いっす・・・・・・」
よよよと泣き崩れる乾さん。
あれ、もしかして俺途中からはめられてる？
乾さんを見てみたら他二人に見えない所で俺に舌をだす。
間違いない、見事に二人のターゲットを俺に移しやがった。
恐るべし、乾梓。腹黒いなオイ。
「乙女の純情をコノヤロウ！　乙女の純情をコノヤロウ！」
「長谷は女の敵だシ。れんにゃに報告も辞さないし」
ああもう、何なのこれ。
ヤンキー恐怖症になった俺に対しての強烈なリハビリはそのまま数時間にもわたっ

て続くことになった。

「相変わらずでしたね、ティアラセンパイもハナちゃんセンパイも」

二人が病室を出て行った後、乾さんはここに残っていた。

あの二人がいると話しづらい内容なんだろう。

「顔を合わせた時も乾さんだけ慌てて、二人は特に動じてもなかったしね」

「あずが気にしすぎだっただけなんすかねぇ」

「どうだろう。二人が大雑把すぎるのもあるんじゃないかな」

違いないですね、と笑う乾さん。

俺も釣られて笑ってしまう。

実際、乾さんは江乃死魔のメンバーに罪悪感があったらしく今日まで頑なに自分から一条さんとかに会いには行ってなかったらしい。

当然だろう。

誰だって自分のした事を糾弾などされたくない。

罪の意識があるからこそそれは余計に辛い事なのだ。

だが、今日。かつての仲間は彼女を責めたりはしなかった。
無論多少きつい言葉はあったもののそんなのは説教にも届かないきつさだ。
「自分、まさか江乃死魔に戻ってこいなんて言われると思ってもみませんでした」
あれだけの事をしておきながら、多少の条件があるとは言え再勧誘されるなど。
それは乾さんにとってとても嬉しい事だったのだ。
さっきから彼女の頬は緩みっぱなしだった。
「戻らないの？」
「戻りません」
きっぱりと言い放つ。
「次の喧嘩であずはもう不良をやめます」
どうやらもうすぐ大きな区切りが彼女のもとに訪れるらしい。
だが、その喧嘩という響きに気になるものがあった。
「誰かやばい人と喧嘩するの？」
あまり彼女には無茶をしてほしくない。
この親心とも違う感情に押されて俺は聞かざるをえなかった。
乾さんは俺の質問に少し困ったように笑う。
「そうですね、相手は湘南最強の不良ですからこれ以上ないほどヤバイ相手っす」

「湘南最強って・・・・・・マキさん？」
とぼけているつもりはない。
ただ、俺の中で愛さんと乾さんが喧嘩をする理由が見つからないのだ。
「昨日、辻堂センパイに言われたんですよ。
あずが三大天の誰かと決闘すれば長谷センパイがもう危険な目に合う事は殆どなくなるって」
言わんとしていることはわかる。
確かに、人の実力を示すには戦ってこそだ。
それが愛さんやマキさん、乾さんが戦えばかなり高い次元の内容となるだろう。
それを見れば大抵の不良は自分にはどうにもならないレベルだと認識して関わろうともしなくなる。
乾さんが今後悪事をしなければそのまま時間が彼女への恨みを薄れさせてくれるだろう。
「それは本気でするの？」
「勿論です。そもそも三大天の誰もが本気じゃないと相手してくれるとは思えませんし」
「でも、それじゃあどちらかが無事では済まないかもしれないじゃないか」

次元の高い殴り合い。
それは同時に手酷い怪我を負う可能性も高いものだ。
マキさんや愛さんなんかは容易にコンクリートすら砕く。
そんな攻撃を喰らえば片瀬さんほど打たれ強いわけでもない乾さんにはひとたまりもない筈。
「だからいいんですよ。
できるだけ派手に、それでいて痛々しい喧嘩であればあるほどその喧嘩に意味があるんです」
もしかして俺は何か勘違いをしているんじゃないだろうか。
今の乾さんの言葉は明らかに俺が思っているのと違う。
「あずを恨む奴の気を晴らさせるにはあずが痛めつけられればいいんです。
だから相手は三大天レベルが理想的なんですよ」
それは俺にとって最も嫌な選択だった。
「ワザと負ける喧嘩をするの？」
「勿論本気で抵抗はします。そうすればするほど相手した方のハクがつきますから」
そうじゃない。
俺が聞きたいのはそういう事ではなく。

「そんな喧嘩は嫌いだな。
自分が傷つくことで問題を解決するなんて、それじゃあ君が余りにも辛すぎる」
恨みを晴らさせるために自分の体を危険にさらす。
しかも確実に自分が痛めつけられる事が確定している。
それは乾さん自身が不幸すぎる。
「いいんですよ、相応の悪いことをしてきた自覚はあるんですから」
俺が意気地になっているのがわかったのだろう。
乾さんは駄々をこねる子供をあやす様に話しかけてくる。
本人がそれでいいというのなら、それは仕方がないのだろう。
俺が止める理由がない。
しかしだからといって納得はできるはずもない。
それだけ俺にとって乾さんは何時の間にか大きな存在になっていたのだ。
「センパイ、今センパイはあずが余りにも辛すぎると言いましたよね？」
頷く。
その返事に彼女は少し嬉しそうに微笑んだ。
「でも、あずにとってもっと辛い事があるんですよ？
それも自分が傷つくよりも、もっともっと辛い事が」

俺は、そこでようやく彼女が何故この選択をしたのか理解した。
その理由は詰まるところ、俺のせいじゃないのか。
「長谷センパイ。あずのせいでセンパイが怪我するのは嫌っす。
だから不良もやめるし、こんなけじめの付け方だってする」
以前彼女が折った俺の骨の部分を乾さんは労わるようにさする。
「長谷センパイと関わらなければこんな手段選ぶ必要はないかもしれない。
ですけど自分はこれからもセンパイの近くにいたいんですよ。
これが不良である自分の最後の我侭です。
それ以上にやりたいことなんてありません」
その言葉に俺は何も言い返せない。
彼女は妥協や諦めなどという感情でこの選択をしているわけではない。
明確な理由と思いがあって納得している。
だったら納得するしかない。
「・・・・・そっか、我侭を通したいなら仕方ないね」
「そっす。仕方ないんです」
動けない俺の胸に顔を猫のように擦り付ける乾さん。
その甘えん坊のような仕草に俺は困ってしまう。

腕は動かないから何もできないし、かといって嫌でもない。
「怪我をする事が前提なようなものなんだよね？」
「はい、多分今の長谷センパイ程じゃないにしろ近い状態になるまでやり続けます」
それだけしないと人の恨みなんて薄れさせる事はできないのだろう。
「怖くないの？」
「怖いに決まってるじゃないですか。
こんな負ける前提の喧嘩なんてあずの大嫌いなタイプです」
それでも、自分の我侭を通すには仕方ない。
そう割り切るしかない。
包帯越しだから気づかなかったけれど乾さんの体は少し震えていた。
武者震いなんてする性格でもない事は今までの付き合いで理解してる。
「センパイは、センパイはあずを好いてくれますか？」
突然何を、と言いかける。
「・・・・・・そうだね、好きだと思う」
「でも、それは異性としてではないんですよね」
少し、悲しそうに眉を寄せる乾さん。
もし、もしも俺が愛さんと会っていなかったら。

その前提があれば俺はもう乾さんに惚れていただろう。
勿論ありえない前提だ。
愛さんと関わらなければそもそも乾さんとは会うきっかけすらない。
故に意味のない仮定だ。
乾さんは返答しない俺を寂しげな瞳で見つめる。
俺はその目を直視することができず目を背けた。
「センパイ、目を背けないでこっち向いてください」
そう言われて俺は少しためらいながらも彼女の方へ顔を向けた。
その瞬間、乾さんは俺の頬をつかみ以前のように奪う形で俺にキスをする。
しかし今回は前回のように長いキスではなく、ぶつけるような物だった。
唇を無理やり合わせて、すぐに顔を離す。
「センパイ、提案が・・・・・・いえ、お願いがあるんです」
瞳を潤ませて囁くように俺の耳元に口を寄せてくる。
その潤んだ瞳は情欲に彩られていて、男の煩悩を刺激する。
「あずと付き合ってくれませんか？」
「それはできない。俺は愛さんの事が好きなんだ」
「そんなことは、痛いほどわかってます」

だから、と付け足す。
「あずと辻堂センパイに二股かけませんか？」
なるほど。
そう来るのか。
「勿論辻堂センパイにはばれないように気を付けます。
だから辻堂センパイに向ける半分でもいいから、あずを愛してほしいんです」
どこまで本気なのだろうか。
耳元に顔があるせいで彼女の表情はうかがい知れない。
しかし俺の首に回した腕は僅かだが震えている。
「センパイが望むならいつ何処でだって喜んで体を差し出します。
あずのこの体を好きにしていいんですよ？」
余りにもわかりやすい色仕掛けだ。
……愛さんと付き合っていなければ簡単に俺も転んでいただろう。
それほど彼女は魅力的だしその提案もやはり男の餌として極上だろう。
けれど
「愛さんを裏切る事はできない」
僅かな後腐れも無いように、互いにしこりが残らないようにはっきりと答える。

乾さんは俺のその返答を聞いた瞬間、ビクリと体を硬直させた。
そしてそのままゆっくりと俺から体を離した。
そこでようやく彼女の顔を見ることができた。
「な、なーんて。冗談っすよ冗談」
その明らかな強がりを吐く彼女は、やはり無理をした笑顔だった。
「乾さん」
「ちょ、そんなマジな顔しないでくださいよ。
軽い色仕掛けで引っかかるか試しただけですよ」
テンパっているのだろう。
言葉は軽いが、ボロが出ている。
そんな涙を流して冗談など言えるはずがない。
「い、いやぁショックっすね。
これでもスタイルとか顔は自信あったんですけど」
自分では気づいていないのか、変わらず強がりを吐く。
「乾さん。俺は――――」
「聞きたくないです！」
俺が彼女へ言いたいことを言おうとした瞬間、乾さんは叫ぶ。

自分でも驚いたのだろう、自身の口を抑えて戸惑っている。
「すいませんでした、変な事言って。
今日の事は忘れて下さい、また明日からいつも通りの関係に戻りましょう」
それだけ言って、俺の言葉を待つことなく無理に笑って走って部屋から出て行った。
俺はその背中を追おうとするものの、体が全く動かない。
ベッドから降りようとするだけで気絶しそうなほどの痛みが体の至る所から襲ってくるのだ。
ただ、それでも彼女には伝えたいことがあった。
恐らく乾さんはここにもう来ないかもしれない。
しかし必ず、何かがあってまた彼女はここに来ざるをえないだろう。
そんな確信があった。
その時に伝えたかった事を彼女に言おう。

今までにないほどに必死で走った。
長谷大の言葉から逃げるように、彼の姿を振り切るように。
目的もなく、ただ必死に走り続けているうちに気がつけば乾梓は江ノ島へ続く大きな橋の上に立っていた。
何か目的があったわけではない。
ただ、ここなら一人でいられると無意識に思った故の行動だったのだろう。
「う・・・・・・・うぅ・・・・・・・・っ」
病室から出てから涙が一向に止まらない。
分かっていたはずだったのだ。
大の心は既に辻堂愛に占められている。
だから一片たりとて自分にその愛情が向けられることなどないと。
分かっていたのに恋をした。
分かっていたのに彼に近づいた。
その行為を振られた今でも後悔なんてしていない。
していないからこそ、諦めきれないからこそ、そのどうしようもない現状に悲しさが付きまとう。
ふと、乾梓は背後に気配を感じた。

「きょーおもかえーでさんは」
　誰も人通りのない筈の橋なのに、何故か凄まじい程の気の抜ける歌を口ずさむ誰かが梓の後ろを通る。
　何だろうと振り向けば
「「げ」」
　涙すら一瞬止まって梓はその人物を見て硬直した。
　対して歌っていた人物も誰かがいる事に気づかなかったのか、恥ずかしい所を見られた事に筆舌しづらい恥ずかしさを感じた。
　互いに顔を見合わせて固まるが、歌っていた人物、城宮楓保健医はコホンと咳払いする。
「や、やぁ。お前はあの時の便秘娘じゃないか」
「その呼び方最悪っす、やめてください」
　本気で人前でそんな事を言いだしたら拳で黙らせる事にも抵抗がないだろう。
「ふむ、だが今日は肌質が良い。食生活は改めているようだな」
「病院生活してましたから」
「あぁ、なるほど」
　先ほどの楓の歌で少し気が抜けたのか、梓の涙は止まっていた。

楓は目の腫れている梓に気づき、少し気にかけるように海を見る梓の隣に立った。
「おやおや、何やら肌質は良いようだが心の方が荒れているようじゃないか」
「・・・・・・人ごとでしょう、放っておいてください」
明らかに拒絶の意を示す梓に楓は少し笑った。
「私は稲村の保健医であると同時にメンタルカンセラーでもあるかもしれん。どれ、少し私に相談してみる気はないか?」
「かもしれないって、何かおかしくないっすか?」
「細かいことだ、そういう所を気にするようでは大人になれんぞ」
おせっかいをしてくる楓に梓は困る。
だが今日の件で完全にネガティブになっていた梓は少し誰かに相談をしたいと思っていたのも事実。
彼女は全部は話さないものの、部分的に自分はどうしたかを教える事にした。

「彼女持ちに告白して断られる。
思春期のガキ共にありがちな玉砕パターンだな」

名前を伏せた説明を聞いて、全く言葉を選んでいないのかと疑うほど苛烈な感想を吐く楓。
梓も意見を聞く相手を間違えたかと後悔する。
「誰かはしらんがお前のエロくて男にとって都合のいい誘いをよく断ったものだ。お前は内面どす黒そうだけど顔は良いしな」
「自分もうどっか行っていいっすか？」
「まてまて、少し歯に衣を着せるべきだったな。すまんすまん」
いい加減キレそうになった梓を全く悪そうにしていない顔で引き止める。
そして一度咳払いをして視線を海にむけ、楓は口を開く。
「さてそれじゃあ本題に入ろうか、その男が断ったのは何でだと思う？」
突然の問題に梓は対応できずに言葉を詰まらせた。
何故、どうして。そういえば考えてなかった。
「自分より彼女の方が魅力的だったからとか」
「それも場合によっては正解になるだろうが、今回はそうじゃないだろうな」
お前にもその彼女に負けないくらいの魅力はあるだろう、と付け足す。
その自然な言い方にお世辞でなく本心から言ったことがわかって梓は少し照れた。
「彼氏は単純にお前の事を好いてはいるが、彼女の事もやはりそれ以上に愛している。

愛しているからこそ彼女を裏切る行為などできない。などだろう」
少なくとも、大は梓を愛している気持ち以上に愛の事を愛しているのだろう。
端折りが目立つ梓の話でも楓それをわかっていた。
「では逆の仮定をしてみよう。
もしお前がその彼氏君と、今の彼女さんより先に出会って付き合っていて、
後からまだ彼氏と付き合っていない遅れた彼女の方が告白したらどうなるか」
大と梓が付き合っていて、大に後から惚れた愛が告白したらどうなるか。
やはり大はそれに揺らぐだろう。
しかし自分を裏切って愛に走る姿は想像できなかった。
「答えとしてはそうだな……お前は単純にスタートが遅すぎただけだろう。
だからその恋は実らないし、その気持ちが強ければ強いほどお前自身が不幸になる」
余りにも的確な容赦のない指摘に梓は黙る。
恐らく本当のことだろう、だからこそ言い返せないし、言い訳もできない。
全く口を開けない梓を楓は酷く困った顔で見る。
そして何を思ったのかヤレヤレと呟いてポケットから煙草を取り出して一服し始める。
「おいヤンキー娘。お前も吸うか?」

「教員が学生に煙草勧めるんすか、自分は吸いません」
「そうか、健康的で良い事だ」
断られたのに心底面白がって楓は笑う。
「煙草は本当に害悪だからな。
身体には数え切れない程の害を与えるくせに良い所なんて全くない」
そんなことは吸っていない梓だって知っている事だった。
だが口を挟まず聞き入る。
「しかし、そんな害あるものだからこそ吸う人間の中には逆に気を使う者もいる。
煙草を吸っている分、せめてそこ以外は健康な生活を心がけようとな」
そのおかげで愛煙家であるにもかかわらず吸わない一般人より健康体な人間も希にいる。
勿論それは希な例で大半の愛煙家はやはり体のタメージばかり重ねて健康の事は気にしない。
「まぁ私は酒も煙草も大好き不健康まっしぐらなタイプだが」
はっはっはと笑う。
「酒はともかく、そんなに害があるなら煙草なんてやめればいいじゃいいじゃないですか」

梓は今笑える気分じゃない。
少し冷たいようだが、付き放つような言葉を選んだ。
しかし楓はその返答も既に人生上何度も言われた言葉なのだろう
「好きだからやめられないんだ。例え害があったとしてもだ」
シンプルな答えだった。
「話を少し変えてみるか。
お前は昔、ハマっていたものとかあるか?」
「別に・・・・・・特にないです」
相変わらず淡白な態度に楓も笑って首を竦める。
「人間というのは大変移り気な性格をしていてな。簡単な事例を述べてやる。
誰でも子供の頃は何か人形などにこだわる時期があるだろう?」
子供なら普通そうだろう。
「しかし、男の子は人形で遊んでいるうちに一定の年齢を重ねると嗜好がかわる。
人形よりもゲームが良い、もしくはスポーツの方がいいと」
当たり前のことだ。
子供の頃から大人になるまでずっと嗜好が変わらない人間など殆どいない。
「そしてしばらくすると更に変化する。

野球をしていた奴が突然女にモテたいがためにしたこともないギターを始める、なんてな」

よくある話だ。

梓もそういった人種の奴らは知っている。

「そして結婚して家庭をもって、更に好きなことが変わる。

長い人生、熱くなれる事なんていくつもあるんだ。一つの事に囚われる人間など少ない」

そして話を一拍置いて不意に楓は梓を見る。

「さて問題だ。大人になって、家族を持って。

その時にその人間は昔一番最初に好きになった、熱中したものを見たときどう思うだろう？」

自分はまだ大人と言われる年ではない。

でもその答えは何となくわかった。

「何とも思わない、ですか？」

「正解だ」

何度も趣味を変えて、気がつけば最初にハマったものなんて忘れている。

忘れた頃に、そんな最初にハマったものを見たところで心は既にソレに向けられては

いないのだ。
　子供の頃に好きだったはずの人形はもう古い汚れた人形程度の価値しかなくなっている。
「だが例外というものもある。例えばこの煙草だ」
　そう言って真新しい煙草を一本取り出して梓に渡す。
「私も同じように生まれてから今まで何度も嗜好はブレた。だが煙草だけはどんなに嗜好が変わろうと、年を重ねようと好きなままだ」
「それは煙草に依存性があるからじゃ」
　煙草に中毒性があるなど有名な話である。
「そう、煙草には中毒性がある。それに私はまんまと囚われているわけだ」
　予測済みの答えだったのか、梓の指摘にもあらかじめ答えを用意していたかのようにスラスラと反応した。
「じゃあそろそろ本題に戻るか。聞くにお前の恋は本物のようだったじゃないか。それに中毒性がないと言い切れるか？」
　そんな、まるで恋愛の感情を煙草と同列に扱うような言い方に梓はむっとくる。
「愛だの恋だの。アレは害悪そのものだ。よく言うだろう、恋は盲目と。

恋は人を前後不覚にするし、身を滅ぼす事だって普通にある。
これに煙草と何の違いがある?」
「でも、確実に害悪になる煙草とは違って恋愛は人を幸せにしてくれる事だってあります」
「ほう、実に若者らしいスイーツ脳だ」
その人を小馬鹿にした言い方にカチンとくる。
「煙草を吸っている瞬間は幸せなものだぞ。
これを知らんお前に害悪しかないと断定されたくはないな」
確かに、中毒性のある煙草だ。
吸っている瞬間はその依存性が満たされて幸せな気持ちにはなるだろう。
「話がそれたな。そろそろまとめに入ろうか」
梓もそれに頷く。
「人の恋なんて一種の熱病と同じだ、これは有名な例え話だろう。
そして熱病など死なない限り時間が経てば冷めるものだ」
「つまり、誰かを好きになった気持ちなんて時間が経てばどうでも良くなると?」
「そうだ」
その言葉に一瞬激昂しそうになる。

お前に何がわかると怒鳴り散らしそうになった。
「だが何事にも例外はある。恋しては冷め、また別の男に恋しては冷める。嗜好も恋もそこは同じものだ、しかし冷めることのない嗜好だってある」
そう言って楓は梓に渡した煙草に視線を送る。
そこで、ようやく梓は楓の言わんとしている事に気づく。
「中毒性のある程の恋だと自分で思うのなら、他を顧みず突き進むのも一つの選択じゃないか？
例え自分に害しかなくとも、好きだったらそれでいいのではないかと私は考えるが」
「でも、それじゃあ相手に迷惑が――――」
「そんなのは些細なことだ。こっちは毒を飲んでいるのだぞ？
相手や後の事を考えて毒など飲み込めるか」
余りにもその答えは自分勝手で。
それでいて先が見えなくなった自分を惑わすものだった。
「振られて尚嫌いになれないのだろう？　彼のために体を張る覚悟があるのだろう？
そこに自分に害しかないのに依存性のある煙草と何の違いがある。
後先など考えて喫煙や恋愛など出来るか。そんなのは虚しさしか残らんぞ」
それはつまり、例え相手に彼女がいても、一度振られても尚好きだと言い張れという

のか。
それこそ一番自分が傷ついて、相手にも迷惑がかかる選択に他ならない。
でもその答えは乾梓にとって何よりも染み込むものだった。
好きな事をしたいから、嫌な事から目を背けたいから、今を楽しみたいから自分は不良になった。
今楓が言った答えは余りにもその理由と当てはまりすぎた。
「それを踏まえてだ。どうだ、お前の恋愛は一度振られた程度で終わりそうか？」
答えなどわかりきっているのだろう。
質問するもののその顔はむしろ確認をするものだった。
梓はその顔を見て、胸を張る。
「終わるわけないじゃないっすか。まだあずの気持ちは全然冷めないんですから」
一度振られたからその恋に立ち止まる。
そんな選択肢はもうありえない。
振られて尚好きなのだ。
だったらもう振り向かない、先へ進み続ける。
彼女がいるなど知ったことか。
好きだから相手に好きと伝えて何が悪い。

自分はヤンキーなのだ、相手の意思など知ったことではない。
「そうか、悩みが解決したようで良かった。
それでは私はそろそろ失礼するよ」
その答えを聞いて安心したのだろう。
楓は既に短くなった煙草の吸殻を携帯灰皿へしまって梓に背を向けた。
その背中に梓は体を向けた。
「相談に乗っていただいてありがとうございました」
敬意を込めて礼をする。
その感謝の意に楓は振り向くことなく、軽く片手を上げる程度でそのまま立ち去っていった。

その後、乾梓はそのままの足で辻堂愛のいるであろう場所へ向かった。
稲村学園、屋上である。
冬休みとはいえ部活や補習で学校自体は開放されている。
故に学園に入り込むのは容易だった。

一度長谷大を拉致しに来た際に通ったルートをなぞって真っ直ぐそこへ向かう。
重厚な扉を開けばやはり、改造制服を着た学園最強の番長の姿があった。
「おせぇぞ」
「サーセンっす。ちょっと思うところがありまして」
特に約束をしていたわけではない。
ただ、互いに今日ここで顔を合わせるつもりだったのだ。
「そうか、それじゃあ答えを聞かせてもらおうか」
敵意も、殺意もない。
ただ相手の意思を聞く辻堂愛に乾梓は普段通りの様子で近づく。
圧倒的なカリスマと実力を持った愛へ、真正面から向かい合って口を開く。
そこに僅かな恐怖も無かった。
その選択に欠片のためらいもなかった。
「稲村学園番長、喧嘩狼の辻堂愛。
明日、江ノ島の海岸で自分と決闘してください」
自分は、振り返らず前に進む事に決めたのだ。

13話：よからず

冬らしい気温。
外はもうすぐ雪が降るのだろう、曇天で青空はもう見えない。
「ほら、リンゴ剥けたわよ」
「ありがとう、片瀬さん」
俺以外誰も使用していない殺風景な相部屋には今日の朝から片瀬さんが来ていた。
今日の見張りは江乃死魔総長らしい。
なぜかと聞いたら
『今日は大きな決闘があるから江乃死魔の奴らはその見学に行かせてるわ』
との事だった。
誰が戦うのかは未だわからない。
ただ、片方は確実に乾さんだ。
そしてもう一人がマキさんか愛さん。
それを片瀬さんに質問すれば恐らく教えてはくれるだろう。
だが俺は聞こうとは思わなかった。

理由なんてない。単純に興味がないのだ。
知り合い同士の決闘。
そんなモノの詳細など知りたくもない。
乾さんから聞いた話なら多分乾さんは大怪我をするまで戦い続けるだろう。
だから怪我をしないようになんて祈る事すら意味がない。
「片瀬さんは見に行かないの？」
「私まで行ったらアンタ見張る奴いなくなるでしょ」
そう言って片瀬さんはフォークを突き立てたリンゴを俺の口元に持ってくる。
まるで看病する彼女のようだと内心照れながらも大人しくそのりんごを齧った。
それを丹念に噛み、咀嚼する。
「長谷、アンタはどうなるか気にならないの？」
「・・・・・乾さんが大怪我をする事が前提の喧嘩なんて体が動いても見に行かないよ」
見ることより、知ることより、事の顛末を聞く事よりも俺には後ですることがある。
「片瀬さんだって俺と同じような理由でしょ？」
俺の言葉に片瀬さんはバツの悪そうな顔をする。
「別に、梓もその相手も江乃死魔関係ない奴でしょうが。
そんな奴らの喧嘩なんて興味ないだけよ」

相変わらず嘘が下手だ。
「そういう片瀬さんのツンデレ好きだな、俺」
「ツンデレいうな」

「おーおー、凄いヤンキーの数っすね」
「どうやら恋奈の馬鹿が湘南中の不良を呼び寄せたらしいな。おかげで冬なのにここだけ暑苦しい感じがする」
愛と梓は先日決めた喧嘩場所、江ノ島の海岸で顔を合わせた。
しかしそこは既にこの喧嘩を聞きつけた不良共によって一般人が入れるものではなくなっていた。
事前に湘南中にこの喧嘩があることを広めるように恋奈に手回ししてもらったからだ。
その為仕方なく喧嘩前だというのに当の二人は相談し合って別の場所を探した。

そうして見つけた二人の場所が、先日梓が楓に相談した場所。
江ノ島へ続く橋の中央部。
その中央から数十メートルの地点には二人の姿しかない。
しかしそこから先は橋を挟むようにして凄まじい数の不良が押し詰めていた。
二人が殴り合いを始めるのを今か今かと待ちわびている。
「この中にあずをだけならまだしも、長谷センパイに手を出そうとする馬鹿も沢山いるんですよね」
「だろうな」
忌々しげに、それこそ嫌悪感を丸出しにして千の数を超える不良の群れを梓は睨んだ。
「うぜー」
梓は呟く。
「うぜぇうぜぇうぜぇ、うぜぇんだよテメェら！」
徐々に声の音量を上げて、最後には全員を竦み上がらせる程の殺意を込めて吐き捨てた。
そして射殺すような目つきで辺りを見渡す。
「揃いも揃って雑魚ばかり。

一人じゃあずに勝てないから徒党を組んでお礼参りする、それはまだ許せた。
自分もテメェらに相応の態度をとったから、だから当然の事だよ」
それは誰に言っているのか。
当事者以外はまるで意味のわからない事だ。
だが、数多の不良の群れの中にいる百人以上がその言葉に怯える。
「だけどあずに勝てないからって身内狙うようなハンパな真似してんじゃねぇよカス共！
質でも数でも勝てない雑魚ばかり、そんなカスが最後にとった手段があずの身内に手を出す。
反吐が出るんだよくそったれ」
ずっと自分や大を狙っていた奴らに言いたかった事なのだろう。
その言葉は怒りに満ちている。
「次そんな真似してみろ、どんな事しても突き止めてテメェの息の根とめてやるよ」
口にした言葉には確かな重さがあった。
実際に今後長谷大に手を出せば今言ったことを実行するだろう。
そうイメージせざるを得ない程にプレッシャーのある言葉だった。
それに恐れをなした不良は次々に列の後方へ戻る。

少しでも今の梓から離れたいのだろう。
その姿を見た梓は軽くため息を吐いて
「・・・・・・なーんて、関係ない方々にはまるで意味わかんないっすよね。失礼しました～」
と、雰囲気を紛らわせた。
その梓の芝居じみた行為に愛は楽しげに笑う。
「良いメンチきるじゃねぇか。もっと軽いチャラけた奴だと思ってたんだがな」
「失礼っすね。自分やる時はビシっと決めるタイプだと思ってるんですよ」
これから血なまぐさい喧嘩が始まるのに二人はまるで日常のように話し合う。
その緊張感の薄い光景に観客の不良たちは戸惑うばかりだった。
しかし愛もそのダベりには少し飽きてきたのか、不意に真面目な顔になる。
「何で恋奈じゃなくアタシを選んだ？」
愛はそれをこの時まで疑問に感じていた。
単純に喧嘩をしたいのなら恋奈を選ぶことこそ梓にとって安牌だったのだ。
彼女なら不必要に梓を痛めつけないだろうし、そのまま敗北してもそれをきっかけに江乃死魔に戻ることもできるだろう。
何より梓でも勝てる可能性の高い相手なのだ。

恋奈だけは三大天の中でも異色の立ち位置であり、その強さは喧嘩ではなく組織構成におけるカリスマ性に特化している。
だからこそ愛は梓が恋奈を選ぶと思っていた。
しかし現実はそうならず、梓は何故かリスクが高すぎる愛を選んだ。
「恋奈様舐めすぎっすよ辻堂センパイ。
恋奈様のあのタフさはスタミナが無い上に打たれ弱い自分にはむしろ天敵っす」
自分の天敵だと言っているのに、恋奈の名を口に出す梓は誇らしげだった。
「どうせやりあっても自分がスタミナ切れでジリ貧なのは目に見えてる。
そんなだったら互いに一撃で仕留め合うハイリスクハイリターンな相手を選んだほうがマシっす」
「へぇ、アタシを一撃で仕留めれるとは大きく出たな」
梓の挑発に薄く笑って返答する愛。
徐々に喧嘩が始まるであろう空気が漂い始める。
「何より、これ以上恋奈様に歯向かうのもヤですし」
ボソリと、愛に気づかれないように呟く。
愛はふと思い出したように梓の左腕を指差す。
「それ、まだ治らねえのか」

梓はその質問に意味深な態度で答える。
「皆殺しセンパイやティアラセンパイは2日で骨折治しますけど、自分はどうなんでしょうね?
ギプスはめたままなんで全然わからないです」
と言いながら実際はどうなっているのか理解しているのだろう。
右手で彼女に不釣合なほど無骨なギプスをポンポンと叩く。
愛はその舐めた態度がカンに触ったのか片眉を上げた。
「そんなもの付けたままでアタシに勝つつもりか?」
「そりゃそうでしょ。そうじゃなきゃここにいませんよ」
梓がゆっくりと構えをとる。
対して愛は依然としてただ憮然と立つだけ。
その対応に梓は訝しがる。
「・・・・・・構えないんすか?」
いつでも攻める姿勢を取りながら梓は訪ねた。
「舐めた態度をとる奴には相応の扱いをする性分なんでな」
「後で言い訳しても聞く耳もちませんから」
ジリジリと、蛇のように地をなぞる摺り足で梓は距離を詰めていく。

愛はそれに何か対応するわけでもなく、ただポケットに両手をしまって彼女が動くのを待った。
愛は完全に後の先をとるつもりだと梓は看破する。
恐らく自分が攻めたところで容易くカウンターを入れられるのは目に見えているのだ。
その為僅かでも距離を埋めて反応を間に合わなくさせようとする。
だがそれでも一定の距離までしか埋められない。
愛は自分から攻めないとは一言も言っていない。
故に迂闊に距離を詰めすぎると逆に不意を付いた愛に対応できなくなる。
梓が最終的に愛との間に置いた距離は三メートル。
これだけあれば互いに瞬きしている間に一撃は余裕で叩き込める。
「どうした、間合いはこれだけでいいのか？」
愛の試すような言葉に梓は舌打ちをする。
「カウンター狙いとか、喧嘩狼にしては随分消極的な喧嘩の仕方じゃないっすか？」
軽口を叩いて自分の内心を悟られないようにする。
「誰がカウンター狙いなんて言ったよ」
「な――――うぁ!?」

呟いた瞬間愛が一瞬で三メートルの間合いを詰めて、ポケットに手を入れたまま蹴りを繰り出す。
余りにもフェイントのないその動きに戸惑うものの梓はその蹴りを半身で避けた。
フォームも適当の、ただ取り敢えず出したのであろうそのいい加減な蹴りは梓に威圧を与えた。
避けた瞬間、彼女の耳には鈍い風切り音が聞こえたのだ。
そう、いい加減に繰り出したその蹴りは梓の想像以上に早く、察するに重かった。
あそこで避けずに受け止めたのなら、そのまま吹き飛ばされていたであろうことが想像できる。
そのイメージに梓は冷や汗をかく。
「ティアラセンパイ以上の馬鹿力なのを忘れてましたよ」
まともに殴り合ったら何もできず血祭りにあうのは目に見えている。
ガードという選択肢は片手しか使えない梓には最初からない。
片手では攻撃を止めただけで既に両腕が塞がることになり、相手の二打目に対応ができないのだ。
梓はかつてないほどに目を凝らし愛の動きを詳細に感じ取る。
蹴りを空ぶった愛に一気に肉薄して右拳をがら空きの腹に叩き込もうとする。

手の形は打ち抜きやすい抜き手。
直撃すれば確実に愛といえども悶絶は免れない筈。
そう思い一気につき出す。
「つつぅ！」
驚きの声を上げたのはカウンターを入れようとした梓の方だった。
不意に、隙だらけな筈の愛から得体の知れないプレッシャーを感じて横にステップする。
その瞬間、梓のいた愛の懐から再び風切り音が鳴った。
愛が空ぶった足を空中で止め、その足でそのまま横蹴りに切り替えたのだ。
「つは、いい反応だ」
馬鹿な、と梓は毒づく。
冗談ではない。
こちらは相手の攻撃をくぐってカウンターをだした。
対して愛は一度蹴りを空振りしたにもかかわらず、そのままの姿勢で出した第二打を梓のカウンターより速く出してきたのだ。
つまり少なくとも今の梓が一度攻撃を出すのに愛は最低二発は繰り出せる。
速度ですら負けている。

「そういや前に読んだ漫画で言ってたな。
突きを蹴り並みに強くする。
もしくは蹴りを突き並みに器用にするのが最も強くなる近道って」
愛は先ほどと変わらず薄く笑いを浮かべながら姿勢をなおす。
「それじゃあアタシはどこまで蹴りが器用に出せるか試してみるか」
一度ステップを踏んで、着地した瞬間愛の姿がぶれる。
その姿を梓は見逃さず、同じく距離を詰めてきた愛に対応する。
初段はなんの変哲もないローキックだ。
その蹴りに合わせて軸足を刈る狙いで行く。
梓は愛の蹴りの射程からギリギリ離れて蹴りを避けようとする。
しかしその蹴りは突如梓の足ではなく横腹に突き刺さりそうになった。
焦って更に後退してそれも躱わす。
ローからミドルに、Ｖ字を書くように蹴りの軌道を変えた愛。
「今のを避けるのか」
高い敏捷性を見せる梓に楽しげに声をかける。
だが梓は愛のそんな言葉に反応している余裕がない。
「そんじゃもう一度、いくぞ」

再び来る。
今度は突き出すような蹴り。
俗に言うヤクザキックだ。
これは単純に身を半分横にそらすだけで避けることができる。
だが果たしてそんな避け方をして大丈夫なのか。
愛がコンビネーションを狙っているのは確定している。
だったら
「らぁっ！」
相手のテンポを崩さない事には防戦一方になるのがわかりきっている。
梓は半身でよけながら愛の蹴りを右腕で挟む。
同時に左足で軸足を蹴りぬこうとやり返すようにローキックを入れた。
そう、確かに入れた。
だが、蹴り抜かれた筈の愛の軸足は僅かも揺れなかった。
拙いと感じた梓は慌てて追撃を入れようとするも、姿勢が悪い。
即座に追撃は諦めて愛の足を放す。
「いい蹴りだ。だが、少し重さが足りねぇな」
どこがいい蹴りだ。

まるで効いていないではないか。
「・・・・・・メチャクチャなステータスしてますね」
ティアラ以上の怪力に、不自然なまでの体の安定性。
そして現在片手の使えない自分を大きく上回る速度。
明らかに強さの次元が違う。
かろうじて愛の攻撃は見えている。
しかし見えているだけで、これからどこまで捌ききれるかわかったものではない。
駄目押しに相手はまだポケットに手をいれているのだ。
それで今のザマ。
勝てる要素がない。
「どうした、いい加減そっちから攻めてこいよ」
「簡単に言いやがって・・・・・・」
確実に決まったカウンターにダメージは無く、急所を狙った攻撃はコンビネーションで容易く防がれる。
どうしたものか。
いや、考えている場合ではない。
いい加減防戦はやめなければならない。

それこそいつまで自分が対応できるかわからないのだ。
梓は転じて一気に右拳を愛の顔に振り抜く。
なんの虚実もない素直な右ストレート。
愛はそれをなんて事もない様に首だけで避ける。
勿論梓もこんなのが当たるとは思っていない。
互いにわかりきったフェイントだ。
即座に出した手を引っ込めて後ろ回し蹴りをする。
「へぇ、本格的な回し蹴りだ。何か武術習ってんのか？」
「別に、昔護身術で軽くかじった程度だよ！」
余裕でそれすら躱す。
暖簾に腕押しとはこの事だ。
どれだけフェイントを混ぜようが、大技を繰り出そうが当たる気がしない。
まだこの喧嘩が始まって四度しか攻撃をしていない。
だがもう薄々解ってきたことがある。
「はは、それでその強さかよ。すげぇなお前」
何も武術を習っていないのにそれ以上の強さを誇る愛に言われてもまるで嬉しくない。

そこから、十数分にも及んで延々と同じ展開が繰り返された。
余裕を持って圧倒する愛にひたすら防戦を繰り返す梓。
これがただの不良による喧嘩ならば観衆はいずれ飽きて帰っていただろう。
「・・・・・・すげぇ」
だれが呟いたのか、彼の言葉に周りの人間は無意識にただ生唾を飲んで頷く。
愛はまるで本気を出していない。
にもかかわらず喧嘩なれした不良にとって、彼女のその一挙一動が既に自分を遥かに超えた超人的な身のこなしなのだ。
大振りの蹴りなはずなのに規格外の速度と体勢の立て直しの素早さ。
そして直撃すれば一撃で受けた箇所の骨が砕けることが想像できる威力。
彼女の初弾の蹴りだけで殆どの不良が反応すらできず、一撃で屠られるレベルなのだ。
その蹴りを延々と躱し続ける梓も同時に並みの不良を容易く凌駕する実力である。
観客には全く見えない蹴りを異常な動体視力とフットワークで躱し続け、躱した際に

は堅実にカウンターを入れ続ける。
無論それが未だ一撃も当たることはない。
しかし、そもそも愛に反撃をできるだけで異常なのだ。
だが、それもそろそろ限界が見え始めた。
尋常ではない集中力で愛の一撃必殺の蹴りを躱し続けたのだ。
既に精神面は摩耗が始まって蹴りに反応するのが遅れ始めることも多くなった。
対して愛は未だ無傷かつ体力もまるで消耗していない。
その無尽蔵なスタミナの片鱗を感じて梓は焦燥する。
持久戦もだめか。
喧嘩における重要なステータス全てに置いて負けている。
このままではどうあがいても勝てない。
いや、そもそもこの喧嘩は自分は勝つ必要のないものなのだ。
単純に今自分が戦っているのは自分の強さを観客に誇示するため。
そして愛のその圧倒的強さを見せて大に手を出す事のリスクを教えるためなのだ。
だったらそろそろ、負けても良いのではないか？
一瞬そういった疑問。否、甘えが梓の脳裏によぎる。
「――――冗談じゃない」

その甘えを即座に叩き潰す。
勝ち負けではない。
この喧嘩には自分のプライドがかかっている。
先日の答えがなければこのまま愛にある程度攻撃をくらって倒されるのもアリだったのかもしれない。
だが自分は昨日、自分の人生を決めた。
自分はもう不良をやめられないのだ。
他人の気持ちを蔑ろにして、自分のしたい事を貫き通す。その生き方を選んだ。
ひたすらに大を愛する。
その結果迷惑を被るのは愛や大だろう。だがそんなのは知ったことではない。
他人を気にして自分の気持ちを抑える事なんて出来るはずがない。
そんな顧みる行為は結果として自分の恋を諦めて、虚しさに耐える道に他ならない。
嫌だ、そんな結末は嫌だ。
どんな形でもいい。歪な関係でもいい。
不誠実な愛でもいい。
それがどれほど結果として自分を惨めにする考え方だったとしても、
ただひたすらに大に愛されたい。

この喧嘩も同じことだ。
この決闘が目指す結末は自分が叩きのめされる事だ。
そしてその結果は自分がどう足掻いても変えられないだろう。
ならばその結果に到達する前にする事がある。
手を抜いて妥協した敗北よりも、全力を尽くして力及ばず負ける。
結果が変わらないから、それに逃げていい加減な気持ちで望む事なんてもうできない。
「もういいよ、飽きた」
愛の蹴りを何度も避け続けてわかったことがある。
こんな事を何度繰り返しても無駄だ。
何も伝えられないし何も伝わらない。
愛の大振りの蹴りを避けて一気に距離を置く。
幸いにして愛はその開けた間隔を埋めて来ることはなかった。
「何度も何度も」
くだらない。
こんな舐めたとかそういう不良の体面を気遣った喧嘩などどうでもいい。
「何度も何度も何度も何度も何度も。

同じ事ばかり、もう飽き飽きなんだよ」
愛が片手の自分を舐めて両手を使わないのではない。
両手を使ってしまうと一瞬で喧嘩が終わってしまうから使わないのだ。
そんなことは最初からわかっていた。
愛に不便させる選択をさせた自分を恥じ入る。
「テメェがあずを舐めるのならそのままでいいよ、くそったれ」
もう手段を選んでいる場合ではない。
愛に本気を出してもらわねば自分の気がすまない。
左手を真っ直ぐに前に伸ばす。
伸ばしたその腕を――――いっきに地面に叩き付けた。
コンクリート同士がぶつかる音が耳をつんざく。
自分の腕にまとわりついていた無骨な重りだったギプスは一撃でヒビが入った。
そのヒビにめがけて次は自分の膝を叩き込む。
再び響く粉砕音。
辺りの不良は梓の自虐的な行為に目を丸くする。
ただ、愛だけはその行為を注意して見ていた。
「ふぅ、久々に自分の左手みましたよ」

粉々になったギプスをなんの感慨もなく捨て去って左手をプラプラと振る。
痛みはない。
若干しびれる感じはするが喧嘩には支障がない程度だ。
大胆な行動をした梓を愛は邪魔することなくただ見る。
「・・・・・・良いのか?」
その質問は一体どういう意味を込めているのか。
見物人は誰一人として理解できない。
恐らく殆どの者が折れた腕を治すギプスを壊していいのかと聴いているようにしか聞こえないだろう。
ただ、梓だけはその言葉の真意を把握した。
本気で相手して大丈夫なのか?
その確認なのだ。
梓は真剣な愛に、頷く。
「わかった、いい加減アタシも同じ事ばかり飽きてきたところだ。
そろそろテメェのツラをこの手で殴りたくなってきた」
一度瞼を閉じて、その後圧倒的なプレッシャーを出しながらポケットから両手を出す。

そしてその手を握り、ようやく愛がファイティングポーズをとる。
つまりもう手加減はしないという意思表示なのだ。
「冗談でしょ、殴るのはあずで殴られるのはテメェなんだよ」

互いに本気を出した喧嘩は壮絶だった。
梓は打撃主体だった先ほどの動きから一変、完全な急所狙い。
一撃でも当たれば文字通り致死レベルの攻撃をし続ける。
愛の台風のような攻撃を全て弾き、躱し、すり抜け何度も関節技も決めた。
「つぅ・・・・・・陰湿な喧嘩しやがる」
「嗜虐的な喧嘩の仕方と言ってくださいよ」
愛の突き出した手を避けつつその手を掴む。
そしてゼロコンマ2秒で前腕と手首の関節を分離させる。
電撃が走るような痛みが愛の右腕に伝わって即座に手を引っ込める。
愛は梓の明らかな人体を破壊することに長けたその喧嘩の仕方に楽しさを覚えた。
やった事のないタイプだ。

胸の高鳴りがおさまらない。
喧嘩なんて退屈なばかりと思っていたが、どうやら梓は自分のお眼鏡に適う相手だ。
堪えきれない喜びを噛み締めながら外された関節をつなぐ。
愛が何度も現時点で腕や足の関節を外されたように、梓自身も無傷ではない。
例え両手が使えたとしても、何一つとして愛に勝るステータスはないのだ。
故に一度関節を外すたびにカウンターで攻撃をもらう。
梓の顔や胸には既に十発以上拳や蹴りが叩き込まれている。
一撃必殺の威力である愛の攻撃をくらっているにもかかわらず梓は依然として立っていた。
だがそれでもノーダメージなわけではない。
先ほどから目眩はするし、足はガクガクと震えている。
次もらったらもう立てないかもしれない。
それを九回繰り返しただけなのだ。
ひたすらに梓の突出した身体能力で攻撃を喰らいこそすれ、直撃はまぬがれ続けた。
だからまだ立っていられる。
まともに喰らえば恐らく一撃で気絶するだろう。
そんなリスクを背負って梓も攻撃を繰り返しているのに関節技こそ決まるが、急所狙

いの攻撃は一度も届かない。
骨を外すのでなく、破壊する関節技も決まらない。
つまり、最初と変わらずやはりジリ貧なのだ。
既に自分は本気でやっている。
両手は使い、持てる実力を惜しみなく出している。
だというのに最初と変わらず勝てるイメージが一切湧かない。
考えながらも何度も愛に攻める。
水月の部分を狙って抜き手を放つ。
だが、それが命中する前に愛の拳が自分の横腹に突き刺さる。
後出しにもかかわらず自分の抜き手より速い愛の拳に不条理さを感じながらも、意識は手放さずめり込んだ拳を繋ぐ愛の腕を掴んだ。
そのまま一気に肘の関節を外す。
「ぐぅ!!」
「・・・・・・てぇな」
こんなの痛み分けにすらならない。
愛は自分で腕を繋げられるが、自分はダメージがなかったことにはできない
しかも今のはかなり直撃に近かった。

愛は関節をつなぐために距離を置くが、自分は追う事すらできずその場に崩れ落ちた。

ヤバイ、息ができない。

見れば愛はもう腕をつないでいる。

だというのに自分は立てる気すらしないほど足にも意思にも力が入らない。

「おいおい。まさかこんな呆気なく終わるのか?」

そうだ、余りにも呆気なさすぎる。

あれだけ凌いできたのに、良いのを一撃貰っただけで立ち上がれなくなるのか。

そんな馬鹿な話があるか。

梓は必死で腕や足に力を入れる。

しかし意思に反して立ち上がれない。

愛はそんな梓を見下しながら彼女の前に立つ。

「立て、こんなんじゃテメェも気がすまないんだろうが」

梓の胸ぐらを掴んで一気に持ち上げる。

余りの衝撃に一瞬気が飛びかけるがなんとか踏みとどまった。

ふと、その際に常用している制服のボタンが千切とんだ。

当然か、梓の全体重がそのボタンを繋ぐ糸にかかったのだ。

弾け飛んだボタンは軽い音を響かせながら冷たいコンクリートの上を転がる。
それを見た瞬間、梓の頭が真っ白になった。
あのボタンは――――
「――――離せ」
「あぁ？」
自分を持ち上げる愛の腕を両手で握る。
「離せって言ってんだよ！」
浮かばされたまま、愛のその腕にに膝を叩き込んだ。
体重が乗っていない上に不自然な姿勢で放ったその蹴りに威力は期待できない。
だがそれでも愛の握力を緩める事はできたらしく、愛はたまらず手を離した。
梓はそのまま愛に目もくれず、転がっていたボタンの元へ走りより、両手で掴む。
「・・・・・・よかった」
そのボタンを大切そうに手で包んで胸に寄せる。
「そのボタンがそんなに大事なのか」
愛は隙だらけである梓を敢えて襲わず、ただ彼女が再び立ち上がるのを待つ。
その顔を見た瞬間、梓は頭が沸騰した。
せっかく大切な人が自分のために縫い付けてくれたボタンを、よくも。

殺意にも似た感情で一切の防御をやめて愛に襲いかかる。
「っと！　いきなり何だ！」
「くたばりやがれ！　クソックソォッ！」
決してその動きはヤケクソではない。
振りは大振りで隙があるものの、これまでのどの攻撃よりも速度があり、同時に的確に急所を狙っている。
「っち、調子に乗んな！」
「あぐッ！」
圧倒的な速度の連打を全てギリギリ避けながらも愛は的確にカウンターを間に入れる。
その攻撃は十分な力があり、梓の腹に直撃する。
先程までと同じ彼女ならばこの攻撃で再び崩れただろう。
だが、その重いインパクトで僅かに後ずさるものの一瞬で再び愛に肉薄する。
「ウザイんだよ！　目障りなんだよ！」
ダメージを受けていないのか、獣のような鋭くも大胆な攻撃を尚継続する。
「アンタが！　アンタさえいなければ！」
「くぅ、流石にやべぇ」

愛は梓の言葉の真意を考えながらも全て冷静に迫り来る拳を弾き落とす。
だが突如としてまるで反撃を恐れなくなった梓の動きに愛は追いつけなくなった。
防御など度外視したその玉砕にも似たその攻撃は余りにも速さがある。
既に速度のみに置いては愛と同等かそれ以上のものなのだ。
「さっきから、お前は何を言っているんだ!?」
何よりも愛が対処しきれないのは攻撃ではなく梓のその叫びだった。
ただの恨み言ではない。
その言葉には明らかな愛への憎悪の意が入っている。
「先に出会ったから、先に惚れられたから・・・・・・そんな事で諦めきれるか」
尋常ではない速度と重さをもった蹴りが愛に迫る。
躱しきれないと判断した愛は防御姿勢をとる。
「気がつけば好きになってた、気がつけば自分の身を傷つけてでも良いくらいに愛していた」
構えた腕に梓の蹴りが直撃する。
カウンターを狙おうとするものの、そんな余裕はない。
想像以上の蹴りの重さに愛はたたらを踏む。
「欲が出た、自分が好きなように相手にも自分を好いて欲しいと思うようになった」

愛がひるんだ隙を付くようにマシンガンのような連打を放つ。
愛ですらその攻撃の全てが見切ることができない。
「なのに、どうして。どうして――――」
蹴りを防いだ腕に更に拳の雨が降る。
ガードしているはずなのにその腕越しにダメージがくる。
「何でその気持ちを諦めないといけない!?」
「ぐうぅぅ!」
叫び続けながら愛を殴り続ける。
「好きな人の隣には既に相手がいたから。
そんな理由で納得できるほど半端な気持ちじゃない!」
「テメェ、言いたいことばかり言いやがって!」
何時までも押される愛ではない。
ワンパターン化してきた梓の拳を間一髪のタイミングで避け、やり返すように拳を振り抜く。
その拳は確かに梓に届いた。
「つぅっ」
ノーガードでまともに愛の拳を喰らう。

その隙を付くように愛が更にもう一度殴りかかる。
しかしその攻撃が再び梓に届くことはなく、寸での所で凄まじい風切り音を上げながらも空を切る。
「大は、アタシの男だ！　大がアタシに惚れた、アタシが大を愛した！」
空振りした拳をすぐに引っ込めて回避行動から戻っていない梓に蹴りの連撃を打ち込む。
その攻撃を梓はほぼ避けきるも、僅かに一撃だけ貰った。
衝撃を殺しきれず梓は二メートルほど飛び、背中から落ちる。
「そこに他の奴が入る隙間はねぇ、テメェの恋はもう終わってんだよ！」
「黙れッ、初恋が実ったアンタに何がわかる!?」
転げ落ちながらも受身をとった梓はダメージを意に介さず一気に攻める。
「惨めで、虚しくて、きっと報われないのに・・・・・・
それでも好きで、なのにどうしようもないこの気持ちがわかってたまるか！」
徐々に、徐々にだが梓の攻撃が愛に直撃する頻度が増えてくる。
「どれだけみっともない愛の形でもいい！　皆に迷惑しかかけない恋でもいい！」
同時に、愛の攻撃も梓に直撃する回数が増え続ける。
どちらも半端ではない攻撃の重さだ。

全てが一撃必殺の威力にも関わらず、それをくらって尚倒れることなく二人は殴り合いを続ける。

「ただ、長谷センパイに好いてもらいたい！　その気持ちが全てなんだよ！」

ここに来て、梓の本気で放った抜き手が愛の鳩尾に直撃する。

明らかな必殺の一撃。

「・・・・・・がっ」

梓はその確かな手応えを感じる。

愛もその一撃に吐血する。

明らかに以前梓が良子に打ち込んだ攻撃を上回る威力だ。

だが、それを食らっても愛は地に膝をつかなかった。

それどころか、未だ自分の急所にめり込んだその手を掴む。

「――――良い啖呵だ、半端じゃない覚悟だ」

「なっ!?」

梓の手を掴んだまま、一気にその顔を殴り飛ばす。

当然手を掴まれたままではガードも回避もできるはずがなく、まともに喰らう。

「そうだ、その半端じゃない気持ち。アタシにも覚えがある」

気絶しかねないほどのダメージを貰った梓は慌てて自分に喝を入れて立ち上がる。

その姿に愛はかつてない程に喧嘩の楽しみを見出した。
「一度はアタシも諦めた」
ダメージで足が動かない梓に攻めることはせず。
構えすら捨て去った、ただ立っているだけの姿勢で梓に語りかける。
「不良だから、いっぱい迷惑かけるから。
だから無理だと思った。間違いだと思った」
梓の欠片も揺ぎのないその感情に愛は内から感じるものがあった。
「それでも好きだった。迷惑をかけるのをわかっていてまだ嫌いになれない」
その他人にも相手にも迷惑しかかけれない不良の良くない恋は果たして間違ったものなのか。
そんな事は絶対にない。
「この先何年経っても、何度喧嘩しても。世界一相性が悪くたって――――」
良くない恋だから、だから諦める必要なんてないのだ。
「アタシは大とずっと一緒にいたい。アタシは大にそう願った」
この気持ちはもう今後一生揺らぐことのない感情だろう。
そしてその感情を同じく持つ女がいる。
「乾梓、お前はどうなんだ?」

どんなだって敵に回す覚悟はあるのか。
長谷大に恋心を抱くのならば今後も自分を敵に回し続ける事と同義だ。
既に自分と大は恋仲だ。
将来の約束だってしている。
そんな勝敗のわかりきった喧嘩と同じような恋を今後も抱き続けるのか。
その覚悟を愛は知りたかった。
梓はその愛の真意を曲がりなく感じ取る。
「わからないですよ」
梓は本心を吐き出す。
「だって、こんな気持ちになったのは初めてなんですから。
ただ、あずはずっと、報われなくてもいいからずっと・・・・・・」
ポケットに閉まったボタンを右手で包む。
「長谷センパイの近くにいたい。
あの暖かさに触れていたいんです！」
まるで父親や母親に近い母性的なものを大には感じていた。
迷惑をかけたって許してくれる。でも、本当に悪いことをしたら叱ってくれる。
危ないことをしたら心配してくれる。

安全を守るために庇ってくれる。
ご飯を作ってくれて、服を縫ってくれて。
言葉にすれば数え切れない程彼の好きなところが思い浮かぶ。
あの優しさにずっと包まれていたい。
その中毒的な暖かさに浸かっていたい。
愛は梓のその答えとも言えない答えに頷く。
「そうか」
それだけ言って愛は再び構えた。
梓もそれに応じる様に構える。
互いにすでに限界が来ている。
無論ダメージは圧倒的に梓の方が上だ。
だがそんなのはもうどうでもいい。
勝つとか負けるとか。
そんなのは最初からどうでもいいのだ。
確実に梓は負けるだろう。
予想通りの結果だ。
しかし、負け方は本当は負けるべき梓が選ぶものではない。

全力を尽くして、気持ちを吐き出して。
それでもう何も出すものが無くなった。
その時にこそ負けるべきなのだ。
途中諦めて手を抜いて負けるのでは言い訳しか残らない。
しかし今、ここで愛に負けるのならそれは恐らく、
悔しさと誇りが得られるのだろう。
ようやく見えた喧嘩の終わりに梓は笑った。
少なくとも、悪い気分じゃない。
恋敵に自分の全てをぶつけた。恨み言を吐ききった。
そこまでに一切の妥協はなかったし、出し惜しみもなかった。
「それじゃあ、そろそろ終わらせるか」
「はい、辻堂センパイ」
二人は互いに笑い合いながら、決着をつけるべく踏み出した。

結果として、最後に地についたのは乾梓だった。

何度もいい攻撃をもらったはずの愛はダメージを一切感じさせない佇まいでうつ伏せで倒れる梓を見下ろす。
梓はそんな愛を笑って見上げる。
全身は愛に殴られてボロボロな上に、限界を越えた動きに自分の体力は一切残っていない。
未だ熱意は冷めぬものの、それでも体が完全に限界だった。
「やっぱ勝てませんでしたね。残念っす」
「当然だ。大の為にも、お前の為にも負けられねえよ」
その男よりも漢らしい言葉に梓は笑ってしまう。
これで愛が男だったら本当に惚れてしまいそうだ。
「雪、降ってきましたね」
うつ伏せの体を無理に動かして仰向けになる。
広くて、大きくて。それでいて重たい曇天だった空からは純白の粒が降り出す。
愛も梓もそれを何も言わずしばらく見つめ続けた。
「何でしょうね、初めから負ける喧嘩とわかって挑んだのに
案の定負けたのに、この上なく悔しいんですよ」
愛は梓の顔を見る。

その瞳には大粒の雫が伝っていた。
「悔しいと思うなら、その悔しさの分だけ本気だったんだろ」
ポケットから愛用のハンカチを取り出して梓の瞼を拭う。
だが、拭いても途端にまた彼女の瞳は濡れる。
それは雪のせいなのか、彼女の涙のせいなのか。
「アタシは一生大から離れるつもりはねぇ」
嗚咽を漏らす梓を優しく撫でながら愛は言う。
「ただ、それでもアタシ達についてくる馬鹿を追い払う気もない。
お前はお前のしたいようにしろ、アタシがお前の気持ちにとやかくいう資格はない」
少なくとも梓のその気持ちは本気だ。
その本気の気持ちを愛は知っているからこそ彼女を責めれない。
やめろという事もできない。
愛おしい彼氏に別の女の影がちらつくのは決して嬉しくない。
それでも、その女が本気なのならば話は別だ。
彼氏を魅了しようとするのならするといい、自分はそれを上塗りするほど愛してやる。
そう心に決めて、愛は梓から離れて立ち上がった。

「本日をもって、この乾梓は辻堂愛の舎弟となった！」
「・・・・・・・え？」
突然の愛の宣言に周りは当然として、梓も反応する。
「今後、アタシの男は当然としてコイツにも手を出すな！」
声高らかに叫ぶ。
「もしそれを守れないのなら、喧嘩狼に喧嘩を売ったものとみなしタダじゃおかねえ！覚えておけ！」
こうして、乾梓が引き起こした恐喝騒動やそれに関わる問題は終わりを迎えた。
この件で梓は結局全てを失っただけだった。
金を失い、仲間を失い、信用を失い。
それでいて何も得たものはなかった。
しかしそれでも、得たものは無かったとしても一つの夢は見えた。
自分の将来なんて漠然としたものだ。
それこそ明日のことだって何が起こるかわからない。
しかし、何が起こるかわからなかったとしても、何をするかは選ぶことができる。
明日はどうしたい。明後日はどこへ行きたい。
そういった願望に『長谷大と』を繋げる程に彼女の心境は大きく変わった。

その変化は彼女にとって大きな成長へ繋がるものだろう。

その夜、長谷大の病室には一人の医者が訪れた。
どうやら医者はこの相部屋に同居人が入ることの報告に来たらしい。
しかもその同居人は既に扉の向こう側にいるらしく、先生も突然のことで申し訳なさそうだ。
人のいい長谷大は断ることもなく同意した。
その返答に安心したのか、先生はそのまま扉の前にいく。
どうやらそのまま紹介をするらしい。
先生の呼びかけに外で待っていた人物は大きく返事して部屋に入ってくる。
「どうも！　この部屋にご一緒することになった乾梓っす！」
そんな気はしていた。
「お帰り、またよろしくね」
帰ってきたのなら暖かく迎える。
俺にとってもう彼女は家族同然なのだから。
大のその言葉に彼女は何を思ったのか、凄く嬉しそうな顔をしながら先生から離れて

俺に詰め寄った。
「ただいま、センパイ」
その笑顔を見て大は次に彼女に会った時にいう予定だった言葉を口にする。
「もう、危ないことはしちゃ駄目だよ」
悪さばかりして、怪我もするようになって。
それでも愛嬌があって憎みきれない彼女。
乾梓は既に大にとって家族同様だった。
見れば酷いケガだ。
顔を含めて色々なところに包帯を巻いている。
そんな姿を見て心を傷めずにはいられない。
しかし梓はそんな怪我に意も介さず動けない大に抱きついた。
「センパイ、大好きっす！」
その声は今まで大が聞いたことのない程澄み切っていて。
それでいて決意ある音だった。

冬休みのひと時
14話：惚れるワケ

春眠暁を覚えず。
誰もが聞いたことのある言葉だろう、俺も同様にやはりこの言葉を知っている。
意味は春の夜は余りにも眠り心地がいいために、朝が来たことにも気付かず寝過ごしてしまうという事だ。
時々、あまりに寒いため朝布団から出られないという風に解釈している人もいる。
さて、現在の季節は冬。
それももうすぐ新年を迎える程に師走の終盤だ。
その寒さは凄まじく、暖房を効かせていなければベッドから出るのが一種の苦行となるほどに。
入院生活の現在もそれは変わらず、経費削減とやらで深夜はエアコンを止められている。
いや、つけようと思えばつけられるのだが少し怖い婦長さんに皮肉を言われるのだ。
無用な説教は御免したいがために俺は言われた通り深夜はエアコンをつけない。

その為に朝目が覚めた時の室温がやばいことになっている。
寒いとかそういうレベルではない。
寒さがそのまま冷たさに変わり、冷たさが痛みに変わるくらいに寒い。
が、何故だろう。
現在俺は体も頭も全て布団の中に入れて寝ているのだが、妙にいつもより暖かい。
まだ半分夢心地なために何故か察するほど頭が回転しないが、いつもより心地よいその感じに幸せなものを感じる。
頭を少し動かすと何やら顔に柔らかい感触が伝わる。
プニプニしていて、それでいてスベスベで。
だというのにモチモチしていて。何よりも甘酸っぱくていい香りだ。
どこかで味わったことのある感触だが、思い出せない。
まぁいいや。まだ眠いし今はまだこの気持ちいい感触を味わおう。
顔をグリグリする。
「あ、ひゃぁん！」
何か上の方で声が聞こえた。
何だろうと一瞬考えたがやはり眠い頭ではわからん。
ん～、顔だけでなく手でも味わいたいな。

顔を埋めるソレをがしっと掴んでみる。
そしてこねくり回す。
おお、いい感触だ。
まるで粘土のように形を自在に変えるのにそれでいて粘土にはない手を押し返す反発力がある。
「ちょ、やめっ。それ以上は・・・・・あんっ」
何やら上から悩ましげな声がする。
まあそんなことはどうでもいい。
今はこれを味わうのが先決だ。
顔をグリグリと暖かい谷間に埋めつつ、手でそれを揉みしだく。
あ〜、あれだなこれ。
女性の胸の感触に似ている。
そういえば確かに、愛さんのに似ている。
愛さんのはもっと小さいけれど、これ以上の質感というか、ハリや細やかさがあって・・・・・ん?
ようやく頭が冴えてきた。
「はぁ、はぁ。センパぁイ・・・・・」

やばい。
ここでようやく気付いた。
これおっぱいだわ。
しかも夜忍び込んでくる姉の時とは違って今回の侵入者は服着ていない。
布団の中だから見えないけれど、服の感触がないのだ。
即座に顔を埋めていた箇所から離れる。
そして恐る恐る布団から顔を出してみれば。
「・・・・・なにしてるのさ」
乾さんがやたら艶っぽい顔で息切れしていた。
「あ。おはざっす、長谷センパイ」
「お、おはよう」
挨拶も大切だけれども、それよりももっと話すべきことがあるだろう。
「どうして俺のベッドに？」
見たところ上も着ずに俺のベッドに潜り込む理由が見つからない。
「寒いんですもん、だから人肌であったかくしようかと思いまして」
一理ある。
寒いし、そういう時は体温で温まった布団こそが最高の逃げ場所になる。

が、それでもだ。
「何も男の布団に潜り込まなくても」
「いいじゃないっすか、長谷センパイも気持ちよかったでしょ？」
「・・・・・・はい」
暖かかったし、気持ちよかったです。
「って、そんなことより。早く服着なよ、風邪ひくよ」
「はぁい」
そう言って乾さんは首から下を布団から出す。
出した瞬間俺は飛び上がった。
「乾さん！　胸！　胸！」
そうだ、上を着ていないのだ。
一瞬見えた彼女の大きな胸と綺麗なピンク色の突起。
俺は即座にそれを忘れようと努力しつつ、自分の目を手で塞ぐ。
「ありゃ、隠すの忘れてました。
ちょっとシーツ借りますね」
胸を隠すのに使うのだろう。
薄いシーツを手にとって乾さんは体に巻いた。

「因みに、今あずは下も穿いてませんよ」
「そんな報告いいから！　っていうか何で全裸で男の布団入るのさ！」
痴女か。
「ふふん、そりゃぁお色気作戦に決まっているでしょう」
一応シーツをまいているのでもう裸ではない。
俺は手をどける。
それを確認した乾さんは自分のベッドの上に腰掛けて足を組む。
「センパイ、別に我慢する必要は無いんですよ？
いつでもあずは受け入れる準備してますから」
「が、我慢なんてしてないさ」
いいから早くカーテンを閉めて着替えて欲しい。
だが乾さんは俺の心境を知ってか知らずか、一向に着替える素振りを見せない。
それどころか何やらニヤニヤと俺を見る。
「我慢してない？　嘘は良くないですよセンパイ」
凄くいやらしい笑みで俺を見る。
いや正確には俺というより俺の下腹部。
ん？

「いやん！　梓さんのエッチ！」
「そんな青狸のヒロインみたく言われましても」
　見れば俺の下腹部には布団をかつて空を支え続けたというアトラスのように押し上げる愚直なマイサン。
　真っ白で平行線のように平らなその布団には一本そびえ立つ白き巨塔。
　その雄大さ広大さは見るものを魅了してやまない。
　なわけがあるか。
「違うんだ、これは男子特有の生理現象であって。
　朝起きたら普通こうなるものなんだ」
「別の所が起き上がったという遠まわしなアピールっすか？」
「そんなつもりはないよ」
　誰が上手いことを言おうとした。
「ともかく、これは若さの証明であって別にムラムラしたとかそういう意味じゃ……」
「ないんですか？」
「無いとも言い切れませんが」
　いや、まぁ朝おきたら少しムラムラする。若いし。
　それに朝一番に乾さんの胸である。

そりゃ男なら興奮するだろうけど。
「と、ともかく今後そういう事はやめなさい」
「嫌です。寒いんですもん」
だめだこりゃ。
「いや、俺彼女いますしそういうのは良くないと思うんですよ」
「え？　辻堂センパイの許可ならもうありますよ」
え、何それ。
「好きにしろって言われてますし。
一応その為の交換条件も呑みましたし」
「交換条件って？」
彼氏おいてけぼりで何を交渉したのだろうか。
「自分がしばらく辻堂軍団の一員になる代わりにその間だけ長谷センパイに何しても怒らない。
そういう内容です」
それはつまり愛さんと乾さんが先日喧嘩をしたという事なのだろうか。
というか愛さん、随分思い切った約束をしたものだ。
しかもこれって俺が乾さんに誘惑されたら間違いなく俺が被害を被るパターンの奴

ではないだろうか。
「辻堂軍団に入ってどうするのさ」
「さあ？　あずも特に何するか言われてないっす」
一応怪我をした乾さんを庇護下に置くために引き入れたってのが愛さんの考えだろう。
つまり彼女が辻堂軍団に入れている間だけ愛さんが守ってやると。
ただ、それだと愛さんに何もメリットの無い交換条件な気がするが。
それは乾さんも自覚しているのか、少し申し訳なさそうな顔をしている。
「一応今日辻堂軍団に挨拶するつもりですけど、何か気をつける事とかありますかね？」
なにげにそこらへんはキチンとしている。
挨拶とか面倒だからしなさそうなイメージあったが認識を改めよう。
「ん～、基本愛さんを尊敬した人たちの集まりだから、
愛さんを侮辱しなければ快く迎えてくれると思うよ」
自分も最初はヤンキーな彼らには驚いたが、話してみれば皆気のいい人たちだった。
今でも彼らの集まる教室には顔を出しているし、一緒に下校する事だってある。
「あ、でもクミちゃんには気をつけたほうがいいかも」
「クミ・・・・・誰でしたっけ？」

結構酷い。
何度も顔を合わせている筈なんだけど。
「ほら、夏に俺とクミちゃんが一緒に帰ってる所に乾さんや一条さんが襲ってきたじゃない。
その時に乾さんが海辺で俺の喉笛潰しながら関節外そうとした時に一緒にいた女の子」
「うぐ、微妙に根に持ってますね」
「いや別に根に持ってないって。一番思い出しやすそうなのがそのシチュエーションなだけだよ」
気まずそうな顔をする乾さん。
だがその説明でようやく思い出したのか、手をポンと叩く。
「あぁ、あのバカ女っすか」
「ひどい」
俺としては可愛げのある女の子なんだが。
乾さんからすれば勝ち目なく喧嘩を売りまくっている無鉄砲のイメージなんだろうな。
「うえぇ、あんなのをセンパイなんて呼びたくないっすよ」

「別に、同い年なんだしセンパイなんて付けなくともいいんじゃないかな」
言われてみれば乾さんは江乃死魔にいた頃も同い年な筈の恋奈さんやハナさん、一条さんにも先輩という敬称を使っていた。
どうやら先にその組織にいたから先輩といっているのだろう。
地味にそういう上下関係はきっちりしてるところが面白い。
「センパイも一緒に行きませんか？　正直あず一人じゃ心細いっす」
「あ～、それは良いけど俺動けないよ？」
「大丈夫っす。車椅子に乗れば問題ありません。
自分が優しく押しますから」
お言葉に甘えるとしよう。
正直冬休みに入ってから殆ど病室で過ごしているため退屈で仕方がない。
辻堂集会なら愛さんも来るだろうし、俺としてはむしろ行きたい所だったのだ。
「じゃ、まだ早いですけど準備しましょうか」
そういってカーテンを閉めずに体に巻いていたシーツを脱ぎ出す乾さん。
「わあああああ！　せめてこっちに背中向けてよ！　見える、見えちゃうから！」
いきなり脱ぎ出すから思い切り目を逸らし損ねた。
またもや思い切り彼女の胸を見てしまった。

・・・・・・でかかった。
「別にセンパイなら見ても良いんですよ？
手を出してくれたってむしろウェルカムっす」
「良いから早く服着なさい、風邪ひくよ」
「はぁい」
寒いはずの部屋なのに異常に暑苦しくなった。
下半身なんてもはや沸点越えているようなレベルである。

「気にいらねぇ・・・・・・」
乾さんの顔をみた途端にそう零すクミちゃん。
現在俺と乾さんは補習が終わったらしい辻堂軍団の集まる教室にいる。
愛さんだけはちゃんと俺と一緒に勉強したから一教科も補習はない。
その為少しここに来るのが遅れているらしい。
「何で愛さんはテメェみたいな裏切り者を引き入れたんだよ」
ストレートすぎるその毒舌に乾さんは苛立った顔で舌打ちをする。

「ウザイっすね。上の人が言ったのならそれは絶対服従でしょうに。
いちいち文句垂れてんじゃねぇよ」
「んだとこらぁ！」
「ちょ、ちょっと待ってよ二人共」
慌てて二人を仲裁する。
こうなることは何となく想像ついたが、いくらなんでも二人の相性悪すぎ。
「・・・・・・センパイが言うなら」
未だ頭に来ているみたいだが俺の言葉には大人しく従って引いてくれる乾さん。
何やら彼女の中では俺の言うことは絶対服従っぽいんだが、それはそれで戸惑う。
対してクミちゃんはまるで引く気がないらしく、
口は閉じたものの舌打ちしたりメンチ切ったりして乾さんに喧嘩をふっかけている。
乾さんも心底イラついているらしく、いつ殴りかかってもおかしくない。
「クミちゃん、そういうのよくないって」
「せやで、そこの乾はんを擁護するワケちゃうけど
愛はんの命令ならそれに大人しく従ってこそのわいらやろうが」
俺の言葉に合わせてクミちゃんを窘めてくれる軍団員Bさん。
申し訳ないけど実は名前を知らないのだ。

「うっせぇな。オレだって愛さんのすることに文句いいたくねぇけど。
でもコイツは気に食わねえんだよ」
そんな狂犬みたいな事を言われても。
どうしたものかと考える。
「（くちゃくちゃ）クミ、あんたどうせシーヒロが愛さん以外の女とベタベタしてんのが気に入らないんでしょ?」
相変わらずガムを噛みながらフランクにクミちゃんに絡む軍団員Ｄさん。
俺の呼称がおかしい気がするが突っ込ものは野暮なのだろう。
「ち、ちげぇよボケ!」
顔を真っ赤にして否定する。
まぁ確かにそれが普通だよな。
クミちゃんは愛さんに心酔している。
そんな人の彼氏が他の女性の影をちらつかせていていい気がするはずがない。
「ふぅん。そういうわけっすか」
「な、なんだよ」
弱みを見つけたとばかりにクミちゃんに絡む乾さん。
「別になんでもないっすよ。ただ、そんなに恨まれる理由はわかったっす」

「あぁ!?　なにわかったような口きいてやがる！」
「お～お～怖い怖い。行動派なあずに嫉妬する奥手女から逃げるっす」
「だ、何言ってやがるテメェ！」
何やら二人が相性悪いのはわかったのだが乾さんはその相性が悪い原因に気づいたらしい。
俺にはよくわからないいじり方をしてクミちゃんで遊び始めた。
そんな彼女たちを見て俺は内心思う。
本当に乾さんが辻堂軍団に一時的とは言え入って大丈夫なのだろうかと。
突如俺のその心配を現実にするように、稲村学園の校庭に爆音が響く。
その音を聴いて全員が動きを止めた。
「この耳障りな音は・・・・・・！」
一番に反応したのがクミちゃんだった。
真っ先に教室の窓へ詰め寄って外を確認する。
それに習うように全員が彼女に続いて窓に詰め寄る。
「あ～、これ自分のせいですね」
乾さんが俺を気遣って車椅子を窓際に持って行ってくれた時に彼女のそのつぶやきの意味がわかった。

なるほど、この喧しい客はどうやら乾さんに用事があるようだ。

「わざわざこんな所まで来るとはどういう了見だクソ恋奈」

人気のない校庭で辻堂軍団と江乃死魔の精鋭五十人程度がにらみ合う。

その先頭にはクミちゃんと片瀬さんの姿があった。

「鬱陶しい顔みせないで頂戴。私の今日の目的はアンタ達じゃないの、そこをどきなさい」

「あぁ!?」

心底鬱陶しそうな顔をしながらクミちゃんを邪険にする片瀬さん。

そういえばこの二人は中学時代に確執があったのだった。

「ほら、隠れてないでてきなさい梓。いるんでしょ」

目前のクミちゃんを視界から外し、乾さんを呼び出す。

その声に辻堂軍団の最後尾にいた乾さんはびくりと反応する。

お呼びのようだが、何故か前に出ようとはしない。

「どうしたの？　片瀬さんが呼んでるよ」

「う〜、立場上出づらいっす」
まぁ、気持ちはわかる。
元江乃死魔幹部で抜けたあとも一条さんや片瀬さんから再勧誘を受けていた。
なのに入ったグループは江乃死魔の目の上のたんこぶである辻堂軍団だ。
そりゃ出づらい。
「センパイ、このまま逃げません?」
そういって俺の車椅子を握って回れ右する。
「こらこら、せめて話だけでも聞いていかないと片瀬さんに申し訳ないよ」
「むぅ、正論すぎて耳が痛いっす」
とはいいながらも俺の言葉なら耳を貸してくれるらしい。
しぶしぶといった感じで江乃死魔の方へ歩き始める。
何故か俺も前に持って行かれているのが疑問だが、一人だと心細いのだろう。

辻堂軍団の人たちを掻き分けて先頭に立った俺達。
その姿をみて片瀬さんはジロリを睨む。
「聞いたわよ梓。アンタ、昨日辻堂に負けて舎弟になったそうじゃない」
「ええ、それが何か?」

乾さんの淡白な反応にため息をつく片瀬さん。
「それで、どうするの。マジで辻堂軍団に入ったわけ？」
それを確認するためにここへ来たのだろう。
真剣な表情で確認する。
「ええ、負けた自分が勝った辻堂センパイの命令に従うのは当然でしょう」
その筋の通った答えに片瀬さんはこめかみを抑える。
「いいの？」
「いいのとは何がっすか」
「アンタ、私達江乃死魔と敵対してもいいのかって聞いてるのよ」
その言葉に乾さんは苦笑する。
「別に、自分はそれほど辻堂軍団に肩入れするつもりはないですよ。
勿論辻堂センパイや長谷センパイに江乃死魔とやりあうように命令されりゃ従いますけど。
このバカ女達が勝手にやりあうのならどうぞご勝手にって感じっす」
乾さんは俺に対しては明らかに優しくなったが、他の人間に対しては相変わらず辛辣だった。
元から結構きついことを言う子だと思っていたが、改めてそれを確認した。

「随分中途半端なのね」
「ええ、ですからあずが自分から恋奈様達に喧嘩売ったりするわけではないので安心してください」
明らかに乾さんが片瀬さんを挑発しだした。
江乃死魔のメンバーも総長が舐められていると思って騒ぎ始めている。
その中から一人、背の高い筋骨隆々の女性が現れた。
「よ、梓。怪我の調子はどうだっての」
一条さんは乾さんが辻堂軍団に入ったことを特に怒ってはいないのか、普段通りに話しかける。
その敵意のない語りかけに乾さんは少し困った顔をする。
「良くはないっすね。自分ティアラさんのように回復力ないもんで」
「俺っち骨折も二日で治るからなぁ。ん、ティアラさん?」
一条さんは乾さんの自分への呼称に引っかかったらしい。
そこは俺も気になった。
「もう同じグループでもないんですしセンパイとつけるのもアレでしょう」
どぎつい悪どい顔でティアラさんに吐き捨てる。
どうしてここまで刺々しい態度を取る必要があるのだろうか。

「もういいでしょティアラ」
呆気にとられた一条さんの前に立つ片瀬さん。
そして人差し指を乾さんに向ける。
「それじゃあ梓。今日この瞬間からアンタは私の敵よ」
そう言いきった。
「元身内の奴が別のグループにいるなんて目障り以外のなにものでもない。
今日ここで潰されてもまさか文句なんて言わないわよね？」
まずい。
この流れは。
慌てて静止の声をかけようとするも間に合わない。
「テメェら！　やれ！」
片瀬さんのその掛け声一つで五十人の精鋭が一斉に辻堂軍団に襲いかかった。
「ちょ、どうするんでっかクミはん！　流石にこの人数差は無理やで！」

「うっせぇ！　愛さんが来るまで持ちこたえるしかねえだろ！」
喧嘩が始まってからは地獄絵図だった。
幸いにしてまだ倒された人はいないが、それでも徐々に人数の差で押され始める。
「おいテメェ！　少しは真面目にやりやがれ！」
クミちゃんが襲いかかる不良を必死によけながら遠く離れた箇所で逃げ続ける乾さんを怒号する。
「え～、だってメンドイですし」
「メンドイってテメェが挑発したからこうなったんだろうが！」
因みに俺の車椅子は乾さんが喧嘩開始直後に離れた所に持っていったので喧嘩の蚊帳の外の位置にいる。
というより距離を置く際にも江乃死魔の誰もが俺を狙わなかった。
多分片瀬さんが俺を狙わないように事前に指示していたのかもしれない。
相変わらず見えない所で優しさを見せる子だ。
「おいおい、まだ俺っちが出てないのにそのまま壊滅するんじゃないのかいコレ」
遠いところで呟く一条さん。
今日来ている幹部は一条さんと片瀬さんだけらしい。
その二人もまだ喧嘩の中に入っていないため辻堂軍団は凌いでいられた。

「ティアラ、もういいわ。アンタもいきなさい」
「あいよ、恋奈様」
だがいい加減にこんな掃討戦に飽きたのだろう。
片瀬さんはさっさと終わらせるために一条さんを投入する。
彼女が喧嘩の輪に入ったのをみて辻堂軍団のメンバーは慌てふためく。
「あらよっと！」
「うぎゃあーーーー！」
タックル一つで吹き飛ばされる辻堂軍団の一人。
無理もない、自動販売機を一撃でヘシ曲げる体当たりだ。
並みの不良が食らったのではひとたまりもない。
俺はその姿をみて胸にざわついたものを感じる。
それを不快に思いながら、いつでも俺を庇える位置にいた乾さんに声をかけた。
「乾さんはこの喧嘩に参加しないの？」
俺の問いに乾さんは笑って答える。
「はい。だって、痛いのヤですもん」
明確な答えだった。
「でも、この喧嘩の目的って乾さんを潰す事だから結局最後は君が狙われるんじゃ」

「その時はさっさと逃げ切ります。
勿論センパイも一緒に連れて行きますんで安心してください」
そういうつもりだったのか。
・・・・・・あまり好きな所ではない彼女の一面を見た気がする。
「何を安心するのさ」
無意識のようにつぶやいてしまった。
目の前で知人が殴り倒されているのに安心して逃げるなんて俺にはできない。
できるなら割り込んで仲裁したい所だ。
「あ、あれ？　センパイもしかして怒ってません？」
俺の僅かに陰った顔を見たのか、乾さんは焦ったように話しかけてくる。
「別に、怒ってないよ」
誰だって痛いのは嫌だ。
だから乾さんのその考えを否定するつもりはない。
ただいい気がしないだけだ。
「怒ってるじゃないっすか。なんでもしますから機嫌直してくださいよぉ」
「だから怒ってないって」
そんなに不貞腐れた顔をしていたのだろうか。

少し反省する。
だが乾さんはやたら俺にくっついてひたすらに甘え声で何やら言ってくる。
怒ってないのだから何もしてもらう必要はないのだが。
「そうだ、アイツら見捨てたのが駄目だったんっすね」
何やら一人で自己回答をしたらしい。
「じゃあ手を貸してきますからそれで許してくださいセンパイ」
そういって俺を現場から結構離れた箇所に置いて喧嘩の中に突っ込んでいった。

そこからの展開は凄まじいものだった。
五十人の精鋭を乾さんは片っ端から叩きのめしていって、数分で壊滅させたのだ。
そりゃそうだ。
乾さんだって愛さんに準ずる実力者。
本気を出さなくてもこの程度の人数なら余裕なのだろう。
「あら、結局残ったのはティアラさんと恋奈様だけっすか」
以前として腕を組んで立つ片瀬さん。

現状としてはかなりピンチな筈なのに全然ひるんでいる様子はない。
「へへっ、そんじゃあ俺っちとタイマンしてみるかい？」
同じく一条さんも喧嘩好きの血が騒ぐのか怯えるどころかむしろ楽しんでいた。
「いいんすか？　もう仲間でもなんでもないんだから手加減なんてしませんよ？」
「上等だっての！」
乾さんの挑発に乗った一条さんは一切のフェイントをせず、真っ直ぐ彼女に突っ込んだ。
そのタックルは速い上にとてつもなく重い。
当たれば大概の人間なら一撃でノックダウンするだろう。
しかし、相手が悪すぎた。
乾さんは冷めた顔で容易くその突進を躱し、すれ違いざまに何やら一条さんの足に触れた。
一体何をしたのかと思ったが、その答えは一瞬で出た。
勢いよく突進を空ぶった一条さんが乾さんとすれ違った瞬間大きく転倒したのだ。
「は？　あれ!?」
何がおこったのか本人は理解できないのだろう。
慌てて立ち上がろうにも足に力が入らず立てない。

当然だ。
足の関節が繋がっていないのだから。
「ほら、これで勝負ついたっしょ。
負けを認めるなら痛くないようにつなげますよ？」
立ち上がれない一条さんに嗜虐心顕にした顔で近づく乾さん。
だが一条さんは自分の足の関節が外された事に遅れて気がつく。
「ざけんな！　関節くらい自分でハメれるっての――――！」
自分の外れた足を両手で掴む。
瞬間、ゴキッというとんでもなく鳥肌が立つほど痛々しい音が響いた。
なんて事はない、一条さんが自分で外れた足をつなげたのだ。
聞いた音だけでつなげるのを失敗したのだとわかる。
見てもなんか足の向きとか少しおかしくなってるのだ。
「っつううううぅぅぅぅぅぅ・・・・・・」
本人もとてつもなく痛かったのだろう、涙をこぼしながら立ち上がれないでいる。
関節も変なはめ方をしたから動くかどうかも怪しい。
「あぁもう、そんな下手くそな繋げ方したら逆に関節痛めますよ」
何だかんだで一条さんを心配しているのか、慌てて悶絶している一条さんに近づく。

そしてそのまま一瞬で先ほど一条さんが自分でつなげた関節を外した。
「はめ方はこうっす」
そして流れるような手つきで一条さんの足をひねった。
今度は何やら軽い音が響く。
さっきの聞くだけで痛みがこっちにまで伝わりそうなのとは違って、気持ちいのいい音だった。
「お、おお！　全然痛くなくなったっての！」
痛みが一瞬で失せたのかすくっと立ち上がる。
足をストレッチ感覚で伸ばすがどうやら調子もいいようだ。
「今のはサービスしましたけど次は無いですよ。
次外したらもうあずは繋げてあげません。
自分で繋げるのならどうぞご勝手に、後遺症残っても知りませんので」
さっきのやり取りで乾さんの強さを味わったのだろう。
一条さんも渋い顔をする。
流石にもう今みたいに自分で関節を戻そうとは思わないだろう。
構えないティアラさんに乾さんはため息をつく。
「で、残るは恋奈様だけっすけど、どうするんですか」

乾さんに声を投げかけられて尚態度を崩さない片瀬さん。
明らかにピンチな筈なのにどうしてここまでブレないのか。
そう思った瞬間、更に遠くから喧しいバイクの音が響く。
しかもそれは明らかに稲村学園に近づいてきている。
「さて、それじゃあ第二幕と行きましょうか。
今度は三百で相手してあげるわ」
なるほど。
そりゃあ強気でいられるわけだよ。
「うげ、想定外っす」
乾さんもゲンナリする。
そしてそのまま片瀬さんに背を向けて一瞬で俺の方へ向かってきた。
「逃げるぞテメェら！　覚えてやがれクソ恋奈！」
見れば乾さんの喧嘩をぽーっと眺めていた辻堂軍団も慌てて撤退準備を始めていた。
「あず達も逃げましょうセンパイ。流石に三百も相手してたら体力が持ちません」
スタミナはそれほどない乾さんは持久戦に弱い。
故にこの片瀬さんのとった数による暴力は対乾さんには有効なのだ。
乾さんもそれを自覚しているから即効俺の車椅子を持って稲村学園から撤退した。

気に食わない。
久美にとって乾梓への感情はその一言だった。
過去に自分たち辻堂軍団の障害となった存在。
それも忌々しい片瀬恋奈の作った江乃死魔の幹部。
反吐が出るほどに気に食わない。
圧倒的な運動神経を持ちながら、それを最近まで隠蔽していた事。
露見したとしても尚進んで戦おうとしないこと。
妬みと怒りが混じりあった不愉快な気分になる。
なんなのだアイツは。
「ここにいたのか、クミ」
江乃死魔から逃げて数時間経った現在。
本来ならば愛を迎えて今ごろ集会をしていたはずなのだ。
なのに恋奈のせいでその予定すら潰れた。
「愛さん。すいませんでした、呼び出したのは俺達だってのに」

久美は時間がある程度経過したのを見計らって一人で稲村学園に戻った。
まさか何時間も他校に恋奈もいられるはずもない。そういう目論見だ。
だがそこまで頭が回ったのは久美だけであり、
拠点としている教室には他にだれも戻ってこず、一人寂しく誰もいない学園の屋上で黄昏ていた。
「驚いたぞ。わざわざ呼び出されたから冬休みにここに来たのに、
待っていたのはお前らじゃなくて恋奈達だったし」
まぁ掃除はしといたが、と付け足す愛。
年末の大掃除扱いで江乃死魔のメンバーはかたされたらしい。
それを想像して久美はくすりと笑う。
流石愛さんだ。
一人であの人数の敵をぶっ倒すことができる。
その強さに憧れるし、その凛々しくも美しい容姿に魅了される。
彼女の一挙一動にカリスマ性を感じ、慕う気持ちを抑えられない。
「で、どうすんだ今日。もう集まる予定ないのならアタシは帰るぞ」
「・・・・・・ヒロシの所行くんですか？」
帰ろうとする愛に問いかける。

「ああ。まだ今日は顔を合わせてないからな。
一日会わないだけでどうも落ち着かない」
一度喧嘩別れをしてからというもの、ヨリを戻してからの愛は大への気持ちをあまり隠そうとしなくなった。
そのストレートな物言いには聞かされるこっちが恥ずかしくなるほどだ。
「愛さん。そんなにヒロシが好きならどうしてあの乾ってのを潰さないんすか?」
好きな男に別の女の姿がちらつくのが嬉しいわけない。
もし自分の好きな男にそんな事があったら自分はなりふり構わず喧嘩を売って叩きのめそうとするだろう。
しかし愛はそれをしようとせず、むしろ自分に乾梓を近づけるべく舎弟にした。
全く理解ができない。
「お前も昨日の喧嘩みたろ。ちゃんとアタシがこの手でアイツ殴り倒しただろうが」
そうじゃない。
あの喧嘩は確かにすごかった。
時々見るマキと愛の喧嘩とは別のベクトルにある、何か引き込まれるとてつもないぶつかり合いだった。
互いの気持ちを、意地をぶつけ合いながら

その意思の強さがそのまま喧嘩の実力に変換されたような。
言葉にするのは難しいけれど、自分の知る乾梓の喧嘩ではなかったのだ。
なりふり構わず殴りかかり、愛の攻撃を食らっても尚倒れないその姿。
その姿に自分は嫉妬したのではないだろうか。
「そうじゃないんです。愛さんは目障りじゃないんですか？
ヒロシの隣にいつもあんな奴がいる事に」
大のことは久美も認めている。
腕っ節はてんで弱くて、容姿だって美しい愛に釣り合うとは到底思えない平々凡々を絵に書いたような男だ。
でも愛はいつか言った。
世界で一番悪い奴じゃないから好きになったと。
最初は意味がわからなかった。
しかし今となってはもうわかっているのだ。
他人のために体を張れて、人の悪い所ではなく良い所を見ようとする素直さ。
甘えればそれを許してくれそうな包容力。
挙げればキリがない程に長谷大の魅力を知っている。
だから愛と大が付き合う事にもう一切の反対はない。

だが乾梓と長谷大が近づくことに関しては絶対に許せない。
自分の認める長谷大が、あんな気に食わない女と一緒にいるところなど見たくはない。
昔、まだ長谷大を認めていなかった頃の気持ちがそのまま乾梓に向けられているのだ。
「目障りに決まってんだろ。今だってアイツが大の傍にいることが想像つく。それを拒めない大だって頭に浮かぶ。気に食わないことこの上ねぇよ」
だったら何でアイツを長谷大に近づけるなんて真似を、と言いかける。
だがそれを言い切る前に愛は続きの言葉をだした。
「それでも認めざるを得ないだろうが。
あれだけ真っ直ぐにアタシに気持ちをぶつけてきたんだから」
先日の喧嘩のことだろう。
あの時に乾梓は長谷大の彼女である愛に長谷への思いの丈をぶつけた。
聞いているこっちが恥ずかしくなるほどの真っ直ぐな想いを吐き出した。
少なくともその気持ちは一切の迷いがなく、深いものだったことは久美にもわかったのだ。
「あの気持ちを潰す事はアタシにはできない。

だから敢えてチャンスをやった」
好きにしろと。
それを認めた愛の気持ちはどうだったのだろうか。
「アタシが大に二度別れを持ち出したことがあるのは知ってるか？」
「はい、確か一回目は夏の三会が終わった辺りですよね」
「ああ、それであっている」
その最初の別れの切り出しの原因も知っている。
愛は自分が不良の番長だから、一般人の大に危険が及ぶ事を危惧して別れを切り出したのだと聞いた。
その選択は間違いなく正しいだろう。
現にこの冬休み中に長谷大は乾梓や三大天を恨む連中に襲われて重症を負った。
それを回避するために愛は自分の気持ちを諦めてまで別れようとした。
「もし、もしもだ。
有り得ない例え話をするが、その時に大が振り返らずそのままアタシ達が別れたとする」
実際に口にしたくもない程嫌な仮定なのだろう。
愛の言葉に先程のような凛々しさがない。

「ヤンキーに好かれやすい大の事だ、
別れた後に恋奈や腰越と何かしら関わりを持って付き合わないとも限らない。
もしかすれば他の女と付き合う事だってあったかもしれない」
確かに、恋奈はわからないが腰越マキならば愛に振られて傷心している大を放ってはおかないだろう。
失恋をきっかけに始まる恋だってある。
「大がアタシではない別の女と付き合った時、アタシはどうするんだろうな」
愛は自分に問いかけるようにこぼした。
「少なくとも大への迷惑を考えて、番長の立場を気にして。
乾のように自分の気持ちを出すことはなかったと思う」
自分の気持ちを押さえ込んで、大の幸せのために自分の失恋の痛さに耐え忍ぶ。
そんな何も得ることのない辛いだけの選択をしている姿が目に浮かぶ。
対して梓はその失恋の痛さを恐れ、愛することを諦めなかった。
「アタシとアイツの選んだ道、どっちが人として正しいのかと言われればアタシが正しいだろうな」
人の迷惑を考えてしたい事を諦める。
それは人の在り方としてこの上なく正しい。

「だが、自分の気持ちに素直になって他人を顧みず、ただやりたいことを貫き通す。
不良としてどちらが正しいのかと聞かれれば間違いなくアイツの方だ」
他人の恋を応援などしていられない。
自分の気持ちを抑えるなど有り得ない。
そう考えたからこそ愛と対立した梓。
「正しい事をしている奴を邪魔するなんて曲がったことはアタシはできない」
それが愛の答えなのだろう。
どこまでも実直な彼女は人としてではなく、不良として、一人の女として真っ直ぐ進もうとする梓に応援こそしないものの
ある程度の寛容さを持っていた。
「・・・・・・そっすか」
その答えを聞いた久美は少し不貞腐れたように屋上から街を見下ろす。
納得はできない。
だが、愛や乾梓の気持ちが半端ではない事はわかった。
そうじゃなきゃ梓は愛に喧嘩など売れるわけないし、愛も梓が大に近づいてそれで落ち着いていられるなど有り得ない。
「まぁ、大はもうアタシと結婚する事が決まってるしな。アタシの将来は薔薇色です、ま

る」
「いきなり惚気けないでくださいよ。空気が台無しですって」
梓のその生き方は同じく不良の久美にとって学ぶべきものだった。
腹が立つ事この上ないが、愛の話を聞いた久美は少しだけ、本当に少しだけだが乾梓の事を認めつつあった。

「センパイ、ほらあーん」
「いいって、俺はウィダー的なゼリーだけでいいから」
そう言って乾さんがスプーンに掬ったカレーを遠慮しつつ両腕にあるギプスで某ゼリーパックを挟んでチューチューする。
全然これお腹太らないのが難点だ。
エネルギー摂取しても腹が満たされなかったらあまり意味がない気がするんだよな。
「センパイ、照れないでちゃんと食べてくださいっす。
それじゃあ怪我の治りも遅くなりますよ」

真剣な顔で怒られた。
江乃死魔から逃げた俺達は時間を持て余し、お昼の食事を外で摂ることになった。
とはいえこんな車椅子状態では飲食店でも人目について江乃死魔のメンバーに見つかりそうなので
人通りが少ない風景の良い海辺まで来たのだが。
寒い。
風が吹きすさぶ。
乾さんは大型カレーチェーン店で二人分のカレーを買ってきた。
そして冷める前に先に自分の分をささっと食べて、余ったもう一つのを手の使えない俺に食べさせてくれるのだが。
いかんせん彼女である愛さん以外にそれをやられるのはこっぱずかしい。
今までは病院食を断ってギプスで挟んで食べれるパンなどで食事を済ませていたのだが
今日の朝それを知った乾さんは俺を怒った。
そういうわけで俺の食事介護をしてくれるらしいが。
「いいって、流石に乾さんにそんな事させるのは悪いよ」
やはり申し訳ないのだ。

遠慮して断る。
「・・・・・・長谷センパイ。そういう我侭いうのでしたら自分にも考えがあるっす」
「え？」
何を思ったのか、さっきまで俺に向けていたスプーンを自分の口に運んだ。
そしてそれを飲み込まず、口に含めたままガシっと俺の両頬を掴む。
あ、これってもしかして。
「んむっ！」
「ンがァっ！」
思い切り強い力で頭を引っ張られて強制的にキスされる。
同時に乾さんの柔らかい舌が俺の唇を割って入り込み、唇を否応なく開かせた。
「んん・・・・・・ちゅ・・・・・・・」
そして流れ込むカレー。
まさかの口移し。
その移されたカレーの味を確かめることなく俺は飲み込んだ。
味などわかるはずもない。
「っぷはぁ！　何すんのさ乾さん！」
息をするために唇を離す。

慌てて問いただそうとする。
しかし乾さんはどうやら惚けていて俺の声が聞こえてないようだった。
自分からしておいて惚けるのか。
「はっ、センパイどうかしました？」
突如として覚醒。
慌てて表情を元通りにするも、何やらニコニコしている。
それを自覚して手で直そうとするもどうやら上手くいかないようだ。
「どうしたって、俺が聞きたいんだけど」
いきなりの行為に驚いた。
まさか口移しなどされるとは思わなかったのだ。
「あ～、それはセンパイが我侭いって食事をしようとしないからっす。
大人しく言う通りにしていればもっとソフトにキスしてあげたんですよ？」
ですよ？　じゃないよ。
結局キスするつもりだったんかい。
「はぁ、乾さん。ちょっとお説教するよ」
「はいっす。それじゃあ正座しましょうか？」
「いや、そこまでは・・・・・・」

どうも思うのだが、昨日の喧嘩の件から乾さんが余りにも俺に従順になっているフシがある。

それも誰にでもというわけではなく、俺だけに。

「乾さん。俺は女持ちなんだ」

「知ったことじゃないっす」

はい終わった。

この時点で何を言っても駄目っぽい。

若干諦めに近いものを抱きつつ取り敢えずもう少し話してみる事にする。

「乾さん。聞かせて欲しい事があるんだ」

「センパイの質問ならなんでも答えますよ。

何ならあずのスリーサイズとか知りたくありません？」

「いいです」

詳細は知らないが、見ただけでスタイルが凄い事はわかる。

というか今はそんな事を考えている場合ではない。

「乾さんって俺のことがその・・・・・・好き、なんだよね？」

先日、顔を合わせたとたん告白された。

結局それに対して返事はしていないが、そもそも頷く事ができる筈もない。

「勿論。ベタ惚れっすよ」
胸を張って答える乾さん。
その隠すつもりもない好意に、言われた俺の方が照れてしまう。
「それだよ、俺が気になるのは」
何故ここまで俺が彼女に好かれるのか。
そこがずっと疑問だった。
「俺は乾さんに対して何か好かれるような事をした記憶がない。
ただ同じ空間で数日一緒に過ごしただけだ。
だというのに何故ここまで君に好かれるのか、理由がわからないんだ」
別に彼女のために何か行動を起こした記憶はない。
一度我が身を盾にして不良の暴力から庇おうとした事はあるが、
あれは普通にそんなことしなくても乾さんが自力でどうにかなったことだった。
「知りたいですか？　何で自分がセンパイの事好いてるか」
黙って頷く。
俺の素直な反応に乾さんは優しく笑った。
「そうですね、敢えて言うのならセンパイのその雰囲気です」
雰囲気か。

自分の纏う雰囲気などよくわからないのだが。
「よく言われません？　センパイって無害な人種とか、いい人だとか」
言われた事はある。
自覚はないけれど。
「そんな雰囲気だから好きになったの？」
「そうっす」
そんな、そんな理由で愛さんに喧嘩を売るほど他人を好きになれるものなのか？
「センパイは少しロマンチストすぎるんですよ」
俺の内心を察したのだろう、乾さんは少し困ったように俺に語りかける。
「誰かが自分に何かをしてくれたから、だからその人を好きになる。
それこそ漫画のように危険から身を呈して助けてくれたりする話なんて劇的ですね」
確かに、そういうシチュエーションの漫画はよくある。
むしろそういう過程があったからこそ、そこから生まれる愛は深くなるのではないかと俺は思っていたが。
「それもやっぱり人を好きになる理由にはなるでしょう。
でも、あずはそうじゃない。
ただ単純に、ユルくてヌルい日常の中で長谷大という人を好きになったんです」

彼女は自分の胸に手を当てて思い出すように呟く。
「何かをしてくれたとか、何かをしてあげたからとか。そんなのはどうでもいいんです。長谷センパイのその優しさ、包容力。そこにあずはただ惹かれただけなんですから」
その余りにも簡潔な答えに俺は何も言い返せなかった。
「だからセンパイがあずに何かしようとか考えなくていいっす。そのままの長谷センパイが好きですから。
勿論あずを好いてくれるのならそれが一番嬉しいんですけど」
少し寂しげに微笑む彼女。
人が人を好きになるのには明確なきっかけなど必要ないという。
確かに、女性が男性を好きになるのには容姿、財力、性格などの要素があるが彼女は単純にそこの性格を選んだ。
「大きなきっかけがなくとも、自分は気がついたらセンパイの事が好きになっていた。それが全てっす。これ以上の表現はありません」
それだけでここまで人を好きになれるのだろうか。
彼女のその愛の深さに俺は正直戸惑う。
しかし現実は小説より奇なり、現に乾さんは自分の身を傷つけてまでも俺の事を愛してくれている。

そして俺はまた言葉に詰まった。
それでも、それだけ愛されていても俺にはそれに応える事はできない。
「因みにですけど、実は辻堂センパイには一つ許可がでてるんですよね」
悩む俺に乾さんは突然話を変えた。
「何を？」
「知りたいっすか？」
嫌な予感がしながらも頷く。
それを確認した乾さんはニマーっと笑った。
「センパイとえっちぃ事する許可っす」
「はぁ!?!」
いや待て、愛さんがそこまで許可するとは到底思えない。
マジで有り得ない。
ウソウソ嘘だと言ってよ。
「まぁ、する時は辻堂センパイも同席するって条件ですけど・・・・・・」
何それ、３Ｐか、桃源郷か。
若干ワケがわからん内容で愛さんと色々約束事をしているらしい乾さん。
まだまだ俺の知らない事があるようだと冷や汗をかく。

「でも、軽い気持ちで君とそういう事をする気はないよ」
俺を真剣に好いてくれているからこそ、不幸にはなってほしくない。
できるなら彼女には幸せになって欲しい。
中途半端な気持ちで彼女を抱いてしまったらそれこそ彼女はもちろん愛さんすら裏切る行為だ。
「はい。あずもセンパイがそんなに早く手を出すとは思ってません」
穏やかな顔で微笑む乾さん。
その優しげな雰囲気に俺は少しときめいたものを感じた。
「そんなセンパイだから好きになったんですから」

15話：新年を迎えて信念を新たに（前）

大掃除。
それは一年の節目に行われるものである。
もちろん一人暮らしだったり、仕事に忙しい家庭などはしない事もある。
だが一般家庭ならば大体のところはするだろう。
もちろんこの俺、長谷家でも同じことだった。
ただ、今年はちょっと勝手が違う。
「・・・・・・どうしたものかな」
今日は12月の最終日。
夜には愛さんと初詣に行く約束をしている。
しかし昼の間は特に予定もないため家に帰る事にした。
無論自分の足ではまだ立てない為、姉ちゃんに迎えに来てもらったのだが。
「体が動かないヒロが無茶する必要ないわよ。
あとはこのお姉ちゃんに任せときなさい」
そう言ってきぱきと大掃除を勧める優秀な姉。

俺を迎えに来る前から朝からずっとしていたのだろう。
帰ってきた頃には結構掃除が終わっていた。
「でも、姉ちゃんの手が」
見れば水仕事で手が赤くなっていた。
雑巾などを冷水で洗っていたのだろう、姉の綺麗な筈の手が荒れつつあるのを見て心苦しいものを感じる。
「心配しないの。それに、ヒロの怪我と比べれば手荒れなんてどうってことないわよ」
何もできず座っている俺に優しい笑顔を向けてくれる姉ちゃん。
我ながら素晴らしい姉を持ったものだと思う。
「とはいえ、流石に今日中は厳しいわね。
二階の方はまた年を越してからでもいいかしら」
俺の体が治ればあとは全部俺がしたい。
そう言おうと口を開こうとしたとき、聞きなれたインターホンの音が家に響いた。

「二人共。自分の所優先したほうがいいんじゃ」
「ウチは両親が帰ってきてからするよ」

「あずは元々一人暮らしですから部屋広いわけでもないので、すぐ終わっちゃいました」
姉ちゃんが扉を開けるとそこには乾さんと愛さんがいた。
二人共各々の用事を済ませ、何故か合流予定時間も早めてウチに来たらしい。
愛さんはともかく、乾さんまで来るのは予定外だったが。
「ええと、ベッドの下とか拭かなくていいのか？」
そういってガシっと俺のベッドを持ち上げる愛さん。
めちゃくちゃ重いハズなんだけど、愛さんは鉄アレイを持ち上げるくらいに気楽にベッド持つんだよな。
「いや、そこまではいいよ。
っていうかそもそもウチの大掃除に付き合う必要ないって」
二人はウチに来るやいなや姉ちゃんが地道に一人で大掃除しているのを見て手伝うと言い出した。
「他人の家の掃除手伝うなんてまっぴらゴメンですけど、長谷センパイは別っす。
センパイが止めない限りピカピカにしますよ～」
愛さんがベッド持ち上げたのを確認して乾さんは素早く下に落ちたホコリを雑巾でぬぐい取る。
冷たいはずなんだが、乾さんは嫌な顔一つせず愛さんと同じく大掃除を手伝ってくれ

た。
「もうベッド降ろしてもいいか？」
「どぞっす」
二人は息の合った作業で動けない俺を構いつつ二回を素早く掃除していった。
基本力がいる作業は愛さんが担当し、それを乾さんがサポートしたりするかんじだ。
なんか、少し俺って今邪魔ではないかと自己嫌悪する。
掃除を手伝えないし、この体では飲み物を出すこともできない。
情けなくて嫌になってくる。
「なんて顔してんだよ」
愛さんがゴム手袋を外して俺に近寄ってきた。
どうやらそろそろ休憩するらしい、俺の部屋の掃除も大方終わったのだろう。
「ごめん。せっかく来てくれたのに他人の家の大掃除手伝わせることになって」
頭を下げる。
「ばか、謝るなって」
愛さんは困ったように首をかしげた。
「元々アタシは夏からずっと大の家に入り浸ってたし、だったら大掃除も手伝うのがスジってもんだろ。

だから大が謝る必要なんてないんだよ」
そう言って座っている俺と視線を高さを合わせるように愛さんはしゃがむ。
互いに目線を合わせて見つめあった。
「怪我をして掃除が手伝えないから気にしてるってのならそりゃ見当違いだ。
アタシは不器用だからこういう時くらいしか家事で手伝える事なんて無い
むしろやっと大の力になれて嬉しいんだよアタシは」
「・・・・・・愛さん」
じーんときた。
自己嫌悪にかられているときに人の優しさを感じるとここまで響くものなのか。
俺は優しい彼女を持って幸せだ。
「じー」
口で言いながら横から熱視線をおくる乾さんに気づく。
そういえばさっきから静かだったが、以前のように俺と愛さんがイチャイチャしていても妨害する事はしないみたいだ。
何か心境の変化でもあったのだろうか。
「乾さんもゴメンね。この恩は絶対に返すから」
俺が声をかけると乾さんは花が開いたようにパッと笑顔を見せた。

「恩とかそういうのはいいですよ。
あずはセンパイのお手伝い出来るだけで幸せっす」
ニコニコと笑いながらそう言う乾さん。
健気だ。
不覚にもドキっとした。
「っていうポイント稼ぎだろ？」
「失敬っすね」
愛さんの鋭いツッコミに反応する乾さん。
まぁ、したたかな子だからそういうのもあるだろう。
それでも親切をしてくれたことには変わらない。
いつか二人には何か別の形で恩を返さねばと決めた俺だった。

「お前、昨日無茶したようじゃねぇか」
愛は梓と二人きりになったのを見計らって声をかけた。

大は現在下の階でキッチンにいる。
一階の掃除は既に姉の凄まじい効率の良さで終わったのだ。
ここは換気のため窓を開けているので寒い。
なので愛は早々に大を下に降ろした。
「我ながらちょっと無茶しすぎましたね。
体のふしぶしがまだ痛いっす」
そう言って軽く服を捲る梓。
その華奢な体には特に目立った痣はない。
梓は体のどこかを指で触る。
「つぅ・・・・・触るだけでも辛いっすぅ～」
それだけで苦悶の表情を浮かべる。
「無茶すんな。痕にならないように、けれどまともに動けない程度に痛めつけたんだ。
あと数日はそのままだよ」
「器用な殴り方するんっすね」
「痣なんてつけたら大が気にするからな」
エヘンと胸を張る愛。
梓も女の子だ、痣ができるよりはダメージがでかいほうがいい。

そのため特に愛を責める気はない。
「少し休んでろ。あとはアタシがやっとくから」
愛はそれだけ言って再び雑巾を手にとった。
「悪いっすよ。あずも手伝います」
梓も服を元に戻して同じく雑巾を拾った。
「お前、そういう真面目なキャラだったか？
もっと手を抜けるところは人目につかない程度に手を抜く奴だと思ってたんだが」
愛の少し傷つくような問いに梓も渋い顔をする。
だが間違っていないので言い返す言葉はない。
そもそも今日だって愛おしい大の家だから大掃除を手伝ったのであって、他の人間の家の大掃除など絶対にしたくない。
もっとも、大の家なら手を抜くどころか褒めてもらうために本気で掃除するが。
「別に、長谷センパイ関わらない事なら今までどおりっすよ」
嫌いな奴は殴りたくなるし、嫌なことからは逃げ続けたい。
したい事をし続けていたいし、面倒事は関わりたくない。
大に不良をやめるといったのに愛の舎弟になったせいでそれすらままならない。
だったらそのままの自分でいこうと決めたのだ。

「それじゃさっさと――――あぅ」
床を拭こうとしゃがんだ瞬間笑えない痛みが体の至るところに響く。
昨日の江乃死魔との喧嘩のせいだ。
ただでさえ痛かったのにアレのせいで余計に治りかけの傷を開いたらしい。
とはいえ、その喧嘩に後悔はない。
「大に好かれたいとはいえ無茶すんな」
昨日は怪我をきにして辻堂軍団を見捨てたら大に嫌われかけた。
大に嫌われるくらいならば自分の体を痛めつけたほうがマシだ。
故に今尚響く鎮痛も仕方がないものと思うが。
痛いものは痛い。
「お、お言葉に甘えるっす・・・・・・」
今まで掃除を手伝えたのもある意味根性の一種だ。
大には幸いにして気づかれなかったようだが、愛は見逃さなかったらしい。
実際のところ、愛は梓が大を気遣ってやせ我慢している事に気付いたから早々に大を一階に降ろした。
梓も愛がそういう気の効かせ方をしたのは気づいている。
だからこそ愛の好意に甘えることにした。

「オラァッ！」
「くたばれ！」
「これでトドメだぁぁぁぁぁぁ！」
物騒な声が長谷家の二階に響き渡る。
愛は掃除をする際に何か叫んだりするのがちょっとユニークなところだ。
実にチャーミング。
ラブリーチャーミーだ。
「・・・・・・うっさいすね」
愛に気づかれないように呟く。
まぁ、ちょっと賑やかではある。
下の階の二人はいつものことだと二階に上がりもしない。
梓は今まで思っていた辻堂愛のイメージが崩れていくのを感じた。
一応夏からは愛も大と付き合っていたため、彼とイチャイチャして普段の彼女とは違うところも見せていたが
それでもやはり梓の中では大と一緒にいるのろけた愛よりクールで怒らせると酷い目にあう喧嘩狼のイメージの方が強かったのだ。

それが何故だろう、先日の喧嘩から、いや冬休みに入ってから彼女の違う一面を見続けることになった。

スジを通し、本気でぶつかれば相応の態度をとってくれる。

かといって圧倒的なまでの力に溺れることもなく、不良らしい事もしない。

タバコは吸わないし、俗に言うカツアゲなどの分かりやすい悪事もしない。

自分が正しいと思うことをツッパリ通しているだけの人間なのだ。

その信条が原因で喧嘩をすることもあるし、強すぎるせいで挑戦者も多い。

それでもやっぱり不良っぽくないと思う。

髪だって不良らしかった目立つ金色から大の好みに合わせて黒く染めた。

「ねぇ、辻堂センパイ」

「あぁ？　何だ」

今手が塞がっているため、首だけこちらを向ける。

「センパイって辻堂軍団のことどう思ってるんっすか？」

「随分いきなりな質問だな」

愛は梓の問いに答えようと持っていたタンスを降ろす。

「別に、気がついてたら勝手について来てた連中だ」

ドギツイ金髪や誰にも服従しないその性格が原因で現在辻堂軍団にいるメンバーと

は最低一度はぶつかっている。
　もっとも誰も愛に勝てるはずはないのだが。
「辻堂軍団って名前をつけているくらいだからセンパイがリーダーなんですよね？」
「まぁな。アタシはその名前嫌だけど、定着しちまったもんはしょうがない」
「でも、辻堂センパイが辻堂軍団を率いて何かしてるところなんて見たこと殆どないっす」
　基本的に愛は辻堂軍団には余り入り浸ったりしない。
　そもそも辻堂軍団に入る条件が愛の日常生活を妨げない事が絶対条件だからだ。
　詰まるところ、辻堂軍団とは愛のカリスマに惹かれた不良が集まって勝手に作ったグループなのである。
「久美センパイとかが勝手に喧嘩を売って返り討ちにあってるイメージが江乃死魔にはあるんですけど」
　その言葉を聞いて愛は渋い顔をする。
「まぁ辻堂軍団は辻堂センパイのワンマンチームってのが常識だから、
　他の人を倒したところで辻堂軍団倒したことにはならないっすよね」
　辻堂軍団を倒したところで、そこに愛がいなければ普通の不良よりちょっと強い程度のヤンキーの集まりを潰した程度の評価だ。

「何が言いたい？」
ここで愛は梓が何か企んでいるのではと考える。
梓も愛が自分を疑っていることに気づいて少し笑う。
「逆に言えば辻堂センパイが手を貸せばそれは湘南最強のチームなのではと言うことっす」
今まで愛がどこかのグループを自ら潰しに行ったことは殆どない。
だが一人で江乃死魔を壊滅させるほどの強さをもつ皆殺しのマキと同格の強さなのだ。
おそらく愛がその気になれば・・・・・・
「アタシに何をさせたい」
「別に、何でそれをしないのかずっと疑問だっただけです」
もし、もしもだが。
梓が最初に江乃死魔に入らず辻堂軍団に入ったのなら愛を焚きつける方向で湘南制覇を狙っただろう。
もっとも今は愛も梓も無用な恨みを買いたくないのでそんな制覇など興味はないが。
「・・・・・・つまんねーんだよ」
愛は梓から視線を外して掃除の続きに取り掛かった。

「どいつもこいつも口先だけの威勢ばっかりで弱いし、喧嘩なんて退屈なだけだ」
「その気持ちはわかるっす。
　でも、皆殺しセンパイなら辻堂センパイのお眼鏡に叶う筈じゃ？」
「それでもだ。喧嘩してる最中楽しめてもそれが終わればやっぱり何か白けた感じがあった」
　大に合うまでは。
「アタシは自分がなめられなきゃ後はどうだっていい。
　ハナっから湘南制覇って目的がないんだよ。恋奈と一緒にすんな」
　ここで梓はようやく理解した。
　愛と他の辻堂軍団の目的が圧倒的に違うことに。
「まぁ、アイツ等だけでどうにもならない事があったら手を貸すけど」
　辻堂軍団だけは愛とは違って湘南制覇を夢見ている。
　つまり愛は完全なお助けマン的な立ち位置なのだ。
　随分無敵なお助けマンである。
「自分はどうすれば？」
　梓も先日から辻堂軍団に入った。
　故に自分の行うべき方針を聞く。

「知るか。好きにしろ、ただアタシの邪魔しなけりゃそれでいい」
そういって冷たくしてくるが、梓はわかっていた。
愛は自分の知る人間の中でもトップクラスに不器用ながらも暖かい優しさを持っていることに。
多分自分が怪我をさせられたら愛は激怒してソイツを半殺しにするだろう。
辻堂軍団だって不必要に痛めつけようものならやはり愛の怒りを買う。
だから江乃死魔はいつも辻堂軍団の逃亡を見逃す。
「辻堂センパイって恋奈様とは違うタイプのカリスマ持ちっすよね」
恋奈は組織を統率するのに長けたカリスマを持つ。
しかしそのメンバー全員を御しきれる程ではなく、必ず参謀を持つ必要があるのだ。
おそらく大衆を導くリーダーとしては彼女ほど適任な存在はそういない。
対して愛は恋奈とは違うベクトルのカリスマ性を持っていた。
「そんなもんねえよ」
「それは本人が否定する事ではなくて、第三者が決めることっす」
彼女の圧倒的な強さと、困ったときに必ず守りきってくれると信じられる頼りがい。
彼女がいるだけでどんな事も上手くいきそうだと思ってしまうほどに辻堂愛の存在は大きい。

同時にその嘘をつかないし裏切りもしないであろう一本気な性格。
普通にしていれば化粧なんてしなくとも美しい容姿。
「ふふ」
「何だよきもちわりぃ」
梓は愛のことを意識すればするほど彼女のことを好きになっていった。
「尊敬する人なんて恋奈様と長谷センパイくらいだったんですけど。
辻堂センパイもめでたくその仲間に入りました」
他人なんて信用できない。だから尊敬する人物だっていないのだが、
その圧倒的なカリスマを持つ恋奈と梓からすれば後光が見えるほど輝いて見える大は別だった。
大に至ってはもう彼のためならなんだってするレベルで尊敬している。
というより敬愛している。
そしてその尊敬する人物の中に愛は入った。
なるほど、愛のその真っ直ぐすぎる性格は梓にはない。
だからこそそれに眩しいものを感じる。
「ワケわかんねぇよ」
愛は若干テレたのか梓に顔を向けずプイっと背中を向けた。

その可愛らしい仕草に梓はキュンとする。
この喧嘩狼は格好よくて頼りがいがある上に女性らしい包容力や少女のような可愛らしさを重ね添えている。
自分も見習うべきところがあると梓は思った。
「辻堂センパイ可愛いっす」
「うっせぇばか！」
梓は愛の手を煩わせることを少しでも減らそうと、ある程度辻堂軍団に手を貸してもいいと思った。

「ほら、ヒロ。あーん」
「自分で食べれるって」
そう言って俺はトーストをかじりつく。
愛さん達が手伝ってくれたこともあって大掃除はあらかた終わった。
おかげで姉ちゃんも機嫌が良く、今日は料理も振舞ってくれた。
「大、口あけろ。あーん」
「う、うん。あーん」

愛さんに言われた通り口を開く。
その口に入れられた姉特製グラタンは寒い体を存分に温めてくれた。
「ざけんなざけんなざけんな辻堂さんならアリなのかよファックファックファック」
「お、お姉さん。落ち着いてくださいっす」
姉ちゃんが何か怖い。
そんな姉ちゃんにびびった乾さんは少し怯えた顔で落ち着かせようとしていた。
だがそれでは何の効果もないらしく、ギリギリとコップを握り潰さんとし、咥えたまんまのスプーンをガジガジと姉ちゃんは齧り続けていた。
「センパイも露骨なえこ贔屓よくないっすよ」
そう言って俺を嗜める乾さん。
もっとも怒っているというよりは良くないことをした子供を諭す程度のアクセントだ。
「うっせぇな。大とアタシは付き合ってるんだ、だったらイチャついて当たり前だろうが」
「・・・・・・長谷センパイ関わるとどうして辻堂センパイはここまで空気読めない人になるんっすかね」
ヤレヤレと乾さんは頭を抱える。

この中で唯一の常識人であるために彼女へ負担が全てのしかかっている。
彼女はそれを再確認してため息をついた。
「で、長谷センパイ。あと5時間くらいでもう年も明けますけど、今日のご予定とかあります？」
「俺はこの後愛さんと初詣にいくよ」
姉ちゃんはどうやら友達と飲み会があるらしい。
まぁ毎年姉と二人で新年を迎えていたのだが、今年くらいは仕方ないか。
「じゃああずもご一緒させていただきます」
「え～・・・・・お前も来んの？」
「露骨に嫌な顔しないでくださいよ傷つくなぁ」
愛さんの分かりやすい拒否に乾さんは三白眼で抗議する。
だが愛さん自身も実の所乾さんを気に入っている節があるのか、
「まぁいいよ。それじゃあ三人でお参りいくか」
「やりぃっす！」
結局三人で行くことになった。
とはいえまだ行くにしては早い。
「いいわねぇ。私も行きたかったなぁ」

「来年一緒に行こうよ、だからそんな顔しないの」
寂しそうにする姉。
そのらしくない元気のない姿に俺は構ってあげざるを得ない。
俺が声をかければ現金なもので、すぐにパッと笑顔を見せる。
「お姉ちゃんがいないと寂しいのね。あ～、こんなシスコンの弟もってマジ辛いわ～。いやほんとマジで辛いわ～。明けましてもシスコンおめでとう」
「このやろう」
ブチ殺すぞ。
「ん～、しかしこのグラタン本当に美味しいっすね」
「だな。なぁ長谷先生、これのつくり方とか教えてもらっていい？」
「ヤダ。断じて教えない」
即答である。
あまりに素早い返答に愛さんも言葉を詰まらせた。
「ただでさえヒロ取られて腹立つのにヒロの胃袋まで奪われてたまるかこんチクショー！」
魂の叫びだった。
子宮から声を出すという表現があるが、それを遥かに超えるインパクトのある怒号

だった。
愛さんもその叫びに驚いて目を開いている。
「す、すいませんでした」
別に何も悪いことしていないのに取り敢えず謝る愛さん。
本人も何に謝っているのかは理解していないだろう。
「ところでさ、お姉ちゃんずっと疑問だったことがあるんだけど」
そう言って素の表情で俺を見る。
「この子誰？　ヒロとどういう関係？」
乾さんにスプーンを向ける。
やめなさい、失礼だし行儀も悪いでしょうが。
というかそう言えば俺たちの関係を姉ちゃんに説明した記憶がない。
はて、どうやって説明すればいいのか。
乾さんは俺がその質問をされて答えられないのを察する。
そして姉ちゃんに聞こえないようにコソコソと俺に耳打ちをした。
「センパイ、言いにくいのでしたらあずの方から言いましょうか？」
本当にこの子は俺に対してはやたらいい子だな。
凄く俺が困っていることを察して手を差し伸べてくれる。

「いや、いいよ。俺の口から言う」
「はい、それじゃお任せするっす」
そう言って俺は訝しげな表情をする姉に向き直った。

「よぉしよしよしよしよし！」
「ちょ、痛いっす！」
説明を終える頃には乾さんは姉ちゃんに抱きしめられながら撫でまくられていた。
「わかるわぁアナタの気持ち。ほんとやってられないわよねぇ！」
「いやあの自分は別に納得してるんで・・・・・・」
「だというのにこいつ等は毎日毎日イチャコライチャコラざけんなってのよ！　ボケ！」
どうやら俺に片思いしている乾さんを姉ちゃんは気に入ったらしい。
酒が入っているらしい姉に絡まれて乾さんは心底迷惑そうな顔をしている。

別に突き放しても構わないのだが、俺の姉という理由で冷たくできないのだろう。
つうか言葉がすぎるぞ今日の姉ちゃん。
「ヒロ！」
「はいはい、なんでしょうか」
突如の呼び出しに返事する。
「あなたも辻堂さんがいながら2号を作るってどういうつもり！
お姉ちゃんそんな不誠実なジゴロに育てた覚えありません！」
急にオカンみたいなことを言い出す姉。
こりゃだめだ。
何言っても怒られそう。
「いや、別に大と梓は付き合っているわけでは・・・・・・」
「辻堂さんは黙ってなさい！」
「はぁい」
愛さんも見かねて助け舟を出してくれたが、即座に切って捨てられた。
話を聞かなさすぎだろこの酔っ払い。
どう収拾つけるんだよこれ。
途方にくれる。

「小さい頃から逆光源氏計画を進めて、そろそろ収穫時期かと思ったらこのザマよ。
　ヒロの精通だって私が手伝ってあげたというのに」
「おいまて教職員」
　いま聞き捨てならないことを言った気がするぞ。
「ど、ドン引きっす」
「怖えぇ。大、お前の姉ってお前が思うより罪深いぞ」
　酔いどれの姉ちゃんには何を言っても無意味らしい。
　結局姉ちゃんは飲み会に出るまで乾さんにしがみついたままだったし、
　俺はひたすらに怒られ続けた。

　時間が来た。
　そろそろ初詣に行く時間だ。
　俺達三人はそれぞれ身支度をして家を出発する。
　向かう先は俺が毎年行っている神社。

あそこは毎年沢山の参拝客が訪れて有所ある神社らしい。
故に人がごった返しているが。
「寒いっす」
俺の車椅子を押しながら乾さんはそう呟いた。
確かに今日は寒い。
更に付け加えるなら時間はもうすぐ12時となる時刻。
そりゃあ寒いだろう。
「ほら、俺のマフラー使いなよ」
「え、でもそしたらセンパイが寒いんじゃないっすか？」
俺は自分の首に巻いていたマフラーを外す。
「いや、俺は膝に毛布とかかけてるからそれ程寒くないんだ。
ほら、使って」
「じゃ、じゃあお言葉に甘えます」
少し躊躇したように俺のマフラーを手に取る。
それを慣れた手つきで自分の首に巻いて乾さんはほっと一息就く。
「長谷センパイの体温が残っててあったかいっす」
乾さんは幸せそうに呟いた。

そういう言い方をされるとこちらまで照れる。
「そのマフラー、前に大がまいてた長谷先生が編んだのとは別のか」
「うん。これは俺が去年編んだやつだね。
姉ちゃんのと比べれば色合いは地味だし網目も荒いけど」
それでもちゃんとマフラーとしての役割は果たせるレベルだ。
無論商品のレベルとは比べれるわけもないほど出来が悪いけれど。
「なあ大」
「ん、どうしたの愛さん」
愛さんは乾さんが首に巻いている俺のマフラーを見て何か思いついたように呟いた。
「来年さ、互いにマフラー編んで交換しないか？」
・・・・・・おお。
「いいね！　是非しよう！」
「お、おぉう。積極的だ」
素晴らしい。実に素晴らしい提案だ。
カップルっぽい。
「じゃ、じゃあアタシはハート柄なんて編んだりして・・・・・・」
「辻堂センパイ、それ少し古臭いです。

それにハート柄なんて男性には使いづらいっすよ」
「ぐ、確かにそうか」
乾さんのファインプレイで何とか危険は回避された。
確かに男の俺がハート柄はちょっと普段から使うにはキツイ。
いや俺は別に愛さんがくれるのなら何でも使うけれども。
「でもアタシまだ編み方なんてしらねぇし、結構早い段階から取り掛からないとな」
「俺が教えようか？」
「いいよ。委員長なら知ってるだろうし、アイツに教わる」
ここに来て委員長に嫉妬させられるとは。
俺が器用貧乏なのに対して委員長やヴァンは見事に万能だからなぁ。
確かに教わるのなら俺なんかより委員長の方が適任のはずだ。
「大、勘違いさせたくないから言っとくけど別にお前に教わるのが嫌なんじゃないぞ。
ただ、渡す時までどんなのが出来たかを知られたくないだけで」
つまり交換するマフラーの出来の確認はその時まで楽しみにとっておきたいということだろう。
「うん。それじゃあ俺も頑張って愛さんに似合うのを編むから」
「ああ。楽しみにしとく」

互いに笑い合って約束する。
１年近く未来にようやく果たされる約束。
それでも俺達はきっとそれを果たすだろう。
「ねぇ長谷センパイ」
少し遠慮がちに乾さんは俺たちの会話に割って入った。
「その。自分は――――」
「あぁ。大丈夫、乾さんの分もちゃんと編むから」
「いえ、それはいいんです」
どうやら乾さんの言おうとしたことを俺は何か勘違いしているようだ。
「来年にあずの分を編んでもらう必要はありません」
意外だった。
てっきり乾さんならほしがると思っていたのだが。
「辻堂センパイの分合わせて二つも編むのは手間でしょうし。
長谷センパイにそこまで迷惑をかけたくないっす」
そんな事はないよ、と言おうと口を開く。
しかし、俺がそういう前に乾さんの方が先に続きの言葉を出した。
「ですから、このマフラーをあずに頂けませんか？」

そう言って首に巻いているマフラーに大切そうに握り顔を埋めた。
「そんな俺の使い古しなんかより新しく編んだ方が良いんじゃ？」
「いえ、あずはコレがいいんっす」
そこまで言われたら俺もノーとは言えない。
「うん。それじゃあソレあげるよ」
俺がそう言うと乾さんは嬉しそうに微笑んだ。
「でも、そんなダサイマフラーなんて乾さんの趣味にあわないんじゃ」
「見栄えとかそんなのはどうでもいいっす。
あずはコレが気に入ってるんですから」
そこまで言われると俺も何だか嬉しい。
決して出来は良くないマフラーだ。
それに所々ほつれてるし、色合いも乾さんには似合わない地味さ。
「ふぅん、よかったじゃねぇか」
「はい。今年最後の宝物ゲットっす」
愛さんは少し微妙そうな顔をしているが、乾さんに喧嘩を売ったりはしない。
乾さんは俺のマフラーをまいたまま機嫌良さそうに歩く。
互いに交わす言葉もなくなり少し沈黙が続く。

俺は気まぐれに空を見上げる。そこには星空が広がっていた。
とても綺麗で、煌びやかな天体だ。
それは一年の終わりを迎えるには最適の天気。
俺はこの一年を振り返った。
多分、この一年は俺の人生にとって大きなターニングポイントだったのだろう。
恐らく今後も愛さんや乾さんとは人生単位で関わり続ける。
もしかすれば二人と関わらない人生もあったのかもしれない。
もしかすれば愛さん以外の女性と付き合う事もあったのかもしれない。
だが現実はそうはならず、俺は愛さんと付き合っている。
悪くない。
いや、むしろ素晴らしい一年だった。
まだ気が早いかもしれないけれど、俺は今年起きたことを一生の思い出とするだろう。
それほどまでに激動の一年だった。
得たものは沢山あって、失ったものは何もない。
そりゃ最後には怪我を繰り返して二度も入院したが、二人と仲良くなったことを考えれば圧倒的にプラスだ。

それを踏まえて俺は意識した。
本当に、今年は良い年だった。
長いようで、それでいてあっという間だった一年はもうすぐ終わる。

１６話：新年を迎えて信念を新たに（後）

「凄い人ごみだなぁ」
「アタシこういうのは好きじゃないな。鬱陶しくて仕方がない」
「あずも流石にここまでのは嫌いっすね。暑苦しいっす」
俺たちが着いた頃には既に数多の参拝客が訪れていた。
その人数たるや凄まじく、神社敷地内の地面面積を殆ど人で埋め尽くされているレベル。
正直こんな中に入るのは躊躇われる。
「どうしましょうか。これ、並びます？」
正直、嫌だなぁ。
もう直ぐ除夜の鐘が鳴るからまだ誰もお賽銭や礼をしていない。
年が明けていないのだから当然だ。
つまり鐘がなってからこの列は進みだすというわけで。
「多分アタシ達の番が来るまで二時間はかかりそうだな」
「だね」

そんなに動かずに並んでいたら風邪をひくだろう。
かといってここまで来て何もせずに帰るってのも付いてきてくれた二人には申し訳ない。
さてどうしたものかと首をひねる。
「あれ、あずにゃんじゃない」
「ん？」
乾さんが誰かに呼ばれたらしく、声のした方を振り向いた。
俺も遅れて誰だろうと見たが知らない女の子だった。
多分乾さんの学校の友達なのだろう。
「あ、ども。皆も初詣でお参りっすか？」
どうやら少し長くなりそうだ。
乾さんは俺と愛さんをチラリと見て申し訳なさそうに手で先に行って欲しいという合図を送ってきた。
俺と愛さんはそれをみてその場を少しだけ離れた。
とはいえ正直俺たちももう並ぶ気すらないので乾さんの会話が終わったら場所を移そうかと思っている。
初詣自体は別に今日でなければならない理由もない。

「アイツ、学校では結構友達いるんだな」
「乾さんはコミュ力高いみたいだしね」
数人の男女の友達に囲まれて笑いながら会話している乾さん。
ただ、俺の勘違いかもしれないけれど乾さんの目は笑っていないきがする。
多分素の自分を出していないからだろう。余り楽しそうには見えない。
まぁ、本当に俺の考えすぎなだけかもしれないけれど。
「おいおい、何か男にも囲まれ始めてるぞ」
「乾さん美人だからね」
ちょっとギャルっぽいけれど容姿はかなり良い部類だ。
さらに軽い感じの今時の女の子さもあって同年代の男子からもモテているのだろう。
愛さんのいうとおりやたら周囲の男子が乾さんにくっついている気がする。
「あ、見ろ大。あの男とか今にも肩に手をかけそうだ」
愛さんが軽く指差した所にはコソコソと乾さんの横に近寄って馴れ馴れしくも肩に手を回そうとする男子の姿が。
その男子もなかなかのイケメンで普通にもててそうな感じだ。
そんな真似をするってことは乾さんに気があるんだろうけど。
不意打ちのように乾さんの首に手を回そうとした瞬間

「あ、弾かれたな」
「弾かれたね」
流石乾さん。普通に気づいていたらしい。
男子の手を痛くない程度に払い除け、偶然手がぶつかったみたいに驚いた振りをしている。
・・・・・本当にしたたかな子だなぁ。
っていうか俺達は何で乾さんの実況をしているのだろう。
「愛さん、寒くない？」
見れば愛さんの肩は結構震えていた。
当然だ、寒くないはずがない。
今年は早い段階に雪が降って気温も相応に低い。
更に時刻ももう12時になる頃だ。既に厚着をしていても寒さが辛くなってくるレベルだ。
「大丈夫だって。大は心配性だな」
いつも通りの爽やかな笑顔で俺に笑いかける愛さん。
だが無茶しているのはわかる。
何せ顔が少し赤らんでいるのだから。

「心配もするよ。愛さんは女の子なんだからさ」
そう言って俺は手提げに入れた水筒を取り出す。
「これは？」
「ホットコーヒーだよ。
二人が二階を掃除してくれてるあいだに淹れてみた」
もっとも一人では無理だったので姉ちゃんの手を結構借りたけれど。
取り敢えず魔法ビンの水筒に入れているからまだかなり熱いだろう。
「・・・・・・サンキュ」
愛さんも嬉しそうに俺の水筒を受け取ってくれた。
コポコポとコップにコーヒーが注がれる音がする。
同時にそのコップから真っ白湯気が立ち上り、コーヒーの香ばしい香りが漂った。
愛さんはその湯気で少し顔を温めた後、火傷しないようにゆっくりと口を付ける。
「美味しい」
「はは、寒い時に温かい飲み物を飲むと凄く美味しく感じるよね」
「それもあるけど、それを差し引いても大のコーヒーは大好きだ。凄く美味しい」
幸せそうにコーヒーを啜る。
見ているこっちも嬉しさが伝染しそうだ。

「大は余り寒くなさそうだな」
「うん。さっきも言ったけど厚着してる上に毛布とかかけてるからね」
おかげで全然寒くない。
「それじゃあこれいらなかったかな・・・・・・」
「ん？」
愛さんはつぶやくように自分でもっている手提げの中を見た。
ここらからでは視点の高さもあってまるで見えないのだけれど、何か持ってきているのだろうか。
少し、ブラフをかけてみる。
「いや、欲しいな。寒くなくても愛さんの持ってきた物は俺は欲しいよ」
何を持ってきているのかはわからないが、会話の前後の流れを考えて当たり障りのない事を言ってみる。
「そ、そうか？」
そういって愛さんは手提げから別の水筒を取り出した。
おや。彼女も持ってきてたのなら俺の水筒はいらなかったかなと一瞬思った。
「じゃあ交換するか」
「うん」

だが愛さんは互いに持ってきた水筒を交換する事をひらめいたらしい。
持ってきた水筒のフタに中身の液体を注いで俺の膝に置いた。
「飲ませようか？」
「いや、自分で飲めるから大丈夫」
そう言ってギプスでコップを挟んで中身を見る。
その中の液体は緑と茶色の間の色だった。
香りは嗅ぎなれたものだ。
緑茶だろう。
「あったかい」
飲めば口の中から胃の中まで緑茶が通った箇所全てが温まる感触が広がる。
相変わらず愛さんらしいかなり渋い味だけれども、その渋さも寒さを吹き飛ばすには丁度いい味の濃さだ。
「美味しいよ、愛さん」
「ん、よかった」
そっけない反応だけれど内心喜んでくれているのだろう。
ごまかすように俺のコーヒーを飲んでいる。
俺も愛さんも一服して大分寒さもマシになってきた。

「・・・・・アイツ、随分長引いてるな」
「まぁ沢山いるし話し込むのもしかたないよ」
見れば男女込みで8人程いる。
男子が五人で女子が三人だ。
そこに乾さんが加わって計九人。
「あの中にいる女って一緒にいる男と付き合ってるのかな?」
「どうだろうね。でもあの二人は付き合ってるのは確実っぽい」
ひと組だけ乾さんと話しながらも男女で手をつないでいるのがいる。
普通に考えればそれは付き合っているのだろう。
残りの男子はどうなのか知らないが、全員お洒落をしていて髪も染めている。
いかにも今時の高校生って感じだ。
乾さんも髪を染めてピアスとかしているし同じようなタイプのコミュニティなのだろう。
ただ。やはり乾さんはあまり笑顔には見えない。
彼女は想像通り人気者らしく、特に男子が乾さんに話しかけている。
それを若干嫌そうな顔で応対しているみたいだ。
「必死に誘ってくる男たちをやんわり断ってるって所か」

だろうね。
男子たちが食い下がっているのだろう。
乾さんも困ったような顔をしている。
時折俺たちが待っているのを気にして申し訳なさそうにコチラをチラチラと見ているし。
この場合乾さんの視界から消えて、後で電話とかして合流したほうが乾さんにとって心労が減るかもしれない。
なまじ見えている所にいるから余計に焦らせているのかもしれないし。
愛さんにこの場を離れようと言おうとする。
「おい、何かアイツ等アタシ達見てるぞ」
「え？」
不意に愛さんがイラついた声で言う。
何だろうと愛さんの言った乾さん達のいる集団を見てみる。
「確かに。何かこっちみてるね」
しかも笑っている。
明らかにそれは人をバカにしたものだ。
「・・・・・・何を話してやがんだ。苛つく」

視線をたどれば多分全員愛さんを見ていない。
俺だけを見て笑っているのだろう。
はて、何か俺は笑われる所があっただろうか。
あるな。
こんな車椅子乗ってれば軽そうな彼らからすれば笑える存在にもなるのだろう。
はっきりといえば不愉快だ。
抗議してもいいレベルだろう。
だが、現状ではそれは良くない。
彼らは乾さんの友達だ。
ここで俺が彼らに文句を言っては彼女の交友関係にヒビが入る恐れもある。
乾さんには俺とは他人のフリをしてもらえばそれで問題は解決するのだが、まさかそんな事を伝える手段もない。
「行こう、愛さん」
結果、俺が出した答えは相手の侮辱を耐えて視界から消えることだった。
余りにも負け犬の立ち回りで自分も内心憤りがある。
だが、やはり乾さんには迷惑をかけたくない。
「嫌だ。アイツ等殴ってくる」

「ちょ、愛さん!?」
愛さんは俺とは別の答えを出したようで、真っ直ぐに集団へと向かおうとする。
俺は慌てて両手に付いたギプスで愛さんの片手を挟み込んで引っ張った。
「こんなところで喧嘩なんてしちゃまずいよ。
それに乾さんの交友関係にも響くだろうし」
俺の意思を伝える。
愛さんならこれで引いてくれると思うのだが。
「知ったことじゃない。
アイツ等今大の事をバカにしてたんだ、絶対に許さねぇ」
愛さんは彼らの会話が聞こえたのか、ものすごい怒気を含んだ声で言う。
やはり俺は彼らに馬鹿にされていたのだろう。
それにやはり腹が立つものを感じる。
けれど場所が場所だ、ここで喧嘩だけはだめだ。
間違いなく人目について騒ぎになる。
「俺のことはいいから、頼むからここでは喧嘩しないで」
「・・・・・大の言うことは聞いてやりたい。
でもコレはだめだ。大を侮辱された事は見過ごせない」

まずい。
時々ある俺の意見も全く聞く耳持たない状態だ。
焦りながら必死に愛さんの腕を引っ張る。
焦った頭でどうするか考えているとき、不意に集団の方から凄まじい打撃音が響いた。
その音に引かれて、俺たちを含めた周囲の人間の視線がそこに集まる。
「テメェ、あずの彼氏を侮辱してただで済むと思ってんのかよ?」
見ればそこには俺たちを見ていた男たちを全員殴り倒している乾さんの姿があった。
男たちは何が起こったのかも分からず、ただ唖然として豹変した乾さんを見上げる。
「いちいちウザったいんっすよね。あずがあの人に惚れているっつってんだから大人しく引き下がれよ。
何度も何度も同じ説明させた挙句、終いにはセンパイを侮辱しやがって。
あぁもう、腹が立つ。このまま新年迎える前にアンタら全員半殺しにして病院送りにやろうか」
完全に切れている。
手を鳴らしながら倒れた男の鳩尾を踏みつけて痛めつけ始めた。
そして響く絶叫。

普段の乾さんからは想像もつかない余りの暴力的な姿だ。
「ほらほら、さっきみたいにあずにナンパかましてみてくださいよ。じゃないともっと力いれますよ」
「あ、が！」
「ありゃ。これだけで気絶したんっすか？どんだけ根性ないんだよコイツ」
やりすぎだ。
さっきまで談笑していた筈の仲間にする行動じゃない。
「あ～あ。コイツはもういいや、じゃあ次アンタ」
「ひ、ひぃ！」
気絶した男子を踏み捨てて、次の男子を狙う。
まずい、周りもざわつき始めた。
多分まもなく警備員や警官が来るだろう。
乾さんが次のターゲットに足をかける瞬間
「やりすぎだ。もういいだろ、こっちこい」
「・・・・・・止めないでくださいよ辻堂センパイ」
何時の間にか俺の手を抜けた愛さんが乾さんを取り押さえていた。

乾さんは未だ気が晴れないのだろう、忌々しげに殴り倒した男たちを睨む。
「こいつ等、長谷センパイをバカにしたんっすよ?
辻堂センパイだって許せないでしょう。
そうだ、一緒にコイツらシメません?」
嬉々として言いながら、倒れている男の胸ぐらを掴んで無理やり起こす乾さん。
「やめろ。お前の他のツレが怯えているぞ」
愛さんに言われて思い出したように他の友人に目を向ける。
今立っているのは俺を悪く言わなかった人たちなのだろう。
乾さんは立っている女子三人と男子一人を見て少しバツの悪そうな顔をする。
「大がお前の交友関係を傷つけないために見て見ぬ振りしようとしてたのに、台無しにしやがって」
そういう愛さんも台無しにしようとしていたのだが、今回は口を挟まない。
「長谷センパイを侮辱するようなバカなんて友達ですらないっす」
そう言いながら掴んでいた男を離して地面に落とす。
男は息が出来なかっちゃのだろうか、ゲェゲェ言いながら地面でのたうち回った。
「・・・・・・ったく、行くぞ」
愛さんは未だ納得していない乾さんの手を取ってこちらに歩いてくる。

その際、乾さんは殴り倒した男子たちに振り向いた。
「アンタら、また同じ目に会いたくなければ二度とあずに話しかけないでくださいね」
その刺々しい視線と言葉に男子たちは怯えて返す言葉も無かった。

「センパイ、嫌な思いさせてすいませんでした」
警備員が来る前に俺達は走って神社を後にした。
そして一息つける海岸沿いに来ると乾さんは真っ先にそう言った。
俺の前に来て丁寧に頭を下げる。
明らかに落ち込んでいるのだろう、その顔はいつものような飄々とした感じではない。
「いや、俺のことはいいんだ。
それより問題は乾さんのことだよ」
あんな事をしたら新学期が始まる頃には噂になっているだろう。
「それは大丈夫です。あずは人気者ですからあんな奴らがどうこう言ったってさして問題ないっす」

自信満々に応える乾さん。
確かに彼女の普段の人柄ならば学園でも友人は多いだろう。
「でも、俺のせいで君の友達が減るのは良くない。
誰のせいだったら良いとか、そういう事を言うつもりじゃないけど
それでも友人はもっと大切にすべきだよ」
「・・・・・・・」
俺の言葉に乾さんは表情を消した。
その感情の読めない表情に俺は言葉につまる。
もしかして俺は何か余計なことを言ったのかもしれない。
「・・・・・・おい、どうした」
愛さんも少し気になったのだろう、俺と乾さんを遮る形で立つ。
それを見た乾さんはやはり感情を見せない表情で俺を見た。
「センパイ」
「な、何かな」
声すら抑揚がない。
まるで機械が出したのかと思うほど起伏のない声質だ。
「いい加減にしてくださいよ。もう我慢の限界っす」

途端に苛立ったように大股で俺に歩み寄る乾さん。
もしかすれば殴られるかもしれないと愛さんは考えたのだろう
通り過ぎようとする乾さんの腕を掴む。
「おいコラ、何する気だ」
「放せよ、うざったいっすね」
「・・・・・・なに？」
その言葉に腹が立ったのか、片眉を上げる。
だが乾さんは殺気を出し始めた愛さんから視線をはずして俺を睨んだ。
愛さんすら眼中になくなるほど頭にきたというのか。
「前から言いたかったことがあります。
センパイ、あずの事を気にして自分のプライド傷つけるのやめてください」
真っ直ぐに俺の目をみて言った。
「あずがセンパイの事を気にして何か嫌な目に合うのなら構いません。
でも逆は絶対に許せない」
逆、とは俺が彼女のために俺自身が良くない目に合うことだろう。
だがそれはどうしてなのか。
「センパイはあずにとって大切な人です。尊敬だってしています。

だからこそ、そんなセンパイがそこらのカスに侮辱されるのは嫌なんです」
驚いた。
俺が思っている以上に彼女は俺の事を好いていてくれていて
「センパイを馬鹿にする奴はあずが黙らせます。
センパイに危害を加える奴はあずが潰します。
だからこそセンパイの他人のために自分を蔑ろにする所が嫌いです」
俺が思っている以上に歪んでいた。
未だ乾さんの手を掴んで警戒している愛さんすら僅かに驚いた顔をしている。
「だったら嫌いなままでいい。ずっと君とわかり合えないままでいい」
俺は乾さんに思いをぶつけられたのだろう。
ならば誠実に俺自身の偽りのない答えを返す必要がある。
「俺は知っての通り他人の顔色ばかりを伺う小心者だよ。
俺のせいで誰かが傷つくのは嫌だし、そもそも俺自身がやっぱり痛い目見るのなんてゴメンだ」
誰だってそうだろう。
他人の評価を気にしない人間、誰かが自分のせいで痛い目にあっていたとしても何とも思わない人間、

自分が嫌な思いをしても構わないと思う人間。
これに当てはまる人間なんてごく少数だ。
当てはまる人がいるのだとしたら、その人は確実に歪んでいる。
「乾さんは俺にとってもう大切な存在だ。
だからこそ俺は君のことを考えて行動する。
俺のせいで君が嫌な目をに合うくらいなら俺自身が泥をかぶったっていい」
当てはまらない人間が沢山いても、否応なくそうせざるを得ない状況が人生にはあるだろう。
自分のせいで誰かが嫌な思いをした時、自分は悪くないと切り捨てた人間の評価を諦める。
他人の評価を気にするあまり、嫌なことをするハメになるなんてよくある話だ。
「俺のその性格を許せないのなら、それは俺と君が決定的に合わないという事だ」
無論相性が合わないからといって俺が乾さんを嫌いになることはもうない。
でも、友好関係は片道通行ではない。
乾さんが俺を嫌うのならいくら俺が好いたところで意味がない。
「乾さん、俺はこれからも愛さんや君のためなら嫌な思いしたっていいと考えている。
俺、前に君に言ったよね。仲間って何か」

俺にとっての仲間は――――

「体を張れる人・・・・・・ですか」

「そう。それが仲間だ」

俺が乾さんを仲間だと思う以上、俺は一方通行の関係だろうと彼女のために嫌な思いをする事も辞さない。

俺のその言葉に乾さんは目を伏せた。

明らかに納得できていないのだろう。

そりゃそうだ。俺は彼女の言い分を真っ向から拒否したのだ。

納得できるわけがない。

「そんなこと言わないでください」

何かに怯えたように、僅かに必死さが伺える表情で乾さんは呟いた。

「合わないなんて、そんな事言わないでください」

慌てたように乾さんは力の緩んでいる愛さんの手を振りほどいて俺に走り寄った。

そして泣きそうな顔をして俺に真正面からしがみつく。

「あずは、あずはセンパイの事好きっす。

でも、あずのせいでセンパイが嫌な目にあうのが嫌だからっ」

「うん。わかってる」

子供のように癇癪を起こしたのだろう。
でもそれは俺の事を思って怒ってくれたのだ。
俺はそのことを感謝して、目の前にある乾さんの頭をギプス越しではあるが優しく撫でた。
「あずの我侭でセンパイが怒ったのなら謝りますから
だから許してください」
「怒ってないって」
余程怖かったのだろう。
俺にしがみつくその手が僅かだが震えている。
「乾さん。ありがとう、それだけ俺を想ってくれていて。嬉しいよ」
「せ、センパぁイ・・・・・・」
俺達はしばらくの間、熱い抱擁を交わした。
「・・・・・え、あれ？　真面目な話してるから黙ってたのにいつの間にイチャイチャしだしてんだこいつ等!?」
寒空下、愛さんの怒鳴り声が耳に残った。

ゴーンという青銅が木材によって叩かれる音が海辺に響く。
「・・・・・・一年が終わったね」
「違う、一年が始まったんだよ」
「おお、あずは辻堂センパイのほうを押すっす」
湘南に響く除夜の鐘。
今、この音をこの街中の人が同時に耳にした。
その一体感のようなものを意識する。
「こんな事ならウチで年越しソバ食べてれば良かったかな」
結局神社では並べなかったというか、並ぶ気すらしなかった。
目的は達成されず、それどころか今俺たちがいるのは寒風吹きすさぶ海岸沿い。
お正月に何をしているのやらとため息が出る。
「そうでもねえよ」
愛さんは朗らかに言う。
「今日のおかげで来年に果たす約束ができた。
それだけで外に出た意味がある」
「あずもマフラーもらいましたし、センパイに抱きしめられましたし良い事づくめっす」
「・・・・・・お前は少し自重しろ」

どれだけ年月が過ぎようが、季節が移ろうが海の奏でる波の音は変わらない。
夏だろうが秋だろうが同じさざ波の音が俺たちの耳に響く。
もしかすれば来年もまたこんなかんじで正月を迎えるのだろうか。
「大、アタシ達が初めて手をつないだ日っていつか知っているか？」
少しセンチメンタルな気持ちになっていると、愛さんが懐かしむように言った。
初めて手をつないだ日。
それはいつだろう？
愛さんと不良から一緒に逃げた日？
初めてデートをした日？
そんな真新しいものじゃない。
俺達はそれより少し前にも手をつないでいる。
「一年の頃の学園祭、キャンプファイヤーの時でしょ？」
あの時、まだ俺達は互いに意識なんてしていなかった。
俺にとって彼女はまだ怖い稲村学園の番長。
彼女にとっても俺なんてそこいらにいる十人並みの男程度の存在だっただろう。
「覚えてたんだな」
愛さんは嬉しそうに笑った。

「うん。あの時は楽しかったよ、途中ちょっとずれたりしてたけど最後は気持ちよく決まったし」
「ああ、大のリードのおかげだよ」
「そんなことない、愛さんが俺に合わせてくれたらあれ程綺麗に決めれたんだ」
俺達はあの時のことを思い出して互いに賞賛し合う。
そうだ、まだそんなに昔のことじゃない。
だというのにあれ程楽しかったダンスの事だってもう細かくは思い出せない。
色鮮やかな筈の思い出は時間を経てばセピア色となる。
でも色褪せた思い出でも鮮烈に感じた箇所はまだ覚えている。
これは一生覚えていられる。
「お二人は付き合う前の年から思い出があるんっすね」
「まぁな。でも、アタシ達が惹かれあったのは去年からだけど」
あのキャンプファイヤーでは俺たちが互いに分かり合うことはなかった。
しかし付き合った今だからこそそれまでは意味のなかった思い出も輝き始めた。
振り返ればあの頃は楽しかったと思う事もあるだろう。
思い出なんてそんなものだ。
生きていれば今も未来も手に入る。

けれど過去はどんな事をしたって変えれない。
だからこそ誰も手を加えることのできない過去の方が輝いて見える。
輝いているのに色は褪せて思い出せない事もある。
「大。お前と一緒にいた今までの事をアタシは全部覚えてる。
どれもが綺麗な思い出ばかりだ」
愛さんは真っ直ぐに俺を見た。
「中には辛い思い出もある。別れた日なんて思い出すだけでまた心が痛くなる」
自分で思い出しているのだろう。
胸に手を当てて、感情から言葉を出しているかのように俺の耳に愛さんの言葉が届く。
「でも、それでも全部アタシにとって大切で何よりも綺麗な思い出なんだ。
大といるこの一瞬すらアタシにとっては掛け替えのない宝物だ」
俺はその真っ直ぐな好意に応えられたのだろうか。
そんなわけがない。
俺は愛さんをしょっちゅうヤキモチさせている自覚がある。
絶対に応えられているはずがない。
「大、嫉妬深いアタシはきっとこれからもお前に嫌な思いをさせると思う。

それでも、アタシは大の事を愛してる、愛し続ける」

「・・・・・・うん」

愛さんは俺のギプスに包まれた手を取る。

「アタシ達の関係はまず一年目が過ぎた。そしてこれから二年目だ。

その繰り返しを死ぬまで続けていたい。

それを叶えてくれ、大」

きっと彼女といる未来は暖かいだろう。

俺は十人並みな人生を送るだろう。

それでもそれは幸せなことではないのだろうか。

暖かい家庭を築き上げ、俺を愛してくれる妻がいる。

未来には可愛らしい息子か娘を手に入れるだろう。

それはなんという眩しいことか。

そんな十人並みな人生でも、十人並みじゃない彼女が隣にいればそれは何て刺激的なことか。

「喜んで」

愛さんの目を真っ直ぐ見て返答する。

俺の人生は彼女と共にあって欲しい。

だからこそ愛さんのそのお願いは願っても見ないものだ。

「悪いな、梓」

「何がっすか？」

俺たちの将来の意思を明らかにさせた後、愛さんは申し訳なさそうに乾さんに頭を下げた。

「曖昧なのは好きじゃねぇからハッキリ言っとく。

アタシと大はいずれ近い将来に結婚する」

何も後腐れがないように、一切の言葉濁しをせずそう言った。

俺は若干冷や汗をかきながら乾さんを見た。

だが、とうの乾さんは全く動じていなかった。

それどころか何を今更といったような顔だ。

「そんな事っすか。どうぞどうぞ、今更辻堂センパイから長谷センパイを取れるとは思ってません」

「へ？」

愛さんは訳が分からないように戸惑う。

「自分は愛人でいいっす。妻なんて欲張ったことは言いませんよ」
「あ、愛人!?」
今度は俺が驚く。
どういうことだよ愛人って。
「そしてあずも先輩との間に子供を作って・・・・・・あぁ、未来はバラ色っす」
「待てこら。一生ついてくる気かお前?」
「モチっす」
まじっすか。
思春期の暴走ってレベルじゃねえぞ。
「なんすかっ、自分だけ幸せになろうって思ってたんすか!?
そんな甘えた事は許しませんよ!」
「うわあああああっ、助けて大! 変なのに人生単位でストーカーされることが決まってる!」
どうすんのこの子。
俺愛人なんて作る気ないんですけど。
でも本人は目をキラキラさせて未来を見てるし、それを粉砕するのも気が引ける。
どうするのよマジで。

「センパイ、養育費とかそういうのは気にしないでください。
センパイに迷惑かけないように子供も育てますから」
いや、この子怖い。
悪意がないのに恐ろしい未来を描いているから余計に怖い。

俺の人生って将来どうなっているのだろうか。
愛さんと結婚しているのはきっと確実だ。
でもまだ、それ以外の未来像はない。
どんな仕事についているのか、どんな人間関係を築いているのか。
もしかすれば俺は将来湘南にすらいないかもしれない。
そんなあやふやな未来なのに何故か、そこに乾さんの姿はあった。
きっと俺達三人は大人になっても馬鹿な事を言っているのだろう。
三人で旅行に行ったり食卓を囲んだりするだろう。
だって俺はもう乾さんのことも好きなのだから。
もしかすれば乾さんのいない、俺と愛さん二人だけの未来もあったのかもしれない。
けれど、きっとこの冬休みはきっとターニングポイントだったのだ。
そこから俺の未来に乾さんの姿も加わった。

「おっと、あずとした事が少々先走りましたね」
乾さんは少し照れたようにコホンと咳をする。
「この鐘の音を聞いたのなら言わないといけないことがありますよね」
「ああ、確かにそうだな」
そうだ、確かにまだ俺達はその言わないといけない事を口にしていなかった。
結婚後の将来なんてまだ俺達には早い。
それよりも考えることは目下、始まったばかりの今年のことだ。
「明けましておめでとうございます。センパイ方、今年もよろしくっす」
「同じく、明けましておめでとう。また今年もよろしく頼む」
二人は笑い合いながら言った。
俺だけ乗り遅れた。
・・・・・・将来の事なんて分からない。
結局俺は愛さんと乾さんの三角関係すらどうするのか収拾つける方法も思いつかない。
だけど、少なくとも今が嫌じゃないのならもしかすれば未来もそうなのかもしれない。
三人で今みたいに笑い合って、何度も同じような正月を迎えられるのならそれはきっ

と素敵なことなのだろう。
「明けましておめでとう。こんな俺だけど今年もよろしくお願いします」
俺は鐘の音を聞きながら、二人が今年幸せに過ごせますようにと願った。
そして、そうあるために俺自身努力する事を誓った。
「それじゃあ、帰ってお雑煮でも作ろうか」
「ああ、大が指示してくれ。アタシが大の手になるよ」
「じゃああずはセンパイの足になります」
そういって乾さんは俺の車椅子を握って長谷家へ進路を向けた。
・・・・・・他愛のない日常かもしれないけれど。
俺は今、間違いなく幸せだった。

17話：バカップルな奴ら

人間というのものは現金なものである。
初夢に富士山が出たからと喜ぶ、それは縁起がいいからだ。
だが、そもそも夢などというものは基本的に目が覚めれば忘れるものである。
だというのに新年が始まって友人同士が集まれば『自分は初夢で何々を見た』などと会話を弾ませる。
何故覚えているのか。
実に胡散臭い。
無論強烈な内容の夢ならば覚えていてもおかしくはない。
しかしまさか夢で富士山がでたからイコール強烈な夢というのも都合が良すぎる。
さて、閑話休題。
現在、旅行に行ったっきり帰ってこない両親のせいで一人自宅のベッドで寝ている辻堂愛。
今回はそんな彼女の優雅なる朝の目覚めから夜の就寝まで。
おはようからお休みまでを追っていきたい。

『愛さん、こんな男を誘うような格好をしていけない子だ』
『え？　うわっ、なんだこの格好!?』
ヨーロッパ貴族みたいな話し方をする大に言われて自分の姿を見れば
何故かアタシは以上にきわどいサンタ服を着ていた。
『既に俺には君という過ぎた贈り物があるというのに、まだ愛さんは俺に何かくれるというのかい？』
『ちょ、大！　どうしたんだ急にっ？』
恐ろしく積極的な大はアタシを流れるように抱きすくめ、
ダンスのターンをするようにアタシを傾けて見つめ合う姿勢をとった。
『いや、違うか。プレゼントは愛さん自身だったね。
こんな男を惑わすいけないサンタはとても子供には見せられない』
そのままゆっくりと唇を近づけてくる大。
やばい、やはり大は格好いいなぁ。
きっとこのままあのベッドにアタシは押し倒されるのだろう。
それを拒否するつもりもない。

むしろアタシは――――

「ん、んん～・・・・・・」

目が覚める。

何か夢を見たきがする。

それも凄く嬉しい内容だったような。

意識が浮上していく感覚と同時にそれは忘れたけれど。

「・・・・・・さみぃ」

誰もいない自分の部屋の中でぼそりと呟く。

寒い。

エアコンをタイマーでセットしておくべきだったかと考える。

窓を見れば外気と室温の差でびしょびしょに濡れており全く外が見えない。

暖かい布団で二度寝しようか。

などと一瞬考えたが、その甘い誘惑をはねのけて勢いよく布団から出る。

そのまま無理やり上げたテンションのまま日課となった自分の机に立てかけた写真を手にとった。

「おはよ、大」
当然返事はない。
この春休み中に冴子から貰った大の姿が大きく写った写真に向かって言ったのだ。
そりゃ返事なんてあるわけがない。
見ればその写真に映る大は穏やかに笑っている。
大の性格がよく現れている良い写真だと思う。
どうやら冴子にとってお気に入りの一枚らしい、渡される時に長々と自慢された。
・・・・・この写真には色々とお世話になっている。
夜に性欲を持て余したときとかに。
なんてどうでもいいことは置いておいて、顔を洗いに行こう。
親もいないから一日の家事は当然自分がしなくてはならない。
洗濯、掃除、そして自分の分の食事を用意するまで全部自分がすることだ。
それが別に嫌いではなく、むしろ花嫁修業気分で楽しい。
「さて、それじゃあ始めっか！」
自分に活を入れるように両頬を手で叩く。
当然痛い、しかしそのおかげで気だるい倦怠感も無くなった。
今日も一日頑張りますか。

「それで、ここの公式がこうなって・・・・・・ほら解けました」
「あ、ほんとだ」
掃除も洗濯があらかた片付いて、昼まで時間を持て余したとき、自宅に委員長が訪れた。
もっとも、あらかじめ昨日約束していたことなので来るまでに片付くようにしていたのだが。
ともあれ、委員長とアタシは昼過ぎ頃まで一緒に春休みの宿題をすることになった。
まぁ委員長の方は春休みの最初に終わらせていたので自分が委員長から教えてもらう形にはなっているが。
「相変わらず教えるの上手いな、お前」
「辻堂さんの飲み込みがはやいだけですよ」
そう謙遜する委員長。
お世辞ではなく事実を言ったのだが。
本当にわかりやすく教えてくれるので先ほどから凄い速度で課題が終わって行って

いる。
「ふふ、ここに長谷君もいたらよかったですね」
「そうだな。でも仕方ねえよ」
入院しているんじゃどうしようもない。
それに大は両手がイっているからペンすら持てない。
だから急いで今日中に宿題を終わらせてこれを大の所に持っていきたい。
そしてこれを見せて大の宿題も終わらせて安心して新学期を迎える算段だ。
きっと大も真面目に宿題をやったアタシを褒めてくれるはず。
それを想像するだけで頬が緩みそうになる。
「あらあら、今長谷君の事想像してますね？」
「し、してねえよ！」
「してました。だって辻堂さん長谷君の事考えてると顔でわかるんですもの」
そんなにわかりやすい顔をしていただろうか。
少し気を付けないといけない。
「大の奴もまだ宿題終わらせてなさそうだし、これ終わらせて見せたいと思ってたんだよ」
「・・・・・・え？」

委員長の頭にクエスチョンマークが出たのが見えた。
何か変な事をいっただろうか。
「長谷君なら春休み3日目で宿題終わらせたそうですよ。前にお見舞い行った時にそう言ってましたけど」
「え、えぇ～～～～・・・・・・」
一気にやる気が失せた。
流石大だ。真面目にやってたんだな、自慢の彼氏だよ。
畜生。

「一気にやる気失せたぁ～。休憩しようぜ～」
「さっき休憩したじゃないですか。ほら、あと少しで数学は終わりなんですから頑張ってください」
穏やかな笑顔でアタシを宥めようとする委員長。
正直、委員長は大に雰囲気がよく似ていてアタシにとってとても波長の合う相手だったりする。
そのせいか彼女に褒められれば悪い気はしないし、言うことにはできる限り頷いてやりたい。

「わかったよ、でもマジでやる気しねぇ・・・・・・」
「文句言いながらもペンを動かす辻堂さん、素敵です」
そんなこんなしながらアタシの宿題は殆ど終わった。
委員長、将来は人に何かを教える職業につけば良いのではないだろうか。

「エマージェンシー！　エマージェンシー！　本官只今大ピンチ！」
「暴れても無駄っすよ。自分こういう弱って動けない相手を嬲るシチュエーション好きなんですよ」
「いやぁあああ！　サドだ陰湿なドSだ！　本官苦手なのこういう人！
あ、駄目！　それ脱がしちゃこぼれちゃうから！」
何だろうか、約束通りの昼１４時にお見舞いに来たらよくわからない事になっていた。
まだ部屋の中を見てはいないのだが、廊下にまで中にいる二人の声が響いていて周りの患者達が興味津々にしている。

聞いていれば梓が大に襲いかかっているのは間違いないだろう。
逆ならば即座に逮捕ものなのだが、この国は変態行為の場合男よりも女に甘い世の中だ。
変質者の男ならば打ち首ものだが、痴女の場合遠目で眺めるだけで誰も警察を呼ばない。
「あ、愛さん！　やめッ、俺の操が！　貞操が汚されちゃうの！」
「ふへへ、そう言ってここは正直じゃないっすか」
正直この中に入りたくない。
辺りの患者は誰もが中の状態を知りたくて今にも覗こうとしている。
そんな中に入ったらアタシまで変態扱いされかねない。
とはいえこのまま放置してたら何か洒落にならない事になりそうだ。
仕方ない。
大きくため息をつく。
「おーい、入るぞ」
ノックを二回して相手の許可なしに入室した。
扉を開いた際に野次馬が覗こうとしたためメンチをきって中を見られないようにする。

そのまま入室し、扉を閉めればそこはサバトだった。
「何やってんだお前ら」
下着一丁の大がベッドに大の字で固定され、その股間部にのしかかっているやはり下着姿の乾梓。
どうみても情事真っ最中である。
「あれぇ、辻堂センパイじゃないっすか。ご一緒どうですかぁ?」
「うお、酒くさ」
アタシに気付いた梓は何やら赤ばんだ顔で話しかけてきた。
顔はトロンとしていて艶っぽい、しかも下着姿なため肌色の面積が非常に広いのだが、火照っているのか白いはずの肌が赤い。
どうみても酔っている。
「愛さん助けて！　パンツが！　パンツが脱がされそうなの！」
「ふふふ、何か中身のがつっかえて降ろしづらいっすねぇ」
「何でコイツは人の彼氏にセクハラしつつ逆レイプしてやがんだ」
普段の梓からは想像しづらい強行した凶行に手も足も出ていない大。
いやまあ縛り付けられてるから当然なんだけど。
「そのテーブルにある川神水を乾さんが飲んだらこんな事になったんだよ。

持ってきた我那覇さんはすぐ帰っちゃって止める人いないんだ助けて！」
「あふぅ、いい気持ちっすぅ」
大分酔っ払っているらしい、さっきからフラフラと頭を左右に振っている。
ちょっとしたきっかけで寝落ちしそうな感じだ。
「センパぁイ、あずの処女あげますからセンパイの操をくださいよぉ」
「ンガッ!?」
ガシっと大の下着に手をかける梓。
多分このまま一気に引きずり下ろす算段なのだろう。
さて、アタシはどうしたものか。
正直見てて面白い。
「パンツ放して！」
「パンツ放さない！」
意地でも手放す気がないらしい。
「センパイがあずの心を掴んで放さないようにあずもこの手を離すことはできないのです」
「パンツ掴む手と心を掴む手を同じ列に並べるのかよ」
「ええいつべこべうっさいっす！　せぁりゃぁ！」

大きな掛け声を出して梓は思い切り下着をずり下ろした。
やっちまったな。
もはや逃げられんぞ。
「きゃあああああああああああ！」
長谷大。顔を真っ赤にして乙女のような絶叫をする。
「お、おぉう。自分初見ですけどこれって平均より大きいっすよね辻堂センパイ」
「アタシは大のしか見たことねぇから知らねえよ・・・・・・凄く立派だと思うけど」
「見ないで！　剥き出した獣な俺を見ないで！」
「あぁ、素敵っすセンパイ・・・・・・」
それはビッグサーベルかと思うくらい既にそそり立っていた。
一瞬浮気かと思うものの、半裸の女にマウント取られて弄り倒されたのなら仕方ないだろう。
少ししこりがあるものの、それを許す程度の寛容さくらいはあるつもりだ。
とはいえ、流石にやりすぎだ。
騒ぎは既に外に伝わってるし、梓が本格的に致し始めたのなら見過ごすつもりもない。
・・・・・・アタシを含めて三人でやるのなら許してやってもいいけれど。

まぁそろそろ騒ぎを聞きつけた看護婦が来ても面倒だ。
「もう満足だろ、そろそろやめとけ」
「やめません、むしろヒートアップしてきたっす」
「ちょっ、掴まないで！」
梓がおもむろに大のアレを握り締めた。
それを見た瞬間、何かプツっと切れた音が頭の中に響いた。
「それはアタシだけのものだ！　触んじゃねえ！」
「ふぎゃん!?」
殴り倒して気がつく。
どうやら一瞬できれて梓にげんこつをかましたらしい。
酔って意識が虚ろだった梓は特に抵抗もなくあっさりと気絶する。
それ程力をいれたわけでもない。
多分アタシが手を出さずとも直に勝手に寝落ちしただろう。
「た、助かった。ありがとう愛さん」
「あ、あぁ。それよりもソレ、早くしまって欲しいかも」
「そうおっしゃられても、だって俺両手両足縛られてるもん」
そういえばそうだった。

大の字に縛られているせいで身動きが取れない大。
そのためむき出しにされた大の大きなアレが丸見えになっている。
「あ、アタシがしまうよ」
「まじっすか！」
「何で嬉しそうなんだよ」
何やら喜んでいる大を軽く睨んで、大のずらされた下着を手に持つ。
そして目を閉じて上にあげようとする。
「引っかかってこれ以上あがらない」
「そりゃつっかえ棒があるからね」
「うぅ、彼氏が自信満々に変なプレイ強要してる気がする」
下着をいかに動かそうとも大の逞しいアレが引っかかって進まない。
「愛さん、俺のコレが引っかかってるのなら倒せばいいじゃない」
「・・・・・・わかった」
諦めるしかない。
覚悟を決めて大のアレを握り締めた。
熱い。
これまで何度も握ってるし、その・・・・・・何度も受け入れたものだけれど

今日はさっきまで寒い外にいた事も相まって余計に熱を感じる。
「ほら、これでいいだろ」
余計なことを考えず、起立した大のモノを倒して素早く下着の中に入れた。
当然手を離した瞬間下着が大きく盛り上がるが、アレをそのまま外に出しておくよりかはマシだ。
正直に言うと・・・・・・アレを見続けていたらアタシの方までその気になってしまう。
今も起立したアレを少し見て握っただけで殆どスイッチが入りかけている。
ここに梓いなくて、病院内でさえなければと思ってしまうあたりで既にギリギリなのだ。
「そのさ、大」
「ん？　どうしたの愛さん」
前から聞いてみたいことがあった。
「その、入院生活中って大はどうやってあっちの方を解消してるんだ？」
口に出すのが恥ずかしい。
だが本当に興味あったため正直に聞いてみた。
「気になる？」

大は少し照れたように聞いてきた。
アタシは大人しく頷く。
「両手がこの様だからね、前に愛さんとしたっきりだよ。
正直に言えば今だってすっごいムラムラしてる」
「む、ムラムラ!?」
確かに、下着に戻ったはずの大のアレは一向に静まる気配がない。
「愛さん、性欲が溜まっている俺としては正直愛さんとイチャイチャしたい所なんだけれども」
ここで大が急に影を落とす。
「できれば手足の縄ほどいて貰えませんかね」
「あ、あぁ悪い。気づかなくてごめんな」
言われた通りに解く。
いや、余りにも固く結ばれてたから半分引きちぎったのだが。
「その、大。それ、治まりつかないならアタシが――――」
「ストップ愛さん」
「なんだよ、アタシじゃ嫌なのか?
アタシはいつだって大とそういう事したって良いと思ってるんだぞ」

「俺だって愛さんとならどこでだってＴＰＯ弁えず致したいよ。けれどそろそろなんだ」

なにがそろそろなのだろう。

よく分からず首をかしげる。

その瞬間、扉が二度ノックされた。

「・・・・・・さて、俺はお説教喰らうけど愛さんはどうする」

そういうことか。

今のノックの音だが、明らかに相手は切れているらしくノックというよりは殴ってる感じだ。

これが噂の性格の悪い婦長なのだろう。

大も少し困ったようにしてる。

「アタシも一緒に怒られるよ。良い思い出も嫌な思いでも共有しようぜ」

「ありがとう、愛さん愛してる」

「アタシもだよ、大。大好きだ」

そういって互いに目を合わせて微笑み合う。

うん、幸せだ。

「ただ、一つ文句を言うのなら諸悪の根源たるコイツが寝てるのがムカつくな」

「あはは、酔った勢いだし仕方ないよ」
相変わらずアタシ以外の女にも甘い所が気に入らない。
でも、そんな気に入らないと思うところも大好きなのだ。
ドンドンと催促のノックが再び響く。
それを大は目で見て、大きくため息。
「どうぞ」
その後、アタシと大は1時間にわたってイヤミを聞かされ続けた。

星空というのは美しく、それは子供の頃から変わらない価値観だ。
見上げれば雲一つない夜空、そこに浮かぶ沢山の星たち。
星の色はまばらで青いのや赤いの、黄色っぽいのまでたくさんある。
寒空の下、誰もいない土手でアタシ達は空を見上げていた。
「大、ごめんなこんな寒い中外に出して」
「俺は愛さんと一緒にいられるなら北極から南国までどこへだってついていくよ」

「バカ、大げさだって」
大は口先だけじゃなくて本当にそう思ってるだろうから好きなんだ。
きっとアタシが地球の裏側にいたとしてもアタシが会いたいと言えば来てくれるだろう。
「大、その怪我はどのくらいで治りそうなんだ?」
四肢を骨折した挙句肋骨すら折れている。
そんな大の怪我はあとどれだけの治療期間が必要なのか。
間違いなく大は日常生活すらまともに送れない。
四肢が使えないとはそういう凄まじい不便さを抱えるのだ。
できるなら代わってやりたいし、早く治る方法があるのならどんな事もしてやりたい。
「先生が言うにはあと三週間くらいかな。
普通の骨折なら四週間ちょいくらいかかるらしいけど、俺の回復が思ったより速いみたい」
なんて気楽に言いながら微笑む。
その笑顔がアタシにとって何よりも胸に響くものだった。
「両腕も両足も使えなくて不便だろ?」

こういうのを患者本人に言うのは大変非常識なことだと思う。
だけど聞かずにはいられなかった。
「そうだね、食事はまともに食べれないし風呂やトイレだって一人じゃやっぱりできない。
今はもう慣れつつあるけれど、やっぱり人にいちいちトイレ行きたいなんて言うのは恥ずかしいよ」
当然だ。
大はまだ思春期真っ只中の高校生。
ならばそういう生理現象だって人に告げる必要のある事に抵抗を覚えないはずがない。
怪我をしてから殆ど毎日大のお見舞いに来ているが、生理現象を告げるときはいつだって申し訳なさそうにしていた。
だというのに、大は一度も口にしてない事がある。
「大は辛くないのか？　誰かがムカついたりしないのか？」
大は今まで一度も恨み言も弱音も口にしていない。
ただ本当に他人を頼る際に謝るくらいで、一度も情けないような愚痴を言っていないのだ。

「大が普通に一人で生きていればそんな怪我をする事はなかった。
アタシや梓がお前に関わったばかりに、何も悪いことをしていないお前が代わりに怪我をしたんだ」
人に無害な筈の大が襲われる原因など他人の不始末以外に有り得ない。
だったら、そんな辛い目にあったのなら恨み言の一つだって口にしてもおかしくない。
誰だって口にしたことはあるだろう。
『どうして自分がこんな目にあわなければならないのか』
それをいう資格が大にはあるのだ。
「恨みなんてないのにどうして恨み言をいう必要があるのかな?」
大は表情を変えず、いつもの穏やかな雰囲気のままいう。
「俺は別に今誰かを恨んでもない。俺を襲った連中も愛さんの手で罰を受けたし。
乾さんや愛さんが俺を悪意を持って傷つけたわけじゃない」
だから恨み言はない。
そう言い切った。
なるほど、大らしい。
「弱音は、そうだね・・・・・誰もいない所で呟いてるよ」

「え、そうなのか？」
「恥ずかしいから誰にも言わないでよ」
意外だった。
大が弱音を吐いている所なんて今まで見たことがない。
「乾さんが寝て誰も聞く人がいない時に言ってるよ。
痒いよ重いよ～、一人でトイレ行きたい～、ムラムラする～ってね」
「はは、なんだよそれ」
思わず笑いが溢れる。
想像しただけで面白い。
「愛さん、俺はね。弱音を誰かに聞かせたくないだけなんだ。
そんなのを聞かせたら皆今以上に俺に気を使ってしまう」
空を見上げて呟く。
「こんな一見酷いケガをするとね、皆俺の顔色を伺うんだ。
変な事を言ってしまうと不謹慎な事になるんじゃないかって」
そうだろう。
例えば腕がない人に握手を何度も求めようとするなど不謹慎の極みだ。
足がない人にサッカーを誘うなど嫌味以外の何物でもない。

ましてや両方使えない大ならば相対した相手も言葉を慎重に選ぶ必要があるのだろう。

それを大は嫌がっていた。

「もし俺が人に弱音を吐くのだとしたら、そうだね

俺の事なんて気にしないでくれ、いつも通りにしてくれと懇願するよ」

人のことを気にする大だからこその答えだろう。

自分を気にして他人の発言や行為を縛りたくない。

その意思を大は常に持っている。

そのスタンスはアタシにとって輝いて見えた。

「早く治るといいな」

「うん、俺もそう思う」

でも、多分骨折が治ってもしばらく大は動けないだろう。

人の筋肉というものは使わないとすぐに退化する。

一ヶ月も使わなければきっと自重すら支えれないほどに弱っているかもしれない。

「でも治ったあとのリハビリが一番きついっていわれてね。もう頭が痛い限りだよ」

大もその事を聞かされていたようだ。

実際に少し気が滅入っているのだろう、少し表情が暗い。

冬休みに入って殆ど入院生活なのだ、その心労はアタシが思う以上に違いない。
「誰かに弱音を吐けないって言うけどさ、アタシにも吐けないのか？」
せめて、せめて大の心の支えになってやりたい。
アタシじゃ大の怪我を治す手伝いなんてできない、だから別のところを支えてやりたかった。
「今の愛さんにこそ吐けないよ」
「それは何故？」
大は曇った表情を正し、真面目な顔をして横に座るアタシを見つめた。
「だって、愛さん優しいからきっと俺の弱音を受け止めちゃうもん」
それの何がいけないのか。
アタシは大の言う通り彼が弱音を吐けばそれを聞いてやるだろう。
頑張れと激励を送るだろう。
でも、それを大は嫌がった。
「愛さん、俺が今みたいに情けない時は甘やかさないで欲しい。
番長の愛さんとして俺の弱音を受け取って欲しいんだ」
番長としてのアタシ。
一瞬それがどういう意味なのか考えた。

十秒ほど思考をして、そこでようやく彼がアタシに何を求めているのか気づく。
なるほど。
「大の言いたいことはわかった。
それを踏まえた上でもう一度言う、アタシに弱音吐いてみてくれ」
アタシが答えを見つけたことに気づいたのか、大は少し嬉しそうに笑った。
「愛さん、もうこんな入院生活うんざりだ。
日常生活すらまともにできない、こんな不自由な生活なんてはやく抜け出したいよ」
殆ど口先だけの弱音だ。
けれど口に出さないだけで今までずっと思っていた事なのだろう。
先ほどまでのアタシなら確実に大を抱きしめて甘やかした。
けど大自身がそれを拒んだ。
ならば彼の望む通りの対応をしてこその彼女だ。
「甘えんな、気合でどうにかしろ」
大が求めてるのは心地いい堕落じゃない。
「大、お前なら不自由なその怪我を抱えた生活やリハビリだって絶対に乗り越えられる。
アタシは信じてる、だから情けない事を言うな」
弱音を許さない。

その冷たさと厳しさこそが彼にとって今一番欲しいものなのだ。
褒めるだけでも、甘やかすだけでも人によっては壁を乗り越えられる。
でも、大はそうじゃない。
それを大自信が気づいているからこそ厳しさをアタシに求めた。
「うん。ごめん愛さん」
大は叱られたというのに嬉しそうに頷いた。
アタシの説教に満足したのだろう。
・・・・・大が満足してもアタシが満足してなかった。
甘やかしたりない。
だから二の句を付け足す。
「それでも本当に辛かったらいつでもアタシに言えよ。
辛いことから逃げるのは情けないけど、辛いと訴える事は間違いじゃない」
誰にだって限界はある。
それを越えることがスポーツの永遠の課題だろう。
けれどリハビリや怪我の治療はそうじゃない。
肉体を虐めることが目的でなく癒すことが目標なのだ。
既に壊れた体を抱えて、それを辛いと訴えてはいけない。

そんな馬鹿なことがあるはずがない。
「アタシはいつだって大の傍にいる。
だから支えることなんていつだってできる。
それを大が遠慮する必要なんてないんだから」
疲れたのなら休めばいい。
簡単な事だ。
心が疲れたのならアタシに甘えて欲しい。
厳しさだけが優しさとは到底思えない。
「ギリギリまで頑張って、それでもどうしても辛くなって何もかも嫌になったのなら
その時まで強がる必要は無いんだ」
心が折れるまで強がる必要なんて無い。
「アタシは大の好きなアタシでいたい。
大が突き放して欲しいなら突き放す、甘えたいなら全力で甘やかす」
それがアタシなりの彼女としての在り方だ。
「だから本当に辛くなって、甘えたくなったときは絶対に言え。
本気で大がドン引きするくらいに可愛がってやるから」
胸を張っていう。

甘えた言葉を突き放して欲しがった大。
けれどアタシは突き放すだけが正しい事だとは思ってない。
「・・・・・・うん」
大はアタシの啖呵に何を感じたのだろう。
それを知る術はない。
けれど、間違いなく言いたいことは伝わったはず。
それだけ気持ちが通じ合っている自信がある。
「何ていうか、愛さんって付き合うまではクールなイメージあったんだよね」
「何を今更」
「そうだね。でも、やっぱり愛さんは誰よりも情熱家だよ。
俺の知ってる誰よりも真っ直ぐで、誰よりも愛が深い」
自分自身のことをそう言われるとむずかゆいものがある。
「愛さん、ありがとう。元気出たよ」
「そりゃ良かった」

アタシたちのデートは病院の門限の近づきによって終わりを告げた。
まだ幾分か時間の余裕はあるけれど、それでも何かトラブルが起きることを考慮して早めに大を病院へ送る。
「そういえばさ、そろそろ俺退院できるみたいなんだ」
「へぇ、前はそう言って退院した二日辺りでまた病院送りだったよな」
「・・・・・・その事は本当に反省してます」
本当に反省しているのだろう、心底申し訳なさそうに頭を下げる大。
正直まだ迂闊な行動をした大を怒ってはいるもの、それでも元はといえばアタシや梓が撒いた種である。
アタシに大を攻める資格は実の所無い。
「反省してるならいいよ。それよりも年も越してもうすぐ三学期だ。登校とかどうするんだ?」
両腕が使えないため自分で車椅子を動かすこともできない。
必然的に誰かが大の介護につくはずだが。
「あ〜、うん。姉ちゃんが治るまで来るまで送ってくれるって」
こういう時に家族が登校している学校の教員であることがメリットになる。

大の姉ならばきっと学校生活でも色々と大が不自由しないように色々と手回ししてくれるだろう。
あの人はそういう人だ。
「なんだ、やけにテンション低いじゃんか」
退院が決まったというのにまるで嬉しそうじゃない。
それどころかむしろ落ち込んでいる素振りすらある。
アタシが顔色を気にしているのに気づいたのだろうか、大は少し自嘲気味に笑った。
「愛さん、今から俺は愛さんを傷つける事を言うかもしれない。
怒らないで聞いて欲しいとは言わない、むしろ怒って欲しい」
何を言うつもりなのか。
アタシには皆目見当もつかない。
「新学期が始まって俺のこと、邪魔だと思う人はきっといると思う。
だって、何をするにも俺は人の手を借りないといけないんだから」
その言葉に僅かながら憤りを感じた。
「俺自身はもう学園では何もするつもりはない。
誰も俺に頼みごとなんてしないだろうし、俺自身何か行動しようとして人の手をわずらわせる気はない」

他人に迷惑をかけることを何よりも嫌う大の事だ。
そんな大だからこそ出した答えだろう。
「・・・・・・自惚れてるかもしれないけど、愛さんはきっと俺に色々世話を焼いてくれると思う。
でも、ちょっとでも俺を重石に感じたのなら正直に言って欲しい。
そんな事を思った程度で愛さんの事を嫌いになんてならないから」
その正直にな大の言葉に怒りが湧き上がる。
「大、お前何か勘違いしてるんじゃねぇか？」
吹き上がった激情は鎮る事もなく、怒りの感情で表に出る。
感情の赴くままに歩みを止めて大の胸ぐらを掴む。
「アタシが大の世話を焼く事をずっと不純な理由があってしてる事だと思ったのか」
大はそんな事を微塵も思っていないのだろう。
目をそらさず真っ直ぐにアタシの目を見つめた。
「アタシは大が好きだから、お前といると幸せだから傍にいるんだ。
大の為に何かしてやりたいっていつだって考えてる」
胸を張って言える。
「お前が怪我をして、他人に頼ることを躊躇うのはわかる。

でもアタシには躊躇う必要なんてねぇよ、だって」
大の車椅子を握っている瞬間だってアタシは間違いなく幸せを感じている。
「お前の為になにか出来ていると実感出来ることがアタシにとって何より嬉しい事だからだ」
別に献身的な行為が好きなわけじゃない。
『大に』献身的なことをできるのが嬉しいだけだ。
対象の問題なんだ。
「そっか、こんなに俺を好いてくれてる彼女がいるって凄い幸せなことなんだろうね」
大は少し照れたように目を逸らした。
そりゃこんなに真っ直ぐに好意をぶつけられりゃ恥ずかしくもなる。
言ってるアタシだって今凄く恥ずかしい。
「アタシと大はもう他人なんかじゃない。
もしアタシが怪我をして一生まともに日常生活すらできなくなったらどうする?」
「人生をかけて愛さんを看病する」
即答してくれた。
かなり嬉しい。
「アタシだってそうだ。今大が日常生活まともに送れないのなら何だってしてやる。

大がアタシにしてくれる事と同じように、アタシも大の為に何かする事を嫌だなんて感じるわけねぇよ」

それを知って欲しかった。

体の不便は心の不安を呼び起こす。

そんな事を前に病院で聞かされた。

その言葉は間違いなく今の大に当てはまっていたのだ。

だかこそアタシは伝えた。

その心の負担が僅かでも減るようにと。

「愛さん、ごめんね。手間のかかる彼氏で」

「次ごめんっていったら二度と口きかない」

もちろん嘘だが、大は慌てて言い直す。

「ありがとう愛さん、これから三週間くらいお世話になると思います」

「うん、任せろ」

大は新学期を嫌がっていた。

だがアタシはむしろ早く時間が進めばいいと思う。

一ヶ月後にまた大と手をつないでデートだってしたい。

二人で屋上行ってアタシの作った弁当を大に食べて欲しい。

・・・・・夜だって強く抱きしめて欲しい。
やりたことは山ほどある。
だからはやく怪我を治して欲しい。
だからといって今怪我をした大が嫌なわけがない。
こんな弱気な大だってやはり愛おしい。
力になってやらなくてはと思ってしまう。
ようは大と一緒にいられればそれでいいのだ。
「それじゃ、道草食ったし急いで帰ろうか」
「うん」
既に大にはもうネガティブな感情など消え去ったらしい。
入院する前と同様に穏やかな、人を安心させてくれる声で頷いてくれた。
「大、今アタシすっげぇ幸せかも」
「奇遇だね、俺も凄く幸せを感じてるんだ」
互いに胸の内を明かした。
その結果お互いにあったわだかまりは完全に消え、今アタシたちの上にある空のように透き通ってる。
もちろん空がいずれ曇るようにアタシ達もまた何かをきっかけにネガティブになっ

たりするだろう。

けど、少なくとも今この瞬間のクリアな気持ちは何にも代え難い、かけがえのない気持ちだ。

流石大だ。

一緒にいるといつだってアタシを幸せにしてくれる。

冬休みはもう直ぐ終わる。

新学期も大と一緒なら例年よりも圧倒的に楽しく過ごせそうだ。

１８話：幸せな奴ら

夢を見ている。

『梓ちゃん、梓ちゃんは将来叶えたい夢ってある？』

何故か自分を呼ぶ呼称が普段と違う長谷センパイ。

だが夢の中の虚ろな頭ではその事に引っかかるほど注意力がない。

『俺はね、そうだな。

誰よりも美しい君とこのまま人生を過ごしたいという夢がある。

それを考えれば既に夢は叶っているんだ、だから将来の夢なんてないよ』

普段のセンパイなら絶対に言わないクサイ台詞だ。

なんだこのＢ旧映画のような恥ずかしい言い回しは。

・・・・・恥ずかしい事だけどそれに胸を弾ませている自分がいた。

『あ、あずも同じ夢っす』

あずがそう言うと長谷センパイは嬉しそうに笑った。

『そう、じゃあ俺達は互いに夢のない若者って事になるね。

でもそれじゃあいけない、だから俺に考えがあるんだ』

『それは、なんっすか?』

センパイがあずの腰に手を回して至近距離で見つめ合う。

明らかにいつものセンパイにはない積極さだ。

『いずれ近い将来に叶えられる夢を抱こう。

梓ちゃん、卒業したら俺と結婚してくれ』

『え、えぇ!?』

そんな馬鹿な。

こんな嬉しい事があるはずがない。

だってセンパイは辻堂センパイと結婚する約束を既にしていて、

だから自分の入る余地はわずかしかなくて

そうだ夢だ。

きっとこれは夢に違いない。

だったら確かめなくては。

夢の確認の仕方なんて昔から決まっている。

自分の頬をつねるのだ。

決心して右手で自分の右頬をつまむ。

願わくば夢でありませんように。

その願望の強さと同等の力で指に力を入れた。
そして自分の頬を掴む右手を降ろして大きくため息をつく。
「夢だった・・・・・・」
そりゃそうだ。
こんな都合のいい展開なんてあるはずがない。
自嘲気味に笑って、せめて気分を変えようと時刻を確認する。
愛用している携帯電話には時刻五時と出ている。
タイマーよりもはやく起きたようだ。
取り敢えずそのタイマーをオフにして当初の予定通りに行動を起こす。
予定といっても些細なことだが、日課としている事だ。
眠気を噛み殺しながらベッドから出る。
「うぅ、寒いっすぅ」
余りの激痛に跳ね起きる。

冬真っ只中のこの一月。
しかも早朝のこの時刻、暖房をオフにしたこの病室の温度は洒落にならないレベルで冷えていた。
だがこの寒さも慣れたものだ。
相変わらず辛いことは辛いけれど、我慢できないことはない。
目的を達成するために行動に移す。
まず来ているパジャマを全て脱ぎ捨てる。
もちろん丁寧に畳む、センパイにそうすると褒めてもらえるからだ。
ここで更に寒さが増す。
だがまだへこたれない。
更に下着を脱ぎ、ベッドの上に置く。
ここの注意点だが、必ずセンパイがあずのベッドを見たときに下着まで見えてしまう位置に置くのがポイントだ。
「ささささ寒い」
洒落にならない寒さだ。
そりゃ全裸でこんな冷蔵庫みたいに寒い所にいたら寒いに決まっている。
最後にやるべきことに手早く取り掛かる。

そう、最後にやることとは。

「失礼しまーす」

自分とセンパイの間にある邪魔くさいカーテンを全開にしてその先にいるセンパイのベッドに潜り込む。

既にセンパイの体温で暖められていたベッドの中はとても気持ちいい温もりを帯びていた。

更に暖まろうとあずに気づかず未だ寝続けている無防備なセンパイを胸に抱き寄せる。

「あったかいっす長谷センパイ」

全裸であるために彼の体温がダイレクトに伝わる。

その心地よさを感じながら彼が起きない程度に抱く力を強くする。

「ん・・・・・・んん・・・・・・」

僅かに唸るもののやはり起きる気配はない

センパイのそのぬくもりをしばらく堪能し、次の日課に移る。

長谷センパイの肋骨の確認だ。

この骨は実の所自分が折ったようなものだ。

一時は治りかけていたのだが、自分の不始末のせいでセンパイが再びそこを再度骨折

することになった。
それに対しての申し訳なさが自分には大きくあった。
センパイは優しいからこのケガの事は一切自分には語らないし、意識させないようにしている。
だが自分は知っている。
恐らくこの箇所の骨折が最も苦痛を与えていることに。
時折センパイは会話しているときや、咳やくしゃみ。
いや、ただ単に呼吸をした時すら顔をしかめる時がある。
肺の膨張に合わせて折れた肋骨が酷く痛むのだろう。
彼の寝巻きを巻くりあげてそこを確認する。
見ればそこは手術で切開された後が生々しく残っていた。
その傷を見てどうしようもないほど胸が締め付けられる。
自分のせいで負った傷なのだ。
他人事と切り捨てることなんてできない。
ましてやあの長谷センパイが抱えることになった怪我なのだから。
傷口をなぞる様に指を這わす。
「ん、うぅ・・・・・・」

僅かに痛むらしい、起きはしないものの唸るセンパイ。
申し訳ない。
ごめんなさい。
許してください。
心の中で何度も謝り続ける。
それが毎日の課題だった。
せめて体を冷やして痛みがぶり返さないようにと長谷センパイを抱きしめる。
寒い朝方に怪我は響く。
だから暖かく目覚められるように添い寝する。
無論、裸である必要はない。
これはただのセンパイを魅了するためのオプション的なものだが。
ともあれ、センパイを少しでも温めようという大義名分のもと全裸でセンパイを抱きしめ、二度寝する事にした。

「――――いさんっ」
何やら声がする。
それもかなり近い距離で。
「乾さん、いい加減――――ってば」
その声で少々薄かった眠りが覚醒していく。
はて、そういえば自分は二度寝をしたのだった。
ならば今現在自分が寝ている場所はセンパイのとなりだろう。
なるほど、多分センパイは目が覚めたら全裸の自分が毎度の事いた為起きるに起きれずこうして声をかけていると。
「はいはい、あずは起きましたよ～」
若干気だるい眠気を残しているため、間延びした声が出る。
「起きましたじゃなくて、いい加減自分のベッドで寝なさいって」
何度同じことを言われてもやめる気はない。
もはやこれはライフワークなのだ、退院する日までやめない。
「別にいいじゃないっすか～、
センパイだって朝あずと一緒に寝てると気持ちいいとかあるんじゃないっすか？」

「そ、それは確かにあるけど。
あったかいし柔らかいし・・・・・・」
おや、思ったより素直である。
ドモるセンパイ可愛い。
「でも流石にこれはまずいって。ほら、いい加減自分のベッドに戻って」
「あん、センパイのいけず」
毎度のようにシーツを押し付けてくる。
それを渋々うけとって大人しく自分のベッドに戻ることにする。
もう少しセンパイをいじっても良いのだけど今日はあずとセンパイの客人が両方来ることになっている。
そのため準備はできるだけ早めにしておきたいのだ。
「前しか隠れてないよ、お尻丸見えだから」
「ありゃ、センパイのエッチ」
「・・・・・・ほほう、今俺をエッチと申したか」
急にセンパイの態度が変わった。
何やらセンパイを焚付け過ぎたのかもしれない。
わざと前部分だけシーツで隠して目の前をおしり丸出しで通ったのだが、

最近のセンパイは時々積極的になる。
今回もその時っぽかった。
「いいかい乾さん。君は思春期の男子の事を何もわかっちゃいない」
シーツ一枚の自分に語りだすセンパイ。
この後に期待してあずはセンパイに近づくためにベッドに座ることにする。
「例えば、このけしからん大きな胸。
全くもってけしからん、モラルハザードしすぎてる」
「意味わかんないっすよぅ、あう」
不意に腕を伸ばしてあずの胸に手を置く。
だがその手はギプスを間に置いているためセンパイの体温を感じることはできない。
センパイも勿論あずの胸の感触なんて感じないだろう。
「暴走した男子はきっとこの胸をこねくり回すだろう。
君が嫌と拒んだって無駄だ、男子が暴走するともはや性獣を相手にするようなものなんだから」
「拒むもなにもセンパイならいつでも・・・・・・」
勿論センパイ以外が触ろうとするなら腕一本犠牲にしてもらうけれど。
「えぇいまた惑わせるようなことを・・・・・そういえば乾さんって結構モテてるよね」

あずの胸をギプスで何度もつつきながらセンパイは質問してきた。
「え、ええ。一応結構告られてるしナンパもよくされるっすよ」
先日の初詣の時だって男子共がしつこく食い下がってきたし。
一応モテている自覚はある。
「でも、別に男に興味ないんでまだ誰とも付き合った事ないっすけど」
江乃死魔にいた頃は男より金の方が欲しかった。
そのため言い寄る男は鬱陶しい存在でしかない。
まぁ、処女をはやく捨てたいとは思っていたが痛いのは嫌だし興味もない男にあげるのも癪だったため未だ処女だ。
今思えばこの瞬間まで処女を守っていて良かったと心から思う。
「あ、もしかして自分の処女性確かめてます？
大丈夫っすよ、あずはセンパイ一筋っすから」
男は『遊びで付き合うのなら非処女、結婚するなら自分と付き合うまで処女だった女性』
という思考をしていると友人に聞いた。
それにそういう打算抜きでセンパイにこそあずの処女をもらってもらいたい。
処女は捨てるのではなく捧げるものという考えが今の自分にはあった。

「いや、そうじゃなくて」
歯切れが悪くセンパイは言いよどんでいる。
「初詣の時さ、俺のこと彼氏って言わなかった？」
どうやら聞かれていたらしい。
自分も頭に血が上って言った事なのであまり指摘されると恥ずかしい所だ。
「す、すいません。勝手なことをいって」
「いや、それは光栄なことだからいいんだけど」
光栄。
脈アリ？
「それを噂されたら拙くない？
ほら、乾さんだって冴えない俺とカップルなんて噂されちゃ困るでしょ？」
「いえ全然全く」
「即答なのね」
「だって、そうあって欲しいんですもん。
むしろそういう噂が流れたら困るのは長谷センパイっすよ」
「・・・・・・何故？」
自分の言葉に思い当たることがなかったらしい。

別に教えてあげなくとも自分には何ら問題はないのだが、結果としてセンパイが困ることになるのは嫌だ。
教えることにしておく。
「もしあずとセンパイが付き合ってるって噂がヤンキーとかの間でも流れた場合辻堂センパイとか勘違いするんじゃないっすか?」
それもセンパイがあずに本気になって、辻堂センパイとあずに二股を黙ってかけていたという具合に。
勿論その程度の誤解で別れる二人だとは思わないが、ちょっとした喧嘩にはなりかねない話題だ。
「そ、それは拙いね」
本当に困ったように冷や汗をかいている。
「大丈夫っすよ、もうその件はメールで誤解といてます。ちゃんと男たちの誘い断るためのでまかせって事になってるっすよ」
こういった手回しは得意分野である。
後にセンパイに迷惑がかかるような展開になりかねない可能性は潰しておくに越したことはない。
「でもあずは本気でセンパイと付き合いたいとは思ってるんで、そこの所は覚えておい

てくださいね」
念を入れて伝えておく。
毎日好意をぶつけているのだけれどイマイチ伝わっている気がしない。
だからこうして言葉にしないと不安になってくるのだ。
その念押しにセンパイは少し困ったようにした後、僅かにはにかんだ。
「ありがとう乾さん。でも、俺は愛さんとずっと一緒にいるから」
毎回そういって断られる。
だから自分も毎回言う返答を用意していた。
「では愛人という事で。
自分はそれで一向に構わないっすから」
「あ～・・・・・・」
これを言うとセンパイは毎回凄く複雑な表情をする。
断るにしてもあずを傷つけそうで気が引けるといった所か。
そもそもセンパイもあずの事を憎からず思っているフシがある。
それこそ辻堂センパイがいなければスグにでも付き合い始めてもおかしくない程に。
だからこそ色々な事を考えて毎度のこの言葉に言い返す言葉がないのだろう。
「じゃ、センパイ。あずは着替えますんで」

「ちゃんとお尻隠してね」
「わかりました、仕方ないっすね」

「久々に顔を合わせたと思ったら何でそんなケガをしてるのヒロシ」
「しかも両手両足とかこれどういう経緯でそんな事になったのか気になるタイ」
「いやぁ、はは。ちょっと怖い人たちに襲われてね」
　１１時頃になったら事前に約束していたらしいセンパイの友人が四人ほど訪れた。
　どうやら男性二人と女性二人だ。
　一応センパイと異性である自分が同室している事は伏せる事になったため自分はカーテンを閉めて静かにする事にした。
「でも長谷君が襲われる理由がわからないんだけど」
「そういえばマイ、あたし達も前に襲われかけた事あるよね」
「う、あれは思い出させないで。辻堂さん来なかったら本気でやばかったんだから」
「だよねぇ。今思い返しても危ないところだったよね」
　女子の方は見覚えがある。

こっそりと顔を覗いてみたが、あの二人は夏の稲村の学園祭でライブをした二人だ。
特に片方の胸の大きい方の名前はよく覚えている。
未唯と言ったはず。
「けどどうなのヒロシ、新学期とか学校これんの？」
「長谷君来ないと辻堂さんが寂しがっちゃうよ」
美唯さん、いや唯センパイと背のあまり高くない方の男子がセンパイに尋ねる。
確かセンパイはそろそろ退院の筈だ。
新学期も普通に学校行くはずだけど。
「そこは問題ないよ。治るのはまだ三週間くらいかかるけど学校いくのは大丈夫そう」
「それだと通学とかどうするタイ？」
「そうそう、その足と腕じゃあ一人で通学できなくない？」
「大丈夫だって、姉ちゃんが送り迎えしてくれるらしいし」
あのセンパイを溺愛するお姉さんならむしろ率先してしたがるだろう。
っていうか唯センパイの方じゃない方のセンパイって確か恋奈様の友人だっけか。
イマイチライブの事以外に記憶に薄い。
「大分不便そうだね、学校始まったら」
「そうだね。ノートもとれないから最初はただ見てるだけになるよ。

烏丸さんの言う通りかなり不便する事になると思う」
・・・・・・正直この会話を聞くのをそろそろやめようと思う。
センパイがケガをする事になったきっかけは自分にある。
だからこれ以上センパイが怪我のせいで不便していることを聴き続けるのも結構きつかった。
「ところでヒロシ、一つ質問があるんだけど」
何の脈略もなく男子のひとりが話を変えた。
「隣のベッドって誰か使ってるの？」
本人はヒソヒソ声で話しているようだけど、あいにく耳が良いため普通に聞き取れる。
「うん、使ってるよ」
あっさりと答えるセンパイ。
だが誰が使っているかは伏せている。
「今もカーテンの向こうにいるタイ？」
「ああ、寝てるんだと思う」
実際は寝てはいないのだけど。
「そうなんだ。じゃああんまり騒ぐと迷惑だね」

「今更すぎるよマイ。もうあたし達結構騒いだ後だよ」
中々常識を弁えている人たちである。
自分が前にいた江乃死魔は恋奈様やリョウセンパイ以外全員常識知らずばかりなため苦労した記憶がある。
「しかし、その怪我だとヒロシは合コン行けそうにないなぁ」
「合コン？」
「そうタイ。この冬休みの間に僕らがひそかに進行していた合コンセッティングがあったタイ」
何やら面白そうな話が始まった。
更に耳を澄ます。
「相手の子は全員由比浜学園の子達だ。きっと美人ばかりだぞ」
「想像するだけでワクワクするタイ」
・・・・・・嫌な予感がする。
「そもそも長谷君を誘う意味がわかんないよ」
「そうそう、長谷君には辻堂さんいるから行くわけないじゃん」
「だね。この怪我だから当たり前だけど俺は行かないって事で――――」
センパイが断りを入れている瞬間、病室に大音量で着メロが流れる。

長谷センパイやその友人のモノじゃない。
間違いなくあずのケータイからだ。
全員がぎょっとして口を噤む。
だがそれも僅かなことですぐに全員が自分のベッドに視線を向ける気配を感じた。
「や、やばいっす」
慌ててケータイの着信コールを止めて留守状態にする。
今頃相手は不在着信のテンプレートな音声を聞いているところだろう。
嫌な予感は的中した。
多分合コンの誘いだろう。
前にそんな事を言っていた友人からの着信だった。
「今の着うたって女の人がよく設定する曲だよね」
耳ざとい唯センパイが言う。
「べ、別に男の人が使うことだってあるかもしれないよ」
慌ててセンパイが誤魔化そうとするものの、以前としてかわらず視線を感じる。
「え～、俺だったらあんな曲恥ずかしくて設定できないけどな」
「僕も少しひくタイ」
一応こちらに聞こえないように言っているみたいだが丸ぎこえだ。

何だろう、少し苛々してきた。
何故自分がこんなコソコソしなければならないのか。
そんな事を考えていると、また着信が来た。
再び響く着信音。
マナーにしてなかった自分も迂闊だが、さっき非通知だったのに即座にかけ直す友人の方にも苛立つ。
もういいやメンドクセェ。
「はいもしもし、なんっすか?」
当たり前のようにケータイをとって電話を始めた。

「へぇ、じゃあ冬休みの初めから長谷君とずっと一緒にいたんだ」
「はい、唯センパイ」
「未唯なんですけど」

結局バラしたために、長谷センパイは男二人に連れ去られてった。
色々根掘り葉掘り聞かれているのが想像つく。
少し申し訳ない気がするが、どうせ隠したところで不自然な流れだったのだ。
むしろあっさりバラしたほうが信頼に傷がつかないだろう。
「でもさ、何で女性と男性が同室になってるの？
普通こういうのって同性じゃないと絶対におかしいよね」
当然の反応だ。
「恋奈様の采配っすよ。
理由は言えませんけどちゃんと意味があって長谷センパイと同じ部屋になったわけっす」
「へぇ、恋奈ちゃんが関係することなんだ」
どうやらこっちのセンパイはやはり恋奈様と関係があるらしい。
多分以前辻堂センパイのスパイに使っていた人だろう。
適度に垢抜けていて自分と話が合いそうな感じではある。
「恋奈様ってのが誰かよくわかんないけど、察するにもしかして乾さんって不良な人？」
「乾さんなんて堅苦しい言い方しないで、あずにゃんでいいっすよぅ唯センパイ」
「未唯なんですけど」

なんと答えるべきか。
自分はもうヤンキーをやめる気なのだが、立場上そういかなくなった。
そのため一応ヤンキーの部類なのだろう。
「察しの通り自分は不良っすよ。
でも別に喧嘩大好きとかそういうんじゃないんで安心してください」
「そ、そう」
どうやら唯センパイの方は不良に苦手意識があるらしい。
そもそも不良に苦手意識のない一般人なんてそういないのだけれど。
「で、さっきの電話の会話聞こえちゃったんだけど。
あの電話ってうちの男子二人が設定した合コンの誘いなんでしょ？」
「そうっすね」
タイミングを測ったように来た電話はやはり合コンの誘いだった。
どうやら人数が集まらないらしく、自分に来て欲しいとの事だ。
「あずにゃんは行くの？」
「行きませんよ唯センパイ」
「未唯だっつーに」
長谷センパイが行くのなら自分も参加するけれど、当然センパイが来るとは思えな

い。
だったら自分が参加する理由もない。
他の男なんて微塵も興味ないし、興味のない男にキャラ作るのも面倒だ。
「そういえばお二人にはお願いがあるんっすよ」
合コンの話は一旦切り上げて、別の会話に移る。
二人は何だろうと首をかしげてこちらを見る。
「新学期始まったら長谷センパイの事、よろしくお願いします」
誠意が伝わるように頭を下げる。
「センパイ、特に以前と変わらないように見えるけど実はかなり無理して明るく振舞ってます。
怪我だってまだ結構痛むハズなんですよ」
今日だってお見舞いに来た人達は気づいてなかったようだけど、不自然なタイミングで言葉につまることがあった。
間違いなく肋骨が痛むのだろう。
「ですから出来るだけセンパイのケガを気にしないようにしつつ支えてあげてください、お願いします」
自分は学園が全く違うため新学期が始まったら彼に献身することができない。

だから人に頼らざるを得ない。
「大丈夫だよ、長谷君って人気者だもん」
「そうそう。別に乾さんがお願いしなくてもみんな長谷君の事を支えてあげるって」
・・・・・センパイは自分が思っている以上に人望があったらしい。
あずが頭を下げるまでもなかったようだ。
「ところでさ、今の言葉聞いて思ったんだけど」
何やら嫌な笑みを浮かべて舞香センパイが詰め寄ってくる。
「もしかして乾さんって長谷君の事好きなの？」
なんだそんなことか。
「そうっすよ。じゃないと誰かの為に頭なんて下げませんって」
「お、おおう。はっきり言うね」
「別に隠す事でもありませんし、辻堂センパイも知ってることっすから」
今更すぎる話題だ。
「へぇ、じゃあずにゃんは辻堂さんから長谷君を奪おうとしてるの？」
「ストレートな質問っすね、唯センパイ」
「未唯だっつーに」
別に辻堂センパイから長谷センパイを奪い取れるとは思っていない。

今更あずがどうかしたところで二人の関係に亀裂が出来るとは思えないし、
長谷センパイに迷惑をかけることは絶対にしたくない。
「あずは別にセンパイの近くにいれるだけでいいっす。
辻堂センパイや長谷センパイの交際の邪魔をするつもりはないっすよ」
「・・・・・・既に何かあたし達とは別次元の恋愛観を持ってるよこの子」
「あずにゃん大人っぽい」
「それほどでもないっすよぅ唯センパイ」
「未唯だっつーてんだろ」

「遅れました、申し訳ありません先輩」
「遅れたって、予定時間よりまだ大分早いっしょ」
センパイの友人たちが帰って、入れ違いにナハが来た。
多分自分たちの会話を邪魔しないために入るタイミングを見計らっていたのだろう。
ナハはそういう気遣いのできる人間だ。
「先輩、怪我の調子は？」

「見ての通りと言いたいところっすけど、流石辻堂センパイっすね。
一見怪我はしてないように見えるけど全身が動かすだけで軋む感じっす」
「・・・・・・先輩を侮辱するわけではないですが、流石というべきですね」
言葉を選んで口を開く。
別にそこまでナイーブな話題でもないから気を使う必要はないのだけれど。
「それは辻堂センパイが？　それともあずがっすか？」
「どちらもです」
ナハは何やら誇らしげに頷く。
「先輩をそこまで痛めつけられる辻堂愛も賞賛に値する。
対して先輩もあの途方もない強さを誇る辻堂愛と真っ向から挑み、かなりの善戦をしたと聞きました。
その喧嘩を見れなかったのが残念で仕方ありません」
「そっか、あの時はナハはもう川神の方行ってたんだっけ」
「ええ。いい経験になりました」
何やら前見たときよりも精悍な顔つきになっているきがする。
女が精悍な顔つきになるのが果たして良い事なのかわからないけど。
「世の中は広い、まだまだ我は未熟でした。

あ、これ川神のお土産です」
「どもっす」
ビニール袋には大量の瓶が。
何だろうとラベルと見てみればそこには川神水という名前が書かれている。
これが噂の水なのに何故か酔った気になる不思議な液体なのだろう。
ナハにしてはかなり気が利いている。
実はこの川神水めちゃくちゃ欲しかったものなのだ。
「それでは先輩。そろそろ本題に移ります」
ナハはポケットから手帳を取り出した。
恐らく暴走王国の件だ。
「先輩が辻堂愛に敗れてからの暴走王国の動きですが。
我と先輩を除く全員が既に地元の方に帰りました」
「え？　でもあずはまだ十人くらい手を出してないっすけど」
おかしい。
確かに不自然だったのだ。
自分と辻堂センパイの喧嘩をみて自分たちや長谷センパイに関わる危険性を見せつけた。

だからといってあの自意識過剰な連中がそこまで素直にしっぽを巻いて故郷に帰るとは思っていない。

そのため自分は常にセンパイの周囲を警戒しているし、恋奈様も再びあずを長谷センパイと同室に入院させたのだ。

「その件ですが、どうやら二人の決闘の後まだ敵意を残している暴走王国の与太者は辻堂愛が直々に潰して回ったそうです。

恐らく片瀬恋奈が暴走王国のメンバーを特定し、辻堂愛がその者を始末した手順でしょう」

「決闘の後って、それっていつからっすか？」

「我の調べでは先輩とその辻堂愛が喧嘩をした当日からとなっています」

驚いた。

あの喧嘩のあとから間もなく、迅速に残った不安の種を潰し回ったらしい。

自分はあれでまともに動けないレベルの痛手を負ったのに、辻堂センパイの方は更に動いていたとは。

・・・・・全くもって格好いい人だった。

自分が辻堂軍団の一員だということを誇らしく感じるほどに。

「じゃあ既にあずや長谷センパイに敵意ある奴はもういないって事っすね」

「断言はできませんが、少なくともそこの寝ている男に対する危険性は極めて薄いと言えます」
ちらりと長谷センパイのベッドを見る。
そこには辛そうな顔をして寝ているセンパイがいた。
どうやら友人達と話している時からかなり肋骨の痛みがあったらしい。
自分に気づかれないように友人が帰った後に強めの痛み止めを飲んでいるのを見た。
その薬の副作用で寝ているみたいだ。
「そっか。おつかれナハ、調査ご苦労っす」
「力になれたようで光栄です」
こっちが感謝しているというのに何故か逆に頭を下げるナハ。
相変わらずなその性格に少し面白いものを感じる。
「それでナハはこの後どうすんの。
もう年も越したしそろそろ沖縄に戻るとかしないんっすか？」
自分のその問いにナハは少し考える。
まだ本人も決めていなかった事らしい。
だが思考時間は僅かで、すぐにナハは答えを出した。
「まだ、しばらくここにいます。

一撃でも辻堂愛にこの拳を叩き込めるまでは」
相変わらず武闘派な後輩だ。
以前までの自分ならその暑苦しさを鬱陶しく思っていただろうが、今は少し違った。
「そっすか。まぁ頑張れ」
「はい、先輩」
何かにひたむきに頑張るその姿勢は決してバカにしていいものじゃない。
その事をこの冬休みで学んだ。
だからこそこのナハの姿勢は宙ぶらりんな自分からみたら格好良く見えるし応援したくなる。
「もっとも、それはあずに一撃叩き込めるレベルにならないと無理っすけど。
今年度中に達成できる事っすかねぇ・・・・・・」
「・・・・・・」
夢は大きいほど良いとはよく言うけれども、程度がある。
ナハを傷つけたくないから口には出さないけれど、正直無理だろう。
ナハの格闘技のセンスは中々の物だけれど相手が悪すぎる。
「できます、してみます」
断言した。

それだけのやる気があるのだろう。
既に何度か辻堂センパイとやりあってそう断言できるのはすごいことだと思う。
少し応援してやるか。
「この怪我が治ったら久しぶりにあずと少し稽古してみません？」
本気でやるつもりはない。
でも少しばかり強い奴とやらないと練習にならないだろう。
「いいのですか、先輩」
「良いも何も稽古の誘いごときに何重く受け取ってるんっすか」
「・・・・・・では、ありがたくお受けさせていただきます」
ガラじゃないけれど、人の夢の応援をたまにはしてみよう。
最も、それでもナハの夢は達成が難しいものだけれど。
やはりその姿勢はどういうわけか自分にとって眩しい物だった。

「っは!?」

あれ。ここはどこだ。

ナハと別れてからの記憶がない。

「あ、乾さんやっと起きたんだ」

「センパイ。自分寝てたんっすか?」

「・・・・・・覚えてないんだ」

露骨に微妙そうな顔をするセンパイ。

拙い、どうやら自分の記憶が飛んでいるのは何か変な事をしたからっぽい。

深呼吸して頭を冷静にし、思い出すことにする。

確かナハと別れたあと自分はお土産で貰った川神水を手にとった筈。

元々あれはセンパイに飲ませるために欲しかったものだ。

以前長谷センパイのお姉さんに聞いたことだけど、長谷センパイ飲むと強烈にエロくなるらしい。

けどまさか自分が真正面から酒を進めた所で飲んでもらえるとは思えない。

だからこの合法的にあずもセンパイも飲むことのできる川神水を求めたのだけど。

現状の結果を考えるに、自分だけで飲んだのだろうか。

ちらりと自分のテーブルを見ると空の瓶が一本。
明らかにあず一人で一本飲んでた。
対してセンパイのテーブルにはコップもビンもない。
多分センパイが起きる前に自分は味見半分で一人で飲んでみたのだろう。
それで想像以上に美味しかったからつい飲みすぎて酔っ払ったと。
「・・・・・・・ん？」
「ど、どうしたの乾さん」
なんか発端を思い出したら芋蔓式に全部思い出し始めてきた。
確かその後自分は寝ている先輩の両手両足をロープで固定して――――
「思い出したっす！」
その後殆ど逆レイプ紛いなことを仕掛けたのだ。
センパイのパジャマや下着を脱がして、アレを掴んだ記憶もある。
・・・・・・今更になって羞恥心がこみ上げてきた。
「す、すいませんでした。自分酔っ払って大変なことしてしまったみたいっすね」
「いや、うん。気にしないで」
途中お見舞いに来た辻堂センパイにどつかれて気絶した所まで思い出した。
互いに恥ずかしい所を見せてしまったことに気まずい空気が流れる。

「そ、それよりセンパイ。自分が寝てる間に何かあったんですか？」
「どうしてそう思ったの？」
「いえ、何か寝る前と違って凄い機嫌良さそうですから」
両手両足を骨折してからのセンパイはいつもどことなく影があった。
無論最近は大分治ったらしい不良への恐怖心も薄れてきたらしいし、普段のセンパイは明るい。
でも時々何か落ち込んでいる雰囲気があったのだ。
けれど今のセンパイは今までに見たことないほど晴れやかな表情だった。
「あ～、そうだね。ちょっとさっきまで愛さんと外出してね。
多分それでだと思うよ」
ふむ。どうやらその辻堂センパイとの外出中に何かあったらしい。
自分がセンパイの悩みを解決出来なかったことに僅かな不満はある。
けれどそんな嫉妬心はセンパイの心労と比べればゴミみたいなものだ。
「そっすか。何はともあれ元気になったようで何よりっす」
動けないセンパイのベッドに歩み寄って座る。
川神水で酔ったらしいけれど原材料にそもそもアルコールが入っていないため二日酔いの症状はない。

「センパイ、あず寝すぎてもう眠くないっす」
「じゃあ眠くなるまで何かしようか」
こういう我侭に嫌な顔一つせず付き合ってくれる優しさが好きだ。
「それじゃあしばらくお話しましょうよ。
もうすぐセンパイもあずも退院して、もう今みたいに二人きりで夜を過ごせることは無くなるんですから」
幸せというものは失ってから気づくものだ。
これは小説とかでよく使われる言葉だ。
でも、それは必ず当てはまるわけじゃない。
少なくともあずは今この瞬間に幸せを感じている。
そしてこの幸せが少なくともあと三日程度で終わることも知っている。
失うことがわかっているからこそ今この瞬間の幸せを満喫したい。
「そんなことはないよ」
あずの心境を読んだかのようにセンパイは優しい声色で口を開く。
「乾さんが望むのならいつだってウチに泊まりに来てくれていい。
だから俺達が今みたいに二人になれる事がなくなるなんて、そんな事はない」
愛さんや姉ちゃんが許してくれればだけど、と付け足すセンパイ。

その相変わらずさにクスリと笑いがこみ上げる。
「長谷センパイ。センパイは幸せってなんだと思います？」
「いきなりな質問だね」
脈絡のない問いにセンパイは少し悩んでいる。
少し抽象的な質問だったか。
センパイは答えを出せないらしくしばらく本気で悩む。
「じゃああずから答えます」
自分はもう答えを出している。
「あずにとっての幸せは好きな事をしている時っす」
「そりゃまた分かりやすい形だね」
「ええ、ですけどそれは簡単な事じゃないっすよ」
目先だけの幸せを求めていたら後で必ず辛い事が待っている。
今がよければそれでいい。その目先の幸せを求めた考えが最も自分の身を滅ぼすことを学んだ。
「後で辛いことが待ってるからこそ見つかる幸せもあると思うっす」
それが自分の答えだ。
今自分はセンパイが大好きだからひたすらにアプローチしてる。

けれど将来の事を考えればそれは危険なことかもしれない。
リアルかもしれないけれど、このまま自分の思いは空回りし続け
いつか大人になったとき、センパイとの関係は今と同じまま一切の進展がないまま縁が切れる可能性もあるのだ。
勿論結婚などをしていれば多少の喧嘩ていどで縁が切れるわけがない。
しかし自分はセンパイの愛人になろうとしている。
だからこそ縁は薄い。
一度の喧嘩で二度と顔を合わせなくなる可能性すらあるのだ。
今、先輩が好きだから一緒にいるという幸せを満喫している。
だからこそ後に待っているかもしれない辛さから目を背けている。
幸せとはそういう未来の犠牲を払って手に入れるものなのだと思う。
センパイは自分の考えを聞いて何やら頷いた。
「乾さんのその答えで俺も別のを見つけたよ」
「聞かせてもらえます？」
「ああ。けれどその前に少し本題に外れた事を話そう」
もったいぶって教えてくれない。
意地悪だ。

「乾さんはさ、辛いって漢字と幸せって漢字が似ていると思ったことはない？」
どうだろう。
あまり国語は得意ではないためそもそも漢字自体を見ることが少ない。
だから思ったことはないと思う。
しかし言われてみれば似ている。
「実はこの漢字の成り立ちは結構暗いものでね、
幸せって漢字は刑罰用の手枷の形と『逃』という漢字が合わさった形のもの。
そして辛いってのは刑罰用の針の形を示したものなんだ」
なるほど。
「つまり刑罰から逃れるから『幸せ』。刑罰用に針に体を彫られるから『辛い』という成り立ちがある」
「へぇ、それじゃああまり良い言葉じゃない感じがするっすね」
「まあね。でもそんな語源はどうでもいいんだ」
ばっさりと切って捨てる。
今のは完全な余談だったようだ。
「俺にとっての幸せはね。辛い事を乗り越えた先にある何かだと思う」
その何かは場合によるのだろう。

「辛いという文字に一を足せば幸せとなるでしょ。
それは辛い時にもう一踏ん張りすればきっと幸せになるって事だと俺は考える」
随分ロマンチックな考え方だと思う。
しかし、それは自分にとってあまり好きな答えじゃない。
「でも、辛いことに頑張って向き合ったとしても成功するとは限らないっす」
あずの答えは必ず幸せが最初に来る。
けどセンパイのは違う。
必ず来る苦痛を超えてあるかもわからない曖昧な幸せを手に入れるようなものだ。
「そうだね。けど、頑張ってる人はみんな俺のその答えと同じな筈なんだ」
どういうことだろう。
よくわからない。
「夢を追って努力する。辛い事に一踏ん張りして幸せをつかもうとする。
それは同じ事なんだ、勿論両方とも確実に成功する保証なんてどこにもないけれど」
ここでようやくセンパイの言いたいことがわかった。
「本当に要領のいい人は好きな事をしてそれでいてその好きな分野で大成功を納めるだろうね。
けど十人並みな俺は違う。努力して幸せを見つけるしかないんだ」

「じゃあセンパイは今幸せじゃないんっすか？」
少なくともあずの目にはセンパイの日常は輝いて見える。
ちょっと怖いけど凄く格好よくて美人な恋人がいて、友人にも恵まれて
それでいて家族関係も良好だ。
「幸せだよ。でもそれはやっぱり辛さを越えたからこそ手に入れたものだ。
前にも言ったかもしれないけど、俺はもらわれっ子なんだ」
そういえば長谷センパイからは聞いたことないけど噂では聞いたことがあった。
「親に放置されて寺に預けられてね。
一時はその事にやたら繊細になってた事もあった」
まるで今は気にしていないようにセンパイは続きの言葉を口にする。
「でも、そんな過程があったからこそ今の俺がある。
愛さんに会えて、姉ちゃんと家族になって、皆と友達になって
そして乾さんとこんなにも仲良くなれた」
真っ直ぐにあずの目を見て言い切るセンパイ。
不覚にもその言葉にドキっとしてしまった。
「センパイ、少しクサすぎっすよ」
照れ隠しに軽く悪態をつく。

だがセンパイは特に気にした様子もなく少し照れたように笑った。
だが何だろう。
自分の幸せの形を全否定されたというのにどういうわけかそれほど嫌な気にならなかった。
それは何故なのだろう。
いや、何となくだけど心当たりがある。
今日のナハの件だってそうだ。
自分は夢を追いかけるナハを見て眩しくおもった。
ならそれが答えなのだ。
自分は既に考え方が変わりつつあるということだ。
目先の幸せよりも未来の幸せ。
その自分らしくない綺麗事のような答え。
「センパイは相変わらず自分を悩ませてくれますね」
嫌な気分じゃない。
流石センパイだ、いつも自分の考えを正してくれる。
「さて、それじゃあ互いに答えを出したところでこの話題は終わりっす。
次のお題は長谷センパイが出してください」

「はいはい、じゃあ今考えるからちょっと待ってね」
こうして、あずとセンパイは眠くなる時間まで二人で他愛のない会話を楽しんだ。
間違いなくこの瞬間は幸せだった。
今の幸せの代償として未来に辛い事があったとしても、
センパイの言葉通りならそれを乗り越えた先にきっとまた新しい幸せは待っているのだ。
幸せの代償に辛さがくるのでも、辛さを乗り越えた先に幸せがあるのでもない。
自分が今新しく見つけた答えは、幸せと辛さは交互に来るというものだった。
今幸せでもきっと未来には何かしらハプニングが起きる。
そのハプニングを乗り越えた先により大きな幸せがある。
まさに人生は波のようだ。
不良をやめるといって抜け出せていない自分にこれほど合った答えはない。
「センパイ」
「ん、どうしたの？」
「あずは今すっごい幸せっす」
「うん、俺もだよ」

冬の終わり、春の嵐
１９話：腰越マキの憂鬱

「うわあああああああん！
助けて欲しいっすセンパアアアアアイ！」
「うぉっと、どうしたの急に」
新学期が始まって最初の金曜日、授業も終わって家で一息ついていると乾さんがやってきた。
今日は帰るときに愛さんに送ってもらったため、そのまま姉ちゃんが帰ってくるまではウチに愛さんが残っている。
その愛さんが長谷家の来客の対応をしてくれたのだが
「いつにも増して今日はやたらテンションたけぇな」
愛さんが扉を開けると同時に家の中に飛び込んで、真っ直ぐ俺の部屋にダッシュしたらしい乾さん。
俺の顔を見るやいなや即座にベッドに座っている俺に飛びついてきた。
その後ろに愛さんが呆れたような顔をして付いてきている。

「やばいっす！　このままじゃあ自分ダブりかねないっす！」
・・・・・・そりゃあ拙いね。
「どうしてダブりそうなの？」
「これです、恥ずかしいけど長谷センパイになら見られてもいいっす」
「な、何を見せる気だテメェ！」
何やら如何わしい台詞をいうから少し慌てるが、乾さんは特に変なことはせずに学校指定の鞄に手を入れた。
そのままゴソゴソと漁り、中からＡ４用紙を数枚だして俺に押し付ける。
「なに、これ」
「冬休み明けのテスト結果っす」
「ああ、うちもあったなテスト。
まだ結果帰ってきてないけど」
俺は手がこんなだから受けてないけどね。
一応冬休み中に何とか器用にギプスはめられた腕を使って教科書やノートを読んではいたから問題を見ても大体わかった。
多分実際にテストしていれば順位は上から数えたほうが早いぐらいの出来だったはず。

因みに愛さんも今回のテストは結構良かったらしい。
普段から委員長に勉強を見てもらってるから基礎ももう完璧なのだろう。
愛さん記憶力凄くいいし。
で、今乾さんに渡された用紙をみる。
会話の流れを読むに多分悪い出来だったんだろう。
まず一枚目、英語。
由比浜学園のレベルはあまり知らないけど、流石に一年の問題なら俺も解けるくらいだった。
で、その英語の点数は７６点。
用紙には結構な量の丸印があり、ひと目で出来が良いとわかる。
「いい点数じゃない、英語でこの点数って凄い事だよ」
「でしょ、あずも今回は英語は自信あったんっすよー」
じゃあなんでダブる心配があるのか。
よくわからないまま次の用紙をめくる。
次は数学か。
見れば引掛け問題みたいなのが少しあって、結構意地の悪い先生が作ったのだとわかる内容だ。

「数学９６点・・・・・・乾さんってかなり頭いいんだね」
引掛け問題には一つもペケ印がない。
間違えている問題はどれもがケアレスミスしているのが原因だ。
つまりそれさえなければ殆ど百点だっただろう。
「ふふん、あずは英語と数学は受験に出そうだから頑張ってるんっす」
「したたかだなぁお前」
不良なんてやってるから勉強なんて興味ないと思ってたけど意外とやることはやってるらしい。
「こんな良い点数とってるのになんで留年しそうなの？」
素朴な疑問である。
だが乾さんは俺の疑問にものすごい渋い顔をして目を逸らした。
多分次をめくれって事だろう。
無駄口を叩かず次のテストを見る。
教科は国語。
特に言うことはなし、点数は２８点。
・・・・・・うん？
誰にでも苦手な教科はあるってことだろう。

特に何も言わず次のテストを見る。
教科は科学。
ハロゲンって覚えること多いのにテストにでなさそうでヤダナー。
点数は２４点。
あれ？
焦る手つきで次をめくる。
教科は歴史。
点数６点。
「こりゃダブリ確定だな、諦めろ」
横から見てた愛さんがばっさり切り捨てた。
南無三。
「諦められないから長谷センパイに相談しにきたんっすよぅ」
「でもこれ酷過ぎだろ、休み明けのテストだからいいもののこれで期末どうすんだよ」
由比浜の進級システムはしらないけれど、まさか始業式後のテストだけで進級を決定することはないだろう。
でも流石にこれは酷い。
受験のために数学や英語できても進級できなきゃ意味がない。

「センパァイ・・・・・自分どうしましょう～～」
泣きながら訴える乾さん。
その乾さんが見せる事のない弱々しい態度は俺の心を揺さぶるには充分なものだった。
「乾さん、勉強見てあげようか?」

「ほら、誰にだって奥の手ってあるじゃないっすか」
「いいからノート開け」
「自分の場合、このエンピツっす。
回れ鉛筆サイコロ!　って具合で」
「いいからノート開け」
勉強を見てあげることが決定してから、乾さんは一旦自宅に戻って苦手な教科の教科書とノートを持ってきた。
しかしウチに戻ってきた頃には時刻は18時を回っていたため愛さんが手作り料理を作ってくれた。

そのまま腹を満たして勉強会は始まったのだ。
始まったのだが・・・・・・
「この部屋暑いっすねぇ。薄着になるんでセンパイの個人授業を・・・・・・・」
「いいからノート開け。ぶち殺すぞ」
「ひぃ!?」
一向に乾さんは勉強してくれなかった。
それどころかどうにかして逃げようと話題を逸らしたり、俺に色仕掛けしてきたりする。
愛さんがいなければきっと俺は流されていただろう。
「乾さん、勉強会をするっていって喜んでたのになんでいざ始まるとそんなに集中しないのさ」
「それはだって、勉強会といえばその・・・・・合法的にお泊りできそうですし・・・・・」
「アタシもいるからな?」
計算高い子だなぁ。
「乾さん、このままじゃきっと留年しちゃうよ。
いいの？　また一年生のまま一年を過ごすことになっても」
「うう、それは絶対いやっすぅ」

「だったら勉強しないといけないよ」
可哀想だが心を鬼にして強制的に勉強させることにする。
偽善なわけではないが、今は勉強こそが彼女の人生のためになるのだ。
乾さんも俺が真剣に心配していることを理解してくれたのだろう、がっくりと項垂れたあと渋々ノートに目を向けた。
「それじゃあまずは一番ダメだった歴史から行ってみよう」
「う～、歴史とか知らねぇし興味もないっすよ～」
「乾さんの場合得意な英語数学は既に余裕で合格ラインだから苦手克服に挑むのが効率的なんだよ」
英語と数学は普段から家で自習してるのだろう。
だからこそこの勉強会でやる意味は薄い。
「お前は得意教科あるだけマシだろうが、
アタシの時なんて全部駄目だったから全教科片っ端からやる羽目になったんだぞ」
「え、辻堂センパイって勉強できなかったんすか？」
乾さんの質問に愛さんは少し恥ずかしげに答える。
「去年の夏休みまでは補修の常連だよ、今はもう赤点なんて一つもないけど」
「愛さんほんとに頑張ったもんね」

何だかんだで今日だって勉強会に付き合ってくれてるあたり誰かとする勉強に抵抗はなくなったのだろう。

一人の時に勉強しているのかはわからないけど。

「へぇ、じゃああず以下だったんっすね」

「あぁ!?　今は普通に勉強できるっつってんだろ！　テメェと一緒にすんじゃねえ！」

「ひいいいぃ！　じょ、冗談っすよぅ！」

「愛さんストップストップ」

乾さんの迂闊な一言でブチ切れた愛さんを慌ててなだめる。

どう考えても勉強できる空気になれない。

前途多難だ。

それから一時間後、ようやくマシになって気がする。

「う～・・・・・なんで科学って科学なのに計算式がやたら多いんっすかぁ

大人しくビーカーとかで液体混ぜて爆発してろって感じっす」

最初に一番苦手な教科をやろうとしたのが乗り気でない原因と判断し、歴史ではなく科学からする事にした。
そのため歴史をしてた時よりは大分勉強してくれるのだが
「回答を見てもなんでこうなるのか理解できない。
センパーイ、ヘルプお願いします」
「はいはい、どんな問題かな」
彼女の詰まった問題はいわゆる液体などの質量の計算だった。
確かにこれは科学で最初に躓く所だ。
「これはね、この酢酸の質量を上記の仮定に当てはめてね。
ほら、そうしたら計算のつじつまがあうでしょ」
「あ、ホントだ。どもっすセンパイ」
納得がいったらしい。
よかったと思い俺は自分の資料に再び目を向ける。

そして数分後。
「あうぅ、ぜんっぜんわからねぇっす」
再び唸る乾さん。

「どれ、どこだよ。見せてみろ」
次は愛さんが教える番らしい。
俺は資料に目を通したまま話だけ聞く。
「ここっす。何か公式あるっぽいっすけど全然覚えてないし、解説もない問題なんでどうしようもないんですよぅ」
「情けねえ声だすなよ、ってあれ」
愛さんが乾さんの問題を見た瞬間首をかしげた。
「あ～、駄目だ。これアタシじゃわかんねぇ」
即効諦めた愛さん。
一体どうしたというのだ。
愛さんの記憶の良さなら一年の問題くらい余裕だと思うのだが。
「俺にも見せてくれるかな」
「どぞっす」
教科書を見せてくれる乾さん。
それをマジマジとみるが、そこでどうして愛さんが即効さじを投げたか理解した。
「これってウチの先生が飛ばした範囲だよね愛さん」
「ああ。習ってないしテストにも出ないからこの範囲は全然勉強してねぇよ」

今乾さんが詰まっている所はウチの学園では覚えなくていい範囲として省略された範囲だった。
そのため俺や愛さんもそこを復習することなくわからないままだ。
ヴァンや委員長ならそれでも勉強してて覚えてそうだけど、少なくとも俺らじゃわからない。
「えぇ～、じゃあ解ける人いないんじゃないっすか」
「うちの姉ちゃんなら解けるだろうけど、まだ学園だしなぁ」
姉ちゃんなら酒あおりながら余裕でわかりやすく教えてくれそうだ。
だがこの場にいないためこの問題を解ける人物はいない。
どうしたものやら。
「なっさけねーなお前ら。で、どこの問題が解けないんだよ」
「ここっすよぅ。もう何が何やらって感じっす」
「ふーん、これはここをこうすりゃ解けるんじゃねえの」
「え、あ。ホントだ凄いっすね皆殺しセンパイ・・・・・・あれ？」
突然俺の部屋にマキさんが現れた。
それも最上級生らしく乾さんに勉強を教えながら格好よく登場だ。
「よ、ダイ。久しぶりじゃん。元気にしてたって・・・・・・そんな風には見えねぇな」

「久しぶりマキさん。しばらく見なかったけどどうしてたんですか」
俺が最後にマキさんを見たのはこのケガをする前日までだ。
そこから今日まで一度も彼女の顔を見てなかった。
あまりに不自然に来なくなったから心配してたんだけれど
「年末年始はばあちゃんが帰ってこいってうるさくってさ。
実家は死ぬほど嫌いだけど仕方なく戻ってたんだよ」
へぇ。
マキさんの実家がどこなのかは知らないけどウチに寄れないくらい遠い所みたいだ。
何はともあれ心配していたマキさんの顔を見れて安心する。
「何だダイ。もしかして私の心配してたのか？」
「うん。だって何も言わず急に来なくなるんだから心配するに決まってるよ」
「ははっ、可愛いこというじゃんかお前」
何やら嬉しそうに俺の頭をガシガシと撫でるマキさん。
「で、何しに来たんだよ腰越」
愛さんが心底鬱陶しそうに呟く。
最近はマキさんの方は愛さんに絡んだりすることはあまりしなくなった。
しかし逆に愛さんの方はというとやたらマキさんに喧嘩をふっかける所が目に付く。

「皆殺しセンパイ、ここはどうやって解くんすかー？」
「あぁ？　あぁ、ここはこの酢酸の濃度をだな――――」
俺と愛さんはその二人の姿を見て沈黙する。
愛さんは何やらマキさんに言いたいことがあるようだ。
いや、何が言いたいかは俺もわかるんだけど
「腰越、お前って普通に勉強できんだな」
「失礼な奴だなお前」
「いや、でもお前って普通に勉強嫌いだと思ってたんだけど」
「・・・・・今でも嫌いだっつぅの」
意味深にマキさんは言葉を濁す。
だがその表情はどうもいつものマキさんらしくない。
「去年の夏までは私もそこのお前・・・・・えぇと、誰だっけ」
「乾梓っす。あずにゃんでいいっすよ」
「あぁ、乾みたいに全然できなかったぜ」
「まじっすか、ってかあずにゃんって呼んでくださいよぅ」
「やだよ気持ちわりぃ」
それがこの半年で著しく学力アップしたと。

まじでか。どういう勉強したらここまで頭良くなるんだろう。
「因みにこの問題とか解けます？」
「ん、見せてみ」
とびっきり難しい数学の問題を出す。
ぶっちゃけ俺が解けないのでダメ元で聞いてみた。
だがマキさんは少し首を傾けたあと、スラスラと俺のノートに式を書いて、ものの二分で回答をだした。
「ほれ、回答してみろよ」
ノートを突き出してきたマキさん。
それを受け取って回答のページを見て答え合わせをしてみる。
「か、完璧だ・・・・・・」
文句のつけようのない回答だった。
「腰越、テメェそんなキャラじゃねえだろ」
「どういう意味だゴラァ」
「あぁ？　やんのかオラァ！」
「うっさいっすねぇ」
馬鹿な。

マキさんを馬鹿にするわけじゃないけどこんなのマキさんのキャラじゃない。
こんな優等生みたいなマキさんなんて。
「マキさん、この半年でどういう勉強の仕方したの?」
俺の疑問にマキさんは少し嫌そうな顔をする。
「お前気づいてなかったの?」
「え、何がですか?」
「・・・・・・呆れた」
何か俺はバカみたいな事を言ったのか。
だが覚えがない。
「お前の姉ちゃんとかリョウに時々勉強見てもらってたんだよ」
気づかなかった。
そう言えば時々姉ちゃんの部屋で姉ちゃんが何か話してるなーとか、
誰か別の女性の声がするなーとは思っていたが、まさかマキさんだったとは。
二人がそもそも一緒にいるところが想像できないから全く気づかなかった。
「何で腰越が勉強見てもらうんだよ、受験でもすんのか?」
「わりぃか、その通りだよ」
「似合わないっすねぇ。皆殺しセンパイなら卒業したら旅とかしそうなイメージあっ

たっす」
　マキさんが受験。
　全くイメージと合わない。
「因みにどこの大学受けるんですか？」
「・・・・・・ここだよ」
　そういって俺の本棚を指差す。
　その指差した方向には俺の第一志望である大学の赤本が。
「へぇ、何でここに選んだんですか？」
「え、あ～」
　またもや言葉を濁す。
　何か言いにくいことでもあるのだろうか。
「うん、内緒だ。教えねーよ」
　結局秘密になったらしい。
　俺も愛さんも余計に気になる。
　だが本人が教えてくれないならいくら聞いたところで意味がないし、失礼だろう。
「でも偶然ですね。
　まさか俺の第一志望の所と同じ所を受験するなんて」

もしかしたら再来年は俺と愛さんとマキさんが同じキャンパスで勉強をするかもしれない。

それを考えると凄く楽しそうだ。

「偶然なワケあるかっつーの・・・・・・・」

「ん、何か言いました？」

「いーや別に」

プイっとそっぽを向く。

どうやら少しヘソを曲げたようだ。

マキさんの機嫌を損ねたのは困ったが、それでも俺は嬉しかった。

「マキさんが卒業しても、俺達が受かればまた会うことができるんですね」

「は？」

俺の本音を聞いてマキさんは少し困惑している。

「だって、俺はマキさんの実家も本当の苗字もしらない。

マキさんがここに来なければ俺の方からマキさんと顔を合わせる手段がないんです」

だからこそ、マキさんとの縁は殆ど綱渡りなのだ。

「だからマキさんが俺と同じ大学を受けるって聞いて凄く嬉しいです」

「アタシは最悪だけどな」

「ちょ、愛さん！」
流石に怒った俺は愛さんを叱る。
愛さんも悪いと思ったのか、少し申し訳なさそうな顔をして顔を伏せる。
それでもマキさんに謝らないあたり本当に仲が悪いのだろう。
「ごめんマキさん。愛さんも別に悪気があって言ったわけじゃ――――」
無理のある言い訳をしようとした瞬間、言葉を飲んだ。
理由は単純だ。
マキさんが今まで見たことないほど弱々しい顔をしていたからだ。
「マ、マキさん？」
「・・・・・・・」
声をかけても返事がない。
何か考え事をしているのか、目を伏せてこちらを見てくれない。
「なぁダイ」
目を合わせないままマキさんはつぶやくように俺を呼ぶ。
「お前はまだ、私とダイの本当の縁を思い出せないのか？」
「え？」
聞き逃してはいない。

ただその言葉の意味が抽象的すぎて理解できないのだ。
俺とマキさんの本当の縁。
なんのことだ？
「いや、何でもない。
悪いな、変な事いってよ」
何故か俺の方が謝るべきな気がする。
明らかに彼女のさっきの言葉を軽く受け止めてはいけない、そんな気がしてならない。
「さっきもリョウのところで勉強してきたから眠いんだよな、
ダイ、ちょっとベッド借りるぞ」
そう言ってマキさんは俺のベッドに仰向けで転がって、そのまま数秒で眠りについた。
一分後にはマキさんの安らかな寝息が聞こえてくる。
「マジで寝ちまったのかよ」
「皆殺しセンパイのこんな無防備なところ初めて見たっす。
長谷センパイにだけ態度違うって噂マジだったんっすね」
乾さんがペンを片手に興味深そうにしている。

因みにノートを見れば結構真面目に勉強してたらしく、丁寧に公式などを書き写していた。
「でも、マキさんのさっき言ってた事ってどういうことだろう」
考える。
けれども当然のように答えは出ない。
完全に八方塞がりだ。
だけど、この事は絶対に思い出さないといけない気がしてならない。
「・・・・・・なぁ大」
一人で考えていると、控えめな感じで愛さんが口を開いた。
「お前ってアルバムとか持ってないの？」
「アルバム、そう言えば姉ちゃんが持ってたような」
最近の写真とかは俺も持っているけど、まだ俺の苗字が長谷出なかった頃の写真は持ってない。
けれど姉ちゃんは持っている筈。
前によい子さんや俺と一緒に写っている写真を懐かしげに見ていた記憶がある。
「縁とか語るくらいなんだから昔にあってるとかあるかもな。
アルバム見たらもしかして一緒に映ってるのがあるんじゃないのか」

昔にマキさんに会っている・・・・・・
はて、前にも愛さんに言ったけどマキさんほど濃い人なら忘れる筈がないんだけど。
それでも姉ちゃんが帰ってきたら見てみよう。

「辻堂、お前ダイの姉ちゃんのアルバムにこれと同じのがあるって知ってて話したろ」
大と梓が夜食を買いに近くのコンビニへ向かったとき、今まで寝ていたはずのマキがベッドから起きた。
愛はマキが狸寝入りしている事に気付いていたのか、特になんでもないように視線すら送らない。
「知ってて教えた。悪いか?」
逆に問い詰めるようにマキに言う。
愛は気づいていたのだ。

以前冴子に写真を貰うと気に愛はそのアルバムを一通り見た。
そのアルバムには確かにあった、以前マキが江ノ島へ続く橋で見ていたあの写真と同じものが。
冴子、大、よい子。そしてマキが映っているソレが。
「どういうつもりだ、こんなのを見せたところで誰の特にもならない。むしろダイを悩ませるしお前にも都合の悪いものだろうが」
そういってポケットから一枚の写真を撮り出す。
その四人が写っている集合写真だ。
「気に食わねぇんだよ」
愛はその写真を忌々しげに睨みつけて吐き捨てる。
「テメェはアタシより先に大と出会っていた。
それぐらいでアタシや大の絆にヒビが入ると思ってんのか?」
愛のその見当違いな言葉にマキは全てを知られていないことに安堵する。
だが、だからこそ安堵と同時に愛に苛立ちも湧いた。
「辻堂、お前は子供の頃に誰かと交わした約束って覚えてるか?」
マキのその問いに愛は首をかしげる。
「少しは覚えてる、けどそれがどうした」

記憶力のいい愛だからこそ一部だけだとしても約束事を覚えているのもある。
勿論大半はもう忘れたけれど。
「もしお前が本当に好きな奴が子供の頃に違う女と将来の約束をしているとしたらどうする?」
「・・・・・・なに?」
明らかに大の事だった。
愛はその言葉の意味を理解し、けれど信じられないのか聞き返す。
「・・・・・・・」
マキはそれ以上何も語らない。
本人もあまり言いたくないのだ。
だが愛はそうはいかない。
「腰越、まさかガキの頃に大と?」
好き合っていたのか? と聞くことは出来なかった。
そうだとしたら愛にとって何よりも辛い事なのだ。
順風満帆な大との交際の中に落ちた爆弾。
今更過去の恋人、もしくは将来を約束した相手
そんなのが現れるとは思わなかった。

「安心しな、別に私から約束を思い出させることはしないし
約束を盾に今更ダイやお前に割り込む気なんてねーよ。みっともないし」
それだけ言ってもう一度ベッドに寝転がる。
今度こそ寝る気なのだろう。
「ダイの隣には辻堂、お前がいる。
だったらこの勝負は私の負けだったって事だ」
らしくなく。
本当にらしくなくマキは諦めていた。
「それでいいのか」
愛はそのマキに食いかかる。
「そんな事で諦められる気持ちなのか?」
愛は問いかける。
しかしマキは愛に背中を向けたまま何も反応をしない。
「今日いた梓の事をお前はどこまで知ってる?
アイツがどれほど悩んで、どんな過程を踏んで今ここで大の隣に居ようとしてるのかわかってるのか」
マキは梓のことを何も知らない。

実際に気にはなっていたのだ。
自分が実家に帰っているうちに大は再び大怪我をしていた。
そして大と波長の合うハズのなかった梓が明らかに大になついているその姿。
「今のお前は梓より遥か下だ。
アイツは乗り遅れたにもかかわらず自分の気持ちを貫いた」
既に自分が隣にいるのにそれでも構わないと言い切り、その気持ちを貫いている。
「アタシからすれば今のテメェは間違いなく梓より格下だ」
愛がそう言った瞬間、マキは僅かに身をよじらせて上を向いた。
そして横目で愛の顔を見て、小さくため息を吐いた。
「だから悩んでるんだろうが、諦めきれてたら受験なんて面倒な事するかよ」
何時までも大への気持ちが褪せないからこそ受験という進路を選んだ。
大は言った、マキと縁が切れないで良かったと。
けれど実質マキが大とつながりを残すために故意にそうしたのだ。
愛はそれに気づいて黙る。
「今度こそ寝るぞ、次起こすような真似したらこの家で大暴れするからな」
愛はマキの真意を確かめられない、
当然だ。マキ自身も自分の気持ちを把握できていないのだから。

結局、大と梓が帰ってくるまで愛は勉強が進まなかったしマキも寝付くことは無かった。

「あぁ～、知恵熱でたっぽいっす」

梓は一人長谷家の庭で背伸びする。

時刻は深夜二時。

既に愛や大は勉強疲れでコタツの中で寝落ちしている。

ただ、途中まで寝ていたマキだけは起きるとともに何処かへ出て行ったため所在がわからない。

「ん～～～」

大きく背伸びする。

外気は凄まじい寒さだけれども、火照った頭には丁度いい。

久々にここまで集中して勉強した気がする。

始める前や取り掛かった序盤は全く乗り気ではなかったのだが、

一度集中し始めると中々実のある勉強が出来た。
このペースで毎週金曜日、土曜日、日曜日に大の家に入り浸ったら普通にいい点が取れそうな気すらする。
「おい、お前」
「はい？」
一人かと思ったらどうやら先客がいたらしい。
梓の死角となっている所にはマキの姿があった。
どうやら先にここで休んでいたらしい。
「あ、サーセンっす。お邪魔でしたらどっか行きましょうか？」
「別にいいよ。それよりお前に聞きたいことがある」
マキは相変わらずのぶっきらぼうな顔で梓に近づく。
流石に腕をへし折ったり散々痛めつけられた相手に梓は若干気圧されが、マキはそんなのは素知らぬ顔だ。
「ダイに告白したんだってな」
「は？」
言葉に詰まる。
まさかそんな事を聞かれるとは思わなかった。

「え、ええ。そうっすけど」
「そうか。で、ダイの答えはどうだったんだ」
「そんな事を何で皆殺しセンパイに言う必要があるんっすか？」
別に隠す気はないが、はっきり言えば梓にとってマキは好きな相手ではない。
ケガを負わされた相手というのもあるけれど、単純に恋敵でもあるのだ。
愛とは殴り合って本音をぶつけ合って今では驚く程打ち解けている。
けれどマキとは分かり合える気がしない。
マキはその刺々しい梓の返答に僅かに片眉を上げる。
マキは触れれば爆発するような性格というのが周りの評価だ。
梓は切れさせたかと慌てて身構える。
だがマキは別に梓に襲いかかることはせず、困ったように腕を組んだ。
「別に言いたくなきゃ言わなくていいよ」
そのマキらしくない物分りのいい対応に梓は更に違和感を感じる。
明らかに以前までのマキじゃない。
「だけどさ、ダイの隣にはもう辻堂がいるんだ。
テメェの居場所なんてないのに何で告白したんだ？」
今度は梓の片眉が上がった。

「うっせぇんだよ。あずはセンパイが好きだから告白したんっすよ。
隣に辻堂センパイがいようがいまいが関係ないでしょう」
マキの問いは梓にとって最も触れて欲しくない部分に触れた。
そんなことは百も承知なのだ。
けれど割り切れない部分である。
だからこそそこを指摘されると過敏に反応してしまう。
「ふーん、いいじゃん。尊敬するぜお前」
「はぁ？」
今度こそマキが切れるかと梓は思ったが、やはり爆発しない。
それどころか初めて梓を認めたような事を口にする。
それに梓は驚いて言葉も出ない。
「そうやって自分のしたい事を貫いてるお前は嫌いじゃない」
マキはそう言って梓に背を向けて長谷家の玄関に向かいノブに手をかける。
「少なくとも前までカツアゲみてーな腐った真似してた頃より百倍格好いいんじゃねーの」
マキはそのまま長谷家の扉をくぐり、再び中に入っていった。
残された梓は結局驚かされたばかりでしばらく立ち尽くした。

「あれって、本当に皆殺しセンパイっすか?」
おかしい。
違和感がある。
あの目を合わせれば問答無用で殴り殺されると言われる程狂犬の腰越マキがどうしてこうもおとなしいのか。
何度挑発しても乗らないし、それどころか挑発する自分が子供に思えてしまうほど大人な対応をされる。
あれは本当に皆殺しのマキの姿なのだろうか。
梓は釈然としないものを感じながら考え続けた。

「んー、何かだるい」
大きく背伸びをする。
どうやら眠っていたようだ。
コタツの中で寝たものだから体中がこってる上に妙にしんどい。

さて、みんなはどうしているのかと見回す。
まず目に付いたのは愛さん。
どうやら俺と同じくこたつで寝落ちしたらしい。
俺と反対側の位置で横向きに寝ていた。
その普段の凛々しい顔つきとは違う無防備な穏やかな寝顔に微笑ましいものを感じた。
次に目に入ったのは乾さん。
彼女は俺のベッドで丸くなって寝ていた。
うん、こたつで寝るより余程健康的で素晴らしい。
「あれ、マキさんは？」
そういえばマキさんの姿だけ見えない。
どこへ行ったのかすら想像できない。
まぁアウトローな人だからもしかしたら俺達が寝ているのを見てまた一人でどこか別の所に行ったのかもしれない。
探すのを諦めた。
その時
「わっ！」

「うおわ!?」
いきなり炬燵の中からマキさんが俺にかぶさるように出てきた。
完全に油断していた俺は派手にびびって後ろにのけぞる。
そんな俺を見て作戦成功したのだろうマキさんは楽しそうに笑った。
「・・・・・・もしかして俺が起きるまでずっとコタツの中に隠れてたの?」
「んなワケねぇだろ。お前が起きたのを見計らってから隠れたんだっつぅの」
「そんな子供みたいな」
いや、元々マキさんは子供っぽい人ではあるけど。
「ところでマキさん、近いです」
殆どマキさんが俺のマウントをとっている感じだ。
ここで愛さんがおきたら間違いなくマキさんが俺を押し倒していると思うだろう。
実際そうなんだけど。
恐る恐る愛さんの姿を確認する。
「ん～・・・・・・大い・・・・・・・」
見れば今のでは起きずに、まだ寝ている。
愛さん、夢の中まで俺の事を。
嬉しい。

「落とし前つけろやボケェ・・・・・・」
どんな夢みてるんだろうね。
「相変わらずお前の匂いってイイよな、落ち着くっていうか」
「ちょ、マキさん」
身動きの取れない俺にかぶさったマキさんはそのまま胸に顔を押し当ててクンクンと犬のように匂いを嗅ぐ。
くすぐったいものを感じながら、俺の意識は別のところに集中した。
マキさんのふたご山が俺のマイサンにあたっている。
「やめ、これヤバイって」
「何がだよ?」
マキさんは本当に気づいていないらしく俺の胸から上目遣いでこちらをみる。
その端整な顔と強烈なスタイルに頭がクラクラする。
拙い、寝起きでこんな事をされたら俺はもう。
「・・・・・おいダイ、何かあたってるぞ」
「あててんのよ」
「うわぁ、ドン引きだ」
当てさせた本人が何を言うか。

「ほら、そろそろ離れないと俺だって男なんですから狼になっちゃいますよ」
下の起立した愚直なマイサンを既に隠す気もない俺はマキさんに告げる。
離れてくれと言って離れないなら逆に北風と太陽方式に変更だ。
だがマキさんは俺のその言葉を聞いても離れてくれず、むしろ大きな胸を余計に押し付けてきた。
ちょ、まじやばいって。
「ダイが狼ってタマかよ。どちらかというと食われる側の羊だろうが」
「ひどい」
男の矜持をスレッジハンマーでフルスイング破壊されたような感じだ。
盛大に傷つく。
「それに、そんな怪我じゃそんなこと出来ねーだろ」
まあそうなんだけど。
今の俺なら幼稚園児にすら一方的に叩きのめされる自信がある。
マキさんは穏やかに笑って、しばらく俺の胸に顔をうずめ続けた。
しかしそれも長くはなく、数分くらいだ。
「なぁダイ」
「はいなんでしょう」

「私を元気にしてみろ」
いきなりな無茶振りだ。
どうしたものかと考える。
「そういえばマキさん昨日今日は元気なかったですよね」
最初にウチに来て乾さんに勉強を教えた時からずっと思っていたことだ。
何があったのかはわからないけど気にはなっていた。
「やっぱそう思うか？」
「はい、いつものマキさんらしくないっていうか」
「いつもの私ってどんなだよ」
そうだなぁ。
「気に入らない奴は鉄拳制裁、お前のものは俺のもので俺のものも俺のもの。
天上天下唯我独尊の世紀末覇者ってかんじで」
「何で私がジャイアニズム唱えてるんだよ」
それでいて
「でもどこかマキさんは常識的な所もあって、一緒にいて安心するというか頼りがいがあるというか」
「随分私の事を見てんだな」

「そりゃマキさんって俺の中で強烈な存在ですし」
「褒め言葉として受け取っておくよ」
実際褒め言葉のつもりで言ったのだけど。
若干悪いニュアンスも混じってしまったようだ。
けれど俺がマキさんを好意的に見ているのは確実だ。
「マキさんは他人には思えないんです。
だからいつだって何かしてあげたいし、何かあれば心配します」
この感情をなんと言えばいいのか語録の少ない自分には言葉にできないけれど。
「俺にとってマキさんは大切な人ですよ、それは確かです」
相変わらず胸に顔をおいているマキさんの目を見てそう言う。
それをマキさんは同じくまっすぐの目で受け止めた。
「そっか」
納得してくれたのだろう、何やら嬉しそうな顔をして俺の胸から僅かに離れた。
そして顔の位置を俺の胸側から俺の顔の方に移動。
目の前にマキさんの顔が来た。
「ありがとよ、おかげで元気になった」
「どういたしまして」

なにやら面と向かって礼を言われるとムズ痒い。
それがマキさんとなると更に増す。
「それじゃあご褒美をやろう」
俺の頭をガシっと掴む。
あれ、この流れってまさか。
「ちょ、それは駄目です」
「うっせぇ、私がしたいんだから駄目じゃない」
「そんな」
抵抗できない俺に向かって唇を徐々に近づける。
やばい、まじでチューする五秒前だ。
「お、俺まだ起きて歯を磨いてません！」
「私は気にしない」
「ああん男らしい！」
これはもうダメかもわからんね。
殆ど諦める。
「それじゃあダイ・・・・・・」
「あ、う・・・・・・」

マキさんの綺麗なピンク色の唇が俺の唇と合わさるその瞬間
「何をやってんだ」
「ん？」
「ちっ、起きやがったか。空気読めない奴だな」
俺の対面側から声がかかった。
マキさんは舌打ちをして起き上がる。
「腰越テメェ、今大にキスしようとしてたな。殺されてぇのか」
「知るかボケ、殺せるもんならやってみろよ」
凄まじい殺意を出しながら立ち上がる愛さん。
それに同等の殺気で相殺するマキさん。
なんだろう、何か今のマキさんは以前の姿と同じものだった。
昨日今日の元気ないマキさんじゃない。
「表出ろ、今日こそテメェのその傲慢な態度を文字通り打ち砕いてやる」
「はっ、言うじゃん。吠え面のかかし甲斐があるってもんだ」
互いに至近距離でメンチ切りながら外に出て行った。
どこで喧嘩する気なんだろう。
うちの庭でやられると近所迷惑な上に長谷家が崩壊する恐れがあるんだけど。

「行っちゃったっすね、お二人共」
「起きてたんだ」
愛さんとマキさんが出て行ったのと同じタイミングで乾さんが起きた。
「ええ、皆殺しセンパイが長谷センパイを驚かしたあたりから」
「最初からなんだね」
「長谷センパイが押しに弱いってのは良くわかったす」
若干乾さんも怒ってるらしい。
少しすねた顔でベッドから起きて今で寝転がっている俺の隣にすわる。
そしてそのままマキさんと同じように俺の顔を掴んで。
「んむ」
「んん～!?」
流れるような動作でキスされた。
「ふふ、朝のキスってのもいいっすねー」
「・・・・・・」
唇に指を当てながらうっとりとした顔で呟く。
まじで愛さんがいたら俺も乾さんも殺されていたと思う。
「で、センパイ。さすがっすね」

「何がかな？」
「何がって、皆殺しセンパイっすよ」
何を言っているのかよくわからない。
「まさかあんなに簡単に元気出させるなんて、センパイ凄いっす」
ああ、そのことか。
「たまたま相性が良いからね。一緒にいると俺もマキさんに元気づけられる事多いし」
「相性っすか」
そう相性だ。
一緒にいると妙に気があって精神が休まる感じ。
マキさんと一緒にいるときは沈黙になっても空気は嫌なものにはならないし、意見が合わなかったとしてもそれが原因で衝突することもない。
ウマが合うってのはこのことだと思う。
「何にせよマキさんに元気が出てよかった」
落ち込んでいるマキさんなんて滅多に見ないけれど、見たいものじゃない。
力になれてよかった。
「じ、自分と長谷センパイの相性はどうなんでしょう――――」
『うおらあああああぁぁぁぁぁぁぁ！』

『せぁりゃあああああああああああ！』

乾さんが何か言おうとしていたけど外から聞こえる声に消し飛ばされた。

しかも爆音が街中に響く。

今ので絶対に近所の人飛び起きただろうな。

後で謝って回らないと。

「乾さん、二人を止められる？」

「無理っす、また病院送りにはなりたくないです」

「だよね、じゃあ諦めよう」

きっと二人ならこの家を壊すことはないだろうし、何より今は眠い。

二度寝したいのだ。

「じゃあ俺は二度寝するね」

それだけ言って乾さんがさっきまで寝ていた俺のベッドに横になる。

乾さんの甘酸っぱい香りが残っているが、眠気に支配された頭ではそれに意識する余裕はない。

俺はそのまま眠りについた。

余談だが、俺が寝たあと乾さんが再び俺のベッドに潜り込み

喧嘩が終わったあとの二人はそれを見て一悶着起こって一戦やらかしたらしい。
俺が次目覚めたあとは三人ともボロボロになっていた。
乾さんに至っては酷い目にあったらしくワンワン泣いていた。
女性三人揃うと姦しいとはよく聞くが、まさかここまでとは思ってもみなかったよ。
ただ、それでもこの賑やかさは俺にとって心地のいいものだった。

２０話：アットホームな奴ら

「ででんでんでん、でんでんでん！」
乾梓は現在、長谷大宅にて一人でいた。
大のベッドに腰掛けてご機嫌な様子で足をプラプラさせながら鼻歌を唄う。
何やら未来からアイルビーバックしてきそうなメロディだ。
何故彼女が一人でここにいるのか。
それはある理由があった。
本日は一月の二十二日。
平日の火曜日なのだが、つまりただの平日なのだが
梓は授業どころか学校自体を休んでいた。
相応の理由はある。
「へっくし！　うぅ、ティッシュティッシュ」
風邪を引いたのだ。
最近流行っているインフルエンザやノロウィルスというほど厄介なものではなく
ただの不摂生が祟って感染した一般的な風邪だ。

今梓に出ている症状としては鼻詰まり、発熱、喉の痛みなどだろうか。
因みにこの風邪は既に二日目である。
「もうお昼時っすかぁ」
先日、風邪を引いて一人で自分の部屋にいたのだが
病気をひいた時の特有の心細さに襲われた梓は僅かに遠慮しながらも大に電話した。
別に電話自体に内容はなかった。
ただ単に人の声を聴きたかったのだ。
だが世話焼きな大は梓を心配し、一人にするのも可哀想なのでこっちに招待した。
一応現在は大も冴子も学園にいるが、その日の朝は大と冴子が直々に車で迎えに来て長谷家に連行された。
そのまま両腕と両足がある程度完治して、ギプスをとった大が栄養たっぷりの雑炊を作り置きしている。
冷蔵庫にもポクエリアスといった風邪や熱を出している時に吸収効率の良い飲み物がたくさんだ。
前日に大と冴子がコンビニで買い置きしておいたらしい。
余りの長谷家の優しさに梓は逆に困るくらいだった。
まさか看病を催促したつもりなどはない。

「・・・・・・せめて掃除くらいしといたほうがいいかな」
その為僅かに居心地の悪いものはある。
けれどそれ以上に大や冴子が自分を気にしていてくれる現状が嬉しかった。
ただ、それでも恩は恩だ。
何かで返したい。
取り敢えずまだキッチンの鍋に残っている雑炊を食べて、その後恩返しに家事でもしておこうかと梓は腰を上げた。

「何で皆殺しセンパイがここにいるんっすか」
「だって暇だもん」
ふらつく足取りで階段を下りて、リビングに向かったらそこには既に腰越マキの姿があった。
まるで家主のように普段は大が座っているチェアに腰掛けるその姿はふてぶてしい。
「それに今日はダイに頼まれてここにいるんだ」
「何を頼まれたのか聞かせてほしいっす」

確かマキは前の日曜日にセンター試験があったはず。
そして学校自体は既に来ても来なくてもいい自習日程になっているためマキは時間を持て余していた。
とはいえ大学の本試験はまだなため、勉強はしなくてはならないのだが。
「お前の面倒見るように頼まれたんだよ。
感謝しろ、この私が手厚く看病してやる」
「うわあぁぁぁぁぁぁ！　あんまりだぁぁぁぁぁ!!」
一瞬で絶望する梓。
「はっ？　まさか!?」
嫌な予感がして慌ててキッチンに向かう。
そして祈りながらそこにある鍋の蓋を取ると
「にゃー!?　やっぱりない!?」
大が自分のために作ってくれた愛情たっぷりな雑炊はすっからかんだった。
まだ一口も食べてないのに。
「それ美味かったぜ。今度またダイに作ってもらおっと」
「これはあずのだったんですよ！
なに全部食べてくれやがるんっすか！」

「うっせぇなぁ。別に良いだろ食欲ないみたいだし」
そりゃあ風邪をひいているからあまりものを食べたいとは思わない。
思わないけれどこれは酷過ぎだった。
梓は余りの不条理さに鍋を抱えて泣いた。
それを見たマキは少し申し訳なさそうにする。
「悪かったよ、私が別の作ってやるから泣くなって」
「お断りします、皆殺しセンパイがまともなの作れるとは思えないっす」
「失礼な奴だな君は」
とはいえ悪いことをした自覚はある。
そのためマキは梓の失言を聞き流しながら長谷家のキッチンを確認した。
「お、道具一式あるじゃん。なんか見たことない調理器具も沢山あるし
このウチすげぇな」
棚を見れば何に使うのかわからない道具も沢山ある。
それらは無視し、マキは目的の調理器具を取り出した。
「伸ばし棒なんて取り出して何作るんですか?」
「病人でも食えるものだよ。少し時間かかるからお前は寝てろ。
完成したら持って行ってやる」

そう言ってマキはしっしと手をヒラヒラさせて梓に出て行くように促した。
梓も少し嫌な予感がするものの言われた通りにリビングをあとにする。
二階から一階に降りるだけで結構疲れる。
一階から二階にあがれば更に疲れるだろう。
大の部屋に戻った梓は倒れるようにベッドに転がり込んだ。
「あふぅ、だるいっすぅ」
明らかに体力が落ちている。
一度ベッドに倒れたら何やら眠気まで出てきた。
「ん～・・・・・・長谷センパイの匂い～・・・・・・・」
何やらゆっくりと意識も遠くなってきた。
そのまま梓はその眠気に逆らわず、瞼を閉じた。

熱い。
全身から気持ち悪い汗が出ているのがわかる。

寝付いたものの少ししたらゾクゾクとした寒気と、寒いのに止まらない汗が出だした。

この眠いのに最悪の寝心地が風邪の特徴だ。

余りの気分の悪さにゆっくりと瞼が開く。

そのまま半分寝ている頭で周りを見渡す。

「まだセンパイは帰ってないか」

目が覚めた時に近くに誰もいないのは慣れている。

元々自分の家族とは仲が悪いためむしろ一人の方が心地良い。

けれど今は違った。

無性に人が恋しい。

得体の知れない焦燥感に駆られて起き上がると自分の額から何か落ちた。

「濡れタオル？」

手にとってみるとひんやりとして気持ち良い。

どうやら交換したばかりなのだろう、まだ温くなっていない。

だれがこれを置いてくれたのか。

答えは簡単だ、マキしかいない。

まさか彼女がそんな事を自分にしてくれるとは思わなかった。

何やら温かい感情を抱く。
その時、不意に大の部屋の扉が開いた。
勿論あけたのはマキだ。
氷を入れた桶を持って入ってきたマキは起きている梓を確認する。
「やっと起きたか、メシできてんぞ。温め直してくるからちょっと待ってろ」
そう言ってマキは桶を床に置いたあと再び階段を降りていった。
そして数分後、マキは再び大の部屋に戻ってきた。
何を作ってきたのか梓は疑問げにマキの持ってきたトレーを見る。
「うどんっすか」
「ああ、味は保証するから冷める前にさっさと食え」
意外だった。
もっと地獄の釜みたいなものがでるのかと危惧していたのだが
蓋を開けてみればそこには鰹ダシの香りがする美味しそうなうどん。
ごくりと生唾を飲む。
遠慮する理由はない。
これは自分のために作ってくれたものだ。
梓は意を決して割り箸を片手に丼を掴む。

そのままやたらとコシのある麺を掴み取り、ゆっくりと口の中に運んで味わうように噛む。

口の中では濃厚なダシの効いた汁の味と冷凍麺では出せない反発力のある麺の感触があった。

「美味しい・・・・・・」

無意識に出た言葉だった。

「当然だ、汁はもとより麺まで手打ちだからな」

「え、麺までっすか?」

「ああ、私の数少ない得意料理だからな」

梓の感想に気分を良くしたマキは大にしか見せたことのないような笑顔で答える。

以前にマキは大にうどんを作ったことがある。

だがその時は麺を湯がく際に塩を入れ忘れ凄まじいコシのある麺となった。

まるでゾウの尻のような。

「まさか皆殺しセンパイに料理作ってもらえる日が来るなんて思ってもみなかったっす」

呟く梓。

確かに冬休みのあいだでは二度もマキに病院送りにされたし、それ以前でもやはり江

乃死魔にいたため敵対し続けていた。
もっともマキは梓の事など眼中にもなかったが。
「今日だってダイの頼みじゃなかったらお前の面倒なんて見ないっての。
余計な事喋ってないでさっさと食ってさっさと寝ろ」
相変わらず大以外にはそっけないマキである。
以前までの梓ならそのマキの態度に僅かながら苛立ちを感じていた梓だが、今日は少し違った。
何というか、飼い主以外には絶対になつかない猛獣を見ている感じだ。
普段はおとなしいが、少しでも怒らせれば手がつけれないほど恐ろしいベヒーモスみたいな獣だが、
飼い主にだけは我侭な事はするものの絶対に噛み付かないし、言うこともある程度聞いてくれるような。
そんな風にマキを見てしまった梓は苦笑する。
「これまじでウマイっすね」
「気に入ったのならおかわりしていいぜ、久々に張り切ったら作りすぎたし」
「因みにどれくらい作ったんですか？」

「作りすぎでしょ」
「だよなぁ」
何で帰ってきたらこんなにうどんの麺が山盛りになってるんだ。
これざるうどんにしても5人前はあるぞ。
「マキさん食べないの？」
普段ならどんなに作りすぎようと、
このそれ程大きくもない体のどこに入っているのか不思議なほど美味しく頂いてくれるのだが。
今回はそうではなかった。
「あー、自分で作ったメシってあんまり美味しく感じないんだよな」
「ちょっとわかるかも」
自分で作った食事はどうも同じ料理でも食べた印象が違う。
悪い所を探しながら食べているとでもいうのだろうか、素直に美味しく食べれない時

がある。
　それに作っている間に食材の香りやらでお腹が膨れた気になるというのもあるかもしれない。
　マキさんも今回はそうなのだろう。
「所で乾さんはどう？　やっぱり長引きそうな風邪かな」
「いや、あれは今夜あたり高熱出して明日の昼にはスッキリ治ってるパターンの奴だ。メシ食ってよく寝てりゃすぐ治るんじゃね」
「流石マキさん、こういう病気とかにもなんとなく詳しい気がしてたんだ」
　別にマキさんが病気に詳しいとは思っていない。
　ただ、シンプルに悪い病気かどうかを判断するのに限っては野生の直感みたいなのを持ってるマキさんほど信用できる人はいない。
「受験生に病人の看病させるってどういう神経してんだよお前」
　その点は本当に悪いと思っている。
　ただ、こんな恐ろしく寒い湘南で野宿とかで普通に過ごせてる人だからなぁ。
　風邪もひいたことないって言ってたし。
　もしこれで風邪ひかせたのなら死んで詫びる覚悟もある。
「そういえばさ、まだ聞いてなかったけどセンター試験の方はどうだったの？」

マキさんが俺の志望している大学を受験すると聞いてから凄い気になっていた。
「あー、思ったよりは出来たんじゃねえの」
「随分他人事みたいですね」
「うっせぇな。じゃあ結構いい点ですよって言えば満足なのかよ」
俺の食い付きが鬱陶しかったらしい。
少し苦い顔をして吐き捨てるマキさん。
だが俺はその言葉を聞いて飛び上がりそうなほど嬉しかった。
「大満足ですね。さあ今からお祝いの準備しないと」
「はぁ？　お祝いって何だよ」
「何って、そりゃマキさんがセンター通ったんだよ？
お祝いするに決まってるでしょ常識的に考えてくださいよ」
学校も終わって、後で指示されているリハビリもしないといけない。
ただこのリハビリが結構きつく、したその日は一日中体が動かなくなる。
実際に俺の筋力は衰えきっており、ただ歩くだけでもしんどい。
腕だって前にならえの姿勢をとると全然持たない。
だからこそ一日の間にどこで体力を使うか、その配分が重要である。
そして今日の配分はマキさんのお祝いと乾さんの看病だ。

乾さんは既に明日も休みを取っているらしく、俺も同じように明日は姉ちゃんに頼んで休ませてもらうようにした。

こういう時に姉が教員で助かる。

「バカかお前、まだ本試験通ってないのにお祝いなんてしてどうすんだよ」

「おっしゃるとおりだね。じゃあ言い方を変えようか。

マキさんがセンター通って嬉しい俺は今日の晩御飯を奮発したい」

そう言って帰り道に買ってきたモノを取り出す。

「今日はこの分厚くてお高い肉でステーキを焼こう。

マキさんも一緒に食べます？」

「食べる！　是非とも盛大に祝ってくれ！」

肉を見た途端大喜びするマキさん。

うん、奮発したかいがあったというものだ。

マキさんはしばらくニコニコとしていたが、不意に表情を変える。

その顔は恥ずかしいような、けれど嬉しそうなものだった。

「なんっつーか、私の受験なのにお前が一喜一憂するなんてさ。

まるでダイが私の家族みたいだな」

確かに、姉ちゃんも俺が受験合格したときは今の俺みたいに本人以上に喜んでいた気

がする。

――――家族？

そのフレーズが異様に引っかかった。

何か大切なことを忘れているような。

所々昔何かあったような、寺にいた頃の記憶が僅かにフラッシュバックする。

けれど思い出そうとしてもまるでサルベージできない。

「ダイ、何してんだ。はやくメシにしようぜ」

「あ、はい」

結局考えてもまるで思い出せない。

仕方なく俺はその記憶の掘り出しを中断し、釈然としない頭で晩御飯の用意に取り掛かった。

「うえぇー・・・・・風邪ひいてる時に焼いた肉の匂いってキツイっすぅー・・・・・・」

「俺はうどんしか食ってない」

「モギュモギュウマー！」
時刻は6時。
少々早いが晩飯をすることになった。
姉ちゃんは愛さんのお母さんと飲みに行ったらしい。
「うっぷ、ちょっと吐き気が」
「おわあああ！　ちょっと桶持ってくるから持ちこたえて！」
女の子の吐瀉物なんて姉ので見慣れているが、流石に見たいものではない。
箸を放り捨てて慌てて風呂桶を持ってくる。
だが戻ってきた頃には吐き気も収まったらしい、
乾さんが少し苦しそうな顔をしながらテーブルに突っ伏していた。
「おかわり！」
「あ、はい」
念の為に少し多めに肉を買っておいてよかった、
俺はうどんの処理で忙しいため余るかと思ったがむしろ食べてくれて助かる。
因みにうどんも凄く美味しいし、むしろ俺としてはステーキより好みの味だ。
ただ、病気の乾さんはそうはいかなかったようで
「お前食わねえのソレ」

「はい、とてもじゃないっすけど肉なんて食う気になれないっす・・・・・・・
よければ代わりに食べてもらえます？」
「マジか！　お前いい奴だな！」
なにげに餌付けしている乾さん。
マキさんもたらふく肉が食えて嬉しそうだ。
「マキさん、俺のも食べます？」
「たべるたべるー！」
「長谷センパイここで何かかっこいいことを」
「飢えた犬は肉しか信じないｂｙチェーホフ」
いや、適当に言ったもののかなり無茶振りだろこれ。
「でも飼い犬は違いますよね、
よくニュースとかでも飼い主を飢え死にするまで待ち続けるのとかありますし」
「そうだね、ていうか吐き気はどうしたのさ」
見ればケロッとした顔でお茶を啜っている。
さっきまで青い顔をしていたのが嘘みたいだ。
しかし俺のその言葉を聞いたとたん再び眉を寄せた。
「う、思い出したらぶり返してきた・・・・・・トイレ借ります」

「どうぞ」
そのままよたよたと歩いてトイレまで向かっていった。
心配になったので俺もついていくことにする。
だが乾さんは後ろに続く俺をみて困ったような顔をした。
「長谷センパイ、自分センパイに裸は見られても良いっすけど吐いてるところ見られるのはちょっと・・・・・・」
確かに、彼女も年頃の女の子だ。
そりゃ吐いてるところなんて見られたくはないだろう。
「ゴメン、無神経だったね」
「いえ、お気持ちは嬉しいっす」
軽く頭を下げたあと俺は踵を返してリビングへ戻った。
乾さんもその足でトイレに向かったのだろう。
数分後、女の子が出す声じゃないエグい音がトイレから大音量で流れた。
うん、吐いてる時の声なんて男女の差ないよね。
「モグモグウマー！」
「この音聞いても食欲失せないマキさんはすごいよ」
俺はもううどんすら食う気がしない。

「ハァ、ハァ・・・・・うぅん」
その夜。いや、日を跨いで深夜か。
時刻は深夜三時、乾さんの熱が一気に上がった。
よくある寝たあとに急に発熱するタイプだったのだろう。
「うぅ、熱いっすぅ・・・・・・」
「今タオル変えるからね」
額に汗をにじませている乾さん。
俺はそれを体温でぬるくなったタオルで拭いたあと、再び氷水に浸けて冷やす。
完全にタオルが冷え切ったのを確認して再び額においた。
それで幾分か気持ちよさそうな顔をする。
やはり今日無理にでも乾さんをウチに招待しておいてよかった。
熱も３９度以上あるし、こんな状態で一人にしておくのは気がかりすぎる。
「う、うぅん」

額だけ冷やしてもまだ熱いのだろう。
氷水を触りすぎて濡れタオル以上に冷えている俺の手を彼女の頬に当てる。
「すぐには下がらないか」
触ってみればすごく熱い。
熱発しているだけあってこっちの手の体温の方が先に上がる勢いだ。
「・・・・・・センパイの手、気持ちいいっす」
「ごめん、起きちゃったか」
虚ろな目でこちらを見る乾さん。
半分まだ寝ているのだろう、目にいつもの強い意志力を感じない。
俺は子供をあやす様に彼女の頭を撫でたあと、
今彼女の額に置いてあるぬるくなったタオルと予め氷水に浸けておいたタオルを再び交換した。
そのタオルの冷たさを感じて心地よさそうに表情を柔らかくする乾さん。
「センパイ、ごめんなさい。こんな迷惑かけて」
「謝ることはないよ。誰だって熱は出すものなんだから」
病気になって弱気になっているのだろう。
その弱々しい言葉に俺は少しでも元気が出るような答えを返す。

乾さんも幾分か嬉しそうな顔を見せてくれた。
「センパイの手がすごく冷たい気がしますけど、これってあずの体温が高いからっすかね」
「うん。そうだね、熱出してる時は平熱の人の手ですら冷たく感じるものだよ」
嘘を付く。
実際俺の手は完全に冷たくなっている。
そりゃ氷水なんかに手を浸してたら体温なんて失われるさ。
だがそんな事を乾さんに伝える必要はない。
彼女は今俺の事よりも自分のことだけを心配していればいいのだ。
「嘘が下手っすよ、センパイ」
少し悲しそうな顔をする。
やはりばれたか。
「手が冷えたのならあずの額に手を置いて温めてください。
こっちは気持ちいいし、センパイも温まりますし」
「はは、それはいいね」
お言葉に甘えて彼女の額のタオルを水桶に入れて代わりに手を置く。
「あふぅ、タオルよりこっちの方が気持いっす」

「それじゃあ俺の手が冷たい間はこうしておこうか」
「はい、お願いします」
そう言って乾さんは再び瞼を閉じた。
どうやら気が休まって眠気が増したらしい。
俺ももう少しで寝つきそうな彼女にはもう話しかけない。
それからしばらく経って、乾さんの落ち着いた寝息だけが聞こえる。
さっき起きる前までの寝息よりは若干整った感じだ。
少しは楽になったのだろう。
「随分そいつ気にしてるんだな」
俺が熱くなった手をのけて濡れタオルをおいたとき、ずっとここで勉強していたマキさんが呟く。
どうやら区切りがいいところまで進んだのだろう。
マキさんが勉強をしているところを初めて見たが、凄い集中力だった。
だから一度も声をかけなかったのだが、
「乾さんは俺にとって大切な人だからね。
こういう時こそ力になってあげたいんだ」
「相変わらず他人にとって都合のいい奴だなお前は」

「乾さんは他人じゃありません」
俺は別に誰にでもこんなおせっかいをするわけではない。
そりゃ求められれば力になってあげたいが、それでも俺が押し売りのおせっかいをするのは一部の人だけだ。
見れば乾さんはやはり苦しげに荒い呼吸をしている。
こんな姿の彼女を見て放置しておくなど俺にとって有り得ない事だ。
「じゃあ聞くけどお前にとって乾はどんな存在なんだ。
聞けば随分お前は乾との関係を曖昧にさせてんじゃねーか」
答えにくい、いや、あまり触れて欲しくなった話題に踏み込んできた。
「こいつがお前に好意を寄せて、どれだけ好きだといってもお前は頷かない。
かといって完全に突き放すわけでもない、
そんな曖昧な態度でこいつがどうも思ってないと思ってんのかよ」
思っているわけがない。
俺のこの優柔不断な態度がどれだけ愛さんや乾さんを傷つけているか、
知らないわけがない。
「俺は乾さんの事好きですよ。
もし愛さんと付き合っていなければそれこそ俺の方から愛の告白をしているくらい

に」
「でも現実にダイは辻堂と付き合っている」
そうだ。
だからこそ彼女の気持ちに応える事はできない。
「マキさん、人を大切にするにはその人と付き合っていないといけないんですか？」
そんなはずはないだろう。
人が人に親切にする理由はそんなシンプルなものじゃない。
「俺にとって乾さんは家族なんです。
彼女が苦しんでいるなら俺は何だってしてあげたい、
その気持ちは付き合っていないと抱いてはいけない気持ちなんですか」
乾さんとの関係はきっといつかはっきりさせなければならない時がくるだろう。
それが原因で愛さんや乾さんとの関係に亀裂が入る可能性もあるかもしれない。
けれど今ここでそれを気にする必要はない。
今の俺にとって一番考えなければならない事は乾さんの看病だけだ。
「家族、か」
マキさんは俺の言葉に何か思うことがあるのだろう。
言い返してきたりはせず、ただ意味深げにつぶやいただけだった。

「そうだな、家族なら仕方ないか」
また、また何か引っかかるものを感じる。
何なんだ。
マキさんが家族と言う言葉をいうだけで何故か異様に胸がざわつく。
「マキさん。俺達って昔どこかであったことあります?」
ずっと気になっていたことだ。
最初の頃はマキさんとは夏に初めて交流をもったものと思っていた。
だが最近になって、その考えが本当なのか疑問に感じ始めた。
「どうしてそう思う?」
マキさんは否定も肯定もせずただ憮然とした態度で質問を返してきた。
「いえ、マキさんと一緒にいると時々なにかフラッシュバックするんですよ。
それがなんなのかわからないんですけど」
何か昔のシーンが一瞬見えて、けれど一瞬で記憶から消える。
何か思い出しそうなのにそれでも記憶のサルベージが成功しないもどかしさ。
「・・・・・・完全に忘れてるわけじゃないのな」
「何か言いました?」
「いや、何も言ってねぇよ」

そうは言うものの今確かに口が動いていた。
だがそれを詮索する厚かましさは俺にはない。
「お前の質問だけど、それはお前自身が考えろ。
勘違いだろうが本当だろうが自分なりのやり方で思い出せ」
確かに、昔会っていたとして今まで忘れていたのならそれはマキさんに対して凄い失礼をしたことになる。
だからこそ本当に会っていたかどうかは俺自身が答えをだしてこその礼儀だろう。
合っていないのならそれでいい。
もし合っていたのだとしたら俺は――――
「あ、うぅ。熱いっすぅ・・・・・・」
「ん、今タオル変えるからね」
苦しそうな息を吐く乾さんの声で慌てて我に返る。
そうだ、今重要なのは昔のことじゃない。
今目の前にいる彼女だ。
俺は結局次に彼女が目覚めるまで。
朝八時頃まで黙々と彼女のタオルを変えたり汗を拭い続けた。

「ん、うぅん・・・・・・」

唐突に目が覚める。

途中一度目が覚めたがセンパイと少し話しただけで再び寝た記憶がある。

「うあ、汗でビショビショっす」

ベッドから上半身だけ起こすと汗で濡れたパジャマの気持ち悪さを最初に感じた。

これほどびしょびしょになるくらいだから相当の汗をかいたのだろう。

しかし、目が覚めた今は別にそんな汗をかくほど体温が高くない気はする。

少し頭がまだふらつくものの、体調自体は寝る前よりむしろ良かった。

どうやら高熱が出た分病原菌もそこで死滅しまくったみたいだ。

そういえば、今起き上がった際に何か自分の額から落ちた気がする。

何だろうと自分の膝上を見てみるとそこにはタオルがあった。

それを触ってみるとひんやりと冷たくて気持ちがいい。

室温や自分の体温にもなっていないあたり先ほど交換したばかりのものらしい。

誰が交換してくれたのか。

考えるまでもない。センパイしかいない。
途中起きた時にうろ覚えではあるもののセンパイが自分の手やタオルであずの頭を冷やしていてくれていた。
「ん、起きたのか」
「何で押入れから出てくるんですか」
センパイの姿を探していたらクローゼットの中から皆殺しセンパイが出てきた。
今まで気づかなかったけどどうやら長谷センパイは皆殺しセンパイ用に押入れを改造しているらしい。
某金曜日事に新しいオーパーツを惜しげもなく現代にもたらす害獣の寝床みたいになってる。
一段目に物を入れて二段目はフカフカの布団と枕という明らかに寝る目的の仕様だ。
「ここって夏は冷房直撃で寒いんだけど、冬は暖房がやっぱ直撃で蒸し暑いくらいなんだよな。
まぁ外で寝るより百倍快適なんだけどさ」
この家出少女は時々こうやって長谷センパイの家に泊まっていることは有名な話だ。
だがまさか押入れで寝てるとは思わなかった。
てっきりセンパイと同じベッドで寝ているものかと

「やっぱダイと一緒に寝るのが一番寝心地いいや。
次からそうしよ」
同じベッドで寝てたんかい。
・・・・・・何とかして始末できないかなこの人。
「所で長谷センパイは？」
恐らくリビングに行っているのだろうけど、そこで何をしているのかまではわからない。
「お前が起きる直前にタオル変えてメシ作りに行ったよ」
目が覚めた時にセンパイの姿が見えなかったのは寂しいものがあった。
だがまぁ皆殺しセンパイがいたため人恋しさは前日ほどではない。
ふと、皆殺しセンパイがあずの顔をジロジロと見つめる。
「ふーん、大体治ったみたいじゃん。
ダイに礼言っとけよ、アイツお前の面倒みてて一日中起きてたんだから」
その言葉に驚きはない。
きっとお節介焼きで優しいセンパイならそのくらいするだろう。
その事実は想像できていたことだが、やはり実際にそれを知ると胸が温かくなる。
こうしてはいられないと慌ててベッドから降りる。

しかし少し張り切りすぎたせいか、立ち上がった瞬間立ち眩みがした。
「おっと危ねぇな、気をつけろ」
「あ、アザっす」
意外なことに倒れ込みそうになった自分を慌てたように押入れから一瞬でこちらに来て支えてくれた。
「もしかして皆殺しセンパイあずの事心配してくれました?」
「あぁ?」
自分のその問いに少しカチンときたらしい、若干顔つきが怖くなる。
だがまさか病気の自分に本気でキレたりしないだろう。
その予測は当たったらしく、皆殺しセンパイは一瞬目を瞑りため息をつく。
「図に乗んな」
「痛いっす」
とてつもない痛さのチョップを額にくらった。
勿論本人は軽くツッコミ程度でしたのだろうけど如何せん素の馬力が違う。
ツッコミすら常人のレベルではない。
これ以上この人に関わっていたらまた入院させられそうだ。
余計なことは言わずにさっさと下に降りる事にする。

「それじゃあ自分行きますね」
「ああ、私はまだ眠いから二度寝するってダイに言っといてくれ」
「了解っす」
まだ痛む額を撫でながら愛しのセンパイの元へ向かった。
だが、扉を開ける際に後ろから視線を感じて振り向くと皆殺しセンパイが押し入れに戻らず
少し考えるようにこちらを見ていた。
無視してもよかったのだが、けれどやはり気になった。
「なんすか？」
少し強めの語気で聞く。
そうじゃないとはぐらかされそうだからだ。
だが皆殺しセンパイは何か聞きづらいことがあるらしく、
少し口を開けば何も言わずまた閉じるを数回繰り返す。
けどそれも数回で、途中覚悟を決めたようにようやく話しだした。
「お前さ、ダイの事どういう風に思ってんの？」
一瞬その質問の意味を理解出来なかった。
自分が長谷センパイを好いているのは周知の事実だろう。

まさか彼女が知らないとは思えないのだけれども。
「私から見ればダイのお前を見る目は女を見るモノじゃない。
どっちかって言うと・・・・・・そうだな、妹とかそういうのを見る目だ」
そういう事か。
言ってくれてようやく理解した。
「知ってますよそんなの。
センパイは明らかに自分を家族とかそういうポジションの扱いしてます」
無条件、一切の見返りを求めない優しさをくれ、甘えればいつだってそれを許してくれる。
我侭をいったって、子供のような癇癪を起こしたって絶対にあずを嫌いになったりも見捨てたりもせず
ただただ言葉を聞いてくれて真摯にその答えを返してくれる。
それでいて自分を女としてそれ程意識していない。
「だからどうだっていうんすか?」
そんなのは些細な事だ。
「相手があずをどう思うかなんて、そんなのはどうでもいいっす。
あずが長谷センパイを好いてるんです」

辻堂センパイと喧嘩した時にそんな悩みは解決している。
自分は自分のしたいようにして生きる。
だから長谷センパイに迷惑がかかってもセンパイにアピールすることはやめない。
自分の感情に素直になる事を選んだのだから。
「ただ、やりすぎて長谷センパイに嫌われたらそれこそ本末転倒ですけどね。
でもまぁ長谷センパイはもうあずの事嫌いになるなんて余程の事をしないとなさそうっすけど」
それこそまたカツアゲやらをしなければだろう。
「自分の席がないのなら自分で作ればいい、場合によっては既に座っている奴を蹴り出すことも考えます。
皆殺しセンパイはそうしないんっすか？」
自分にとって汚い手段であろうが目標を達成するにはそれは必要な手段だ。
勿論それをして長谷センパイに迷惑がかかるのならそれは愚策。
行動するに値しないものになる。
「・・・・・・何だろうな、ヤンキー結構長い間やってたつもりだけど
お前の方がヤンキーっぽい気がしてきたよ」
「それは褒め言葉として受け取っておきます」

実際は皮肉も混じっているのだろう。
そりゃそうだ。自分は正々堂々より裏でコソコソやる卑怯な事のほうが好みだ。
それをしたいからこそ不良やっているのだ。
「じゃあ卒業間近の皆殺しセンパイに後輩のあずから一つアドバイスっす」
辻堂センパイも皆殺しセンパイも一つ勘違いしていることがある。
長谷センパイはどうやら気づいているみたいだけど敢えて彼女たちに伝えていない言葉がある。
「皆殺しセンパイは後悔しない生き方なんてあると思います？」
皆殺しセンパイは清廉潔白な辻堂センパイとくらべればかなりアウトローだ。
けれどしたい事をして生きているあたり自分に近いものはある。
「知るかよ。辻堂あたりならそういう生き方を意識してんじゃねーの」
そうだろう。
けれど果たしてそんな生き方なんて有り得るわけがない。
「後悔しない生き方なんてあるわけねーっす。
自分からすればそんな事を考えるのはバカじゃねーのって感じっすね」
「随分とひねくれた考え方するんだな」
辻堂センパイをある程度尊敬はしているが、その点だけは絶対に相容れない。

「自分が正しいことをしたから自分に関わる全員が正しい行いをするわけがない。特に辻堂センパイほど影響力ある人は否応なしに周りに何かしらアクションを起こさせるでしょう」

自分は汚い真似を美としない恋奈様の傍にいた時でさえ彼女を裏切っていた。

「もしもの話をしましょうか。

ある日辻堂センパイが猫を虐めていた不良を叩きのめしたとします。

流石辻堂センパイっす、その行いは人として正しいものっすね」

皆殺しセンパイはしゃべるあずの邪魔をせず聞き入る。

「辻堂センパイにやられた不良は行き先のない苛立ちを抱えることになります。

当然ソイツは不良なんで喧嘩や他の他人に迷惑をかける方向で発散しようとするでしょう」

個人の正義は他人の正義にはなり得ない。

それは当然のことなのだ。

自分と辻堂センパイの正義は明らかに違う。

あずはあず自身のために正しい事を行う際、汚い行為も辞さない。

「その不良の暴力の矛先はどこに向かうんっすかね。

辻堂センパイの関係ない人かもしれないし、その不良がバカなら辻堂センパイに復讐

しようとして
辻堂センパイの身の回りの人間を襲うかもしれません」
正しすぎる人間はコースアウトしかかっている人間を迫害する傾向にある。
当然その迫害された人間は一気に転落し、手段を選ばない害悪になる事だってあるだろう。
「一見後悔のない生き方をしても、辻堂センパイなら身の回りの人が傷つけば悲しむでしょう。
果たしてその時に辻堂センパイは後悔しないんっすかね？」
後悔しない生き方というのは自分の正しいと思う生き方をする事だ。
けれど物事の価値は一か零かではない。
どんなことにも価値がある。
例えるなら自分にとって長谷センパイか学校の友人。
どちらも命の危険にあったとして、しかし片方しか助けられないのだとしたら迷わず自分はセンパイの命を助ける。
その行為に自分は絶対に後悔しないだろう。
だけど失った友人とだって自分には思い出があった。価値はあったのだ。
長い人生を考えれば、いつかふとしたきっかけで友人を見捨てた選択を後悔するかも

しれない。
見捨てた友人の家族とかから恨まれるかもしれない。
恨んだ家族があずに何か復讐をするかもしれない。
将来は何が起こるかわからないのだ。
だからこそ後悔しない生き方をしているからといって後悔しない未来があるはずがないのだ。
もしかしたらあの時二人共助けられる手段があったんじゃないかと、そう後悔するかもしれない。
「辻堂なら後悔しないさ。アイツはそういう奴だ」
「断言するんっすね」
自分のその考えを否定するように皆殺しセンパイは言い切った。
「辻堂はもしそうなったとしてもそれを受け止める奴だ。
自分のした事をちゃんと受け止められるからこそ、後悔しない生き方になるんだよ」
自分の行為が巡り巡って、最後に自分への害悪となって帰ってきたとしても
それを受け止められる生き方が後悔のない生き方ということか。
「後でどんなツケが回ってくることがあっても『それでもあの時の自分は間違っていなかった』

それこそ死ぬ瞬間にでも言える生き方こそが後悔しない生き方っていうんだよ」
なるほど。
興味深い話だった。
でも、それだって限度がある。
「でももし辻堂センパイの正しいと思ったことが原因で長谷センパイが死んだりしたらそれこそ辻堂センパイは後悔するんじゃないっすか？」
「それで後悔するなら辻堂の意思が弱かったって事だ」
つまり後悔しない生き方というのは自分を貫き通す生き方ということだろう。
さて、そろそろいいところまで話が進んだ。
もともと自分にとってこの話はどうでもいいのだ。
いい加減に終わらせる。
「それでは聞きますけど、皆殺しセンパイは後悔のない生き方をしてます？」
「・・・・・・そうきたか」
自分の問いに口ごもる。
だが表情だけで彼女が何を考えているのかは想像ついた。
「ウジウジと何を悩んでいるのかは知ってますけど正直うざいっす。
今の話を聞いたらアンタの本心なんて決まってんじゃないっすか」

後悔のしない生き方をここまで断言するくらいだ。
ならばつい最近までそうやって生きていたつもりだったのだろう。
「あずは後悔しない生き方なんて有り得ないと思ってます。
だから好きなことをして好きなように生きるのが一番じゃねーっすか。
でもそっちはどうなんっすかね」
グジグジウダウダと見ていて鬱陶しい。
好意を捨てきれず、しかし貫き通せず。
そんなものを抱えてよく後悔しない生き方などとご高説できるものだ。
「後悔しない生き方をして妥協や諦めたりするよりも、
好きなことをして玉砕したほうが後で逆に後悔しないってこともあるでしょう。
そんなこともわからないんっすか?」
何時までも答えを出せず、悩み続けててくすぶってる奴ほど目障りなものはない。
しかし自分のその言葉に何か思ったらしい皆殺しセンパイは不意に真面目な顔をしてこちらを見た。
「寝る」
「は?」
いきなり何の脈絡もないセリフに唖然とする。

皆殺しセンパイはそのままスタスタと押し入れに向かい、段差に足をかけた。
「お前の言う通り今の私はウザイな。
だが今のので何かわかった気がする」
そういって押し入れの中に引っ込んだ。
一体何がわかったのか知らないけれど、押し入れを閉める瞬間にみせたあの表情は先ほどの問は全く違っていた。
もしかすると自分は辻堂センパイや自分自身に余計な敵を作ったのかもしれない。
別に焚きつけるつもりはなかったのだけれど。

一階に降りてまず感じたのは匂いだ。
なんと言えばいいのだろうか、醤油だしの匂いと野菜が煮えている匂いが混ざった奴だ。
多分センパイが料理しているのだろう。

浮き足立ってリビングの戸を開く。
するとその中のキッチンにはやはりセンパイの背中があった。
「・・・・・・・」
何だろう。
その背中を見た途端何やら胸がキュンときた。
愛する妻が朝自分のために食事を作ってくれている姿を見た時の心境ってこんな感じなのかもしれない。
センパイはどうやら自分に気づいてないらしく、こちらを振り向くこともせず野菜を切っている。
見た感じ先日と同じく雑炊らしい。
昨日は皆殺しセンパイに全部たべられてしまった。
だからこそ今度こそ味わって食べたいところだ。
「せーんぱい」
「ん？」
少し離れた所から声をかける。
するとようやく気付いたセンパイがこちらを見る。
センパイの顔を見た瞬間少し驚いた。

なんてことはない、かなり疲労の濃い顔をしていたからだ。
それも仕方ない。
自分が寝込んでいるのをずっと看病していたのだ。
つまり先日の朝から丸一日寝ていない事になる。
疲れるに決まっているだろう。
しかしあずの顔を見た途端センパイの顔色がよくなる。
「大分回復したみたいだね。よかった」
本心からの言葉だろう。
その言葉は恐ろしく優しかった。
「はい、センパイのおかげっすよ」
そう言って近づいてセンパイの手を握る。
勿論包丁を持っていない方の手をだ。
「あ、これは」
センパイが少し慌てたような顔をする。
だがもう遅い、見てしまった。
「・・・・・やっぱりこうなりますよね」
手はもう氷のように冷え切っている。

さらには一晩中氷水に手をつけていたから肌がガサガサだ。
多分昼頃には皮膚が裂け始めるだろう。
そんな手にしてしまったことに罪悪感が湧く。
少しでも温めようとその手を抱きしめる。
「乾さん、そんなことしちゃ体が冷えるよ」
「冷え切ってるセンパイに言われたくないっす」
どれだけ体温で温めても温度の上がらない手。
それだけ芯まで冷え切っているという事だろう。
「そうだ、さっきお風呂沸かしたからさ入っておいでよ。
深夜にかなり汗かいてたから洗い流したいでしょ」
どこまでも気が利いている人だ。
どうしてここまで人に尽くせるのか。
「ダメです。センパイから先に入ってください」
「いや、でも俺はこっちを先にしないと」
そう言ってまな板の大根を見る。
「じゃあこっちもあずが手伝います。
ささっと終わらせてはやくお風呂入りましょう」

手を濡らす仕事はこれ以上センパイにさせたくない。
包丁を奪い取ろうと手を伸ばすが、センパイはひらりとそれをかわした。
「ダメだよ。病人に水仕事はやらせたくない、乾さんは鍋を見ててくれるだけでいいから」
そうは言うものの、あまりに体を冷やしすぎていてこのままじゃ自分の風邪がセンパイに移るのではないかと思う。
しかしセンパイは頑固だからきっとどれだけいっても代わってくれないだろう。
だったらいつまでも喋ってるよりは行動に移したほうがいい。
「わかりました。それじゃあさっさと終わらせましょう」
「うん」
そういって互いの分担をこなし始める。
トントンと小気味よい包丁がまな板を叩く音が響き
グツグツと煮える音がそれに合わせる。
「センパイ」
「何かな？」
どちらも顔は動かさず口だけ動かした。
「看病してくれてありがとうございました。本当に感謝してます」

「感謝って、別にそんな大したことをしたわけじゃ」
本人にとってはそうかもしれないけれど、それでも自分は彼に感謝している。
「家族とかに思い入れって無いんすけど、
センパイみたいな人が兄弟にいたらきっと幸せだったんじゃないかと思うっす」
「はは、過大評価だよ」
でも間違いなく今この瞬間は幸せだ。
「センパイ、大好きっすよ」
「うん。ありがとう」
「そこは俺もだよって答えてくださいよぅ」
「俺彼女持ちですし」
結局、朝食が出来上がるまでこの心地いい時間を堪能した。
センパイがあずを女として見なくてもいい。
例え家族兄弟みたいな関係だったとしても、それでも彼の隣にいれるならそれは幸せな事だ。
勿論いつか肉体関係まで強行する予定はあるが。
ともあれ自分は好きなことをして好きなように生きよう。
それこそが自分にとって後悔しない生き方なのだから。

●寸劇

「ふぅ～、あったかい。体の芯まであったまる」
　やはり冬のお風呂はいいなぁ。
「センパーイ、お背中流すっすー♪」
「どわあああああ全裸侍！　さっき乾さんお風呂入ったばかりでしょ！
　そんなことしなくていいから！」
「あん、センパイの見えちゃってるっすよぅ」
「この長谷大、見られて困る体ではない。
　てか丸出しの乾さんに言われたくないよ！」
　まさか全裸で入ってくるとは思わなかった。
　スッポンポンだ、もう全部見えちゃってる。
「ダイー、風呂借りるぞー」
「「は？」」

続けて入ってくるマキさん。
スッポンポンだ。しかもダイナマイトバディー。
「ちょ、何でマキさんまでー！」
「おっと、風呂入ってたからダイの匂い落ちてて気づかなったわ。わりぃわりぃ」
「そう言いながら入ってくるんすね。つかチチでけー」
「何で私が出ていかないといけないんだよ」
じゃあ俺が出ていきますよ。
そういってタオルを腰に巻いて出ていこうとすると、がしっと二人に方を掴まれた。
「看病してくれたお礼がまだっす。ご奉公させてもらうっすよー」
「丁度いいや、私も美味いステーキ食わせてくれたカリをここで返してやる」
「え、ちょ」
タオルを二人に引き剥がされて再び湯船にぶち込まれた。
何されるんでしょう僕。
泡タイムは凄かったとだけ言い残す。

この後、愛さんも学校を休んだらしくウチに来た。

そこで体を如何わしい手法で洗われている死にそうな顔をした俺を発見した愛さんは今までにない程切れてマキさんと殴り合いを始めた。
乾さんはわざとらしく咳をして自分弱ってますアピールをしたため難を逃れたらしい。
ぶっちゃけ幸せなお風呂タイムだったけれど、次は無いといいなぁ。

21話：ブラックハーテッド乾梓

今回の話は今後の話とはそれ程強い繋がりがない。
けれど決して関係がないということもない。
詰まるところ、なんの変哲もない日常の一ページとなる。
だからこそその内容には意味はない。
けれど価値がないわけではない。
自分の意思ではないものの辻堂軍団に入った乾梓。
彼女は長谷大のいない時はどのようにしているのか。
普段長谷大のまえでは良い子している彼女の違う一面を追っていきたい。

乾梓の華麗なる一日

「久々に辻堂集会来たとおもったらなんすかこのダサいジャージ。

しかもこのご時世にブルマって・・・・・・ありえねー」
「体育の授業っていったらブルマ履いてこそやろうが！」
「意味分かんねぇし」
元々別の学園に自分はあまり稲村学園に侵入することはできない。
そのため必然的に辻堂集会に参加する事も少なくなる。
けれど今回は自分に用事があるらしく、事前に長谷センパイからメールが来た。
センパイに呼ばれたため飛んできたのだが、そのお姿がない所を考えるに本当にメッセンジャー扱いだったのだろう。
選択は正しい。
長谷センパイか辻堂センパイにでも呼ばれない限りこんなどうでもいい連中とつるむ気もないし。
ただ、センパイと会えると思って急いで来たぶん落胆も大きかった。
「で、なんすかこれ。
いきなりこんなの渡されてもワケわかんねーんだけど」
今回の辻堂集会で集まったメンバーは長谷センパイと辻堂センパイ以外全員らしい。
長谷センパイがいないのならさっさと切り上げて欲しい所だ。
興味のない態度を隠さない自分の態度に周りが少し困った顔をする。

しかしこれだけ不良がいれば中にはイキがいいのもいた。
「てめぇ、新参の癖に態度でけぇんじゃねーのか?」
さっきから座ってたバカ女が威勢良く立ち上がってこっちに来た。
また面倒なのが絡んできた。
ため息が出る。
「知るかよ、こっちだってわざわざ家から遠い所へ来てんだよ。
だっつーのに来てみれば何だこれ、ふざけてんのか?」
人を呼び寄せておいて、中身のないだべりを始めたと思ったらこの体操服である。
はっきりいって全員血祭りにあげてやろうかと思う。
「ふざけてんのはテメーだろうが、話くらい最後まできけやタコ」
その言葉に僅かに苛立つ。
一瞬ボコボコにしてやろうかと手が動く。
「やめたまえ、その手を上げたら我々も相応の対応をする事になる」
中には理性的な奴もいるらしい。
手を出す前に言葉で止められた。
その言葉に僅かだが頭が冷えた。
シラけたともいうが、何にせよ上げかけた手を下ろす。

「ちっ、わかりましたよ。じゃあさっさと本題入って欲しいっすね。
　こっちだって暇じゃないんで」
「そうそう、それが賢い選択やで」
「このボキャーーーー！　最初からそうやって大人しくしとりゃ良いんだよだりゃぁー！」
　後で最後の奴シメる。

「えぇー、これ自分が着るんっすか」
「しゃーないやろ、流石に私服や由比浜の制服でウチの学園入れへんし」
　まあそうだ。
　今回だって柵を越えて細心の注意を払ってここに来た。
　だからこそここに来るときはこれを着たらいいという彼らの対応なのだろうけど。
「どうみてもこれサイズあってないじゃん」
　着なくてもわかるほどサイズが合っていない。
　身長はそれ程でもないのだが、胸囲が圧倒的に足りない。

まぁ自分の胸は同年代でもトップにでかいから大抵のが合うはずないのだけど。
「これ誰のっすか？」
「オレんだよ。文句あっか」
「うえぇー、常識的に考えろよアンタ」
「どういうことだよ！」
どういうこともクソもないだろうこれ。
どうすんだよマジで。
こんなの着たら胸の所が張り裂けるんじゃないのか。
「センパイ方も普通気づくでしょこのサイズの差。
どうして止めなかったんすか」
攻めるように見ると男どもは全員目をそらす。
対して女性達は全員同情するようにこちらを見た。
つまりこの体操服のサイズミスは男どもの故意だったというわけだ。
「アンタら、どういうつもりっすか。
こんなちんちくりんなサイズのをあずに着せて笑いものにでもするつもりかよ」
「ち、ちんちくりん!?　オレちんちくりん体型なの!?」
流石に苛立った。

どいつがこんな舐めた事を考えたのか特定しようとするが無理そうだ。
下手すりゃ男ども全員ということも有りうる。
・・・・・全員ぶちのめせばいいのではなだろうか。
一瞬そう考えたがそれをしてしまえば確実に辻堂センパイの逆鱗に触れるし、
長谷センパイにも伝わるだろう。
それは拙い。かなり拙い。
「ふふ、焦れているようねあずにゃん」
無関心を決め込んでいた女性陣から一人こちらに話しかけて来るのが現れた。
名前は知らないし興味もない。
軍団員Ｆでいいや。
「自分に何か言いたいことでもあるんですか？」
実の所今日は機嫌の悪い日だ。
特に何か理由があるわけでもなく、単純にむしゃくしゃする。
だからこそ普段より高圧的な態度になってしまう。
だがこの軍団員Ｆさんはどうやら比較的おとなしいというより冷静らしい
こちらの態度を気に求めず鞄から何かを投げてきた。
受け止めたモノを見れば先ほどと同じ体操服。

ただ今回のはサイズが違っていた。
「あ、さっきのよりはマシっすね」
「(くちゃくちゃ)それやるから機嫌なおせよ」
普段からガムをかんでいる・・・・・・えぇと、軍団員Dさんは自分を宥めてきた。
はて、見たところこの体操服のサイズはまだあずにとっての適正サイズではないものの
他の女性陣が切るにしては少々オーバーサイズだ。
誰のだろうと考える。
「あ〜、それ愛さんの使ってた奴なのよ」
「え、これ辻堂センパイのお下がりなんっすか?」
「えぇ。ほら、少し破れているでしょう?
愛さんの所は愛さんもその母親も裁縫ができないから新しいのを最近買ったみたいなの」
なるほど。
辻堂センパイの前では口が裂けても言えないけれどまだ胸がキツキツだ。
しかし身長やウエストとヒップは殆ど一緒なためかなりマシである。
「こらバカ! それオレの宝物じゃねーか!」

「うわぁ、人が捨てたものを拾って宝物にしてるってまじ無いわね・・・・・・」
「ドン引きやわ」
「うっせー！」
　軍団員の会話を考えるに、
　新しい服を買ったときに交換で捨てられたこの体操着をこのバカ女が拾って大切に持っていたのだろう。
　まぁ、別に・・・・・・うん。
　自分も最近センパイがサイズ合わなくなって捨てようとしたジャージを無理言って頂戴しましたし。
　それ毎日寝巻きにしてるからあまりバカにできない。
「(くちゃくちゃ)一応ちゃんと胸が入るか見ておいたほうが良くね？」
「そうね。乾さん、着てみてくれるかしら？」
「うぇ、ここでっすか？」
「ここ以外にどこがあるのかしら」
　いや、流石に長谷センパイ以外の男の前で着替えるなどまっぴらゴメンだ。
「ほら男子達、鼻息荒くしてないでさっさとここから出て行きなさい」
　自分の焦りは無駄だったらしい。

軍団員Fが手際よく野郎どもを部屋の外へ蹴り出した。

「これはヤバイわね」
「うん、これはちょい拙いね」
二人の言う通りヤバイ。
やっぱり胸がパツパツだ。
ブラの柄が余裕でわかるくらいに伸びきっており、そのせいで裾が上がってヘソ丸出しになってる。
こんなので校内なんてうろついた日には他校の制服より視線が集まるだろう。
「ダメね。あずにゃん
次回来た時にはちゃんと適したサイズのを用意しておくから今回は手ぶらで帰って頂いても?」
「むしろそうして下さい」
そう言って着替え直す。

キツキツの上と、適正サイズのブルマを脱いで下着姿になった。
この時に二人の女性から胸に視線が集まる。
「何食ったらそこまでデカく成長すんだろうね」
知らねーっすよ。
不摂生な食生活してもどんどんでかくなりましたし。
取り敢えず視線は無視して再び着慣れた由比浜の制服を装着。
うん、やはり服は適正なサイズでないと駄目だ。
胸が押し付けられて息苦しいことこの上ない。
窮屈さから解放され、脱いだ体操服を畳んで返そうとする。
だが、それを手渡そうとするときに良い事をひらめいた。
「すいません、これやっぱ自分に頂けませんか？」
「それはどうしてかしら？」
聞いて欲しくはなかった。
ノーブラでこれを来て長谷センパイを悩殺しようと思ったなどと言えるはずもない。
けれど良い嘘も思い浮かばない。
諦めようかと一瞬思う。
「まぁ別にいいわよ。理由も聞かないでおいてあげるわ、ただし一つ条件がある」

「一応聞かせてもらうっす」
何やら交渉を仕掛けてきた。
内容によっては受けてもいいけれど。
「貴女の逃げぐせは正直目に余っているの。
だから今後、こちらからふっかけたモノ以外の喧嘩からは逃げずに一緒に戦う事。
それができるならこれを差し上げましょう」
ふむ。
少し考える。
もしかしてこれ悪くない条件かもしれない。
実の所辻堂軍団の方から喧嘩を売ることは多いけれど、逆に辻堂軍団に喧嘩を売る連中は少ない。
基本的に辻堂軍団に喧嘩を売るバカはイコール辻堂センパイに喧嘩を売っているのだ。
つまり必然的に辻堂センパイと一緒にする喧嘩になるからむしろかなり安全なのではないだろうか。
「乗ったっす」
「オーケー、それじゃあこれをどうぞ」

互いに打算があるが、とりあえずは体操着をゲット。
今夜は金曜日でもないただの平日だから長谷センパイの家にいってもすぐ変えることになる。
日を改めて今度、それこそ翌日が休みの日に迫ってみよう。
既成事実ができれば御の字だ。

「まだやろか、廊下いい加減寒いんやけど」
「だぁっとれい！　口にすると余計寒いやろがい！」
「見える、私にも中が見えるぞララァ」
廊下の方では男連中が寒差にこらえて震え上がっていた。
「何でオレまで追い出されたの？」
久美子は一人寒さとは別の理由で震えて泣いていた。

「別にいいですって、自分持ち合わせには余裕あるっすから」
「遠慮する事はない。我々は紳士なセンパイとして君におごりたいのだから」
「（くちゃくちゃ）要するに格好つけたいだけっしょ」
「男ってのはそういうもんや」
辻堂集会はあの後直ぐに終わった。
どうも集会自体の目的が自分にこの体操着を渡すのが主目標だったらしく、
それ以外の内容は最近の江乃死魔といった大きいグループの動きを報告する程度。
特に実のある内容ではなかった。
無駄足だったかと来たことを後悔していると、集会終了後に全員で某大規模ハンバーガーチェーン店に行くことに。
さっさと帰りたかった自分は勘弁して欲しかったのだが、親切心でおごると言ってきかない先輩方を立てる羽目に。
全くもって面倒くさい。
「でさ、あずにゃんって６０秒サービスどう思うよ。
前に私が行った時とかグシャグシャのテリヤキだされて店員にダブルラリアットしそうになったわ」

そんなことをしたら警察署までデリバリーサービスされるだろ。
「別に、速さを気にするのは悪いことじゃないんじゃないっすか。嫌なら買わなきゃいいだけですし」
「あずにゃん何か興味なさそうやな」
「実際興味ねーっすもん。あそこ友人の付き合い以外で滅多にいきませんし」
大体なんでそれだけ文句あるのに今回も行こうとするのか。
反省してないのか、それともぐしゃぐしゃのを出されても食べたいと思うほどジャンキーなのか。
なんにせよ理解に苦しむ。
「なんやろな、あずにゃんってさ・・・・・・」
「なんすか、はっきり言ってくださいよ」
もったいぶった言い方をするセンパイにイラついた。
普段なら特に何とも思わないのだけれど今日みたいな苛々する日はこういう些細なことすら過剰反応してしまう。
「シーヒロや愛さんいない時性格全然違うよねって言いたいんでしょ」
いつまでも口を開かない男に苛立っていると横から代弁が。
なるほど。

確かにそうかもしれない。
「そりゃそうっすよ、だって自分あのお二人と恋奈様は尊敬してますもん」
はっきり言えば自分の好きな人間は自分にとって利用しやすく、かつ有能なヤツ。
いわゆる『便利なやつ』だ。
対して嫌いなのは『使えないやつ』。
その例外として損得を超越した所にその三人がいる。
勿論その頂点は長谷センパイだ。
「んだよ。じゃあオレ達の事どう思ってんだ？」
何やら食いついてきたバカ女。
「どうでもいい人達ってとこですね。
別に好きでも嫌いでもないっすよ」
「それって地味にひどいわね」
実際本当にどうでもいい。
江乃死魔にいた頃は周りを油断させたりするためにある程度愛想も振りまいていたが、
本性がバレてしまった以上その必要もない。
「と、話してるうちに着いちまったか。

ほら、入んぞ」
いちいちこのバカ女が仕切るのがどうにも気に食わない。
一度シメてやろうか。
あ～、でも長谷センパイがこいつと結構仲いいらしいし、迂闊なことをしたらセンパイにばれそうだ。
どうしてセンパイはこうも不良に懐かれるのか。
自分は甘えさせてくれる所が特に好きなのだけど、辻堂センパイや皆殺しセンパイはまた違う理由だろう。
恋奈様もやっぱり気に入ってるみたいだし、ライバルは多い。
「おい、何やってんだよ。さっさと入れって言ってんだろ」
「はいはい聞こえてますよ」
「けっ、可愛げのないヤツ」
「女らしくないアンタに言われたくねーよ」
「ンだとコラ?」
自分はどうにもこの女と相性が悪いらしい。
自分がピークに苛々してるのと同じようにこのバカ女もヒートアップしてるだろう。
やっぱ潰すか?

「も、申し訳ありませんお客様。
只今満席となっておりましてお持ち帰りでないとすると少々お待ち頂くことになるのですが・・・・・・」
拳を握ったところで、店内から店員の困った声が聞こえる。
昼時でもないのに満員とは珍しいと、自分とバカ女は店内に目を向ける。
するとそこには
「よっ、梓。辻堂軍団もここで集会なのかい?」
大量のヤンキーの姿が。
その中でも一番目立つ巨漢の女、ティアラさんが気さくに手を挙げて話しかけてくる。
頭が痛くなってきた。
また面倒事か・・・・・・
「あら、梓。その雑魚共と一緒の所を見るとそっちも私たちと同じ理由でここに来たって所かしら」
「あぁ!?　誰がザコだこらぁ!」
ティアラさんの横に座ってた恋奈様もこちらに来た。
ハナちゃんセンパイもいるかと思ったが、何故か今日はいないようだ。

「今日はズルズルタイムじゃなくてこっちの日なんっすね」
「ええ。私はハンバーガーみたいな低俗なジャンクより至高のインスタント、カップ麺の方が好きなんだけど」
ちらりと後ろを向く恋奈様。
まぁ事情はわかる。
毎回カップ麺ってのも正直飽きる。
いくら種類があってもインスタントラーメンである以上ラーメンというカテゴリからは逃げられない。
そのため時々間を開けるためにこういう別のジャンクフード店に来たりもしたものだ。
江乃死魔にいた頃を思い出して何やら感慨深くなってくる。
恋奈様個人に対して執着はあったけれど江乃死魔自体にはそれ程思い入れはない。
せいぜい金を巻き上げるための便利な組織って感じだったのだけど、抜けて初めてわかる思い入れか。
「で、ここは私達の貸切だけどアンタ達はどうするわけ？」
挑発的な笑みを浮かべる恋奈様。
相変わらず意地が悪い人だ。人のこと言えないけど。

「席が空いてないんじゃしゃーないっす。
今回は機会が悪いってことで――――」
「テメェらがさっさと出ていきゃ済む事だろうがクソ恋奈」
あぁもう面倒くさい。
また噛み付きグセのあるバカ犬が面倒事を起こした。
「嫌よ、私たちはゆっくりと追加注文しまくりながら向こう一時間はここで時間潰すつもりだもの」
「黙れ、さっさと失せろっつってんのがわかんねぇのか」
「・・・・・聞き分けのないバカはこれだから」
呆れたようにため息をつく恋奈様。
自分も出そうだ。
「今日は見逃してやるからさっさと消えろって言ってんだよ」
総長としての恋奈様が姿を見せた。
これ以上ごねるつもりならタダでは返さないという警告だろう。
けれどそれは辻堂軍団には意味がない。
そして案の定、そのあとに辻堂軍団がその言葉に反応し喧嘩に発展した。

時刻は１８時。
冬の季節の所為で既に空は真っ暗だ。
その寒さと暗さの漂う時刻に、
自分達辻堂軍団と有に１５０人はいる江乃死魔のメンバーは砂浜の上で向かい合っていた。
あの後今までのようなグダグダな喧嘩ではなく
ある程度本気でやってやるといった恋奈様は江乃死魔のメンバーをある程度集めた。
１５０人でもまだ江乃死魔の兵数全体からすれば圧倒的に少ないけれど
辻堂センパイのいない辻堂軍団を潰すのには十分だ。
案の定その人数差にさっきまで息巻いてた辻堂軍団のメンバーは少し引き気味になってる。
だから無駄に噛み付くなと言っているのに。

「あずにゃん、これどーすんよ」
いつも噛んでいるガムを吐き出した軍団員Ｄ。
コソコソとこちらに話しかけてきた。
「どうするも何も逃げるしかないでしょ、こんな人数差むりっす」
嘘である。
はっきり言えばこんな雑魚共１００人２００人束になったところでどうってことはない。
だが勿論こちらも無傷では済まないだろう。
故にやる気は無し。
「けどさ、あんだけタンカきって逃げるってダサくない？」
「だったらやり合えばいいんじゃねーの。
自分は手を貸しませんけど」
自分がした約束はあくまでも辻堂軍団が絡まれる側だったときの助っ人だ。
今回みたいにこっちにも非がある場合の助っ人をする必要はない。
さっさと逃げるかと一歩下がる。
「待ちなさい梓」
「・・・・・・気づかれてましたか」

一応見えにくい位置にいたのだけれど。
恋奈様は自分を注意していたようであっさり逃げる所をばれた。
それどころか逃走経路を見ると既に江乃死魔の奴らが待機して塞いでいる。
さて、どうしたものか。
「梓、今日こそ落とし前つけさせてもらうわ。
アンタが江乃死魔を裏切ったこと、ここで後悔させてあげる」
あっちは完全にやる気らしい。
むしろこの中で一番ヘイトが高いのは自分みたいだ。
ふむ、ここで恋奈様を瞬殺して江乃死魔を潰すか？
「恋奈様、これが前言ってた梓をぶっ倒して無理やり江乃死魔に連れ戻す作戦かい？」
「でぁりゃ！」
「ぶげぇ!?」
一瞬で恋奈様に吹き飛ばされるティアラさん。
っていうか、なるほど。そういう魂胆だったのか。
「このバカ！　何言ってんのよっ、そんなワケあるか！」
「素直じゃないっすねー恋奈様」
「アンタも勘違いすんなー！　本当に違うんだから！」

「はいはいツンデレツンデレ」
どうやら恋奈様は裏切った自分をまだ好いていてくれてるらしい。
・・・・・・さっき考えた恋奈様瞬殺作戦は永久凍結にする。
「バカにしやがって――！　お前らやれ！」
切れた恋奈様の指示で一気に襲いかかってきた江乃死魔１５０人
それをまともに準備できていない段階の辻堂軍団は迎え撃つ事となった。

はっきり言えば自分一人でどうとでもなるレベルだった。
「あー、もう面倒くさいなぁ」
後ろから襲いかかってきた顔も覚えていない末端兵を振り向きざまに殴り倒す。

同時に正面と左右、計３人の同時攻撃。
完全に逃げ場をなくす形で第二陣の攻撃が来る。
が、遅すぎる。
「がっ?」
「んなっ」
「ぐえぇ!?」
特に本気も出さず、適当に３人同時に殴り倒す。
実際は高速で順番に一撃で昏倒させているだけなのだが、
くらった相手からすれば同時に３人に攻撃したように見えるだろう。
「キリがねーじゃん、ウザイな」
イライラする。
それをぶつけるため、八つ当たりのように近くにいる雑魚に人体におけるダメージが響く急所を狙う。
「うあ――――ぐぇ」
「ははっ、痛いっすよねぇ。だってめちゃくちゃ痛くなる所狙ったんだもん」
少し気が晴れるが、すぐさまた苛々しだす。
殴り倒しても殴り倒しても一向に敵が減る気配がない。

そういえば他の連中はどうしているのかと周りを見渡す。
すると意外なことにまだ全員粘っていた。
流石最強校稲村学園。
各々の強さはやはり不良の上の方なのだ。
全員がまだ無事なようでほっとした。
「・・・・・・ん?」
はて、何故自分がこいつ等が無事なくらいでほっとする事があるのか。
一瞬足を止めて考える。
「積年の恨みぃぃぃぃ――――あぼぉ!?」
隙ありと飛び込んできたバカを蹴り飛ばしつつ更に思考する。
ふむ、考えても釈然としない。
答えが見つからないのだ。
もう一度辻堂軍団の奴らを見る。
「戦いとはいつも2手3手先を考えておこなうものだ!」
「こいつ・・・・・・小賢しいと思う!」
こっちの奴らも結構強い。
どこかで聞いたことのあるフレーズを口にしながら軍団員Eが結構な数の江乃死魔

の不良を蹴散らす。
だがそれももうすぐ止まるだろう。
この数の暴力を覆すほどの強さを持つのはこの湘南でも三人しかいない。
辻堂センパイ、皆殺しセンパイ、そして自分だ。
いくら体格に恵まれ喧嘩や武道のキャリアがあるティアラさんやナハといえど単身で１５０人を相手にはできない。
「しゃーねーな、少しだけ本気だしてやるよ」
まさか全員を倒す気はない。
だがまだあっちにはティアラさんが控えている上に、こっちが壊滅したら結果的に自分一人で残りを倒さなくてはならなくなる。
ならば今こっちの戦力が生きている内に敵の数を間引いてやったほうが楽に済む。
まぁケガをしない程度に手助けしてやるか。

「え、あれ!?　いつのまに何でオレ達が有利になってんの!?」
「知らねーっすよ、いいから残ってる奴らも始末しろよ」
「何だかしらねーけど今日こそクソ恋奈に一泡吹かせられるぜ！」
「勝利の栄光を君に！」
そう言って未だ全員健在の辻堂軍団が残り四十人程の江乃死魔に突っ込んでいく。
どうやらこのように有利な状況になったのは初めてらしい、
何やら最初の時以上にテンションが全員高く、覇気に満ち溢れている。
これならば後は放っておいても・・・・・・
「「ぎゃあああああ!?」」
「無理っすよねー」
バカ女や他のメンバー達が突っ込んでいった先で吹っ飛ばされていった。
あんな人間を数メートル吹っ飛ばせる馬鹿げた筋力を持っているのは江乃死魔でも一人しかいないだろう。
「あらら、今の本気じゃねーのにズイブン派手にとんでったっての」
前回も確か自分とティアラさんが一騎打ちをした記憶がある。

さて、仕方ない。
じゃあ今回もそれに沿うとしますか。
自分の周囲にいる雑魚共を数秒で蹴散らして素早くティアラさんの前に出る。
これ以上こちらの戦力を減らされては楽ができない。
「お、梓みっけ。おれっちとやるかい？」
「前回あずに痛い目みせられてどうしてまた自分とやろうと思えるんすかね」
あまりの単純さに呆れ果てる。
自分を見て怖気づいて逃げてくれるならそれが一番良かったのだが。
「なんにせよ今の自分は辻堂軍団の一員っす。
ティアラさんが下がらないならまた立てなくしてあげますよ」
「上等だっての！　行くぞおら！」
まるでラグビーのタックルのように低い前傾姿勢をとるティアラさん。
見たところ今回はスパイクを履いている。
つまりダッシュ速度やブレーキの精度。
そして踏ん張る力などが僅かながら普段より上がっているのだろう。
だがまだ遅い。
普通のやつならそのトラックが突っ込んでくるようなプレッシャーにおされて身動

きできないまま弾き飛ばされるだろうが
こんな猪戦法が自分に通じると思っているのが酷く腹が立つ。
「だぁりゃあああああ!」
5メートルの距離を一気に詰め込んでショルダータックルをしてくる。
流石にこれを真正面から受け止める筋力は自分にはない。
よって回避をせざるをえない。
自分にとってはスロー極まりない突進を容易くかわす。
「ティアラさんは勘違いしてるんじゃないっすかね」
「うおっと!」
空ぶったティアラさんはすぐさまブレーキし、こちらに向き直る。
すれ違いざまに前みたく関節外してもよかったが今回は敢えてしなかった。
「攻撃力ってのは確かに筋力から生まれるものっす。
けど筋力からしか生まれないわけじゃない」
それを証明する。
「例えばホラ、受け止めてみろよ」
次の突進の体勢を立て直している所に一気に肉薄する。
同時に腹部に向かって正拳。

「ぐ、お!?」
「あずの細腕でも柔らかい箇所を高速で殴ればそれは必殺になるんだよ」
腹筋など意識して力を入れてなければ何の硬さもない。
相手が防御を意識するよりも早く、どこを狙うかすら解らない速度で殴ればどこを当てたとしても必殺の威力になる。
更にそこで人体の急所を狙えば一撃必殺だろう。
「ま、まだまだだっての!」
「だからそういうみてて鬱陶しい根性もムダなんだよ」
続けざまに二発程腹部に拳を叩き込む。
だが今回は防御に間に合ったらしい。
撃ち抜こうとした拳が硬い腹筋に阻まれる。
流石に鍛えているだけあってかなり硬い。
本気を出せば別にこの腹筋であろうともダメージを与えられるが、それをするとこっちの拳も痛い。
痛いのはゴメンだ。
「でりゃ!」
「おっと、そんなスローな動きで自分を捕まえられると思ってんのかよ」

やけくそのように拳を振るってきた。
だがそんな大振りの攻撃にあたるわけもない。
容易く避ける。
よけながら更に4発再び腹部に叩き込む。
「ぐおおおお、めちゃきくっての！」
「まじかよ、これでも倒れないとか自信なくすんですけど」
いくら腹筋を固めてたとは言え、まさかこれを耐えるとは。
想像以上のタフネスだ。
呆れた自分を突き飛ばすようにヤクザキックが飛んでくる。
慌てて下がって回避するが、ここで拙いことに気付いた。
「隙ありだっての！」
下がったあずをそのまま追撃するように突進してきた。
こっちはバックしたばかりで回避できる姿勢ではない。
が、やはりティアラさんは猪すぎる。
そんなすっとろい上に直線的な動きでは姿勢を崩しているあずにでも触れることはできない。
一瞬だけ本気をだす。

崩れた姿勢を無理矢理に正す。
同時に体を半身に構える。
そのままフェイントも何もない単純なスピードと貫通力のみを込めた掌底を思い切りティアラさんの横顔に叩き込む。
タックルの弱点は突き出した肩の真上あたりに頭部があることだ。
つまり相手の突進が見えてかつ冷静に対処できる実力があるのなら
むしろ急所をむき出しにしてこっちに向かってきている自殺行為に近い。
「あ、ぐお」
たまらず突進が止まる。
だが慣性は残っていて、崩れる姿勢でこちらにそのまま突っ込んでくる。
「おっと」
その不完全な突進を容易く横にそらす。
そのままティアラさんは大地に倒れ込んで目を回している。
仕方ないだろう、掌底はダメージを与えるというよりは衝撃を内部に打ち込む攻撃だ。
つまり頭部に打ち込んだ掌底はそのまま彼女の脳に振動を与えた。
これでしばらくは何もできないはずだ。

「ふう、今回もあずの勝ちっすね」
倒れているティアラさんから素早く離れて辻堂軍団の様子を見る。
どうやらティアラさんに数人ぶっ飛ばされたが、それ以上に残ったこちら側の方が相手を倒している。
ティアラさんに吹っ飛ばされたのもダメージはそれ程なかったらしく、直ぐに立ち上がっている。
見たところ既に人数差は逆転し、辻堂軍団３０人に対して江乃死魔は２０人。
これならば自分の出る幕はないだろう。
いや、あった。
一人だけ絶対に倒させてはならない人がいた。
しかもその人が今まさにバカ女と軍団員Ｅが襲いかかってた。
アイツ等さっきティアラさんにぶっ飛ばされたばかりなのに元気すぎだろ。
「死ねやクソ恋奈あぁぁぁあああ！」
「見せて貰おうか、江乃死魔の総長の実力とやらを！」
流石に恋奈様も並以上の連中二人がかりだときついらしい。
まともに二人の拳が顔や胸に直撃する。
それに堪らずたたらを踏む恋奈様。

けれど怯んだのは一瞬、
「痛くない！」
すぐさま姿勢を立て直し軍団員Ｅに詰め寄って胸ぐらを掴む。
まさか女の細腕で掴んでくるとは思わなかったらしく軍団員Ｅは何の抵抗もできない。
「オラァ！」
「ぐぼぉ!?」
恋奈様の凄まじい音をだす頭突きが突き刺さった。
軍団員Ｅは一度は耐えたが、そのまま二度三度続けて頭をぶつけられて直ぐに体から力が抜ける。
相変わらず馬鹿げたタフネスに物を言わせた喧嘩の仕方だ。
「ふぅ、江乃死魔総長の名はテメェらごとき雑魚が地に落とせる安いものじゃねぇんだよ！」
「けっ、ただしぶといだけの奴が偉そうに」
「だったらアンタもやってみる？
こいつみたいに頭を和蘭獅子頭みたく頭でっかちにしてやるわ」
「お、オランダシ・・・・・・なんだって？」

「ちっ、これだから学のないバカの相手は面倒なのよ」
正確にはオランダシシガシラだろう。
確か異常に頭部のコブがでかい金魚だった気がする。
見ればさっき倒された軍団員Eの額がその金魚見たく少し膨れ上がっている。
その見た目にくすりと笑ってしまう。
バカ女もそれを見たらしく、微妙に青ざめている。
流石に女としてはこんな目にあいたくはないだろう。
「ほら、かかってきなさいよ。
いい加減目障りな雑魚を潰せる良い機会だわ」
「上等じゃねえか、テメェのツラを・・・・・えっと?」
「例えが思い浮かばないのなら無理して真似すんなよバカ」
「バカじゃねえよ!」
何をやっているのやら。
というかこの展開は美味しくない。
慌てて間に入る。
「はいそこまで。恋奈様に手を出すのは自分が許さないっす」
恋奈様に背を向けてバカ女に対峙する。

「何だと、まさかテメェ裏切る気か!?」
まあそう思われても仕方がないだろう。
「どういうつもりかしら、私も理解できないんだけど」
背中に恋奈様の疑わしげな視線が突き刺さる。
襲ってくることはなさそうでとりあえずは安心だ。
「自分は恋奈様に裏切りの件で借りがありますからね。
今回だけは見逃してあげますよ。勿論他の奴らはここで痛い目見てもらいますけど」
口ではそういったが、実際のところは恋奈様が他の三大天以外の奴に負けるところを見たくないだけである。
「恋奈様もまさかこの状況で勝てると思ってないでしょう?」
「そうね、まさかアンタがここまで辻堂軍団に手を貸すのは想定外だったわ。
てっきり全滅するまで見捨てるものとばかり思ってたのだけど」
・・・・・・怪しいな。
何故ここまで追い詰められて余裕ぶっていられるのか。
恋奈様から目を離さず、辺りの気配を探る。
「ここまでの展開、記憶にないかしら梓?」
「そうですね、前回恋奈様が稲村学園に攻め込んだ時と全く同じ流れっすね」

「じゃあそうやってコソコソと警戒しなくていいんじゃないの？
何せこの後どうなるかなんてわかりきっているのだから」
やはりか。
恋奈様から視線を外して周りを伺うが誰も見えない。
しかし、いる。
海辺の砂浜だけあって土地としては低地にいる。
その為周りは砂浜と海と道路に続く塀しか見えない。
だが、その塀の上から大群の気配がする。
「いつから呼び寄せてたんですか」
「知りたい？　アンタ達と遭遇した時からよ」
つまり最初からか。
どうやら恋奈様はここで自分達を叩き潰すつもりらしい。
「呼んでいる数は三百。今の江乃死魔の6割ってとこかしらね。
これじゃあ腰越や辻堂を相手するには心もとないけれど、梓。アンタはどうかしらね」
不敵に笑う恋奈様。
さて、どうするか。

逃げに徹すれば人数など問題ではない。
誰も自分の足についてこれる奴などいないのだから。
「因みに、アンタが逃げた場合コイツらには容赦しないわ。
二度と私達に歯向かおうと思わないように徹底的に調教する」
「・・・・・・人質のつもりっすか」
後ろを見る。
そこには先程までの威勢の良さは消え失せ、見えない大群に怯える辻堂軍団。
無理もない、たかが３０人程度ではどうしようもない人数差なのだ。
「そうよ、けど梓には特別にチャンスをやるわ」
何がチャンスか。
どうせロクでもない取引に決まっていいる。
「今すぐ心から私に服従しなさい。そうすれば今いる奴らに手を出さず引いてあげるわ」
「まぁそんなことだろうと思ったよくそったれ」
つまりもう一度江乃死魔に戻れという事か。
「何でそんなにあずに拘るんすか」
勿論理由はわかっている。

おそらくは

「腰越に勝つためよ」

やはりか。

「正直なところ数だけ集めたところでアイツの人睨みで半数以上が気絶して意味がない。

だからこそアンタみたいな本物の奴が今必要なのよ」

「こんな裏切り者を再勧誘するあたり相当焦ってるみたいっすね」

「ええ、焦ってるわ。何せもう2ヶ月もなく腰越は卒業するんだから」

自分を誘うのはある意味正しいだろう。

自分の見積もりでも万が一くらいしか今の状態の江乃死魔では皆殺しセンパイに勝てる見込みがない。

所詮雑魚をいくら集めてもあの人のような別次元の強さの前では意味をなさないのだ。

だからこそ数では無く質も求め始めた。

「もし断ると言ったら?」

「アンタもその後ろの奴らも全員袋叩きにして無理やり従わせるわ」

つまりいつも通りの江乃死魔スタイルというわけか。

もう一度辻堂軍団全員の顔を見る。
相変わらず誰もがその人数差に怯え、竦んでいる。
ただ、誰一人としてその目にあずを責める質は無かった。
つまり全てあずに託すという事だろう。
ふむ。
こうなっては仕方がない。
「自分が降参すれば・・・・・・あずが恋奈様に従えば、
ほ、本当にそうすれば痛い目に合わずに済むんですか？」
「・・・・・・・」
僅かに驚いたようだが、直ぐに勝ち誇った嬉しそうな笑みを浮かべる恋奈様。
「ええ、約束するわ。アンタ達の無事と引き換えのギブアンドテイクよ。
さぁ跪きなさい。早く」
この瞬間を待っていた。
「だが断る」
「何ぃ!?」
「この乾梓が最も好きなことの一つは、自分で強いと思っているやつにノーと言ってやることっす！」

これが一度でいいからやりたかった！
だがまぁ、言われた恋奈様もこのフレーズに聞き覚えがあったらしく理解した瞬間湯沸かし器のごとく頭から煙が出る。
おお、マジギレしてる。
やっぱり恋奈様をおちょくるのは面白い。
「そう、あくまで歯向かうのね。
じゃあ言うことを聞かない駄犬には少しキツイお仕置きをしてあげる」
そう言って片手をあげる。
それが周囲の奴らを動かす合図らしい。
一気に凄まじい足音が響く。
「おいお前ら！　逃げるぞ！」
バカ女は素早く逃亡を指示する。
賢明な判断だ。最早なりふり構ってられない。
こんな馬鹿げた人数差など相手するだけ無駄だ。
「せ、せやけどこんな囲まれてたらどないしようも・・・・・・」
確かに、自分たちを囲むように陣形を作ろうとしている。
これでは逃げ場がない。

だったら仕方がない。
「じゃあ壁際に全員固まれ、あずが先頭でやるからお前らは全員あずの取り残しを狙え」
「「はぁ？」」
全員がわけがわからないような顔をする。
ここまで説明してやっても気づかないのか。
「あずが本気だすからテメーらは自分の身だけ守ってろって言ってんだよ！」
時間に猶予はない。
鈍い奴らを無視して高い塀のところへ走りより、そこに背中を向ける。
これで相手は横と正面しかせめて来れない。
十分だ。死角となる背後に危険がないだけで圧倒的に楽になる。
「オ、オレ達も行くぞ！」
バカ女の号令で全員があずの後ろに回る。
それでいい。
全員が自分の手の届く距離にいるだけでかなり守りやすい。
「流石に三百人はいくらあずでもスタミナ的にキツイ。
ある程度数を減らしたら逃げるチャンスを伺っていくぞ」
「お、おう」

バカ女も流石に勝てるとは思ってないらしい。
こちらの提案を大人しく受け入れた。
普段からこのくらい従順なら可愛いのだけど。
「あわわわわ、まじで人の波がこっちてるし！」
「アンタ等は倒すことよりも身を守る事に専念しろ。
どうしてもヤバいならあずが手助けするから絶対に離れんなよ」
「あずにゃんカッコイー！」
完璧な体調での喧嘩は退院以来実の所今日が初めてだ。
どこまで動けるのか興味ある。
ただ、まさかここまで危険なリハビリになるとは思わなかったけれど。
「雑魚が百人、二百人集まろうがあずの敵じゃねーんだよ！」

「はっ・・・・・・ふぅ」
息切れがする。
喉は乾ききっており、まともに息すらできない。
空気を吸えば乾いたのどを焼き、呼吸しなければ意識が遠のくほど酸素が足りない。
「マジパネェっすあずにゃん」
それほどでもある。
何せ今現在、誰一人倒れさせず相手を１５０人程倒した。
ひとりなら余裕だったのだが、流石に守る対象がいると数倍疲れる。
「でも、足がふらついてるじゃんかよ」
返す言葉が出ない。
しゃべる暇があったら大きく息をしたいのだ。
何とか折り返しの人数だ。
既に砂浜には１５０人の倒れた姿とそれに怯える１５０人。
僅かに所々最初に倒した奴が起き上がって来ているが、こいつらはダメージが残っていては何の驚異もない。
まさかあずがここまで粘ると思ってなかっただろう。
してやったりだ。

「怯むな！　梓は明らかに疲弊してる、相手の体力を減らすように攻めろ！」
後衛に控える恋奈様が前線にいる兵隊に指示を飛ばす。
なるほど。それはいい作戦だ。
けれどこれは自分たちにとって願ったりな作戦だった。
「おい、今からゆっくりあそこまでスライドしながら立ち回るぞ」
「オッケーあずにゃん」
「お、そろそろかいな」
今の台詞だけで通じたらしい。
行った自分が驚いた。
自分の作戦とはつまり逃げることにある。
だが流石に全員を無事逃がす前提となると極端に難しい。
そのため壁を背にする一箇所に集めてあずが守る方向で喧嘩をしている。
だが、だからといって逃げることを諦めたわけではない。
今ぐらいに相手が半分以下になった段階ならばそれこそチャンスが所々に見え始めているのだ。
まず自分がすることは変わらず後ろの辻堂軍団の奴らの盾となること。
それをしつつ、横にスライドしていき大通りに続く階段まで行くことだ。

その階段に到達すればしめたもの。
階段は一度に登る人数が当然制限される、そのため数が多かろうが意味がない。
恋奈様があずたちは徹底抗戦していると思っている今こそチャンス。
「雑魚があずに噛み付こうとしてんじゃねーよ！」
自分を奮い立たせるように叫ぶ。
「そんなしょぼい実力であずにマジで勝てると思ってんのか!?
大人しくビビって縮こまってれば痛い目見ずに済むのにバカじゃねーの！」
正直疲労が濃くて笑ってられないのだが、無理やり笑う。
この状況ならばこちらの虚勢も相手からすれば恐怖だろう。
そうしつつ周りの雑魚を蹴散らしながら牛歩のごとくスピードでじわじわと違和感を感じさせない程度に横に陣形を動かしていく。
「びびんなお前ら！　どう見ても息切れしてるだろうがっ、ただの強がりよ！」
余計なことを言う。
「あずにゃん、ヤバイなら無理しなくてワイら援護しなくていいんやで」
「そうそう、アタシらそろそろ自分の身守るくらいならできそうなレベルになってきたし」
ふむ。

さて、それが嘘か本当か調べる術はない。
これが嘘でひとりでもやられたら自分の頑張りは無意味なんだけど。
「駄目っす。アンタ等は責任を持って全員逃がすので最後まであずにくっついてろ」
調べる術がないなら手間をかけても確実な方を選ぶ。
「そして長谷センパイにあずがどれだけ頑張ったかを盛大に美化してセンパイに語れ」
「はぁ？」
全員が絶句している。
それ程変な事を言った覚えはないのだけど。
「もしかしてワイらを助けてくれるのってそれが理由？」
「それ以外に何があるんっすか」
まさか友情やら仲間意識から助けてるとでも思っているのだろうか。
そりゃ見捨てたら後味が悪いけれど、だからといって今みたくこんな面倒な手間を踏むくらいなら見捨てる。
けれどこんなピンチな状況はそうない。
だからこそだ。
これほどのピンチから助けたとなればセンパイもきっとあずを褒めてくれるだろう。
それが狙いだ。

まぁ実の所もう一つ助けてやってる理由はあるけれど、それは本命ではない。
「そろそろ無駄口叩かず行きますよ。いい加減しんどくて限界近いっすから」
そう言って、押し寄せる不良の群れに再び身構えた。

「よっしゃあああああ！　オレら逃げ切ったぜ！」
「しかも誰一人やられずに！」
「最強じゃん俺ら！　パネェ！」
「誰の・・・・・・おかげだと・・・・・・ふぅ、思ってんすか」

息を切らせる。
何とか目的通りにことは進んで無事逃げ切ることができた。
全員が階段を登りきったのを確認するまで自分が殿を努めたが、
やはり一人の方が圧倒的に動きやすく、むしろこのまま全滅させようかと思ったぐらいだ。

無駄な体力を使いたくないから相手せずに自分も逃げたけれど。
「あのクソ恋奈の驚いた顔ったら今思い出しても最高に笑えるぜ！」
全員無事を喜んでテンションが高いが、中でもバカ女が一番楽しそうだった。
「（くちゃくちゃ）それにしてもあれ程の数を相手にして誰もやられてないとはね。さすが愛さんとあれだけやりあえるだけの事はあるよ」
全員が座り込んで息を切らせている自分を見る。
反応しようと思ったが、一度休憩を挟んだため一気に疲れが来た。
足がガクガクして立てる気がしない。
「・・・・・・そのさ、梓」
「な、なんすか」
いきなり名前で呼んでくるとは気持ち悪いな。
「お前のおかげでオレ達は助かったよ。
ありがとな。辻堂軍団を代表して礼を言わせてくれ」
・・・・・・はて。
「や、やめてくださいよ気持ち悪いっす」
「き、気持ち悪い!?」
ショックを受けたらしい。

固まるバカ女。
「別にこの後か後日アンタ等が今日のあずの頑張りを長谷センパイにそれとなく語ればそれで良いっす」
息も大体整ってきた。
言葉がようやくまともに出せる。
「さっきも思ったんだけどさ、それマジで言ってんの？
それだけのためにアタシ等を守ってくれたってわけ？」
「八割はそうっすよ。
あずの行動の動機は一にセンパイの為、二にあずの為なんですから」
「じゃあ残り二割はどうなんだよ？」
答えるべきか迷う。
いや、恥ずかしくて正直に言えるわけがない。
「それはアンタ等が――――いや、やっぱ言いません。
この話はこれで終わりっす」
「おいこら、もったいぶんなよ」
「うっさいなぁ。ほっとけっての」
「んだとこら。人が恩を感じて優しくしてりゃつけあがりやがって」

「あぁ？　恩人によくもまぁそんな態度が取れるもんですねぇ」
あの時、恋奈様に江乃死魔に戻れば兵を引くと言われた時だ。
あずがそれに従えば自分たちは何の危険もなかったのに
辻堂軍団の奴らは誰ひとりとしてあずを売り渡そうとする目をしている奴がいなかった。
勿論決定はあずにあるから売り渡そうとする奴がいたところで結果は変わらない。
しかしまさか全員があずの選択を責める奴がいないとは思わなかった。
だからこそ今回だけは助けてやった。
「ねぇアンタ等」
「なんだよ」
「何で恋奈様に自分売り渡そうとしなかったんすか？
あずが江乃死魔に戻ればこんな危険な目に合わずに済んだのに」
もしかすれば、この辻堂軍団は自分にとって江乃死魔とは違う何かを得る場所になるかもしれない。
全員はあずの問いにキョトンとした顔をする。
まるで何言ってるのかわからないといった感じだ。
「何って、お前も辻堂軍団の仲間だからだろ。

ダチをあんなバカ恋奈のところに売れるかよ」
仲間、か。
まさか長谷センパイ以外にこのフレーズを使ってくるとは思わなかった。
自分を傷つけてでも力になりたいと思う人。
なるほど、どうやら僅かだが自分もこいつ等を仲間だと思ってしまっていたらしい。
「・・・・・・そっすか」
「お、何か照れてるぞコイツ」
「（くちゃくちゃ）あずにゃんの照れ顔まじ可愛いんですけど」
助けてやるんじゃなかった。

「長谷センパーイ」
「はいはい、どうしたのって・・・・・・え？」
後日の金曜日。
毎週の恒例となった勉強会で自分はトイレに行くと嘘をつき、即座に廊下で着替え

た。

そして素早く部屋に入る。

あずのその格好に長谷センパイは目を丸くして驚いている。

「何でウチの体操着持ってるの?」

「前に辻堂集会に参加しやすいようにこれで偽装して学園に入れとバカ女達に言われたので」

「なるほど」

頷きながら長谷センパイは食い入るようにじーっとあずの胸を見ている。

「何でこんなにサイズの合わないのを着てるのさ?」

ワガママボディが凄い我侭いってるよ」

「これが一番でかいサイズだったんっすよぅ」

パツパツの体操着なため体のラインがくっきりと浮かび上がっている。

まさに色物的な格好だが、男を魅了するにはいいアイテムだ。

「何でブラつけてないの?」

「ふふ、そっちのほうがセンパイ的に嬉しいんじゃないっすか?」

ゆっくりとセンパイに詰め寄る。

「な、何で偽装目的のその服をここで来てるのかな?」

「センパぁイ・・・・・・あずにそれを言わせるんですか？」
座ったまま後ずさりするセンパイに跨り、胸を強調する姿勢でセンパイと同じ目の高さになる。
同時に両手をセンパイの頬に添え、目を合わせる。
トッピングとして目をできる限りトロンとしたものにする。
これで男はイチコロだ。
「あ、う・・・・・・い、乾さん。今日は勉強会の予定では？」
「勿論しますよ。けど、勉強は勉強でも保健体育っすけど」
よし、もうひと押しだ。
見た所長谷センパイはまんざらでもなさそうだし、誘惑に負けつつあってあずを押しのける事もしない。
これならば今日こそ。
「ほほぅ、保健体育か」
「ええ、いつもは教えてもらってばかりっすけど今日はあずの方が色々教えてあげ・・・・・・へ？」
何か今目の前じゃなくて背後から聞こえた気が。
ゆっくりと声のした方向を向く。

するとそこには鬼がいた。
「にゃー！　辻堂センパイ何でいるんすかぁ!?」
「逆に何でアタシがここに来ないと思ったのかが不思議なんだけど」
「メーデーメーデー！　戦略的撤退に移るっす！」
「残念！　魔王からは逃げられない！」
逃げようとするものの、一瞬で捕まった。
流石にこんな密室ではあの辻堂センパイから逃げる手段はなかった。
無念。
その後、長々とありがたいお説教。
残念ですけど話は一切聞いていません、南無。
大方言いたいことが済んだのか、少し落ち着いた様子の辻堂センパイは何やらあずの体操服の細かいところに気付いた。
「それってアタシの前使ってたヤツじゃんか」
「え、ええぇ。バカ女・・・・・じゃなくてクミセンパイが宝物として持ってたのをあずがいただきました」
「え、アタシはこれゴミ箱に捨てたはずなんだけど」
あのバカ女こえぇ。

普通に犯罪行為してやがる。
人のこと言えないけど。
「まぁいい。で、どういうつもりだ」
「ど、どういうつもりとは？」
何を怒っているのかわからない。
どうやら辻堂センパイの体操着をもらったこと自体には怒っていないみたいだけど。
あずのそのよくわかっていない顔に切れたらしい辻堂センパイ。
「アタシの体操着来てそんなにパッツパツにしやがって！　嫌味かキサマッツ！」
「にゃー！　乳首はだめ！　乳首はだめー！」
ちぎれそうな力で両乳首を思いきり摘まれる。
めちゃくちゃ痛い。
しかも解こうと暴れると余計に引っ張られて死ぬほど痛い。
「愛さん、流石にそれは可哀想じゃ」
「流されそうになった大は黙ってろ」
「はい」
ヒーローは魔王に倒されてしまった。
おお勇者よ死んでしまうとはなさけない。

「梓、大とそういう事したいなら必ずアタシがいる時にしろって言っただろうが」
「で、でも流石に初めてはノーマルに二人だけでしたいっすよぅ」
「あー・・・・・・気持ちはわからんでもないけど」
揺れる辻堂センパイ。
あずの気持ちを理解してくれるあたり結構話が通じる人だ。
「考えておいてやる」
という事は殆ど許しが出たようなものだ。
やった。
「俺って見えてる？」
大丈夫っす。むしろセンパイしか見えてません。
今日は流石にもうセンパイとそういう事をする空気ではなくなった。
けれど次回なら、辻堂センパイの許可がでている事を考えれば次こそいけそうな気がする。
「そういえば乾さん」
何か思い出したように長谷センパイが話題を変える。
「聞いたよクミちゃんから。
江乃死魔の人達に絡まれてる辻堂軍団の人たちを一人残らず助けてくれたんだって」

意外だった。
まさかあのバカ女が長谷センパイにあのことを伝えていたとは。
あれも半ば冗談のようなものだったのだけど。
「あぁ、アタシもそれ聞いたわ。
悪かったな乾、ウチの奴らがお前の世話になったみたいでさ」
「い、いえ。自分も一応辻堂軍団員なんで」
何だろう。
この感じ、すごく初めてなような気がする。
「辻堂軍団の人達は俺の友達なんだ。
その人達を助けてくれた乾さんには感謝してる。
改めて礼を言わせて欲しい、ありがとう乾さん」
いつもより幾分増した優しげな雰囲気。
その穏やかな空気をだす長谷センパイは僅かに顔を綻ばせて礼を言って頭を下げる。
「やめてくださいよ、別に礼を言われるような事なんてしてねーっすから」
人生で誰かに心からの礼を言われたことは何度かある。
けれどなんだろう、今回のは訳が違った。
自分が頑張って、誰かにはそれを喜んで貰え、そして心から一切の濁りのない感謝を

される。
そんなことは今までの人生で何度体験できているだろうか。
少なくとも記憶にはなかった。
「確かに、してることは喧嘩だしその行い自体は褒められない事かもしれない。
実際に辻堂軍団の皆は無事でも江乃死魔の人達は大怪我をしたんだろうし」
頭を上げて真っ直ぐセンパイはあずの目を見る。
「だけど君達は終始逃げる事を考えてた、対して江乃死魔は数で君達を叩き潰そうとしてたんでしょ?」
その問に大人しくうなづく。
それをみた長谷センパイは嬉しそうな顔をする。
「俺は乾さんのそういう所が好きだな」
どういう所だろうか。
よくわからないため反応に困る。
「俺は知っての通り理不尽な暴力なんて嫌いだ。
けどそれ以上に大切な人がケガをするんなんて一番嫌なことだ。
だからこそ、喧嘩でまずその危険性を考えて危ない相手から逃げる君の性格が好きだな」

そんなこと言われたのは初めてだ。
「まぁ仲間を見捨てるのはどうかと思うけどね」
「それにこいつは無傷で勝てそうなヤツにはスゲェ痛めつけるぞ」
「ちょ、余計な事言わないでくださいよぅ」
三人で笑い合う。
何だろうなこの感じ。本当に不思議だ。
すごく心地よくて、胸が満たされて。
そうだ、まるで本当の家族みたいだ。
「梓。お前がいつまでウチの所にいるかはわからないけど、アタシは長く居て欲しいと思ってる。
アタシにとってもお前はその・・・・・結構好きだし、何より一緒にいて面白い」
辻堂センパイが照れながら言う。
その真っ直ぐな好意に言われたこちらも赤面する。
「そのさ、梓。お前はアタシの事をどう思ってるか知らないけど、
アタシはお前の事をダチだと思ってるんだ」
長谷センパイが何故辻堂センパイに惚れ抜いているのか、その片鱗を垣間見た。
なるほど。これは強烈ですわ。

普段の凛々しさや頼り甲斐のある辻堂センパイではなく、穏やかな女性らしさと可愛らしい少女らしさ。そしてなによりも自分にはない純粋さ。

それらを合わせ持つ彼女の姿に同性ながらキュンときた。

「自分も辻堂センパイの事は尊敬してますよ。

だからこそ今だって辻堂軍団抜けてないし、アイツ等だって助けたんです」

勿論長谷センパイに褒められたい、アイツ等があずを一切疑ってなかったなど、理由は沢山あった。

けどその理由の中に悪意なんてものは一つもない自信がある。

そんな自信をもった今だからこそ純真な辻堂センパイの好意に応えられた。

だからこそ後悔することもあった。

正直に言えば今日恋奈様に再勧誘されたとき僅かに心揺らいだのだ。

自分は恋奈様を裏切ったことを辻堂センパイとやりあったあの日から後悔し続けている。

ティアラさんやハナちゃんセンパイだって自分のことを未だ嫌っていない。

間違いなく自分はあの江乃死魔の中でも居場所があったのだ。

それを自らの手で叩き壊し、あまつさえ恋奈様を思いつめさせた事を後悔する。

長谷センパイ達と一緒にいるとそういうことをよく考えるようになった。
この胸の内は決して悪いものじゃないのだろう。
目の前の二人ならきっと肯定してくれる。
・・・・・恋奈様は今日自分の力が必要だと言った。
卒業を控えた皆殺しセンパイを倒すための力をあずに求めた。
自分は江乃死魔に戻るつもりはもうない。
この辻堂軍団を抜ける時がヤンキーを辞める時だからだ。
だからもう恋奈様の力になる事はできない。
――――いや、本当にそうなのだろうか。
「辻堂センパイ、自分は辻堂軍団に入ってるけど恋奈様のお手伝いとかしちゃ拙いっすかね」
答えが出ないからこそ聞く。
辻堂センパイや長谷センパイは必ず自分にとっていい結果をだす答えを言ってくれるのだ。
辻堂センパイはその疑問に僅かに首をかしげる。
「お前が手伝いたいなら自由だろ。
辻堂軍団の規則はアタシの気分を害しない事だ、それが守れれば後は好きにしたらい

い」

何を当たり前のことをというように辻堂センパイは答えた。

そうだ。

辻堂センパイはこういう男前な人だ。

憎たらしいほどに格好いい。

長谷センパイが惚れてしまうのもわかる。

「やっぱ辻堂センパイは格好いいなぁ。

もし辻堂センパイが男なら長谷センパイと二股かける所っすよ」

「「それは嫌だなぁ・・・・・・」」

ハモる二人のセンパイ。

再び三人で笑う。

誰かの力になるってのは面倒だ。

今日はそれを痛いほどわかった。

けれど、自分でも誰かの力になれる事もわかった。

「長谷センパイ、辻堂センパイ。

自分、二人には一生ついていきます」

「うん。よろしくね」

そういって微笑む長谷センパイ。
「まぁ、アタシは諦めてるから何もいわねーよ」
諦めたようなことを言っているが、明らかに笑顔だ。
今日、あずは一つわかったことがある。
今まで答えを出せずにいた仲間というフレーズ。
その意味をようやく理解した。
「長谷センパイ、やっと自分の中での仲間の意味を見つけました」
「そう、それはどんなかな？」
「あずを疑わない奴らです」
裏切った自分だからこそ、辻堂軍団の奴らのあの反応は心に響いた。
裏切った自分を尚信じようとして恋奈様は自分を求めた。
そして今目の前に一切の損得を超えた関係の二人がいる。
「うん、乾さんらしいね」
「そうだな、腹黒いお前らしいよ」
少なくとも目の前の二人とは一生仲間でいたい。
まだまだ自分には理解できない事があるけれど、それも二人と一緒にいれば解決していけそうだ。

長谷センパイを好きになって本当によかった。
未来はこんなにも明るく見える。

２２話：フレンズ　アゲイン

人生なんてものはなるようにしかならない、そういう考えは甘えだろう。
結果を求めて努力する者と、妥協して現時点での自分に見合う進路を選ぶ者。
人の生き方は様々だ。
結果として、マキさんは受験に合格した。
俺や愛さんの目指す大学と同じ所だが、そこは難関というほどではないにしろ
それでも勉強しないで受かるほど門ががら空きなわけでもない。
全然勉強していなかった3年の夏頃からどうすれば合格できるところまで勉強したのか。
その努力の程を知ることはできないけれど、ある程度察することくらいはできる。
「モグモグウマー！」
俺は受験も終わり、卒業式まで本格的にすることのなくなった女性。
腰越マキを見る。
いつも通りの椅子に座り、俺の用意した少しばかり豪勢な食事を美味しそうに食べている。

その食べ方はワイルドで、無邪気さを感じる。
「マキさん、美味しい？」
「あぁ！」
本当に美味しいのだろう。
満面の笑みと大きな声がそれを証明している。
その子供のような彼女に俺は母性的なものが刺激されたのかほっこりする。
「なぁ大」
「なに、愛さん？」
「その目、何だか父さんみたい」
ふむ。
第三者から見てそう見えるというのならそうなのだろう。
俺自身もそんな目をしている自覚はある。
愛さんはそんな俺を複雑な表情で見ていた。
「嫉妬するべきかどうか、正直迷う」
だろうなぁ。
子供を見る目で女の子を見ていて、それに嫉妬するってのも何かおかしい。
けど自分以外の女性を見ていたという行為をしていることには変わりない。

だから愛さんは複雑なのだろう。
「ん～・・・・・・」
愛さんは顎に指を添えて未だガツガツとワイルドに食事するマキさんを見る。
「おかわり！」
「はいはい、ちょっと待っててくださいね」
俺はマキさんの突き出す茶碗を受け取って席を立つ。
彼女はもう丸々三合は食べている上に唐揚げやらギョーザやらシーザーサラダやらジャンル問わず人気のおかずを片っ端から胃におさめている。
それでもまだまだ入るらしい。
すごいね、人体。
「うん、やっぱ嫉妬する所じゃないな」
愛さんは愛さんで自己解決したらしい。
そのまま置きっぱなしだった箸を掴んで自分も食事を始めるみたいだ。
俺もそろそろご相伴にあずかろうと思う。
マキさんの茶碗に御飯を詰め込んだら俺も食べるとしよう。
「コラ辻堂！　それ私が次食べようと思ってた奴だぞ！」
「そんなの知るかよ。だったら名前でも書いてろっつーの」

二人がいきなり喧嘩を始めた。
慌てて振り返る。
愛さんはどうやらマキさんの言葉を無視して竜田揚げを口に運ぼうとする。
「させるか」
「んあ?」
愛さんの箸からマキさんが器用にも同じく箸で竜田揚げをかっさらう。
口を開けていた愛さんは若干気づくのに遅れた。
そのまま愛さんが気づく前にマキさんは竜田揚げを口の中に入れた。
「ん〜、やっぱリョウの作った飯はうめぇな」
リョウ? ああ、よい子さんの事か。
ん? 確かマキさんって良子さんの事もリョウって読んでいたような・・・・・・
「テメェ! 舐めた真似してくれるじゃねぇか!」
愛さんがブチ切れてマキさんにメンチをきる。
「食卓についたらそこは戦場だろうが! 油断したテメェが悪い!」
「むむ・・・・・・」
すげぇ。
何やら今日のマキさんは調子がいいのかいつもよりプレッシャーがある。

あの愛さんが気迫で僅かにのまれている。
だが俺はマキさんの言葉に頷けない。
「そんな事しちゃダメだよマキさん。
モノを食べるときはね、誰にも邪魔されず自由で、なんというか救われてなきゃあ」
そう言いながらご飯山盛りの茶碗をマキさんの前に置く。
同時に今残っているおかずを確認する。
マキさんはどうやら俺の分は残してくれているらしく、どの種類のおかずも必ず一定の個数残っている。
こういう心遣いが俺以外にできないのは困るのだけれど、それでも俺が彼女に特別扱いされている事実に内心喜んでいる部分もある。
「はい、愛さんも俺のあげるから機嫌治して」
そういって俺の分の竜田揚げを愛さんの受け皿に置く。
だが愛さんは今さっきマキさんに言いくるめられた事を悔しがっているのか、苦い顔をしている。
どうやら俺が愛さんの皿に竜田揚げを置いたことすら気づいていない見たいだ。
「愛さん」
「ん、何だよ」

「はい、あーん」
「・・・・・・え、ええ？」
俺が箸で掴んだ竜田揚げを愛さんの口に近づける。
愛さんはその行為を理解はしているものの、戸惑っている。
そりゃそうか、目の前にはマキさんがいるのだからここでイチャつくのも硬派な愛さん的にはＮＧだろう。
だがこの長谷大、常識など彼女とイチャつくためならばかなぐり捨てる事なぞ造作もない。
「あーん」
「ちょ、大。ここでそれは流石に」
引かぬ。
俺は愛さんの慌てる仕草を愛でながらも箸を下ろさない。
「・・・・・・じー」
「こ、腰越。見るんじゃねぇ・・・・・・」
マキさんも流石に気づいた様子で、ひたすらあーんを強要しようとする俺と愛さんをジト目で見ていた。
「いらねぇのか食べたいのかはっきりしろよ。

じゃねぇと私が食っちまうぞ」
はっきりしない愛さんに業を煮やしたマキさんは少し拗ねたように展開を促す。
愛さんもその言葉に僅かに圧されたのか、覚悟を決めたらしい。
キリっとした顔で俺と目を合わせる。
「あ、あーん・・・・・・」
小さな口をゆっくりと開けつつ、恥ずかしいのか目は閉じている。
それでいて白くてきめ細やかな肌は照れで赤みがかっていてイッツソゥキュート。
百万人の長谷大がスタンディングオベーション。
俺はごくりと唾液を飲み込み、そっと口の中に竜田揚げを進ませる。
ここでマキさんがいないのなら不意打ちで愛さんにキスをする所だが、流石に今はダメだ。
箸はゆっくりと進み、愛さんの唇に当たる瞬間
「いただきっ」
「うおっと!?」
横からマキさんにかっさらわれた。
まぁこんな展開になる気はしていた。
「んん～、んまいなぁ」

舌鼓を打つマキさん。
相変わらず美味しそうに食べてくれるから今みたいな事をされても許せてしまう。
「おい、こら・・・・・・腰越ぇぇぇぇ」
地獄のそこから響いてきそうな声を出す愛さん。
流石に愛さんは許せなかったそうだ。
「わりぃな辻堂。ダイとイチャつきたいのなら私の知らないところでしろ。
我慢してみたがやっぱり体が勝手に動いたわ」
「知るか！　テメェが出ていけばいい話だろうが！
今日だって大と久々に二人きりになれると思ったらまた・・・・・・ッ！」
確かに最近俺と愛さんが二人きりになれる日は少ない。
どうも乾さんは俺達が二人でデートするのが嫌らしく、毎回置いていかないでと言いながらついてくる。
一度乾さんにはデートする事を教えず、愛さんと二人で出かけたのだが
デートが終わった後家に帰ったら玄関の前で座って俺を待っていて、完全に拗ねていた事がある。
機嫌を直してもらうために色々四苦八苦したものだ。
「うっせぇな。今日はダイが私に飯を食っていけと言ったんだぞ。

私が自分からたかりに来たわけじゃない」
「ぐ、ぐぐぅッ」
冷静な反論をされてグゥの音しか出ない愛さん。
グゥの音も出ないワケじゃないようだ。
「なぁダイ。私にもさっき辻堂にしたことをしてくれよ」
「へ？」
言いながらマキさんは俺に顔を寄せてあーんと口を開く。
「ほら、ダイ。お前の手で食わせてくれよ」
そう言いながら妙に色っぽい雰囲気を出すマキさん。
どうしよう、今少しドキっとした。
「大の手で食わすんじゃなくてアタシの手を食らわせてやるよ！」
「おっと危ねぇ！　なにしやがる！」
愛さんは握りこぶしをマキさんの顔に叩き込もうとするも、間一髪マキさんは俊敏に顔を引いて躱した。
すげぇ、今までボクシングを見たことは何度かあるけれどここまで速いフックも、軽やかなスウェーバックも見たことない。
ただ、若干髪がかすったらしく、マキさんの前髪がかすった箇所だけちぎれた。

それをみて最近おとなしいマキさんも眉を上げた。
「何しやがるゴラァ！」
箸を置いて愛さんの胸ぐらを掴む。
あぁ、やっぱり二人が揃うとこうなるのか。
「テメェからふっかけた喧嘩だろうがタコ！」
愛さんも引く気はないらしく二人のあいだに一色触発の空気が現れた。
どうしようか、このまま放っておいたら確実に長谷家は崩壊する。
間違いない。
「ちょ、二人共落ち着いて」
慌てて俺は仲裁に入る。
二人はメンチのきりあいを一旦やめて俺を睨んだ。
「ダイ、テメェが私の前で辻堂とイチャつこうとしたからこうなったんだろうが」
「大、こうなるからこの狂犬と手を切れって普段から忠告してたんだぞ」
二人が俺にヘイトを向けた。
若干怖いけどこれはいい流れだ。
流石に俺相手に家を崩壊させるほどの暴力は振るってこないだろう。

『ただいまヒロー。今日のお姉ちゃんはゲティな気分よー！』
それも特盛のルパンゲティー！』
ようやく帰ってきたらしい。
姉ちゃんの足音が廊下からこちらに向かってくる。
「聞いてんのか大！」
「もちろんでございます」
現在俺は愛さんとマキさんに説教されている。
二人共椅子に座っているが、俺は怒られているため二人の足元で正座だ。
「じゃあさっき私が言ったことを言ってみろ」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・それが答えだな」
マキさんがすごくサドっぽい目で俺を見下ろす。
彼女は時々足を組みかえるのだけど、その度におれの目線だとマキさんのスカートの中が見えそうになるんだよな。
まさかマキさんがその事を気づかないとは思えないんだけれど。
「ま、マキさん」

「なんだ。言い訳なら聞いてやらんでもない」
また足を組みかえる。
今のは見えてしまった。白だ。
「いえ、その。さっきから・・・・・・その、見えちゃいそうなんです」
「あぁ？　何がだよ」
とぼけているようだが確実にマキさんは気づいている。
だって、今すげぇ悪い顔してるし。
「何いってんだよ大。見えるってなにが・・・・・・」
そういって愛さんは俺の隣にすわってマキさんを見る。
だがその瞬間に愛さんは固まった。
俺が何を言っていたのか気づいたのだろう。
「大ぃッ！　お前、お前ッッ！」
「俺のせいじゃないってマジで。ちゃんと目そらしてましたし」
胸ぐらを掴まれてガクガクと揺さぶられる。
「あら来てたの。やほー、マキちゃんも来てるなんて」
「あ、ども」
珍しい。

マキさんが自然な様子で姉ちゃんに会釈した。
初めて見たかもしれない、こんな礼儀正しいマキさん。
「聞いたわよ、大学受かったんだって。
いやぁ私も勉強見てあげた甲斐があったってもんねぇ」
「その事には感謝してるよ、今までありがとな」
「よぅし今日はパーリィよ！　ひろ、酒をもてい！」
マキさんが合格して心底喜んでるみたいだ。
姉ちゃんは上機嫌で俺に指示を送る。
ただ俺はそれに応える事はできるわけもなく。
「腰越！　テメェもいちいちアタシの大を誘惑してんじゃねぇぞ！」
「うっせぇ、私がどうしようが勝手だろうが」
ヘイトが俺からマキさんに移ったらしい。
俺はそそくさとその場を離れて酒の用意に入る。
流石に姉ちゃんの居る前で殴り合いの喧嘩をはじめるほど二人も命知らずではあるまい。
「あら、もう食事始めてたのね」
「大丈夫だよ姉ちゃん。すぐに新しく別の用意するから。

ルパンゲティが良いんだっけ?」
「うんうん、今日はそんな気分」
確認をとって再びパスタを茹でるために鍋に水を入れ沸騰させる。
同時に口が寂しくないように別に取っておいたレバニラや回鍋肉など酒に合う中華料理を用意。
少し冷めているためこちらを温めなおす。
「ひーろ」
「はいはいなんでしょう。ちょっと火を使ってるから気をつけてね」
後ろから姉ちゃんが抱きついてきた。
姉ちゃんの柔らかい二つの感触が背中にあたって少し意識してしまう。
「ん? なんか姉ちゃん酒臭くない?」
「バレては仕方ない、実はお姉ちゃん帰り道に楓ちゃんと少しひっかけてきたのよ」
だからか。
妙にテンション高いと思った。
姉ちゃんは更に俺の首に腕を巻きつけてくる。
「姉ちゃん、流石に動きづらいって」
慌てて火を止める。

「んふー、いい具合に酔いながら弟の背中を堪能する。これ以上の贅沢はないわぁ」
「うあ、力つよすぎぃ！」
ギリギリと俺の首をアームロックしてる。
傍から見たら仲の良すぎる姉弟の図だが水面下では殺人が起ころうとしてる。
俺がタップをするものの姉ちゃんは逆に力を増し続けている。
落ちる、まじで落ちる。
「おい、なにやってんだ！　大の顔が巨峰みたいな色になってる！」
「えぇい！　不届き者めが邪魔するでない！」
「うぉう、すっげぇプレッシャー」
気がついた愛さんが驚いて助けに入るが姉ちゃんの一括を受けて足を無意識に止めた。
マキさんも僅かに驚いた様子だ。
だがもう何もかも遅い。
俺の頭には十分な血流、及び酸素が届かず間もなく気絶した。
「ちょ、大が息してない」
「ウェルカムチャンスッ！　実はお姉ちゃんは弟限定で人工呼吸の達人なの！」
「させるか！　それはアタシがする！」

「・・・・・・埒あかねぇな、このままじゃまじで危ねぇぞ」
言い争いをする二人を尻目にマキさんが俺の救命行為をしてくれた所まで薄れた意識の中僅かだが理解した。
そしてそのまま俺の意識はブラックアウト。
なんで自宅にいるのに命の危険に晒されねばならないのだろうか。
「まぁ、何というか役得って奴かなこれは」
唇に柔らかい感触がした。

「ぐ、参りました。先輩」
「はいは～い、それじゃ今日の稽古はこれにて終わりっと」
そう言って近場においていたスポーツドリンクを一気飲みする。
時刻は夜八時。
場所は江ノ島の砂浜だ。
「ふう、汗気持ちわりぃ。着替えもってくりゃ良かった」

３学期が始まって以来、自分とナハはこうして頻繁に組手をしている。
もっとも組手とは名ばかりで、実際の内容は一定時間自分は回避やガードに専念して時間切れになったらこちらも攻めるハンデありの内容なのだけれど。
それくらいのハンデがないと一瞬で終わってしまい稽古にならない。
今回も今までと同じく、十分程ナハに一方的に攻撃させてこちらは回避をし続けた。
その後こちらも攻撃を開始し、一分でナハが敗北宣言。
横目で未だ立ち上がれずうずくまっているナハを見る。
「ちょっとキツかったかな。大丈夫っすか？」
「い、いえ・・・・・自分の未熟故の痛みなので先輩はお気になさらず・・・・・・」
そうは言うものの、鳩尾を押さえて息も絶え絶えだ。
かなり痛いらしい。
まぁ本人が気にするなというのなら気にしないことにする。
「それにしても何だろうなぁ。妙に最近体が軽いんだよね」
軽くステップを踏む。
気分のノリが違うのだろうか、やはり何か体の重さを感じない。
「元々先輩は才能に溢れていますし、稽古を重ねれば相応以上に強くなるのも当然では」
「いやいや、確かにそれもあるかもだけどコレは何か違う気がする」

メンタル的な要素だろう。
なんだか知らないけれど取り敢えず本当に気分も体も軽い。
それこそ数日まともに寝てなくて、久々に夜10時から翌日の朝10時までぐっすり寝たような。
いや、実際に12時間も寝たら体のコリとかやばいけど。
「では、何か良いことでもあったのでは？」
気の持ちようで肉体の性能も変化する事はよくあります」
ナハもそういう結論を出した。
良い事か。
ふむ。
思い浮かばない。
強いて言うなら前に学校であった歴史の小テストで悪くない点数を取ったことくらいか。
「顔色を伺っているようで失礼かもしれませんが、先輩は最近笑顔が多くなった印象が」
「ん？　元々自分結構笑ってると思ってたけど」
「いえ、愛想笑いや作り笑いではなく心から何かを楽しんでいるようだと我は思っています」

何かを楽しむ。
あながち間違いじゃない。
はっきり言えば毎日が楽しいってのはある。
勿論ストレスだってある。
金は全然足りないし、学校なんてかったるいし、どうでもいい奴らにキャラつくるのも正直面倒くさい。
しかしそのネガティブ要素を払拭してまだ余りある幸せな時もある。
ペットボトルを置いて、近くに置いておいた携帯電話を取って開く。
同時に待受画面が目に入る。
「・・・・・・嬉しそうですね、先輩」
どうやらその待受を見て自分はそういう表情をしていたらしい。
まあこの待ち受けは現在自分にとって最高の癒しをもたらす画像だから仕方ない。
因みにこの待ち受け画像は自分と長谷センパイのツーショット写真である。
前に辻堂センパイと二人っきりでデートした事を拗ねたフリしてゴネまくった結果、自分と長谷センパイの二人きりでデートする事になった。
その時に撮ったものだ。
特にどうということはない、江ノ島のお店の一角で店員さんに撮ってもらったもの

だ。

その画像の自分は確かに楽しそうにしている。

「ナハも誰かいい人いないの？　好きな人とかできたら案外急成長するかもしれないよ」

「・・・・・・自分にはまだ早いかと」

一応ナハはまだ中学生だし確かに色恋沙汰には経験乏しいだろう。

とはいえこのご時勢、小学生ですら性行為していることだってザラにある。

別に中学3年生が恋愛適齢期外ということはない。

「あのティアラさんだって夏頃から凄いイケメンのセンパイとよく一緒にいるって噂ありますし

別にナハだってその気になればいい男見つけれるんじゃないかな」

何度かその男の顔を見たことがあるが、本当にイケメンだった。

もっとも別に自分は容姿より相性を優先するため欠片も彼には興味が湧かなかったが。

ともあれ普通の女子だったら絶対に付き合いたいと思うレベルだろう。

「我はまだそういう事には興味がありません」

にべもない。

この話はこれまでにして欲しいというアクセントがあった。
「そっすか、残念。けどさ、そのままじゃ絶対に辻堂センパイに一撃加えるのなんて無理だよ」
そう言って自分は持ってきたペットボトルを飲み干して遠くにあるゴミ箱に投げ入れた。
ジャストミート。狙い通りにペットボトルはゴミ箱にホールインワン。
こういう体を動かしたりすることに対してスペックが異常に高い自分に笑いがこみ上げる。
「んじゃ、あずはそろそろ用事あるんで失礼するっす」
「はい、稽古に付き合っていただいてありがとうございました」
深々と頭を下げるナハ。
「毎回やめてよそれ、恥ずかしいじゃん」
そもそも自分がもちかけた稽古だ。感謝される理由がない。
だがナハは何度言ってもやめてくれない。
恐らく彼女にとって当然の行為なんだろう、だからこそ改めることができない。
「ま、いいや。それじゃ」
おいていた手提げを拾い、センパイに貰ったお気に入りのマフラーを首に巻いて次の

目的地に向かった。

「うっさい、あっちいけバカ」
「ちょ、話くらい最後まできいてくださいよ！」
「うっさいバカ、さっさと帰れアホ」
時刻は２１時。
場所は江ノ島に続く弁天橋の中央部。
そこに恋奈と梓は立っていた。
「も、もうそろそろ江乃死魔は皆殺しセンパイと最後の決着をつけるんっしょ？
だったらあずの手助けがいるんじゃないかと・・・・・・・」
「黙れおたんこなす。裏切り者はあっちいけ」
先程から梓はひたすらに恋奈にマキと喧嘩をする際自分も混ぜろと提案していた。
しかし恋奈は梓の方を見ることもなく、海を眺めたまま話をぶった切っていく。
まさかここまで話を聞いてくれないと思っていなかった梓は流石に戸惑った。
「お、おたんこなすって・・・・・じゃあ恋奈様は今の江乃死魔で皆殺しセンパイに勝

てる見込みあるんすか？
　ないですよね。だからあずは親切心でその日だけ江乃死魔に戻ってあげようかなと言ってるのに」
　確かに梓のその提案は単純に考えれば江乃死魔にとってはありがたいものだった。辻堂愛や腰越マキに次ぐ実力者である彼女がいればそれだけで勝てる見込みが生まれる。
　ただ、それを考慮して尚恋奈は話を聞くつもりがなかった。
「私の下僕でもない奴の手助けなんかいらねーっつってんだよ。話はそれだけ？　じゃあバイバイ」
「ちょちょちょ、ストップストップ！」
　慌てて梓は恋奈の腕を掴んで引き止める。
　恋奈はその焦る梓の顔を見てため息を吐いた。
「なんなのよさっきから。私は腰越落としの準備で忙しいの。無駄な時間とらせないで頂戴」
　その突っぱねるような言葉に梓は返す言葉がない。
「恋奈様、もしかして自分の事嫌ってません？」
「嫌わないわけがないでしょう。散々私を悩ませて、足引っ張って、裏切って。

それでいて最後の最後に逆ギレして江乃死魔消そうとしてきたアンタをどうすりゃ好きなままでいられんのよ」

その言葉は本音ではない。

だが全くの嘘というわけでもないのだ。

心から嫌ってはいない。今だって恋奈は梓を自分の部下に戻して昔のように戻りたいと思っている。

けれどそれは何かしら恋奈と梓の間にケジメをつけなければ嫌だと彼女は思っている。

だから恋奈は梓を喧嘩で負かすなり服従させるなどして自分が上だという前提をおいてから引き込もうとしている。

間違っても梓の方から仲直りしようと持ちかけられてそれに頷けるほど憎しみや怒りが薄いわけではない。

「私が梓の手を借りるのだとしたらアンタが私に服従してる事が前提なのよ。

勘違いされたら困るから言うけど、私はまだアンタが裏切ったことを許してない」

「う、それは」

言い訳などできるはずもない。

確かに今までに自分のした悪事のツケを殆ど清算した。

おかげで自分を恨む者もかなり減ったし、今現在後ろめたいことなんて一切ない。
だがそれでもやはりひとつだけ清算できていないものもある。
それが恋奈との関係だった。
「・・・・・・梓、最近長谷の調子はどう？
あのボンクラのことだからまた余計なことに首突っ込んで怪我とかしてない？」
全く脈絡のない話の切り替わりに梓は一瞬戸惑ったが直ぐに返答する。
「いえ、自分や辻堂センパイ。皆殺しセンパイが注意してるし怪我もないっす。
あずや他の不良が負わせた怪我も痕はあるものの殆ど治ってますし」
「そう、良かった」
ほっとしたような顔をする恋奈。
明らかにその顔はずっと心配していた様子だ。
「長谷センパイが気になるんですか？」
「まぁね。元々アイツが怪我したのは江乃死魔に首を突っ込ませたからだし」
「でも、センパイは危険を承知で首を突っ込んだ自分のせいだって言いそうですよね」
「でしょうね。アイツ絶対人のせいにする事はしないから」
何やら長谷大の話になったとたん恋奈は梓の話を普通に聞いてくれるようになった。
それに気づいた梓はそれを利用する事にした。

「今回のあずが江乃死魔を手助けをする提案が長谷センパイのお願いだとしたらどうします？」

「・・・・・・・」

恋奈は梓の言葉を聞いて僅かに目つきを変えた。

「受け入れるわ。アイツには借りがあるから」

意外な答えに梓は絶句する。

「ま、まじっすか。長谷センパイ効果ぱないっす」

恋奈に聞こえないように呟いた。

しかし実際入院費やその他もろもろの恋奈の手助けで既に貸し借りなど返済しているし、

何より大自身が貸しを作ったと思っていないため恋奈が気にする必要は全くない。

なのに大の頼みなら受け入れる所を見ると恋奈も大の事を特別扱いしている。

「すいません恋奈様、長谷センパイのお願いってのは嘘っす。

実際は自分が皆殺しセンパイとやり合おうとしてるのすらセンパイは知りません」

流石に長谷大の名を勝手に使って恋奈を騙すのは両方に悪い。

二人は梓にとってもう絶対に騙すことはしたくない人物なのだ。

「そう、すぐ正直に本当のことを言ったから今のは許してあげる」

やさしげに微笑んで梓の手を解く。
そしてそのまま振り返ることなく恋奈は江乃死魔の本拠地へと戻っていった。
その背中を追うことなく、ただただ見送った梓は戸惑っていた。

拙い。本気で今の精神状態は拙い。
「どうしよう」
勿論恋奈様が本心で自分のことを嫌いだと言ったわけではないのはわかってる。
けれど心から好いている人間に正面から好きなわけがないと言われるのは想像以上にきつかった。
心の底に鉛以上に重いものが沈み、どんよりとしたネガティブな気分になる。
「はい、ホットミルク。まだ熱いから少し冷ましてから飲むといいよ」
「あ、あざっす」
自分は恋奈様と別れたあと全速力で走って長谷センパイの家に向かった。

明日は休日だし、まだ寝るには少し早い時間だ。
それでも夜間にお邪魔することが非常識であることには変わりないけれど。
なんにせよ、くらい表情をした自分を見て長谷センパイは直ぐに中にあげてくれた。
「それで今日はどうしたの？　なんか嫌なことでもあったのかな」
「・・・・・嫌なことというよりは、自分のしたことの重大さを理解したって感じっす」
長谷センパイの家にきた理由はなんて事はない、単純に寂しかったからだ。
好いている人に拒絶されて、そこで生まれた虚無感を癒したくてここに来た。
正直ここは一人暮らししている自分のアパートより居心地がいい。
「センパイはあずの事好いてくれてますか？」
「うん。俺は乾さんの事好きだよ」
二つ返事で答えてくれる。それだけで沈んだ心が暖まる。
普段なら自分が好きかと答えたら言葉を濁すけれど、今日自分が落ち込んでいることを考えて本心を言ってくれたのだろう。
センパイは僅かに照れている。
「あずもセンパイの事好いてます。誰よりも何よりも尊敬してますし、ラブってるっすよ」
実際のところセンパイは自分のことをラブとライクの間くらいの感情で好いている

だろう。
それでも自分のことを好いていることには変わりない。
それだけで満足だ。
「センパイ、自分どうやったら恋奈様に――――」
ピンポーンと呼び鈴が鳴る。
自分の言葉をかぶせられて一瞬イラッとくるが、仕方がない。
「俺ちょっと出てくるね」
「はい、自分は待ってますから」
そう言ってセンパイが立ち上がって部屋を出た。
その背中を見送って、僅かな寂しさを感じた自分は程よく冷めたホットミルクを手に取る。
「ん、あったかい」
温かいカップを両手で包みこみ、手を温める。
同時に口をつけて飲む。
甘い、どうやらセンパイはホットミルクに砂糖を入れたらしい。
結構あまったるいけれど好みの味だ。
不意に階段の方から音がする。

どうやら客人とセンパイがこちらに来るようだ。
誰だろうか、皆殺しセンパイは基本窓から来るし辻堂センパイは今日はもう帰った後だそうだ。
ならそれ以外。
イマイチわからない。
そうだ、いいことを思いついた。
立ち上がってセンパイのクローゼットを開く。
このクローゼットは少々特別で、皆殺しセンパイが頻繁に寝ている場所だ。
そのためか長谷センパイは皆殺しセンパイが寝やすいように布団等を敷いている。
自分はそこに隠れることにした。
知らない人物が来たらこのまま寝落ちしてもいいし、知ってる人が来たらドッキリを仕掛ければいい。
そう思いながらドキドキしながら隠れた。
足音はそのまま扉の前まできた。
そのままノブが回され扉が開く。
そして入ってきた人物を僅かな隙間から覗いてみる。
絶句した。

「相変わらずよく片付けてるのね」
「うん。今みたいに来客もよくあるからね、片付けるクセがついちゃったよ」
「来客ね、誰かは想像がつくけど」
何故恋奈様がここに来る？
どうやらさっき自分と別れたあと恋奈様もあずと同じようにその足でセンパイの家に来たらしい。
いや、違うか。
恋奈様の来ている服が普段なら絶対に着ないやたら女の子している服装だ。
それこそデートとかの日に着るような勝負服に近い。
つまり一回家に戻っておめかししたから自分より大分遅れて来たのか。
「座っていいかしら？」
「どうぞ・・・・・あれ、どこいったんだろ。トイレかな？」
「ん？　何か言った？」
「いや、なんでもないよ」
センパイが部屋を見渡す。
どうやらあずがどこに行ったか気にしてるようだ。
少し子供じみた楽しさを覚えながら一緒に持ってきたホットミルクを飲む。

「それで今日はどうしたの？
片瀬さんがこんな時間に来るなんて珍しいよね」
「まあ、そうね。ちょっとアンタに用事というか、聞きたいことというか・・・・・・」
はっきり言わない恋奈様。
長谷センパイも普段と違う恋奈様の様子に気づいたのか、急く様子はない。
「別に明日は休みだし急いで言う必要はないよ。
俺はコーヒーでも淹れてくるから少しくつろいでいてよ」
「う、うん。わかった」
大人しくうなづく。
それをみて優しげに微笑んだあと長谷センパイは一階へ降りていった。
そして残される恋奈様。
「・・・・・・」
落ち着かないらしい。すごくわかりやすくソワソワしてる。
正座していた足を崩してセンパイの部屋をキョロキョロして見回している。
何周か視線を移したあと、恋奈様は何か気になるものを見つけたらしい、それを手にするために立ち上がる。
その物を手にして呟く恋奈様

「このリュックは由比浜の・・・・・・間違いなく梓のね。
　このキーホールダーとか見覚えがあるし」
　しまった。
　持ってくるべきものはミルクではなくリュックだった。
　恐らく恋奈様はこの家に自分がいるか、もしくはさっきまで居たのかを考えているだろう。
　恋奈様は僅かに考えるような顔をした後、ゆっくりとリュックを下ろした。
「ったく、随分汚しちゃって。砂とかついてんじゃないの」
　そう言いながら恋奈様はポケットからハンカチを出し、あずのリュックの汚れを拭き取った。
　今の恋奈様の顔はどこか優しげだ。
　それこそセンパイがあずを見る目と同じ質の。
　・・・・・本当に自分は馬鹿なことをした。
　ここまで自分を好いてくれている人を裏切り続けていたなどと。
　今過去の自分に会えるなら迷わず鉄拳制裁をくれてやりたい。
「れ、恋奈さ――――」
「お待たせ片瀬さん。ほら、ミルクと砂糖たっぷりのお子様コーヒーだよ。

もうミルク入れすぎて実質カフェオレだよこれ、はは」
「アンタもしかして私バカにしてるでしょ」
「そのような事があろうはずがございません」
殷懃無礼にかしこまり、長谷センパイは丁寧な手つきでテーブルにカフェオレをおいた。
一応自分の分も持ってきているらしい、長谷センパイは自分の分のコーヒーを口にする。
恋奈様もそれを見たあとカフェオレを口にした。
「美味しい・・・・・・」
「それはよかった」
嬉しそうに笑う。
それを見て恋奈様は僅かに照れたように頬を赤らめて目を逸らした。
「か、カフェオレなんて誰だって作れるんだから調子に乗らないでよね！」
「せやな」
せやろか？
「そこは言い返しなさいよ！　いつもみたいにはいはいツンデレとか！」
「え、今のフリだったの。いつも通りのツンデレで面白いなぁって思ってたんだけど」

「いつもはツンデレしてないわよ！
　大体美味しいカフェオレが誰にでも作れるわけないでしょうが！」
「自分で自分の発言撤回しちゃったよ」
　どうやら長谷センパイの空気に恋奈様はペースを乱されているようだ。
　自分や辻堂センパイ、皆殺しセンパイは長谷センパイと一緒にいるとやたらお色気な空気になることが多いが、恋奈様はやたらコメディー。
　まぁ恋奈様は本質的にはヤンキーでないから長谷センパイのフェロモンにひっかからずそういう空気になりにくいのだろう。
　その後も長谷センパイと恋奈様は漫才のようなテンションを維持したままバカ話を繰り広げ続けた。
　懐かしいなぁ、この空気。
　江乃死魔にいた頃はこんなふうに自分やティアラさん。ハナちゃんセンパイとこんな風に笑ってた。
　けれど今その江乃死魔の中に自分の姿はない。
　壊したのは自分だ。自分がその居場所の大切さを蔑ろにして壊した。
　だからこそ、失って始めてあの頃の楽しさを思い知った。
「ったく、アンタと話してると毎回毎回本当に疲れるわ」

恋奈様は疲れたように大きくため息を吐く。
「俺は片瀬さんと話してると楽しいけどね。
こうやってバカ話できるのは姉ちゃん以外に片瀬さんだけな気がする」
確かに、辻堂センパイとは恋人のような空気。
自分や皆殺しセンパイとはアットホームな感じか色っぽい空気。
対して恋奈様はそうではなく内心をぶつけ合う仲な空気がある。
「・・・・・・まぁ、アンタと話してると私も本音や本性丸出しにしてる気がするけど」
気がするのではなく実際に丸出しである。
そこでふと、恋奈様はあずのリュックを見た。
それを寂しげに見つめ、何か物憂げにする。
「長谷、今日来た理由だけど。
実はアンタに相談したいことがあるの」
「ふむ、本日二度目の相談か・・・・・・」
長谷センパイがぼそりと呟く。
あまりに声が小さすぎて多分恋奈様には聞こえていない。
自分もセンパイの唇の動きがわかる角度だからこそ唇の動きからわかった。
「うん、ほかでもない片瀬さんの相談だ。

受けない理由がない、俺でよければ力になるよ」
満面の笑みで答え、応える。
その言葉を選ぶことに一切の迷いもないようだ。
相変わらずお人好しな人で笑ってしまう。
だから好きになった。
恋奈様もその言葉に嬉しさを感じたのだろう。
僅かにはにかむ。
「そ、それじゃあさっさと本題に入るわ」
コホンと咳払いをし、スイッチを切り替える恋奈様。
「あのさ、その・・・・・・私仲直りしたい奴がいるんだけど、そいつの前に立つと素直になれないのよ。
これってどうすればいいと思う？」
「ツンデレやめりゃいいんじゃないかな」
ですね。
「真面目にきけや！」
「痛いです！」
脳天にゲンコツを落とされたらしい。

頭をおさえてうずくまる姿が痛々しい。
「で、でもさ。それって片瀬さんの心の持ちようしか解決手段無いじゃん。俺がどうこうしようたって・・・・・・ん?」
不意に言葉を止める。
何か思いついたことがあるらしい。
真剣に考える長谷センパイの顔も素敵っす。
「片瀬さんってつまり乾さんと仲直りしたいんだよね?」
「う〝。ま、まぁ否定はしないけど、せっかく濁して言ったのに台無しじゃない」
・・・・・恋奈様も可愛いなぁ。
仲直りしたいのに自分の前だと素直になれずつっけんどんな態度とってしまうとか。
「そう。じゃあちょっと幾つか質問するけど構わないかな?」
「えぇ。答えれることなら答えてあげるわ」
「それじゃあ一つ目の質問。
もう乾さんが江乃死魔裏切ってた事を気にしてないの?」
「気にしてるに決まってるじゃない」
何を言っているのかという様な口ぶりである。
「江乃死魔結成当初から居て、私があれだけ信頼してて、最後まで信用してたのよ。

それなのにあのバカは・・・・・・っ！」
右手を握る。
今にもテーブルに拳を叩き落としそうな激怒具合だ。
「江乃死魔の部下共の7割以上を私に無断で子飼いにしてカツアゲ三昧。
喧嘩になれば辻堂とまともにやりあえる実力を持ちながら最後まで爪を隠してた。
挙げ句の果てには罪をばらされて逆ギレして江乃死魔を潰そうとした。
こんなマネされて気にしないわけないでしょうが！」
激怒した恋奈様は右手を振りかぶる。
だがそれを叩き落とすにもここは長谷センパイの家だ。
まさか器物破損するわけにもいかない。
恋奈様は歯がゆそうにゆっくり手をおろした。
「ごめん、アンタは何も悪くないのに怒鳴ったりして。
むしろ私の手助けになってくれたっていうのに・・・・・・」
「いや、いいよ。溜まってるものがあるならむしろここで吐き出して欲しい」
そう言って長谷センパイは恋奈様に笑いかける。
恋奈様も長谷センパイのその反応に毒気をぬかれたような顔をする。
「それじゃあ次の質問だ。

それだけ憎んでるのになんで仲直りしようと思えるの？」
言いにくいことを平然と質問する。
「それでも、それでも梓は私にとって大切な友人であり味方だからよ」
憮然として、一切の迷いなく答えを返す。
「片瀬さんを裏切って、騙し続けてきた乾さんが味方なの？」
「そうよ。あんな大馬鹿だけど、けど私は梓がいないと落ち着かないの。
今日だってそう、いつもの江乃死魔の集会だって別に梓一人消えたところで何も変わらず通常運転。
けど私にはいつも通りには思えない」
恋奈様の言葉を聞いて歯を食いしばる。
自分のした事を誰が責め立てているわけではない。
なのに恋奈様の独白は馬鹿な自分の胸を強くかき乱す。
「ティアラ達とバカやって、笑い合って、いつも通り喧嘩してもそこに梓の姿がない。
私にはそれが何よりも落ち着かないの。だから私はあの子を連れ戻したい。
何よりも梓が辻堂軍団の奴らと一緒にいるのが頭にくる。
この気持ちは味方意識じゃないの？」
饒舌に語る恋奈様に長谷センパイは少し困っている。

「片瀬さん、はっきり言っていいかな？」
「なによ」
「難しく考えすぎ」
　コーヒーを少し飲み、不意に真面目な顔をして恋奈様の目を真っ直ぐみるセンパイ。
「仲間意識とか友人とか。そういう事を気にする必要はないと思う。
　ただ単純にシンプルな答えがあるじゃない。片瀬さんは乾さんの事が好きだっていう」
「私が梓のことを好き？」
　首をかしげる恋奈様。
「うん。例えばさ、愛の形には色々なものがあるよね。
　親愛、友愛、自愛、情愛、溺愛・・・・・・だそうと思えばまだまだある」
　恋奈様は口を挟まず黙って聞く。
「でもそれは総じて愛情からくるものだ。起源が一緒なら一々別けて考えるような面倒くさい真似をする必要はないんだ。
　親が子を愛する、即ち愛情。俺が親友を愛する、それも愛情、俺が愛さんを愛する、これも愛情だ」
「回りくどい言い方しないで、はっきり結論を言って」

「わかった。じゃあはっきり言う。
乾さんと仲直りしたいというのなら一々建前を作らなくていいんだと俺は言いたい」
その言葉を聞いて恋奈様は片眉を上げた。
「昔の関係に戻りたいから、寂しいから、仲間だったから、友達だったから。
そんな建前を作るから素直になれないんだ。
はっきり言えばいいじゃないか、乾さんに好きだって」
「す、好きってアンタ・・・・・・」
顔を赤らめている。
恋奈様はどうやらあまりにもストレートすぎるセンパイの言葉に逆に照れたようだ。
「次の質問だ。好きなんでしょ、乾さんのこと?」
「う、うぅ」
言いよどむ恋奈様。
明らかに恥ずかしがっている。
「どうなの、好きじゃないの?」
「ううぅぅぅぅ〜〜〜」
頭を抱えて唸る。
いつまでたっても肯定も否定もしない恋奈様に長谷センパイは催促する。

「ハリーハリーハリー！　時は金なり！
あんまりウダウダグジグジしてると乾さんと仲直りするタイミングが逃れるかもしれないよ！」
「うっさいバカ！　好きよ！　大好きよ！
あのチャラい癖に私を恋奈様と呼び慕ってくるところとか、単純に見た目だって可愛いし！
アイツが裏切ったあとだって全然嫌いになれないくらい好きよ！」
「だってさ乾さん！」
固まる自分と恋奈様。
「「はいぃ!?」」
びっくりした。
長谷センパイが明らかにこちらを向いて叫んだ。
いつから気付いていたのか。
「押し入れに隠れてるんでしょ。
盗み聞きしたことは怒らないから大人しく出てきなさい」
「・・・・・・はい」
バレている上にセンパイの命令じゃ逆らえる筈もない。

居心地の悪い空気を感じながらも押入れから出る。
そしてそのまま恐る恐る恋奈様と対面する形でセンパイの横に座る。
「あ、あわわわわわわわわわ」
恋奈様が目に見えてテンパっている。
顔を真っ赤にして、目はぐるぐるだ。
このままブッ倒れてもおかしくない程。
「乾さんはさ、片瀬さんの事好き?」
「はい。大好きっす」
迷いなく断言する。
「ちょ、梓」
「恋奈様、自分は江乃死魔抜けたあと色々考えました。
自分のしたこと、恋奈様の事、今後のこと」
長谷センパイはもう自分の役目は終えたとばかりに口を閉ざした。
そのままあず達に全てを任せるようにコーヒーを飲んでいる。
「カツアゲしてた頃の後始末は辻堂センパイとの喧嘩で全部償った気になってました。
辻堂センパイに散々殴られて、あとは晴れて何の憂いもない生活になるって。
でも、そんな事はなかったっす」

目を伏せる。
「辻堂センパイの舎弟になって、長谷センパイ達と笑い合って。楽しい毎日なはずなのにどこか物足りなくて寂しかった」
その原因はもうわかりきっている。
「自分は江乃死魔抜けても恋奈様と一緒にいたいっす。またティアラさんやハナちゃんセンパイ達とバカやりたいっす」
自分は結局あの喧嘩のあとでも強欲なのは変わらなかったらしい。
今だって最高に幸せなはずなのに、それでもまだ何かを求めている。
「梓、それは江乃死魔に戻りたいって事？」
恋奈様は僅かな希望を込めた目であずを見る。
「それは違います。自分が辻堂軍団抜けるときは不良やめる時っす。もうあずが江乃死魔に戻る事はありません」
「・・・・・・そう」
はっきりと言う。
その言葉に恋奈様は目に見えて落ち込む。
「でも、それでもあずは恋奈様達が好きっす。
昔のように江乃死魔でバカやることはもうできなくとも、それでもあずは恋奈様達と

また遊んだりしたいです」

これが本心だ。

「梓、ひとつだけ訊いていい？」

「はい」

何か、思いつめるような顔をしてる恋奈様。

果たして何を悩んでいるのか。

「梓、アンタは江乃死魔を抜けたこと。私を裏切ったことを後悔してる？」

「してます。今までの何よりも後悔してます」

即答する。

あずのその答えを恋奈様は反芻する。

そして瞳をとじ一分ほど恋奈様は考え込んだ。

「梓、明日暇かしら？」

「え？」

「聞こえなかった？　明日予定は空いているかって訊いてるの」

一体いきなり何を言い出すのか。

訳が分からず戸惑う。

「あ、明日はセンパイと――――」

「確か乾さん明日は暇だってぼやいてたよね」
　言い切る前にセンパイが横から割り込んだ。
　何を言うのか。
　明日は一週間前から決めていたあずと辻堂センパイとあずがショッピングに行く日ではないか。
「そ、じゃあ梓。明日は私の用事に付き合いなさい」
「うえぇ!?　ちょ、用事ってなんすか!?」
「・・・・・・買い物よ」
　プイっと目をそらして呟く。
　え、つまりそれって一緒に遊びましょう的な?
　恋奈様可愛い。
「行きます。絶対行きます」
「そう、それじゃあ予定でも決めましょうか」
「・・・・・・一応聞いておくけどどこで予定決める気なの片瀬さん」
「ここで、ついでにアンタも明日は荷物持ちで強制的に行くことになってるから」
「なぜに」
　相変わらず二人が会話をすれば妙に面白い。

何だろう。
長谷センパイと一緒にいるといつも思うことがある。
彼と関わってからの自分の人生が妙に調子よく進んでいるんじゃないかと。
あやふやだった将来像も、不満だらけだった今現在も何もかもが満たされていく。
「センパイ、初めからあずが覗いてるのわかってて恋奈様に質問攻めしたんすか？」
恋奈様に気づかれないように耳打ちする。
それを聞いたセンパイは黙って軽くうなづいた。
「しょっちゅう俺の気づかないうちにマキさんが寝てたりするからね。
押入れ限定で気配に敏感になってるんだ。
一回マキさんいるの気づかずアレし始めて見られてた事があってから特に気をつけてるんだ・・・・・・」
哀愁ただよう男の背中だった。
その時のことを想像するだけで哀れすぎる。
「何にせよ、二人の仲も取り持てて良かった。
ところでさ、乾さんの相談ってなんだったの？」
今更すぎるその質問に笑ってしまう。
「もう解決しました。ありがとうございます長谷センパイ」

そういって長谷センパイの肩を掴んで引き寄せる。
「え、なにを」
慌てる長谷センパイを抱きしめて、横顔にキスをした。
その後、慌てるセンパイとあずの行為に嫉妬した恋奈様とでひと悶着あったが、それすら楽しかった。
また自分は恋奈様と一緒にいられる。
これほど嬉しいことはそうない。

「せっかくのデートが」
「ごめんね愛さん。本当にごめん」
当日、結局俺と愛さんのデートはめちゃくちゃになった。
「これも恋奈様によく似合うんじゃないっすかね。
う、胸のサイズが合ってない・・・・・・主に胸囲的に」

「ぶち殺すぞ」
見ればおしゃれな服屋で買い物を楽しんでいる乾さんと片瀬さん。
愛さんはブスっとした顔で俺と一緒に店の中がよく見えるベンチに座っている。
「なあ大、アイツ等放って二人でどっか行こうぜ」
愛さんが希望に満ちた顔で提案してくる。
が、駄目。
「こんなに荷物押し付けられてるからね、流石にこれ置いて行けないよ」
「・・・・・・せっかくのデートが」
愛さんがまたもや不貞腐れた。
口を尖らせてブーたれる。
「センパーイ、こんなのあずに似合うと思います?」
乾さんが凄いエロイ下着を見せてきた。
似合うと思う、スタイルも見た目もいい乾さんならきっと着こなせるだろう。
「・・・・・・ど、どうかな」
流石に愛さんの横で肯定する勇気は俺にはなかった。
目をそらして答える。
それを見て乾さんは俺の本心を見抜いたようだ。

「じゃあ今度これ着て夜這いかけますね」
「いい加減にしろ！」
愛さんがついにブチ切れて立ち上がる。
だが乾さんは動じることもなく、むしろ悪そうな顔をして愛さんに詰め寄る。
「辻堂センパイに似合いそうなのも見繕ってますよ。
きっとあれを着れば長谷センパイももっとケダモノになるんじゃないかってくらいっす」
「まじか」
俺に聞こえないように愛さんに耳打ちしてる。
だが普通に聞こえた。
愛さんはその言葉に怒りを収めてむしろソワソワし始める。
「ひ、大。アタシもちょっと見てくる」
「うん。ごゆっくり」
そう言って愛さんは乾さんと一緒に店の奥に向かっていった。
何を買うのかは想像つくけど深くは考えないことにする。
きっと何を買ったかはその・・・・・近いうちに夜わかることになりそうだし。
そのまま誰も横にいなくなり退屈する。

「隣、いいかしら？」
「ん、どうぞ」
先ほど愛さんがいた所に片瀬さんが座る。
「居心地悪そうね」
「だってここ女性服に力入れすぎて男物少ないからなぁ」
早々に見るものがなくなった。
「そう、それじゃあ次は長谷が向かう場所を決めなさいよ。
そこに付き合ってあげる」
「いや、それはいいよ。今日は乾さんと片瀬さんが行きたい場所を決めるといい。
愛さんには悪いけど俺はそれに付き合うよ」
愛さんには後日埋め合わせをしてあげなければ。
見れば今だって乾さんと何やら楽しそうに下着選んでるけど。
「あ、あのさ長谷」
やけに上擦った声で俺に話しかけてくる。
俺はそれを黙って聞く。
「昨日の事、ありがとね」
そう言って片瀬さんは俺に持ってきてた手提げを渡した。

その手提げを持って俺は首をかしげる。
「これは？」
「中を直接みなさいよ」
言われた通りにする。
俺は手提げを広げて中を確認。
パッと見たところ、白くてでかい上着的なものが入っている。
何だろうと丁寧にたたまれたソレを色々調べると、気になる刺繍を見つけた。
「これって江乃死魔の特攻服じゃ」
服の背中の部分に大きく『江乃死魔』の文字が縫われていた。
「ええ、そうよ。これをアンタに受け取って欲しいの」
何故特攻服なのか。
その意図を汲み取れず俺は戸惑う。
「別に長谷に江乃死魔入れって勧誘してるわけじゃないから安心して。
これは単純に私の気持ちの問題なの」
「気持ちの問題？」
どういう事なのだろう。
その鈍い俺に片瀬さんは僅かに苦笑する。

「アンタは前にも、昨日だって私の力になってくれた。
私にとって長谷大という男はもう他人じゃない、仲間なの。
だからこれを受け取って欲しい」
つまりこの特攻服は片瀬さんの気持ちを形にしたものという事か。
片瀬さん個人が友達に、仲間になってほしいという。
俺はその言葉と気持ちに頷いて、手提げを膝の上に置く。
「ありがとう片瀬さん。ありがたく頂くよ」
きっとこの特攻服を着ることはないだろう。
けれどこれを大切にしようと思う。
紛れもなくこの服は俺たちの気持ちとイコールの存在なのだから。
片瀬さんは俺の言葉を聞くやいなや、パァっと顔を輝かせる。
「ねぇ、長谷。もう一度聞くけど江乃死魔入らない？
勿論喧嘩なんてしなくていいし私の手伝いしてくれるだけでいいからさ」
恒例行事となった勧誘だ。
「ごめんね。ちょっとそれは無理かな」
「そ、残念」
本当に残念そうにする。

けど片瀬さんは直ぐに表情を変えて俺を再び見た。
「長谷、以前私が言ったことを訂正させて」
「訂正って何をさ？」
「ヤンキーですらないツッパるものすら持たないアンタに何がわかるって前に言ったわよね、私。
あの事を訂正させて欲しいの」
ああ、そう言えば乾さんの件で俺が首を突っ込む際に片瀬さんに言われた記憶がある。
片瀬さんはその言葉をずっと気にしていたのか、申し訳なさそうにしている。
「アンタはアンタなりに芯がある。長谷大という男と一緒に居るたびにその事がわかった。
だからあの時の言葉は間違っていたの」
そういって片瀬さんは真っ直ぐ、何の迷いもない表情で俺を見た。
「芯があるから他人が寄りかかってもアンタは支えてあげられる。
梓や腰越、辻堂や私。どれもが生半可な芯じゃ支えきれる筈がないの」
芯がある。
そう言われたのは初めてだ。

「だから言い直すわ。私の力になってくれてありがとう。
アンタの頼みなら何だって力を貸してあげたい程に私はアンタに感謝してる」
その言葉に俺は言葉を返せない。
まさかここまで濁りのない感謝の気持ちを渡されるとは思わなかった。
想定外の言葉だったため上手く言葉を返せない。
どうやって彼女に言葉を返そうか頭を回転させていると
「何長谷センパイといい雰囲気になってんすか恋奈様」
「ちっ、お邪魔虫が」
「ひどっ。せっかく仲直りしたのにそりゃないっすよ」
半泣きで片瀬さんに泣きつく乾さん。
相変わらずな二人で笑いがこみ上げる。
「えぇいもうもう少しだったのに・・・・・・長谷っ、こっち向きなさい！」
いきなりの呼び出しで驚きながらもその声に応えた。
片瀬さんの方を振り向いた瞬間、俺はその片瀬さん本人に両頬を掴まれる。
「え、ちょ」
「黙ってなさい」
そのまま先日、乾さんがキスした頬に軽くキスをされた。

その時間はとてつもなく短く、殆ど一瞬のことだった。
唇を俺の頬から放すと片瀬さんは顔を真っ赤にして俺を挑戦的に睨みつける。
「い、今のは感謝の気持ちだから！　別に他の含みはないから！」
「あ、片瀬さん待って」
言うだけ言って逃げていった。
「ツンデレっすねー」
横でしみじみした顔で呟く乾さんがいた。
その日から、妙に片瀬さんは俺の家にカフェオレを飲みに来るようになった。

23話：ワイルドライフ腰越マキ

うろ覚えの記憶が曖昧なまま作り出したごちゃまぜの風景。
それが夢だ。
だからこそ、昔見た鮮明な記憶であろうと夢で差異なくリプレイされることはない。
どんな記憶であろうと夢の中では余計な記憶も混ざり、そこに正確性は無くなるからだ。
『じゃあもう会えなくなっちゃうね』
『そんなことないよ』
ここはどこだろう。
夢の中で自分の姿を探す。けれど自分自身の姿は把握できない。
ただ、この場所は見覚えがあった。
たしかここは極楽院の養護施設だ。
その一角にある庭には二人の子供の姿があった。
『だって遠くへ行っちゃうんでしょ。
仲のいい子がいなくなったら私一人になっちゃう。

お父さんもお母さんもいないし』
幼い少女が寂しそうにしている。
その姿を困ったように見る少年。
なぜだろう。この少女は見覚えがやはりある。
そしてそれ以上にこの少年には異常な親近感がある。
『爺ちゃんや婆ちゃんがいるじゃない』
『その二人しかいないんだもん』
・・・・・いつか、この会話をした記憶がある。
明確には覚えてないのだけれど、それでもデジャブを感じているのだ。
『うーん』
『じゃあいつかマキちゃんもおいでよ』
そうだ、彼女は確か極楽院の三大お婆ちゃんの孫。
名をマキといった。
マキ。
『へ？』
『婆ちゃん達が許してくれたら、うちにおいでよ。
一緒の家族になろう』

マキ。
家族。
恐らくもう俺は目が覚めるだろう。
その証拠に視界は不明瞭になり始めた。
今さっきまで目の前にいた子供たちは姿を消し、寺の風景も曖昧なものになった。
多分俺は今見た夢を起きたら忘れる。
ただ、俺は今確実に思い出した。
今まで忘れていた事を。
目が覚めた時にどうかこの事を忘れないように自分自身に祈った。
俺はこの思い出した約束を果たさないといけない。

「ん、んん～」
重たい瞼をゆっくりと開く。

同時に起きた時のクセのように部屋に置いた時計を見て時間を確認する。
時刻は朝八時。
休日にしてはまあまあの早起きだ。
ものぐさな気持ちを抱きながら上半身だけ起き上がらせる。
そして軽くあくび。
「何か、大切なことを忘れた気がする・・・・・・」
何だろう、この異常な胸騒ぎは。
思い出さなくてはならないのに思い出そうとすると頭の中に霞がかかって思い出せない。
ただ、思い出さなければならないことがある事だけは何となくわかった。
「ん？　何か布団の中に何かいる？」
気づいたのだけれど、俺の布団の中がやたらこんもりと盛り上がってる。
いや、下ネタじゃなくて真剣に。
一瞬何だろうと疑問を抱いたけれど、それも連鎖的に答えが出た。
あまり珍しいことじゃない。多分マキさんだ。
最近寒さが増してマキさんも外でねるのは厳しいらしく俺の部屋に深夜入り込むことが多くなった。

特に昨夜みたく強烈な寒さである日は人肌で既に温まっている俺のベッドに潜り込むことが多い。

寝ているのを起こさないように、ゆっくり慎重に布団をめくる。

いた。

「やっぱり」

布団の中で猫のように丸くなって寝ているマキさん。

微塵も警戒していないのだろう、無垢な顔でスヤスヤと寝ている。

起こすべきか迷ったが、ここはそのまま寝かしておいてあげよう。

もう受験も終わって彼女は学校に行く必要もなくなった。

その為最近は進学の準備している時以外は退屈そうにしている。

俺が学校から帰るとほぼ毎日俺の部屋で待っている。

そして俺のそばに来るやいなや、無理やり俺を捕まえて外に引っ張り出されているが、

どうも飼い主が仕事から帰ってくるのを待つ犬を持った気分だ。

「うん、ん～」

上げた布団の隙間から入る冷気に体が反応したらしく、体を更に丸めるマキさん。

猫みたいでちょっと可愛い。

しかしいつまでもこうしてマキさんを観察していてもいけない。
俺は休日の家事をするためにゆっくりとベッドから降りた。
幸いにしてマキさんは起きることはなかった。
そのまま抜き足差し足と音を立てず歩き、一回のキッチンへ向かう。

「くぁ～、ん。よく寝た」
ベッドの上で目を覚ます。
微睡んだ頭で取り敢えず現状を把握することにしよう。
「ダイは・・・・・・もう起きちゃってたか」
昨日の夜はいつも以上に寒かった。
その為寒さをしのげてかつ、安心できて寝心地もいい場所を探す羽目になった。
で、当然そんな場所はここ以上の所などあるはずもなく、お邪魔させてもらったわけだ。
もっとも、部屋主であるダイは眠っていたから起こさずに一緒に寝たのだが。
時計を見れば既に９時を回っていた。

まあ寝た時間が結構遅い深夜だったためむしろ早起きだといえる。
寝癖でボサボサになった髪を軽く手櫛で梳く。
別にくせ毛でもないし、長い髪でもないためある程度は寝癖もマシになった。
さて、どうするか。
このままここを立ち去るか、一度ダイに挨拶していくか。
考えるまでもない。
「降りるか」
多分ダイは下にいるだろう。
アイツの好きなコーヒーの匂いを僅かだが感じる。
ベッドから降りて自分はそのまま一階に向かった。
途中、扉を開けた際に気配を探る。
すると意外なことにダイの姉ちゃんはまだ寝ているようだった。
どうせ前日に深酒でもしたのだろう、あそこから妙に酒臭い匂いするし。
寝ている彼女を起こさぬよう足音と気配を消して階段を降りた。
そして目に入るリビングの扉。
妙に心が弾む。
原因は何か、簡単だ。

ダイと顔を合わせるからだろう。
妙に自分らしくないその気持ちに自笑しながら戸を開けた。
その音に反応したらしい。ダイはこちらを振り向いて優しく微笑む。
「や、マキさん。おはよう」
「あぁ。ワリィな、勝手にベッド借りてさ」
「借りるのは一向に構わないんだけど、できれば潜り込む際は俺を起こして欲しいなぁ」
ダイは全くこちらを責める気もないのだろう。
普段通りの柔らかい物腰でキッチンにたっている。
「そうしたらお前別の所で寝るじゃん」
「そりゃね、流石に愛さん意外と同衾するのは良くないし」
トントントンとまな板と包丁のぶつかり合う音。
見るに朝食の準備中なのだろう。
時々口をつけているのか、後ろのテーブルにコーヒーカップが置いてある。
「よく言うよ、お前乾の奴ともたまに一緒に寝てる癖に」
「・・・・・・いや、実際に俺が許可したのは入院中の一回だけであって、
それ以外は全部マキさんみたく不意打ちでして」
「対策しない上に本気で注意しないお前も悪い」

「おっしゃる通りで」
ダイは僅かに困ったような顔をする。
そのまま再びまな板や鍋に視線を移して料理を始めた。
匂いや具材を見るところどうやら今日の朝飯はあさり入りの味噌汁やほうれん草のおひたし、白米と言った和食らしい。
確か前にダイは朝コーヒーを飲みたがるから朝食は洋風に偏ってるって聞いたけど。
ああ、なるほど。
姉貴が二日酔いしてるかもしれないからか。
一人で勝手に答えを出した。
多分これで間違ってないだろう。
とはいえ、つまり今日の朝飯は自分の好みではないようだ。
「あ、マキさん。昨日の晩御飯の残りになるけど青椒肉絲食べる？
一応マキさん来るかもって肉多めにしてるけど」
「たべるー！」
さすがダイだ！
いつも私のことを忘れないでくれている！
機嫌よくした私はダイの邪魔にならないようにチェアに座る。

そのままつけっぱなしのテレビではなくダイの背中を見る。
その背中はとても暖かく、同時に思っていたより広かった。
何だろうな、包容力のある背中って感じだ。
何となくだが、あの乾ってのが惚れたのがこの部分な気がする。
いや、乾にかかわらず自分や辻堂の奴も惚れた一因がこれだろうけど。
「ま、マキさん」
「ん？　どうした」
ダイが何やら少しソワソワした感じで顔をこちらに向けてきた。
「いや、ちょっと凄い視線を感じてやりづらいなって・・・・・・」
「あぁ、悪い」
余りに直視しすぎたようだ。
カタギのダイであっても視線を感じるくらいだ、よっぽどガン見してたんだろう。
大人しく視線を外す。
ダイも安心したのか、再び料理に取り掛かる。
「・・・・・・ふむ」
そしてもう一度ダイを見る。
今度は気配を消して見つめる。

これならば気付かれることもない。
「ん、ちょっと味薄いかな」
味噌汁の濃さを確かめている。
相変わらずやることなすこと主婦くさい。
そんな事を思っていると長谷家のインターホンが鳴る。
「私が出ようか?」
「お願いできる?」
「任せろ」
家主やその家族以外がでるのは非常識だとは思うが、まあ大丈夫だろう。
長谷家の誰かでないといけない用事ならそのまま変わればいいし、セールスとかの対処なら私のほうがダイより上手だ。
ダイは私を信用しているようで、特に心配そうな様子も見せず鍋をかき混ぜている。
その信用を何やらこそばゆく感じながら、取り敢えず玄関へ向かった。
早足でサンダルに履き替え、扉を開く。
するとそこには予想外の客がいた。
「うげ、梓か辻堂が出ると思ったらよりによってアンタかよ」
「ここは腰越さんちだ、長谷さんちはここから１００キロ上空にある。それじゃ」

「まてや！」
早々にお帰り願おうとしたが、案外反応速度が早い。
恋奈のバカが凄いプリプリ怒りながら扉を掴んで閉めるのを妨害してきた。
力づくで閉めてもいいのだが、そうすると恋奈の手がその力で挟んでしまう。
へたすりゃちぎれるかもしれないため流石に躊躇する。
いや、こいつもしかしたら指ちぎれても生えてくる気がする。
やってみるか？
「何か凄い危ないこと考えてるでしょ？」
鋭いなこいつ。
「で、早く中に入れてくれない？　いい加減寒いんだけど」
「あ～・・・・・・ん～」
正直悩む。
ダイならばきっと入れるだろう。
だが私はこいつが嫌いである。
故に私としては門前払いしたいところなのだけど。
「門前払いしたら長谷にチクるわよ」
「っち、わかったよ」

ダイの信用を裏切るのはあまりよろしくない。
仕方なく扉を開くことにした。
そして勝手知ったる人の家、恋奈は浮き足立ったように私を追い抜いてリビングへ歩いて行った。

「私も長谷の朝食の匂い嗅いでたらお腹がすいてきたわ、朝食ご一緒してもいいかしらっ！」
「ダメ」
あつかましい奴め。
これは私とダイとその姉ちゃんの分だ。
こいつにやる分などない。
「ご一緒してもい・い・か・し・ら！」
「駄目に決まってんだろ。おめぇは江乃死魔のやつらとよろしくしてろよ」
「うがぁぁあ！」
切れた恋奈はやけくそに雄叫びを上げる。
大声出すな、姉ちゃんが起きるだろうが。

ふと、不意に恋奈の動きが止まった。
そしてもう一度私の目をみる。
「(ご一緒してもいいですか?)」
こいつ、直接脳内に・・・・・・っ。
「片瀬さんもいいじゃない」
「ダイがそう言うなら」
飯を作った本人であるダイが言うのなら私が拒否する権利もない。
最も、こいつのせいで私のおかずが減るのなら奪い取るけれども。
「え、いいの長谷?」
「いいもなにも何で俺にきかずにマキさんの許可を得ようとしてるの?」
「え、だってアンタこいつのメッシー・・・・・・」
「誰がメッシーや」
何だメッシーて?
よく分からないため話に割り込めない。
「・・・・・ダイの姉ちゃん起きてこないな」
いい加減腹が減って仕方がない。
さっきから腹がグーグーと鳴って五月蝿い。

ダイもその音を聞いたのか、少し笑う。
「二人は先食べててよ。
特にマキさんの青椒肉絲は中華料理だけあって冷めると殺人的に不味いしさ」
確かに中華料理は油料理なため、冷めるとさらさらだった油が徐々に泥のような質感に変わっていき、
とてつもない不味さと食感に変わる。
「アンタは食べないの？」
「俺は姉ちゃんが起きてからね。
姉ちゃんもせっかくの休日なのにひとり飯は寂しいだろうしさ」
「・・・・・シスコンめ」
「うっさいよ、シスコン菌移すぞ」
言われなれているのか、恋奈の言葉にもユニークな返し方をする。
「はい、それじゃあ手を合わせましょう。いただきます」
いつまでも食べ始めないこちらを気遣ったのだろう。
無理やりな感じに食事を促した。
そこまで食えと言われれば仕方ない。
こっちも美味いメシをわざわざ冷まして不味くするのも最悪な行為だ。

促される通りにする。

「長谷、悪いわねご馳走になって」
「いやいいよ。ちょっと多く作りすぎたと思ってたからむしろ片瀬さんが来てくれて助かった」
　食器を片付けたダイと恋奈は手を拭きながら何やら別のことを始めた。
　見れば食器棚から一度も見覚えのないマグカップを出している。
「なんだそれ。初めてみるな」
「あぁ、これは片瀬さんのマイカップだよ。
　コーヒー・・・・・・いや、カフェオレ淹れるときはいつもこれを使ってるんだ」
「別にコーヒーでもいいわよ！　アンタが毎回勝手にミルク大量にブチ込んでるんでしょうが！」

マイカップ・・・・・私もってない。
何だろう、恋奈にボロ負けしたような気持ちになる。
何が負けたのかはわからないけれど、気持ち的に凄い悔しい。
「因みにこれは愛さんのマイカップ」
「あ、可愛いわね」
「でしょ、愛さんはこういうキュート系なのが好きなんだ」
辻堂に全然似合わないデフォルメされた猫のイラストが描かれたマグカップ。
アイツもマイカップをこの家に置いているのか。
え、じゃあなんだ。
もしかして。
「そして最後のこれが乾さんの」
更に食器棚からマグカップを取り出す。
今度のはなんてことはない、普通の無字のマグカップだ。
ただ何だろうか、シンプルなのにシックというか、素直にセンスがいいと思えるデザインだ。
実に乾らしい。
「うん、あの子らしいセンスね」

恋奈も認めているらしい。
「さて、それじゃあ淹れるからちょっと待っててね」
「はいはい。あ、今日はカフェオレじゃなくて長谷のと同じのにして」
「俺ブラックだよ？」
「・・・・・・ミルクと砂糖をカフェオレにならない程度に入れといて」
「承知いたしました」
そう言って手馴れた手つきで豆を取り出し始めた。
・・・・・マイカップか。
私も今度持ってこよう。
どうせここくらいでしかカップなんか使うことはないし。
とはいえ今見せられた各々のカップを見るとどれも持ち主の嗜好が色濃く出ている。
恋奈はいやらしい程にお嬢様臭い高そうなものだし。
だとするなら私はどのようなものを買えばいいのか。
いや、深く考えないでおこう。
何気なく選んだものこそ自分らしさが現れるというもの。
これで選んだものをバカにされたらそいつをぶん殴ればいい話だ。
「マキさんも飲む？」

「いやいいよ。私苦いの好きじゃないし、だったら前に飲ませてくれた水出しとかいうのが良いな」
「残念、あれは昨日姉ちゃんにバカのみされて枯渇しました」
「じゃあいいや。私はコーラでも飲んでるよ」
そう言ってダイにアイコンタクトで冷蔵庫の開封許可を得る。
そのまま大きく開いて私のために買い置きしてくれているらしいコーラをいただく。
流石に口のみするまで厚かましくはなく、先ほど食事で使ったガラスカップに並々とついで一気に飲む。
炭酸特有の一気飲みしたさいの喉を焼くようなシュワシュワ感が否応なしに思考を紛れさせる。
涙目になりつつダイの方をみる。
既に自分の分はドリップし終わったらしい。
あと恋奈の分だけだ。
恋奈の方はそれを興味深そうに眺めている。
・・・・・・あまり見ないツーショットだ。
「そういえばさ、マキさん」
「ん」

流し目で見ていたのだが、気づかれたか？
一瞬そう思ったがどうやら違うようだ。
ダイは単純に何か私に質問したいことがあるらしい。
「俺達って昔会ったことあるよね？」
「――――なに？」
想定外。
いや、想定外の想定外だ。
まさか・・・・・え？　まじで思い出したの？
やっと？　ようやく？
「どうしてそう思ったのか聞いてもいいか？」
「何かね、夢で小さいマキさんが極楽院養護施設にいたんだ」
「小さい私ね、それが本当に私だと決めつける証拠はあるのか？
何より夢で見たものだ、ただのごちゃまぜになった記憶かもしれないじゃんか」
何故自分はあえて今肯定せずごまかすような事を言っているのか。
おそらくダイはもうギリギリまで思い出しそうになっているはずだ。
ならば私が肯定して軽く説明するだけで恐らく全て思い出す。
だというのに何故自分はこのようなはぐらかす真似を。

いや、理由などとうにわかってる。
既に思い出したところで遅いからだ。
もう、約束は果たせる事もないし今更思い出したところでお互い辛いだけだ。
だったらこのまま思い出さない方がダイのためだろう。
「ん～、そう言われるといまいち自信ないんだよね。
そもそも本当にそれしか覚えてないし、何か喋ってた気がするけど覚えてないし」
その言葉に私は何も言わない。
ただ、なぜだろう。
その思い出そうとしているダイに内心喜んでいる自分がいた。
「・・・・・ただ、何かこの件だけは絶対に思い出さなきゃならない気がするんだよね」
そう言って今淹れ終わった恋奈の分のコーヒーにクリームや砂糖を入れていく。
顔は一切冗談気などなく真剣なものだった。
「腰越、アンタ」
「なんだよ」
恋奈がダイに気づかれないように小声で私を責めるように呟く。
「何でごまかしてんのよ」
そうか、こいつは私の本当の苗字を知っている。

そして恐らくダイの昔の境遇も調べ終わっているのだろう。
つまり恋奈は私とダイの昔の関係を知っているとまではいかなくとも、それに近い答えは知っている。
だからこそ教えなかった私を訝しげに見ている。
「何のことだ？」
あえてすっとぼける。
正直言って自分とダイの昔の約束を他の奴に勘ぐられるのは好きじゃない。
「・・・・・まぁいいわ、私には関係ない事だし」
恋奈も私の本意に気づいたのだろう、深く問い詰めることはせず引いた。
「はい、片瀬さん」
「ありがと」
ダイの差し出したコーヒーを受け取る。
そのカップの中の泥色の液体を恋奈は香りを楽しむように嗅いだ。
「うん、インスタントとの違いがわからないわ」
「はは、正直でむしろ清々しいよ」
そんなもんだ。
実際余程のこだわりでもなければコーヒーの味や香りなどさして違いなどない。

結局のところ嗜好などどこまでもいっても自己満足の領域ってことだ。
だがダイもそれは理解しているらしく、恋奈の身も蓋もない言葉に腹を立てることもなく微笑みながら自分のコーヒーを飲む。
恋奈も続いて口を付ける。
が、やはり普段からコーヒーを飲んでいるわけでもない恋奈は味の違いがそれほどわからないらしい
首をかしげている。
「美味しいとは思うけど。ごめん、どこがどう美味しいのか説明できないわ」
「説明なんていいよ、美味しいって言葉だけで俺は満足してるし」
「・・・・・・なんかちょっと悪い気がする」
バツの悪そうな顔をしてカップを置く。
何をやってんのか。
私はコーラを飲みながら呆れる。
「ところでさ、こんな朝からどうしたの？」
「ん、ちょっとね」
恋奈は何か含みのある声で言いよどむ。
だが別に言えないことではないのか、直ぐに次の言葉を出す。

「ごめん長谷。今日用事があったのはアンタじゃなくて腰越なの」
そういって恋奈は私の方を睨む。
なるほどね、確かに私は頻繁にこの家に来ているし、泊まることだってある。
確か前に江乃死魔の馬鹿どもがダイに護衛をつけていると言ってたし、今日ここに私がいることも最初から知っていたってことか。
「腰越、うちの学園の卒業式はもう一週間を切った。
アンタは間もなく卒業してしまう」
「そうだな」
久しく学園にいってないけれど、確か今週末に卒業式があることだけは覚えている。
一応は出席をするつもりだ。
「だからその日の夜、アンタと最後の喧嘩をしたい」
本気のようだ。
目は今までに見たことがない程に決意を感じる。
絶対に勝つという覚悟も見れる。
つまりは本気という事か。
「江乃死魔の方はどういう状況なんだ？
ちゃんと私を満足させられる程度に駒は揃ってるんだろうな」

「当然よ、数はもう八百まで持ち直した。
既にこの湘南はアンタや辻堂以外掌握したようなものだわ」
大したものだ。
その人数をまとめあげる実力に素直に感心する。
「良い人数だ、実に踏み潰し甲斐がある。
いいぜ、その喧嘩買ってやるよ」
私のその言葉に恋奈は満足そうにうなづいた。
この期に及んで喧嘩を躱されてはもう次に私に挑む機会はないと見ていたのだろう。
「わかった。それじゃあ決闘場所は初めて私と辻堂や腰越が会った場所。
時刻は夜九時、それで構わない？」
「ああ。わかった」
懐かしいものだ。
こいつと出会ってまだそれ程経っていない。
二年も経過していないのだ。
だというのにあの日のことは未だ私の記憶から消えない。
辻堂だってそうだろうな。
「アンタの事だから絶対に逃げないでしょうけど、一応形式的に言っておくわ。

ビビって逃げんじゃないわよ？」
「はっ、誰にそんな口きいてやがる」
互いに減らず口を叩き合い、僅かに笑う。
この掛け合いももう間もなく終わる。
卒業、これを期に私は何かが変わるだろう。
大人になるわけではない、けれど子供のままでいられるわけもない。
いつまでも刹那的な生き方をしているわけにもいかず、いずれ責任という面倒なものが私に伸し掛る。
責任を負うのならそれはもう不良のままじゃいられない。
いずれ、近い将来私は今の生き方を変える時が来る。
この卒業もその一つのポイントだ。
ただ、それでもまだ私はヤンキーだ。
だからこそ、もうすぐ終わる今の生活を堪能する。
「なあダイ。やっぱ私にもコーヒー淹れてくれ」
「珍しいですね、わかりました」
私と恋奈の喧嘩の約束を聞いていて、それでも一度も口を開かなかったダイ。
彼は一体この約束をどう思っているのだろうか。

興味はあるが、聞くことはしない。
恋奈も私と同じ考えらしく、少しソワソワしながらチラチラと落ち着かないようにダイを見る。
「あ、長谷。私にもおかわりくれる?」
「うん。それじゃあカップ借りるね」
恋奈のカップと食器棚から私のカップを取り出してコーヒーを淹れ始める。
「あうあぁぁぁぁぁぁぁ〜・・・・・・頭痛いぃぃぃ〜」
びっくりした。
気配も音もなく不意にリビングの扉を開いてボサボサ髪な上に酷いやつれ顔の姉ちゃんが現れたのだ。
恋奈もぎょっとして驚いている。
「おはよ、酷い二日酔いみたいだね」
「あ〜・・・・・この痛みが誰かにワープすればいいのに」
なにげに怖いことを考える人だ。
「ちょっと待ってて、今朝食用意するから」
げんなりした顔で私のとなりに座る姉ちゃん。
うお、酒くせぇ。

っていうか私や恋奈がいることすら気づいてないのか、全然反応しない。
その相変わらずな姿に私は内心笑っていた。
こんな面白い風景を私はいつまで見ていることができるのだろうか。

「ん、ちゅ・・・・・ぷはっ大い」
「んむ、愛さん・・・・・・んん」
その夜。
俺と愛さんはベッドの上で抱きしめ合いキスをしていた。
どうも今日の愛さんはかなり積極的だった。
夕方頃にうちに来て、晩御飯を俺が振舞ったあとに俺の部屋で少し話した頃、愛さんが急に俺に抱きついてきたのだ。
俺と愛さんは互いの名前を囁きながら、息継ぎのために唇を放す。
そして愛さんはキスのさい閉じていた瞼を開き、トロンとした惚けた瞳で俺を甘く見つめる。

「今日は、大丈夫なのか？」
多分誰も来ないのかという確認なんだろう。
「うん、今日は絶対に誰も来ないはず・・・・・・姉ちゃんももう多分朝まで起きないと思うし」
片瀬さんやマキさんは今日一度来たし、この時間に来ないのだったらもう明日まで来ないだろう。
乾さんも今日は用事があるって前から言ってたし、姉ちゃんも二日酔いに耐え兼ねてもう寝た。
クラスメートもまさかこんな時間に来るとは思えないし、詰まるところこれから俺は愛さんとイチャイチャできるはず。
俺は手慣れた感じで愛さんのブラウスを脱がせる。
するとその下から見たことのない下着が目に入った。
「下着、新しいのだね」
「あ、あぁ。どうだ？　変じゃないかな？」
「変なわけがないよ、凄く似合ってて・・・・・・いやらしい」
普段の愛さんなら着けないタイプの下着だ。
もしかしてと思い俺は続けて愛さんのジーンズもゆっくりと下ろす。

その下にあるものを見て驚いた。
「う、ちょっとキツイか？」
「いや、想像以上にエロい」
何というか、もうスケスケだった。
上品なレースや模様が入った黒い下着。
だがやたらと透けている。
明らかにセックスアピールを意識しているレベルのものだ。
「あんまり見んな、その・・・・・・恥ずかしい」
恥ずかしがって手で局部と胸を隠す愛さん。
その仕草も今つけている下着のせいで無性に色っぽく見える。
この下着が前に乾さんや片瀬さんと買い物した時に買ったやつだろう。
どうみても乾さんがチョイスしたことがわかる。
乾さん、グッジョブ。
「愛さん、照れちゃ駄目だよ。
こんなに似合っていて、綺麗で、それでいて淫らな愛さんの姿を俺は目に焼き付けたい」
「淫らって・・・・・・うう、もうこんな下着買うんじゃなかったぁ～」

いやいや、素晴らしいじゃないか。
いつも清純そうなのを好んで穿いているぶん余計に今日のはエロく見える。
まさに普段のギャップ効果だ。
是非とも今後ともよろしくしたい。
「そんな照れている愛さんも可愛いよ。でもそのままじゃ何もできない。
ほら、手を動かして？」
「あう、うん」
覚悟を決めたらしい愛さん。
ゆっくりと腕をどけて、あとは俺に委ねるようにベッドに腰掛ける。
その俺以外に絶対見せない余りの無防備さに俺は嬉しさを覚える。
ゆっくりと、愛さんの肩を押してベッドに寝かせる。
俺は彼女の上に覆いかぶさり、完全に上から押し倒す体勢だ。
「大・・・・・・」
潤んだ瞳で俺を見つめる。
愛さんは何だかんだでセックスが好きだったりする。
勿論俺以外にはそんな事を許す筈もない。
だが、一度心を開いてくれればどこまでも俺を大切に思ってくれる。

だからこそか、愛さんと俺が二人きりになれば互いに愛し合って性欲も旺盛なためそういう空気になりやすい。
今日だって愛さんはどうやらこういう行為を期待してウチに来た感じらしい。
俺は優しく、ブラに包まれた胸に手を置く。
「ん・・・・・・・」
僅かに反応する。
相変わらず感度が高い人だ。
実に前戯のしがいがある。
「大、もっと強く。直接でもいいから触って欲しい」
愛さんはじれったく感じたのか、催促をしてきた。
見れば足も最初は閉じていたのに、今では僅かだが開きつつある。
感度の高いせいか既に愛さんのパンツも汗ではないもので僅かに濡れている気すらする。
上だけでなくもう下の方も指を這わそうか。
「大ぃ、はやく。切ないんだ・・・・・・」
焦れったさにたまらなくなったのだろう。
腰をくねくねと揺らし、はやく気持ちよくして欲しいとおねだりをしてくる。

「わかった、それじゃあ」
そう言って俺の手を愛さんのパンツに入れようとした時――――
「ダイー、今日もさみぃから押入れ借りるわ――――げ」
「な、うわ！」
「・・・・・・あちゃー」
突如窓から入ってきたマキさんに俺たちの空気はぶち壊された。
ただ、マキさんの反応を考えるに今回は完全に本人も悪気なかったのだろう。
なら仕方ないけれど許せる。
「み、見るな！　あわわあわっわわわジーンズ、ジーンズどこ!?」
可哀想に、ライバルに一番無防備かつ恥ずかしい所を見られたのだ。
目をグルグルにしてもう慌てに慌てて愛さんは下着姿で俺が脱がしたジーンズを探す。
「これか？」
「お、おう」
マキさんも少しバツの悪そうな顔をしながら素直に愛さんにジーンズを手渡しした。
愛さんも怒りより羞恥心の方が勝っているらしく喧嘩を売るよりも急いでジーンズを履く。

そしてつづいてブラウスも来てようやく互いに状況を冷静に把握しだす。
「ごめん愛さん。俺がいい加減な事を言ったばかりに」
素直に俺から謝る。
今回一番悪いのはマキさんや愛さんでは決してなく、確証もないのに曖昧な判断だけで誰もこないと言った俺の迂闊さにある。
大体マキさんに来て欲しくないタイミングがあるなら窓の鍵を閉めておけばそれで問題なかったのだ。
そうすればマキさんだって窓を破壊してまで俺の部屋にはこないし、ちゃんとインターホンを鳴らしてくれる。
それすらしなかった自分を責める。
「いやいや、流石に今回は私が悪いだろ。悪かったな、ダイ」
俺が謝ったからだろう。
マキさんも珍しく俺に謝った。
「いや、でもちゃんと鍵かけなかった俺が一番悪いですし」
「いやいや、だったらノックすらせず入った私のほうが・・・・・・」
なんなんだろう今日のマキさんは。
異常に物分りというか常識的な対応だ。

マキさんらしくない。
「腰越、もういいからここから出て行ってくれよ」
愛さんが凄く火照った顔でマキさんに言う。
多分まだスイッチが入ったままなのだろう。
どう見てもこのままマキさんが帰ったら仕切り直しになる。
そんな愛さんをマキさんは少し渋い顔で見る。
普段のマキさんなら断るところだろうけど。
「やだ。お前とダイがそういう事するのはなんだかムカつく。だからヤダ」
「な、なんだと」
子供みたいな言い分で愛さんの頼みをぶったぎった。
「ダイー、そんなことより今日はもう寝ようぜ。
ほら私の抱き枕になる権利やるから」
「うぷっ、ちょマキさん」
思い切り正面から抱きしめられてベッドに押し倒された。
そのまま頭をマキさんの豊かな胸に潰されて息ができない。
「腰越！　大から離れやがれ！」

「やなこった、悔しけりゃ奪い返してみろ」
「んだとこのやろう！」
喧嘩が始まったらしい寝っ転がるマキさんが抱きしめる俺を奪い返そうと愛さんが俺の背中を掴む。
そして引っ張ろうとするも、筋力では僅かに愛さんが劣っているのか俺を奪い返すには至らない。
「ぐ、くそ」
「はは、諦めろ。今日は大人しくねりゃいいんだよ」
そう言ってマキさんは目を閉じる。
まじでこのまま寝る気らしい。
俺は何か言おうにも胸に顔を挟まれてまともな事を喋れない。
愛さんもそんなマキさんに途方にくれたのだろう。
しばらく呆然と立ち尽くす。
だが時間が経って答えを出したらしい。
「腰越と大を二人にして帰れるかクソ。あ、アタシも一緒に寝るからな！　いいな！」
「はいはい、勝手にしろよ」
マキさんは愛さんを拒否する事もせず、ただただ寝転がった。

愛さんはというと、俺をマキさんから引き剥がす事を諦めたらしく、それでも一緒に居させることを嫌がっている。

だからか、愛さんはマキさんの体を横にずらし、俺の背中を抱きしめた。

つまり前をマキさん、後ろを愛さんに抱きしめられるポジション。

なんだこれ、天国か。

「う～、やっぱ腰越お前後ろのほうに行くか消えろ。アタシが大を正面から抱いて寝たい」

「うっせぇな。さっさと寝ろよ」

酸欠で薄れゆく意識の中、地味に仲の良さそうな声が耳に残った。

２４話：インドミタブル片瀬恋奈

先日恋奈とマキが決闘の約束を交わし、その日が来た。
時は夕刻。
まだ春とも言えず、かと言って冬と言えないこの卒業の日。
マキは長谷大の家の前に立っていた。
「・・・・・・どうすっかな」
学園に思い出や未練、別れを惜しむ友人などマキは持っていない。
その為マキは卒業式が終われば早々に学園を出た。
もとより何かに未練を持つ生き方を避ける性分なのだ、故に卒業式など彼女にとってさして重要なイベントではない。
卒業式が終わるとともにマキはその足で極楽院の寺。
つまり実家へ一度帰った。
そこで三大のお婆ちゃんへ卒業したことを告げ、学園に行かせてもらった感謝を伝え、進学の旨を細かく説明した。
けれど実家など三大のお婆ちゃんがいなければ僅かでも寄り付きたくない場所であ

る。

マキは必要なことだけ口にすると直様極楽院の寺を後にした。

その後、恋奈との約束の時間までまだ遠い事を確認して大の家へと向かった。

「家には・・・・・・うん、いるな。ダイの匂いがする」

いつものように窓から入ろうと思うのだけれど、何故か今日はそうはしなかった。

なぜだろうか、マキは一瞬考える。

しかし答えは直ぐにでた。

先日の大の記憶のことだ。

大はもうマキとの昔の記憶を思い出しつつある。

だからこそマキは大に会うことを先程までためらい続けている。

もし今日何食わぬ顔で大と顔を合わせたとき、もし大が記憶を思い出していたらどうしよう。

その時自分はどういう顔をすればいいのか。

大は自分にどんな事を言うのか。

その記憶に関わるすべてが怖くてマキは柄にもなく足踏みしていた。

いや、マキが足踏みしているのは恐怖によるものだけではない。

何よりも怖いのは大が記憶を思い出して欲しいと願っている自分の矛盾した心にあ

るのだ。
その期待と不安がマキの行動を妨げる。
しかしいつまでもこうしてはいられない。
マキは自分の両頬を叩いて気合を入れ直す。
「っしゃ！　それじゃあダイに卒業したと伝えるか！」
きっと大ならば何でもないそんな他愛ない事ですら喜んでくれるだろう。
彼は自分にとって母みたいだし、弟みたいだし、それでいて・・・・・・彼氏のようでもある。
そんな彼だからこそ卒業という自分にとって価値の薄いものですら胸を張って伝えてやりたい。
長谷家の扉の前に立ち深呼吸する。
緊張するな、いつも通りに行け。
いつもの自由人な腰越マキのままでいい。
何も飾らない剥き出しの自分のまま大に接すればいい。
そう言い聞かせる。
そしてインターホンを鳴らそうとすると――――
「あれ、マキさん？」

二階の窓から大がこちらを覗いてきた。
「よ、ようダイ。来たぜ、上がっていいか？」
いつも見慣れている彼の顔なのに妙に緊張する。
けれど大のほうは当然そんな事を知るはずもなく、特別不審がる様子もなくマキを見る。
「どうぞ。けど珍しいですね、マキさんが玄関から来るなんて」
「別に、今日は姉ちゃんがいるかもっておもっただけだっつーの」
「はは、姉ちゃんは卒業生との送別会で仕事中ですよ」
他愛のない会話、それだけの事なのにマキは胸を弾ませて楽しんでいる自分に気づく。
「んじゃ、お邪魔するぜ」
そんな自分を否定はしない。
楽しいのならそれはそれでいい事だ。
少なくともそれから逃げる必要なんてない。
マキは浮いた足取りで玄関へ入った。

時刻は七時。
大とマキは二人で夕餉を過ごし、ソファーに座る。
「あと二時間ですよね」
「ああ」
大も恋奈とマキの決闘の事は忘れていなかった。
けれどその事をこの瞬間まで一度もマキに口にしたことはなかった。
故に今ここで彼がそれを言ったということに意味がある。
「やっぱり行くんですよね」
「そうだな」
互いにソファーに並んで座ったまま、顔を合わせずに話す。
「止めても無駄だぜ。これが恋奈との最後の喧嘩になるんだ、アイツから望んだ喧嘩だ。先輩としては応えてやりてぇし何より完成した江乃死魔と本気でやりあうなんて面白そうだからな
やらない理由がない」
敢えて大が嫌いそうな事を言う。
しかし大はその返答にさして反応をしなかった。

大自身既にわかりきっていた答えだったのだ。
ただ、大はそれを聞いても何も言わず黙る。
「どうした、普段のお前なら喧嘩やめろとか言いそうなもんだけど何か私に言いたいことねェのか」
正直、マキは喧嘩を目前にして高ぶっていた。
勿論記憶を戻しつつある大に対して僅かに臆病になってはいるが、それでも気の強い彼女を抑える要因にはなり得ない。
マキの挑発的な言葉に大は黙して語らない。
マキは一瞬言いすぎたかと心配する。
元々今の大の問いに欠片も悪意はなかった。
だというのに高揚したマキが勝手に邪推して大を挑発したようなものなのだ。
マキはそれを理解して内心慌てる。
だが今更前言撤回や言ったことを謝罪するなどプライドの高いマキにできるはずもない。
マキは内心穏やかでなく、ただ大が口を開くことをまった。
「・・・・・・マキさん」
「な、なんだ?」

大は目を伏せて、何かを心配するように言う。
「これから喧嘩、それも八百以上の人数に挑むマキさんに言いたい事があります」
マキは大の普段とは違う静かな威圧を纏う雰囲気に戸惑う。
「後遺症とか残さないで、ちゃんといつも通りのマキさんでまたここに帰ってきてね」
そう言って大は席を立つ。
そしてそのままマキに背を向けてリビングから出ていこうとする。
「お、おい。どこ行くんだ」
マキは慌てて大に声をかけるも大は振り向かないし立ち止まらない。
ただ、歩きながらマキに声だけかけた。
「俺はマキさんの事を家族だと思ってる。
だからご飯だってつくるし、寝るところだって用意する。
マキさんが困ってるなら何だって手助けする」
ドアノブに手をかけ。
不意に大はマキと目を合わせた。
その大の顔を見た瞬間、マキは先ほど自分が吐いた大への挑発を悔いた。
「そんな、そんな大切な家族が自分から危ない事をするのを俺は応援はできない」
大は本気でマキを心配しているのだ。

まるで子を心配する親のように、全くの不純さのない真摯な気持ちを持っている。
「喧嘩に行くなとはいわないよ。片瀬さんやマキさんが互いに同意した上でのものだ、俺が口出しできることじゃない。
だからこそ、絶対に怪我をしないで。
そして終わったらまたいつものマキさんのようにここに帰ってきてくれれば、それでいい。そうじゃないと嫌だ。
・・・・・・それじゃ」
「おい！　ダイ！」
大はそれだけ言ってリビングから出て行った。
マキの静止すら無視し、そのまま二階へと上がっていく気配を感じる。
恐らくもう大はマキと顔を合わせるつもりはない。
マキは大の気持ちを汲み取れず、大はマキにその気持ちを強制しなかった。
だからこそマキは喧嘩に向かう事になったし、大はそれを心配した。
マキはこの瞬間までそれに気づかなかった事を理解した。
時刻は既に八時を過ぎた。
そろそろ約束の場所へ向かう頃だ。
だというのにマキは大が先ほどまで立っていたリビングの扉から目を離せない。

「何が・・・・・・何が家族だと思ってるだよッ！」
マキは軽く地面を踏みつける。
「何が約束だよ！　何が怪我をするなだよ！　何がいつものように帰ってこいだよ！」
拳を握り締める。
「テメェは私の家族かッ！　親か!?」
二階の自室にいるであろう大に聞こえるように吐き捨てる。
この声ならば確実に大は聞こえている。
しかし大の方から反応はない。
「私の事をなんにも覚えてねェ癖に！　私を放っていった癖に！
今更家族面するんじゃねェ！」
胸の内を吐露する。
今までくすぶり続けていた感情が堰を切ったように溢れ出る。
マキは今までにないほどに激高し、目尻に薄く涙を浮かべて叫ぶ。
「何なんだよお前は！　頼んでもないのに親切にしやがって！」
望んでもないのに大はマキを親身になって心配し続けていた。
彼女がこの家に来たのならいつでも寝れるように押入れを改造し、
食事の用意をする際は必ずマキの事を考えて作る量やメニューを考える。

喧嘩をしたと言えば怪我はないかと確認し、疲れたといえばマッサージをしてくれる。

甘えれば甘えただけそれに応えてくれ、そのくせ何も見返りを求めない。

「お前は・・・・・・お前は私の家族かよ!?」

叫ぶもやはり大からの反応はない。

けれどマキの問いは正しい。

大は間違いなくマキの事を家族だと思っていた。

マキ自身もその大の気持ちにはもう気づいている。

「何にも覚えて無かったくせに、約束だけは守ろうとしやがって・・・・・・」

そうだ。

大は約束を覚えてはいない。けれどマキをこの家に招いたその日から大はかつての約束を無意識に果たそうとしていた。

『家族になろう』

その約束を果たすかのように大はマキを決して蔑ろにしたりはしなかった。

つまり、約束を既に果たされようとしていたのだ。

だからこそ、マキは今この瞬間後悔した。

恐らく、自分がもっとはやく約束を思い出して、大が辻堂愛に会うよりももっと早く

大に合っていれば
そうしていればきっと自分の好意は成就していた。
妻と夫のような家族になれるはずだった。
けれど余りにも遅すぎた。
約束を思い出すのも、彼に二度目の好意を持つのも。
だから彼と自分はもうつがいにはなれない。
それは辻堂愛のポジションなのだから。
「私が、私がもっと早くダイと会っていれば！　もっと早く思い出していたら！」
ここが大の家でなければ物に当たりまくっていただろう。
それほどまでに今の気持ちは荒れている。
行き場のない怒りは既に胸を張り裂けそうな程ふくらませている。
マキは完全に癇癪を起こした子供のように怒る。
何か、何かにこの怒りをぶつけたい。
そして見つけた。
「江乃死魔・・・・・・」
そうだ、もう間もなく片瀬恋奈率いる江乃死魔と最後の喧嘩がある。
マキはその事を思い出し、薄く笑った。

そうだ、獲物は沢山いるんだ。
これならばきっと今自分が蓄えている行き場のないこの怒りの感情を全てぶつけられる。
マキは殺意を隠そうともせず、完全に狂犬のような精神状態のまま長谷家を出た。

「遅かったわね、腰越」
約束の時刻より僅かに遅れて私は喧嘩の場所へ付いた。
江乃死魔の全員は既にかなり前から来ていたようで、既に凄まじい人の固まりが弁天橋に背を向けている。
なるほど、確かにこれなら千人近くはいるだろう。
「御託はいいからさっさと始めようぜ」
拳を鳴らし、一歩前に踏み出る。

早く、直ぐにでも人を殴って気を紛らわせないと胸の痛みに頭がおかしくなる。
「マキ」
江乃死魔の群衆の中から自分の名を呼びながら一人の女がこちらに近づいてきた。
リョウだ。
恐らくアイツもこれが最後の喧嘩だろう。
普段以上に気迫を感じる。
実に美味しそうな獲物だ。
「お前、ここに来る前にヒロ君に何かしたのか」
「なに？」
リョウがよくわからない事を言ってくる。
「俺が家を出る時にヒロ君の家からお前の怒鳴り声が聞こえてな。
彼に何かあったのかが気になるんだ」
なるほど。
心配性で身内を大切にするリョウの性格だ。
あの私の叫び声を聞いて無視できる筈もないだろう。
「さぁな。もしかしたら私がキレてダイをぶちのめしたのかもな」
敢えて嘘を付く。

リョウがキレれば前の梓との喧嘩の時のように底力をひきだせるかもしれない。
それを意図して挑発する。
「それは有り得ん」
だがリョウはばっさりと私の思惑を否定する。
「お前が彼に手を出す訳がない。
昔のことを覚えているのだとしたら尚更だ」
どいつもこいつも。
昔の事を引っ張ってきやがって。
ダイも姉ちゃんも恋奈もリョウも辻堂の奴もどいつもこいつも
「知ったふうな事を言うな。
私の気持ちも何もしらねぇで昔のことを掘り返すんじゃねェ」
「リョウッ！　速く下がりなさい！」
「なっ、聞く耳持たずか!?」
キレた私は拳を握り、大きくリョウに振り抜いた。
勿論こんなのは本気とは程遠いものだ。
だがこれですらそこいら不良じゃ反応すらできない。
降った拳がリョウに直撃する瞬間、

「ぐ、マキ。一体どうしたんだ・・・・・・ッ？」
「テメェには関係ないことだ」
ギリギリの所でリョウは手持ちの木刀で私の拳を受け止めた。
流石に一度は湘南の頂点をとっただけの事はある。
常人の反応速度と比べ圧倒的に上回っている。
「くっ、朝と機嫌変わりすぎだろッ！　お前ら行け！」
恋奈はリョウを助けるように江乃死魔に命令を下す。
そして人の波が全て私に向かって襲いかかってきた。
かつて一度も聞いたことないレベルの足音。
体験したことないほどの地響き。
まさに数の暴力を体現したのがこの江乃死魔だろう。
この波に襲われれば一塊の不良グループなんぞ蟻のように蹴散らされるに違いない。
だが、それでも私や辻堂には意味などない。
「ははっ、それじゃあ振るい落しにかけてやるよ。
行くぜッ！」
殺気を全て開放し、最大の威圧をその波に叩きつける。
その瞬間、波が一瞬止まった。

同時にザワザワとした声が響き始める。
「くそ、相変わらずデタラメな事しやがって」
恋奈は悔しそうに吐き捨てる。
悔しいのも当然だ。
なぜならこの人睨みで江乃死魔の八百人のうち、半数が気絶したのだから。
この相手にプレッシャーをかける技。
正式には気当たりという武術の応用技に近いものなのだが、これが恋奈を悩ませる技だった。
江乃死魔の性質として不良を片っ端から集めただけの数に特化している部分がある。
勿論その江乃死魔内にも極めて強い者もいる。
リョウやでかいのがその最たる例だろう。
だが、逆に言えば強者以上に平均的な実力者やそれ以下である弱者が多いのも事実。
そういった喧嘩や精神面において未熟なものが今のマキの気当たりで全員気絶したのだ。
この最悪な技をくらって尚戦うことのできる者が多くいなければとてもではないが私に勝てるはずもない。
だからこそ恋奈は途中から梓のような強者を求めた。

「おいおい、どうした恋奈。半分以上が失神しちまったぞ。
これじゃあ数の有利ですら意味ねェじゃん」
恋奈をあざ笑う。
恋奈自身もそれを言い返す言葉がなく、ただ睨み返すしかない。
「俺を忘れるな」
「おっと危ねェ！」
先程から至近距離にいた良子が私の気当たりをいち早く振り切って殴りかかる。
だがそれでも遅すぎる。
振り抜いてきた木刀に拳を強めにぶつけた。
瞬間、木が砕ける音が私とリョウの間に響いた。
「あちゃ、ワリィな。お前のお気に入りのオモチャ壊しちまったぜ」
「くそっ、やはりお前にこんなものが通用する筈もないか」
悪態を付きながらも目は一切の諦めや恐怖の色を感じさせず、むしろ私に更に距離を詰めてきた。
武器を失ったのなら次は拳によるインファイトか。
面白い、乗ってやる。
「オラァ！」

牽制するように左拳をリョウの顔面狙って振り抜く。
牽制とは言ったが、このジャブだけで大概の不良は反応できずに一撃で沈むレベルだ。
「――――おっと、そら！」
しかし流石はリョウ。
当たるギリギリの所で首だけで拳を躱し、逆にカウンターのように右拳を合わせてくる。
勢いの乗ったその拳は確実に重い。
喰らえば私といえどもノーダメージで済むレベルじゃない。
が、それでも辻堂の拳と比べれば何段階も格が足りない。
「ぐ、うあ!?」
リョウが一瞬何をされたのかわからない顔で私の前から吹き飛ぶ。
見れば肩や腹部辺りの制服が破れていた。
「ぐ・・・・・マキ、相変わらず滅茶苦茶な喧嘩を・・・・・・」
「滅茶苦茶？　そもそも喧嘩に形式なんて存在しないだろ。
テメェらが勝手に作ったセオリーに私を当てはめたお前が悪い」
リョウは悔しげに顔を歪ませ膝をつく。

一瞬で何が起きたのか。
種を明かせば簡単な事だ。
私がカウンターを、単純に身体スペックに物を言わせて無理やり体を捻って回避し、空ぶって隙だらけになったリョウが次のアクションに移る前に再び身体スペックを活かして数発殴った。
つまりただ身体能力を活用しただけだ。
何も小細工などしていない。
リョウがワンアクションする間に私は数回行動を起こせる。
それを実行しただけなのだ。
その結果を一言で表現するのならこの言葉が一番いい。実力が違う。
「そんだけ痛めつけりゃ満足だ、そこで座って休んでろ」
「ぐ、止めはささないのか？」
「・・・・・・お前には勉強見てもらった恩があるし、昔からの付き合いの情もある。そっちから来ない限りもう手は出さねぇよ」
体を動かす為に駆動する関節部を殆ど殴った。
以前、乾の奴にダイがやられた時に見せた底力でも出さなければもうしばらくは動けまい。

もっとも、あれは自分の意思で出せる部類の実力ではないが。
私を依然として睨むリョウから視線を外し、再び江乃死魔の状況を見る。
「ちっ、貴重な戦力であるリョウがこんなに早い段階でやられるなんて計算外だわ」
「だったらおれっちがリョウの分までやってやるってのー！」
「馬鹿！　アンタまでやられたらもうジリ貧だっつぅの！」
どうやら残り半数は私の気当たりから自力で立ち直り、体勢を立て直している。
しかし今の私とリョウのタイマンが恋奈からしたら失敗だったようだ。
「テメェ！　よくもリーダーを！」
「行くぞお前ら！　リョウさんの仇とってやる！」
恋奈のバカとでかいのが言い争っている間にリョウのチーム『湘南ＢＡＢＹ』の奴らが私に殴りかかってくる。
おおよそで確認したところ、五十人弱ど全員が私の気当たりをクリアしたらしい。
なかなかやるじゃないか。
思わず喜んでしまう。
「マキ！　顔見知りだからって容赦しねぇぜ！」
「そりゃこっちの台詞だっての」
この湘南ＢＡＢＹは結成した経緯が特殊であり、その結成場所なども相まって私の顔

見知りがそのグループに多い。
だがそれがどうした。
まさか喧嘩にそんな理由で手を止めるわけもない。
私は知人の拳を何の感慨も持たず受け止め、何のためらいもなく知人の顔を殴り飛ばす。
「グボァ！」
哀れ、殴り飛ばされた湘南ＢＡＢＹの一人は勢い余って数メートル吹き飛ぶ。
はっきり言えば今の奴もそこいらの不良と比べればかなり強い部類だ。
だがやはりリョウ程でもない限り拳一合で終わる。
「お前達！　単独で攻めるな、囲みながら同時に攻めろ！」
「了解です良子さん！」
リョウは動けないなりに指示を飛ばして湘南ＢＡＢＹの動きを操作する。
恋奈はカリスマによる統率力に特化しているが、リョウの場合は人情や信頼関係における統率力だ。
故に誰もがリョウの指示に疑問を持たず、言われた通りの動きを完璧にこなす。
これが湘南ＢＡＢＹが一度湘南の頂点をとった一因だろう。
私を取り囲む湘南ＢＡＢＹ。

なるほど、これは中々にプレッシャーがある。
だが、相手が悪い。
「行くぞー」
『おう！』
一人の掛け声をトリガーにして全員が一斉に襲いかかってきた。
まさに袋叩きという展開だ。
問題はその袋の中にはダイナマイトが入っている事だ。
「おせぇんだよ」
私を中心に突っ込んでくる円陣。
私はそれを立って待つ事はせず、むしろ円陣の一角に突進した。
「なっ――――ぶげぇ!?」
突っ込んだ先にいた奴らを片っ端から殴り飛ばす。
そして一気に円陣から脱出し、殆ど陣形が崩れた状態の軍勢に今度は私から襲いかかった。

「・・・・・やっぱりこうなった、か」
「へぇ、こうなることを想像してたんだ」
一時間後
江乃死魔は壊滅していた。
まるで自然災害に巻き込まれたかのように所々地面はえぐれ、フェンスは剥がれている。
そして地には総勢八百人の屍累々。
片っ端から目に付いた奴らを殴り倒して、踏み潰して、蹴り飛ばして。
途方もない人数を蹴散らしたというのに私は未だ体力の限界がまだ来ない。
それどころか今丁度ヒートアップしてきた所だ。
だが、既にこの場に私と相対している人間は恋奈しかいない。
別にこいつが最後まで逃げ回っていたわけではない。
むしろ果敢に攻めつづけていただろう。
単純に持ち前のしぶとさで最後まで立っていただけだ。
リョウやでかいのですら何度か倒したにもかかわらず数回起き上がってきた。

「今日のテメェら江乃死魔は中々面白かったぜ。
いつもとは違う執念を感じた」
だがもう御終いだ。
あとは私と恋奈の消化試合。
既にどちらが勝つかなどわかりきっている。
「なに勝った気になってやがる腰越ッ！
まだ私は負けるなんて欠片も思ってねェんだよ！」
私の言葉に切れた恋奈が拳を握って襲いかかってくる。
この展開ももう何度繰り返したか分からない。
突撃してくる恋奈の懐に一瞬で潜り込み、腹部に肘を叩き込む。
「がァ!?」
私の攻撃に反応すらできていない。
恋奈はその攻撃のインパクトに耐えきることができず、数メートル吹っ飛ぶ。
私はそれを追撃することはなく、ただ休憩するようにその場に立つ。
「ぐ、あ・・・・・・痛くない！」
受身すらできず、無様に地に這いつくばって直様立ち上がってくる。
相変わらずの不死身さだ。

「諦めろよ。何度繰り返しても無駄だ」
「無駄だって何でテメェが決め付ける！
私は無駄だと思わないからこうして立ち上がり続けてんだろうが！」
いい根性だ。
実に私好みの言葉だ。
だというのに、何故か恋奈の言葉に私は胸を掻きむしりたくなるほどの痛みを感じた。
「お前一人じゃ私には勝てない。
いや、何百人束になったはずなのにお前以外がもう倒れた。
つまりこれからどう足掻いてもテメェは負ける勝負なんだよ」
この現状がそれを示している。
誰の目にも明らかな答えだろう。
先ほど八百人で私に挑んでこのザマなのだ。
残る一人である恋奈がどう足掻いても勝てる理由がない。
「勝てないとどうして言い切れる、どうして決めつけられる。
いいか、私はどんな目にあってもアンタや辻堂を倒すことを諦めない。
だからこうして何度殴られても立ち上がる」

既にスタミナは消費しきっているのだろう。
いくらダメージをなかった事にしてもスタミナまで回復する事はない。
殴り殴られれば相応に疲労は蓄積する。
なのに何故こいつは何度も立ち上がるのか。
「負けを認めろよ、じゃないと次は二度と立ち上がれないまで殴り続けるぞ」
脅しではない。
今こうして言葉を吐き続ける恋奈を私は何故か苛立っている。
「やってみろや。私はお前を殴り倒すまで立ち上がり続ける」
その無駄な執念。
私はそういうのが大好きだったはずだ。
なのになぜだ。
どうしてここまでその好ましかった筈の執念に苛立ちを覚える?
まるでこの喧嘩に楽しみを見出せない。
「上等だ、だったら望み通り殴り続けてやる」
完全に自分を見失った私は濁りきった心のまま恋奈に突撃する。
恋奈はやはり私の速度に反応すらできていない。
このままマウントをとって殴り続ければ確実に決着はつく。

一瞬で恋奈の懐に飛び込む。
同時に腹部に肩をぶちこんで押し倒す。
「とったぜ、これで終いだ」
「く、まだよ！」
腹の上に乗った私はそのまま拳を撃ち下ろす。
「ぐぁ！」
渾身の一撃ではないにしろ中々に力を込めた一撃だ。
それを恋奈は腕でブロックし、耐える。
流石の耐久力だ。
本来ならば今のは腕をへし折る威力だったはずだが。
再び腕を振り上げる。
それをみて恋奈はしびれた腕で私の顔を殴る。
「体重が乗ってねぇんだよ！」
「あう！」
マウントを取られた姿勢で放つ拳など何の重みもない。
私は恋奈の攻撃を意に介さず二度目の拳を打ち下ろす。
だがそれも恋奈は空いた腕で防いだ。

無駄なことを。
既に根性だけではどうにもならない所まできているのに。
・・・・・・無駄？
一体何を私は今無駄だといった？
「く、いい加減どきやがれ！」
「うおっと」
一瞬呆けた私を恋奈は見逃さず、身をよじりマウントポジションから逃れた。
いや、そんな事はどうでもいい。
私は一体どうしたんだ。
無駄と私は今言った。
何を馬鹿な事をいうのだ。
今恋奈が根性で私に立ち向かい続けることを何故私は否定する？
その勇敢さは褒め称えるべきだし、私はその根性を肯定すべきなのだ。
以前までの私ならそうしたはずなのだ。
どこから私はブレた？
何故根性を否定する？
自分の事なのに自分がわからない。

「く、クソッ！　畜生！」
「が――――ッ」
壊れそうになる自分を振り払うように拳を振るう。
やけくそになったその一撃が恋奈に直撃した。
堪らず恋奈は膝から崩れ落ちる。
本来ならここで追撃をするべきなのだ。
なのに私は崩れ落ちながらも再び立ち上がろうとする恋奈の姿をみて足を止める。
だが恋奈も既に体力の限界なのか、膝をつくものの立ち上がれない。
これでようやくケリがついたのか。
私はそう考える。
「ぐ、ま・・・・・・まだ私はやれるんだよ！」
自分に活を入れるもやはり力が入らないのか立ち上がれない。
恋奈は涙をこぼしながらも何度も足に力をいれる。
だが何度繰り返そうと体がそれに応えない。
「まだ、まだ私は負けてない。まだ負けたくないのにッ！」
なぜだろうか。
私はもう少しで勝ちそうなのに一切嬉しくなかった。

それどころか恋奈のその姿を見て負けつつあるのは自分なのではないかと思い始めている。
自分を見失った私が自分を信じ続ける恋奈に勝って良いと思えない。
私は自らの手で恋奈を立ち上がらせようと歩み寄る。
その瞬間――――
「そうっすよ。まだ恋奈様は負けてません」
私より速く、乾が恋奈の手を引いていた。

「どうしてアンタがこの喧嘩に関わる。
これは江乃死魔と腰越マキの喧嘩よ。
辻堂の犬のアンタが割り込んでいいものじゃない」
乾の手によって何とか立ち上がった恋奈は感謝の言葉よりも非難の言葉を吐く。
だが乾はその問いをぶつけられる事を予想していたのだろう、
普段通りのおちゃらけた態度で答える。

「だって自分恋奈様の親友っすから。
親友助けるのって当然の事ですし」
凍りつく恋奈。
まさかの返答だったらしい。
「恋奈様、お願いがあります」
固まる恋奈の目をまっすぐ見て乾は真面目な表情で口を開く。
「今からの恋奈様の喧嘩は江乃死魔の総長としてではなく、三大天の恋奈様として喧嘩してください。
だったら自分も辻堂軍団の乾梓でなく恋奈様の親友として力になれます」
そうきたか。
確かに江乃死魔にこだわり続けるのなら恋奈は絶対に乾の力を借りられない。
だが、だったら根本的な問題を解決すればいい話だ。
つまり江乃死魔にこだわらなければいい。
一人の片瀬恋奈としてならば乾の助力を得ても何の問題もない。
既に江乃死魔の人間は恋奈を除いて全員が倒れている。
ならばもう恋奈は自分の立場を動かすことができる状況なのだ。
「梓、相手は腰越よ?

チキンなアンタにとってまともにやりあうのは避けたい相手じゃないのかしら」
「そりゃ避けてーっすよ。けど、自分恋奈様見捨てること出来なさそうですし」
「・・・・・・そう、馬鹿ね」
恋奈は僅かに顔を伏せる。
そのせいで表情は伺えない。
けれど私には何となく恋奈の心境がわかる気がした。
「三大天の片瀬恋奈が命令するわ。梓、あの皆殺しの腰越マキをぶち殺す手伝いをしなさい！」
「りょうかいっす恋奈様！」
互いに笑い合っている。
どうやらこいつらは以前の裏切りの件の遺恨を解決していたらしい。
「江乃死魔総長じゃなく三大天としてね。
そりゃつまり江乃死魔としてのお前は私に負けを認めたって事でいいんだろうな」
立場を変えたから前の立場の責任が無くなるなんて都合のいい展開などない。
江乃死魔総長が部外者の力を借りる以上それをはっきりさせなきゃならない。
私の問に恋奈は一瞬苦渋に満ちた顔をする。
けれどそれは本当に一瞬だけだ。

僅かにネガティブな空気をだし、僅かな間でそれを自身の意思で消し飛ばした。
「ええ、認めるわ。江乃死魔は皆殺しのマキに全滅した。
誇りなさいよ、アンタは江乃死魔の八百のヤンキーを皆殺しにした」
まるでそれは自分に言い聞かせるような言葉の抑揚だ。
「だから生き残った私はなんとしてもテメェをぶちのめさなきゃならない。
江乃死魔を潰された私は総長のケジメを取らなきゃ許されない」
目を見開き、私を尚睨みつけてくる。
その諦めの悪さは一体どうしてなのか。
何故諦めることを頑なに拒否し続けるのか。
「私はアンタと辻堂の喧嘩を初めて見た時から思った。
テメェら二人をぶっ倒したいってね」
乾の支えすらなければ立ち上がる事すらできなかったのに。
立ち上がれない状態に陥った段階でもこいつは諦めていなかった。
「私はその目標を絶対に諦めない。
無理だと何度も思った。けど無理でも私はそれが心からぶつかりたい目標だった」
それを達成する為に江乃死魔を作り上げ、湘南を制圧し、今や八百の数まで集めた。
そしてそれを全て私の手によって消し飛ばされてもまだ諦めない。

これは絶対に往生際が悪いとかそういうものじゃない。
ただ、本当にこいつは理想を達成しようと本気なだけなのだ。
その余りのブレなさに私は言葉を失う。
「だから私は負けを認めない。勝つまでにどれだけ殴られてくじかれたとしても、食いつき続けてやる」
・・・・・・はっきり認めよう。
こいつの執念に感銘を受けた。
理想への努力する姿勢。
どんな障害にぶつかっても諦めない不屈さ。
そしてそのタフさに。
そんなちっぽけなタフさすら未だ挫けない私はなんなのか。
八つ当たりで江乃死魔を潰した私はなんなのか。
心ここにあらずで人の理想を邪魔し、相手の姿勢を否定しようとする自分は一体何様なのか。
未だ過去の約束に縛られて、前に進めない私など今の恋奈の足元にも及ばない。
喧嘩の実力云々ではない。
その不良としてのあり方に私は確実に惨敗している。

「恋奈、お前は相変わらず鬱陶しい奴だな」
だがその負けに意味はあった。
恋奈の精神を心で理解できた。
私は、卒業したこの日。
そしてこの場所でようやく自分の未来の理想が見えた。
「けど、そういう青臭いのは嫌いじゃない。
気に入ったぜ、本気で相手してやる」
私は先へ進む。
もう迷わない。

「ちょ、やべぇっす。
何かさっき江乃死魔と喧嘩してた時よりプレッシャーというか凄みが段違いなんすけど」

梓が冷や汗を流しながら呟く。
それは自分も感じた。
明らかに本気を出すと言った瞬間からこいつのまとう雰囲気が変わった。
いや、もどったと言うべきか。
最近腰越はくすぶり続けていた。
そのせいかこいつは妙におとなしくなり凄みが無くなった。
だが今のこいつは違う。
初めて合った時以上に存在感を増している。
圧倒的な我の強さ、それを通す腕力。
そして他人を顧みない姿勢。
その要素が全て先ほどの腰越とは段違いだ。
「れ、恋奈様ぁ。
やっぱ自分逃げていいっすか？」
「諦めろや、テメェももう私の獲物だ。
逃げても地の果てまで追いかけてぶん殴ってやる」
「ひいぃ！　こんなバイオレンスなストーカーいらねぇっすよ！」
いきなりヘタレるなバカタレ。

ていうかマジでどうする。
正直私一人ではどう足掻いてもジリ貧で負けるのは目に見えている。
無論チャンスが来るまで耐える自信はある。
けれど勝つための明確な作戦すら閃かない。
けれど今横には私の手足になってくれる梓がいる。
ただ、こいつはテンションによって明らかにやる気が違うし、正直強さの奥も未知数。
アテにしすぎると逆にピンチになりかねない。
だったら、私は私なりに自分の事だけを考え動き、梓の動きには干渉しない事がベストか。
一歩踏み出す。
瞬間、横から凄まじい風切り音が聞こえた。
「おっと、今のをガードするのか」
「いきなりあず狙いかよ。容赦なさすぎっしょ」
全く反応できなかった。
腰越は私が動くと同時に梓につっこんだらしい。
そして私が一切反応すら出来なかった突進を梓は看破し、的確に防いだ。
それどころか

「ちっ、やるじゃんお前」
腰越は僅かに眉を寄せて梓から飛び退いた。
その後自分の右手を掴む。
見れば右手首が明らかに力なく垂れ下がっている。
つまり、今の一瞬で腰越の攻撃を防いだだけでなくむしろ反撃に成功したのか。
腰越は一瞬で自分の手首をはめる。僅かにしびれる痛みは続くだろうが、実質梓の攻撃は今ので無駄になった。
だが無意味ではない。
今ので梓の実力が何となくだが把握した。
「前回と前々回はボロクソにやられましたけど、今回は出し惜しみなしで逆に倒してやるよ。
言っとくけどあずは結構根に持ってるんで」
梓は一度腰越に折られた左腕を鳴らす。
一度は不意に腰越に襲われ善戦するも左腕を折られ病院送りに。
二度目は江乃死魔を裏切り消そうとした際にメッタ打ちに合い、全身を痛めた。
そしてこの喧嘩が梓と腰越にとって三度目のものとなる。
果たして三度目の正直となるのか、それとも二度あることは三度あるという言葉の通

りになるのか。
腰越はつなげたばかりの腕を軽く振り、ストレッチする。
どうやら既に痺れすらとれたらしい。
そして私と梓を交互に見る。
恐らく腰越は梓を重点的に警戒するはず。
私の見た限りでは梓の攻撃力は既に腰越や辻堂に迫るものがある。
だからこそこの状況では確実に警戒するのは梓のハズなのだ。
だが、腰越はむしろ梓より私を視線に収め続けた。
なぜだ。
例え私が腰越を捕まえて攻撃したとしても大したダメージは与えられない。
腰越からしたら私はただしぶといだけの存在なはず。
ならばここは攻撃力が高くしかし打たれ弱い梓に集中するはずだが。
私のその疑問を腰越は察したらしい。
軽く笑う。けれどその笑いは決して私を見下したものではない。
「お前は自分を随分過小評価してるようだ。
私はむしろ恋奈、テメェを警戒してるんだぜ」
何故か。

まるで判らない。
けれどこれは良いかもしれない。
私が狙われる分、梓がフリーになるチャンスが多いのならむしろチャンスは多い。
「梓、私からは何も指示をださない。好きに動きなさい」
「じゃあ逃げましょうよ。自分恋奈様が負けない限り他の勝敗なんてどうでもいいですし」
「真面目にやれや」
どこまで本気なのか判らない奴である。
「はいはい、わかりましたよ」
梓は多少やる気をだしたらしい。
一回二回続けてステップを踏む。
そして三回目のステップが終わった瞬間
「おっと」
ステップの着地と同時に腰越の目前に到達し、殴りかかっていた。
まず左手で腰越の目を狙う。
凄まじい速さの貫手が突き刺さらんとする。
「はっ、当たれば大怪我必死の箇所を迷いなく狙ってきやがったか」

「当たるわけないから狙ったんすよ」
即座に反応した腰越は左手を掴み取る。
だが、掴んだその手を梓は空いた右手でつかみ返す。
瞬間、腰越は僅かに顔を歪め梓を蹴り飛ばした。
「つぅ！」
堪らず梓はしゃがみこむ。
だが腰越は追撃すらせずに先ほど梓に掴まれた自分の手を握った。
「いてぇのはこっちだっての」
今のワンアクションでどうやら再び関節を外されたらしい。
即座に骨をはめ直し、構える。
「次は私のターンだぜ」
「うひゃぁ！　まじこえぇっす！」
そう言いながらも怒涛の連打を繰り出す腰越の拳をすべて弾き、受け止め、回避し始める。
恐らくここからは互角の戦いが始まり膠着が始まる筈。
さて、そろそろ自分もダメージは抜けてきた。
動くとするか。

「ははははっ！　いいぜ乾、以前より明らかにいい動きしてんじゃん！」
暴風雨のようなめちゃくちゃな動きに梓は若干押され始める。
「ぐ、流石に・・・・・・きついっす」
どんなに強かろうとやはり梓は腰越や辻堂と比べれば格が一つ違う。
タイマンとなれば本気を出した腰越にはまで勝てるほどの実力を持っていない。
だからこそ私も動く必要があるのだ。
「腰越！　私を忘れんな！」
背後から走りより、拳を振り上げる。
本来ならばこんな大振りの攻撃が当たるとは思えない。
けれど攻めに関しては同等の梓が相手をしているのだ、第三者からみれば隙はかなりある。
が、今回は私の見通しが甘かった。
「ぐぁ――――つぅ・・・・・・恋奈様邪魔っす！」
振り抜いた拳は完全にからぶる。
同時に梓は数発殴られたようで崩れ落ちた。
「残念だが私は乾以上にテメェを警戒している。
そんなトロい攻撃があたるかよ」

バカじゃないのか。
何で残像残るレベルで私の攻撃を回避する必要がある。
一瞬梓ですら反応出来なかった速度で梓の背後に回り込み、かつ数発殴っていた。
「まさかと思うけど、アンタさっき江乃死魔とやりあった時より強くなってない？」
「さぁな。けど気分はさっきより最高にいいぜ。
胸のつっかえもとれてすげぇ体も軽く感じる」
つまり強くなってるんじゃないのよ。
どうすんだこの化物。
しかし、いつまでも唖然としてられない。
あまり時間をかけると先に梓がやられかねない。
今度は自分が梓をリードするように先に私が攻め込む。
対してそれを受け止めんとその場に立つ腰越。
「恋奈。もしこの喧嘩でお前が負けた場合、お前はどうすんだ」
殴りかかる私を真剣な目で見ながら、問いかけてくる。
「私がお前とやりあうのはこれが最後だ
もうチャンスは無い。なのにこれで負けたらお前はどうするんだ」
一切の侮辱の意は感じられない。

つまり本心からの質問、
「だったらテメェの方からまた私に挑みたくなるくらい強くなってやる！
辻堂を倒したらテメェだってやる気が出るだろ！」
タックルするように突進する。
「はは、何だそれ。
そんな曖昧な根拠でまだ私を追うのかよ」
笑いながらも容易く片手でタックルを受け止められる。
まるで鉄柱にでも当たったかのようにビクともしない。
「本当に諦めの悪い奴だな、お前」
受け止めた手を一瞬離し、流れるように私の腹に回し蹴りが入る。
息すらできない痛みを感じて倒れこむ。
不味い、こんな至近距離で座り込んだら
一瞬冷や汗をかく。だが、いくら待っても目前の腰越は攻めてこない。
一体なぜかと思い恐る恐る顔を上げると、
「立て、まだ私は満足してない」
「なっ？」
私の手を引いて無理やり腰越は私を立たせた。

「どういうつもりっすか、皆殺しセンパイ」
絶句する私ではなく梓が訊く。
その言葉に腰越は子供のように無邪気な顔で答える。
「最後のお前らとの喧嘩だ。
ギリギリまで味わいたいし、何より私がお前らからまだ知りたいことがある」
舐めているのか。
一瞬切れそうになる。だがそんな事は絶対にない。
腰越は喧嘩において容赦する性格じゃない。
つまり今の言葉は濁りない本心。
本気で私たちと喧嘩を楽しんで、かつ知りたいことがあるから今私を立ち上がらせた。
「ぐ、つぅ・・・・・・」
立ち上がりはするものの、洒落にならないレベルで蹴られた箇所が痛む。
立ち直るにはもう少し時間がかかりそうだ。
多分腰越は私が完治するまで待つだろう。
だが、私のプライドはそれを拒否する。
ふらつきながらも再び腰越に掴みかかろうとする。

「その根性も実に好みだぜ」
ふらつく私の手を容易く払い、投げ飛ばす。
視界が一回転して自分が飛んでいる事にようやく気づく。
やばいぞこれ。
あまりに頭がふらついてどっちが空でどっちが地面か判らない。
これじゃあ受身すら取れそうにない。
ゾっとするものを一瞬感じた瞬間。
「おっと、危ない！」
地面に叩きつけられる瞬間、ギリギリの所で梓が受け止めてくれた。
「大丈夫っすか？　やばいようでしたら休んでてください、自分が前出るんで」
「梓、アンタ・・・・・・」
やばい、梓の頼もしさに僅かだが嬉しさを感じた。
この子、やる気になればこんなにも頼りがいがあるのか。
「じゃあ乾、次はテメェが飛んでみるか」
「うえぇ!?　それは勘弁っす！　恋奈様シールド！」
「梓、テメェ！」
梓との友情を手に入れました。

荷物がいっぱいです。
他の荷物を捨てますか？
いいえ。
「あぁ！　恋奈様がまた飛んだ！」
「いいから受け止めに行ってやれよ」
投げ飛ばした本人と盾にした本人が他人事のように話している。
何だろう、真面目にやろうとしてる自分が酷くバカらしく思えてきた。
そんな事を考えながら、飛んでいる私の下を潜って、着陸地点に再び梓が先回りするのを確認。
「オーライ、オーライ。ナイスキャッチっす！」
私はボールか。

結果として、この最後になるであろう恋奈と乾との喧嘩はかなり楽しいものだった。

乾の攻撃は私をひやひやさせるほど鋭いし、恋奈はその気迫や根性が実に好みだ。
殴りあえば殴り合うほど互いに高みに登る感覚。
いつまでもこうしてやりあっていたい。
だが、そろそろ時間だ。
もうそう余裕がない。
先に殴り倒していた江乃死魔の奴らが起き上がってしまう。
そうなれば恋奈や乾が戦うにしてもしこりが生まれる。
既に恋奈は江乃死魔総長としてではなく三大天として私に挑み、乾と手を組んでいる。
だから江乃死魔が再び動き始めれば恋奈は乾か江乃死魔のどちらかを切り捨てなければならなくなる。
恋奈はまだその事に気づいていない。
乾もそうだろう。
二人共確実に頭がハイになっている。
気づくほどの冷静さなどあるはずもない。
仕方がない。
センパイとして、この喧嘩を満足する終わり方にさせてやるか。

こいつら二人の土俵に敢えて入り、それを正面から叩き潰す。
「腰越ェ！」
「いい気迫だ、だがお前はちょっと寝てろ」
「な、ぐぁ！」
襲いかかってきた恋奈の拳を軽く躱し、腹にしばらく動けない程の一撃を加える。
同時に崩れる恋奈をつかみ、必要以上に怪我をさせないようにネットに向かって投げ飛ばした。
「恋奈様ッ」
恋奈の元へ駆け寄ろうとする乾の前に立ちふさがる。
「おっと。乾、お前はもうここで決着を付ける」
「くっ、上等だよ！」
仕切り直すように向かい合う。
こいつは確か自分の速度に絶対の自信があった筈。
つまり私はそれを上回って正面から勝つ。
乾は一瞬足を踏み出した後、私の懐に飛び込もうとする。
いい速度だ、けど私の方が早い。
乾と同時に私は踏み出し、乾の反応速度すら越えて逆に私が乾の懐に潜り込んだ。

「んなッ!?」
走ってる最中突然私が懐に現れたため、梓は急ブレーキをかける。
「隙だらけだぜ」
ゆっくりと乾の胸ぐらをつかもうとする。
だが
「まだっすよ!」
とてつもない速さの拳が私に雨のように降りかかる。
この喧嘩で一番はやい連打ではなかろうか。
完全に本気を出したようだ。
「乾。お前は恋奈とは逆で根性がなさすぎる。
課題としてダイがいなくても本気になれるようになっとけ。
それができりゃまたやりやってやる」
全ての貫手や正拳を真正面から叩き落とす。
「それじゃあまた今度な」
一撃程鳩尾に拳を叩き込む。
同時に一気に体をくっつけて背負投げに移る。
「・・・・・・ちぇ、今回も負けましたか」

「でも今までの二回よりは楽しめたぜ」
「そっすか。ああ、そうだ一つ言い忘れてたことが」
既に腕をつかみ、体を腰に乗せられ間もなく投げ飛ばされる。
その僅かな瞬間に私たちは互いに言葉を投げ合う。
「卒業おめでとうございます」
「ああ。ありがとな」
その言葉に感謝し、私は乾を海に投げ飛ばした。
僅かな間が空いた後、海に人が叩き落ちた音が響いた。
「・・・・・・次は恋奈、テメェだ」
乾との喧嘩の余韻に浸りながらも次の相手を睨みつける。
「上等だ！」
既に回復は終わっているらしい。
喧嘩をし始めた時と同じように気迫に満ちた顔で私に詰め寄る。
だが私は今回はそれを止めない。
迎撃もしない。
ただ、私は目前に恋奈が来るまで立ち止まる。
「腰越、アンタ・・・・・・」

私の真意に気づいた恋奈は私の目の前で足を止めた。
「わかってくれたようで何よりだ、それじゃあやるか」
「・・・・・・わかったわ、吠え面かかせてやる」
互いに胸ぐらをつかみ合う。
時間がなく、同時に恋奈が自分の耐久力に絶対の自信があるのならこれが一番なのだ。
「「せーのっ！」」
互いに頭を引いて――――相手の額に自分の額を叩きつける。
そして響く爆砕音。
「ぐぉ・・・・・・・・」
「づぁ・・・・・・・・」
一瞬意識がとびかける。
だがまだまだだ。
恋奈の奴はまだ私の袖を離していない。
「もういっちょだな、やるか？」
「ぐぅ。と、当然よ」
再び同じアクションをし、響く音。

「く・・・・・・うぁ」
恋奈がたたらを踏む。
が、まだ私の袖を放さない。
「ぶつける威力が違うからな。そりゃこうなるか」
そうは言うものの、私自身も結構キツイ。
実際目が回りそうになる。
「ま、まだまだ！」
「それでこそだ」

何度繰り返しただろう。
途中から何度か意識が飛びかけ、数なんて数える余裕などない。
ただ、最後までたっていたのは私だった。
「ぐ、くそ。まだ、まだやれるわ・・・・・」
既に私の襟を離し、立ち上がることすらできなくなっている。

そのザマでも尚私を倒すことを諦めない。
「そうだ、お前はそのままでいい」
倒れる恋奈をつかみあげる。
「お前のおかげで私は目が覚めた。
お前はいつまでもそんな暑苦しい根性を持っていてくれ」
喧嘩は終わりだ。
見ればもうリョウやでかいのは立ち上がっている。
ただ、私と恋奈の決着の行方を見てどうするかを考えるのだろう。
「く、腰越。腰越ぇ・・・・・・」
涙を流しながら、私をにらみ続ける。
いい目だ。諦めることをしらないその青臭さ。
本当に、実に私の好きなものだ。
「いい喧嘩だったぜ。ありがとよ」
それだけを告げる。
その言葉を聞いた恋奈は苦虫を噛み潰したような顔をする。
だが、自分の気持ちに区切りをつけたのだろう。
「・・・・・・わかった、今回は私の負けよ」

ようやく認めた。
だが、その顔は決して悔いや怒りなどのネガティブなものはない。
全てを出し切って、完全に満足した奴の顔だ。
「でも勘違いしないでね。絶対に私はアンタを倒してみせる」
相変わらずなやつだ。
「そ、それと」
まだ何かあるのか。
よく喋る。
「そ、卒業おめでとう。先輩」
怒りではなく、照れによるもので顔を真っ赤にする恋奈。
ちゃんと礼儀も弁えているじゃないか。
「ああ」
多くを語る気もない。
ただ、恋奈の気持ちを受け取っておく。
「それじゃ、お前も乾同様海に落ちてもらうか」
「・・・・・・はぁ!?」
私がそう言うと恋奈は突然暴れだした。

そりゃそうだ、確かこいつは泳げなかった筈。
だがまあ大丈夫だろう、海には既に乾がいるしリョウ達も起きている。
助けに入る人間なんて沢山いる。
私は持ち上げていた恋奈を投げ飛ばすための姿勢にして構える。
「や、やっぱ前言撤回！
テメェなんかダブればよかったんだよ！」
「可愛い後輩だよ全く」
そのままフルスイングしてぶん投げた。

腰越マキと片瀬恋奈の最後の喧嘩は、私にとって最高の後輩からのプレゼントだった。

「あ～、流石に疲れた」
体はやたら重たいし、頭なんて恋奈とのパチキ合戦でズキズキフラフラする。
はっきり言って完全に疲労困憊だ。
実際江乃死魔八百の不良とやりあうよりも恋奈と梓を相手取った時の方が手こずった。
多分、あいつらなら次のシーズンが始まって新しいルーキーが入ってもやっていけるだろう。
さて。
気持ちを切り替えよう。
自分は今長谷家の前にいる。
ここで私には二つの選択肢を選ぶことができるのだが。
窓から入るか、扉から入るか。
・・・・・・まぁ、あんな喧嘩した後だしここは礼儀正しく扉からにするか。
門を越え、そのままインターホンを鳴らす。
だが、時間が過ぎても誰も出てこない。
そこでふと思った。

今何時だ？
そういえば喧嘩終わってからスグ来たのはいいが時間は一切確認していない。
喧嘩始めた時間を考えるにもしかして今って深夜なのかもしれない。
仕方がないと思い、空を見て月の角度を確認する。
「うげ、深夜二時くらいかよ」
そりゃもう寝てるわ。
出てくるわけもない。
仕方ない、窓から失礼するか。
そう思い、ダイの窓を見上げる。
いざ飛び移ろうと構えた時、タイミングよく扉が開かれる。
中からはダイが出てきた。
ダイは私の顔を見て一瞬顔に影を落とす。
多分、沢山怪我をしているからだろう。
けれど、すぐに表情を変え笑顔を向けてきた。
「お帰りなさい、マキさん」
お帰り、か。
その言葉に私は返す言葉を用意をしていた。

なのにそれを口にする勇気がない。
「外はまだ寒いし中に入ってくださいよ」
「あ、あぁ」
そして中に戻っていくダイ。
・・・・・もしかしてずっと起きて待っていたのだろうか。
その背中を見て私は無性にムズ痒いものがあった。
「た、ただいま」
私がダイの背中にそうつぶやくと、ダイは僅かに驚いたようにこちらを振り返った。
そして僅かに目が合う。
恐らく私は赤い顔をしているだろう。
だが、そんな私を見て朗らかに笑う。
「うん」
その嬉しそうな笑顔に私は何も言えなかった。

「はい、手当て終わり」

「ん、さんきゅ」
顔や体はダイの手によって包帯まみれにされた。
ミイラ男のようだ。
「ところでさ、何でお前まだ起きてんだよ。
流石に夜遅いし、もしかしたら私が帰ってこないと思ったりしなかったのか？」
時計を見れば僅かに私の勘はずれていたらしく、3時を回った所だった。
だというのにダイが寝ていた形跡はなく、ただコーヒーを飲んでリビングで待ち続けていたようだ。
だが、どうして赤の他人である私をこんなふうに待ち続けることができるのか。
・・・・・いや、いい加減素直になろう。
答えなどもうわかっているのだ。
ダイは私の事を家族だと思っている。
それは決して口だけの例え話などではなく、本心からの言葉なのだ。
「マキさんは俺にとって大切な家族だからね。
寝なかったわけじゃなく心配で寝られなかっただけ」
「・・・・・そうかよ」
ダイは、約束を覚えていなくても約束を守ってくれていた。

昔交わした『家族になる』という約束を果たそうとし続けていた。
それを私は思い出す前も後も気づかず、ただただ男女の関係としての家族を意識し続けていた。
それがいけなかった。
だから私は前に進めなかった。
「ダイ、あのさ。私もう江乃死魔とか他の奴との喧嘩するのはもうやめるわ。気に入らない奴がいてももう拳で解決しようとしないよ」
だけど、恋奈の心を理解した今は違う。
どんな事があっても諦めないあの姿勢。
私はそれを学んだ。いや、思い出したというべきか。
今までの私は既に辻堂の物になったダイへの好意を捨てきれず、けれど貫く勇気もなかった。
ただ宙ぶらりんな感情のまま、ダイにベタベタしたり、けれど踏み出せなかったり。
そしてダイが辻堂と仲良くしてると嫉妬に駆られた。
そんなのはもうヤメだ。
そんなのは私じゃない。
曖昧な気持ちで曖昧な未来像を描くなんて気持ち悪い。

「それはどうして？」
私には私だけの立場がある。
ならばその立場からダイに執着してやる。
辻堂やダイの気持ちなんて知ったことではない。
他人の顔を伺って生きるそんな小さい生き方を嫌ったから私はアウトローな生き方を選んだのだ。
なのに、それをいつからブレさせてしまった？
私は先に進む。
私が私であることをやめない。
「前の梓みたく私が恨み買ってお前が危険にさらされるかもしれねーしな。
何より、私はもうすぐ大学生だ。
これで暴力沙汰で進学取り消しになっちゃ洒落にならない」
「はは、確かに進学が関わっちゃしかたないですね」
何よりそして何よりも。
「それに、ダイが心配するしな」
そう言って私は正面からダイを抱きしめた。
「ま、マキさん？」

「黙ってろ。姉貴命令だ」
　ダイが私を家族としてみるならそれでいい。
　それが私たちの約束なのだ。
　ダイは何も約束を違えていない。
　ならばその立ち位置で私は私らしくダイを手に入れてみせる。
　それが勝てない勝負だとしても、それでもそれを貫いてやる。
「私がダイの家族ってんなら年齢的に私はお姉ちゃんだろうが。
　ほら、お姉ちゃんって言ってみ」
「う、それはちょっと恥ずかしいような」
　ダイの姉ちゃんの気持ちがわかる気がした。
　なるほど、弟ってのも可愛いものだ。
「まぁ追々慣れればいいさ。
　それよりさ、明日・・・・・じゃねぇな。
　今日の昼からお出かけしようぜ。バイクだすからさ」
「随分急ですね」
　手始めにまずはダイと少しづつ思い出を作っていこう。
「姉ちゃん命令だ。拒否するなら不条理な暴力に訴えてやる。

これも姉貴だからこそ許される」

「理不尽すぎる」

「でもそれが通る。なぜなら――――」

幸い時間は沢山ある。

例え喧嘩をやめて、進学したとしても家族とならいつまでも一緒にいられる。

ダイが傷つくようなことがあっても直ぐに気づいてやれる事ができる。

なぜなら私は

「――――家族だからな」

２５話：夢枕（前編）

江乃死魔と決着を付け、恋奈と最後の喧嘩をした翌日。
この日は私にとって久々にワクワクする日だった。
それこそ数日キュウリ生活をしていたある日、定期的にメシをくれる脚長おじさんことダイが現れた日のように。
何にせよ私とダイのデート日である。
喧嘩で疲れたあとだったにも係わらず、子供のように胸がドキドキして寝付けなかった程だ。
なのに、
なのになんで
「何でテメェらが付いてくるんだよ」
「あ？　そりゃカレシが遠出するんだから彼女としては付いていきたいだろ。
っていうかテメェと大を二人きりにできるかよ」
「マキちゃんとヒロだけじゃ心配だしね、お姉ちゃんも同伴させて頂きます」
一旦実家に帰り、前に着ていたライダースーツを着用し、

滅多に使わないヘルメットを二つ用意してダイの家に戻るとそこにはお邪魔虫が二匹スタンバイしていた。
「マキさんもヘルメットつけんるんですね、意外だ」
人をまるで交通法無視の常習犯のように言いやがる。
「昼間からノーヘルで走れるかよ。速攻マッポに見つかるだろ」
「うんうんマキちゃん、ちゃんとルールを守って偉いわね」
「ぷっ、小学生みたいな扱いされてやんの」
・・・・・・今おそらく私のこめかみには凄まじく血管が浮き出ているはず。
いい加減腹が立ってきた。
こいつらと会話しても腹を立てるばかりだ、無視してバイクに跨る。
因みにこのバイク、名をゴルゴム君という。
中々に速度も出て乗り心地も良い愛着ある一品だ。
「ほら。ダイ、乗れ」
「う、うん」
私に促されダイは恐る恐る後ろに乗る。
「ほい、ヘルメット。ちょいとダサいデザインだけど文句ねぇよな?」
「いや、文句はないけどさ・・・・・これって自転車とかに乗るときのヘルメットだよ

ね」
「頭守れりゃ用途なんざどうでもいいだろ」
適当に実家から見繕ったヘルメットだ、多分ダイの言う通り中学生とかが使ってそうな真っ白な頭頂部のみを守るデザインのもの。
正直あまりにダサすぎて私は死んでもつけたくないが、ダイがかぶると恐ろしくにあっていた。
そのイモ臭さに吹き出す。
「何かバカにされてる気がする」
「気のせい気のせい、そんじゃ出発進行！」
自分愛用のフルフェイスヘルメットをかぶり、アクセルを回す。
同時に燃費の悪そうな煙を吹き上げながらゴルゴム君は中々の立ち上がり速度を見せながら発進した。
「おい先生！　置いてかれるぞ！」
「逃がすかァ！　今日の朝から妙に姉面しおってからに！
ヒロのお姉ちゃんは二人もいらぬ！」
置いていった二人は私の発進に合わせて姉ちゃんの乗用車に乗り込み一気に急発進。
僅かな間で私に追いついた。

まぁ仕方ない。ここは住宅地だ、いくらなんでも猛スピードで走るほど私もアウトローじゃない。

「あのー、マキさん」

「ん、どした」

おずおずとダイが私にしがみついたまま話しかけてくる。

「ダイ、ちょっとくっつく力弱いぞ。もう少ししがみつけ」

これでは速度を上げたとき振り落としかねない。

「いや、その。どこにしがみつけばいいのでしょうか？」

「・・・・・・ふふぅん」

なるほど。

シャイボーイな長谷君はしがみつこうにもテレが入ってる訳か。

ここは一つからかってみるか。

「好きなとこに腕回せよ。

何なら・・・・・・胸でもいいんだぜ？」

「な、そ、それは流石に」

照れてる照れてる。

どうせ辻堂への浮気を考えてるんだろうが、今回は私の方が発言権がある。

「ほら、さっさと腕回せ。そろそろ速度あげるんだからさ」
催促する。
勿論速度を上げるのは嘘だ。
今のところ大通りに出るまでは規定速度を超える予定はない。
だがダイは私の言葉を間に受けて慌てている。
しかしそれも短い間であって、次第に遠慮がちに腰に手を回した。
まぁ、それが妥当な所か。
別に本当に胸に手を回しても構わなかったんだが。
「おいコラ！　大に色仕掛けしてんじゃねぇぞ腰越ェ！」
後ろからピッタリ追随する車から辻堂の怒声が私にぶつけられる。
が、私はヘルメットしているから聞こえませんと知らんぷり。
「クソクソクソ腹立つムカつく目につく憎い憎い憎い畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨」
なんだか知らないが姉ちゃんの呪怨怨嗟の呪文が聞こえる。
やべぇなんだこの寒気。
しかも私を視線だけで射殺さんとばかりに睨む姉ちゃんのプレッシャーを感じる。
怖気が走るとはこの事だ。

「・・・・・・ちょっとスピードあげるわ」
「・・・・・・うん、お願いします」
どうやらダイの方にも怨念をぶつけていたらしい。
ダイの表情を見たら私以上に血色の悪い顔をしていた。
何だこれ、追いつかれたら呪い殺されるゲームでも始まってんのか。
何にせよちょいと気分を変えようとエンジンをふかし、速度を更に上げる。
「逃がすかぁ！　先生頼むぜ！」
「任せなさい！　お姉ちゃん実はスリルドライブを全大会総なめしてる伝説を残してるお姉ちゃんなの！」
スリルドライブって確かクラッシュせずに超スピードで公道とかを走り抜けるゲームだった記憶がある。
「オラオラオラ！　そんな眠っちまいそうなトロいスピードで私を離せるかァーッ！」
凄まじい速度で更に追い上げてきた。
何だよ、なんでだよ。
今日はダイと二人きりで楽しいドライブの筈だっただろ。
どうしてこうなった。
「マキさん揺らしすぎィ！　吐きそうだからッ、酔っちゃうからッ！」

湘南中の曲がり角を片っ端から突撃し、撒こうとするも全然ちぎれない。
それどころか徐々に詰め寄られてくる。
ありえないだろう常識的に考えて。
バイクが市街地のレースで車に追いつかれつつあるとか。
「マキさん、もう諦めようよ。
姉ちゃん本気になってるから絶対逃げきれないと思う」
ダイは最初から諦めていたようだ。
「おもしれぇ・・・・・俄然やる気出てきた」
「うわぁ、何か危険な展開」
公道市街でのレースでは私の負けだ。
だが峠ならどうだ。
「ハリィーハリィーハリィー！　あんまりトロい運転してるとケツ掘るぞー！」
「姉ちゃん悪乗りしすぎ」

「うえぇ、めちゃくちゃ疲れた」
「俺は心臓が早鐘のようにうってて今にも胸が張り裂けそうだよ」
俺は胸に手を当ててゆっくりと深呼吸を繰り返す。
やばいよマジで。
過呼吸も起こしてたんじゃないか俺。
マキさんの峠攻めは凄まじかった。
まさかヘアピンカーブで車体をギリギリまで傾け、膝が地面にかするとは思わなかった。
二人乗りであんな攻め方をするか普通。
「あ～・・・・・・」
愛さんも姉ちゃんも途中流石に諦めたらしく、何度かカーブでドリフトし続けていたら姿が見えなくなった。
何か消える直前に変な違和感があったけれど、まぁ考えすぎだろう。
取り敢えず呼吸を正した後、現在地を確認するために用意していた地図を開く。
さて、ここはどこだろうか。
実の所凄まじい速度を出すマキさんにしがみつく事に必死になりすぎて道筋など見

てなかった。
その為地図を見てもどこの方向に進んだのかすら判らない。
既に周りを見ても山々山の大自然。
完全に３６０度山に囲まれている。
「ねぇねぇマキさん。ここどこだかわかります?」
「しらねーよ。適当に走ってたらここに来たし」
まさか、俺達はこのどこかも判らない峠で迷子になったのだろうか。
何だろう、一瞬薄ら寒い感じがした。
「なぁダイ」
「ん、どうしたんですか」
呼びかけに答えるも、マキさんは何も言わない。
ただ、マキさんは黙って指を差した。
その先には一つの旅館が存在していた。
「あんな旅館、さっきまであったか?」
マキさんは不思議そうに旅館を見つめる。
・・・・・不思議だ。なんだか知らないけどあの旅館から変な感じがする。
そこに見えるのにそこに存在しないような。

「まあいいや。疲れたし今日はあそこに泊まっていこうぜ。
今日は山の中でのんびり過ごすことに決定だ、いいよな」
「ちょ、マキさん」
呼び止めるもマキさんは聞く耳持たず旅館へ歩いて行った。
流石に置いていかれるのは嫌なので慌てて後を追う。
だが、その背中を追う途中、一度足を止める。
俺はマキさんの背中から目を離して、もう一度少し離れたところにポツンと建っている旅館をみた。
「何なんだろうな、この違和感」
そこにあるのにそこに存在しないような。
存在自体が朧げなような。
それでいて悪い雰囲気は感じない。
不思議な出で立ちな旅館だ。
ボロくもなく、けれど新しくもない。
ただ、存在の不思議さだけがそこにあった。

「ようこそいらっしゃいました」
　俺達が旅館の門をくぐり、古ぼけた扉を開くとまるで俺達が来ることを知っていたようにお婆さんが待っていた。
　扉をくぐる前にこの旅館の看板を見てみたが、名前が薄ぼんやりと書かれていた。
　あまりに摩耗が激しすぎてちゃんとあっているのか自信はないが、『夢枕』というのがこの旅館の名前らしい。
「すいません、予約はとってないんですけど宿泊ってできます？」
「はいはい、勿論大丈夫でございますよ」
　マキさんは特に違和感を覚えていないらしく、キョロキョロと内装を見渡すものの不安がる様子はない。
　俺はマキさんから少し目を離し、婆さんに宿泊の手続きを取る。
「ほっほ、それではこの用紙に名前だけを記入して頂けますか？」
「え、名前だけですか？」
　住所や電話番号を記入しなくていいのか？
　というよりも名前だけとか、それでは防犯対策が成り立つのか？

「ええ、名前だけで構いません」

・・・・・・何か引っかかるものはあるものの、女将さんがいうのならそれでいいんだろう。

俺はスラスラと用紙に『長谷大』と『腰越マキ』の名を書き込む。

そしてそれをお婆さんに提出するが、その用紙を受け取って名を確認した途端、お婆さんの目がマキさんに向けられた。

「そこの方、ちょっとよろしいですか?」

「あ?　私か?」

「ええ、左様です。少々名前の事でお聞きしたいことが」

はて、もしかして俺は腰越という文字を間違えていたのだろうか。

それとも名前表記でカタカナはダメだったのだろうか。

何にせよマキさん本人が訂正してくれるのならそっちのほうが確実だ。

俺は後のことはマキさんに任せ、マキさんと交代するように内装を見る。

別になんてことはない、普通の旅館だ。

ちょっと古い雰囲気だけど、これはむしろ年を重ねて貫禄がある出で立ちの内装だ。

ただ、やっぱり変だ。

だが何が変なのか言葉にできない。

漆塗りの柱。少し色あせたカーペット。
田舎にある木造建築特有の自然の香り。
なんて事はない、普通の隠れ家旅館だ。
俺がおかしいのだろうか。
勘の鋭いマキさんが違和感を覚えていないのなら多分俺の考えすぎなだけかもしれない。
・・・・・胸の奥に僅かな引っかかりはあるものの俺は深く考えない事にした。
俺がそうこう考えている間にマキさんは宿泊の手続きを終えたらしい。
笑顔で合流した。
「ほほほ、それではこの旅館について説明させて頂きます」
マキさんと話を終えたらしいお婆さんは柔かに説明する。
その横にいるマキさんは何やら訝しげな顔をしていた。
「現在の時刻は正午三時。申し訳ありませんが昼食の時間は過ぎているため次の食事は七時となります」
それならば問題はない。
一応俺が食事を用意している。
元々旅館に泊まる予定すらなかったのだ、晩御飯は事前に作っていたのだ。

とてもマキさんが満足する量とは思えないけれど、まあ腹ごなしはできる。
「浴場のことですが、これは六時から深夜三時までの開放となっております。露天、屋内。どちらからもこの山を見渡せる絶景でございますよ」
へぇ。
確かにこの場所は山頂付近の筈。
ならばここから見渡す景色は壮観だろう。
「混浴とかあるのか？」
「マ、マキさんちょっと」
「照れんなって、一応訊いてるだけで他意はないっつーの」
「う、そうでしたか」
恥ずかしい思いをした。
まるで俺がスケベ男のようだ。
否定はできないけれど。
「ほっほ、申し訳ありませんが混浴はありません。ですが、個室風呂ならあります。これは十時から一二時の間ならば入れますよ。好きな方とどうぞ好きなようにご入浴ください」
お婆さんの含みある笑いに俺とマキさんは顔を赤くする。

いや、別に俺とマキさんはそういう関係ではないのだけれど。
「食事場所や浴場の位置はお部屋にある見取り図でご確認できますので。それではお部屋まで案内させて頂きます」
そう言ってお婆ちゃんは鍵を片手に歩き始める。
俺達はその背中を追いながらも興味深く旅館内を眺めた。

元々少ない荷物を俺達は部屋に置き、夕食までの時間つぶしとして外に出た。
特に外に用事はないのだが、ここがどういう所なのかという確認だ。
旅館から離れる時、俺は何度か振り返りその姿を確認する。
「どうしたんだダイ、さっきからやたら振り返って」
「いや、特に理由はないんだ」
嘘だ。
あの旅館、目を離すとなぜか消えてなくなりそうな気がしてならない。
まるで本来そこにない建物のような、そんな感覚がある。

しかし何度振り返ろうとそこに旅館はある。
俺が気にしすぎるだけなのだろうか？
「お、あそこに小川があるぜ。行ってみよう」
「マキさん、あんまりはしゃぐとつまづいたりして転倒しちゃいますよ」
「私はガキかよ・・・・・・」
他の服がないためライダースーツのままのマキさんと楽しく話しながら歩き、あっという間に小川の続く比較的穏やかな坂の獣道にたどり着く。
『大和、あんまり動いて体力無駄に使うなよ。
これじゃあ何のための休暇かわかんねーだろうが』
どこからか、女性の声がした。
どこだろうと見渡す。
すると俺達が向かう先である小川にいたらしく、三十代と二十代の境目くらいの男性と女性がいた。
どうやらあの二人もあの旅館の宿泊客なのだろう。
俺らと同じく時間を潰すついでに自然浴を堪能している様子。
『ん、川魚か。そういやまだ昼食済ませてなかったよな』
『そうだね。俺はそれほど腹減ってるわけでもないけど、あずみさんはどう？』

『あたいは、そうだな。腹減ってないと言えば嘘になるな』
『そっか、それじゃあ一匹だけ殺生させてもらうかな』
『そんな魚に悪いと思うような前置き言うなよタコス』
男性はしゃべっている間に一瞬で川で泳ぐ魚を掬い取った。
凄い、遠目だったから何となく見えたけど本当に手慣れた感じだった。
もしかして普段からサバイバル生活でもしてるのだろうか。
「あの二人・・・・・・」
マキさんが何やらあの二人を興味深そうに見ていた。
「あの人達と知り合いなの?」
「いや、そうじゃないけど・・・・・・あいつ等多分かなりできるぞ。
今の魚取った動きとか身のこなしが明らかに洗練されてる」
マキさんが言うならそうなのだろう。
っていうか素人目でも今の動きを見たら只者じゃないというのはわかる。
「しかしあの人達もあそこの旅館に泊まってる人なんですかね?」
「夕飯がどうとか言ってたしそうなんじゃねぇの」
そんな事を言いながら俺達は二人の近くに進む。
別に二人に用事があるわけでなく、単純に元々俺たちもこの小川に用があるだけなの

だ。
急な斜面を降りれば徐々に清流に近づく。
どうやらマキさんはこういう獣道になれているようで、軽快な動きで少し急でしかも荒れている坂道を軽やかに滑り降りる。
俺も僅かに早足で斜面を下ろうとする。
だがそれがいけなかった。
足元の苔に気づかず俺は盛大に滑る。
「あ、ヤバ」
こりゃ拙い。
「馬鹿！　何やってんだダイ！」
思い切り後ろ向きに滑った。
受身も取れそうにない。
マキさんは気づいてくれて慌ててこちらにダッシュしてくれているが多分間に合わない。
これは後頭部をしこたま強く打ち付けるぞ。
俺は他人事のようにそう思っていると、不意に後ろから誰かが支えてくれた。
「お前、大丈夫か？」

凛々しい声。
その鈴が鳴るような澄み切った声の主は誰かと振り返る。
「ありがとうございます、危ないところでした」
「ああ、山は街中と比べれば少々足場が悪い。
次からは急ぐにしても足元を文字通り掬われないようにするんだぞ」
俺はその声の主を見て驚いた。
「え、マキさん？」
いや、そんなはずはない。
マキさんなら俺の少し下の坂道で驚き顔で踏みとどまっているのだ。
「マキ？　誰のことだ、私は鉄乙女というものだが」
人違いなのはわかる。
だが、何というかやはり一目見て俺が間違えたように彼女の造形がマキさんそっくりだった。
マキさんの髪型がちょっとキレイに整えられて、目つきを少し柔らかくすれば本当に瓜二つになるだろう。
「乙女さん、ちょっと待ってよ。速いって」
鉄さんの後を追うようにして一人の男性が続いてきた。

見た所俺と同年代のようだ。
彼は旅館から走ってきたのか息を切らせている。
「だらしないなレオ。このくらいで汗を流すようでは最後まで付いてこれないぞ」
「いや、今日はもう特訓じゃなくて普通に宿泊ついでに観光しようって約束したじゃない」
レオさんや鉄さんはどうやら俺達と同年代らしい。
見た感じ若い。
向こうの川の方にいる二人は俺たちよりも年上みたいだけど、女性の方は凄く若く見える。
どうやら旅館の宿泊客が3セットここに揃ってしまったようだ。
「む、そうだな。確かに今日はそういう約束だった」
鉄さんは僅かに目を伏せる。
・・・・・もしかしてこの二人は付き合っているのだろうか。
いや、こんな山奥の旅館に二人で泊まるくらいだ、そういう関係なのだろう。
「じゃあレオ、あそこの川で魚を採ろう。
鍛錬と遊び、どちらも味わえるぞ」
「鍛錬から離れようよ乙女さん・・・・・」

どうやらこの女性に苦労しているらしい、レオさんは疲れたような顔をしていた。
ただ、それでも彼の顔は全然彼女を嫌っていない。
むしろ大好きなのだろう。
そういう雰囲気を二人の間から感じる。
「おいアンタ」
「うん？　なんだ」
マキさんが不意に鉄さんに話しかける。
「いつまでアタシの弟を抱っこしてんだ。さっさと離しやがれ」
「・・・・・・なんだと？」
明らかに不良の良くないところを出したマキさん。
拙い、これじゃあ折角親切に俺を助けてくれた鉄さんに悪い。
慌てて仲裁に入ろうとする。
だが鉄さんは俺をゆっくり離すとそのままマキさんに詰め寄る。
完全にガンを付け合っている状態だ。
「あ～、すいませんレオさん。マキさんが失礼なことを言ったようで」
「いや、似たような怖い後輩や吠えまくる甲殻類がいるから慣れてるよ」
俺は取り敢えずレオさんに詫びた。

穏やかというかニュートラルな人のようですんなりと許してくれた。
しかしマキさんと鉄さんはまだ睨み合い続けている。
いつ殴り合いない発展してもおかしくない、そう思い冷や冷やするが隣のレオさんは落ち着いたものだった。
「お前、名前はなんという?」
「腰越マキだ。そういうテメェは鉄乙女だっけか、さっきの話聞いた感じだと」
「ああ、それで合っている」
マキさんは完全に喧嘩モードだ。
やばいぞこれ。
「腰越、そこを動くなよ」
「あぁ?」
そう言って黒鉄さんは両手でマキさんのライダースーツのファスナーを掴む。
「激しい動きをしたからか蒸れるのか知らんが胸元をさらけ出しすぎだ。
それでは枝や雑草などで擦りむいて細かい傷ができるぞ」
「な、何を・・・・・・」
鉄さんはマキさんのファスナーをゆっくり上げると次はしゃがみこみ、マキさんの足についた砂や葉っぱをハンカチで払う。

そして軽く目でマキさんの服装をもう一度確認すると満足げにうなづく。
「これでよし。元気がいいのは大変よろしいが、それが行き過ぎると余計な敵を作りかねない。
そういうのは自分だけならいいが、近くにいる彼にも迷惑がかかる事を忘れるな」
鉄さんはまるで親のように優しい目でマキさんを見る。
そんな目で見られたマキさんはというと
「お、おう」
素直にうなづく。
「うむ、素直でよろしい」
鉄さんも満足げに頷く。
そして振り返りレオさんを見て口を開く。
「それでは私達も行くか。ほらレオ、手を繋いでやるからついてこい」
「乙女さん、人の前で子供扱いしないでよ恥ずかしい」
「何を言う。お前は私の子供ではなく、私の彼氏だろう」
「そ、そうだけど」
何というか、とても仲のいいおふたりだった。
「それでは私達は失礼する。そこのお前、くどいようだが次から山道を歩くときは足元

を注意するんだぞ」
「はい、助けてくれてありがとうございました。あと俺の名前は長谷大といいます」
「ほう、中々感じのいい奴だ。レオも見習え、あそこまで礼儀正しい奴はそういないぞ」
「やめてよ乙女さん」
レオさんと鉄さんは手をつないで急斜面を結構な速度で下っていった。
なにげにあの鉄さんに手を引かれながらもついていけてるあたりレオさん自身も結構鍛えられてるみたいだ。
置いていかれた俺達は二人の背中を見送る。
マキさんは特に鉄さんを注視していた。
何か気になることでもあるのだろうか。
「鉄乙女・・・・・確か四天王の一人も同じ名前と性別だったような」
四天王？
一体何の話だろうか。
「いや、まさかな。
確か鉄って奴はもう成人してて二十代中盤くらいだろうし、あの女はどうみても二十未満だ。
私の勘違いか」

何やら自分の疑問に自己回答したらしい。
マキさんは特に引きずるものもなく、鉄さんから視線を外す。
「おいダイ、私達も早く下りるぞ。
あそこでそのリュックの中の弁当食べようぜ」
「あら、中身気づいてたんですね」
「当たり前だ、私の鼻なめんな」
そう言ってマキさんも前の二人のように俺の手を握る。
「また転びそうで不安だし私が手を繋いでてやるよ。
それじゃ行くぞ」
「うん」

「君達はどういう経緯であの旅館見つけたの？」
清流にて三組の男女はそれぞれ男組と女組で別れた。
別に俺たちもレオさん達も互いに用があったわけではない。
だが、なぜだろうか。

近くにいるから挨拶やら軽い会話を繰り返しているとすぐに男連中は気が合い、俺を含めて三人共が固まった。
その後、話だけなのも何なので交流ついでにバーベキューをする事になった。
その準備の最中、俺達はここにきた経緯を話し合う。
「俺達は休日のトレーニングで山を登ってたら見つけたんです。
で、逆に帰り道がわからなくなって・・・・・仕方ないから今日はあの旅館に泊まることに」
大体俺と同じ理由だった。
「俺も同じ感じです。
ドライブしてたら来た道も進む道もわからなくなって。
そしたらポツンとあの旅館があったんですよ」
「・・・・・そうか、全員同じってわけだね」
という事は直江さんも似たような理由みたいだ。
「俺やあずみさんも休暇だからドライブしてたらここに来たんだ。
別に変な道を通ったわけでもなかったんだけどね」
現状を相談し合っても全員がワケのわからぬままここへ来てしまったという。
つまり未だ帰る道筋は見つからないというわけだ。

俺一人だったらこの事実に愕然として、多少慌てるだろう。
けれど俺にはマキさんがいる。
きっと彼女がいれば大丈夫だ、マキさんはそういう安心感をくれる。
「この花は綺麗だな。腰越、お前も摘んでみたらどうだ」
「あ～、その花なんだっけな。
と、トリ・・・・・・トリアタマ？」
「アホかよ、トリカブトだろ。っていうかなんでこんな所に咲いてんだよこの毒草」
女性陣はというと三人仲良く自然探索していた。
「何にせよ食えない花なんて興味ないわ、私は食えそうなモン探してんだ。
お、ヨモギ見っけ」
「こいつはやたら食物探しが上手いなオイ」
直江さんの話を聞いたところ、あずみさんはもう四〇代手前らしい。
年齢をうっかりバラした瞬間あずみさんにどつかれてた。
ともあれ、その事実に二人以外は大いに驚いた。
どう見ても二十代にしか見えないのだが。
「あずみさん、このキノコは食べられるのですか？」
「・・・・・・こんなカラフルで極彩色のキノコを食べられると思うテメェの頭は既に毒

に侵されてるんじゃねぇのか?」
「むぅ、昔山篭りした時はこれと同じ色のキノコを食べた事があるのだが」
乙女さんはというと、どうやら大学一年生らしい。
彼女はただひたすらに純粋なようで、人の言うことは大体信用する。
礼儀も弁えており、年上であるあずみさんや直江さんには敬語だ。
マキさんはというと。
「お〜い、いい匂いしたから辿ってみたらマツタケ見つけたぞ〜」
「・・・・・・やたら鼻のいいやっちゃ」
野生児のように既に山に適応していた。
あの人ならもうここから帰れなくても生き続けられるんじゃないだろうか。
「あずみさん、足でも怪我してるんですか?」
山に慣れているのだろうか、勝手に動くマキさんや鉄さんを常に視界から離さずかと言ってサボるわけでもなく要領よく食べられる木の実や野草などをちゃっかり手に入れている。
だが、決して大きく動こうとはしない。
俺の質問に直江さんは少し照れくさそうに笑う。
「いや、あずみさんのお腹には赤ちゃんがいるんだ。

だから激しい運動は止められててさ。
まだ目に見えて大きくはなってないけど」
つまりその赤ちゃんは直江さんの子でもあるわけで。
「元気な子供が生まれるといいですね」
「ああ、ありがとう」
レオさんの言葉に直江さんは嬉しそうに礼を言う。
俺も心からそう思う。
「おいダイ、これ調理しといてくれよ」
「はいはい・・・・・って、何か多くない？」
マキさんが両手いっぱいに野菜や木の実、キノコなど様々な山の幸を持ってきた。
毒があるものもあるのではないかと一瞬思ったが、それはいらぬ心配だ。
鉄さんやあずみさんは山に生る植物などの毒の有無の知識があるらしい。
さらにマキさんもどうやら臭いやら様々な野性的感覚でわかるらしい。
そのため男性陣が調理班となり、女性陣が食材調達係となった。
因みに調理方法だが、元々直江さん夫妻はキャンプ予定だったらしく車にバーベキューなどで使う道具が一式あった。
これをお借りして料理する事になったわけだ。

「川の水も凄く綺麗だし、本当にキャンプするにはいい環境ですね」
「そうだね。でも俺は乙女さんがさっきから心配でならないよ」
レオさんがそわそわしながら鉄さんを見る。
「野菜ばかりでは物足りないな。
よし、ここは私が肉を調達してこよう」
「一応聞くが、どうやって調達する気だお前」
あずみさんが訝しげに鉄さんに尋ねる。
「ん？　勿論熊や猪からに決まっているでしょう」
「・・・・・・兎ならまだしも熊と来たか」
参ったような顔をするあずみさん。
なるほど、レオさんの気持ちがわかった気がする。
中々に純粋で豪快な人のようだ。
「それでは行ってきます」
「待てコラ――――ちっ、人の静止も聞かないで行っちまいやがった」
「お、確かに肉が足りねぇな。私も付き合うぜ」
「おいテメェもか！」
俺とレオさんは癖の強いマキさんと鉄さんを何だかんだ文句いいながらも面倒見て

くれているあずみさんに感謝しながら料理の下準備を続けた。
直江さんはというと
「あずみさん、少し疲れただろうしあそこで休んでてよ。
食材集めは俺が交代するからさ」
やはり子を身篭っているあずみさんが心配で仕方ないらしく、しきりに話しかけていた。
だがその度に必要ないやらあっち行ってろやら言われてこちらに戻ってくる。
今回も同じ展開なのだろうか？
俺達は直江さんを眺める。
「大和、あんまりそうやってこの子を甘やかすと我侭に育っちまうぞ」
皮肉を言うあずみさん。
だが大和さんはその言葉に朗らかに返答する。
「確かにお腹の子も心配だけど、同じくらいあずみさんも心配なんだ。
もしかして俺がお腹の子ばかり気にして言ってるのだと思ってたの？」
決して責める語気ではなく、ただたしなめるように言う。
そんな事を言われたあずみさんはというと。
「思ってるわけねーだろ。

大和があたいを大切に思ってくれてるのは十年以上も前から知ってるよ」
何だかんだで凄く仲のいいお二人だった。
どうやらあずみさんが直江さんに冷たかったのも単純に照れ隠しらしい。
「少し二人だけにしてあげましょうか」
「それがよさそうだ。じゃあ俺たちはもう少し離れた所で作業しよう」
というわけで俺とレオさんは二人から距離を置くことにする。
取り敢えずマキさんが置いていった山の幸を二人がかりで担いで小川へ近づく。
「結構あるけどこれだけでお腹一杯になるんじゃ」
「いや、乙女さんならこれ全部一人で食べちゃうかも・・・・・・」
ああ、なるほど。
つまりマキさんそっくりの鉄さんは胃袋まで似ていると。
だったら確かにこれだけじゃ足りないかもしれない。
とはいえ俺達が山に繰り出しても毒物の知識がないため役に立たない。
それにマキさん達に任せておけばきっと大丈夫だろう。
俺達はそう結論づけて草や野菜の泥落としを始めた。

「いたーきますー」
「こら腰越。ちゃんと手を合わせないか」
「うっせぇな。そんな堅苦しい真似毎回してられっかよ」
時刻は五時。
実の所夕食まであと二時間しかないのだが、俺達は完全現地調達でバーベキューをする事になった。
「あ～・・・・・あたいはいいわ。あんま食欲ねーし」
「じゃあその分私が食ってやるよ。ラッキー」
「おい腰越、そういう言い方はあずみさんに失礼だろうが」
やんちゃな妹を窘めるように言う鉄さん。
見た目も相まって本当の姉妹のようだ。
マキさんは小言をいう鉄さんを差し置いてガツガツと串にさした松茸やら野菜を平らげる。
それに追随するように鉄さんも食べる。
余りの二人の食いっぷりに男三人は呆気にとられた。
「結構な食いっぷりだね、君達二人の連れ」

「お恥ずかしい限りで」
「全くです、本当に。げ、マキさんちょっと鉄さんの分までとっちゃいけません！」
目を離したらやんちゃなことばかりするマキさん。
そんなマキさんに鉄さんは決して怒ることはない。
ただ、相応にお説教をするだけだ。
「お前は本当に落ち着きがないな。
少しはお前の弟を見習ったらどうだ」
「うっせーな。メシぐらい好きに食わせろよ」
「む、反抗的な態度・・・・・・これは少し教育的指導が必要か」
前言撤回。
怒り出した。
「へぇ、やってみろよ。
さっき熊をぶっ倒した時も思ったが、お前かなりできるし楽しめそうだ」
マキさんも相変わらずと言った具合で鉄さんを挑発。
鉄さんは激高こそしないものの、静かな威圧を放ち出す。
やばいやばい。
俺とレオさんは慌てて二人の間に入ろうとする。

「・・・・・・いや、やっぱいいや」
　不意にマキさんが殺意をひっこめた。
「そうだった、もう喧嘩はしないって約束したの忘れてたわ」
　頭をかきながらそう言うマキさん。
　おお、覚えていてくれたのか。
　感動する。
「悪かったな、鉄。もうお前の分までとらねぇよ」
　そう言ってマキさんは再び食事に戻る。
　で、完全に取り残された鉄さんはというと。
「・・・・・・反省したのなら良いだろう」
　彼女も話がわかる人のようで、相手に敵意がないとわかるとすぐに引いてくれた。
「おいレオ、こっちにこい。
　お前の分もとってやる」
「え、あ、うん」
　そして表情を優しげなものに変えてレオさんを呼び寄せた。
「全く、お前は私や伊達がいない時はいつもジャンクフードやインスタントで済ませているのを知っているぞ。

今日は普段足りていない野菜を摂取する方向でいくからな」
「うへぇ、こんなに野菜ばっかり食べられないって」
レオさんの分の取り皿には山盛りの野菜が。
これひと皿で満腹になりそうなレベルだ。
「駄目だ、全部食べろ。
食べられないというのなら私の手で食べさせてやるから。
ほら、口を開け」
そう言って鉄さんは自分のお箸でレオさんの皿の野菜をつまみ、レオさんの口元に持っていく。
「ほら、あーん」
「恥ずかしいって、乙女さん」
「いいから素直に口を開け」
有無を言わさない。
頑固な鉄さんだ、多分レオさんが食べない限り手を引っ込めてくれないだろう。
レオさんもそう思ったらしく、次第に諦めて最後には顔を真っ赤にして口を開いた。
その口に鉄さんは箸を入れ、食べさせる。
「全く、お前は私がいないと駄目だな」

そう言う鉄さんは凄く幸せそうだった。
「若いっていいなぁオイ」
「俺やあずみさんもまだまだ若いよ。
何ならこの子が生まれたあとスグに二人目なんてどうだろう」
「人前で恥ずかしい事いってんじゃねーよタコス。
・・・・・・まぁ、大和が欲しいなら何人だって孕んでやるけどよ」
何だかんだで目の前の四人は凄く仲が良かった。
微笑ましく見ていると横に気配が。
誰か？　当然マキさんだ。
どうやら先ほどいた場所から俺の隣に移ってきたらしい。
「ダイ、あーん」
マキさんが俺に向かって口を開く。
どうやら鉄さん達のをみて真似がしたくなったらしい。
ただあっちと違って男の俺が食べさせてあげる側だけど。
「はい、どうぞ」
「ん、さんきゅ」
要求通りにマキさんが好きそうな謎肉（多分、信じたくないが熊肉）を口に運んであ

げた。
「ん、やっぱちょっと固くて臭いわ。
そりゃ食用に作られてる牛肉と比べれるわけもねーか」
どうやらあまり美味しくなかったらしい。
「でもまぁいいや。ほら、もっと食わせてくれ」
そう言って再び口を開くマキさん。
俺は続いて松茸を口に運んだ。
そんなやり取りをほか四人は微笑ましいものを見る目でこちらに視線を向けていた。

２６話：夢枕（後編）

「飯タイムが終わると次の飯タイム。今日は最高だぜ！」
「お前は本当に食ってばっかだなオイ」
バーベキューが終わると同時に俺達はすぐに旅館へ戻った。
到着した時刻は七時を少し回ったあたり。
女将さんは俺達が帰ってくるのを待っていたらしく、夕餉の事を訊くとニコニコと案内された。
「うん、これも中々に美味しいな。
ほらレオ、この天麩羅も食べろ」
「じゃあ俺のお刺身と交換って事で」
「む、別に交換を催促したわけじゃないんだぞ？」
「わかってるって。でも乙女さんから貰いっぱなしってのも悪いし。
それに乙女さん、このお刺身凄く気に入ってるんでしょ？」
そう言ってレオさんは自分の分のお刺身を半分以上を乙女さんの更に移し、代わりに乙女さんの天ぷらを一つだけ貰う。

「・・・・・・全く、可愛いことをする奴だ。生意気だぞ」
そう言いながら乙女さんは嬉しそうにレオさんに微笑んでいる。
レオさんは少し照れているのか、目を合わさず貰った天ぷらをもぐもぐと食べていた。
「こういう賑やかな食卓ってのもやっぱり良いもんだね」
「直江さんは基本的にあずみさんと二人で食べてるんですか？」
俺の問いに直江さんは少し懐かしそうな顔をする。
「いや、仕事も忙しくてあずみさんとも一緒に食べれない事は多くてね」
それと、と直江さんは言葉を継ぎ足す。
「昔学生だった頃に寮の仲間達とよく一緒に食べてたのを思い出すよ。
本当に、凄く懐かしく感じる」
思い出すように呟く。
その顔は凄く昔を懐かしんでいて、少し寂しそうなものだった。
「別に今も凄く幸せだけど。大人になってから昔もやっぱり幸せな環境にいたんだってことを最近気づいてね。
長谷君はまだ若いけど、君も多分俺くらいの年になったらそう思う時がくるんじゃないかな」

後十年もすれば俺も直江さんのように過去を懐かしむ日が来るのだろうか。
その時の俺は一体どんなことを、どんな風景を懐かしむのだろうか。
全く想像がつかない。
でも、彼の言うとおりに俺も今の生活には幸せを感じている。
ならばきっと同じく俺も直江さんのようなセンチメンタルな気持ちになる日は来るだろう。
ふと、今まで存在を忘れていたスマートフォンが気になった。
もしかしたら姉ちゃんや愛さんから連絡が来ているかもしれない。
ポケットからそれを取り出す。
「げ、やっぱこんな山奥じゃ圏外か」
案の定だった。
これではＧＰＳ機能も使えなさそうだ。
「その端末、かなり古いね」
「え、そうですか？　これ発売されてまだかなり新しいやつなんですけど」
「・・・・・・へぇ」
直江さんは何か思うことがあるのか、意味深な様子で顎に指を添える。
「ちょっと対馬君、君の携帯端末も見せてもらっていいかな？」

「あ、はい。どうぞ」
そう言ってレオさんはポケットから携帯電話を取り出す。
俺はそれを見て驚いた。
見たことが無いとかあるとかそういう問題ではない。
本当に古いタイプの携帯電話なのだ。
おそらく今はどこも取り扱ってないし、型式も聞いたことのないレベルの古さ。
それを見て直江さんは何か合点がついたらしい。
「はは、対馬君、長谷君。どうやら俺達は凄い事になってるみたいだ」
心底面白そうに笑う。
だが俺達は何がおかしいのか判らない。
「いや、これは説明しないほうが精神衛生上いいかもね。
本当にやばくなった時に説明するから気にしないで」
そう言って直江さんは軽くビールを煽る。
精神衛生上良いとはどういうことなのか。
俺は全くわからない。
「因みに直江さんのはどんなのですか?」
「俺のは・・・・・まぁいいか。これだよ」

そう言って直江さんが出したのはレオさんとは逆のベクトルで驚かされる物だった。
「それ、本当に携帯電話なんですか？」
レオさんが心底驚いたように言う。
実際俺も驚いた。
見たことがないデザインだ。
多分、スマートフォンでも携帯電話でもない。
また別の何かである端末。
名前すら知らないし、使い方も全然わからない。
「これは最先端の情報端末でね。
・・・・・多分君達にとってオーパーツ的なものだろうね」
それだけ言って直江さんはそれをしまった。
あれは一体どこで発売されているものなのか。
不思議な物だった。
「ダイ、さっきからどうしたんだよ。
ここに来てからお前ずっとおかしいぞ？」
「え、あ、いや。なんでもないよ、あはは」
ごまかすように笑う。

だが勘のいいマキさんは恐らく俺がずっと落ち着いていないことに気づいている。
この旅館に来てから俺はまだ一度だってリラックスしていない。
帰る道は愚か、東西南北どこ見ても山に囲まれているこの場所。
ここからどうやって帰るか、そればかり考えている。
「・・・・・・何を考えてるのかは想像つくけど、あんま深く考えんなよ」
俺の頭にポンと手をおくマキさん。
「悩む事があるなら私に相談しろ。
お前がそうやって悩んでいると私も落ち着かないからさ」
「うん、有難うマキさん」
「ん、わかったならいいよ」
全く、本当に俺を元気づけてくれる人だ。
彼女とならどんな場所でだって生きていく事すら簡単なことのように思ってしまう。
それにマキさんがいるのなら多分山の中でも寿命まで生きていけそうだ。
だったら考え込んで心の余裕を無くすより、のんびりとマイペースに考える方が良い。
俺はそう決めた。
「おい大和、そっちの川神水とってくれ」

「はいはい。あんまり飲んで寝たりしちゃダメだよ?」
「何でだよ、これノンアルコールだし別に飲みすぎても腹の子には・・・・・・」
言っている途中であずみさんはハっとした顔をする。
その後、僅かに顔を赤らめさせた。
「わ、わかった。じゃあ飲むのはこれ一杯にしとくわ」
「うん。それじゃあ後で一緒に個室風呂行こうね」
・・・・・・二人がこの後何するのかわかった俺は心が濁っているだろうか。
いや、というかお腹に子供がいるのにそういう事していいのだろうか。
まぁ夫婦仲良い事はいい事だ。
「乙女さんはお酒飲まないの?」
「飲まない。このあと浴場にも行くしな。
酒に酔った状態での入浴は危険なんだぞ」
「相変わらず健康的な人なんだから」
レオさんは苦笑いする。
実に鉄さんらしい、俺まで釣られて笑った。
「それに、今日は日付的にあの日だろう?」
「え、でも今日はこんなワケの判らない状況だし・・・・・・」

「む、レオは今日するのは嫌なのか？」
「ははは、むしろ普段とは違うギャップを目一杯楽しもうと思ってたところさ」
・・・・・・・こっちもか。
お堅い感じな鉄さんだが、あっちの方は結構積極的らしい。
人は見かけや第一印象によらないという事だろう。
「・・・・・・・」
マキさんはそんな二組のカップルをみて顔を赤くしている。
「マキさん？」
「え？　な、なんだよ」
露骨に挙動不審な態度。
多分このあとの彼らを想像してたらしい。
「これ食ったら私フロ入ってくるわ。
ちょっと頭冷やしてくる」
「うん。俺もそうしようと思ったところなんだ」

「は？　お前ら付き合ってねーの？」
「そう言えば最初に会った時も長谷の事を弟とか言っていたな」
真っ先にメシを食い、自室にあった浴衣とタオルをもって浴場に私は向かった。
そして体を洗い終わった辺りで他二人もついてきやがった。
そのまま私は無視して露天でくつろいでいるとこの二人も私についてきた。
大人しく屋内の方を使えばいいのに。
「お前ら姉弟なのかよ。その割にゃ全然似てない気がするけどよ」
「別に、血が繋がってないってパターンもあるだろ」
「ああ、私とレオもそんな関係だな。
もっとも、戸籍も全く違う親戚関係なだけではあるが。
だから結婚も可能だ」
「訊いてねえよ」
こいつは悪気なく私を怒らせるから扱いづらい。
っていうか私にノロケんなや。
というか何で私の素性を調べてくるんだよ。
「私の事なんてどうでもいいだろ。

せっかくの絶景なんだ、黙って風景眺めてろよ」
私はこいつ等を無視して入浴を楽しむことにした。
見渡せばこの位置からは周囲の山を見下ろすことができる。
どうやらこの旅館は途轍もなく高い位置にあるのだ。
その為風景を見る場合、見上げるというよりは見下ろす事になる。
「いい景色だな。乱れ咲く夜桜、実に風流だ」
鉄はこの風景を眺め、感慨深そうな顔をする。
実際私も多少驚きつつも感動している。
この露天の庭、さらにはここから見下ろせる山には凄まじい数の桜が咲いていた。
旅館からもライトを照らしているのか、近くの山ならばその光に照らされ、桜が薄ぼんやりと見える。
子供のように内心はしゃぎながら見ていると、突然の突風。
「へぇ、中々な桜吹雪だ。隣の大和達も驚いてんだろうな」
この目で見える全ての桜から花吹雪が舞う。
まるで桜色の雪が山を覆うように。
その鮮やかで風流な光景は素直に美しく思う。
「ダイも見てんのかな・・・・・・」

無意識につぶやいていた。
「お、何だよ。やっぱアイツ気になってんのか？」
耳ざとい奴がまた絡んできた。
「うっせーな、その通りだよ、気になってるどころか惚れ抜いてるよダイのこと。これで満足か」
詮索されるのならむしろカミングアウトしたほうが楽そうだ。
私はあっさりと答える。
「ふむ。なら何故お前たちは付き合っていないんだ？見た所長谷のほうもまんざらではなさそうに見えるが」
・・・・・本当にこいつは私と相性が悪い奴だ。
その邪気のなさが恨めしく思ってくる。
「ダイは既に彼女がいるんだよ。だから私とは付き合えない。もういいだろこの話題」
「だから姉のポジションに腰を落としてると。いじらしい事すんじゃねーの、お前って略奪愛上等な奴だと思ってたんだけど」
コイツはコイツで妙に私を構ってくる。
嫌味は言うけど、何か相談すればそれに対して誠実な答えを言ってくれそうだが。

まぁ別に私から相談したいことなんてない。
あずみの奴は一人でケラケラと笑う。
「その気持ちはわからないこともないわ。
あたいも十年以上片思いしてた頃あったしな」
「直江さん以外の男性にですか？」
「まぁな。っていうか今は私も直江だから紛らわしいぞその呼び方。
あずみでいいよ」
十年以上も片思いか。
私もそんな風になるのだろうか。
いや、だけどだとしたらあずみは途中にその片思いに区切りをつけて大和を選んだ理由が気になる。
「そのソラは私が何で大和に乗り換えたかって聞きたそうな顔だな」
私と鉄は黙って頷く。
あずみはそれをみて苦笑いした。
「別に、そんな複雑な話でもないんだよ。
ただ大和の奴が十年以上前に私に惚れてさ、そのまま数ヶ月前まで一途に私を好きでい続けてくれただけだ」

少し嬉しそうな、それでいて寂しそうな顔だ。
「何度も何度も告白されては断ってんのに、それでも諦めず何年も薔薇の花を枯れる前に送り続けてきやがってな。
気がついたらもうあたいの方も大和の事を好きになってた」
あの大和っての、中々の執念だ。
その諦めなさは学ぶべきものがある。
「あたいに似合う男になるためにバカみたいにハードなトレーニングや仕事だってするし、
そのくせ弱音も吐かない。それに聞いてくれよ、あいつ貞操を付き合ってもいなかったあたいに立ててさ、
あたいとの初夜、つまり最近まで童貞だったんだぜ。正直笑っちまうよな」
口では小馬鹿にしている感じだ。
だが本心は絶対に違う。
そんな抑揚がある。
あずみは少し笑ったあと、静かにため息をつく。
「ほんと・・・・・あたいなんかにゃもったいない男だよアイツは。
もっと若くて可愛い女なんて星の数ほどいただろうに」

俺と鉄は正直返答に困る。
大和のそのあずみを手に入れるための執念を馬鹿にできるはずもない。
「そんな事はねぇだろ。
大和はお前に似合う男になるために努力したんだ。
だったら今のアイツに似合う女がお前って事なんだろ」
逆説的な考え方だ。
あいつはあずみに釣り合う男になるために今の強い大和になった。
それはつまり、その大和に釣り合う女もあずみしかいないという事になる。
「面白い事いうじゃねーか。あたいをおだてる文句にしちゃよくできてるぜ」
相変わらずなやつである。
少しはありがとうとでも言えばいいのに。
だが、あずみの話を聞いて私は僅かに影響されたらしい。
十年以上も片思いし続けてそれを成就させた大和。
見習うべきところが多い。
「まぁ、お前はまだ若い。
せいぜい人生悩めや」
そう言ってあずみは一人湯船から出る。

「そろそろあたいは出るよ、お前らも湯あたりすんじゃねぇぞ」
「ええ、忠告感謝します」
　硬いやつだ鉄は。
　だが私は違う。
「この後は大和の奴と個室風呂か？」
「・・・・・・まぁな」
　意外とあっさり肯定してきた。
　もっと慌てるものと思ったのだが。
「散々、それこそ十年以上も今まで焦らしてきたんだ。
　だったら結婚した今、その積もったぶんのアイツの気持ちをあたいはどんな形だって受け止めてやりたいしな」
　何だかんだで甲斐甲斐しい女である。
　口は悪いが古き良き女房という感じだ。
　幸せそうなことで。
「あんま無茶して腹の子驚かすなよ」
「いや、多分今日は前じゃなくて・・・・・・」
「前？」

「あ～、なんでもねーよ。普通のやつは知らなくていいことだ」
何かお尻を気にしながらあずみは浴場を出て行った。
『前じゃなくて』とは一体どういう意味だろうか。
よくわからない。
「さて、そろそろ私も出るとしよう」
鉄もあずみが浴場から出るのと同時に湯船から立つ。
その際、露天から出る前に数秒山を眺めた。
その目は何かを思い出しているのか、センチメンタルなものだった。
「桜か、卒業したあの日を思い出すな・・・・・・」
卒業とは高校を卒業した日のことだろうか。
残念ながら卒業式自体に何の感慨も持たなかった私には鉄の気持ちを察する事はできない。
鉄も一度深く瞼を閉じて意識を切り替える。
「そういえば腰越、少し聞きたいことがあるのだが」
「なんだよ」
立ち上がってから中々出て行かないやつである。
湯冷めしないうちに浸かり直せばいいのに。

「いや、レオが愚痴っていたのだが。携帯電話の電波がつながらない場合どうすればいいのだ？」
「あ？　そんなの場合によるだろ」
「場合と言われてもな。私は機械に疎いからどんな場合にどんな事をすれば解決できるのかさっぱりなのだ」
　ああ、鉄は俗に言うアナログな人間のようだ。
　だったら口で説明してやっても理解できるかすら怪しい。
「こんな山奥だから携帯とかの電波が届かないとかじゃねーの」
「電波、携帯。ふむ、電波と携帯になんの繋がりがあるんだ？」
「そっからかよ」
　ダメだこれは。
　小学生に英語を一から教えるようなものだ。
　まぁ実際こんな所に通信機器の電波なんて来るとも思えない。
　ダイの奴もスマートフォンの電波が来ないから辻堂たちに連絡が取れないと愚痴っていたが多分同じ理由だ。
「なあ腰越よ。その電波とは街の近くにある山を軽く登った程度で届かなくなるようなものなのか？」

街の近く？

コイツは一体何を言っているのだ。

ここは見渡す限り山に囲まれている。

近くに街なんてあるわけもない。

「なぁ、お前って山に登ってたらここに辿りついたんだよな？」

「ああ、そうだ。ただ私の知る限りこんな深い山岳地帯など私の住んでいた所にはなかった。

何故山を半分登った程度でこんな山に囲まれた場所についたのか全く理解できないんだ」

実際私も気にはなっていた。

いくら夢中で峠を攻めていたからといって、こんな深い山の中まで来る筈もない。

「ふむ。その様子を見るとお前達も気がついたらここにいたようだな」

「ああ、多分直江達もだろうな」

鉄は腰に手を当てて少し考えている。

だが、何か思いつく事があったのか口を開いた。

「まるで神隠しのようだな」

神隠し。

確か山や森に行った人間が姿を消す事。
もしくはなんの前触れもなく失踪する事だったか。
なるほど。
確かに私達は全員山を移動していてここに迷い込んだ。
私たちを追いかけていた辻堂達が私の視界から消えた瞬間も違和感はあった。
恐らく残されたアイツ等からしたら私達が神隠しに遭ったように見えたはず。
「案外その通りかもな」
余りにも非現実的で非科学的だが、そのほうが辻褄がある。
「さて、だったらどうする？
私は神隠しにあったこともないため元に戻る方法など心当たりもないが」
「私もないな。しゃーない、私はダイに相談してくるよ」
「では私はレオの意見を聞いてみることにしよう」
じゃあどちらが直江夫妻にその事を聞くか考えたとき、
妙に大和の奴が食事の時に何か気づいていたような節があった事を思い出す。
もしかしたらあいつは既に何か考えているのかもしれない。

「マキさんはさ、何で神隠しにあった人が帰ってこないか知ってる？」
「いや、知らない」
互いに風呂から上がり、自室の布団の上で鉄と私の話を説明するとダイは少し困ったような顔をした。
その後、言いづらそうに今の質問を私にする。
「神隠しってのは基本的に隠し神、つまり天狗や鬼などが隠れんぼしている子供や山を彷徨っている人間を攫う事なんだ。
だから一部の地域では夕方になったら子供を早く家に帰らせるために迷信で『早く帰らないと子供を攫う鬼が出る』なんて事を言ってる地域もある」
なるほど。
つまり山で遭難したために消息不明になった人間の例え話、もしくは子供を怖がらせるためだけに生まれた作り話
これが神隠しの基本的な考え方というわけか。
「で、その神隠しを起こす原因となる隠し神ってのが色々種類があってね。

それこそ地域によって様々な姿なんだ」
「天狗とか鬼って今言ったよな？」
「うん。でもこの鬼にも沢山種類があるんだ。
隠し婆、油取り、子取りぞ。ピックアップしていけばキリがない」
ふむ。
では今私たちが神隠しにあったとして、私たちを隠した神は一体どういう種類の神なのだろうか。
私が疑問げにしているとダイは口を開くかどうか迷っている素振りを見せる。
「言いにくいことでもあるのか？」
「・・・・・・実を言うと俺は現状と全く同じケースの伝承を知ってるんだ。当然それを起こす神様も」
それを言いたがらないってことはロクな神様ではないのだろう。
私はダイに言うように無言で訴える。
ダイはそれを察し、観念したように口を開いた。
「山姥ってのがいてね。この老婆は山を彷徨う人間の前に綺麗な格好をして現れて、宿を貸し食事を与える神なんだ」
「それだけならただの良いヤツだけど・・・・・・それで終わらないんだろ？」

「うん、そんな人にとって都合のいい存在なら俺たちも心配ないんだけどね」
随分もったいぶる。
つまりそれだけ言いにくい正体がその山姥にはあるのだろうか。
「山姥は持てなした客が夜寝付くとね――――その客を食い殺すんだ。
だから山姥に隠された人間は永遠に帰ってこない」
・・・・・・随分と恐ろしいババアだ。
「見事に私達の現状と一致した伝承だな」
「所詮伝承だよ。証拠もないしそもそも攫われたら帰って来れないのだから伝える人が存在するはずないし」
けれど、だからといって笑って流せる話ではなさそうだった。
少ししてこの話を推測したダイは真面目な顔をして立ち上がる。
「どこ行くんだ?」
「今日は皆一緒に固まっていよう。
取り越し苦労ならそれでいいし、有り得ないと思うけど今の話が本当なら固まっていたほうが安全だ」
ダイは一人でふすまを開け、部屋から出ていく。
私は慌ててダイを追った。

とてもじゃないがダイではそんな妖怪染みた存在とまともにやりあえるとは思えない。
ダイは私が守ってやらないと。

その後、私とダイは二人で鉄達と直江達を探す。
だが山姥ではないかと疑っている女将の姿も他四人の姿も見つからない。
それに他の宿泊客も存在すらしていない。
余りの静けさな旅館に僅かに心が冷える。
「そう言えば飯食ってる時に大和さんが後で個室風呂行くって言ってたような」
「ああ、そういえば。行ってみようぜ」
「うん」
私はダイから絶対に離れないように手をつなぐ。
これで安心だ。

そして間もなく個室風呂の前に到着。

見た目としては屋外にたくさんの小屋があって、その中に風呂があるような構造なのだろう。

つまり小さいかわりに沢山ある露天風呂って感じだ。

「マキさん、中に誰かいるかな?」

「温泉の臭いのせいで鼻はアテにならねぇな。

仕方ない、耳を使ってみるか」

神経を集中し、耳を研ぎ澄ます。

そして近くにいる人間の声を聞き取ろうとする。

すると少し遠い所にある個室風呂から声が。

『や、大和。お前尻ばっか触りすぎだっつーの』

『そう言ってあずみさんもこっち結構好きだよね』

『あ、う。このバカ! 入れるなら入れるって先に言えや!』

・・・・・さっきあずみが言ってた前とか後ろってこういうことかよ。

大人になるってこういう事なのだろうか?

大人って怖いな。

「マキさん、大和さん達いました?」

「ああ。ちょっと楽しんでるみたいだからしばらくここにいてアイツ等から出るのを待

とうぜ」
　ついでに鉄もいないか探る。
『あ、こらレオ。洗うのは背中だけって約束だろう』
『でもやるならとことんやれって乙女さんも普段から言ってるじゃない』
『それは確かに言ったが・・・・・・あぅ、こらどこを洗ってるスケベ！』
『でも乙女さん全然抵抗しないじゃん。
　それはつまり許可してくれてるって事だよね？』
『あ、う。それは・・・・・・』
　・・・・・・もういいや。
　どうせこいつらも時待たずして直江達みたいな事始めそうだ。
「なあダイ。お前って辻堂の奴とするときどのくらい時間かけてんの？」
「大体1時間位の時もあれば丸一日の時も・・・・・・何でそんな事を聞くんですか？」
「べっつにー」
　まる一日かよ。
　確かにそんだけやってりゃ山姥も襲ってこなさそうだ。
　私は付き合ってられないけど。

「こんな大人数で寝室を共にするなんて久しぶりだな。
高校の頃の部活の合宿を思い出す」
「良いから自分の布団に戻れよ。
何対馬の布団に向かってんだ」
「レオは根性なしだからな。こんな得体の知れない場所では安心して寝れるとは思えん。
だから私が傍にいてやっても構わんだろう?」
「いや乙女さん、俺の事をどんだけヘタレだと思ってるの」
ふと思ったが、対馬がシスコンなのは明らかだが鉄はそれと同じかそれ以上のブラコンな気がする。
私の手をギリギリと引き離そうとするそのパワー、ダイの姉ちゃんに通じるものがある。
「あずみさん、あずみさんは俺が護るから安心して寝ててよ。
あんまり夜更かしすると胎教やあずみさん自身の美容にも悪いしさ」

「舐めんな、自分の身くらい守れるっての。
ていうかこんな気色悪い状況で全部お前任せにできるわけねーっつうの。
お前に何かあったりしたらあたいも後追って死ぬぞ、いいのか？」
「・・・・・・よくありませんです、はい」
こいつ等夫妻は相変わらずおしどり夫婦なのか最初からくっついている。
実際のところあずみも鉄も自分のパートナーが心配で仕方ないのだろう。
かくいう私もちゃっかりダイの傍に布団を敷いているし。
今夜は一睡もしない覚悟もある。
別にこれで神隠しの件が徒労ならそれでいい。
「所でさ、風呂から変えたら各々の部屋に布団が敷かれてたけどこれって女将さん一人でやったのかな」
ダイが疑問げに言う。
「何度か旅館の中で気配を調べたけど私たち以外には誰の気配も匂いもしなかったぜ。
一番気色悪いのは女将の気配も完全になかったことだけどな」
私の言葉に対馬とダイは僅かに気押されたような顔をする。
だが直江の方は修羅場に慣れているのかそれほど動じていない。
ただ、黙ってあずみを胸に引き入れた。

「だろうね。俺も一応色々探ってみたけどあの女将さんだけは自分から姿を現した時以外は姿が見えないんだ」
「大和さん。それはいつから気づいていたのですか？」
「え、皆に合う前からだけど？」
そんな最初からこの旅館を疑っていたらしい。
「だって、どう考えてもこんな旅館にたどり着く道筋辿ってなかったしね。
そりゃ色々と警戒だってするさ。
大切な人が傍にいるなら尚更ね」
要領というか手回しや準備の良い人である。
こういう人が一人でもいるだけで安心感が違う。
「で、どうすんだこれから。お前らは寝るのかよ」
「お前らはという事は腰越、お前は寝ないという事なのだろうな」
「まぁな」
私がそう言うと鉄は小さくため息を吐く。
何か私は変なことでも行ったのだろうか。
「別にお前らは寝てていいぜ、私に気を使う必要もない」
「気を使いますよ。こういう時は肉体面であまり役に立たなさそうな俺が起きてるもん

でしょ」
レオがそう言うと全員が少し困った顔をする。
そりゃそうだ。
このままでは全員が遠慮して寝ずにいそうだ。
だったら何のために旅館に泊まっているのかすらわからなくなる。
休んでこその宿泊なのだから。
「・・・・・・じゃあさ、いっそトラップ仕掛けて全員寝ちゃうのはどうでしょう」
ダイが手を挙げて提案する。
トラップか。そういう罠の心得は持っていないのだが。
「おう、それでいいんじゃねーか？
罠とかなら私や大和が用意してないこともないしよ」
持ってるのかよ。
こいつら一体何の仕事をしてる奴らなんだろうか。
ともあれ、大和とあずみは自分のバッグを引っ張り出してゴソゴソと中身を探る。
そして数秒後。
「テレレッテレー！　万能地雷クレイモアー！」
「待ってください、なんでそんなものを持ち歩いているんですか？」

見れば只という字のような形をした反応型地雷を取り出した大和。
慌ててダイが突っ込む。
「別にこれに殺傷力はないさ。
これの射程範囲に入った瞬間凄まじい数の小さいペイント弾が炸裂するだけだから。
ペイント弾自体が結構硬いから当たると死ぬほど痛いけど」
だからといってこんなものを常備するってどんなだよ。
ふと、あずみは何を探しているのかまだ鞄の中から手を抜かない。
だが、少ししてようやくお目当てのモノが見つかったらしく、自慢げにそれを取り出した。
「ラップトップガンみっけ」
「過激すぎる」
レオが真顔で言う。
レオはこのラップトップガンが何なのか知っているみたいだが、鉄や私とダイは疑問げな顔をした。
初めて聞く名称だ。
「なんですかそれは、なんかデカいカメラに見えるけど」
「おう、これはこうやって組み立ててな・・・・・・」

手馴れた様子でカメラや周辺機器を組み立てていくあずみ。
完成したそれはスタンドで固定したカメラのような見栄えだ。
「カメラ・・・・・じゃねぇな。何かヤバげな臭いがする
っていうか銃口が思いっきりついてるしな」
「これライフルだしな」
自慢げに言うが、バカじゃないのか。
なんでこの日本でそんなライフルを旅行に持っていく。
「因みにこの設置型機銃はカメラに写りこんだ不審者を自動的に射殺するぜ」
「危なすぎる」
ダイが呟く。
「まぁ安心しな。中に入れてる弾はただのＢＢ弾だ。
一応銃自体を魔改造してるから実弾並みにあたると痛いけどよ」
「じゃあこれを設置して皆寝ようか」
・・・・・なんだか江乃死魔のトラップを思い出した。
あそこもそういや変な地雷やら機銃を仕掛けていたな。
ここもそんな感じになるとは思わなかった。
「随分手馴れた様子で設置するのですね」

鉄が傍観しながら口を開いた。
それを残されたメンバー全員が頷く。
出入り口は勿論、誰かが入れそうな隙間すら逃さないレベルで設置箇所を決める夫婦。
戦争でもする気なのだろうか。

結論から言おう。
何も起こらなかった。
寝ている最中に爆裂音や銃声など一度も聞こえず、寝室で聞こえた音はレオが鉄に抱きしめられて絞り出されたうめき声。
あとは雀や虫の音。寝息くらいなものだ。
「うん、何も起こらなかったのならそれが一番ですね」
「つまんねーの。妖怪の類と一度殴り合ってみたかったんだけどな」
「私も少々興味はあったが、それでもレオ達が危険に晒されなかった事を喜ぶべきだろ

うな」
どうやら私の気にしすぎだったようだ。
朝日が登っても一度も誰かの気配すらこの部屋に現れず、本当に静かな夜だった。
山姥なるものをぶちのめしてみた気持ちはあったが、鉄同様にダイが無事に日を跨げたようで一安心。
「――――お客様、朝食の用意が済みました」
『・・・・・・』
全員が固まる。
一人残らず笑顔を浮かべていたはずの空気が一変、完全にそのまま凍りつく。
「場所は先日夕食を摂った場所になります。
お早めにどうぞ。ほっほっほ」
いつの間に現れたのか。
声を出したときには既にこの部屋のふすまを開けて入口に鎮座していた。
大和の地雷すら射程内なのに反応せず、あずみの設置中もカメラに写っているはずなのに銃を発射しない。
女将は柔かに笑いながら一礼し、この部屋から出た。
その際、私たちがこの部屋に固まって泊まっていた事は一切触れなかった。

むしろ元々知っていたかのようだった。
「このトラップ故障してるのかな？」
対馬がゆっくりとカメラの前に手をかざす。
瞬間
「わぎゃあぁぁぁぁあぁぁぁ!?」
「!?　レオ！」
凄まじい連射力でＢＢ弾が発射される。
しかも銃口はわざわざレオに向けて方向移動する精密さ。
数発くらって悶絶する対馬の前に素早く躍り出る鉄。
「はぁ！」
そして気を放出し、一撃で設置中を粉砕。南無三。
「おいコラ！　あたいのお気に入りぶっ壊してんじゃねえよ！」
「機械とレオの安全なら比べるでもありません。
ですがあずみさんの銃の弁償はさせていただきます。申し訳ありません」
「・・・・・・ぐ、素直すぎてもう何もいえねぇ」
丁寧に頭を下げる鉄に気圧されるあずみ。
「ちっ、弁償とかいいよ。それよりどうすんだこのボロ雑巾」

「助けて大和先生！　レオさんが息してないの！」
「何!?　だったらとりあえず座薬をぶち込もう！　外傷だろうが風邪だろうが虫歯だろうがとりあえずぶち込もう！
　長谷君、クランケのパンツを降ろしなさい」
「合点承知、一気にズボっといきませう」
　ノリノリで対馬に固定するダイとリュックから自前の座薬を取り出す直江。
　こいつ等のこのチームワークは中々のものだ。
「こらお前らなにしてる！　レオから離れろ！」
「わー！　妖怪ブラコン女が出たぞー、ブラコニアに連れて行かれるぞー！」
「撤退！　総員撤退ー！」
　先程までの緊張感はどこへやら。
　私達らしいといえばらしいのだが、話の解決へつながらない。
　でも例え話が一向に進まなくてもこいつ等となら笑って解決できる気がする。
「ガラじゃねーかな」
　誰かと群れるつもりなど毛頭ない。
　強いやつは常に一人でいい。それが私の信条だった。
　けれどダイと関わって僅かだがそれが崩れた。

強い奴こそ大切なやつを守らなければならない。
だから私はこの得体の知れない山からダイと脱出してみせる。
それだけを考えていた。
だが、余裕があるならこいつらも一緒に出られるようにしてやろう。
そう思う程度に私は丸くなった。

朝食を終え、別れは突然にきた。
女将が現れこう言ったのだ。
「お時間がきました。
会計の準備が出来ましたら受付まで来てください」
その言葉で俺達は何かが終わる。そう思った。
「皆、お金は持ち合わせてる？」
大和さんが自分の財布をみんなに見せる。
俺や対馬さんもポケットに手を入れて取り出す。

俺はもともと遠出する予定だったのでまとまった金をおろしていた。
その為多分金は足りる。
対馬さん達もちゃんと持ち合わせがあったみたいで安心だ。
「はは、別に足りなくてもその分は俺が出すから大丈夫。
こう見えても浪費グセは俺達ないから金は余裕あるんだ」
「年下にいいカッコしてんなよ」
大和さんの頼りになる言葉にツッコミをいれるあずみさん。
「じゃあ行こうか」
全員が頷く。
果たして、どうすればこの山から出られるのか。
結局わからないまま日を超えた。
ここから歩き続ければいつか戻れるのならいい。
だが神隠しにあったとしたのならどう考えても自分の足で戻れるはずがない。
俺は一抹の不安を抱えながら部屋を出た。

馬鹿な。
全員がそう思った筈。
「・・・・・・ここはどこだ?」
あずみさんが訝しげに見渡す。
だが答えは見つからない。
そうだ。俺達は自室からでて階段を降り、ロビーに向かった。
その途中旅館の姿が消えた。
いや、単純に消えたわけではない。
むしろ俺達が別の場所にワープしたと言ったほうが正しい。
そして気がつけば俺達は森の中にいた。
しかしここはただの森ではない。
異常なのだ。
「随分大きな桜の木だな」
「こんなデカい桜の木なんて存在するのかよ」
鉄さんとマキさんが警戒する。
イメージするのなら、樹海に生えている木が全て満開の桜というのが正しい。

一面全て桜色。
そして正面にそびえ立つ一際巨大な桜の木。
こんなに大きな桜の木など存在するはずがない。
それほどまでの大木だ。
「ほっほっほ。揃いましたね、それではお会計を始めましょう」
不意に正面から声がした。
「この声は、桜からか」
あずみさんが巨大な桜を睨む。
「どうやら対価はお金ではないようですね」
大和さんが俺とレオさんの前にかばうように出る。
そして手袋をはめ、その手袋から何か糸のようなものが見えた。
「ええ。お金など必要ありません。
この『夢枕』での宿泊費とはつまりお客様の思い出、すなわち繋がり。
お客様のつながりを断った際の気持ちをいただきます」
どういうことだ。
繋がりを断った際の感情。
理解できない。

「この旅館での一日、貴方様達は大変楽しまれました。僅かな期間でしたが、確かにそこに心の繋がりがあったはず」

風が大きく吹く。

一斉に周囲の桜の花が散り、桜吹雪が起こる。

「これより貴方達を元の場所へ戻させていただきます」

風はどんどん強くなる。

それに応じて更に舞う桜。

もはや視界すら遮られる程の猛吹雪。

「それがどうして繋がりを経つ事に繋がるんですか」

レオさんが聞く。

俺もわからない。

俺たちを元の世界に戻したところで何も悲しむことはない。

また会うことなんて簡単なことなのだから。

「いや、俺達は元の世界に戻ったら確かにお別れになる」

大和さんが僅かに寂しげに言った。

「どういうことですか？」

その俺の問いに大和さんは自分の携帯端末をや財布を取り出した。

「俺達三組は確実に生きている時間軸が違うんだ。
君たちの携帯電話は明らかに俺の時代では過去に存在していた古い機器だ。
対馬君、君のを見れば恐らく君達二人が本来年長者なんだろうね」
思い出す。
確かにレオさんの携帯電話は異常に古いデザインだった。
俺からすれば古い機器を使い続けているのか思っていた。
けれど、全く見たことのない程の技術を使っている大和さんからすればそれは不自然だったのだろう。
「そして次に君達の財布の中のお金だ。
これも対馬君、君だけ俺の時代にはない札が入っている」
五千円を取り出す大和さんと対馬さん。
確かに二人の札は明らかに載っている人物が違う。
「俺達の実際の年齢はそう離れていない。
けれど、元の世界に戻ったとき君達の世界にいる俺はこの世界の記憶をまだ持っていないだろうね」
そうだ。
大和さんだけは二九歳。

つまり俺が元の世界にもどった時点ではまだ大学生位の年齢なはずなのだ。
よってまだこの旅館には訪れていない。
「だったら俺に考えがあります」
レオさんは財布から数枚のレシートを取り出し、何かを記入し、俺と大和さんに渡す。
俺達は何を書いているのか確認し、そこで彼の意図に気づく。
ここに書かれているのはレオさんのアドレスだった。
「大和さん。元の世界に帰った時にここにメールをください。
その時まで俺はこのアドレスを使い続けます、どんな事があっても」
「・・・・・・わかった。きっと連絡するよ。
それじゃあ俺達のアドレスを交換しようか」
俺達はそれに頷き、紙に自分のアドレスを書き二人に渡す。
これで俺達三人のアドレスは交換できた。
『準備はできましたかね?』
桜の木が囁く。
「いえ、待ってください。
最後に一枚だけ残したいものがります」
慌てて俺はスマートフォンを立ち上げ、カメラの画面にする

同時に皆から離れたところにダッシュし、丁度いい高さの岩場に立てかける。
タイマーをセットし、再び元の位置に戻った。
「皆固まって！　最後に写真をとりますから！」
「んだよ、別に人生単位の別れってわけでもないのに」
「あずみさん、ここは長谷君の言葉に従って」
互いのペアを引っ張り全員が固まる。
そして、僅かな間で鳴るシャッター音。
恐らくこれで撮れたはずだ。
『・・・・・・ほっほっほ、良い思い出を作れたようで何よりです。
それでは元の世界へお戻り願います』
桜舞い散る中、俺達は互いに笑い合う。
「あずみさん。子供が生まれたら是非大和さんにレオへ連絡するように言ってくださいね」
「覚えてたらな」
相変わらずあずみさんはそっけない。
けれど彼女はきっと覚えている。そして忘れない筈。
そういう人なのは短い時間でわかった。

「腰越、お前も何かないのか？」
「別に、ねぇよ」
その無関心な態度に全員は動じない。
全員もわかっているのだ。
彼女が多少なりとも別れを惜しんでいることに。
その証拠に何かを言おうとしてはためらってる。
だが互いの姿が桜吹雪の中で薄れていくにつれてマキさんは口を開いた。
「まぁ、また顔を合わせたなら
そしたらまた旅行でも行こうぜ」
全員が笑う。
その不器用な子供のような言い方に微笑ましさを感じたのだ。
もう時間はない。
間もなく俺達は一時の別れが来る。
「皆さん、お元気で」
俺はそう言って世界が変わる瞬間を迎えた。

「ん、ん～・・・・・・」
　薄れた意識が覚醒する。
　同時に重たかった瞼をゆっくりと開いていく。
「よ、起きたか」
「マキさん、先に目が覚めてたんだ」
　目の前には俺を心配するように覗き込むマキさんがいた。
「・・・・・・鉄さん達はいないですよね」
「ああ。影も形もない」
　生まれた時代も育った場所も違うからこそ、それを知った時の別れはより悲しくなる。
　あの隠し神はだからこそ別の時代の相性の良い三組を選んだのだろう。
　結果、その通りに俺達は仲良くなり、互のことをあまり知らぬまま別れることになった。
　本来ならばもっと彼らのことを知りたかった。

その後悔の念すら隠し神にとって最高の報酬なのだろう。
ふと、俺は思い出したように財布を取り出し、中を見る。
「それ、対馬のアドレスだっけか？」
「うん、間違いない」
良かった。
あの時に渡しあったものは消えていない。
「そこに連絡するのか？」
多分対馬の奴なら私達を覚えてるだろうし」
大和さんの推測では対馬さんが一番の年長者だった。
つまり元の世界に戻った際、一番古い年に行くのは対馬さん達という事になる。
よって俺が今ここで連絡をした時、対馬さんは俺を知っているハズなのだ。
「・・・・・・いや、やめとくよ」
「そっか」
俺達が次会うのは直江さんから連絡が来たときだ。
これから何年先になるのかはわからない。
けれど、きっと、俺達はまた会える。
そんな気がした。

「ほれ。お前が置きっぱなしにしてた携帯、私が回収しといたぞ」
いつのまに。
写真を撮ったあと、どうやらマキさんは俺の知らないうちにカメラを回収していたのか。
「ありがとう」
「さっきとった写真見てみようぜ」
俺はそれに頷き、写真を開く。
満開の桜。
満面の笑み。
俺達はこの春に、心に残る出会いと別れを経験した。

27話：先に進むために

「へっくしゅ！　うえぇ～、鼻水鬱陶しくて息しづらいっすぅ～」
「この時期に風邪かよ。だらしねぇの」
「誰のせいだと思って・・・・・・っくっしゅん！」
大とマキが神隠しにあった数日後、平日の夕方に腰越マキと乾梓は二人で弁天橋にいた。
どちらが誘ったのか、それはマキの方だ。
日課となった我那覇葉との稽古を終えた梓を待ち構えてたかのように、マキは汗をかく梓の元に現れた。
その後、マキに少し話したいことがあると言われこの弁天橋までついてきた。
「皆殺しセンパイがこんなクソ寒い時期に海なんかに落とすからっへくしゅ！
こんな最悪なコンディションにっくしゅん！　なったんすよ！
どんだけ今あずがしんどい思いしてるかわかります!?」
「知らねーよ。大体私風邪なんてひいたこともねーもん」
先日恋奈と共に海に投げ飛ばされた梓は盛大に風邪を引いた。

一度海から泳いで出たのはいいのだが、出た瞬間に入れ替わるように恋奈が海に投げ飛ばされ
再び寒中水泳をする事になったのが決め手だったらしい。
その日のうちに風邪を引き、こじらせにこじらせて未だ治っていない。
「しかもこの体調で稲村学園行ったらあそこの保険医に捕まってお尻にネギ入れられそうになるし・・・・・・
もう最悪だよ！」
梓が大人しくマキについていったのは文句を言うためだったのだろう。
移動中も到着後も変わらずこの調子である。
「あーあーうっせーうっせー。
だったらダイに看病して貰えばいいだろ、良い理由ができたんじゃねぇか」
「そ、それはそのぅ・・・・・・っくしゅん。
げ、ティッシュ尽きた」
「ほれ、私のやるよ」
「あ、どもっす」
マキからポケットティッシュを貰い鼻をかむ梓。
数枚まとめて取り出して一気に使う。

そして僅かにスッキリした顔を見せたあと、マキの言葉に答える。
「長谷センパイに移しちゃ悪いじゃないっすか。
せっかくの春休み、満喫してほしいですし」
「随分健気なこって」
こと長谷大にだけは献身的な梓である。
彼女はかなり彼に依存をしているのだが、彼に迷惑がかかるなら大体のことは我慢する。
今回も風邪を引いてからは長谷大とはメールや電話だけでまだ一度も顔を合わせていない。
「でもお前今日とか普通に外歩いてたけど、他の奴に移すのはいいのかよ」
「むしろはやく移して治したいっすね。
他人にこの鬱陶しい症状押し付けてさっさと長谷センパイに会いたいですし。
あ、皆殺しセンパイがこのクソ鬱陶しい病気引き受けてくれません？」
「お前病死すりゃいいのにな」
と、このように長谷大以外には辛辣というかかなりドギツイ本性を見せる。
一応他人の前でもある程度は猫をかぶるため、彼女のこの本性を知る者は限られているが。

マキはそんな梓を面白い奴として見ている。
「それで自分に何の用っすか？
これからバイトあるんで手早くして欲しいんですけど」
「バイト？　お前が？」
「なんすかその言い方・・・・・・自分だって普通に金貯めたりしますよ」
梓が以前カツアゲで金を手に入れていたことは最早江乃死魔の不良にとっては有名なことだ。
だがそれももうしていない。
今それをすれば確実に長谷大の信用を裏切ることになる。
金と彼の信用ならば天秤は圧倒的に長谷大の方に偏っているのだ。
無論、別に梓にとって金の価値が下がったわけではない。
依然として大半の人間の信頼よりも彼女は金に執着する。
単純に優先順位の頂点に長谷大がいるだけなのだ。
「で、何のバイトだよ」
「・・・・・・漁船っす」
「・・・・・・そうか」
余程金に困ってたらしい。

乗り物酔いすら我慢しなければならないほどお金に追い詰められている様にマキはガラにもなく同情した。
「それで、私がお前をここに連れてきてまで聞きたい話なんだが」
マキはこの微妙な空気を変えようと本題に入った。
「お前ってさ、どういう風にダイが好きなわけなんだ?」
マキのその問いに梓は僅かに顔をしかめる。
「それを聞きたくてここに?」
「ああ。それが聞きたくてここに」
当然のように頷くマキ。
梓はその様子に軽い頭痛を感じた。
「それを知ってどうするんですか?」
「どうもしねーよ。ただ、ダイがどんな理由で人から好かれてるのか知りたいだけだ。姉としてな」
マキのそのフレーズに反応する梓。
「姉? 皆殺しセンパイが長谷センパイの姉って事っすか?」
「そうだ。私とダイは家族だ、だったら年上の私はダイの姉って事になる」
一瞬梓はまるでおままごとみたいだと笑いそうになる。

だが何故だろう。
マキのその言葉は冗談には聞こえない。
まるで本当に家族のような、そんな感じが確かにマキの言葉にはあった。
「それで弟の周囲の調査ってわけですか。随分過保護なんすね」
「弟の骨へし折って入院生活させたお前になら尚更な」
「ぐ、人が負い目に感じてる所を・・・・・・」
流石に怯む梓。
あの時の事は今だに引きずってるし、ダイの傷跡を目にするたびに内心謝っているのだ。
そのため、それを口にされると本気で梓は気が滅入る。
「お前さ、ダイに気に入られるためにもう金とかに執着すんのやめたの？」
マキがストレートに聞いてきた。
その言葉に梓は大きく息をつく。
「どいつもこいつも今の自分を見たら金金金と。人を守銭奴みたくいいやがって」
実際に彼女の本性をしる人間が今の梓を見た場合、決まって全員今のマキの問いをする。
梓としてはもううんざりするほど聞かれた内容だ。

だが、その問いに一度として明確な返答をしてはいなかった。
「別に今も前も金に執着してんのは変わりませんよ。
ただ、今までの最優先だった金の上に長谷センパイが位置するだけです」
今だって梓は大、恋奈、愛という抑止力がなければカツアゲはせずとも、また別の金策をしていただろう。
しかし既にその三人は梓にとって優先順位の最上位に位置する。
そのため三人の信用を裏切らないように健全な金稼ぎを今する事になっている。
「金が何よりも信頼できるって考えは今もあります。
まぁそれ以上に信頼できるのが長谷センパイって事っすね」
だから何よりも大に執着するし、彼を手に入れるために何だってする。
身も蓋もない言い方をすれば、梓は以前とさほど変わっていないのだ。
単純に価値の順位が変わったという変化のみ。
その変動によって他人の目からすれば彼女が大きく変わったような錯覚をしているだけである。
「・・・・・・随分ダイの事信頼してんのな、お前」
「何を今更」
梓は呆れた顔をしつつ、ポケットに手を入れる。

「ん？　電話、誰からだろ」
手を入れたタイミングと同時に誰からかのコールが梓の携帯電話に着信。
梓は特に普段と変わらない様子で呼び出し人の名前を確認する。
瞬間、その名前を見た途端花が咲いたような笑顔になる。
「はいあずです！　こんな時間に電話なんてどうしたんすかセンパイ！」
「声でけーよ」
やたら元気に長谷大からの電話を受け取り、通話に入る。
マキは特にそれを邪魔することもなく、黙って通話が終わるのを待つ。
「え、あ。その、今日はちょっと用事があって・・・・・・え？　鼻声になってる？」
どうやら風邪をひいてから今日まで一度も大と顔を合わせてないため心配されたらしい。
日課だった勉強会もご無沙汰なため、大の方から電話をかけてきたようだが。
「花粉症っすよ。もう目とか痛いし最悪って感じで――――つくしゅん！」
大きくくしゃみがでた梓。
「ですから別に長谷センパイがあずの事心配する必要は・・・・・・え？　今からそっちに？
え、え～と・・・・・・」

どうやら大に家に来ないか聞かれたらしい。
梓は自分から行こうとしなかった癖にいざ向こうから誘われると行きたそうにする。
モジモジと自分の髪をいじり、答えを決め兼ねる。
「お前、この後バイトとか言ってなかったか」
「・・・・・・い、行きます。すぐ行きますから待っててくださいね」
「行くのかよ」
梓はそう言って電話を切り、即座に別の所へコールする。
それをマキは興味深そうに眺める。
「すいません、乾梓っす。ちょっと風邪が悪化したようなので今日はちょっと休ませて頂いても・・・・・・」
バイト先の先輩に電話をかけたらしい。
ひたすら取引先に電話するサラリーマンのようにぺこぺこする梓。
なんだろうか、そのらしくない姿に思わず吹き出すマキ。
梓の話を聞いているとどうやらずる休みだが、目の前の梓を見るに正直休んだところでズルではない。
確かにここで漁などに出ても体を冷やして風邪を悪化させる可能性も高い。
「あざっす、それでは失礼します」

無事休みの了承を得た梓。
ほっとした顔をしながら相手が通話を切ったのを確認してから携帯をしまう。
「かしこまり過ぎだろ、どんな相手だよ」
まさかここまで梓が丁寧に応対するとは思わなかったマキが突っ込む。
そのマキの言葉にものすごく微妙な顔をする梓。
「・・・・・・辻堂センパイのお母さんっす」
「辻堂の奴の？　へぇ、漁師なんだ」
辻堂愛の母親が過去湘南を制覇し、数々の悪名や伝説を轟かせた伝説の存在なのは有名な話だ。
けれどその辻堂真琴が現在どんな私生活を送っているのか、それはそれほど有名ではない。
その為若い不良が無謀にも真琴を伝説の稲村チェーンであること知らず喧嘩を売ってしまうことも少なくない。
その度に悲惨な末路をたどる者が増えるわけだが。
ともあれ、マキは辻堂愛の母親である真琴の伝説すらそれほど知らなかった。
しかし梓は稲村チェーンをよく知っているその為ひたすらに丁寧に接しているのだ。
「では自分は今から長谷センパイのお宅に行くんで失礼しますねっくしゅん！」

マキの返答すら聞かず浮き足立った様子でその場から走り去る梓。
その後ろ姿を眺めながらマキは次の目的地を目指した。

「何で私の所に来るのよ」
「いや、だって。お前もダイに興味あるんだろ？」
「・・・・・・まぁ否定はしないけど」
次に会った相手は片瀬恋奈。
場所は江乃死魔拠点。
集会中に突然のマキの来訪で恋奈やティアラを除く他のメンバーは遠目で怯えている。
無理もない、つい数日前に江乃死魔はマキ一人に手も足も出ず壊滅したのだ。
故にまともな神経である者は誰もがマキに威嚇すらしようとは思わない。
実質マキはこの江乃死魔落としで愛以上にこの湘南の頂点に近い存在となったのだ。

「え、恋奈さまって長谷にホの字なんかい？」
「うっさいわね、アンタはあっち行ってなさい」
「え～、でも気になるシ。
　れんにゃって最近やたらと物憂げな顔するようになってたけど、それ原因だシ？」
　唯一マキにも怯えないメンバーである花とティアラがマキと恋奈の会話に割り込んでくる。
　マキ自身は特に邪魔扱いもせず、追い払ったりはしない。
　だが恋奈は大層邪魔に感じたようでさっきから追い払おうと必死だ。
「いいからアンタらはあっちいってなさいって！」
「ちぇ、れんにゃ冷たいシ」
「あ、俺っちはこれから用事あるからもう帰るっての」
　そう言って二人は大人しくその場から離れた。
　そして二人きりになったのを確認してから恋奈はマキを睨む。
「あのね、私はアンタにぶっ飛ばされて人数半分以下まで減った江乃死魔の立て直しに忙しいの。
　そういう私事なら私がフリーの時にしてくれない？」
　恋奈自身次の年度で入ってくるルーキーや逆に卒業で不良を引退する者の把握。

さらに先日のマキとの決着で壊滅した江乃死魔の立て直しなどで途方もなく忙しい。
その為正直今マキと話している余裕はそれほどない。
ないのだが
「答えないのならここで暴れちゃうぞ」
「クソバカ畜生もうやだコイツ」
相変わらずのマキの暴虐さに涙ぐむ恋奈。
だがここで恋奈は閃く。
「アンタ、もう喧嘩はしないんじゃなかったの?」
鬼の首を取ったように鼻息荒く自慢げにいう恋奈。
これが通れば無事マキを追い出せるはずなのだが。
「できるだけしない方向にすると言っただけで、一切しないなどと申しておりません」
「まるで日本の政治家のようね・・・・・・」
悔しそうに歯噛みする恋奈。
だが元々それほど期待はしていなかったためダメージは少ない。
恋奈は諦めたようにうつむく。
「で、何が聞きたいのだったっけ。もう何でも答えてやるわよ」
諦めた恋奈にマキは再び同じことを尋ねる。

「お前はダイのどこを好きになったんだ?」
「あ～、そんな話だったわね。つぅか直球すぎんだろ」
恋奈は内心答えたくないため、僅かに顔をしかめる。
しかし答えなかったらいつまでもマキがここにいる上に、最悪暴れかねない。
恋奈はもはや自暴自棄になった。
「ア、アイツって意外と頼りになるし・・・・・・一緒にいて楽しいっていうか飽きないっていうか・・・・・・
それにアイツ私のこと結構理解してくれてるし・・・・・・・その・・・・・・・」
モジモジと言う恋奈。
途切れ途切れな言葉だが、恋奈の言葉にマキは僅かに赤面する。
「あ～、やっぱいいわ。聞いてるこっちが恥ずかしくなる」
「だったら初めから言わせんなや!」
余りの青臭い言葉にマキは恋奈の独白を中断させる。
そんなマキにブチ切れる恋奈。
怒り狂った恋奈は怒り任せに無謀にもマキの胸ぐらに掴みかかった。
「お前意外とダイの事気に入ってるんだな」
「う、うっさい!」

マキは恋奈の手をどうこうする事もなく、ニヤニヤと笑いながら恋奈をいじる。
恋奈もその言葉に赤面し、照れ隠しに怒鳴る。
だが、不意にマキは表情に影を落とす。
「けどダイはもう辻堂の男だぜ。
お前がどんなにダイの事意識したところで――――」
「黙れ」
恋奈がマキの言葉を遮る。
明らかに先程までのゆるい空気ではない。
真剣な感情が恋奈から見て取れる。
「別に、私は長谷と付き合いたいわけじゃないわ。
アイツと私はそんなものよりもっと価値がある関係よ」
それはどんな関係なのか。
マキはそれを聞こうとはしない。
「アイツと私の間には確かな信頼がある。
だから私はそれだけで充分」
マキには恋奈のいっている事がさっぱりだった。
けれど、恋奈は今の大との関係に満足しているという。

「アイツはきっとどんな事があっても私の味方でいてくれる。
私もどんな事があってもアイツを見捨てたりしない。
私はその関係の方がいつ切れるかわからない男女の関係よりよっぽど好きよ」
ようやくここでマキは理解する。
なるほど。確かに恋奈は恋奈で独自の関係を長谷大との間に築いていた。
その大きな信頼は絶対に恋奈の勘違いではないだろう。
恋奈自身もそう思っているからこそ言い切ったのだ。
「まぁそれでも、アイツが付き合って欲しいと言うなら別にそれはそれで・・・・・・」
「お前も大概だな」
それでも一応恋心はある。
ただその恋心以上に信頼という感情が強いだけ。
信頼と恋心がイコールである梓とはまた別の考え方だった。
恋奈のその内心を察したマキは満足げに微笑む。
「それだけ教えてくれりゃ充分だ。邪魔したな」
「あ、こら腰越」
マキは未だ自身の胸ぐらを掴む恋奈の手を優しく解き、背を向ける。
そのまま恋奈の声に反応することもなく江乃死魔拠点を立ち去った。

急に現れて急にさったマキに振り回された恋奈は呆気にとられてしばし凍りつく。
「腰越の奴、何か考えてるみたいだったけれど」
目ざとい恋奈はマキの本心までは察せなかったが、何かを考えていたことは見抜いていた。

「お前の方からアタシを誘うなんてな。
何のつもりか知らねーけど、まどろっこしい事するじゃねぇか」
マキが最後に訪れた相手は辻堂愛だった。
夜、長谷大の家に向かおうとする愛の元に現れ、彼女を人気のない公園へと誘った。
無論これを断る愛ではなく、敵意をむき出しにしたまま愛はついていった。
「そう構えんなよ。別に今日はお前とやりあいたくて誘ったわけじゃない」
いつまでも刺々しい愛に頭をかきながら諭すマキ。
「じゃあなんの用だよ。人が折角大に会おうとしてるところ邪魔しやがって」

「やたら牙を剥いてる原因はそこかよ」
大の家にウキウキ気分で向かっていたところを邪魔された為、愛はマキに切れていた。
愛の言葉でようやくそこに気づきマキは若干呆れる。
「お前ら相変わらず仲いいのな」
「当然だ、ラブラブだもの」
「うっざ」
前触れなく惚気る愛に吐き捨てるマキ。
どうも大と付き合い始めてから硬派と軟派の入り混じる愛に扱いづらいものをマキは感じていた。
とはいえ愛が軟派になるのは大にのみなのだが。
「で、何の用だよ。手短に済ませろ」
「聞く奴聞く奴みんなそう言うんだよな。ちったぁ時間に余裕持てっての」
マキは愚痴る。
もっとも愛はそれを聞き取れはしなかったが。
取り敢えず毎回邪険にされてマキは地味に苛立っていた。

「お前さ、今ダイと付き合ってて不満とかあるか？」
「あるに決まってんだろ」
「・・・・・・へぇ、ちょっと言ってみろよ」
マキとしては意外だった。
大に関してのみ前後不覚になっている愛ならば即座に不満なんてあるはずないと言い返してくるものとばかり思っていた。
その為地味に興味がわいたのだ。
愛は僅かに言うべきか迷ったが、溜め込んでいたらしく誰かに吐き出したい気持ちはあった。
「冬休みから大の周りに女の影がちらつき過ぎなんだよ」
「あっそ」
殺意のこもった目で睨まれるマキ。
明らかにマキの事や梓のことである。
だがマキは軽く流す。
「人の良い大だから好かれるのは当たり前だし、大が梓みたいに積極的についてくる奴を邪険にできないのはわかってる。
そんな性格だから好きになったんだし、これからも直せないだろうし直さなくてい

い」

　ノロケを混ぜながらも不満を述べる愛。

「じゃあ何だ、お前はダイに対して不満はないということか」

「当然だ。自慢のカレシだからな」

　胸を張って答える愛。

　付き合ってる際の不満はあってもそれは大に対してではなく、ちらつく他の女の姿にのみだ。

　それを跳ね除けることの出来無い大に僅かに不満はあっても、そこも愛が好きな所でもある。

　だから大の行為自体に不満はない。

「優しくて頼りになって、アタシを大切にしてくれるし格好いい。家事だってできる。そんなカレシに不満なんてあるわけねーだろ。何言ってんのお前？」

「何だろうな、果てしなくムカつく」

　梓の時以上にのろけてくる愛に殺意すら湧き始めるマキ。

「そう言えば腰越、お前江乃死魔とケリつけたんだってな」

　愛が話を変えるように言う。

　その急ともいえる話の変え方にマキは僅かに笑う。

「まぁな」

マキのその肯定の言葉を聞いた瞬間、愛は何故か胸の奥に寂しいものを感じた。

まるでいつも遊んでいた友人がある日突然引っ越したかのような、

明確な例えは閃かないけれども、ともかく愛にとって僅かな空虚感があった。

「もう卒業して進学を待つ身だ、色々とケリつけなきゃなんないだろ」

マキも愛と同じ気持ちなのだろう。

僅かに物憂気な雰囲気を出し、呟く。

「今まで見ないふりをしてきた実家の事、将来の事、挙げりゃキリがねぇ」

アウトローとして生きていたマキであろうともしがらみはある。

人の子である以上血縁者は存在し、過去や将来もある。

宙ぶらりんなままでも生きていけるかもしれないが、マキ自身が中途半端は酷く嫌う。

故にマキは進学が決まってから色々な事に目を向け、決着をつけてきた。

「もっとも、元々群れない主義だった私だから不良辞めるのに手間はないけどな」

仲間を作らないマキは彼女自身が引退したところで誰も悲しむ者がいない。

個人的なケリさえつければマキは自分の意思で好きなタイミングで不良をやめられるのだ。

「けど、まだ私はヤンキーをやめれてない」
マキは僅かに語気を変える。
「江乃死魔とケリつけてもまだ、私にはもう一つつけてない決着がある」
マキが言わんとすることを愛は理解した。
愛は敵意を含まない、何か得体の知れない感情をマキの瞳から見た。
「アタシとの因縁にケリを着けたいのか」
愛はマキの真意を完全にはわからない。
けれど何を自身に求めているのかはわかる。
江乃死魔とのケリをつけた今、最後の因縁に終止符を討とうとしているに違いないと。
だが、マキは愛の言葉を聞いて心底おかしそうに笑う。
「はっ、テメェの因縁なんてついでだよ。
私は辻堂、お前をぶちのめして私自身の過去にケリをつけたいんだ」
マキの過去。
その言葉に愛は思考する。
「お前の過去って、昔した大との約束の事か？
何でその約束に私が関係するんだよ、お前は大と何の約束をしたんだ？」

愛の問いかけにマキは目を伏せ何も答えない。
愛もマキが言いたくない事を察し、追求をしない。
しかし、明らかにその『約束』がマキにとって何よりも大きいしがらみである事はわかった。
「私が最後に残したしがらみがその約束だ。
辻堂、それはお前と決着をつければケリがつく」
まっすぐ、何の濁りもない真摯な目で愛を睨むマキ。
その必死さすら伺えるマキの態度に愛は僅かにひるんだ。
「もしアタシがお前の喧嘩を買わなかった場合どうなるんだ」
「どうもしねぇよ。私が大学に行ってめでたくタイムリミットだ。
私はこれからずっとその事を引きずるし、けれどどうしようもなくなるだけだ。
お前に何もデメリットはない」
憮然として言い放つマキ。
「・・・・・お前にとってアタシとの決着はそんなに重要な事なのかよ」
愛は僅かに戸惑う。
ここまで真っ直ぐにマキに挑まれたのは初めてなのだ。
誰かの思惑も入らず、ただシンプルにマキに決着をつけようと持ちかけられる。

むしろ愛かマキのどちらかがそうしなければ決着はつかなかっただろう。
けれど今の状況を一度も想像したことはなかった。
ただ漫然と、いつか決着を付ける。
そう思ってこの瞬間まで引き伸ばし続けていた。
いい加減、その因縁を終わらせなければならない。
「わかった。受けてやる」

青空はどこまで広く、どこまでも青く、子供心を抱かせる。
空の果てはどこにあるのか。
この空はどこまで広がっているのか。
きっとこの空は世界中を包んでいるのだろう。
そんな何一つ遮るもののない空虚な空。
真っ青な大空にひとつの白い線があった。

「マキさん、見てよ。
飛行機雲がありますよ」
「ガキかよお前」
上を見て俺は年甲斐もなくはしゃぐ。
長く、長く長く続く飛行機雲。
真っ白なキャンパスに一本の白筆を滑らせたかのような。
「ダイ、お前に大切な話がある」
マキさんは真剣な声色で呟く。
「マキさん。
飛行機雲ってさ、子供心をくすぐるよね」
俺は両手を挙げ、空を仰ぐ。
「どうして空は青いんだろう。どうして空はこんなにも昔の事を思い出させようとするんだろう」
「ダイ、聞いてくれ」
俺とマキさんは今、港にいた。
俺はマキさんを視界に入れず、ただ防波堤の前で寝転がり空を眺める。
その隣にマキさんは座っていた。

「海や空が青い理由はもう科学的に証明されている。
けどさ、そんな根拠はどうだっていいんだ」
上げ続けている手を見つめる。
そしてその手を柔らかく握った。
「快晴の空を見たら気分が晴れやかになる。
そこにある飛行機雲を見たら楽しかった子供の頃を思い出す。
そこに理由はいらないんだ」
いつから空を見ることをやめたのだろう。
いつから天気予報で明日の天気を知るようになったのだろう。
明日は晴れるかなとワクワクしたあの頃の新鮮な気持ちはもう俺にはない。
だけど、あの頃は楽しかったと、そう思い返す気持ちは残っている。
「ダイ・・・・・」
マキさんは俺を静かに責めるように囁く。
わかっている。
マキさんが俺に何を伝えたいのか。
「愛さんと決着をつけるんでしょ。知ってますよ、昨日愛さんから聞きました」
昨日、乾さんの風邪を看病していると愛さんもウチに来てくれた。

その時、愛さんが思いつめていたから話を聞き出した。
そこで知ったのだ。
「そうか、だったら話は早い」
不思議な感じだった。
その二人の関係の終わりの日が今日だ。
この後、間もなく二人は最後の喧嘩をし、そこで三大天は終わる。
本来ならばマキさんや愛さんが喧嘩をするのだから俺は慌てるべきなのだ。
なのに、何故か俺は異常なまでに冷静だった。
「私はもう少ししたら辻堂と約束した場所に行く。
ダイはどうすんだ、一緒に行くか?」
ただ漠然とした懐かしさが胸の中にあった。
これは何なのだろう。
全く俺は答えを見つけることができない。
いつだってこの懐かしさがマキさんと一緒にいる時にはあった。
そして俺はもうその理由を思い出しつつある。
「ねぇ、マキちゃん」
「・・・・・その呼び方は、思い出してたのか?」

マキさんは僅かに慌てたような声になる。
「俺達は昔会ってる、極楽院養護施設で」
それは間違いない。
「そこで俺達は一緒によく遊んだんだ。
施設の皆が流行り病にかかってもマキちゃんだけケロっとしてたのも懐かしいね」
「・・・・・・」
マキさんは何も言わない。
空を眺める俺は彼女の顔色すら把握できない。
「色々な事を思い出した。
あの時の辛かったことも、幸せだった事も全部思い出した」
まだ家族にもなっていなかった姉ちゃんに虐められ続けていた記憶もある。
その度によい子さんに優しく慰めてもらっていた事も思い出した。
「なのに、マキさんとの約束だけ思い出せない」
子供の頃に交わした約束なんて覚えている方が珍しいだろう。
けれど、それでも俺は思い出したかった。
絶対に思い出さなきゃならない約束なハズなんだ。
「ダイ、確かに私達はガキの頃に約束をしてる」

僅かに震えるような、何かに怯え、それでも何かに喜んでいるような抑揚でマキさんは語る。
「でも、それは思い出すな」
「それはどうして?」
俺は起き上がり、マキさんを見る。
その時、ようやく気づいた。
「お前も私も、そしてお前の大好きな辻堂も傷つくからだ」
マキさんは苦痛に耐えるような顔をしていた。
歯を僅かに食いしばり、目を伏せ、普段の自身に満ちたマキさんの姿とは全く違うその姿。
まるで昔、まだ小さかった頃の自信無さげなマキさんのようだったのだ。
「だから思い出さないと駄目なんだ。
そんな辛い思い出をマキさんだけに押し付けるなんて俺にはできない」
きっと彼女が今こうして辛さに耐えているのならそれは俺に責任がある事なんだ。
それを知らんぷりしてのうのうと幸せになるなんて馬鹿げてる。
「やめろ、それ以上踏み込むんじゃねぇ。
決意が鈍る」

マキさんのいう決意とは何なのか。
俺には計り知れない。
マキさんは俺から顔をそらし、立ち上がる。
「私はダイを家族だと思ってる。お前もどうせそう思ってんだろ？
だったら私はそんな家族に嫌な思いをして欲しくない」
それだけ言ってマキさんは歩き始める。
時間なのだろう、目的地は愛さんとの約束の場所に違いない。
「どうしても知りたいのならお前自身の力で思い出せ。
私はお前に幸せになって欲しいからどんな事があっても言わねーからな」
俺は離れていくその背中に何故か、愛さんに向けるものと同じ質の感情を抱いた。
そしてその激情にかられて口を開く。
「わかったよマキちゃん。絶対に、思い出すから」
「・・・・・・バカ」
振り向いて、俺に笑いかけるマキさん。
その顔は寂しげで、けれど何か嬉しそうな
まるで俺達が離れ離れになる瞬間に見せた彼女の顔と同じだった。

大と別れた後、マキは真っ直ぐに愛との約束の場所へ向かった。
「あ〜あ、やっぱ向いてないわ」
まだ決めた時間まで余裕がある。
マキは少しゆっくり歩くことにした。
内心マキは今浮かれている。
理由は単純、大が殆ど記憶を思い出した事にだ。
自分との思い出を自らの手で掘り当て、もう間もなく約束の全てを思い出すだろう。
その事を何よりも喜んでいた。
「ダイの幸せ考えて大人しく引き下がるなんて私らしくない」
今日、梓や恋奈、愛の大への好意を聞き回った。
これは何のためだったのか、自分でもわかっていない。
ただ、聴き終わった今、意味はあった。
各々が独自の居場所を作っている。

梓も恋奈も大の彼女ではない。
けれど、それでも辻堂愛には位置できない『特別』を手に入れていた。
「好き勝手に暴れてやる」
けれどマキは自らその『特別』を作る気などなかった。
「ダイは、私のものだ。
辻堂にくれてやるには惜しすぎる」
既に自分の場所はあったのだ。
なのに、その場所をマキも大も忘れ、気がつけばそこに愛がいた。
ならばマキがする事は何か。
単純な事だった。
奪い返す。
その暴力的な発想と行為にマキは至った。
もし大がまだ全然過去の事を思い出していないのだったらマキももう諦めていた。
けれど状況は変わった。
思い出しつつある大に心躍る。
諦めつつあった約束を果たして欲しいと欲が出るようになった。
その飢えにも近い感情が完全にマキを動かし始めた。

果たして辻堂愛との喧嘩を終えマキ自身に何の変化があるのか。
それはマキ自身にも判らない。
けれど確実に何か変化はあるはずなのだ。
恋敵に自分の怒りをぶつけ、憎しみを叩きつけ、殺意を向ける。
そこで何かしら自分は答えを見つけるだろう。
自分の本当の居場所、約束の結末を。
結果がどんな形になるかは想像つかない。
何も得ず、単純にただ殴り殴られるだけの不毛な喧嘩になるかもしれない。
でも、何もせず指をくわえて愛と大が幸せになるのを黙って見ている事などマキにはできなくなった。
全てを思い出しつつある大を見て、完全に気持ちが暴走する。
「ダイは・・・・・・絶対にやらねぇ」
梓とも違う、完全な独占欲をマキは持った。
愛などに決してくれてやるわけにはいかない。
大は自分のものであり、他の奴に渡さない。
モチベーションは完全に潤った。
どんな相手でろうと叩きのめす。

結果として誰が傷つこうが知ったことではない。
無論、大が傷つく事になったとしてもだ。
ふと、マキは思い出したように空を見た。
先程、大がいったように空は快晴で雲ひとつなかった。
星もなく、雲もなく、ただ海のように青い色と真っ直ぐ伸びる飛行機雲があった。
『どうして空は青いんだろう。どうして空はこんなにも昔の事を思い出させようとするんだろう』
大の言った言葉をリフレインする。
それを意識した瞬間、マキは胸が締め付けられる気持ちになる。
まるで前に進む事ができない。
いつまでも約束に縛られる自分。
そんな弱い自分を消し飛ばす為に愛に喧嘩を売ったのだ。
「・・・・・・畜生」
その言葉は何に向けたものなのか。
マキ自身にすらわからなかった。

28話：飛行機雲

「うおえぇぇぇ～・・・・・・気持ち悪い」
「お疲れ様、乾さん」
マキさんと別れた後、俺は近くの漁船置き場に向かった。
そこではよく愛さんのお母さんである真琴さんや、地元の漁師さん達。
そして最近そこでバイトしてる乾さんがいるのだ。
マキさんと別れた時間帯が丁度乾さんのバイト終わりの時間だったので俺はそのまま彼女と合流したのだ。
一応ある程度は計算してたため弁当も事前に用意していたりする。
「食べたいのは山々ですけど食欲ないっすぅ・・・・・・」
完全に乾さんはバテていた。
今日は船から降りると同時にフラフラとした千鳥足で歩き、収穫を降ろす。
その作業が終わり、解散になったと同時に海に思いっきりゲロ吐いていた。
確かにこれではしばらく何も食べたいとは思わないだろう。
「じゃあこれ渡しとくからさ、酔いが落ち着いた頃に食べなよ」

俺は取り敢えず弁当の入った手提げを渡し、その場に座り込む。
さすが漁船の船着場だけあってかなり見晴らしがいい。
少し魚臭いけれど、それでも塩の匂いが混ざって不快なものではなかった。
「長谷センパイ、さっき皆殺しセンパイと一緒に近くの堤防にいましたよね」
「すごいね、海の上から見えてたんだ」
さすが乾さんだ。
乾さんは俺の横に若干ふらついた足で来て、同じく腰掛けた。
「何を話してたかとか聞こえてたり？」
「まさか、そこまで人間やめてないっすよ」
互いに笑い合う。
まぁそりゃそうか。流石に海上で遠く離れた人間の声が聞こえるとか人間超越しすぎだ。
それでもマキさんなら出来そうなイメージあるけど、そこは本人には言わないでおこう。
「でも、何話してたかは半分知ってますよ。
辻堂センパイと皆殺しセンパイの決着の事っしょ？」
「・・・・・・本当に半分判ってるのね」

何故わかるとかは聞かなくてもわかる。
多分辻堂軍団を介して既に二人がやりあうことは噂になっているのだろう。
湘南の不良の顔である二人の喧嘩だ、それこそ今日だって凄まじい人だかりが出来るに違いない。
「で、見にいかないんすか？」
俺の渡した手提げに入れた水筒を取り出して乾さんはその中の緑茶を飲む。
「見に行こうとは思ってる」
だが思ってるだけだ。
その喧嘩の理由を俺はなにもしらない。
だから俺は二人の喧嘩に口出しはしないし、どちらの応援もしない。
大切な人であるマキさんと愛さんのどちらかに肩入れするのであれば、俺はむしろ両方とも肩入れしないスタンスだ。
そんな曖昧で中途半端な俺が二人の喧嘩を見てどうするのか。
何の為に喧嘩するのかも判らない、どちらに肩入れすればいいのかも判らない。
判らないだらけ俺が二人の喧嘩を見ていったいどうするというのか。
「ただ、腰が重くてね。
ちょっとここから動けないんだ」

乾さんはよくわからない顔でお茶を飲みながら目線だけで俺を見る。
「乾さんはなんで二人が今日喧嘩するのか知ってる？」
「知りませんけど心当たりはありますよ」
彼女はコップの中身をぐいっと一気に飲み干し、一息つく。
そして僅かな間を置いた後、俺の方に顔を向けた。
「知りたいっすか？」
多分、知りたいと言えば彼女は教えてくれる。
ただ、俺はその問いに頷けなかった。
「いや、いいよ。
それは自分で考えることな気がする」
ただ単純にどちらが強いかを明確にするため。
そんなシンプルな理由でない事は明らかなのだ。
それだけわかれば充分なのかもしれない。
「そっすか」
互いに何も喋らなくなる。
何もせず、動かず、無意味に海を俺達は眺め続ける。
遠くにある船の汽笛の音。波の音。漁師さんの声。

様々な音が入り乱れているのに、妙に俺は静かな感じがした。
そうしてどれだけ時間が過ぎたのだろう。
少なくとも十分以上は過ぎたはず。
先程いた人の姿はなくなり、船も見えなくなった。
多分、そろそろ愛さんとマキさんの喧嘩が始まる時間だろう。
未だ俺は二人の喧嘩を見に行く決心がつかない。
どうしたものかと悩む。
だが、そんな堂々巡りに入りそうになった瞬間、腕を横から軽く引っ張られた。
「さて、そろそろ行きましょうよ長谷センパイ」
酔いも大分マシになったようだ。
乾さんはさっきより幾分改善したような顔で俺を見つめる。
「どこにかな?」
「お二人の所っすよ」
「何故に」
いや、それすら愚問だったこれは。
乾さんにとっても愛さんは特別な存在なのだ。
それにもしかしたら辻堂軍団は全員揃って見るような手はずになっているのかもし

れない。
「だって、行きたそうにしてるクセに長谷センパイは他人にでも言われないと最後までここにいそうですもん」
行きたそうにしている？　俺が？
全然自分のことなのに気づかなかった。
「長谷センパイ。長谷センパイがどう思おうとあのお二人にとって長谷センパイは特別なんです。
だったら喧嘩が終わって、ボロボロになった時に会いたい人はやっぱり長谷センパイなんすよ」
乾さんはこの細腕のどこにこんな力があるのか分からないほどの腕力で俺を引っ張る。
「どちらが大切だとか、どちらに声をかければいいか。
そんなのはその時に考えりゃいいじゃないっすか」
俺はその力に抵抗せず、大人しく立ち上がった。
そして引っ張られるがままに歩み始める。
「何も言葉にしなくても、お二人にとって長谷センパイの姿が見える。
それだけで長谷センパイが見に行く意味はあると思いますよ」

「・・・・・・よくわからないよ」
自分の過去すら満足に思い出せず、喧嘩の理由すら判らず。
挙げ句の果てに未だマキさんとの約束すら思い出せない。
こんな俺が今二人の前に行っていいものなのだろうか。
そんな迷いがあった。
しかし乾さんは少し困ったように俺を見たあと、一度目を閉じて少し笑った。
「もしセンパイがどうしようもなく困ってて、それでいてどうしようもない事になったとして。
それでも長谷センパイは諦めずに頑張っているとシチュエーションを仮定します。
その時に何も手伝えないけど、あずが長谷センパイの頑張りを近くで見てたらどう思います?」
想像する。
多分、その時に俺は。
「もっと頑張ろうとするだろうね」
「そう思ってくれて嬉しいっす」
乾さんは心底嬉しそうに笑う。
「お二人にとっても同じことっすよ。

長谷センパイが何をするまでもなく、ただ姿を見せてくれるだけで意味はあります」
そういうものなのか。
いや、確かに今乾さんの言った仮定を考えればそうなのだ。
俺だって二人にとっての特別な位置にいる自覚はある。
だったらそうなのかもしれない。
「乾さん、誰かに俺を連れて行くように言われたの？」
俺は決心して乾さんに手を引かれずとも自分で歩み始めた。
「ふふん。なんで自分が長谷センパイを焚きつけてるか、知りたいっすか」
俺は大人しく頷く。
それを確認した乾さんは僅かに悪そうな顔をして言った。
「お二人に貸しを作るためっすよ。
あの人達とは長い付き合いになりそうですし。
因みに喧嘩の結末なんてどうでもいいなんて思ってたりもします」
相変わらず腹黒い上に計算高い子だった。
でも、不思議だ。
その腹黒さも以前までのような人に不快感を与えるものじゃない。
単純にいたずらっ子を見ているような、そんな微笑ましさがあった。

「じゃ、行きましょうよ」
「うん」
乾さんは再び俺の手をとって歩き始める。
俺はその手を受け止めた。

陽は登りきり、時刻は正午となった。
既に湘南は桜が咲き誇り、多くの花見客がいる。
だが、その花見客以上に数多の不良がいた。
湘南中の、それどころか他の県からわざわざ来たのであろう見慣れない不良の姿さえある。
その不良たちは弁天橋付近に固まり、円を組むように集まる。
その円の中心には何がいるか。

湘南の不良における顔。
圧倒的な知名度と実力を誇る最高の不良である二人がいた。
「随分と集まったもんだ」
マキは僅かに鬱陶しそうに周りを見渡す。
それをみて愛は少し困ったような顔をした。
「アタシがクミに今日のこと言っちまったからな。
そこから広まったのかもしれねぇ」
「随分口の軽い舎弟を持ってんだな。
やっぱ私はそんなの抱え込むよりかは一人でいる方が楽だ」
マキは視線を外し、愛を見る。
その視線は鋭く、大抵の人間はそれを感じただけで恐怖を覚えるだろう。
しかし愛は一切の反応を示さない。
それどころか普段となんら変わりない態度を崩さない。
「アタシだって群れたくて不良になったわけじゃない。
気がついたらアイツ等が付いてきてただけだ」
愛自身にも圧倒的なカリスマはある。
本人がその気がないにもかかわらず気がつけば彼女を慕う舎弟が何十人もできるよ

うに。
それこそ愛自身がやる気をだせば江乃死魔のように凄まじい数の組織を作ることも可能なのだ。
二人はもう一度野次馬達を見渡す。
そして互いの目当ての人物がいないことを確認し、僅かに寂しげな顔をした。
「・・・・・・警察とかは恋奈が手を回してくれてる。
しばらくはこの騒ぎを聞いても手を出してこないんだとよ」
「へぇ。じゃあここらへん一体を滅茶苦茶にしても大丈夫ってわけか」
互いに構えを取る。
梓のときとは違い、愛は最初から本気で戦うつもりだ。
グローブをはめ、構えの姿勢を撮り、僅かに腰を落とす。
マキも同様にファイティングポーズともリラックスした姿勢とも違う、独特の構えをとる。
「辻堂、この喧嘩で私達の関係も終わる。
次の機会はもうない。悪いけど私は勝ち逃げさせてもらうぜ」
薄く笑い、凄まじい殺気を纏うマキ。
「そうかよ。普通ならここは言い返す所なんだろうけど、生憎とアタシは喧嘩の前にそ

ういう挑発はしねぇ」
相反するように同格の闘志を放つ愛。
どちらもが今にも踏み込まんとする雰囲気を醸し出しながら睨み合う。
「そういうのは決まって負けるやつが言う前口上だからな！」
「上等だ！」
堰を切ったように互の距離がゼロになる。
僅か瞬きする間に数メートルの距離を埋め、一瞬で肉薄。
体当たりでもするのかと思った途端、その走る勢いのままに拳を相手へと向ける。
「ダラァアアア！」
予定調和のように先攻はマキが取った。
マキが全ての攻撃を愛よりも先に繰り出し、愛はその攻撃を全て叩き落とし、尚且つ防ぎ殴り返す。
「相変わらず喧嘩狼さんは消極的なようで！」
既に人の動体視力ではとてもではないが追いつけない蹴りや拳を愛に叩き込まんとする。
しかしそのどれもが愛に一度もクリーンヒットする事はない。
数秒のあいだに数え切れない連打を放つ人外であるマキ同様、愛も人外の強さなの

だ。

「アタシはテメェみたいに無駄な事はしねーんだよ！」

マキと愛の攻防を見れば、マキ攻撃は一見ただ速いだけで重さは無いように見える。

だがそれは相手が愛だからである。

マキは愛に蹴りを逸らされ、金網に足がかかる。

この蹴りが人並みのものならば僅かに金網に足がめり込む程度だろう。

けれど――――

「ありえねぇ！」

観客である不良がそう叫ぶ。

当然だ。

マキの撃ち損ないの蹴りは金網をまるで紙を破るかのように蹴りちぎった。

粉砕や撃ち飛ばすならまだわかる。

しかしマキの蹴りはその想像以上に鋭く、金網を破った。

「本当に強い奴は――――」

梓以上の速度で動き、ティアラ以上の怪力で再び愛に連撃を叩き込むマキ。

愛はその全ての挙動を目と肌で見切り、全てを防ぎ続ける。

だからといって愛が防戦一方なわけではない。

愛は僅かに大振りになったマキの蹴りを掴む。
「一撃で決めるんだよ！」
足を掴んだまま一気にマキを引き寄せ、その勢いを最大限に活かしマキの腹部に右拳を叩き込んだ。
まるでチェスや将棋でも指しているかのようなその無駄のない喧嘩の仕方に愛に強さはある。
「ははっ、今のは少し驚いたぜ」
直撃したかと思った愛の拳は僅かにマキに届いてはいなかった。
寸前の所で愛以上の反応速度の見せ、手でその拳を受け止めた。
けれどその威力は凄まじく、マキですら手が痺れている。
愛とマキは仕切り直すように、距離を置く。
再び構え、睨み合う。
このまま膠着するのだろうかと周囲は思ったが、マキだけはそれに沿わなかった。
「じゃあちょっと攻め方変えてみるか」
愛から視線を外し、周囲の不良の群れに突っ込む。
突然の動きに的となった不良はわけがわからない。
「ちょっとコレ借りるぜ、帰ってくるかはわかんないけどよ」

「な、ぐほ!?」
その不良が持っていた木刀を奪い取る。
瞬間、愛に視線を移し肉食獣のような大胆かつ鋭い動きで肉薄。
手に入れた木刀を振りかぶる。
「そんなチャチなオモチャがアタシに通じるとでも――――」
「思ってねぇよ」
愛は冷静にその木刀を叩き折ろうと拳を合わせる。
その動きを尋常ではない動体視力で看破したマキは木刀を愛から逸らし、代わりに蹴りを叩き込んだ。
「んなッ!?　ぐぁ！」
愛を超える速度で動くマキ。
愛のワンアクションより僅かに速く動くマキはこのような駆け引きすら無視する動きをする。
横腹に蹴りを直撃した愛はダメージを感じさせない動きで続く追撃を全て弾き落とす。
「お返しだ！」
「つぅ。くそ」

攻撃を落とすと同時に愛はマキの胸に拳を入れる。
僅かに苦しげな表情をするもマキは攻撃の手を休めない。
「ついでにコイツも壊させてもらうぜ」
マキが手に持った木刀を握り、そのまま尋常ではない握力で握り潰す。
握力のみで破壊された木刀はそのまま地面に落ちた。
それをみたマキは即座に残ったグリップ側の方を投げ捨て、再び素手に戻る。
再び始まる既による拳による打撃戦。
単純に肉体スペックのみを駆使して戦うマキに対し、冷静にカウンターを狙う愛。
どちらがクリーンヒットを出しているのかといわれれば愛の方が確実に堅実にマキにダメージを与えている。
「はっ、いいねいいね！
これでこそ喧嘩だ、ノってきたぜ！」
「・・・・・・くっ、まだ速くなんのかよ。化け物が」
徐々に、徐々にだが喧嘩が続くに連れてマキの速度や拳の重さは増してきていた。
最初の時と比べれば明らかに違う。
その異様な肉体スペックに愛は徐々に押され始める。
最初は愛が三発マキに攻撃を叩き込むあいだにマキは愛に四発攻撃をする程度の差

だった。
しかし今は愛が一発攻撃する間にマキが二発攻撃をする。
手数に僅かな差があるばあい、乗計算のように手数は減るものなのだ。
故に愛は最初のころ以上に防戦一方に入る。
「オラオラッ、少しは攻めてこいよ！　退屈しちまうだろうがよ！」
一方的に攻撃をするマキ。
次第に愛ですら反応できないほどの速度にギアを上げ始める。
数発、カウンターを仕損じた愛に直撃を入れ接戦を壊し、自身に有利な状況になった。
けれどそれを許す愛ではない。
既に湘南で並ぶものなどいない程の肉体性能になったマキの本当に僅かな隙を愛は見つける。
「調子に乗りすぎて雑になってんだよ！」
「――――づぅ！」
大抵のものなら見つけることすらできない隙、例え見つけたとしても付け入れる事などできないであろう隙を愛は的確につく。
マキはそれには対応できず、鳩尾にとてつもない一撃を貰った。
が、それでもマキは止まらない。

「ぐ、あ・・・・・・それでこそだ！」
　既に興奮しきっているマキは痛みすら曖昧にして、足を止めずダメージを感じさせない。
　再び迫り来るマキに愛は僅かに思案顔を見せた。
「人間とやってる気がしねぇよ。だったら・・・・・・」
　愛は、仕切り直すようにマキから距離を置く。
　マキはそれを警戒して深追いをしない。
　理想的な展開になった愛は表情を引き締め、軽く深呼吸をする。
　そして再びマキに視線を戻し、呟く。
「出し惜しみしてたつもりはねぇけど、やっぱ簡単に行く相手じゃねぇよな。
　こいよ、腰越」
「お望み通りにしてやるよ」
　愛の啖呵に乗るマキ。
　トップスピードで愛の懐に潜り込み、拳を振りかぶる。
　このまま愛が反応出来ていなかった場合、確実にクリティカルヒットし、愛といえどもただでは済まない。
「タイミングがワンパターンでやりやすい」

「うおっ、あぶねえ！」

マキが嫌な予感がして頭を反らすと、その頭のあった所に愛のアッパーがすり抜ける。

もし手を止めて回避に移らなかった場合、倒れているのは確実にマキだった。

「次のテンポは――――そこだろ！」

マキが踏む込むタイミングを先読みした愛は、マキが拳を振り抜くよりも先に殴りかかる。

中途半端に攻撃姿勢に移っていたマキは避けきれず、柄にもない防御姿勢を取った。

「ほらほらどうした！　アタシが守ってるだけだと思ってんのか！」

攻守が逆転し、今度は愛が一方的に殴り続ける。

マキのようにただ肉体性能のみに特化した攻め方とは違い、堅実な攻め方だ。

そのため、マキが反撃に移ろうとすればその反撃に対し的確にカウンターを入れる。

防御に専念すれば防御の隙間を縫って鋭い一撃を入れてくる。

マキはその飲み込まれたような喧嘩に舌打ちをする。

「図に飲んな辻堂！」

完全に開き直ったようにマキは一切の防御を捨てた。

瞬間、数発の愛の拳がマキに直撃する。

マキはそれにすら意に介さず、渾身の一撃を繰り出した。
しかしそれが愛に通じる事はない。
「そんな見え見えの玉砕戦法がアタシに通じるかよ」
マキの殆ど肉眼では捉えられない拳を予測のみで回避し、同時に掴む。
そして地についたマキの足を払い、宙に浮かす。
「ち、これはヤベェな」
マキは素早く受身の姿勢を取る。
だが間に合わない。
「終わりだ腰越」
愛は一気にマキを地面に叩きつけた。
コンクリートが砕ける音が周囲に響く。
マキは頭から地面に直撃した。
普通の人間ならば即死してもおかしくない威力の投げ技なのだが。
愛もマキも動かない。
「・・・・・・いってぇなオイ」
マキは、顔についた破片や砂を払いながらゆっくりと立ち上がる。
「化物かよ」

愛も今ので倒せるとは思っていなかった。
しかしまさかこんなにダメージが無いとも思っていなかった。
見た所マキは足がふらついているものの、それでも闘志や殺気は微塵も衰えていない。
いや、それどころか
「・・・・・・ッ!?」
愛は慌ててその場を飛び退いてマキと距離を置いた。
一瞬、マキの方から得体の知れない気配を感じたのだ。
なんだ今のは。
今まで何度もマキと対峙したが今ほどの寒気は感じたことがない。
愛は冷や汗を流し、未だ頭を抑えたままのマキを警戒する。
「辻堂、この喧嘩はどうやら私の負けみたいだな」
「何?」
マキは動かない。
ただ、それでも愛にはマキの方から隙はおろか、攻め入るタイミングすら見えない。
「ここまで来てわかったよ。このままいくらやり合った所で今みたいな事の繰り返しになるだけだ。

むかつくけどそれは認めてやる」
徐々にマキは顔を隠していた手をのける。
愛はどれほどのダメージが残っているか、彼女の顔色から確認した。
見れば額からは僅かな血を流している。
けれど疲労を感じさせないその瞳。
「腰越マキは辻堂愛に負けた。
誇れよ辻堂、めでたくお前は三大天の頂点に達した」
まるで愛に勝ちを譲るような事をいうマキ。
だが愛は確信していた。
このまま腰越マキが終わるわけがない。
「どういうつもりだ？　まさかお前が相手に勝ちを譲るタマじゃねぇだろ」
警戒を続ける愛。
当然だ、こうしてマキは喋っているが、そのつど徐々にマキの纏う存在感が増していく。
「いいや、三大天の喧嘩はこれで終わりだ。
お前の勝利で腰越マキと辻堂愛の因縁はおしまいだよ」
マキは額の血を払い、完全に立ち上がり愛と目を合わせた。

「だから次の喧嘩に移るぜ」
瞬間、マキの雰囲気が変わる。
「次は極楽院マキと辻堂愛の喧嘩だ」

拙い、得体の知れないプレッシャーを腰越から感じる。
あいつがいった極楽院ってのが何なのかはわからない。
しかし、確実なことは私の知らない底をアイツが見せ始めた事だ。
「腰越マキの高校三年間はもうこれでおしまいだ。
喧嘩ではお前に敗れ、男の取り合いですら負けた」
腰越はゆっくりと息を吐く。
構えすら取り払い、そこに自然に佇む。
「去年の夏に腰越マキは長谷大に恋をした。
辻堂、そいつをお前から奪おうとしたけどやっぱ無理だった。

だから八つ当たりのように今日お前に喧嘩をふっかけたんだ」
更に大きく息を吐く。
そこで不自然な点に気づく。
既にこの時期は春が始まり暖かくなっているのだ。
その為いくら息を吐いてもそうそう白い蒸気はでない。
晴れた今日ならば尚更だ。
だというのに、腰越の吐く息は白くなっていた。
「でもな、それすら返り討ちだ。完敗だ、私じゃお前に何一つかなわない」
腰越の周囲の空気が僅かに揺らいで見える。
同時に、確実にあいつの纏う存在感と殺気が跳ね上がっている。
「じゃあな、次は昔の私の相手してもらうぜ。
子供の頃の、結婚の約束までしたマセガキを奪われた極楽院マキの相手をよ――――ッ！」
腰越の姿が消える。
有り得ない、今までのアイツのトップスピードですらアタシには見えずとも感じられていた。
だからここまで持って来れた。

だというのに、今アイツがどこにいるのか全くわからない。
姿を必死で探っていると、突然目の前に腰越が現れる。
「ガアアアアー！　遅せぇんだよ！」
「ぐぁは!?」
全くその姿を捉えられない。
まともにその拳をもらい、たたらを踏む。
だがそこで下がってはジリ貧だ。
必死で足に力を込め、踏ん張る。
「奥の手ってわけかよ！」
確実に今の精神統一のような行為で腰越はリミッターを外している。
化け物じみた身体能力が更に圧倒的に増している。
元々アタシと腰越は僅かだが腰越のほうが肉体的な強さでは上回っていた。
しかしそれでも技術や経験でアタシの方が喧嘩での強さは先程まで勝っていた筈なのだ。
「オラァアアアアア！」
アイツが一度拳を振る姿が見えたら次の瞬間アタシの体に数発の拳が降り注いでいる。

明らかにアタシの反射能力を凌駕しているのだ。
どうにかしてカウンターを狙おうとする。
「ちぃ、だったら！」
敢えて防御を捨てて完全なカウンター狙いに移る。
腰越はそれすら意に介さず、再び攻撃を仕掛けてきた。
その手が速さでぶブレたのと同時にアタシの腹や顔に数発の拳が直撃。
だがタダでは終わらせない。
食らった箇所に手を伸ばす。
当たったという事は、その位置に拳は在るはずなのだ。
当然やはりそこには腰越の手があった。
「とったぜ！」
その手を引き、体をこっちにもってこさせる。
同時に合わせるように拳を振り抜いた。
「いちいちチマチマと、小せぇ喧嘩してんじゃねぇ！」
「がはッ・・・・・くそったれ！」
その掴んだ手を馬鹿力で振り払われ、カウンターの手はあっけなく躱される。
それだけならマシだ。

避けるついでにアタシの体中に数発の打撃が入る。
ついていけない。
こんなの初めての経験だった。
普段の喧嘩でアタシや腰越と退治している相手の立場になった気分だ。
根本的な肉体性能に手も足も出ない。
まるで対抗策が出ない。
「ダァりゃあああああ！」
「ぐあぁぁぁ！」
次元の違う速度で動かれ、一撃で気をやりそうになる重さの攻撃が続けざまに入る。
正しく手も足も出ない状況だ。
不意に首を掴まれる。
「潰れちまえ！」
「ガァは!?」
そのまま勢いをつけて後頭部から地面に叩きつけられる。
受身すらとる余裕がない。
防御すればそこが怪力でこじ開けられ、直撃。
反撃すればその反撃を躱され倍返し。

全ての行動がこちらのダメージになる。
後頭部を強打し、意識がとびかける。
しかしこのままノーガードでは拙い。
追撃を警戒し、腕で頭を守る。
「はぁ・・・・・・・はぁ」
息を切らせ、ダメージに耐えながら頭を守り続ける。
しかし追撃は来ない。
何故かと理由を探るように目を腰越に向ける。
その視線の先には殺意を滾らせ、けれど、何か痛みに耐えながらアタシを睨む腰越がいた。
「ぐ、はぁ・・・・・どうした、まだアタシは動けるぞ」
精一杯の挑発をする。
まだアタシは負けていない。
こいつの動きにまるで対処できないが、それでもまだやり返す事を考えている。
負けるつもりなど微塵もない。
「・・・・・・なぁ辻堂。
不良同士の喧嘩ってのは必ず得るもの失うものがあるよな」

倒れるアタシを見下ろしながら、腰越は未だダメージを見せない様子で言う。
「ああ、勝ったやつが負けた奴の全てを好きなように奪い取れる。それがルールだ」
誰が宣言するわけでもない。
無論奪うものによっては罪がついてまわるかもしれない。
けれど負け犬が勝者の言葉に逆らう資格などない。
腰越はアタシの肯定の言葉を聞き、一度目を閉じる。
「じゃあ私が勝った時にお前から奪い取ろうとするものを今言うぜ」
嫌な予感がする。
胸を焼き尽くすような、得体の知れない不安を感じる。
「お前の大切で大好きな長谷大、貰うぜ」
「――――なに？」
その言葉をアタシの頭は理解出来なかった。
「返せよ。
アイツは元々私のものだったんだ、お前のものじゃない」
返すとは一体どういう意味なのか。
真意はわからない。

ただ、その言葉を聞いた瞬間理解した。
この喧嘩で負ければアタシは大を腰越に奪われる。
その事を理解した瞬間、頭が真っ白になった。

「ガアアアアアアア！」
「やる気になったか、上等だ！」
マキの言葉を聞いた瞬間、愛は起き上がりマキに殴りかかった。
だがダメージが響いているのだろう、その足取りや拳の速度は今のリミッターを外したマキには酷く遅く見える。
マキは躱すまでもなく、数発カウンターのように拳を叩き込む。
「ぐうぅぅぅ！」
全てが直撃し、愛は崩れ落ちる。

肉体スペックは既に圧倒的に差が開き、技術も使えないほどにダメージを蓄積させられた。

既に愛がここから勝つにはよほどの理由がなければならない。

「辻堂、お前は今が幸せだろう。

毎日が輝いて見えるだろう？」

座り込み、動けない愛をマキは見下す。

「私はそんな幸せそうなお前を見ているとどうしようもなく辛いんだ。

今すぐ全てをぶち壊して、何もかも嫌になって、死んでしまいたくなる」

マキは酷く悲しそうな顔をする。

誰もがそのマキの言葉に耳を向けた。

「私が忘れさえしなければ今私はお前のように笑えてた。

毎日が輝いて見えてたかもしれない」

マキの胸にあるのはどうしようもない後悔ばかりだった。

長谷大と辻堂愛が仲良くしているのを見るたびにマキは己を責め、後悔し続けている。

「約束までしてたのに。あんなに嬉しかった約束なのに、なんで私は忘れたんだろうな」

愛はようやくマキが言っていた約束の詳細を理解し始めた。

はじめはマキと大が『家族』になる約束だと思っていた。
だから愛はその約束を邪魔するつもりもなかった。
だが、おそらくその約束はもっと深い意味があった。
「私がいる筈だった場所にお前がいる。
けど私はお前を責める資格はない、全ては約束を忘れた私の責任だからだ」
マキは今まで一度たりとも約束を盾に愛に迫った事はない。
マキ自身もその行為に筋が通るはずがない事を理解しているからだ。
しかしマキは今日、全てを解決するための行為を選んだ。
「だから奪う。
お前からダイを、本来私が居たはずだったその場所を」
力で奪う。
喧嘩で略奪する。
不良として最後の喧嘩でそれを得ようとする。
けれど、その選択はマキ自身辛いものだった。
例えこの喧嘩でマキが勝ち、愛から大を奪ったとして果たして大の気持ちはどこにある。
愛と強制的に別れさせられ、傷心した大がその原因たるマキを愛せるか。

そん筈がない。
マキはただ愛と大の関係を破壊するだけで誰もが悲しむ結末しかない事は理解しているのだ。
だから勝ちそうな今でもまるで喜んでいない。
倒れた愛を追撃することもない。
「・・・・・嫌だ、大は渡せねぇ」
愛は、マキのその独白を聞き呟く。
「大はアタシの大切な男だ」
愛はゆっくりと立ち上がる。
そして真っ直ぐ、愛を知る者が今まで見たことがない程の必死な形相でマキを睨む。
「何が過去の約束だよ、何が本来居たはずだった場所だよ」
マキはゆっくり間合いを詰める愛を黙って見る。
愛はふらつく足取りでマキの目前にたどり着き、襟を掴む。
「お前が忘れた場所にアタシは座った。
そこは何よりも暖かくて、本当に幸せな場所だった」
既に力はその体には残っていない。

だが、どれだけマキに殴られ続けようとも一切気持ちはくじけていない。
愛はその力ない拳でマキの顔を殴る。
マキはその拳を防御すらせず甘んじて受けた。
「それを今更、羨ましいから奪うだと。
思い出したから返せだと、ふざけんな！」
愛はただ必死に殴る。
喧嘩狼の見せる普段の一方的で派手な喧嘩じゃない。
ただひたすら泥臭くて、女々しくて、見ていて辛いものだった。
「・・・・・・黙れ」
マキは静かな怒りを秘めた声でつぶやき、愛の顔を殴る。
その途轍もない威力を込めた拳を直撃し、愛は僅かに動きを止める。
しかしそれでもマキを殴ろうとする拳を止めない。
「その場所はもうアタシの場所なんだよ！
もうアタシはそこから離れられないほど大切になった所なんだよ！」
「煩い、黙れ！」
ひたすらに、愛とマキは殴り続ける。
互いにガードを完全に捨て、単純な泥仕合だ。

「だったらお前もわかるだろうが！　その席に座るお前を私がどんな気持ちで見ているか!?
羨ましくて、妬ましくて、眩しくて・・・・・・それは私も手に入れられたものなのに！」
マキは本気で、一切の加減なく愛を殴る。
しかし愛は倒れない。拳を止めない。
「お前だってわかってるだろう！　今アタシがいる場所がどれだけ大切な場所か！
お前だからこそわかるだろ！」
愛はどれほど殴られても動きがにぶらない。
それどころか思いを吐き出せば吐き出すほどその拳に重みが増し始める。
一撃殴られれば同じく一撃殴り返す。
それを繰り返す程に彼女は強くなっていく。
次第に、マキの方がダメージにより動きが鈍くなっていく。
肉体面も、思いも強さを増し続ける愛に対し、両方が弱まり始めるマキ。
次第に有利不利などなくなり、互いに棒立ちする相手をひたすらに殴るだけの喧嘩に変わり始める。
「思い出すんじゃなかったと何度も思った。

あんな約束するんじゃなかったと、私はずっと考えてた！」
愛もマキも互いに倒れない。
もし倒れるのだとしたら、どちらかの気持ちが折れたとき。
もしくはどちらかが相手の気持ちを汲み取ったとき。
「あの約束のせいで私は前に進めなくなった。
いつまでも女々しくお前らに嫉妬して、それがどうしようもなく私らしくなくて」
マキが最初の時と比べ見る影もなくなった威力の拳を愛に叩き込む。
「それでも諦めきれなくて、思い出を捨てきれなくて」
涙を流しながら、生の感情をむき出しにして愛を責める。
「そんな事になるくらいなら、あんな約束をするんじゃなかったって何度も後悔したんだ！」
「くっ、それでもテメェはその気持ちも約束も捨てきれないんだろうが！」
愛はマキを殴り返す。
しかしマキはダメージを一切意に介さない。
「そうだ！　それでも私はダイが好きだから、私が私らしくなくなる程に愛してるから！
だから私は前に進めないんだ！」

必死に、心に溜まった泥を吐き出すように叫ぶマキ。
それを真正面から受け止める愛。
最早互いに引くに引けない所まで来た。
自分の全てをぶつけ、相手の全てを受け止める。
それは最早喧嘩と呼べるものではない。
「だからお前を倒す、お前からダイを奪う、その居場所を私が奪う！」
どうしようもないから、だから愛の全てを奪う。
その子供の癇癪のような理由がマキは愛に喧嘩を叩きつけた原因だ。
マキ自身も破綻している理論になっていることは理解している。
それでも、それを見て見てないふりをしなければどうしようもない所まできていたのだ。
「辛いだけで、私を束縛する約束も、それに関わるお前らも全部台無しになっちまえ！」
私はお前から全てを奪う、ダイが悲しもうと、もう私は我慢できないんだ！」
マキは顔を歪め、涙を僅かに零す。
それは愛に殴られた痛みによるものではない。
取り戻せない居場所、変わらない現実。
自分らしく在れない自分を悲観しこぼす涙。

しかし愛はその涙を見て、それでも尚拳を止めない。
「アタシを倒そうと思えば、チャンスなんて何度かあっただろう！
本当にそう思ってるならどうしてその時にアタシを仕留めなかった!?」
愛は気づいていた。
マキの真意に。マキ本人すら気づいていないその気持ちに。
「・・・・・・黙れ」
子供のように言うマキ。
「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！」
泣き喚くように叫び、愛を殴る。
「お前に何がわかる！
今が幸せで、未来だってきっと満ち足りてるお前に私の何がわかる!?」
完全に嫉妬に狂ったマキ。
だが愛はそのマキの姿を一笑に伏す事など出来るはずもなかった。
「わかるよ。だって、もしかしたらアタシとお前の立場は逆だったかもしれないんだから」
愛は僅かに歯を食いしばり、必死に足と腰に力を込め殴り返す。
既に意識は鮮明ではなく、いつ倒れてもおかしくはない。

ただ、想いの強さと大への執着する執念だけで立っていた。
「アタシだって二度大に別れを切り出した。
もしその時、お前に大が靡いていたらそこでお前とアタシは逆転してたんだ」
あの嵐の日。
初めて愛が大に別れを切り出したあの日。
そこで大が別れを持ち出した愛に頷いていた場合、恐らく傷心した大をマキは放っては置かなかった。
二度目の喧嘩別れした日、大はその後もマキの誘惑を振り切っていたが、
大が愛に未練を残していなかったらマキの物になっていた。
愛とマキの立場が逆になる機会なんていくらでもあった。
だから愛はマキの吐き出した言葉を切って捨てることなどできない。
「もしお前が大と付き合っていて、アタシがそれを見せられる側になった時アタシはどうするんだろうな」
想像つかない。
マキも今が余りにも辛すぎてその光景が見えない。
「今がこんなに幸せで、胸が張り裂けそうなくらい満たされるこの気持ちはどんなものに変わるんだろうな」

「・・・・・・・辻堂」
愛は自分の胸を握り締める。
その想像した光景は余りにも辛い。
「だからアタシはそんな事になりたくない。
アタシは今いるこの場所にしがみつく。それがどんなにみっともなくて惨めに見えても」
歯を食いしばり、拳を握る。
対してマキは手を解き、力なくただ立っているだけ。
あえてそうした。
マキはもう、既に闘志など残っていない。
もとより、自身の我侭以上に大へ幸せになって欲しいという願いの方が強かった。
だからこそ最初は極楽院の名を出さず、腰越マキとして喧嘩をし、そこで負けたら大人しく引き下がるつもりだったのだ。
それが突然大が過去の話を切り出したから、だから引けなくなった。
「・・・・・・辻堂、この辛さはお前が思っているより凄いぜ。
この私が私らしくなくなるくらいなんだ、想像できるかよ」
まだ体は動く。

やろうと思えばもう一度リミッターを外せる。
けれどマキはそうしない。
ただ、涙を堪え、いつものように暴虐舞人のような態度で笑ってみせた。
「想像できねぇよ。そんな痛みに耐えるお前を心底尊敬する」
相手の心を汲み取ったのはマキだった。
愛には今、居場所を取り戻すことのできなくなったマキの気持ちなど完璧に理解できるはずもない。
例え愛自身がその気持ちを汲み取ろうとしたところでそれを完全に把握できるわけもない。
今が幸せな者に、不幸せな者の気持ちなど全て汲み取れるとは思えない。
だが、得られなかったマキは違う。
得られなかった者だからこそ、失う事を恐れる愛の気持ちを理解できる。
失ったとき、どんな気持ちになるかを理解できる。
だからマキはもう拳を上げない。
「あ〜あ、しゃあねえ。じゃあ今回は私の負けにしといてやるよ」
マキは辛い感情を全て打ち壊し、精一杯の空元気で笑ってみせた。
「・・・・・・ありがとな、姉ちゃん」

「ちっ、まだテメェは長谷愛じゃねぇだろうが」
愛の渾身の一撃を、マキは一切避けようとせず甘んじて受けた。
そして意志の力すら捨て、そのまま倒された。

意識が飛ぶ瞬間、マキは昔の事を思い出す。
『ばあちゃんたちが許してくれたら、うちにおいでよ。
一緒に家族になろう』
その言葉は何よりも嬉しかった。
『いいの？』
『もちろん』
だから私は喜んで頷く。
大切な家族が増える。
自分を理解してくれて、大切に思ってくれて、一緒にいて幸せだった彼とずっと一緒にいられるのなら。

それはきっと幸せなことなのだ。
『うん。約束、ね』
『うん。
・・・・・・あ、手を貸して』
『なぁに?』
『私、長谷大は、あなたを姉とし・・・・・・』
ここで少年は思い出す。
『そうだ。
姉ちゃん以外とは姉弟になっちゃダメなんだっけ』
少年は困ったようにマキに質問した。
『姉以外で家族って何がある?』
『んー?
お嫁さんとか』
『じゃあそれで。私、長谷大は――』
『マキちゃんをお嫁さんとし、良い時も悪い時も、
富めるときも貧しいときも、病めるときもまた健やかなる時も、
マキちゃんを愛すると誓います』

その約束は何よりも暖かくて、幸せな気持ちをもたらしてくれる筈だった。
けれど、その約束を忘れ、思い出した時には既にそこには別の人間がいた。
それはとても辛いことで、マキを思いつめさせるものだった。
しかしマキは愛との喧嘩でようやく踏ん切りをつけた。
納得なんて出来るはずない。
だけどそれでもその約束に縛られて誰かを不幸にするつもりもなくなった。
自分の好意を諦めるつもりもない。
ましてや愛の恋路を応援するつもりなんて欠片もない。
「ダイ、私は・・・・・・」
ただ、約束に縛られず、新しい席を自分で作ろう。
マキはそうやって踏ん切りをつけた。
「・・・・・・畜生」
もう涙は出ない。
吐き出すものもない。
約束に囚われた今までの自分がいるのなら、別の自分を作ればいい。
でもそれは簡単な事ではなくて、未だ納得しかねる自分には辛くて。
「マキさん！」

不意に、泣き出しそうになるマキに聞きなれた声が聞こえた。
既にマキには長谷大の声に反応する体力すらない。
そもそも今自分が夢の中にいるのか起きているのかすらわからないのだ。
けれど何故だろう。
彼の声を聞いた瞬間、あまりに辛かった気持ちもどこかに吹き飛んだ。
こちらに駆け寄る必死な彼の姿がなんだかおかしくて、泣きたい気持ちもどこかへ行った。
マキはそんな彼の姿から目を外して空を見る。
その空はどこまでも澄み切っていて。
また新しい飛行機が通った後なのだろう、濃くて綺麗な飛行機雲が一本あった。
ああ、そうだ。
昔、ダイと約束したときもこんなワクワクして幸せな気持ちだったな。
そうマキは思って、それがとてもおかしくて。
マキは少し笑った。

エピローグ
２９話：純愛ロード

桜は咲き、別れの三月は過ぎ、出会いの四月となった。
もう見ることができなくなった顔、新しく馴染みになる顔。
この三月と四月の境界、それは人に様々な感情を引き出させる。

「ヒロー、お姉ちゃんちょっと呼び出しくらったから先いってるわねー！」
「はいはーい、事故らないように気をつけるんだよ」
俺はコーヒーを飲みながら慌ただしく身支度し、幾分早い出勤をする姉の姿を見る。
一応朝食も摂ったし、身だしなみも完璧。
後は猫をかぶれば完璧だ。
ウチの姉はいちいち隙がない。
化粧も薄く決め、鏡で最終チェック。

どうやらノリもいいようで機嫌もいいようだ。
「よし完璧！　それじゃヒロ、新学期早々遅刻なんてしないようにね」
「こんな早い時間に起きてる俺が遅刻なんてするわけないって」
見ればまだ6時半。
まだまだ登校には余裕がある。
取り敢えず俺は今日の新学期学力テストに備え鞄に入れておいた教科書を開く。
「まぁ今更やっても変わらないかな」
開いてすぐ閉じた。
今日までの間、つまり春休みの間に一応真面目に勉強はしていたし滅多な点数は取らないだろう。
愛さんや乾さんと勉強会も定期的にしているし正直学力は目標の大学合格圏内にいけそうだ。
大学といえば、今日はマキさんも進学した大学へ初登校の日である。
しかし大学に制服などない。
故に昨日はマキさんや愛さん、乾さんと片瀬さんの四人はマキさんのスーツ探しに街中を駆け巡ったらしい。
出逢えば融合爆発しそうなのが三人揃っているけれど、乾さんが何だかんだで頑張っ

て取り持ちそれは免れたらしい。
　俺は少し用事があって行けなかったけど、マキさんのスーツ姿が見れなかったのは正直残念。
　僅かにある眠気を誤魔化すように瞼を揉む。
　別に寝不足なわけではないのだが、それでもやはり朝は少し眠い。
「何だよ、寝てなかったのか？」
「いえ、少し疲れ目な感じで」
・・・・・いつの間に現れたのか。
　俺の対面する席にマキさんの姿。
　俺が目を揉んでいる間に侵入したのだろうか。
　全く気付かなかった。
「おはようございます、マキさん」
「ああ、おはよ」
　俺は何気なく立ち上がり、事前に用意していたマキさんの分のスクランブルエッグや焼きベーコンなどを温めなおす。
　その際、妙にマキさんは何かを含んだような目つきで俺を見つめ
「・・・・・・相変わらず私が来るかどうかもわからないのに用意してくれてんだな」

マキさんは何か呟いた。
あいにくマキさんの分のコーヒーを淹れてる俺には聞こえなかったが。
ふと、ここで気づいた。
そういえばマキさんはコーヒーはそんなに好きではない。
しくじったかと思い、即座に別のカップを取り出そうとする。
「なぁダイ。このカップにそのコーヒー移してくれよ」
そう言いながらマキさんは手持ちのリュックから少し大きめのマグカップ・・・・・・
というか湯呑を取り出してきた。
「湯呑にコーヒー、新境地ですね」
「別にいいだろ、飲み物そそげりゃそれで」
俺はその湯呑を受け取り、コーヒーを移し替える。
そしてその湯呑を渡す。
マキさんはそれをまじまじと見つめ、すんすんと香りを嗅ぐ。
まるで犬のようなその仕草に俺は苦笑した。
マキさんはそんな俺を軽く睨んだあと、少しだけ口をつけた。
「にっが。やっぱ好みじゃないわ」
「それは残念。コーラもあるんでそっち飲みます？」

やはりマキさんはコーヒーが合わないらしい。
俺は立ち上がって冷蔵庫に向かう。
「いや、いいよ。ダイの淹れてくれたコーヒーだ、全部飲む」
マキさんはそう言って一気にコーヒーをちびちびと飲み続ける。
子供みたいで可愛いな。
俺はテーブルにマキさんの食事を並べた。
ベーコンなどが視界に入るとマキさんは顔を輝かせる。
「いたーきます！」
俺が箸を渡すと同時に彼女は食事に入る。
ガツガツと豪快に食べ、パンをかじる。
あまりに美味しそうに食べてくれるその姿は作った俺の気持ちを嬉しくさせてくれる。
「マキさん、こぼしたりしてそのスーツ汚さないようにね」
「ガキ扱いすんなよな」
見ればマキさんは先日買ったらしいスーツを着ていた。
ただ、どうやら彼女はスカートよりもスラックスの方が相にあっていたようで残念ながら高校生時代のような生足を見ることはできない。

それでもスタイルが凄まじいから抑えきれない胸がスーツを仕上げてて苦しそうに見える。

「・・・・・・ジロジロみすぎだぞダイ。特に胸」

「これは失敬。

それにしてもおっぱいでかいですね、サイズ合ってないのでは」

「男らしいなオイ。

この乳、またデカくなったしもう胸に合うサイズ選んだら今度は裾や袖丈とかがおかしくなるんだよ」

まだでかくなってるのか。

凄いな。

マキさんはスーツを脱ぎ、シャツ姿になる。

純白のシャツにコーヒーをこぼしたら少し拙い気がするのだが、

マキさんに限ってはいらぬ心配かな。

と思った矢先。

「あ、こぼした」

「これは拙いですね、ちょっと待ってて」

コーヒーを数滴シャツにこぼした。

俺は慌てて布巾に水を浸し、マキさんに駆け寄る。
そのままトントンと布巾で叩き、薄めようと必死になる。
が、流石に取れない。
幾分か薄くはなるが、スーツが白すぎてやはりコーヒーの染みが目立つ。
どうしたものかと頭を悩ませていると、不意に上からマキさんの目線を感じた。
何故か嬉しそうに俺を見ていた。
「なんです？」
「べっつにー」
目をそらすマキさん。
どうにも今日のマキさんは考えていることがわからない。
普段から破天荒な人だから読めることの方が珍しいのだが。
「あ～、すいませんマキさん。これクリーニング出したほうがいいかも」
「別にいいよ。スーツ着れば見えない所にわざと落としたし」
「・・・・・・わざと？」
「おっと、たまたまだよ、たまたま落としたんだ」
マキさんは普段通りに見えてあの喧嘩の日以降、何か雰囲気が変わった。
俺を見る目が妙に姉ちゃんと似ているというか、それでいてなんだか悪戯好きな子

供っぽいというか。

何にせよ今日までにも今のようなマキさんらしくないミスをしては俺がそのフォローをすることが多くなった。

本人は毎回ミスしたと言っているが、時々明らかに故意にポシャってるような気がする。

あくまでも俺の勘違いかもしれないけれど。

「ありがとなダイ。取り敢えずそれだけとれりゃ大丈夫だろ」

マキさんはそう言って俺の頭をくしゃっと撫でる。

何だろうな、マキさんが凄く大人っぽく見えた。

あの日、喧嘩で愛さんに負けたマキさんはまるで死んだように目を覚まさなかった。

焦った俺は必死に彼女を抱え、自宅に連れ込んで手当をすることになったのだ。

その際、愛さんも手伝ってくれた。

喧嘩が終わったあと、辻堂軍団に囲まれて賞賛されていたが、愛さんはそれを蹴散らす。

愛さんいわく

『腰越が引いただけだ、勝ったわけじゃねぇ』

とのこと。

それでも周りは愛さんを謙虚だといい、一日にして湘南中に愛さんが三大天の頂点に達したことが話題になった。
「俺はちょっと暇なんでそろそろ行こうと思いますけど、
マキさんはどうします？」
愛さんはマキさんを看病する際、何故か今までにない程マキさんに優しかった。
俺は二人の喧嘩を最後しか見れなかったけれど、その喧嘩の途中で二人はわかり合えたものがあったのかもしれない。
もっとも、目が覚めた途端相変わらず喧嘩を始めてたけれど。
何にせよ愛さんとマキさんの壁は残るにしても、確実に薄くなっている。
「私も一緒に出るよ。
流石に外から戸締りできねぇし」
もう喧嘩は極力しないと決めたらしいマキさん。
でも俺は知っている。というか見た。
殴りかかってきた不良を一撃で屠るマキさんの姿を。
そのシーンを見ていた俺にマキさんはこういっていた。
『正当防衛だ』
正当防衛なら仕方ない。

まぁ、自分から仕掛けなくなっただけ丸くなったというべきか。
「あ、そうだ。これ持っててくださいよ」
「ん、何この鍵？」
「ウチの合鍵です」
俺は前から渡そうと思っていた合鍵を渡した。
それを受け取ったマキさんは僅かに驚いている。
「私はアパート借りたから普通に今は寝床あるぞ？」
へぇ。アパート借りたんだ。
ちょっと意外だった。いや、普通の事なんだろうけど。
「それでもです。マキさんなら安心して家任せられますし、いつだって待ってます」
既に俺にとって彼女は他人ではない。
未だマキさんとの約束は完全に思い出せない。
しかし少なくとも俺とマキさんは家族になるという約束をしたはずだ。
もっとも、その約束にかかわらず俺は思い出す前からマキさんを家族と思っていたわけだが。
「・・・・・いいのかよ、毎晩押しかけるかもしれねぇぞ」
「毎晩来ていただいても結構ですよ」

マキさんは鍵を握り締める。
「ったく、だったらアパート引き払ってこっちに住み込めばよかったかも」
「それもいいですね。姉ちゃんに相談してみましょうか」
「お前は冗談すら・・・・・・いや、そこがダイの良い所なんだろうな。
お前はそのままでいてくれ」
マキさんは鍵をスーツから出した財布のチェーンに引っ掛ける。
マキさんの財布、初めて見た。
「さて、それじゃ行くかな」
「そうですね」
俺は食器を水に浸け、鞄を手に玄関へ向かった。
そこには既に革靴を履いたマキさんが立っていた。
俺はその姿を見て僅かに言葉を失う。
何というか、凄くスタイルが良く同時に格好いい女性であるマキさんがスーツやスラックス着ていると凄く魅力的だ。
できる大人の女性って感じ。
あと
「やっぱりおっぱいでかいですね。あと凄く似合ってます」

「おっぱいのくだり無かったらアリガトって言ってる所なんだけどな」
笑って許してくれるマキさん。
今のはセクハラだった、以後気をつけよう。
俺も靴を履いて、一緒に外に出る。
その際、戸締りは俺ではなくマキさんが鍵を締めてくれた。
「人の家の鍵を閉めるってのも変な気分だ」
「なれて行きましょう」
「そうだな」
見れば庭にはマキさんの相棒、単車ゴルゴム君が置かれていた。
バイク通学らしい、スーツ姿のナイスバディな女性がバイク。
凄くいい。
「それじゃ、ここでお別れですね」
俺はマキさんに別れを告げて登校を始めようとする。
しかし、不意に肩を掴まれた。
「乗れよ、送ってくからさ」
そう言って前に乗せてもらった時につけたダサいヘルメットを渡される。
流石に学校に大人の女性にバイクで送られるってのはどうかと思うが・・・・・・

まぁ今日はかなり早い登校だから人目は少ないか。
「じゃあお言葉に甘えさせてもらいますね」
「ああ、しっかり私に捕まってろよ」

何というか、本当にあっという間だった。
朝早くて道がすいている上にバイクだ。
そりゃ早い。
俺とマキさんはエンジン音響かせるバイクに跨り、稲村学園前に僅かな時間で到着した。
「ありがとうございました」
「おう、また時々こうやって乗せて行ってやるよ」
「はは、何か噂が立ちそうでドキドキですね」
こんな目立つ登校をしょっちゅうしてたら絶対話題になる。
俺はバイクから降り、マキさんにヘルメットを渡す。

マキさんはそれを一旦後ろに置き、フルフェイスのヘルメットを外す。
そして首を振り、少し潰れた髪を払う。
その仕草が妙に格好いい。
「ダイ、校門通る前にちょっとこっち来い」
「はい？」
手招きされる。
俺はなんだろうと思い、素直に近づく。
俺がマキさんの目前に着くと、突然彼女は俺の胸ぐらを掴み。
「ん」
「んむ!?」
思いっきりキスされた。
え、嘘でしょう。ここで？
っていうか何故に？
キスといっても僅かに触れ合うだけのモノで、すぐに唇は離される。
が、俺は突然の事に惚けてしまった。
そんな俺を赤くした顔で笑いかけるマキさん。
「じゃな、また夜行くから」

「あ、は、はい」
そのままヘルメットをかぶり直し、発進するマキさん。
俺は呆気にとられてその場に立ち尽くした。

「今日からまた別のクラスかぁ・・・・・・」
俺は朝早く、まだ先生以外誰も来ていない校舎の中、一人歩いていた。
今日から俺は三年生になる。
それはつまりクラス替えというイベントが起こるということで、今の仲間たちとはお別れすることになるのだ。
無論、俺自身はまだ彼らと一緒にいたい。
委員長や、ヴァン。クラスの男友達とはずっと友達のつもりだ。
けれどクラスが変われば相応に話す機会は減る。
それはとても寂しいことだ。

愛さんだって折角夏から自宅に呼んで素の姿を見せられる友達ができたのだ。
それがお別れなんて辛いだろう。
俺は胸に空虚感を抱きつつ、一年お世話になった教室の前にたどり着く。
もうこの教室に入ることはないだろう。
進級すれば教室も変わる。
何より、俺にとって寂しいことは愛さんと別のクラスになる事だ。
正直心配で仕方がない。
愛さんは孤独に慣れていると自分ではいうけれど、それでも一人より仲間がいるほうが楽しそうなのだ。
けれど、またクラスが一新されれば愛さんが一人ぼっちになる可能性は極めて高い。
委員長や烏丸さん、片岡さんの誰かが一緒のクラスになる事を心から祈る。
果たして自分は誰と同じクラスになるのだろうか。
まだ来るのが早すぎてクラス分けの表は貼り出されていない。
そのためこうしてブラブラと歩いている。
「あれ、ヒロシじゃんか」
「ん？」
不意に声をかけられて半ば驚きつつ振り返る。

すると、そこにはゴミ袋やバケツを担いだクミちゃんがいた。
見た所、辻堂軍団が占拠してる教室の掃除だろうか。
「クミちゃん、今から集会場の掃除かな?」
「まぁな今日は新人も滅茶苦茶くるだろうし、少し気合いれて綺麗にしとかないと愛さん怒っちゃうし」
綺麗な不良のたまり場。
正直未だおかしいと思うけれど、清潔なのは良い事だ。
さすが愛さん、素晴らしい規則を作ってると思う。
「前の腰越との喧嘩で愛さんは実質湘南のてっぺんとったようなもんだからな。多分ヨソの学園からも辻堂軍団に入りたがる奴多いんだぜ」
聞いてもいないことを嬉しそうに、誇らしげに語るクミちゃん。
実際かなり嬉しそうだ。
辻堂軍団を誰よりも誇らしく思っている彼女だからこそ愛さんがマキさんを倒したことが何よりも喜ばしい出来事だったのだろう。
だが、その話は愛さんの前でしないほうがいい。
俺と愛さんだけは最後の瞬間、マキさんが敢えて反撃や防御をしなかったことを知っている。

無論、他にも見ていて気づいた人はいただろう。
何にせよマキさんは故意に愛さんに勝利を譲った。
例え本気を出し続けていてもマキさんが愛さんに勝ったという保証はない。
けれど結果だけをみればマキさんが愛さんや俺の気持ちを考え、拳を引いた。
それを愛さんの勝ちと呼ぶのか、マキさんの勝ちととるのか。
少なくとも愛さんは後者を選んでいる。
「クミちゃん、あのね――――」
「丁度いいや、暇だろヒロシ。ちょっと手伝えよ」
「え、ちょっと」
盛大にモップやらなんやら様々な掃除用具を投げ渡される。
俺は慌てて受け止めた。
「そんじゃ行くぞ」
大股で集会場へ向かうクミちゃん。
俺は呆気にとられてしばらく立ち尽くした。

何だろうな、世の中には決して運だけでは片付けられない事がある。
それこそ誰かの意志力が働いているのではないかと、そういう疑惑を持つ事がある。
「っていうか露骨すぎィ！」
「はは、明らかにこれ運命力感じるよね・・・・・・今年こそはタロウと・・・・・・・」
「キモイなお前」
「いくらなんでも代わり映えしなさすぎタイ」
二年の頃によく釣るんでたズッコケ三人組は俺が教室に入ると既に一つの席に固まって座っていた。
うん。
「やばいわー、あたし今日に備えて全然勉強してないわー、まじやばいわー。
ミィは今日の試験の勉強してきた？」
「・・・・・・なんだろう、マイから裏切りの香りがする」
相変わらずな二人である。
うん。
「坂東君、いつもサプリメントばかりではそのサプリメントの栄養だけに偏ってしまいますよ」

「別に家では普通の食事をしている。
それに去年の夏頃から勉強を見ている人にもそれは言われたことだから既に気をつけいてるさ」
うん。
うん。
「おかしくないかな、これ」
言わずには居られなかった。
だってそうだろう、僅かに見えなくなった姿と新しい姿はある。
けれど目立っていた人たちは軒並みここにぶち込まれてる気がする。
「ホーッホホホホ！　ご機嫌麗しゅうございますわ長谷君」
「うおうびっくりした」
突然背後から甲高い高貴なる笑い声が響いて俺は心臓が跳ね上がった。
凄まじいビートを刻むハートを深呼吸で落ち着かせながらゆっくり冷静に振り向く。
するとそこには・・・・・えぇと、片瀬さんの親戚の・・・・・えぇと
「胡蝶さん、おはようございます」
「えぇ、おはようございます。
大変礼儀正しい挨拶ですこと、あそこの方々も見習っていただきたいばかりですわ」

「あ、あはは」
ちょっと自信なかったけれど胡蝶さんであっていたらしい。
次からは大人しく片瀬さんと呼ぼう。
どうせあっちの片瀬さんとこっちの片瀬さんが俺の前にセットで現れる事なんてないだろうし大丈夫だろう。
「えぇと。副会長がどうしてここに？」
俺の問いに首をかしげる片瀬さん。
はて、何か変なことでも言ってしまったか？
「ああ、長谷君はクラス表を全部は見てなかったのかしら？」
「ええ、実は俺さっきまでとある教室の掃除をしてて大分遅れたので、通りがかりにであった姉ちゃ・・・・・・長谷先生に口頭で教えてもらっただけなんだ」
その時、姉ちゃんがやたら不機嫌そうだったけど何故なのかはまだわからない。
朝はあんなに機嫌よかったのにな。
「朝早くから校内清掃とは・・・・・・やはり長谷君は素晴らしいですわ。
是非ともこれからもそのまま品行方正でいてくださいまし」
「ははは・・・・・・」

言えるわけがない。
不良の巣の清掃をしていましたなど。
笑い話にすらならなさそうだ。
「それで、わたくしの事ですが」
片瀬さんは柔らかく微笑みながら俺の手を握った。
「今年から一年間よろしくお願いしますわ、長谷君」
ここでようやく合点がいった。
つまり同クラスになったということか。
いっちゃなんだけど去年より騒がしいクラスになりそうな気がした。
でもまぁ、彼女って良い人だし完全に知らない人よりは一緒のクラスになって嬉しい。
「さて、そろそろ時間ですし着席しますわよ」
時刻を見ればもうすぐチャイムがなる頃合だ。
「・・・・・あの方はまだ来られてないのですか。
まったくこれだから」
片瀬さんは一つ空いている机を忌々しげににらみつぶやいて、そのまま自分の机へ歩く。

俺は一体この机の主が誰なのかわからなかった。
首をかしげる。
『――――ざいます、愛さん！』
『『おはようございます!!!』』
不意に、外の方から凄まじいボリュームの挨拶が聞こえた。
クラス中の皆が興味本位で窓から顔を出す。
「ヒロ、今年も一緒のクラスだな。
僕としては嬉しい限りだ」
「うん、俺もヴァンとまた一緒で凄く嬉しいよ」
俺とヴァンだけはそれを見ず、新学期の挨拶をした。
「これで辻堂が一緒のクラスでなければ平和なものなんだがな」
そういってヴァンは先ほどの机を見る。
口では毛嫌いするような言い草だが、実際その目は友人を見るものだ。
ヴァンは何だかんだでいい奴だから俺は好きなのだ。
っていうか・・・・・・え？

「クラス分けでこんなに喜んだのは初めてかもしれない」
「俺も同じだよ。もはや俺と愛さんは離れられない運命なのかもしれない・・・・・・・」
「大・・・・・・」
「愛さん・・・・・・」
「はは、こいつらちょっとウザイな」
「目と耳から殺意を取り込ませてくるタイ」
何というか、現実はいつだってアニメや漫画の世界よりも奇的なのだ。
現実にご都合主義なんてないし、当然決められた道筋もない。
で、何故ここまで俺にとって良い方向にクラス替えが決まったのか。
詳細はわからないけれど、何にせよ喜ばしい事だった。
「ふふ、長谷君や辻堂さんの日頃の行いがいいからですよ」
と、委員長は俺の疑問に答えた。
けれど対してヴァンはというと。
「ふむ、不良に日頃の行いが良いとは言い得て妙だな」

「うっせーな、こっちだって別に普段から悪い事してるわけじゃないし」
相変わらず表ヅラは仲の悪い二人である。
もっとも、別に互いに嫌いあっているわけではない。
愛さんもヴァンも互いをある程度認め合っているから一緒に話し合っているし、
そもそも愛さんの場合本当に嫌いな人には鉄拳制裁をお見舞いするため、嫌いなら嫌いと分かりやすい。
「なぁタロウ。もう試験直前なのにいつもみたく直前に詰め込みとかしないの？」
「別に詰め込んでいるわけじゃない。アレはただおさらいをしているだけだ」
ヴァンは若干渋い顔をする。
「それに進級してクラスメートとの初顔合わせだ、僕としてもおさらいよりはヒロ達と交流する方を優先したい」
「タロウ・・・・・」
ヴァンって男からも惚れられたのか。
なんてどうでもいい事を一瞬考える。
まぁそんな事はどうでもいい。
俺は取り敢えず愛さんの方を見る。
「辻堂さん、この問題って出るかな？」

「どうだろうな、長谷先生ならこんな面倒くさい上に性格悪そうな公式は出さないんじゃねーの。
それよりマイがさっきからウザイんだけど」
「・・・・・・あれ絶対勉強してきてるよね」
愛さんと烏丸さんは冷めた目で片岡さんを見る。
片岡さんはというとさっきから委員長に勉強してないアピールしている。
実際にあそこまで露骨にアピールしてるひと初めて見た。
「なぁ大。放課後暇？」
「うん、特に用事はないね。
だからちょっと辻堂軍団に挨拶しようかなって思ってるんだ」
一応新学期最初だし、クミちゃん以外の人達とも挨拶はしておきたい。
「あ～。それはやめといたほうがいいかも」
愛さんは酷く困った様子でいう。
はて、なぜだろうか。
「今日は多分あそこはイキがってる新入生でごったがえすと思うんだ。
実際去年もそうだったし」
「あぁ、なるほど」

つまり不良な新入生が辻堂軍団に入ろうと、集会場に集まるってことか。
確かに、それは俺がいくと危険かもしれない。
俺みたいな平々凡々な男がそんな魔窟に行ったとなると、速攻絡まれるだろう。
「一応顔見せだけするよ。やばそうだったらすぐ帰るからさ」
「わかったよ。じゃあ行く時はアタシと一緒だぞ」
「うん」
横に愛さんがいるのなら滅多ことも起きないだろう。
まさか愛さんに喧嘩を売るほどイキのいい一年もいないだろうし。
ふと、なんか近くから凄い気色悪い視線を感じた。
寒気を感じて周りを確認すると男たちが俺と愛さんを見ている。
「・・・・・・イクときは一緒だぞってさ。聞いたかよ?」
「確かに聞いたタイ。けしからん」
「ばっ！　そ、そういう意味で言ったんじゃねぇよ！」
男達の粘っこい視線とその言葉に愛さんは一瞬で沸騰する。
が、怒っているというよりは照れている感じだ。
俺はそんな愛さんの姿を見て微笑ましくなる。
一年前には考えられなかった光景だ。

愛さんがクラスメートとバカやって、それを周りは笑って。
それは普通ならよくある光景なのだけど、愛さんにとっては特別なのだ。
俺は一歩下がった位置からクラスを眺める。
今年も良い一年になりそうだな。

「なんだオメェ、芋癖ぇツラひっさげやがってよ。
ここがドコだかわかってんの？」
「はぁ」
完全にしくじった。
愛さんどこだろう。
テストが終わり、いざ辻堂軍団に愛さんと一緒に行こうと思ったら俺は胡蝶さんに生徒会の手伝いを頼まれた。

相変わらず意志の弱い俺はそれを断れず、ジト目で見る愛さんに詫びて手伝いに向かった。
　が、終わって教室に戻った時にはそこに愛さんはいなくて、先に行ったのかと思いそのまま急ぎ足で集会場に行った。
　それが拙かった。
「ちょっとお前飛んでみ？」
　・・・・・・飛んだ所で財布の中のお金が鳴るとは思えないけれど。
「マー君の命令にしたがえやタコーーーー！」
「まぁまぁ落ち着けや、ほれ。わしが優しく言っとるあいだにな？」
　集会場に入った途端凄まじい二人組に絡まれた。
　この場には数十人の不良がいるため、誰か見知った人いないかなぁと周りを見渡すも知っている人が一人もいない。
　二年生以上の辻堂軍団の人たちはどこへ行ったのだろう。
「すいませんけど、カツアゲならお断りです。
　っていうか我が身が可愛いなら俺に絡まないほうが……」
「何言ってんのコイツ？
　今はやりの邪気眼ってやつ？　マー君こいつやばいっすよ、メチャうずいてますよ」

確かに今の俺の言い方はちょっと変な言い方だった。
だが俺は一切大げさなことを言っていない。
まじで今の俺にカツアゲしている所を辻堂軍団の人の誰かに見られたら確実に愛さんに伝わる。
そうなった場合、多分愛さんは彼らを制裁するだろう。
「いいから飛べって、な？　チャリンって落としたら財布渡すんでいいから」
今年の新入生は凄いな。
色々な意味で。
「おいおい、お前ら。彼は見たところカタギだろうが。
そこまでにしとけ」
「あぁ？　なんやお前!?」
中には硬派な人もいるらしい。
その人は唾をまき散らすマー君さんを無視して俺の手を引き、自分の方へ俺をよせた。
っていうか、この人女の子なのに男らしいな。
「教室間違えたんじゃないのかお前？
ここは辻堂軍団の集会場だ、お前みたいな一般人が来る場所じゃない」

一応彼らから庇ってくれるみたいだ。
が、それでも俺は戦力にならないし、実質一対二。
外野は俺たちを面白がってみているだけ、助勢は期待できない。
「おうおう、マー君まじキレちまったよ……屋上いこうぜ……」
「ええかっこしいがわし一番嫌いやねん、ちょっと残機ゼロになってもらいましょか」
どうでもいいがいちいち言い回しが安定しないマー君である。
「……あ～、すいません。流石に絡まれたのは俺なんで屋上は自分一人で行きます」
「そうもいかないだろ。こういう手合いを殴りたいから俺はヤンキーになったんだし、むしろ望むところって感じだ」
格好いいなぁ。
どことなく愛さんと思想が近い。
彼女とは仲良くできそうな気がする。
一応二人に因縁つけられても全然動じていないところをみると喧嘩も自信があるのだろう。
彼は二人の背を追って教室から出ようとする。
「おいこらクソガキ！　おめぇも来るんだよ！」
「はいはい、付いていってますってば」

そんな叫ばなくても聞こえているんだけれど。
っていうかクソガキて、相変わらず後輩から見たら俺は威厳がないらしい。
諦めて彼らの後ろに続く。
そしてマー君さんが扉に手をかけた瞬間――――
「はい不合格っす。制裁！」
「へ？　あべし！」
「マー君!?」
マー君さんが開けるよりも早く、廊下側から扉が開かれ、同時に入ってきた女性が目の前のマー君さんを蹴り飛ばした。
部屋にいた全員が呆気にとられる。
俺も俺を庇ってくれた人もだ。
とりまきの人だけは即座に吹っ飛ばされたマー君さんにかけよるも、やはり唖然としている。
その女性は誰か。
「……あれ？　貴女は確か元江乃死魔の」
乾さんだった。
一応先生に捕まらないように愛さんの体操服をを着ているが、俺を庇ってくれた人は

見おぼえがあったらしい。
乾さんは彼女をちらりと見る。
そして数秒だけ値踏みするように顎に手を当てて上から下まで舐めるように見た。
その後、満足したのかにこやかにほほ笑む。
「合格。辻堂軍へようこそ～」
「……はぁ？」
彼の肩にポンポンと手をあてる乾さん。
「センパイを庇いだてしたり、ちゃんと上下関係も理解してる。
うんうん、やっぱりこういう後輩が一番っすよね長谷センパイ」
「いや、まぁ……」
俺に話を振られても全くわからない。
そりゃ彼女は良い人だと思うけれど。
「で、アッチの方は不合格」
突然目つきが変わる。
今まで見せていたにこやかさは欠片も残らず、まるでゴミを見るような目つきで俺をカツアゲしてきた二人に視線を向けた。
乾さんは軽やかな足取りで未だ立ち上がれないマー君さんの目の前まで歩き、

胸倉をつかんで持ち上げる。
あの細腕のどこにそんな怪力があるのか、全員黙ってその光景を見る。
「テメェ、誰に口聞いてんのかわかってんのかよ。あの人は最上級生だぞ、言葉遣いに気をつけろ」
「ひ、ひいいい！」
やばい、さっき俺たちに見せた笑顔のせいでわからなかったけれど、何気に乾さんキレてる。
今にも殴りかからんとせん雰囲気だ。
「まぁ、改めたところでアンタみたいなのは辻堂軍団に入れたりしないけどね。その面目障りだからさっさと消えろ」
そう言ってマー君さんを扉の方へ投げ捨てる。
明らかな格の違いとそのプレッシャーにカツアゲした二人組はおびえすくむ。
可哀そうに、腰が抜けて立つことすらできていない。
しかし乾さんは一向に集会場から立ち去らない二人に心底イラついたような顔をした。
「あずの言う事きけねーのか。消えないのなら自分がたたき出してやるよ」
「た、助けて！」

「マー君やヴぁい俺たちまじやばい！」
二人は怯えすくみながら互いを抱きしめあう。
涙すら浮かべ、拳を鳴らしながら近づいてくる乾さんから逃げようとする。
だが誰も外野は彼らを助けようとしない。
当然か、乾さんはどうやら有名人らしく、その実力は周知の事実だ。
だから哀れな二人を庇いだてして乾さんに敵対なんてできるはずもない。
「ちょ、ちょっと乾先輩。こいつらは腰が抜けて動けないだけで」
「うっさいなぁ。黙ってろよ」
「――――っ！」
お人よしらしい彼女は勇敢にも二人に助け船を出そうとした。
けれど乾さんは聞く耳を持たず一蹴。
その威圧に圧され彼女は黙ってしまう。
「「あ、あわわわわわわわ」」
もう恐怖だけで気絶してもおかしくないレベルだ。
これは流石に同情してしまう。
「乾さん、見逃してあげてよ」
俺は乾さんの威圧に怯える女の子の前に立ち、乾さんにお願いをする。

俺なんか乾さんの足元どころか視界にすらおさまらないレベルで弱いけれど、話を聞いてくれるくらいの信頼はある筈。

乾さんは鋭い目つきのまま俺を見つめる。

正直その目つきはかなり怖い。狩人のような、獲物を見る蛇のようなその目を向けられるのは久しぶりだった。

まだ威圧は収めてくれないけれど、考慮してくれているようだ。

そして数秒。

「センパイがそういうなら」

柔らかくほほ笑んで、拳を下げてくれる乾さん。

俺は心底安心してため息をつく。

「あの」

「ん？」

胸をおろす俺に後ろから声がかかる。

何だろうと思ったら、さっき俺を助けようとしてくれた子だ。

「貴方はもしかして辻堂軍団の三年生の方ですか？」

基本礼儀正しい子からしい。

敬語で俺に話しかけるようになった。

こんな子がなぜ不良なんかしているのか。まぁ愛さんに似た理由なのかもしれない。
「いや、俺は辻堂軍団に入ってないよ。ただ俺の彼女が入ってるというか……
まぁうん。とりあえず辻堂軍団の人たちと仲良しなんでよく顔出してるんだ」
「はぁ……そうなんですか」
ちょっと含みのある言い方をしてしまったか。
彼女は少し釈然としない顔で下がった。
俺はとりあえず今の話題は打ち切りにして、未だ立ち上がれない二人の所へ歩み寄った。
「怪我してない？」
「はい！　全然全くしてないです！」
「わしもです！　至って無事であります！」
……完全に怯えているようだ。
仕方ないか、今俺に迂闊なことを言ったら乾さんの制裁がくだるのだ、
そりゃびびるわな。
だが別に俺は虎の威を借る狐になるつもりもない。
「怪我してるじゃない。ちょっと待ってね」
見れば乾さんに投げられた時に顔をぶつけたらしい、頬に結構痛々しい擦り傷ができ

ていた。
俺は持ってきたリュックから愛用の救急キットを取り出す。
「あの、何を」
「ちょっとしみるから我慢してね」
中からアルコール綿を取り出し、傷口を消毒する。
その際かなり沁みたらしく、顔を引きつらせるマー君さん。
見れば血も出ていて、僅かにアルコール綿に血液が染みついている。
とりあえず大きめのカットバンを取り出し、その少し大きめな傷口を覆うように貼った。
「うん、これでよし」
ちょっと見た目がアレだけど、まぁ怪我したところが化膿するよりはマシなはずだ。
「他の所は大丈夫そうだね」
「は、はぁ。ありがとうございました……」
マー君さんもやっと落ち着いたらしい。
ゆっくりと立ち上がって俺の貼ったカットバンをなでる。
「長谷センパイなにしてるんすか。そいつらセンパイにカツアゲかまそうとしてた連中ですよ」

「乾さんも冬まではよくしてた事じゃない」
「うぐ、そ、それはまぁそうですけど」
カツアゲとかそういう人を嫌な気持ちにさせる悪事は俺は嫌いだ。
だけど反省して、二度としないのなら俺は過去をいつまでも引きずるつもりはない。
だから今だって俺は乾さんと打ち解けてる。
「長谷、先輩ですか」
「え、あ、うん」
何やらマー君さんが俺を熱っぽい目で見ている気がする。
何だろうな、まるで恋する乙女のような。
「わ、わし貴方に惚れました！　一生ついていきます！」
「え～」
何故そうなる。
やめてよね、俺そういう属性ないんですけど。
でも正面からやめてという度胸は俺にはない。
「カツアゲかます上にどうしようもない不良っぽいし、長谷センパイと相性は良かったか……」
なにやら乾さんは俺とマー君さんを交互に見てぶつぶつ言っている。

しかし何やら答えを出したのか、微妙な顔で乾さんはマー君さんに近づいてきた。
「やっぱ不合格取り消し、合格」
「え」
これには驚くマー君さん。
「せいぜいこき使ってやるから覚悟しといてくださいよ」
そういって乾さんは俺の手を引いてくる。
一体どういう心境の変化なのか。
俺には理解しかねる。
「で、さっきから空気でウドの大木なあんたらはどうしましょうかねぇ。いちいち審査なんてかったるいし、かといって他の奴らまだ来ないし……」
僅かに考える。
が、どうやら答えは出なかったらしい。
「まぁいいや。あんたらは他のセンパイがたが来るまでそうやって待ちぼうけくらっといてくださいよ。
自分らはちょっと用事あるんで、それじゃ」
「え、い、乾さん」
俺をグイグイと引っ張って行く乾さん。

俺は戸惑うものの、大人しく抵抗せずついてく事にした。

「長谷センパイ、今日はちょっと無用心すぎますよ。
自分来なかったら危なかったし」
「そうだねぇ、でも俺を庇ってくれた子もいたし大丈夫だったかもしれない」
あの子にはまた後日礼を言っておこう。
「そうかもしれませんけど・・・・・まぁ、過ぎたことっすね」
その通りだ。
もしも話に意味はない。
そんなことよりは俺は彼女に聞きたいことがある。
「所でさ、どうして今日稲村学園にいるの？
由比浜はテストとかなかったのかな」

「ありましたよ。テスト終わったあと見直ししたいんですぐに長谷センパイ迎えにきたんすよ」

そう言いながら鞄からテスト用紙を取り出した。

一応問題用紙であって解答用紙ではないので、事前に自分がどう解いたか等を問題用紙にメモしていないと採点のしようがないのだが

見た所そこは抜かりないようだ。

「それじゃあ帰りましょうよ。

明日も学校ありますし、長居できませんから尚更早く行きたいですし」

俺の腕に両腕を絡めてくる。

その大きな胸に俺の腕は挟まれ、あまりの感触に生唾を飲む。

「ふふぅん、今センパイどきっとしましたね」

ものすごい悪い顔で俺を見上げてくる乾さん。

どうやらワザと俺がこうなるように意識してのことらしい。

どうしたものか、ここで言い訳をするのもみっともない。

「乾さん、愛さん知らない？」

「おおう、露骨な話題そらしっす。

清々しすぎて追求もできないレベルの」

こういう時はわざとらしいごまかし方がむしろ効果的である。
というか、実際に愛さんの行方が気になっていたのだ。
一応俺の問いに答えようとしてくれるのか、乾さんは少し考える。
「自分この学園に来て速攻集会場行ったから全然知りませんね。
メールやコールとかしてないんすか？」
ふむ。そういえばまだ今日は一度も携帯をみていない。
思い出したようにポケットから取り出す。
そして画面を確認するも愛さんからの着信履歴はない。
今日はもう帰ったのかな。
待って欲しいとも言ってないしそれも仕方ない。
ただ、さっきの集会場の様子を見た所まだ愛さんは集会場にすら顔を出してないみたいだし、
もしかしたらまだどこかで俺を待っているのかもしれない。
取り敢えず思い立ったら吉日、愛さんにコールしてみる。
鳴り続く呼び出し音、途切れない呼び出し音。
愛さんが電話を取るよりも早く、自動受付に転送される。
俺は即座に電話を切る。

「ダメだね、マナーにしてるから気づいてないのかも」
「それは残念ですね」
俺は僅かに残念に感じ、ネガティブな気持ちのまま携帯をポケットにしまう。
「それじゃあ辻堂センパイにメールでも送って自分らは先に帰りましょうよ」
嬉々として俺の腕にしがみつく乾さん。
「ん～・・・・・・」
悩む。
実の所、俺は愛さん探しをしたかった。
今日はまだ愛さんとあまり会話できていない。
そして話すことは沢山ある。
クラスの事、テストの事、今日来てた辻堂軍団の事、これから一年間の事。
挙げればキリがない。
故にここは乾さんの誘いを断ろうと思うのだが、乾さんの頼みも実の所聞いてあげたい。
俺が優柔不断にも答えをだしかねていると
「ん？　お前は便秘娘の・・・・・・」
「「え？」」

後ろから声がかかった。
俺にではなく乾さんにだが。
俺達は誰だろうと疑問げに振り向く。
振り向いた瞬間、乾さんはフリーズした。
「なんでお前がウチの学園の体操着を着ているんだ？
しかもサイズが合っていないと来た、これは実にけしからん」
「けしからんですよね」
俺も思う。
もうおっぱいが張り裂けそうなばかりにコングラッチレーションしている。
サイズが全くあっていない体操着は一種のエロ衣装だろう。
「それは秘密です。っていうか自分ちょっと用事思い出したんで・・・・・・」
「ややや、前に弁天橋であった時よりも明らかに肌質が落ちているではないか」
「わぁぁぁぁぁ！　恐ろしく目ざとい！」
後ろにスライドする乾さん、前に詰め寄る楓先生。
「見た所便秘三日といった所か」
「だから何でそんなにピンポイントで当てられるんすか!?」
「それは私がスケベな保険医だからだ！」

乾さん、続けて二歩下がる。
楓先生、合わせて五歩進む。
涙目な乾さんを尻目に先生はポケットをまさぐり始めた。
一体何を出すのだろうと思った矢先
「ようし、ここは前同様にシンプルイズザベストにイってみるか」
「イかねーっすよ！」
針のない注射器。
結構大きめなのを小さいポケットから取り出した。
しかも注射器の中には何やら液が充填済み。
白衣のポケットは四次元に通じるポケットらしい。
乾さんは殆ど半泣きで壁際に追い詰められた。
「それじゃあ行こうか。
大丈夫だ、最初の頃よりもきっと楽で痛くないはずだから・・・・・・」
「いやだあああぁぁぁぁぁぁ！　長谷センパイ助けて許して見捨てないで慈悲はないんですかあぁぁぁぁ！」
俺は連れ去られていった乾さんを見送った。
このあとに乾さんがどんな事になるのか。

想像はつくけど今後触れないでおこう。
南無。

「やっぱりここにいた」
「・・・・・ちぇ、やっぱ見つかったか」
乾さんが連れ去られてから、しばらく考えた俺はすぐに愛さんのいる場所がわかった。
愛さんは、俺がよく通る通学路。
春と夏の間の時期に一匹の猫が捨てられていた場所にいた。
そんな気はしていた。
情緒深い愛さんのことだ。

きっとこういう節目の時期は思い返す事があるのだろう。
「ここにラブがいたんだよね」
「あぁ、アイツったらあの時は本当に小さくて可愛かったな。今ももちろん可愛いんだけどな」
俺達は並んでラブのいた所を眺める。
そこにはもう何もなくて、ラブの入っていたダンボールはおろか痕跡すら一切ない。
もうただの道、それこそ百人が見て百人が興味を示すことはない所だ。
でも、それでも俺たちにとってその場所は特別だった。
「大はここでラブを拾ってるアタシを見て、アタシを好きになってくれたんだよな」
愛さんが少し照れくさそうに言う。
「ん～、ちょっと違うかも。
ラブを拾った愛さんの姿はあくまでも俺に踏ん切りをつけさせただけなんだ」
一年の学園祭で、硬派で凛々しくて怖がられていて、それでいてどこか優しさを感じる彼女の存在を知った。
二年の春で辻堂愛が本当は怖くなくて、誰よりも優しくて、でも自分を貫き通すために強がってる女の子だということを知った。
二年の夏。俺はそんな彼女を好きになった。

「俺は、結構早い段階から愛さんに惹かれてたんだと思う」
　俺は彼女が気になって仕方がなかったのだ。
「そっか、ありがと」
　何に対してのありがとうなのか。
　俺はそれを知ることはできない。
　付き合ってまだ俺達は一年も経っていないのだ。
　互いの心を以心伝心するにはまだ俺たちには圧倒的に時間が足りない。
　しばらく、俺達は互いに口を開かずただ時間を過ぎさせる。
　しかしその時間に気まずいものはない。
　その言葉のない瞬間すら百万の言葉を交わすよりも楽しくて、居心地が良い。
「あ～あ、一年前のアタシはまさか今こんな事になってるなんて思ってもみなかっただろうな」
「俺だってまさか彼女できるなんて思ってなかったよ。
　それも愛さんみたいな素敵な人を」
「・・・・・・ッ！　恥ずかしいことばっか言うな！」
　久々に愛さんの硬派メーターが純情メーターを上回ったらしい。
　付き合い始めた当初のような事を言われた。

その掛け合いすら懐かしい。
互いに照れていると、不意に愛さんが俺の手を取った。
「じゃ、帰ろうぜ。今日はどっちの家いく？」
「もちろん俺の家、是非とも是非ともお願い申し上げます」
「・・・・・・明日学校だしエロい事はお預けだぞ？」
「・・・・・・・・・・・・うん！」
「絶対何か企んでるよアタシのカレシ」
何ておバカなやり取りをしながら家路につく。
相変わらず愛さんの手は柔らかい。
これが男を星のように上空にぶっとばす手だなんて思えない。
ゆっくりと歩く。
別に目的地についたからって俺達が別れる事はない。
むしろ家についてゆっくり二人で食事する方が有意義なのかもしれない。
しかし、俺達にとってそういった『有意義』という言葉がそもそも成り立たない。
俺は愛さんといれればどこで何してもそれは価値あるものなのだ。
もちろん愛さんがそう思っていると断言はできないけれど
ちらりと愛さんを流し目で見ると、

愛さんはやたら上機嫌でにこにこ微笑んでいる。
よかった愛さんも楽しそうだ。
これで俺の独りよがりだったら多分俺は自殺するほど自己嫌悪を抱いていた。
「今日も梓とか腰越くるのかな」
「マキさんはわからないけど、乾さんは来るかと」
返答して気づいた。これやばいヤツや。
地雷踏んだね間違いなく。
ギューっと、愛さんの手が万力のように俺の手を握りつぶす。
「あだだだだだだだ！」
「あのさぁ大」
ヤバイヤバイ果汁が出る出る、大果汁１００％一番搾りがでるってば。
もう痛すぎて既に手がぐしゃぐしゃになっているのではないかと疑うも、
どうやら折れないギリギリの所で力を緩めているらしい。
男なのに涙が止まらないほどいたい。
「何かさぁ、最近アタシよりも腰越たちと一緒に居る時間の方が長くない？
おかしいよなぁ、だってアタシってカノジョなんだぜ？」
「あうあうあうあうあうあぁぁぁぁぁ！」

愛さんの怒りは治まることを知らず、生かさず殺さずな力加減で手を握りしめてくれる。

この強さが愛の深さなのだろうと現実逃避をするものの、やはり痛みから目をそらせるほど悟ってはいない。

「折角これから久々に大と二人っきりになれると思ったのに・・・・・・」

「も、もしかしてやっぱエロい事期待してたり？」

「っ！　うっさいバカ！」

「あ、それ以上いけない！」

図星をついてしまったらしい。

更に握り締める手が強くなる。

なんだ、やっぱり期待していたのか。

凄くもったいないことをしたきがする。

「・・・・・・わかった。今日の夜、もしマキさんや乾さんが来たらはっきり言うよ」

「は？　やだ」
「皆殺しセンパイに同じっすー」
あんまりだ。
俺ってここまで発言力低かったのか。
軽くショックだ。
「家主の大が言ってんのにヤダってお前ら・・・・・」
愛さんも呆れているのか、額に手を当てて困っている。
「だってここ私の家だし。ほら、今日の朝ダイにこれもらったんだ」
そう言ってマキさんは俺が渡した家の合鍵を取り出した。
作ったばかりで真新しいその合鍵は綺麗で、
マキさんは宝石を見るかのように僅かにまぶしそうにそれを眺める。
「何でテメェがソレをもらってんだよ！」
おい大、説明しやがれ！」
「そないなこと言われても」
ウチ、人権ないし。

マキさんって俺にとって家族だし、家族になら合鍵持ってて欲しいし。
でもこれどう見ても言い訳になってるし。
もう何言っても俺愛さんに怒られるよね。
「あーもー・・・・・・私の居場所に余計なお邪魔虫が！
大っ、キンチョール持って来い！」
「自分ら害虫扱いっすか」
「ひっでぇの」
滅茶苦茶である。
「愛さん落ち着いて、割と人体にキンチョールはマジでやばいから」
火傷とか皮膚のダメージとか色々怖いのだ。
伊達に生命力の凄まじい虫を殺すスプレーを名乗ってはいない。
「っていうか皆殺しセンパイと辻堂センパイだけに合鍵あげるなんて酷いっすよぅ。
あずにはくれないんですか？　もしかしてあずって信用ない？」
「え、いや。そんな事は絶対にないけど」
うるうるとした目でこちらを上目遣いしてくる。
明らかにわざと媚びている感じだが、男のサガでそれを跳ね除けるなんて俺にはできない。

というか元より乾さんの分の合鍵も作ってはいるのだ。
まだ渡してないだけで。
今渡したら多分俺愛さんに何されるんだろうか。
「・・・・・・合鍵はアタシのオンリーワンだったのに、出回り始めてワンオブゼムになった」
これはまた面白いことを言う愛さん。
「自分だけのけ者なんて寂しいっすよ、長谷センパぁイ」
甘え声で擦り寄ってくる。
やばい、マキさんほどではないにしても、それでも高校生の平均を容易く上回るダイナマイトバディー
俺の理性を溶かすにはオーバーキルレベル。
口が『仕方ないなぁ』と援助交際中に女子高生にプレゼントねだられるおっさんみたいな事を言うように促してくる。
アホか。
「し、しかた――――」
「大・・・・・・？」
危ない。

実に危ないところだった。
見れば愛さんの顔は笑顔で固まっている。
が、その下に途轍もなく途方もない殺意をたぎらせる修羅が見える。
「い、乾さん。鍵はもうちょっとまってね？
今切らしてるんだ」
「ちょっとしか待ちませんよ？
これでもあずはチャンスは逃さないハンターなんで」
「どちらかというと肉食獣だろうが」
マキさんが吐き捨てる。
乾さんはちょっとムッとした顔をするものの、一応自覚はあるらしくそれに口答えはしない。
「なんにせよダイにくっつきすぎだ。
そこは・・・・・・」
「え、ちょっと何するんすか」
マキさんは子供を咥えて持ち上げる猫のように乾さんの首根っこを掴んで、ぽいっと俺のベッドに投げ捨てる。
そしてマキさんは座っている俺の太ももに頭をおいて寝転がった。

「私の指定席だ」
　うぅむ。野郎の膝枕など気持ちがいいとは思えないのだが。
「ゴルァ！　テメェのじゃなくてそこはアタシんだ！」
「んが!?」
　愛さんが激怒して俺を引っ張る。
　その際太ももの上にいたマキさんは滑って地面に頭をしこたま強く打ち付けた。
　結構痛かったらしく、数秒悶絶したあと涙目で愛さんに食いかかった。
「やってくれんじゃねぇか辻堂・・・・・・」
「やってやったぜ極楽院さんちのセンパイよぉ・・・・・・・」
　やばいって。
　どっちもマジギレしてるし。
「あれあれ、そう言えば皆殺しセンパイって喧嘩やめたんじゃ？」
「売られた喧嘩まで逃げるほどプライド捨てちゃいねぇよ」
　つまり気に入らないから取り敢えず殴る等等、拳による解決をしなくなっただけで護身や相手からの挑発を受けた場合は普通に対応するということだ。
　まぁ、それでもマキさんからしたら大きな変化だと思う。
　っていうかやばいやばい、これ今日は長谷家を無料で更地にしていただけるお客様感

謝デーだったのかもしれない。
まっぴらゴメンである。
あたふたとしていると、不意に俺の袖が引っ張られた。
なんだろうと思い姿を確認すると乾さんだった。
どうやらこっそり俺に近づいてきたらしい。
「今がチャンス。失礼しまーす」
そう言って乾さんは俺の膝に頭を置いた。
愛さんとマキさんは罵詈雑言をぶつけ合っていてこちらに気づいていない。
「ふふ、やっぱ枕より硬いっすね」
「そりゃね、鍛えてるわけじゃないけどそれでも男の太ももなんてこんなもんだよ」
「でもダイレクトに長谷センパイの匂いとか感触がある、これはクセになるかも」
頭をグリグリと動かす。
そのこそばゆさに少し驚く。
ふと、二人はどうしてるのだろうと思い目線を向けると。
「死ぬにはいい日だ・・・・・・」
「テメェの罪を数えろや・・・・・・」
胸ぐらを互いに掴んで拳を握っていた。

あ、これマジで殺し合う二秒前ですわ。
「ダメ！　俺の住む家がなくなっちゃう！」
「ふぎゃん!?」
慌てて二人に駆け寄った際、思いっきり乾さんの頭を地面に落とした。
「うわわわゴメン乾さん！」
慌てて乾さんに駆け寄る。もう行ったり来たりでしっちゃかめっちゃか。
自分でも何がしたいのかわからなくなってきた。
「うぅ、いったぁ」
マキさんの時と同じく頭をさすりながら起き上がる。
即座に謝ろうとするが、なんでしょうか。
目がマジで怖い。
「アンタ等、いい加減ウザイ。暴れんならヨソでやれよ」
「あぁ!?」
「はは、言うじゃん」
切れたらしい乾さんは自分が痛い目みたのをどうやら二人のせいと決めたらしい。
いつかみたボス的な風格を醸し出しながら二人に詰め寄った。
いやいや、余計にこじれたし。

どうすんのよこれ、俺はもう大人しく長谷家崩壊を黙って見てるしかいないの？

一瞬考える。

そこで俺はとあるスーパーマンを思い出した。

大急ぎで立ち上がり、部屋から脱出。

同時に隣の部屋をノックして応答待たずにこじ開ける。

「姉ちゃん！　お願いします！」

「うぉう!?　何ヒロッ、もしかして辻堂さんじゃ我慢できないからやっぱりお姉ちゃんに鞍替え!?

ようし、何か釈然としない上に微妙にプライド傷つくけどそれでもお姉ちゃん寛大だから許しちゃう！

ジュッテームヒロ！」

何かよくわからない事を行っているけれど全て聞き流す。

そして俺は今この瞬間、我ら姉弟の安息の地が三匹の魔物に粉砕されそうな事を包み隠さず伝えた。

「なんと！　お姉ちゃんがテスト採点に追われているあいだにそんな事が！

任せなさい！　長谷家の平和はこのお姉ちゃんが守ってあげますとも！」

「ひゅーひゅー」

はやし立てる。
乗り気になった賢くもおばかな姉は意気揚々と隣の俺の部屋にダッシュ。
敢えて俺はそれについていかず待った。
数秒後。
長谷家を震わす程の巨大なゲンコツの音が三つ聞こた。
『いったぁ・・・・・ごめんなさーい、もうしませーん』
『うぅ、痛いっすぅ。さーせんっしたぁ』
『悪かったよ、だからその拳下ろせっていやホント反省してるから』
三者三様の珍しい謝罪の言葉が聞こえた。
全員全く反省してないみたいだけどまぁ何とか最悪の事態は去ったようだった。

日付の変わる数分前。

俺の部屋ではマキさんと乾さんが俺のベッドを占領して寝静まっていた。
姉ちゃんは自室で採点に戻り、時間がきたため愛さんはそろそろ帰るといった。
俺は帰る愛さんに送ると言い、今現在愛さんと一緒に夜道を歩いている。
その道筋を通りながら俺は特に愛さんと会話をすることもなく、一人考えていた。
結局のところ新学期を迎えて俺は変わったのだろうか？
いや、その考え自体が激しく愚かな事は理解している。
何も変わっちゃいない。
だってそうだろう、三月最後の日と四月最初の日の間に人が変わるほどの影響力はない。
もちろんそれでも環境は変わる。
学生ならばクラスや学年が大きく変わる。
社会人ならば何かしら区切りがつき、方針が変わったり新人が入ったりする。
でもそれはあくまでもその場で個人の生き方を変えるわけではない。
変わった環境により将来が変わるなどはあり得るけれど。
閑話休題。
結局新学期を迎えてもクラスメイトは殆ど変わらず、マキさんや乾さん達との関係も変わらない。

愛さんとだって未だ幸せに過ごせている。
・・・・・・でも、長期的な目で見た場合は大きく変わっているのだ。
一年前の俺は愛さん、マキさん、乾さんや片瀬さんたちと全く接点がなかった。
ならば俺は昨年、つまり高校二年生の間で人生が大きく変わったのだろう。
一日一日の変化はどんな事があっても死んだりしない限りは小さい変化しか起きない。
けれどその変化を積み重ね続ければ一生を歪ませるほどに変質をもたらす。
俺はそれを考え、物思いにふけった。
「愛さん。愛さんはさ、今幸せ？」
「なんだよいきなり」
俺個人の人生が変わったのなら、それは俺に関わり続けた人間の道筋も変わった可能性が高い。
愛さんに至っては俺の方から関わろうとしたのだ。
それこそ俺と同じくらい人生が変わっただろう。
ただ、俺にとって願うことは、俺のせいで不幸せになって欲しくないという事だ。
「・・・・・・真面目な質問みたいだな」
愛さんは俺の表情を見てとったのか、合わせるように真面目な顔になる。

果たしてどのような答えが帰ってくるのだろうか。
饒舌に返してくれるのか、シンプルに返してくれるのか。
それともネガティブに、アクティブに、クリエイティブにいくらでも返し方なんてある。
愛さんはコホンと一度咳払いする。
そして、赤ら顔で俺を真っ直ぐ見つめて言った。
「幸せだよ」
それは余計な装飾もなく、至って無骨で単色な物だった。
けれど何よりも温かく、柔らかく輝く言葉だったのだ。
「大のおかげでアタシにはダチができた。
本当のアタシを理解してくれる人ができた。
そして何より――――」
愛さんは先程からつないだままの俺の手を両手で包んで、目を合わせて微笑んだ。
「大、お前みたいなカレシができた。
幸せじゃないわけないだろ」
言葉を失う。
そのストレートな好意。

不純物のない心。
それはとても俺には眩しい。
「ありがとう」
俺は心から愛さんに感謝した。
俺なんかを好きになってくれてありがとう。
これからもよろしくお願いします。
そういった思いを込めて口にした。
愛さんはその言葉の意味を理解してくれたらしく、小さくうなづいた。
「これからもよろしくね、愛さん」
「あぁ。これからも・・・・・・死ぬまでずっとよろしくな、大」
俺達は両手を握り締め笑い合う。
空は一面の星空、春を迎え気温はもう寒くない。
長い人生だ、いつか俺たちには辛いことも待っているだろう。
大切な人が病床に伏せ、別れるような。そういった色々な苦難もあるだろう。
いつか俺か愛さんのどちらかが死ぬ事も必ず訪れる。
生涯の別れを俺達は経験するだろう。
人生は有限だ。

故に人生は劇的でなければならない。それは誰の言葉だったか。
少なくとも俺の人生はまだ悲劇的ではない。
けれどそれはまだ俺の人生は序章に過ぎないからだ。
きっといつか悲しいことは訪れる。
だから俺は今を大切にしたい。
愛さんと一緒にいる時間は何よりもあっという間に過ぎ去っていく。
あっという間に終わってしまうからもう少し、もっと長くと欲張ってしまう。
そうこうしているうちにあっという間に人生は進んでしまうに違いない。
好きな人に愛していると告げ、困っている人に手を差し伸べ、家族友人を大切にする。
それは行動に移す事は簡単だけど、続けることは容易じゃない。
でも俺はそれをし続けよう。
さしあたって、今俺にできる事は
「愛さん、大好きだ」
目前の彼女にそう告げる事。
これを死ぬまで続けよう。
簡単な事だ。俺は生涯彼女を愛し続ける。
これほど簡単なことはない。

だって、死ぬほど好きなんだから、死ぬまで愛する事ができない道理がないのだ。
一年で俺の周りは大きく変わった。
人生を大きく変えた人だっているだろう。
だから俺は決めた。
いつまでも俺は変わらないでいよう。
変えてしまった人のためにも、俺は俺らしく在り続けようと。
「アタシも大好きだ。大、お前はずっとそのままでいてくれ」
未来はどこまでも眩しくて。
あまりに眩しくて先はおろか詳細も見えない。
でも、それは確かに輝いていた。
「アタシとずっと一緒にいてくれ、大」
「うん、愛さん」
この人とどこまでも一緒にいよう。
きっと彼女となら未来は幸せで、俺達らしく在れる。
「これからもよろしくお願いします」
俺達は、その言葉を口にして笑いあった。

番外編だよ辻堂さん！
３０話：ラッキーアンドアンラッキー！（前編）

曰く、今日の俺の運勢は最悪だという。
誰からか聞いたわけではない。
あ、いや、嘘です。格好つけました。
休日の朝、何気なく付けたテレビの中にいる元気なお姉さんがそう言っていました、はい。
俺の誕生日、血液型、星座、手相。
チャンネルを変えれば尽く最下位の運勢だということをこれでもかと俺に伝えてくる。
終いには、アンタ死ぬよ？　みたいなことを言われた。
冗談ではない。
まだ死ぬには未練がありすぎる。
どうせ死ぬのならこう、事故に巻き込まれまだまだ未来に希望がある子供、
もしくは愛さんとか知人を身を挺してかばい、惜しまれて死ぬような、そんなヒー

ロー的な死に方ならカムオンなんだけど。
アホか、小学生並の妄想している場合か。
さしあたって、取り敢えず俺は自分の運勢を占うついでに浄化パワーを期待して神社に向かう事にした。
その道中、鳥による爆撃を数発喰らいかけるもなんとかかわした。
当たらなければどうということはない。
何度か信号無視した車に轢かれかけるも、警戒していたため直撃はまぬがれ続けた。
もうこの段階でテレビで言ってた俺の運勢は正しかったのだと薄々理解してきた。
まさか、と思い神社でおみくじを引いてみれば――――
「え～・・・・・・・」
『ねんぐのおさめどき☆しぬかもね』
と、書かれたおみくじを引いた。
吉とか凶とかそういうのやめたのだろうか。
全部ひらがなとか小学生にも優しすぎる。
始まったな、この神社。未来に生きてやがる。
こうして、俺の不運な一日は始まった。

「あ～もう。大の奴携帯でねぇ」
愚痴りながらアタシは一人商店街を歩いていた。
特に目的地はなく、ただ黙々と歩いている。
無論、暇人というわけではない。
目的地はないが探し物はあるのだ。
いや、この場合は探し者という言葉の方が正しいか。
先程から握っている携帯電話の画面を見る。
やはり着信はない。
「ったく、どこいったんだよ」
今日、昼頃にアタシは大と遊びに行こうかと電話をした。
しかし、どうやら大は携帯電話を切っているらしく出なかったのだ。
それを気づかず一時間ほど間を空けつつ何度かコールを繰り返した。
無論当然出ることなかった。

当然、前日に約束をしていなかったアタシが悪いことは自覚している、
だが焦れたアタシはそのまま自分の足で大の家へ向かった。
しかし、実際に行ってみるとそこには完全に休日モードのだらけた未来のお姉さんの姿しかなかった。
長谷先生から聞いた話によると、何やら焦燥した様子で行く場所も言わず外出したようだった。
一応携帯電話をもっていったか確認してもらったが、どうやら持って行っていたらしい。
という事は電池切れになったか、電波の繋がらないところにいるのだろう。
その為アタシは闇雲に大を足で探すこととなった。
腰越のような嗅覚があれば一瞬で見つけれるのだろうが、生憎アタシはそこまで野性味溢れていない。
その為途方にくれる。
あ、『お前警察犬のバイトとかすりゃいいんじゃねぇか？』
とか今度腰越にそう言って挑発してみよう。
「あら、辻堂さん」
「ん？」

不意に、歩いていると後ろから呼び止められた。
誰かと確認すれば、
「あぁ、ども」
「こんにちは、久しぶりね」
長谷家行きつけの惣菜店。孝行の看板娘であるよい子がいた。
見るにどうやら商店街で買い物帰りらしい。
書店の紙袋を片手に持っている。
・・・・・・アタシが猫の写真集買ってる所と同じだ。
次回から鉢合わせしないように気を付けよう。
「今日はヒロ君とデートじゃないのかしら?
辻堂さんが一人で歩いてる所なんて始めてみたけれど」
「別に、一人で歩いてちゃわりぃかよ」
「そういうつもりで言ったわけじゃ・・・・・・
気を悪くしたならこめんなさい」
調子が狂う。
相変わらず穏やかで善人気質。
元よりひねくれた返しをした自分のほうが悪いのだ。

「いや、ゴメン。謝るのはこっちだ」
　素直に頭を下げる。
「え、あ。頭まで下げなくとも」
　何やら慌てているようだった。
　アタシが頭を下げたことが意外だったのだろうか。
　取り敢えず相手を困らせるつもりはないので、すぐに頭をあげる。
「で、何でアタシが一人で歩いてるかだっけか」
「別に詮索するわけじゃないから言わなくてもいいのよ」
　別に隠すつもりもない。
　むしろコイツが知っているか期待して訪ねてみるのもいいかもしれない。
「大を探してるんだ、携帯もつながらねぇし。
　アンタ大がどこにいるか知らないか？」
「ヒロ君・・・・・・う～ん」
　顎に指を添えて考えている。
　その仕草を見るに知らないけれどどこに行ったか心当たりを探してるといった具合か。
「ごめんなさい、ちょっと私はわからないわね。

力になれなくてごめんなさい」
「二度も謝らなくてもいいって」
こういうのを俗に言う良い人というのだろう。
実に裏表なくいい奴だと思う。
はっきり言って友人になれそうだ。
しかし残念。
大の居場所について有益な情報は得られなかった。
僅かにため息をついてしまう。
「あれ、ヒロ君かしら?」
「え?」
「ほら、そこ」
指す方向を視線でなぞる。
すると少し離れた交差点のところには見慣れた彼氏の姿が。
「・・・・・・なんかやつれてないか?」
「そうね、何かいつものヒロ君と違って顔色が・・・・・・」
一目みてわかるほど。それほど何やら大の様子がおかしかった。
いや、もう全身から疲れている感じが伝わってくる。

疲れているのに気力は漲っているのがさらに違和感を引き立てる。
もう見た感じおかしいのだ。
やたら服がボロボロになってるし。
あれか、ワイルドデビュー失敗か。
でも、見つかって良かった。
早速声をかけることにする。
とはいえここから大のところまで結構距離がある。
まさか商店街のど真ん中で遥か遠くの彼氏に大声で声をかける真似はしない。
そんなことをしたら周りの目がイタすぎる。
なので、取り敢えず進むことにした。
大は信号に引っかかっているらしく。
少し目に手を当てて息をついている。
本当になにか参っている様子だ。
「ちょっと待って」
「あぁ?」
不意に後ろ手を引かれた。
それに釣られて足を止める。

何事かと思いよい子を見ると、微妙に青い顔で上を見ている。
なんだろうとアタシも上を見ると――――
――――アタシの数歩先に商店街一角にある店の看板が落ちた。
それが地面に落ちた際の粉砕音と事態そのものに思考がフリーズ。
「やっぱり、これ辻堂さんに会う前からかなり揺れてたからそろそろ落ちる気がしてたの」
九死に一生を得たというところだろうか。
マジで危ない所だった。
こんなチャチな看板に潰されたところでアタシなら軽い怪我で済むが、一般人が潰された日には新聞ざただ。
「さんきゅ、助かったよ」
取り敢えず礼を言って再び大に視線を移す。
この看板の処理や対応は他の奴らに任せておけばいい。
どうやら信号は青にかわり、歩行者が全員道路を渡り出した。
見た所、大はこっち側に来るらしくこれならばこちらから向かう必要はなさそうだ。
少し微笑む。
そうだ、いいことを思いついた。

まだ大はこちらに気づいていないし、これなら突然後ろから驚かすのはどうだろう？
そう決めてアタシは良さそうな隠れ場所を探す。
「何してるの？」
「何でもねェよ。アンタはこれからどうすんだ？
アタシは大とどっか行くけど」
「あら、ふふ。それじゃあお邪魔虫は退散しようかしら」
気遣いのできる女である。
優しげな微笑みを浮かべている。
実の所コイツのこういう所は嫌いじゃない。
そう思いながら、よい子に礼を言おうと思い振り返る瞬間。
有り得ない現場を見た。
「え？」
青信号の歩道をわたっている大。
その前には若い大人の女性とその娘らしい小さくて可愛い少女があるいている。
それ自体はなんて事はない、普通の風景だ。
だが、アブノーマルなのは別にある。
その二人にタイミングを合わせるように、減速しないオートバイが車の隙間をすり抜

けながら走っている。
オートバイの運転している奴からみて横断歩道は死角だったらしく、誰かが歩いているかの確認ができない。
だというのに既にオートバイは停止線すら超えて、尚減速どころか加速。
明らかに信号無視。
「拙い！」
全力で走る。
間違いなくこのままではあの二人がオートバイに轢かれる。
そうなれば大怪我は必死だ。
死ぬ気で走る。
そして一秒走って気づく。
間に合わない。
その詰んだイメージに頭が真っ白になる瞬間。
『危ない！』
そう叫んで二人を突き飛ばし、二人の代わりにオートバイに撥ねられる大がいた。

「いやぁ、死ぬかと思ったね」
「いや、そこは病院送りになってアタシが泣く展開だろ。
死ななくて本当に、マジで、ありえないほど、これ以上ないくらいに嬉しかったけどよ」
大はピンピンしていた。
なんて事はない、どうやら撥ねられる瞬間素早く回避行動をとってカスリ傷程度で済んだ。
とはいえカスっても当たったものは高速で動くバイク。
しばらくは当たった箇所の痛みに耐えていた。
「ヒロ君、本当にほかに痛いところはない？
頭とか、胸とか、本当に痛いところはないの？」
「心配しすぎだってよい子さん」
因みにバイクの奴はひき逃げしようと、大を撥ねたあと直様逃げ去ろうとしたので、

即座に追いかけて捕まえた。
今頃は警察のお世話になっているだろう。
アタシも直々にヤキ入れしようかと思ったが、大に止められた。
「でも、うん。ヒロ君、よくできました」
何やらにこにこと笑いながら大の頭を撫でるよい子。
かつてないほどに上機嫌だ。
「現実に誰かを身を挺して助けるような場面なんて殆どないはずだけど、
でもヒロ君がそういうことをできる人って事がわかってよかった」
確かに、アタシも彼女としてかなり鼻が高い。
先程大に助けられた親子も何度も何度も頭を下げては大に感謝していたが、
我が事のように誇り高い気持ちになったのだ。
ただ、何やら大はむしろその事に申し訳なさそうな顔をしていたのが気になった。
「・・・・・まぁ、かくいう私も一度ヒロ君に庇われたことあるけれど」
ボソっと、聞こえるか聞こえないかのボリュームで囁いた。
大は気づかなかったらしく、別のところを見ているがアタシは聞こえた。
「へぇ、そうなんだ。どういう事があったんだ?」
「え、あ。べ、別に大したことじゃないのよ!?」

慌てて口ごもる。
何やら言いづらいことらしい。
ならば深く追求はしない。それくらいの気の効かせ方はできる。
「さて、痛みもなくなったしそろそろ俺も行くかな」
大はゆっくりと公園のベンチから立ち上がり、アタシたちに背を向ける。
「ちょっと、どこ行くんだよ」
このままアタシとデートをしよう、とまで言う勇気はなかった。
隣によい子がいなければ言えたのだが。
「あはは、目的地はないけど今日一日はひとりきりでいたくてさ」
「え、えぇ!?　クリティカルショック！」
そんな。
まさか一人でいたいなどと、アタシが隣にいる状況で言われるなんて。
なんだろう、もしかしてアタシって大にとってウザイ行為でもしていたのかもしれない。
でも大は優しいからそんなこと絶対ストレートに言えないし、
つまりこれはアタシが嫌われる前兆てきなアワワワワワワ。
「つ、辻堂さん？　何か顔色がロックマンみたいに青いけど大丈夫？」

よい子が心配げな顔をしてアタシの顔を覗き込む。
だがアタシはそんな事に構っている暇はない。
「ひ、大！」
「うん？　どうしたの愛さん」
特に含むものもなく、普段通りの様子でこちらを振り向く大。
違うことがあるといえば多少やつれている感じか。
「あ、アタシが何か大の気に障る事をしたのなら正直に言ってくれ！
頑張って・・・・・・少し手こずるかもしれねぇけど直すからさ！」
大の肩を持って真っ直ぐ訴える。
死んでもアタシは大に振られたくない。
それを防ぐためなら何だってする。
「わぁ・・・・・・青春ねぇ」
少し嬉しそうにこちらを見学するよい子。
あっちいきやがれ。
とにかくコイツを無視して大の反応を見る。
これでもあやふやにごまかされたらアタシは恐らく立ち直れない。
何が悪いのかすらわからないのが一番怖いのだ。

だが、大の反応はアタシにとって意外なものだった。
「愛さんに直して欲しい所なんてないよ。
うん、ずっとそのままの愛さんでいて欲しい。それじゃ」
柔らかく微笑んでその場を去る大。
・・・・・・今のは確実に本心だった。
一切の含みもなく言いよどみもない。
あれが嘘だとしたら人の喋る全ての言葉が嘘に聞こえるだろう。
「・・・・・・」
「辻堂さん？」
「はっ!?　精神停止してた！」
呆然と大の背中を見つめていたところをよい子に呼ばれ意識を取り戻す。
「それで、ヒロ君行っちゃうけど辻堂さんはどうするの？」
「知れたことか！　尾行する！」
「恋する女の子は犯罪行為もいとわないのねぇ」
困ったような顔をするよい子。
だがそんなことはどうでもいい。
どうやら大は一人になりたいそうなのでそうしてあげる。

しかし、何故一人になりたいのかは以前として不明なのだ。
その理由を突き止めてやる。
断じて浮気ではないと言い切れる。
大はそういう事をごまかすのがきっと下手だし、そもそもアタシを裏切る事なんてするはずない。
死ぬほど大が好きなアタシが大を裏切らないように、きっと大もそう思ってくれているはず。
「じゃあ私もついていこうかな」
「え、アンタも来んの？　意外っていうか」
こそこそとついていくアタシの後ろに続くよい子。
こういう事にはあまり乗り気ではなさそうなのだが、どういう心境の変化だろうか。
「ちょっと今日のヒロ君の様子が気になって。
何か今日はいつもより顔色悪いし」
「ふうん」
面倒見が良いことで。
別に大とデートするわけでもなし、ついてくるのなら勝手にするといい。

「あぁもう！　なんだよなんだようっざい！」

今日は厄日である。

何をしてもうまくいかない。

「あずは興味ないっていっつってんだろ！

いい加減辻堂軍団のことなんかテメェらだけでやれよ！」

朝、起きた時にまず寝違えて首を痛めた。

そのままバイトに出れば強烈な津波で全身海水まみれ。

バイト終わって自宅でシャワー浴びようとすれば断水。

これは事前にポストの連絡票を確認していなかった自分が悪いのだけれど。

そして諦めて恋奈様のお風呂を借りればまさかのティアラさん達やハナちゃんセンパイ方とのブッキング。

二人に会ったことはいいのだが、二人が突然風呂場でバカやりだして散らかした際に気付かなかった石鹸を踏み抜いて転倒。

頭にはでかいタンコブができて今なお痛い。
しかも心配してくれたのは恋奈様だけ。他二人いつかぶっとばす。
精神的にも肉体的にも頭が痛いところに辻堂集会の緊急連絡。
もういい。
もういい加減うんざりだ。
電話の向こうではバカ女が怒鳴っているが知ったことではない。
「どうせ今回も辻堂センパイや長谷センパイこねぇんでしょ！
だったらいかねーっつぅの！　そんじゃバイバイ！」
一方的に切る。
今日は辻堂軍団でバカやる気分じゃない。
そもそも辻堂軍団は基本稲村学園の生徒しかはいれないのだ。
なのに例外として入れられた自分が気がつけば中核になりつつあった。
喧嘩になれば何故か自分が庇うシチュエーションが多々有り、結局新人の入団吟味だって自分が大抵見る羽目になった。
アホかじゃないのか。
自分は辻堂センパイや長谷センパイが卒業すれば同じく不良卒業する。
そんな自分を頼るなどと。

・・・・・面倒くさいけどちょっとどこか嬉しかったりしない事もない。
が、はやり面倒。ごめん被る。
「はぁ、もう何やってもロクなことがなさそう。
大人しく家に篭ってようかなぁ」
今日はどうにもロクなことがなさそうだ。
せめて気分を変えようと真新しい財布を買ってみたが、どうにも失敗した。
別に財布自体のデザインとかは満足しているのだが、いざ今までの財布とチェンジするとなると躊躇したのだ。
思いのほか前の財布の方にも愛着というのがあったのだろう。
買ったばかりの中身の入っていない空財布を見る。
結局これは買っただけで御蔵入りとなりそうだ。
だったらもう少しお金を貯めてピアス買えば良かったか。
ふぅ、とため息を吐く。
「いただき！」
「・・・・・・？」
目を閉じてため息を吐いていると、背後から通りすがりに見知らぬ男が財布を奪っていった。

その背中を呆然と見送る。
いや、あれ中身空なのだけれど。
それにどうせ使う予定もないし、別にパクられても
「良いワケねぇっすよねぇ、ぶっ殺してやる」
生憎とああいったバカはムカつく。
あの手際を見る限りここいらを縄張りにしている盗人だろう。
ここは一つヤキ入れをしてやる。

「すすすすすいませんでしたぁ！」
「あぁ別に謝る必要はないっすよ」
バイクや車ならまだしも自足による逃亡ならば話にならなかった。
大した手間もなく、あっけなく追いついてひっとらえたわけだ。
無論ここからはちょっと子供に見せられない事をしようと思うので、路地裏まで引き

ずったけれど。
「取り敢えずこれ、返してもらいますねー。
げ、手汗ベットリ・・・・・きったねぇ」
握りしめていた自分の財布を取り上げるも、緊張しきっているのか汚らしい手汗でびしょびしょになっていた。
ダメだこれ、もう価値ないわ。
「ちょっと、どうすんだよこれ」
潔癖症なわけではないが、買ったばかりの真新しい財布を気に入らない男に鷲掴みにされ続けて、
その挙句汗まで付けられるなどたまったものではない。
実際この財布を触っていた時間はコイツの方が長いくらいだろう。
ふと、ここで思いついた。
「ねぇ、財布盗んだの許してあげるからこの財布買い取ってくれません？」
「え、あ、はい！」
拒否権はない。
頷かないのならば肉体的に痛めつけて無理矢理でも押し付ける。
それを速くも理解しているあたり中々どうして、やりやすい。

「ど、どうぞ！」
「いや、財布そのまんま渡されても」
これではカツアゲしているみたいではないか。
幸いにして周りに人の目がないからいいものの。
「じゃ、財布代だけもらっとくから」
いきがったヤンキーが好みそうなゴツくて高そうな財布の中身を見る。
すると思った以上に入っていた。
諭吉が七人程いる。
金随分まとめて持ち歩いてるんだなぁコイツ。
カツアゲしてた時代の自分が見れば美味しい獲物だろう。
確か買った財布は二万だから、二人ほどこちらの財布に旅立ってもらおう。
そしてその万札二枚をこいつの財布から引き抜いた瞬間。
「乾さん？」
「・・・・・・え？」
――――ついていない。それがここに極まった。
声のした方向に視線を向ければ、そこには長谷センパイの姿があった。
センパイは目を見開いてこちらを見ている。

それも仕方ない。
だって明らかに今自分がしていることはカツアゲ現場に等しい状況なのだから。
「ち、違うんです！　あずはカツアゲなんてしてたわけじゃ！」
お金も男も放り捨てて長谷センパイに駆け寄る。
違う、自分は別にそういうことをしていたわけじゃない。
だがうまく弁明が思い浮かばない。
ただ単純に買ったばかりの財布を汚されたから買い取ってもらっていると、
そう伝えればいいのにそんな簡単な言葉すら口から出ない。
そもそもそれを伝えれたところで過去の行いを振り返ればとても信用できる話だとは自分でも思えない。
「だ、だから！　自分は！　えぇと、あの！」
「・・・・・・ふむ」
まともに言葉を発せない自分とは違い、長谷センパイは顎に指を添えて周りを見る。
そして何か理解したのか、一度軽く頷いた。
「察するに」
「へ？」
「買ったばかりの財布を盗まれて、一応取り返したものの汚されたから弁償してもらっ

てたとか
そんな感じだったり？」
・・・・・・おぉう。
なんだろうか。
キュンと来た。
センパイの冷静な態度に自分も感化されて落ち着いてきた。
「自分で言うのもなんですけど、これ、カツアゲしてるようには見えません？」
「見えるか見えないかと言えば見えるけど、乾さんはしないと思うし。
何より、漁船のバイトで頑張ってる乾さんが今更そういう事するとは思えない」
こういうのを信頼というのだろうか。
見ている光景をそのまま受け取らず、そこから考察してその光景の詳細を考える。
これは簡単なようで難しいことだと思う。
やっててよかった漁船バイト。
魚くさくなった甲斐があったというものである。
あ、これ進研ゼミでやった！
とかテスト中叫んでいる子供もこんな気分なのかもしれない。
「カツアゲしてたの？」

「してねーっすよ！　っていうか今の長谷センパイの言ったことがそのままの状況でした！」
　ついてないとか言ってた数分前の自分が途端に小さく見えてきた。
　むしろ長谷センパイの信頼を感じられた素晴らしい日だった。
「それじゃ、邪魔してごめんね。俺はこれで失礼。
　あ、あんまり暴力は推奨しないよ」
「え、ちょっと待ってくださいよ」
　折角ノーアポイントメントで会えたのだ。
　だったらこのまま今日は一緒にいたいところなのだけれど。
　長谷センパイはこちらを振り向くことなく歩いていく。
　拙い、意外と歩くの早い。
　すぐに追いつこうとしないと見失いそうだ。
「そんじゃ財布はやるから金もらってくぞ」
「あ、は、はい」
　もうスリなんぞどうでもいい。
　金だけ拝借して汚された空の財布を投げつけながらその場をあとにする。
「・・・・・・ぐ、いない。

見失ったか」

無念。

気配を探るもこんな人ごみあふれるショッピングモールじゃ見つけられるわけもない。

余りの無念さに僅かに地を睨む。

むぅ。

長谷センパイに信用されていることを理解できて嬉しかったが、それでも今日デートできなくて残念。

「おいおい、梓。テメェ大と何話してたんだ?」

「・・・・・・何でこんな所にいるんすか」

落ち込んでいると、背後から辻堂センパイが声をかけてきた。

どうやら自分と長谷センパイが話していたことを知っているようだが、内容までは聞こえなかったらしい。

「大追ってんだよ」

「犯罪っすね。ストカー見つけたり」

「黙れ、なんと言われようがアタシは引き続き大追いかける。

誰にも邪魔はさせねぇ」

つまり今日一日辻堂センパイは長谷センパイのストーキングをしていると。
こえぇ。かなり病んでる。
それに意外なことにこういう事にかかわらないだろう人の姿もあった。
「総災天センパイなにやってんすか」
辻堂センパイに聞こえないようにギリギリまでトーンを落として尋ねる。
彼女は自分と同じく比較的常識派だったはずなのだが。
高校と一緒に常識も卒業したのだろうか。
「仕方ないだろう、辻堂の真似ってわけじゃないが今日の彼は少し様子がおかしい。
だったら万が一の時に備えて近くにいてやらないと」
「だったら最初から一緒に長谷センパイと行動すりゃいいじゃねーっすか。
なんでこんな犯罪まがいな事」
相変わらず卒業しても猫かぶっているようだ。
表情は長谷センパイの前で作っている笑顔だが、喋り方はヤンキー時代のものである。
そのギャップがシュール。
「それは俺も辻堂も思ったが、どうにも彼は今日は一人になりたがっててな。
理由は知らんが、彼の意思を尊重しているわけだ」

いや、尊重しているのならストーキングやめてやれよ。
「何の話してんだお前ら?」
「なんでもないのよ～」
「猫かかぶるのはやッ」
「黙れ」
この人疲れないのだろうか。
ともあれ、どうしたものかと思考する。
今しがた長谷センパイの信頼を得ていたことに大喜びした。
その次にいきなり長谷センパイのストーキングってありえない気がする。
駄菓子菓子。違う、だがしかしだ。
二人の言う長谷センパイの様子がおかしいというのに引っかかった。
「自分もついていくっす」
辻堂センパイなら多分一度長谷センパイを見つけたら見逃す事もないだろう。
今だって辻堂センパイの視線の先には長谷センパイの姿があった。
高いステータスをこういう犯罪行為に使うのはどうかと思うが。
何にせよ、品行方正の長谷センパイの様子がおかしいのは気になった。

「・・・・・・なんかさ、おかしくないか？」
「そうねぇ」
長谷センパイの尾行を開始して数時間。
少しづつだが何がおかしいのか理解し始めた。
「長谷センパイとその周囲にいる人、やたら何か危ないイベント巻き込まれてません？」
長谷センパイが人ごみに入れば何故か色々トラブルが発生する。
それこそひったくりが現れたり、いきなり歩道に車が突撃したりと程度は差があるが。
ともあれ、アクションすれば必ず何かしらトラブルが起きている。
しかも、長谷センパイは何度か裏路地などの人気のない所にいくと必ずそこにはヤバげな人間がいたりする。
どうやら自分の時もこのパターンだったようだ。

つまり、意図して人気のないところに行きたがっているようだけれど。
毎回先客がいるというわけだ。
「尋常じゃなく今日のヒロ君はついてないわね」
「そういうレベルかこれ?」
確かに長谷センパイの今日のついてなさはやばい。
何かに呪われているかのように必ず災難に巻き込まれる。
ただ、それでも長谷センパイやその周囲の人間に目立った怪我などは一度も負うことはなかった。
これは持ち前の長谷センパイの運の良さによるものか。
なるほど、その日その日の運勢は落差が激しいが、持って生まれた運勢がそれをカバーするという話を思い出した。
因みに持って生まれた運勢が極端に悪い人間はまず生まれてくることがない。
故に強烈に幸運な人間はいても、強烈に不運な人間はいないらしい。
また事故死などはその日の運勢が強烈に悪く、持って生まれた運気ですらカバーしきれなかった場合に起きる。
よって『間が悪い』という意味になるのだろう。
今までは眉唾物な仮定だったが、少し信ぴょう性があるような気がしてきた。

「読めた！　今日は運が悪いから一人になろうとするけど、運が悪いから一人になれず延々と彷徨ってるって展開かこれ！
アタシってば名推理！　ドヤッ！」
「はい」
「はいじゃないが」
テンション高い辻堂センパイを肯定したら横かららぇぇと・・・・・・よい子センパイからのつっこみが。
大概面倒くさいなこの人の扱いも。
なんだかんだで長谷センパイには悪いと思うけれど三人での尾行も楽しくなってきた。
おうちに帰りたい。
でもセンパイが事故にあわないかは心配だし。
実の所、裏路地で長谷センパイは何度かタチの悪いヤンキーに絡まれたがその度に辻堂センパイや自分たちが殺気をぶつけて気絶させたり、
長谷センパイに気づかれないように逃げるセンパイを追うヤンキーを闇討ちしたりしている。
「おい、とうとう大が弁天橋渡るぞ。

次は何が起こると思う?」
「地震が起きて橋が折れるとかに一票っす」
「二人共、そんな会話はヒロ君に悪いでしょう」
相変わらずお堅い人である。
でも仕方あるまい。
必ずなにかすればトラブルが起きて、しかし被害は殆どないのだ。
もはや歩くイベントである。
今回は何が起こるのか。
ちょっとワクワクしながら橋の外側から眺めていると。
不意に橋のしたの海に妙な箱が浮かんでいた。
しかし残念ながらこの位置からだと中身が見えない。
「辻堂センパイ、あの箱に何が入ってるかわかります?」
「あ? どこだよ」
「ほら、あれです」
指差すと辻堂センパイも見つけたようだ。
集中して目つきを鋭くしている。
「・・・・・・ッ!」

「え、辻堂さんどうしたの」
中身がなにかわかったらしい。
辻堂センパイは慌てたようにその場を走り去る。
取り残された自分とよい子センパイは呆気にとられた。
どうしたものかと長谷センパイに目を向けると、これまた意味不明な展開がひろがっていた。
「あ、飛び込んだ」
「飛び込みましたね」
長谷センパイが危機迫った顔で着の身のまま海に飛び込んだ。
何事かと食い入るように見ると、長谷センパイも辻堂センパイもあの箱に向かっていたのだ。
辻堂センパイは長谷センパイが海に飛び込んで箱を回収し、陸に向かって泳ぐセンパイを見て直様姿を隠す。
こちらからは丸見えだけど、まぁあれなら長谷センパイからは見えないだろう。
しかし、一体あそこまでして何であの箱を引き上げたのか。
僅かに考察する。
しかしその答えはすぐに理解できた。

『なぁ～ご』
『うん、濡れてないね。良かった』
長谷センパイが箱から一匹の猫を抱き上げた。
なるほど。
捨て猫が流されていたということか。
・・・・・これ、長谷センパイか辻堂センパイが助けないと結構えげつないことになってたな。
子猫は抱かれたまま抵抗せず、むしろ擦り寄る。
猫が人に恩を感じるとは思えないけれど、中々人馴れした猫である。
「ヒロ君ったら、あんなに水浸しになって。
帰ったら冴子さんに怒られちゃうわよ」
「そういいながら凄い嬉しそうな顔してますね」
口では小うるさい事を言うものの、顔はもうデレデレである。
それこそ運動会で一等賞をとった我が子をみるような、
取り敢えずもう褒めたくて仕方がないような雰囲気を出すよい子センパイ。
この人も中々長谷センパイにヤられてるんじゃないだろうか。
ともかく猫はどうするのだろうと、そう思うと、子猫は不意に長谷センパイの胸元か

ら飛び退いた。
そしてそのまま長谷センパイから離れていく。
何事かと思ったが、子猫の進行方向を見て理解した。
『なんだ、お前野良だったのか』
『ナァ～』
子猫の隣にその親猫が現れた。
ふむ、どういう経緯かは知らないが取り敢えず捨て猫ではなかったようだ。
長谷センパイも追うことなく、ゆっくりと歩き去る子猫と親猫を眺める。
さて。
今回も長谷センパイは結果として全身海水まみれとなった。
しかも猫は野良で恩返しをすることもない。
結果として単純についていなかったということだ。
さすがにへこたれるかと思い、ちらりと長谷センパイの顔色を伺う。
だが意外なことに長谷センパイの顔色は爽やかなものだった。
一応今日一日のハプニングによる疲労の色はあるものの、気力の方はむしろ今までより満ちているように見える。
不思議な人だなぁ。

ただ、やはり目を離すのは心配すぎる。
引き続き監視を続けよう。

３１話・ラッキーアンドアンラッキー！（中編）

「見たか、あれアタシの彼氏なんですよ」
「うっざ」
「まぁまぁ、辻堂さんの気持ちもわからないでもないし話くらい聞いてあげても」
長谷センパイが猫を助けたあとから辻堂センパイがずっとこんな感じである。
もういちいち長谷センパイの自慢してきて鬱陶しい事この上ない。
大体、辻堂センパイに言われなくとも長谷センパイが良い人なのはわかりきっているし。
「思ったんだけど、今日のヒロ君って本人がついていないというよりは他人の不幸に巻き込まれてる？」
「ああ、それはアタシも思った」
何を今更。
所々でみれば長谷センパイに直接被害が向いていることもあった。
それこそ車が突っ込んできたり、鳥のフンを落とされたりと程度の差があるものの何度かあった。

けれど、総合的に見れば長谷センパイの近くにいる他者の不幸に介入して自身に被害が及んでいるほうが多い。

迷子の子供を送り届ければ道中に不良に絡まれたり、

信号渡れば前方不注意の車やバイクが毎回他人に突っ込んできたり、

川の近くを通ればどんぶらこと猫や子供が流されていたり。

とにかくついていない。

しかし、どうやら長谷センパイはめげていないようで、未だ諦めず人のいないところを探し歩いている。

ついていないのだから絶対見つからないとおもうのだけど。

「あ、恋奈様だ」

「チッツッツ！」

「舌打ちで空気震えたわよ今」

見ればビショビショで弁天橋を歩いている所に、恋奈様が長谷センパイと鉢合わせていた。

長谷センパイは気さくに挨拶をする。

『こんにちは。さようなら』

『まてや』

『ぐぇっ』
ヒットアンドアウェイをするように近づいて挨拶。
そして直様立ち去ろうとする長谷センパイの襟を後ろから掴んで引っ張り倒す恋奈様。
今日もいつも通りワイルドである。
『・・・・・・なにするのさ』
『今何をしたのかではなく、今から何をするのかを聞くべきね。
ほら、行くわよ』
『え、どこに』
こっそりと近づいて聞き耳を立てる。
硬派な辻堂センパイも気になるようで、かなり集中して聞いている。
『さっきの見てたのよ。ビショビショになっちゃって、そのままじゃ風邪ひくから私のホテル来なさい』
瞬間。雷が真横から落ちた。
正確には雷のような音が真横からしたということだけれど。
何事かと思い、恐る恐る横目でとなりを見る。
「あのアマぁ！　誰のカレシをホテルに誘ってるのかわかってないようだな」

「ちょ、辻堂さん落ち着いて！　恋奈も別に親切心からの誘いであって別にいかがわしい事を誘ってるわけじゃ！」

慌てて辻堂センパイを取り押さえるよい子センパイ。

相も変わらず苦労人気質だ。

「で、どうするんすか？」

流石にホテルの中入られたら自分らでもバレると思いますけど」

自分の問いかけに冷静さを取り戻したらしい、辻堂センパイは思案に暮れる。

考えながらもホテルに向かう二人への追跡をやめないあたり業が深い。

あ～、やっぱり長谷センパイに悪いしもう自分は帰ろうかなぁ。

でも、心配だしなぁ。

数分歩いて、ふいに辻堂センパイは足を止めた。

そして腕を組み一言。

「おい、梓。お前が行け」

「ざけんな」

こうなる気はしていた。

何せ自分は恋奈様のホテルに無許可でも入れる事を許されている。

無論既に警備員の人とも顔見知りだし、今更侵入した所で不審がられないだろう。

「バレたらどうするんすか。流石に建物の中でストーキングして気づかれないほど変態スキル高くないんですけど」
「やってみなきゃ分かんねぇだろうが。
アタシはお前を信用してる。それに評価だってしてる。
だからこんな事をお前に頼んだんだ」
こちらの肩をガシっと捕まえて、真っ直ぐな目で見つめてくる。
「大丈夫だ、もしバレたときはアタシも一緒に謝ってやる。
全責任をお前だけに負わすなんて腐った真似をするわけない。
だから安心して行け」
やばい、言っていることは当たり前のことかつ結局犯罪行為にあずを駆り立てているだけなのにちょっと感心した。
辻堂センパイにこんなふうに頼られたり信用されたら、ものすごく力と自信が湧き上がる。
なるほど、これがカリスマ持ちの威光というものなのか。
仕方ない。
不満もあるし、不服だし、不安だらけだがやってみるか。
「うまいこと乗せられたな。俺は手伝わんぞ」

「はなから期待してねーっすよ」
こういう時普段から猫かぶってるどころか別人のフリをしている人はお得である。
「手伝わんが、応援物資は渡してやる。ヤバくなったらこれを使え。
少しはごまかせるだろう」
そういって辻堂センパイに気づかれないようになにか渡してきた。
なんだろうかと思い、目を向ければ少し驚いた。
「随分でかいマスクっすね」
流石にいつも使っている黒いマスクではない。
薬局などで売っている大きな白い感染予防用の少し高いマスクだった。
なるほど、普段からこういうのを持ち歩いているのか。
この人いつか不審者として捕まるんじゃないのだろうか。
「あとはこれだ」
「まだあるんすか」
次に手渡されたのは白いリボン。
ふむ。これは時々髪を結んでいるやつだろう。
「あとは普段のイメージとは真逆の服装を着て目つきを変えれば完璧だ」
ベテランは語る。ついていけない。

とはいえ、偽装手段が増えるのは良い事だ。
あまり自分の髪は長くないけれど、髪を結ってマスクして目つきと雰囲気を変えればパっと見た感じは変えれるか。
「何の話してるんだお前ら？」
「なんでもないのよ～」
「そればっかだなお前」
この人ってどっちが本性なのだろうか。
などと一瞬疑問に思ったが、それはまた別の話でわかるのだろう。
深くは考えないことにする。
取り敢えず、リボンとマスクをポケットにしまいこみ、既にホテル目前についた二人に視線を送る。
『やっぱいいよ。俺は近くのコインランドリーいくからさ』
『アホか。コインランドリーで服洗ってる間アンタは全裸でそこにいる気か』
『いや、うん。まぁそうなるよね』
『じゃあいいわ。行きなさいよ、警察呼んであげるから』
『ひどすぎる』
半ば強引に恋奈様は長谷センパイをホテルに引っ張り込んでいった。

びしょびしょに濡れている長谷センパイにむしろ積極的にくっついていくあたり、中々本気なようだ。

「おい梓、ミッション変更。恋奈を始末してこい」

「ざけんな」

今日の辻堂センパイは暴走しすぎである。

「おや、乾さん。恋奈様なら先程男の子と戻ってきたところですよ」

「あはは、ども」

エントランスの受付のスタッフに声をかけられる。

まさかその二人を尾行しに来ましたなどと言えるわけもないので、愛想笑いを浮かべながら切り抜ける。

特に警備員も受付のスタッフも自分に不審な目を向けることはない。

当然だ、何せ自分は恋奈様と懇意にしている人間だ。

こういう時はむしろ堂々としているほうが安全である。
二人が使ったらしいエレベーターの前に立ち、上にある現在止まっている階層番号をみる。
ふむ。どうやら入浴場らしい。
まぁ、まずは服を洗うよりは体を洗う方が先決か。
自分はエレベーターを出た瞬間鉢合わせしないように階段の方から行くことにした。

『ほら長谷、背中流したげるからこっちに来なさい』
『いや、そんなの自分でできるってば』
うぅむ。
これは、その。
取り敢えず携帯を取り出して辻堂センパイに連絡する。
ワンコールで通話状態に移行。

どうやら辻堂センパイはずっとスタンバイしていたようだ。
「どうやら長谷センパイと恋奈様は浴場で洗いっこしてるみたいっす」
『殺せ』
まじでか。
ストーカーからアサシンに転向かよ。
『辻堂さん。注文通りしらすクリーム買ってきたけど、本当にこれでよかったの？』
『ああ、アタシはこれでいいよ。まっずいけど、結構好きだからさコレ』
どうやらお二人は外で湘南ライフを満喫しているようだった。
・・・・・・あずが一人ミッションインポッシブルしている間に二人は随分楽しそうで。
何か真面目にやっている自分がバカみたいだ。
『はっくしゅん！』
『げぇ！　俺のタオルが！』
『うおわあああああ！　しまいなさいよその粗末なエレファントカシマシ！』
『俺のメリッサが粗末ですと!?　あ、やばい俺のジョバイロが視線にさらされてサウダージしてきた』
『ちょ、ハネウマライダーしてるっ。長谷アポロがネオメロドラマティックしてるぅっ

！』
何をやっているのだろう。
凄く気になる。
気づかれないようにこっそりと浴場の戸を少しだけ開けて除くことにした。
湯気で少し見づらいものの二人の姿はある程度鮮明に見えた。
どうやら自分が覗いた頃には長谷センパイが恋奈様からタオルを奪い返したあとらしく、現在進行形で腰にタオルを巻いていた。
因みに恋奈様は水着着用している。
自分のホテルだし、しまっていたものを引き出したのだろう。
というか、成長期なのに去年の水着が普通に入っているのか。
恋奈様、哀れな。
『ッ!?　曲者！』
「あぶな!?」
突然恋奈様がこちらを振り向いて風呂桶をフルスイング。
ギリギリ隙間から目を離し、桶をかわす。
先程まで自分のいた箇所に凄まじい速度の風呂桶がシュートされた。
あっぶねぇ。急いで隠れなければ。

さしあたって脱衣場のトイレなどいいかもしれない。
急いで、かつ物音立てずトイレに隠れる。
『・・・・・・気のせいか。今何かムカつく視線を感じたのだけど』
恋奈様が桶を取りに脱衣場に着て、そのまま再び浴場に戻っていった。
今のは肝が冷えた。
「辻堂センパイ、自分帰っていいすか?」
『ダメだ。敵前逃亡は死罪だ』
「ご無体な」
大体長谷センパイに限って辻堂センパイ以外に手を出すとは思えないのだが。
散々アピールしている自分にすらキスまでしか進んでいないし、それもこちらからする側に限定されている。
・・・・・・そろそろ逆レイプしようかと目論んでいるが。
まぁ今はそれはどうでもいいことだ。
取り敢えず脱衣場に戻り、再び浴場を覗く。
なんでこんなことを自分がしなければ。
視線をさまよわせれば、既に長谷センパイと恋奈様は湯船。
というか露天風呂に使っていた。

『ふと思ったんだけどさ、なんで片瀬さんまで一緒に入浴してんのさ』
『アンタの海水まみれの服でビショビショになったからよ』
だったら時間ずらせや。
『だったら片瀬さんが出るまで俺は待ったのに』
『そんなの時間のムダ。アンタの裸なんか興味ないし、私は水着があるから混浴のリスクもない。
だったら今現状の選択は間違いじゃないでしょう』
『経営者らしい考え方だね』
『そりゃどうも。褒め言葉ね』
何だかんだで楽しそうな二人である。
いい空気だなぁ。
自分も混ざりたいなぁ。
別に自分は長谷センパイや恋奈様に裸見られてもいいし、このまま偶然を装って乱入しようかな。
「って思うんですけど、どうでしょう？」
『だめ』
「あぁん」

あれもダメ、これもダメ。
アンタは自分のおふくろか！
と、怒鳴りそうになるもののこらえる。
『あれ、タオルどこにおいたかしら』
『タオルね・・・・・あ、あそこにあるよ』
『ホントだ。よっこいしょ』
婆さん臭い掛け声を出しながら恋奈様は湯船から足を出す。
『片瀬さん、足元気をつけてね』
『子供扱いすんなや。大体ここは私のホームよ、そんなの心配しなくても――――』
後ろを向いて喋りながら歩く恋奈様。
だが本人は気づいていない。
その進行方向には濡れて滑りが良くなった石鹸が落ちていることに。
ベタだなオイ。
『うひゃあ!?』
『それ見たことか！』
案の定石鹸を踏んで、オーバーヘッドキックをするように回転する恋奈様。
それを素早く反応して駆け寄る長谷センパイ。

間に合うかどうか、微妙だが長谷センパイは一切諦めていないらしく、全力疾走。
恋奈様の背や後頭部がタイル張りの床に直撃するその瞬間
『セェエェエェフ！』
ヘッドスライディングを決めて見事にキャチ。
恋奈様、九死に一生である。
だが、まだ長谷センパイの見通しは甘い。
『ちょ、長谷ッ！　止まりなさいよ！』
『無理ですわ、地球の慣性舐めたらいかん』
勢いつけてスライディングしたのだ。
そりゃ滑るわ。
長谷センパイは腕に恋奈様を抱えたまま、結構な速度でタイルの上をスライディング。
そしてそのまま目前に壁が。
『アダダダダ！　いたい！　股間がタイルで擦れていたい！
あ、でも何かに目覚めそう』
『いやぁぁぁぁ！　目覚めてる場合じゃない！
壁っ、壁と長谷に潰される！』

数秒後。

『むぎゅ！』

恋奈様が潰された音が浴場に響いた。

一瞬で気絶する恋奈様。

見た目からはわからないが、どうやらいつもの不死身さを発揮する前に意識が飛ぶほどの衝撃だったらしい。

けれど、まぁ。あのままタイルに後頭部を強打するよりはマシだっただろう。

やれやれである。

取り敢えず、長谷センパイは恋奈様をクッションにしたおかげで無事らしい。

お腹が擦り傷だらけではあるが、取り敢えず問題はない。

よし、これはチャンスだ。

「長谷センパイ、さっきぶりっす」

「え、なんで乾さんがここに」

服を素早く脱いで、同時に体に恋奈様が脱衣場に置いていたバスタオルを巻いて乱入。

今恋奈様が意識を失っている、ならばそれはイコールチャンスだ。

幸いにして今この現状で辻堂センパイが乱入する恐れもない。

あの人は今外で悠長にアイス食っている筈。
作る。ここで既成事実を。
長谷センパイは慌てて腰のタオルを巻き直し、あずを恐れたように後ずさりする。
「乾さん、何か怖い」
「ふふ。その怯えた顔、無防備な姿。凄くいいっすよ」
時間に余裕はそれほどない。
今回のチャンスはあくまでも誘発的なもの、悠長にしてられる程ではない。
長谷センパイが一歩下がった瞬間、一気に間合いを詰める。
「ばぁ」
「うわ!?」
驚かすように長谷センパイに顔を近づける。
突然こちらの顔が目前に現れて期待通りの反応をする。
いいね、グッド。
だがまだだ。
長谷センパイは辻堂センパイ以外には草食系だ。
中途半端な追い詰め方では逃亡されかねない。
長谷センパイの背後に回り込み、関節技を決めるように体を密着かつロックする。

腕を完全に決めているため、無理に動こうとすれば激痛と共に腕の関節が外れるだろう。

「ちょ、乾さんっ。何を!?」

「何をとは、長谷センパイにしては随分と鈍いっすねぇ」

少しだけ決めている腕を動かす。

「うぁ！　痛いっイタタタ！」

ゾクゾクする。

そうだ、この感触、久しく味わってなかった。

人の体を壊すも生かすも自分次第の状況。

痛がる相手、嬲る自分。

たまらない。

興味のない相手を一方的に嬲り殺すのも楽しいけれど、

それが愛おしくて大切な長谷センパイが相手なら格別だ。

それこそ途方もない年月で熟成させ、圧倒的なブランドを得たワインを飲む行為に等しい。

積み立てに積み立てた自分と長谷センパイとの信頼関係。

そして好意。それを下地にしたこの状況。

肌が粟立つ程に高揚する。
「ふふ、痛いだけじゃないですよね」
与えるのは痛みだけではない。
可愛い可愛い長谷センパイだ、そんな彼に痛みだけしか与えない筈がない。
「こんなに体を密着させて、それに互いに裸。
背中、きもちいいっしょ？」
「ぐ、今はそんなことを意識できるような状況じゃ」
片手で長谷センパイの腕をロックし、フリーになった右腕を長谷先輩の首に回す。
そして思い切りこちらに体を密着させた。
その男性らしい広い背中が先ほどより強烈に密着する。
「女の胸は柔らかいだけじゃないんですよ。
硬いところだってあるんです。ほら、わかりますか？」
「な、なんでタオル巻いていないのさ」
タオルなど、長谷センパイの背後に回り込んだ時に脱ぎ捨てた。
いつまでもこちらの誘惑に崩れない長谷センパイに喝を入れるように決めた腕を少し動かす。
すると痛みに悶えるセンパイ。

ああ、最高だ。
胸を掻きむしりたくなるほど気持ちがいい。
堪らず、長谷センパイの首筋に舌をつけ、ゆっくりと頬まで舐めあげる。
「あは、センパイ緊張してますね。汗かいてますよ。
そのしょっぱい味、癖になっちゃいそう」
徐々に青ざめていくセンパイ。
完全にこちらに怯えている様子だ。
未だ何故あずがこのような凶行に及んだのか理解できていないのだろう。
「センパイ。もしかしてセンパイはあずがそこいらの女みたく普通の恋愛を望んでるとでも思ってました?」
イエスともノーとも言わない。
絞められた腕と首に意識が向いてそれどころではないのか。
流石に長谷センパイを必要以上に苦しめるつもりはない、
僅かに力を緩める。
そして少し安心したように息をつく長谷センパイの耳を甘噛みする。
「うお?!」
びくりと震えている。

「自分だって独占欲はあります。自分だって長谷センパイの特別になりたいっす。
だからこそ、今回みたく恋奈様と二人きりで入浴なんてしてて自分が嫉妬しないわけがないじゃないっすか」
「それでも、別に下心はなかったよ」
「下心があろうがなかろうが、その行為が嫉妬を抱かせるのに充分なんですよ」
少しだけ締める腕の力を増す。
それに応じて苦悶の声をあげるセンパイ。
「でもあずは長谷センパイを束縛する気はないっすよ。
だって、自分長谷センパイの彼女じゃないですし」
再び口を開かないセンパイ。
だが今言ったことは事実である。
「だから、自分と長谷センパイの間に彼氏彼女のテンプレートな進展は必要ないですよね」
付き合って、デートして、キスをして。
そしてムードを作って、最後にセックスをする。
そんなことは最初から期待していない。
「ねぇセンパイ。背中、きもちいいでしょ？」

胸を彼の背中に押し付ける。
「ぐ、乾さん。これ以上は――――うあっ」
「やめません、それに今聞きたい事はそんな事じゃない」
相変わらず唐変木なセンパイである。
更に力を強める。
「センパイならこのカラダを正面から見てもいいんですよ?」
耳元で囁く。
「それだけじゃありません。
好きに触って、弄って、舐めて。センパイの好きなようにしても良いっすよ?」
そう言って、一気に腕の力を強める。
今までの誘惑の後押として、強烈な痛みも与える。
この痛みから逃れるために頷きたくもなるだろう。
飴はいつでも与えるし、鞭だって飴を食べたいのならすぐにやめてあげる。
これが自分のアメとムチだが。
「・・・・・・乾さん。やめるんだ」
「へぇ、まだ抵抗するんだ」
大人しくあずを抱けばいいというのに。

「いや、俺もその誘いは嬉しいけれど今は拙い。
そこまでにしておかないと本当に拙い」
何がまずいというのか。
よくわからないが、取り敢えず周囲を見てみる。
あ。
「梓。どうやらテメェはアタシに謀反を起こしたようだなぁ・・・・・・」
詰んだ。
ここは露天風呂である。
そして、その外壁には辻堂センパイが座ってこちらを見ていた。
「どうやってここまで来たんすか」
「腰越みたいに外から駆け上ったんだよ」
「人間やめやがって畜生」
くそっ、くそっ。
あとちょっとで既成事実ができたのに。
ドロドロの肉体関係まであと一歩まで来たのに。
だがこうなったら仕方がない。
敵前逃亡は死罪だが、謀反は更に罪が重い。

多分ゲンコツで済むとはおもえない。
ここは――――
「さんじゅうろっけーってあれ――――あぶっ!?」
即座に長谷センパイが転ばないように優しく絞め技を外し、逃亡を図る。
が、一歩踏み出した瞬間、何かに足を掴まれて思い切り転倒。
何事かと思い、足を掴んだ何かを確認すると――――
「あぁぁぁぁぁずうぅぅぅうさあぁぁぁぁ!」
「ぎょえぇぇぇぇえ!?」
先程気絶した筈の恋奈様がリスポーンしていた。
復活早いなこの人。
というよりも鬼気迫るその顔が恐ろしい。近寄るんじゃない。
「テメェ、人の浴場をヤリ部屋扱いしようとしやがって・・・・・・この不審者が、ぶっ殺してやる」
「く、一面敵だらけ。こうなったら仕方ねぇっす。トランザム!」
「残念、魔王からは逃げられない」
「またこのパターンすか!?」
恋奈様の手を払って、本気で逃げようとした瞬間、それ以上のスピードで辻堂センパ

イに回り込まれた。
　ダメだこれ。
　飲み会の時の取り敢えず生中で、みたいな雰囲気を出しながら振り下ろされるゲンコツを見つめながら覚悟することにした。
「ヒロ君、擦り傷まみれじゃない。ほら、手当するからこっち来て」
「え、あ、うん」
　ぶん殴られる瞬間、ちゃっかり美味しいポジションをゲットしたよい子センパイの姿が視界に映った。
　あれはいいのかよと訴える間もなく、とんでもない痛みが頭頂部に響いた。
　なるほど、自分で蒔いた種とはいえ、今日の長谷センパイに関わると不幸な目に会うことは間違いなさそうである。

32話：ラッキーアンドアンラッキー！（後編）

「拙い、大を完全に見失ったな・・・・・・」
「長谷センパイが自分らに迷惑かけたくないから逃げたんっしょ。
もう今日はその意思を汲んであげた方がいいんじゃないっすか？」
「そりゃそうだけど、でもそれで大が何かあったらアタシは後悔する。
だから今日は大の意思は尊重しない。アタシは男にとって都合の良い女じゃないんでな」
現在、恋奈のホテルから私達三人は出て闇雲にヒロ君を探すことになっている。
どうも辻堂の奴と乾、恋奈が喧嘩をしている時にコソコソと抜け出していたらしい。
私自身も怪我したヒロ君を治療した後、ホテルから借りた救急セットを返していたため誰も気付かなかった。
喧嘩してないで仕事しろこいつら。
「うえぇ。そりゃ自分も長谷センパイの事が心配っすけど、でも嫌われたら元も子もないかと」
「だったらお前は帰れ。アタシ一人でもアイツを見つける」

なるほど。こういうところで性格がよく現れている。
辻堂はヒロ君が心配だから彼の評価をも顧みず彼自身を警護したい。
対して乾は彼の評価が何より優先だからヒロ君の意思を尊重したい。
万が一の事も特にないと根拠なく思っているのだろう。
「おい、アンタはどうするんだ？」
「え、私？」
「ああ。アタシはこのまま犬を探すけど」
まぁ、この流れだと聞かれるに決まっているだろう。
別に不思議な事ではない。
「そうね。私も乾さんに同意してヒロ君の意思を尊重したいかな」
「・・・・・・そうか。じゃあここでアタシ達は別行動だな」
「あ、ちょっと辻堂センパイ！」
私の意見を聞くやいなや直様走る速度を上げて追う私や乾を振り切る辻堂。
乾ならばアイツに追随できるだろうが、どうにも追う気はないようだ。
辻堂の背中が見えなくなり、一旦私達は足を止めた。
「ぐぅ、ちょっとムナクソ悪いっす」
「だろうな。俺としても辻堂の意見に賛成だ」

「は？　でも総災天センパイはさっきあずに賛成って言ってたんじゃ」
「バカか。彼に万が一の事があったらどうするんだ」
乾を無視して、持ってきていたバッグを漁る。
まず取り出すのはロングスカート。
流石に卒業した今、学生服を着る訳にもいかないので似た私服を買っておいた。
無論上着のほうも用意している。
さて、問題は着替える所だが・・・・・・
「あそこがいいな」
「え、どこへ」
近くにあったコンビニへ駆け込む。
店員がいらっしゃいませと丁寧な挨拶をするが、無視して即座にトイレへ。
そしてバッグの中身を取り出して、ジーンズやシャツを脱ぎ、ロングスカートと少しブカめの上着を着る。
黒ずくめなため少々怪しいが、まぁ大丈夫だろう。
ともあれ流石に店内でマスクやグローブは拙い。
髪をほどいて、目つきを変えるだけにとどめてトイレから出る。
出たとたんガラガラの店内に一人いる店員の視線を感じた。

仕方ないか、入店直後トイレに一直線した挙句、服装や雰囲気が変わってトイレから出てきたらそりゃ不審だ。

まっとうな反応だ。

せめてもの迷惑料として、ペットボトルのお茶をレジに持っていく。

「あ、ありがとうございましたー・・・・・・・」

「邪魔したな」

レジを通し、詫びを入れながらコンビニからでる。

出るまで背中に店員の視線を感じた。

「なんで変装する必要あるんすか？」

「こっちのほうが多少無茶しても不自然じゃないからだ」

今までも何度かヒロ君が不良に絡まれてバレないように助ける展開になったが、隣に辻堂がいたため私は手が出せなかった。

まぁ辻堂一人で充分なのだが。
取り敢えずそれでも辻堂や乾で対処できない事態になった場合の予防策は必要だ。
私が動けるようにしておく事に越したことはない。
ましてやヒロ君の姿を見失った現状ならなおさらである。
「それで、お前はどうするんだ。
帰るのなら俺は止めないが」
別にヒロ君を探すことを強制はさせない。
乾にしても別に面倒とかではなくてヒロ君の意思を尊重したゆえの選択なのだ。
そこに他人がどうこういうのは無粋だろう。
「ぐ、総災天センパイは長谷センパイに嫌われてもいいんすか？」
「別に、今の俺が嫌われたところで武考田よい子が嫌われるわけじゃない。
多少気にはするが、彼の安全を天秤にかければ重きを置くものは考えるまでもない」
「こういう時に表ヅラと本性を使い分けてる人は便利っすねー」
「お前が言うな」
否定はしないがコイツに言われると腹が立つ。
「何より俺はまだ彼に借りを返していないからな。
いい機会だ」

「借り？　何かあったんすか？」
「ああ。以前お前から庇ってくれてな、俺の代わりにお前に肋骨をへし折られた時の借りだ」
「・・・・・・」
沈黙する乾。
別に嫌味のつもりで言ったわけではないのだが。
それでも本人からしたら皮肉のように聞こえたのだろう。
「イヤミか貴様ッッ」
「そんなに叫ぶ元気があるなら開き直る日も近いな」
いつまでも乾に構っていられない。
こうやって悠長にしている間にもヒロ君に危険が迫っている恐れがある。
取り敢えずどこを探すべきか。
思案するもうまく閃かない。
今日のヒロ君の行動パターンは全く読めないのだ。
何か考えて探すより、適当に人の少ないであろう場所をしらみつぶしに探す方が良いか。
そうと決まれば早速足を踏み出す。

「あ、ちょっと待ってくださいよ。自分も行きますってば！」
「好きにしろ」
人探しをするのならバラけて探したほうが効率はいいのだが。
まさかそれに気づかない乾ではないだろう。
何か考えがあって私と同行するのならそれを拒否する理由もない。
「あ、総災天センパイ。マスク付けるの忘れてますよ」
「え、嘘ッ・・・・・・忠告感謝する」
危ない所だった。
いくら目つきや雰囲気を変えても素顔のままだったら流石にバレる。
こいつが一緒にいてくれて助かった。
本当に。いや、冗談抜きで。

いた。いてしまった。

「あちゃー、絡まれてますねぇ。どうします？」
「・・・・・・まだ様子見だ」
「りょーかいっす」
私には幸いにして、私を慕う元部下がいる。
今現在は全員江之死魔に預けているのだが、私が不良を卒業したとしても彼らの私への対応は変わらなかった。
今回も元部下達にヒロ君の捜索を頼んだ。
そしてかなり速い段階でヒロ君を見つけることに成功。
彼らには感謝してもしきれないばかりである。
『ねぇ君ィ。ちょっと俺達金に困ってるんだよね。
少し融資してくれないかなぁ？』
またテンプレートな不良に絡まれているようだ。
普段から不良には関わるなと忠告しているのだが、まぁ今回は仕方あるまい。
「ん～、ここから殺気飛ばしても効果ないっす」
「俺も流石にここからでは効果が薄いな」
辻堂ならば、真の強者は目で殺す！　と言わんばかりに数十メートル離れていても視線対象を気絶させることができるのだが。

生憎私や乾ではそこまでの芸当はできない。
さて、どうしたものか。
見た所ヒロ君は逃げる隙を伺っているようだが、見事に囲まれてしまって花いちもんめ状態だ。
とてもではないが無理だろう。
あまり様子見をしていてももう意味はない。
逆に殴られそうになった時に庇うことが出来ないだろう。
・・・・・・仕方ない。
「あ、長谷センパイ助けるんすか?」
「ああ。お前はまた彼が逃げるかもしれないから遠くから見張っててくれ」
「らじゃーっす」
いい返事だ。全く信用できない。
乾から視線を外して、真っ直ぐヒロ君の元へ歩く。
少し離れてはいるものの、徒歩で二十秒もかからない距離。
私の視線を感じて取り巻きの不良がこちらを睨み始める。
「あぁ!? なんだテメェ!?」
「黙ってろ」

「あひん」
睨み一つでまず一人を気絶させる。
その展開を残りの三人が見て露骨に警戒を始める。
「リョ、リョウさん。どうしてここに」
「偶然だ。それよりこっちに来い」
来いと言ったものの、むしろ私の方からヒロ君に歩み寄り、手を引いて背後に隠す。
木刀は流石に持ってきていないが、別段こいつらならば余裕で素手で倒せるだろう。
値踏みをするように残る三人が私を見る。
「おい、あいつって総災天じゃ・・・・・・」
「いやでも、総災天って不良抜けたはずじゃ」
「でもあのマスクにあのメンチは間違いないって」
こういう時に有名なのは助かる。
戦わずして勝てそうだが。
・・・・・・いや、戦って勝とう。
こういった輩は一度シメておくに越したことはない。
でなければまたヒロ君に被害が及ばないとも限らないだろう。
「どうした、素手の女一人に怖気づいているのか？」

挑発する。
そして露骨に反応する不良共。
実に扱いやすい。
「取り巻きもいねぇ上に獲物の木刀もない癖に大きくでるじゃねぇか」
「裸にひん剥いてやろうぜ」
息を荒くし始めた。
「時間の無駄だ。前口上は良いからさっさとかかってこい」
「うるせぇ！　死ねや！」

「あの、本当にありがとうございました。
多分リョウさん来なかったら俺やばかったかも」

「気にするな、偶然居合わせただけだからな」
素直に頭を下げて礼を言うヒロ君。
相変わらず礼儀正しくて良い子である。
一応喧嘩の最中逃げられてもいいように乾を見張りにおいているがいらぬ心配だったようだ。
「いくつになっても手のかかる子なんだから・・・・・・」
「え？」
「あ、いや。なんでもない」
口癖のように出てしまった言葉を飲み込む。
どうやらヒロ君も追求はする事もないようで、少し首をかしげる程度だ。
「あの。何かお礼をさせてください。
せめて晩御飯だけでもご馳走したいというか」
晩御飯。
ふと思って腕時計を確認してみれば時刻は既に六時を回っていた。
忙しすぎて気付かなかった。
「いや、気にすることはない。
君には乾の件での借りがある。これで帳消しになったとは思わないが。

取り敢えず俺に恩を感じる必要はない」
と、口では言ったものの実際思っていることとは乖離している。
本音としては食事など絶対に一緒出来ない、許してください。である。
いや、いくらなんでもヒロ君と二人で食事している時にマスクを外さない訳にもいくまい。
当然素顔を晒す必要があるし、そうしたら何の為に今までこのマスクをしてきたのかもわからなくなる。
だがそんな思惑を表に出さなかった私が悪いのだろう。
ヒロ君は真っ直ぐな目でこちらを見てきた。
「あの件は俺が勝手にやった事です。それに、今この瞬間の恩と前の借りとかは別物だと思う」
相変わらず変なところで意気地である。
そこが彼の魅力であるのは理解しているのだけれど、今回は少し厳しい。
本音としては彼を立ててあげたいところなのだが。
だが恐らくこちらが引くまで彼も引かないだろう。
仕方ない。妥協案をだそう。
「わかった。じゃあ君の恩返しに付き合おう、しかしだ。

行く場所は俺に決めさせろ。それが最低限の譲歩だ」
「はい！」
嬉しそうに喜んでいる。
私がどこを選ぶのか、それを知らないからこそ笑えるのだろうけど。

「・・・・・・あの。俺、食べ物もご馳走したいんですけど」
「生憎と俺は腹がすいていない。飲み物だけで充分だ」
ストローをマスクの隙間に入れてアイスコーヒーを飲む。
飲み物ならばほうじ茶が好きなのだが、別にコーヒーが嫌いなわけでもない。
まぁつまりだ。
私が指定した場所とは喫茶店だった。
一応夕食時だけあって僅かに人が混んでいる。
見れば隣の客などはパスタを食べている。

それをヒロ君は横目で見てため息をつく。
「そういう君だって何も食べていないだろう」
「まぁ、俺も精神的にいっぱいいっぱいで余り腹が減っていないというか」
「だったら尚更だ。何も食べない君の横で一人食事をするほど俺は厚かましくはない」
これはいい口実だ。
我ながら上手いまとめ方である。
「じゃあ俺何か頼みますからリョウさんも食べましょうよ！」
「・・・・・・・」
中々に食い下がる。
ならば再び妥協案を出すか。
「君がそこまでいうなら仕方ない。だが、俺の分は俺が選ぶぞ？」
「もちろんです！」
そして数分後。
彼の前で私はポテトをモグモグとマスクの隙間から入れて咀嚼していた。
「・・・・・・・」
「何かいいたそうな顔だな」
凄く彼のジト目が気になる。

こう、横着する子供をどうにかしたいと考える母親の目だ。
別に横着しているわけじゃなくて、単純にマスクを外さなくて済むものを選んでいるのだけれど。
どうやらヒロ君も少しムキになっているようだ。
「そんな顔をするな。このコーヒーもポテトもとても美味しい。
俺としてはこれらを奢ってくれる君には感謝している」
「そ、それは嬉しい限りですけど」
私に感謝されて喜ぶヒロ君。
うん。昔からヒロ君は何も変わらない。
素直でお人好しで、それでいてお母さんと一緒にいるかのように落ち着く。
こういうのを相性と呼ぶのだろう。
悲しいのは私がこっちの姿なため彼には居心地を悪くさせているであろう点なのだが。
少し笑ってしまう。
するとヒロ君は訝しげにこちらを見つめてきた。
「な、なんだ？」
「いえ、その目に見覚えがあるんですよね。

こう、いつも顔を合わせている人とそっくりなような」
「いやまてそれは大きな勘違いだ違うから本当にその人とは無関係だから」
慌ててマスクをきちんと付け直し、目つきを戻す。
流石に気を緩めすぎたか。
僅かに威嚇するように睨むも、辻堂に慣れたヒロ君に効果はほぼない。
変わらず彼は私の顔を見つめる。
「余り女の顔をジロジロと見るものじゃない。そういうのは辻堂にでもしてやれ」
「あ、すいません」
余裕を持って注意したように見えるが、内心ハラハラドキドキである。
声でばれる可能性もあるため、いつもよりもよりトーンを落とした。
そのため彼には私が怒ったように感じたのかもしれない。
少し気まずげに視線をそらした。
ちょっと悪いことをしたかな。

「御馳走様でした」
「ポテトとコーヒーしか頼んでないですけどね」
「それで充分だろう。別段俺自身が君に大層な事をしたとは思っていないのだから」
相変わらずクールな人である。
何を考えているのかは今ひとつ掴めない。
けれど、以前の乾さんとの騒動の件から彼女の人となりは理解できてきた。
間違いなくこの人は良い人だ。
それこそ愛さんのように筋を通して、不条理をよしとしない美しさがある。
俺としてはしばらくリョウさんと話していたいのだけれど、今日はちょっと拙い。
天気予報では晴れだと言っていたのに今は曇天だ。
もう日も暮れて暗いから雲が今ひとつ把握できないものの、それでも月も星も一切見えないのだからきっと曇ってる。
「それじゃあ雨も振りそうですし、そろそろお別れですね」
カツアゲから助けてくれた事を感謝し、大きく頭を下げる。
そしてそのまま背中を向けて歩く。

そのまま数歩。数分歩いた時、何故か背中に気配を感じた。
なんだろうと思い振り向くと、何食わぬ顔でリョウさんがついてきていた。
「帰る道こっちなんですか?」
「いや。そうじゃないが・・・・・・君はこのまま帰るのか?」
何か、探るような目で聞いてくる。
「いえ、俺はちょっと日付が変わるまでブラブラと人気のないところに行こうかと」
家に残って姉ちゃんに迷惑かけるのもあれだし、かといって外出して人通りの多いところにいるのも危ない。
最悪この不運に巻き込まれて車とかが人ごみに突進してこないとも言い切れないのだ。
現に今日は何度も交通事故に巻き込まれた。
「そうか、それじゃあ俺も同行しよう」
「なぜに」
まるで意図がわからない。
「こんなに暗いのに人気のないところに行こうとしているんだ。
君に借りのある俺としては、この後何かあって怪我でもされたら俺のプライドに関わる。

俺についてきて欲しくないのなら大人しく家にでも帰るんだな」
どうしようか。
まさかここまでターゲッティングされては不意をついて逃げることも難しそうだ。
そもそもどうして俺にここまで構うのか。
乾さんの件だけが理由ではない気がしてならない。
なんにせよ、だ。
今日は辻堂さん達に迷惑をかけない為に逃げ回ってきたが、考え方を改めたほうがいいかもしれない。
もし俺がまた病院送りにでもなったら恐らく愛さんは悲しんでしまうだろう。
だったらむしろここはリョウさんの力を借りて日をまたぐまで護衛してもらったほうが確実なのではなかろうか。
「リョウさん。今日の俺は本当についてないです、マジで危ないかもしれないですよ」
「そんなことは知っている」
「え、なんで知ってるんですか？」
「・・・・・あ、いや。そうだ、少し前に君が独り言でついてないなぁとかボヤいていたからだ」
そんなことを言った記憶はないのだけれど。

でもリョウさんがそういうのならきっとそうだろう。
納得である。
「そうだったんですか。独り言聞かれてたとかちょっと恥ずかしいなぁ」
それこそ夜一人で散歩してる時、人気がない所で小さな声で歌って歩いている所を不意に通行人に見られたような気恥かしさだ。
あれは恥ずかしい。
咳払いとかしたら余計にみっともないし、だからといってそのまま歌うなんて選択肢も有り得ない。
もう夜風にあたって爽快だった最高のテンションが一気に自殺したくなるほどのネガティブテンションに変わる。
そもそも夏とかになると家なんて基本窓開けているのだから、人に直接遭遇せずとも家の中にいる人間に聞こえている可能性も高いのだ。
だから気を付けよう。誰に気を付けようと言っているのかはどうでもいい。
とにかく、外を歩くのなら鼻歌程度にしておこう。
まぁそんなことはどうでもよくて、結局俺が言いたいことは・・・・・・えぇと、なんだっけ？　何の話してたっけ？
「相変わらず人の言うことに素直なんだから・・・・・・」

「はい？」
「何でもない。いや、何でもあるか」
少しリョウさんっぽくない口調だったから驚いたが、俺が聞き返したらいつもどおりに戻った。
「君は少し無用心すぎる。辻堂や乾、マキなどの湘南でも最強に近い奴らと普段から接しているから麻痺しているのかもしれないが
少しは人を疑って、自分の身を一番に考えるべきだ。
不良は君が思っている程スジが通っている奴は少ない」
真剣に、忠告するようにリョウさんは俺に言った。
その表情やトーンに一切の冗談の色はない。
間違いなく真面目な話である。
「でも、リョウさんだって愛さんみたいに硬派な人ですよね」
「俺は既に不良は卒業している。というか話を逸らすんじゃない」
この話は正直俺にとって何度も自問自答を繰り返した内容だ。
故にもう答えなどとうに出ている。
「それでも、不良の中には愛さんやリョウさんみたいに一般人の俺から見ても格好いいと思うような人もいる。

勿論リョウさんの言う通り、殆どの不良は良くない事ばかりする部類だろう。
けど、それでもリョウさんがそんな人だとは思えない。だから俺は自分も大事にするし、
以前の乾さんとの件みたくリョウさんの力にだってなりたい」
自分を一番に思えているかは自分でも定かではない。
しかし、リョウさんを俺は大切な人だと思っている。
それほど関わりがあったわけではない。
会話した事なんかほとんどない。
だというのに何故か彼女をかけがえのない人間だと俺は思っていた。
・・・・・こういうのを相性とでもいうのだろうか？
そう考えながら、再びリョウさんを見ると複雑そうな顔をしていた。
「・・・・・・もういい、だったら好きにしろ。
それで怪我した所で俺はしらんぞ」
口では突っぱねるような事を言っているものの、その表情がまた可愛かった。
何かに喜んでいるような、けれど困っているような。
しかし俺が言うことを聞かないから怒っているし、どこか拗ねている色もある。
マスク越しで表情を掴みづらいと思ったが、目だけでもそれがわかるくらいだった。

「とにかく、今日だけは俺が面倒みてやる。次からはこんなことがあると――危ない」
「え、うお！」
咄嗟にリョウさんが俺を突き飛ばしながら覆いかぶさった。
いきなりの事態に何が起きたのか理解できない。
けれど、一秒後その答えはでた。
響く粉砕音。
それが俺の先程までいた位置で起きた。
慌ててそこに視線を向ける。
するとそこにはお店の看板が落ちていた。
また看板か。今日だけで何度目だよ。
リョウさんが助けてくれなかったら間違いなく直撃していた。
「ありがとうございます。今のはやばかった」
「いや、怪我がないのなら――あ、こっちを見るんじゃない！」
「え、なぜに」
「理由はいいからこっちを見るな！　頼む！」
俺を押し倒したまま、俺の胸元に顔をおいているリョウさん。

目だけ下に向けると理由がわかった。
ああ、マスクずれたんだ。
この角度だと目と鼻しか見えない。
もう少しでリョウさんの素顔がわかりそうなんだけど。
・・・・・・見て欲しくないようなのでこれ以上はよしておこう。
「あわわわわわ、マスクの紐ちぎれてるし。
こんなことなら乾にマスクあげるんじゃなかったぁ～」
本気でテンパっておられる様子。
「だ、だがまだスペアはある。
あっ、まだこっちをみるんじゃないぞ」
「わかってますって。それより早くしないと今ので人が集まりますよ」
「うぅ、こういう惨めなのは俺のキャラじゃないのに」

「・・・・・・自分なにやってんだろ。もう帰ろっかなぁ」
何でこんな事になったのか。
自分は総災天センパイが変装してからずっと後ろからコソコソと二人の背中をつけていた。
いや、本当に何で自分はこんな虚しいことをしなければならないのか。
「はっはっは」
「・・・・・・」
「あっはっはっはっはー」
「あ、あの・・・・・・?」
ここ数時間、ずっと横で辻堂センパイが事あるごとに笑っている。
いや、笑っているとは言うもののこれは本当に笑っているのか。
目には光がなく、声は乾ききって感情が伺えない。
辻堂センパイは総災天センパイと長谷センパイが合流してから間もなくあずと遭遇した。
どうやら長谷センパイの気配を感じたと本人は言っているがどうにも胡散臭い。
「可笑しいよなぁ梓。何で目を離した隙に大はあの女とデートしてんだろうなぁ。

可笑しい可笑しい。余りに可笑しすぎて可笑しな事をしてやりたくなるよ」
「おわぁぁぁぁ！　ちょっとなんか体からスモークでてますってば！」
最近の辻堂センパイはバージョンアップしたのかスチーム機能が付いたらしい。
体から黒い煙、いや霧？　蒸気？
取り敢えずそんなのがもくもくと立ち上る。
あ、これ瘴気ですわ。
何か見ているだけでこちらまで落ち込みそうなので再び長谷センパイの様子を見ることにした。
聞き耳をたてて内容を聞いたのだが、どうやら二人はこのまま日付が変わるまで行動を共にするらしい。
正直面倒くさい。
さて、取り敢えず二人はどこへ向かっているのか。
辻堂センパイの暴走を抑えながらついてまわる。
その後、二人が付いた場所は別段意外でもなんでもない場所であった。
「何でこんな季節外れな場所に？」
「人気がないからだろ・・・・・・人気がないからだろうが！」
「二度も言わなくても」

二人は夏になれば目障りなほど人があふれる場所。つまり砂浜へきていた。
まぁ、長谷センパイからしたらここは安全地帯かもしれない。
人気もなければ車などの通りもない。
しかも上に遮るものがない代わりに設置された物もない。
つまり落下物がないということを考えればここ程いい場所はそうないかもしれない。
『うわあああ！　津波が押し寄せてくるー！』
『ヒロ君!?　わた――じゃない俺の手に掴まれ！　逃げるぞ！』
自分と辻堂センパイも速攻逃げた。
「手をつないだ。許せない」

事なきを得た二人が次にきた場所は、稲村学園だった。
ほほう。確かに日の暮れたこの時間ならばもう生徒の姿はない。
悪くない身の置き場所だといえる。
『お○んちんびろーん！』
『うひゃあああ！　変なおっさんがが装備全部外してこっち来たあぁぁぁぁ！』

『汚いものを見せるな！　消え失せろ！』

マジかよ。

ここ学園だぞ。

何でストリーキングがここで裸の王様してんだよ。

っていうか長谷センパイが露出魔にびびって、総災天センパイが長谷センパイを胸に抱いて変態をぶっとばした。

普通逆ではないのだろうか。乙女か。

「大を抱きしめた。許せない」

変態を学園につきだした二人は続いて別の場所へ向かった。

次なる場所はここ。ナクドマルド。

二十四時間営業で財布に最近優しくないほど値段が上がって、ぶっちゃけスモバーガーでいいよねって話になるのはご愛嬌。

二人は疲れた顔で入店。

自分たちも気づかれないように死角となる席に座った。

「このくそったれがあああ！　なんだこのジャンクフードは!?
　文字通りジャンクなフードなんざ食えるか!?」
「お、お客様。申し訳ありませんすぐに作り直しますのでどうか」
　なんだろうと思いカウンターを見たら不良がぐしゃぐしゃなハンバーガーを渡されて切れていた。
　ああ、時々あるんだよな。やたらパンと野菜と肉が全て見事にずれてぐしゃぐしゃになってるの。
「あーマジあたしむかつくんですけどー。
　ちょっとケンちゃんどうするよこれー」
「こりゃ店長呼んでもらないときがすまねーわ。マジで」
　あらら、どうやら調子に乗ったカップルらしい。
　一番悪いのはぐしゃぐしゃにしたハンバーガーを渡した店員だが、だからといってこれは見ていて鬱陶しい。
　正面に座る辻堂センパイが見逃せる訳もなく立ち上がりかける。
「あ～、すいません。あそこのハンバーガーと同じのをください」
「あ、はいかしこまりました」
　気づかないうちにもめている所とは違う隣のレジに長谷センパイがいて、追加注文を

していた。
どうやらぐしゃぐしゃになったハンバーガーと同じのを注文したようだ。
そして一分後。
注文したものがトレーに乗って来る。
長谷センパイはそれに料金を払い、店員に軽く礼をしたあと、未だもめているカップルの前に立った。
「これ、どうぞ」
「あぁ？　なんだオメェ？」
長谷センパイは笑顔でそのハンバーガーを渡す。
だが相手は訝しげにそれを見て、受け取らない。
「おふたりの文句はもっともです。
ですけど流石にこれ以上ここでもめても他のお客さんの迷惑ですから、
これで取り敢えずお茶を濁すなんてのはどうでしょう？」
「テメェケンちゃん舐めてんの？」
「お茶を濁せなかったか」
まぁ仕方ないだろう。
ため息を吐くセンパイ。

しかしこれでお流れにはならなかった。
不良の男のほうが標的を店員から長谷センパイに変えたらしい。
胸ぐらをつかみだした。
「あの野郎、誰の男にあんなマネを・・・・・・ッ！」
「辻堂センパイストップっす」
「あぁ？」
「ほらあれ」
完全に因縁を付けられている長谷センパイにゆっくりと近づく影。
総災天センパイだ。
「まったく。突然席を外すから何かと思えば、また君は厄介事に首を突っ込んで……」
「な、なんだテメェ!?」
「あぁ。俺のツレがお前達の邪魔をしたようだな。悪かった」
纏う風格で只者ではないことに気づいたのだろう。
カップルは僅かに後ずさりする。
突き飛ばすように手を離された長谷センパイは僅かにつまずき、後ろに転びかける。
それを総災天センパイは素早く察知し、後ろに回り込み抱きとめた。
「すいませんリョウさん。巻き込むつもりはなかったんですけど」

「気にするな。君が行かなかったら俺が代わりに行っていた」
長谷センパイの頭を優しく撫で、彼を後ろに置き自身は前に出た。
拳を鳴らす。
目つきを鋭くする。
それだけで相手は失禁せんばかりに怯え竦んだ。
「お前らが悪いことをしたわけじゃない。だから俺はお前らを殴らない。
しかしだ、お前らは・・・・・・そうだな――目障りだ、消えろ」
「ひいいいい！」
「あ、ケンちゃん待ってよおいてかないで！」
その一喝で不良二人は必死で逃げた。
買ったハンバーガーすら投げ出して必死の形相でその場を後にしたのだ。
・・・・・・すごいなぁ。
ああいう殺気の使い方を自分はできない。
どうにも相手を怯えさせる事はできても目や雰囲気だけで相手を倒す技術はないのだ。
「あ、あの・・・・・・お客様」
「御馳走様でした、それじゃあリョウさん行きましょう」

「あぁ。騒ぎを起こして悪かったな」
騒ぎを収めた二人はそそくさと店内から出て行った。
仕方あるまい。
二人は既に店内の客やスタッフに注視されていた。
逃げたくもなるだろう。
自分たちも二人の後を追って店内を後にした。
「大に頼られた。許せない
許せない許せない許せない・・・・・ゆ〝る〝さ〝ん〝」
「あ、何か辻堂センパイの大切な何かがちぎれた音がしたっす。
決定的な何かが」
血の涙を流しながら親指の爪をガジガジと噛み続ける辻堂センパイ。
そこまでか。

「今日は一日ありがとうございました。
本当に、何度も助けてくれて何てお礼を言ったらいいか」
「気にするなと何度も言っているだろう。
乾の件の借りを返しただけだ、感謝される理由はない」
日付はあと十分で変わる。
俺達はもう何も起きないことを祈りながら、二人で公園のブランコに座っていた。
俺はつい子供心をくすぐられ、大きくブランコを揺らす。
思ったよりも昔と勝手が違っていて視点の高さや揺れが少し怖い。
子供は恐れ知らずと言うが、なるほど。
子供が恐れ知らずなのではなく大人が臆病すぎるのかもしれない。
対してリョウさんは相変わらずのクールさで、ブランコに座りはするもののただそれだけだ。
「そういえば、今日思ったんですけどリョウさんって俺のお姉さんみたいな人と同じ匂いがするんですよね」
・・・・・・言って思った。
女性に匂いの話なんて引かれるってレベルじゃないだろう。

迂闊だった。
「お姉さん？　ああ、確か君はお姉さんと二人暮らしをしていたな」
「あ、いや。そっちの姉ちゃんではなくて。というかそっちの姉ちゃんは全然姉らしくないんで。
いや勿論誰にも自慢できる姉なんですけど、でも姉らしいかといわれれば首を傾げます」
「辛口だな。本人が聞いたら発狂しそうだ」
よかった。
どうやら余り今の話題に拒否感を持たれなかったようだ。
最後の最後に微妙な空気になったらどうしようかと。
「小さい頃から近所で一緒に育った惣菜店の一人娘がいてですね。
その人とリョウさんがさっき抱きとめられたとき同じ匂いがしたんですよ」
「おい待てやめろ」
何が気のせいなのかはわからないけれど怖い顔で凄まれた。
「ん？　惣菜店？　総災天？
あれ？　何かひっかかるぞ。ん～・・・・・んん？」
「ひぃ！　まてバカ考えるのをすぐにやめろ！」

何やら焦ったように思考を中断させられた。
はて、何か答えが出そうなんだがなんだったのか。
朝目が覚めたら夢を忘れる感じで、今でかけた答えが引っ込んだ。
出そうで出ないくしゃみのようで妙にしっくりこない。
「べ、別に使っている洗剤が同じなだけだろう。
それは珍しい事かもしれないが、不思議なことじゃない」
洗剤とかそういうのじゃなくて、よい子さん特有のものなのだが。
こう、料理の匂いというか。決して油臭いわけではなく母の香りのような。
いや、実の母の香りなど覚えていないしそもそも嗅がせてもらえてすらなかったけれど。
ともかく、何かよい子さんは普通の若い女性が持つ香りとは違う独特の香りがあるのだ。
それと同じ匂いがした事が引っかかった。
「リョウさんって卒業したあと何してるんですか?」
「秘密だ」
「あ、もしかして進学ですか?
リョウさんって勉強できそうですしね」

「勝手に話を進めるな。内緒だと言っているだろう」
ブランコを大きく漕いで空を見る。
決して首を上に向けたわけではない。
体が大きく空を仰ぐくらいにブランコを揺らしたのだ。
空には大きな満月が見えた。どうやら雨は降らず、むしろ晴れたようだ。
中々にツキが戻ってきたようだ。
しかし不思議なものでちっとも眠くない。
明日は学校で、この調子だと多分明日は寝不足だろう。
そもそも疲れ凄まじく蓄積していて、今寝たところで取れるとは思えない。
でも、不思議と気分は澄み切っていた。
「リョウさんと一緒にいると安心するんですよね。
最初は怖くて緊張してましたけど、知れば知るほどリョウさんと一緒の時間が楽しく感じる」
「そ、そうか」
初見は目つきや雰囲気が怖いお姉さんだなと思っていた。
けれど実際に話を繰り返していれば内面はその外見と違っていた。
俺の知る限り、彼女程冷静で理知的で頼りになる人はそういない。

それにどことなく彼女自身に包容力も感じていた。
「今日だって借りを返すとか言ってましたけど、仕方なくというよりは率先して俺を助けてくれましたよね」
俺が危なくなれば何のためらいもなく体を張って助けてくれた。
そのせいで何度かリョウさんの方が危険な目にあったが、災難が過ぎ去ったあとにまず確認することは俺の怪我だった。
自分が怪我をしようがそれを意に介さず俺の事ばかり気にかけてくれたのだ。
「何度も言わせる気だ。借りを返しているだけだ、他意はない」
それを言われると困る。
正直俺としては貸し借り以上の感情をリョウさんから感じたし、俺自身もそれをリョウさんに抱いている。
「それじゃあ次は俺が借りを返す番ですね」
「どうしてそうなる」
「だって、どう考えてもリョウさんは借りたもの以上のものを俺に返してくれました。これは利子を付けて返さないと俺の気が収まらない」
正直に言えばこれは建前である。
どうやらリョウさんはどうあっても理由をつけないと気がすまないらしい。

だから貸し借り煩いし、それを本音の隠れ蓑にしている。
だったらむしろそれを利用してやろう。
「いらん。そこまで大したことをしたつもりはない」
「大した事かどうかは俺が決めることです。
実際に俺がリョウさんを乾さんから庇ったのだって俺にとって大した事ではないです。
ただ勝手に体が動いて、勝手に俺が自滅した。俺にとってあの出来事はそれだけなんです」
だから俺だって借りがどうとか言われても困るのだ。
「今日、俺はリョウさんに凄いでっかい借りを感じました。
おおどうしたことだろう、これはこれは余りにも大きすぎる借りだ」
わざとらしい芝居がかった言い回しをする。
ある程度まくし立てる話の流れにしないと逃げられそうだからだ。
「だからリョウさん、また会えますよね。
借りは返すものなんでしょう?」
「・・・・・それを聞きたかったのか」
聞かずには居られなかった。

俺はリョウさんの私情を何にも知らない。
知ら無さ過ぎる。
だから俺の方からリョウさんの姿を見つける事はほぼ不可能なのだ。
既に江之死魔どころか不良を卒業した彼女の姿はもう探す手段が無い。
「リョウさんの素性を探ろうとも思わない。
私情を探索しようとも考えてない。ただ、また会えるか。
それだけを知りたいです」
彼女は間違いなくいい人だ。
限りなく愛さんに近いタイプの不良だ。
だからかわからないけれど、異様に親密な感情を抱いてしまう。
まるで小さい頃から一緒に育ったかのような親近感すらある。
そんな人ともう二度と会えないなど、そんな寂しいことはない。
リョウさんはブランコを降りた。
そして、ゆっくりと漕ぎ続ける俺の近くに寄った。
巻き込む事を恐れた俺は直様漕ぐことをやめ、徐々に減速し、最後には同じくブランコから降りた。
「不良なんてろくなものじゃない。君は以前、乾を恨んだ奴らに病院送りにされた。

まだ反省していないのか」
責めるような語気に俺は一瞬息を飲んだ。
「はっきり言うぞ。俺は君と辻堂の恋路も応援などしていない。君はもっと普通の人間と付き合うべきだ」
台詞だけ聞き取れば間違いなく俺を責める性質のものだ。
でも声の抑揚、そして彼女の目は一切俺を責めるものではない。
むしろそれは親が、姉が子や弟を心から心配しているような。
身に覚えのあるソレだった。
「長谷大。お前の相手に不良は似合わない」
その言葉はいつか聞いた。
愛さんに同じ事を言われた。
「無論俺がお前たちの恋路を邪魔するつもりもない。
あの辻堂と今なお付き合っているし、既に不良の暴力の被害にもあった君だ。
俺が言ったところで改めようとも思うまい」
リョウさんは視線をわずかにずらした。
「だが危険は極力避けろ。俺は不良を抜けたが、未だ俺を恨む奴は多い。
自分から地雷を踏むこともないだろう」

それは本当に本心なのか。
知るすべは俺にはない。
だったら、俺は知らないのだから自分の我が儘を通させてもらう。
「何言ってるんですか。今更地雷の一つや二つ増えたところで何が変わるんです。俺はもう愛さんや江之死魔、マキさんや乾さんなんて湘南屈指の悪い子達と関わりを持ってます。
それで今更自分の危険がましたところで気にしません」
目をそらしたままのリョウさんを真っ直ぐ見つめ、真面目に言う。
「何より地雷なんてもう何度も踏んでいます。おかげで冬休み中だけで二度も入院しました」
あれだけ酷い目にあったとしても、それでも俺は一向に懲りない。
ただのバカなのだろう。
だが、バカはバカなりに矜持というものがある。
「それを理解していることを踏まえてもう一度言わせてください。
また、会えますよね？　今日の借りを返さないことには俺の気が済みません」
ここで、ようやくリョウさんは俺の目を見た。
何かに戸惑い、何かに怯え。

それでもやはり俺の意思を尊重してくれるような包容力がその瞳にはある。
それからリョウさんは数十秒ほど考え、大きく息をついた。
「本当に、頑固な子なんだから・・・・・・もう」
「リョウさん？」
「何でもない。気にするな」
マスクのせいで何か呟いた気がするのだが詳細が聞こえなかった。
しかし僅かに聞こえたその声質はどこかで聞いた声だったような。
リョウさんは一度瞳をとじ、再びあけた。
「俺の素性も私情も探索しないと言ったな？」
「はい」
そうか、とリョウさんは言う。
「じゃあ俺の家も携帯番号も今どういう風な日常生活なのかも素顔も当然何もかも教える必要はないな」
「そんな、そんなのズルです！　おい誰かレフェリー呼べ！」
ありえんだろうこの話の流れで。
どれだけ鬼なんだこの人は。
「だがまぁ。気が向いたら君の前に現れよう。

勿論いつ会えるかなど一々連絡もしないが」

うん？

「それはつまり気が向いたら俺に会ってくれると？」

「そういう事になるな。

余り期待されても困るが、まぁあくまでも気が向いたらだ」

おお。

熱意が通じた。

俺の相手の気持ちを度外視した自己中極まりない説得にリョウさんが折れた。

「っしゃ！」

「そこまで喜ぶことか」

「喜ばいでか！」

もう会えないと半ば諦めていた人なのだ。

そりゃ喜ぶさ。

リョウさんは目を白黒させて驚いている。

俺はそんなリョウさんに微笑ましさを感じながらある事に気づいた。

「あと一分で今日が終わりますね」

「あ、ああ。そうだな」

このまま何事もなければいいのだが。
そう思った瞬間。
神風が吹いた。
いや、台風レベルの強風が一瞬だけ吹いた。
そしてめくり上がるリョウさんの布。いやさスカート。
盛大にめくり上がり、中身を丸見えにしている。
「見えた！　白！　あざっす！」
勝ち誇ったように宣言をする。
この長谷大は人の下着を見ておいて、『大丈夫見えてないから』
とほざくほど嘘つきではないのだ。
男はいつだって正直者でなければならない。
男。その名をノンデリカシーと言う。
これを前に愛さんに言ったらコークスクリューブローを貰ったが反省も後悔もない。
なるほど。
今日は俺自身だけではなく、俺の近くにいる人も悪運に巻き込まれるが、どうやら最後の最後にやってくれたようだ。
あ、ちがうちがう。やらかしてくれたようだ。

「・・・・・・」
リョウさんは普段通りの涼しい顔をしたまま固まっている。
クールな彼女だからこそ慌てていないが、それでも恥ずかしかったのだろう。
「あ、あの。リョウさん?」
声をかけるも反応なし。
フリーズしているようだ。
しかしそれから数十秒後。
突然動き出した。
「もう日付は変わったな。
俺の役割は終わった、それではな」
「え、ちょっと」
「明日は学校があるんだろう。無駄に時間を使って睡眠時間を削る事もない。
さっさと帰って寝ろ。おやすみ」
「あ、はい。おやすみなさい」
僅かに顔を赤くして歩いて去るリョウさん。
やっぱり恥ずかしかったみたいだ。
クールだなぁ。

俺はその背中に手を振った。

リョウさんの姿も見えなくなって、さあ俺も帰ろうかと歩き始める。
その瞬間、背後から何か、得体の知れない気配を感じた。
これは間違いなく殺気だ。
命の危険を――――感じるっ。
「こんばんは、大」
「こんばんは愛さん。おやすみ」
「ああ、おやすみ」
待って欲しい。
俺のお休みと今突然背後から現れた愛さんのお休みではイントネーションが違う。
まるで俺自身ではなく、俺の命そのものにおやすみなさいと言っているかのようなその言葉に俺はちびる。

いや、俺のプライドの為に言っておくが実際にはちびってなどいないぞ。
これはただの比喩でありマジでちびってなんかいないぞ。本当なんだから。
「このスケコマシが！」
「あひん」
その今まで見たことがないほどのむき出しの殺意が俺の意識を刈り取った。
愛さんは俺には威圧が効かないなんて言っていたけど嘘じゃないか。
そして俺の意識はブラックアウト。
「長谷センパイが死んだ！　この人でなし！」
「殺しちゃいねぇよ。あぁ楽しみだなぁ。
今日の学園でどういたぶってやろうか・・・・・・」
なるほど。
俺のアンラッキーデーはどうやら延長戦らしい。
ただ何だろうな。
振り返ってみれば俺にとってこの日は決して不運な日ではなかった気がする。
不幸の中に幸運があったからだろうか、むしろ普段より幸せを感じれた日だった。
とりあえずはリョウさんと縁が切れたわけではない。
それがわかっただけ良い日だったのだと自分は納得した。

３３話：三つの『あい』でＩ　ｌｏｖｅ　愛（前編）

一日目。

「ねぇ、愛さん。ねぇってば」

「・・・・・・うるせぇ。浮気者は失せろ」

長谷大は取り付くしまもない愛の態度に口を閉ざす。

恐らくこのままくじけずに愛に話しかけても彼女を不快にさせるだけだろう。

日を改める事にし、自分の席に戻る。

「どしたの長谷君。辻堂さんと喧嘩でもしたの？」

「喧嘩じゃないよ。俺が一方的に悪いから喧嘩は成り立たない。

だから謝りたいんだけどね・・・・・・・」

「口も聞いてもらえない状態ってわけ？」

「うん、許されなくてもせめて謝りたいとは思うんだけど」

大は少し参った表情をし、目線を愛に向ける。

そこには委員長や胡蝶達と話をしている風景があった。

内容はわからないけれど、三人のまじめな表情から察するに他愛ない事なのだろう。

日は跨ぎ二日目。
「愛さん。ちょっといいかな？」
「駄目だ。都合が悪い、消えろ」
「でも愛さん！　・・・・・・いや、俺がムキになるのはお門違いだね。わかった、今日は大人しく引き下がるよ」
「ふん」
相変わらず話すら聞いてもらえない。
昨日から一切の進展のなさに大は若干参った。
「ヒロ。辻堂と随分こじれているようじゃないか」
「あぁヴァン。そうだね、でも全部俺が悪いんだ。この件では辻堂さんに一切の非はないから」
「まだ何も言っていないのにいきなり辻堂を庇うんだな」
庇うとかではない。
愛は未だ一般生徒から恐れられている。
その為、大と喧嘩でもした場合それだけで教室内の空気が緊張したものになるのだ。

大はクラスメイトからは愛のブレーキ役として見られている。
勿論もともと愛にそんなものがなくとも彼女は暴れたりしないのだけれど。
それでも愛に僅かにでも怯える生徒からすれば現在喧嘩してピリピリしている彼女は恐ろしいのだ。
その話や空気を察した大はひたすらに責任は自分にあると言う。
無論事実だ。
愛を嫉妬させた原因は大体的に大にある。
故に偽りは一切ない。
だが何も知らない一般生徒から見たら現状は
『彼氏と喧嘩した稲村学園の番長である辻堂愛がすぐにでもキレそうになっている』
という自体にしか捉えられない。
だから大は愛の評判を気にして立ち回りながら愛と仲直りしようとしている。
愛は烏丸未唯や片岡舞に困ったような顔をしながら何か話していた。

三日目。
「愛さん、話がしたい」
「話すことなんてねぇよ」

「頼むから話だけでも聞いてくれ、じゃないと何も変わらない」
「うるせぇ、消えろ」
「ぐぅ・・・・・・愛さん、俺は諦めないから」
駄目だ。これでは何も進展がない。
大は歯噛みしながら席に戻る。
どうにかしなければと思案する。
きっかけがないのだ。
恐らくこのまま続けても愛が大の話を聞くことはないだろう。
大も薄々気づき始めた。
「だったらきっかけは待つんじゃなくて作らないと」
大は携帯電話を取り出し、とある人物に連絡を取った。

「・・・・・・どうしよう。大がとうとうアタシに愛想つかした」
大がアタシに最後の対話を試みて一週間が経った。
最初の三日、子供のように癇癪を起こした自分が大の話を一切聞かなかったのが原因だろう。
あの日以来、アタシに話しかけるどころか近づいてすらくれない。
だがアタシを無視しているわけではないらしく、すれ違えば笑顔を向けてくれるし朝だって顔を合わせれば挨拶はしてくれる。
ただそれだけだ。
仲直りはおろか、日常会話すらできていない。
「ふ～ん、じゃあお前ら別れんの？」
「え、まじっすか。自分らにチャンス到来？」
「んなわけあるか！　不吉なこと言うんじゃねえ！」
放課後、一人寂しく帰路を歩んでいると腰越と乾に声をかけられた。
どうやら二人は大の家に行くも家主である長谷先生や大がいないため出直しているところだったらしい。
さて、本当にどうする。
はっきり言えばアタシは大に怒ってなどいないのだ。

ただ単純に誰でにでも優しい大に拗ねていただけ。
だがその子供の癇癪の度が過ぎた。
大が一切話しかけてくれない。
もう頭も冷えて心の整理もできた。今大が話しかけてきたらアタシはちゃんと話を聞く。
それに冷たい態度をとったことも詫びたい。
けれど最後まで突っぱねた態度をとっていた手前、こちらから話しかけて謝るのは情けない。
つまり、機会がない。
「あ〜あ。最近ダイの奴、学校から帰ったらすぐ出かけるんだよな。
それで帰ってくるのはいつもおせぇし」
帰ったらすぐに出かける?
しかも帰ってくるのが遅い?
どういうことだ。
「そっすね〜。しかも毎日疲れきってますし、一体どこで何してるのやら。
勉強会すら中止で最近退屈っす」
言われてみれば、最後にアタシに話しかけた日以降妙に大の学園での状態が普段と違

う。
　どうも疲れているのか、休み時間は机の上に頭をおいて寝ている事が多くなった。
　心配になった委員長や坂東が長谷先生に問うも、長谷先生は僅かに困った顔をした後黙秘している。
　けれど身内で大に甘甘な彼女が疲れている大の原因を知っていて、それを止めていないという事は大にとって悪い事が起きているのではないのだろう。
「なぁ辻堂。もしかして浮気とかだったりして」
「それはない」
「即答っすね」
　大が浮気しておいて、それを顔に出さないわけがない。
　アイツはやましいことがあれば隠せないし、そもそもやましいことをしない奴だ。
「はは、まぁ私もそんな真似できる甲斐性がダイにあるとは思ってねぇけどな。
　けどさ、どうすんだよ辻堂」
「どうするって、何がだよ?」
　腰越が真面目な顔をしてこちらを見る。
「ダイと仲直りしようにもお前から話しかけられないし、ダイのほうからも話しかけてこない。

このままじゃお前、時間だけが経って気がついたら別れてたってオチになりかねないんじゃねーの？」

「うわぁ、実際よくある別れるパターンっすね」

・・・・・・ゴクリと生唾を飲んだ。

リアルだ。しかも有り得そうだから怖い。

「あ、アタシは別れたくない」

「辻堂センパイがそう思ってても長谷センパイが同じ事を思ってるとは限らねーっすよ」

そうだ。

梓の言うとおりだ。

アタシがガキみたいにすねたからあの温厚な大でも怒ったのかもしれない。

だってそうだろう、彼氏なのに話しかけたら失せろやら消えろなんて言われたらそりゃ辛い。

アタシが同じ事を大にされたらしばらく本気で落ち込むレベルだ。

振り返って自分が言った事が大にとってとても傷つく言葉だったことを理解する。

同時に、洒落にならないレベルで心臓が拍動し始めた。

「どどどどうしよう？」

言って気づく。
こいつ等に聞くことじゃない。
こいつ等も大狙いなのだ、アタシが大と別れるなんてむしろ嬉しいことだろう。
だが、アタシのその腐った思惑と現実は一致しなかった。
「素直に辻堂センパイから話しかければいいんじゃないっすか？
別に謝らなくとも長谷センパイが今更辻堂センパイの言葉遣いに怒るとも思えませんし、
きっかけさえ辻堂センパイが作れば向こうからまた謝りにくると思いますけどね」
梓の真面目なアドバイスに硬直。
「私はもうしばらく様子見たほうがいいと思うぜ。
ダイが何で辻堂に話しかけなくなったかわからないままだと、後々またひと悶着あるかもしれないしさ。
なんだったら私がダイを調べてやってもいい。興味あるしな」
腰越ですら真摯な対応と解答だった。
驚いた。心底驚いた。
アタシのその感情が表情にまで出ていたのだろう、二人は渋い顔をする。
「長谷センパイと別れんのは結構だけど、遺恨残されちゃたらたまらないんですよ。

別れるならせめて後腐れ残さず別れて欲しいっす」

「同じ意見だ。以前ダイとお前が別れたときとかダイの奴お前のこと引きずりまくってさ、

私がいくら誘惑しても落ち込んでて相手してくんなかったんだよな」

腰越はその時のことを思い出したのだろう、妙に悔しそうな顔をしている。

「だから次別れるのなら引きずらない別れ方しろ。

じゃないと私が困るんだよ」

不意にマキが表情を変える。

今この瞬間までは敵意が一切ない、無邪気な表情だった。

しかし、途端にその雰囲気が変化したのだ。

「もしダイと別れて、それでまたダイを腐らせるような真似をしたら次こそテメェを殺す」

並みの人間がこの目と言葉をぶつけられた場合、耐え切れず目をそらすか怖気づくだろう。

しかし愛はその目をそらすこと無く、そして一切怯む様子もなく受け止めた。

「ざけんなよ、アタシと大はもう別れねぇ。

だから後腐れもクソも無いんだよ。テメェにもうチャンスは無い」

「はっ、その意気だ」
　愛の完結的で覚悟あるその回答に満足したマキは威圧を収める。
「でも辻堂センパイが別れないっていくら言っても長谷センパイが別れたがったら結局アウトっすよね」
　原点に戻った梓の言葉に沈黙する。
　全くもってその通りだ。言い返す言葉がない。
　こいつ性格悪すぎ。
「そんじゃ明日から私はダイが帰ってからどこに行ってるのか調べておいてやるよ。辻堂、お前はお前で何か別の打開策でも考えてるんだな」
「あ、あぁ・・・・・・その、さんきゅ」
　珍しく力を貸してくれた腰越。
　はっきり言ってコイツにこんなふうに感謝したことがない。
　だからか、口にした礼も不細工な響きとなってしまった。
　腰越はアタシが素直に礼を言うとは思っていなかったのか、僅かに驚いた顔をする。
　しかしそれも一瞬のもので、すぐに表情がまた変わった。
「やめろっつぅの、気持ちわりぃ。
　私は単純にダイが何してんのか気になってるだけだ、テメエのためじゃない」

「き、気持ち悪い・・・・・・人が感謝してやればいい気になりやがって！」
「だってマジで気持ちワリーもん」
「おいコラ待て腰越！」
「やなこった」
腰越をどつこうとするものの、アタシの手をかいくぐってそのまま近くにあった塀に飛び乗った。
その猿みたいな身のこなしに調子を崩される。
「んじゃな。せいぜい頑張るんだな」
そう言って塀から塀へ飛び移った後、道路へ降りてそのまま腰越は姿を消した。
忍者のような奴である。
さて、どうしたものか。
腰越に大が何をしているのか調べてもらえるのは大いに助かる。
助かるのだが、アタシも何かアクションをしなければならない。
「辻堂センパイはこれからどうするんすか？」
横から梓が声をかけてきた。
実の所用事はない。
学校も終わり、一人で帰宅しているところにこいつ等と遭遇したのだ。

結局自宅に帰る事は変わらないのだが。
「予定ないから帰る。
普段なら大とデートでもする所なんだが、喧嘩中だし・・・・・・はぁ」
「重症ですねぇ。そんじゃ自分が長谷センパイと辻堂センパイの仲直りのプロデュースしましょうか？」
「え～」
「なんすかその反応、失礼すぎっしょ」
こいつが？　絶対裏あるだろ。
信用ならん。
「あ、何考えてるか何となくわかったっす。じゃあいいですー、ずっと喧嘩してれば？」
「・・・・・・一応話だけでも聞かせてくれ」
こうしてアタシの大との仲直り計画は進み始めた。

仲直り計画一日目。

授業が終わり、昼休みに入ったその時間。
アタシは弁当を二つ持って席から立ち上がる。
一つはアタシの分で、もう一つは大の分だ。
視線を大に向けてアイツが今何をしているのか確認。
すると案の定そこには腕を枕にして、食事すら取らず爆睡する大の姿が。
授業中なんども大の姿をチラチラと見ていたのだが、その時はちゃんと授業を受けている。
今のように寝てなどいない。
ちゃんと学生としての本文は果たしているのだろう、流石だ。
だがどうしたものか。
流石に疲れて寝ている大を起こすのは忍びない。
それに正直アタシもまだ覚悟が出来ていなかったりする。
先日、梓には積極的に弁当とか作ったり友達を介して無理やりにでも話すタイミングを作るように言われたが・・・・・・
「辻堂さーん、お昼一緒に食べようよ」
少し離れたところからミィがアタシを呼んだ。
断ろうかと思ったが、大は相変わらず爆睡。

腕の隙間から見える顔を見るに熟睡しているようだ。
「あ、ああ。すぐ行く」
今日は日が悪かったのだろう。明日こそ弁当を渡してみせる。

「ダメ。マジダメ。辻堂センパイらしくないヘタレっぷりにあずも呆れざるを得ないっす」
「でも大があんまり気持ちよさそうに寝てるから起こすのは悪いと思ってだな」
「シャラァップ！　一日事に長谷センパイの気持ちが徐々に辻堂センパイから離れているかと不安じゃないんですか!?」
「不安だよ畜生！　明日から頑張る！」

二日目。
案の定大は爆睡。
これでもう一週間半ずっとこんな調子だ。

「で、結局今日も話しかけられなかったと」
「いや、違うぞ。今日は放課後に教室から出るとき、大にまた明日って言われたんだ。どうだ、大きな進歩だ。明日はきっと晴れる」
「気が長すぎません？」

三日目
やっぱり寝ている。

「うおおおお出たぞGが！　こっちくんなこの野郎！」
「え、どこっすか。お、いた」
『じょうじ』
「ゴキブリってしゃべりましたっけ？」
『じょうじ、じじょうじょうじょじ
――――じょうじ』
「何言ってんのか分かんねぇけど、アタシの家もしかしてテラフォーミングされてる？」

「ゴキブリって喋りましたっけ？」

なんの進展もないまま４日目。
ここ数日大に食べてもらえなかった弁当は梓が処理している。
いい加減目的の大に食べてもらいたい所なのだけれど。
『何であずが毎日毎日過食強制されるんっすか～、贅肉ついたら恨みますからね』
と、冗談のようなことを言っているのだけれど目が割とマジなので怖いのだ。
「・・・・・・よし、今日こそ」
自分に気合を入れる。
大丈夫だ。今日こそ誘ってみせる。
取り敢えず日課になっている大が昼休みに何しているのかの確認をする。
が、案の定寝ていた。
しかし大の周りには坂東や平戸・・・・・・だったっけ？
取り敢えずいつもの取り巻きが大の机を囲んで談笑しながら食事していた。
けれど大は弁当箱を開けてすらいない。
昨日までの自分ならばこの状況なだけで日を改めた。

だが今日は違う。いつまでも尻尾巻いて逃げる女でありたくはない。
覚悟を決めて立ち上がる。
そのまま弁当をいれた鞄を片手に大の机の前に立つ。
「む、辻堂。どうした、何やら鬼気迫っていて命の危険すら感じざるを得ないのだが」
「辻堂さん、長谷君に用事タイ？　でも相変わらず長谷君熟睡してるタイ」
「そんな事はみりゃわかる。おい、大。起きろ」
緊張しきってしまい、妙に刺々しい言葉と態度をとってしまった。
そのせいか、取り巻きの奴らは怯えきっている。
「ん～・・・・・・その声は愛さん？」
本当に眠たそうに目をこすりながら大が顔を上げた。
顔には腕枕をしたせいで赤いラインができている。
その子供のような状態に少し吹き出しそうになるが、ここはこらえた。
「お、おう。ちょっと今からツラ貸せ。屋上行くぞ」
大の首根っこを掴み椅子から無理やり立たせる。
そしてそのまま引きずるように片手で大を屋上まで引っ張っていった。
「長谷君がカツアゲされるタイ！」
「いや、流石に彼氏であるヒロをカツアゲはしないだろう・・・・・・」

大を半ば担いで屋上まで連れてきた。
ここまでは完璧だ、文句ない流れだ。
あとは色々と、その・・・・・仲直りまで進ませる事だが。
「あ、あのさ・・・・・アタシと喧嘩してから毎日何してんだ。
いっつも眠たそうにしてんじゃねぇか」
よし言えた。
緊張して少し言葉がどもっているけれど、伝わった筈。
「あぁ。その事ね」
大は少し隈のできた瞼をこする。
はっきり言って心配で仕方ない。
こんなふうにやつれている大を見たのは初めてだ。
このまま放っておけば屋上で倒れてもおかしくないレベルでふらついている。

「内緒。愛さんには悪いけど教えられない」
「――――え」
フリーズ。
一瞬世界が凍った。
「何でだ、大がアタシに隠し事なんて・・・・・・まさかそんな」
もしかして、前に腰越たちが言っていた事が事実になるのか。
このまま大がアタシに興味を失ってそのまま関係は自然消滅。
嫌だ、まじで有り得ない。
大がアタシにそんな内緒にするなんて、それこそアタシに信用が無くなったって事でそうだ、こうしてはいられない。
だったら失いつつある信用や興味をもう一度アタシが取り戻せばいいだけだ。
慌てて鞄を漁る。
「こ、これ。よかったら食べてくれないか?」
鞄から引きずり出した二つの箱。
即ちベン・トー。
その味はほろ苦くてサワーで、こんな出来損ないな弁当をもらえる大は、きっと特別な存在なのだと感じさせました。

今では私が彼女さん。大にあげるのはもちろんヴェルタースオリジ違う、彼女の弁当。
なぜなら、彼もまた、特別な存在だからです。何言ってんだアタシ。
まぁぶっちゃけ失敗作なんですけどね、これ。
失敗したけど持ってきて大に食べてもらおうとしているあたりアタシも中々業が深い。
「うん、ありがとう。ありがたくいただきます」
「あ、あぁ！」
大は穏やかに笑い、アタシの差し出した弁当を受け取った。
そして屋上の床に座り込み、弁当を包む巾着を取る。
中から現れるピンク色の容器。
「それじゃあ頂きます」
大は両手を合わせ、箸を指で持つと、片手で蓋を開け中を確認する。
が、その中身を見た瞬間大は固まった。
無理もない。
だって――――
「ごめん、今日は失敗したのまで入れてる」

見た目がひどいのばかり入っているからだ。
例えばから揚げ。
自分で衣をつけて一から作ろうとしたのが拙かった。
どこを失敗したのか、衣がほとんど取れてただの生肉の油通しとなっている。油臭い。
例えばほうれん草のおひたし。
茹で過ぎた上に盛り付けるときに乱暴にしすぎた。
何かもうドロドロして溶けてるかグチャグチャになっている。
これではほうれん草の歯ごたえはない。あと臭い。
例えば肉じゃが。
全て失敗した。見た目が離乳食。あと臭い。
他にも色々あるけどもう殆ど駄目だ。
唯一まともなのは卵焼きのただ一つ。
これでは流石に大でも固まるだろう。
呆れていないかアタシは大の顔を見る。
けれど大は目を輝かせてその中身を見ていた。
「随分手間をかけて作ってくれたんだね。これだけ種類があって冷凍食品が一つもな

い。
　ありがとう、愛さん」
「・・・・・・おう」
　アタシに微笑みかける大。
　その不満も文句も一切なく、純粋なアタシの労力への感謝のみを現した態度や言葉に驚いた。
　大は嬉しそうに箸を進ませる、
　まず箸でとったものは肉じゃが。
　だが相手はもはや泥状の離乳食状態。箸ではさもうとした瞬間溶けてつかめない。
「スプーン使うか？」
「お願いします」
　持ってきてよかった。
　大はスプーンに持ち替えて、再び離乳食をすくい取り口に運んだ。
「うん。美味しいよ」
　そんな馬鹿な。
　大は一切の裏も含みもない笑顔を浮かべる。
　しかしそれを信じられなかったアタシは自分の分の弁当の肉じゃがを口に運んだ。

やはりだ。
甘すぎる。明らかに砂糖入れすぎな上に味が濃すぎる。
全体的に調味料の入れすぎだ。
はっきり言って不味い。
大は疑うアタシを無視して食事をすすめる。
ほうれん草のおひたしを食べ、次に出来損ないのから揚げ
様々な失敗作を口に入れ。
そして最後に卵焼きを残した。
「愛さんの料理は全部好きだけど、やっぱり一番好きなのは卵料理だね。
それじゃあ、大切に最後まで残した卵焼き頂きます」
スプーンではなく、箸で掴み取り、大きく口を開けてブサイクな焦げ目の付いた卵焼きを頬張る。
その味を堪能しているのか、もぐもぐと口を動かし続ける。
・・・・・結局大は弁当を全て、何一つ残さず全部食べた。
欠片も嫌そうな顔をせず、出来損ないの料理を満足そうに咀嚼し
一切の不満も感じさせない食べっぷりだった。
「ごちそうさまでした。久々に愛さんの弁当を食べれて嬉しいよ。

あ、この容器は俺が洗っておくよ」
大はそう言って弁当を巾着に戻し、それを自分の脇に置いた。
細かい気遣いが出来る奴だ。
本当に。
「マズかっただろ。無理して全部食いやがって」
そのひねくれた言葉を吐く自分に嫌気がさす。
大も流石に怒るかと思う。
「そうだね、味が濃かったり見た目もちょっと失敗してたかな」
大は包み隠さずあっけらかんにいう。
「でも、美味しかったよ。これはお世辞じゃない」
その言葉が本心なのか、アタシはそれを見極めるために大の目を見る。
若干睨みつける形になっているが、大はアタシの目を見つめ返す。
そして理解した。
一切の嘘も偽りもない。
本当にコイツはあの悲惨な出来の弁当を美味しかったと思っている。
「信じるよ。ありがとな」
「はは、礼をいうのはこっちの方なんだけどね」

大はそう言いながらフェンスに背を預け軽く目を閉じる。
かなり眠たいのだろう、頭も若干フラフラしていた。
時計を見れば昼休みの終わりまでまだ余裕がある。
仮眠をとる時間は十分にあった。
「大、そのさ。アタシ達、最近まともに話すらしてなかったろ」
大はアタシの言葉に反応し、薄く目を開けてこちらを見た。
半分夢の中なのか、反応が薄い。
「ごめん、話すら聞こうとしないなんて酷かったと思ってる。
大がアタシから距離をおこうと思うのも普通のことだ、許してくれ」
頭を下げる。
「う～ん。それは違うんじゃないかな」
「・・・・・・え？」
「愛さんが俺に謝る理由はない。
愛さんが怒るのは当然だし、だから愛さんが俺に謝るのはお門違いなんだ」
大は相変わらず眠たそうだが、先ほどより目を開いている。
「俺が愛さんという彼女がいるにも関わらず尚他の女性と仲良くしてしまった。
それこそマキさんや乾さんとのスキンシップなんて行き過ぎてる、俺自身自覚して

る」
　透き通るような、詫びるようなその音質がアタシの耳に入る。
　まさか大に謝罪されるとは思わなかった。
　だからこそ対応の仕方が閃かず、地蔵のように黙して座り込むことしかできない。
「ごめん愛さん。許して欲しい」
　言い訳は一切せず、完結的な詫びだった。
　アタシがさっきしたように頭を下げ、アタシの言葉を待つ。
　どうすればいいのか。
　こちらが謝ったのに気がつけば向こうが頭をさげるなどと。
　想定外だった。
「反省してるのか？」
「勿論だ。次からは気をつけます」
「・・・・・・ホントホントだな？」
「ホントのホントです」
　責めるつもりなんて毛頭ない。
　こんなのはただの建前のような言葉だ。
「アタシだけを見てくれるのか？」

「元から愛さんしか見えていないよ」
相変わらず、本当に相変わらずだ。
「何だよそれ、カッコつけすぎ」
「カッコ悪い？」
「うぅん、凄くカッコいいよ」
未だ頭を下げ続ける大の両頬を手で挟み、顔を上げさせる。
そしてそのままゆっくりと見つめ合う。
久々だ。
二週間近くこの顔をちゃんと見ていなかった。
そうだ、こういう顔だ。
平凡で、凡人で、凡夫で、こんな何処にでもいそうな、それこそ凡百の一つに過ぎない筈の男にアタシは惚れ抜いている。
大衆に埋もれればそれだけでコイツは存在感を失う程地味だ。
でも、それでもアタシにとってはどんな眩しい人間よりも輝いて見える。
「すっげぇ隈。どんだけ寝てないんだよ」
「えぇと、今日は三時間くらいしか寝てないかな」
驚いた。そりゃ眠いだろう。

これで授業中寝ていないのだから凄い。
アタシなら目を開けたまま寝ているだろう。
「じゃあ昼休み終わる間際になったら起こすからさ、ここで寝ろよ」
頬を撫でながらいう。
大は目をしょぼしょぼさせながらもアタシの言った『ここ』の意味を気づいたらしい。
眠気には勝てないらしく、うなづいた。
そのまま大はアタシの太ももに頭を置く。
うん、慣れ親しんだ頭の重さだ。
「大。お前が何をしてんのか知らないし聞かないけどさ、無茶だけはすんなよな」
「うん。でもあと少しで終わる事だからさ、あとひと踏ん張りなんだ」
何をそんなに頑張っているのか。
正直気になって仕方ない。
だがそれを追求するつもりはない。
先程は不安が募って追求したが、頭が冷えた今、もうその事は触れるつもりもない。
大はやましい事なんて絶対にしない。
けれどそれでもアタシにソレを隠している。
だというのならソレは誰の為に頑張っているのか――――

いや、アタシの想像は所詮自惚れなのだろう。
深くは考えないことにする。
「じゃあ頑張れ。でも頑張りすぎんなよ」
「うん。気をつけるよ」
そう言って大は目を閉じた。
アタシはそれ以降大に声をかける事もなく、ただ彼の笑顔を眺め続けた。

その日、午後の授業は全てサボった。
幸いにして一つは長谷先生の授業だ。
彼女ならば怒りこそするものの、大の疲れを気遣って許してくれるだろう。

３４話：三つの『あい』でＩ　ｌｏｖｅ　愛（中編）

「長谷、アンタいい加減休みなさいよ。
辻堂と仲直りしたんならもう無理してバイトする意味もないでしょうに」
「いや、もう少しだから最後までペースはこのままで行くよ。
それに意味はまだある。少なくとも俺が今バイトしてる理由は仲直りのためだけじゃないからね」
シャレにならない程重たい頭と瞼を無理に起こしてカウンターを拭く。
俺は愛さんと喧嘩し、口も聞いてもらえなくなった三日目に片瀬さんへと連絡を取った。
なんて事はない、ただの割のいいバイトの斡旋を頼んだのだ。
こういう場合は求人雑誌やサイトを見るよりも大地主の情報網を頼りにしたほうが効率はいい。
片瀬さんが紹介するのだから当然人手不足の所である。
そして片瀬さんが紹介したのだから一々面倒な面接なども無い。
無論軽く俺の人間性の把握などをする面接まがいの会話はあったが、それでも形式的

な面接ではなかった。
「ダイがやりたいって言ってんだからほっとけよ。
それよりも店員さん川神水おかわり」
「はい、すぐにお持ちいたします」
俺が片瀬さんに紹介されたバイト先はいわゆる大人のお店。
バーである。
結構な人気店なのだが、どうにも店長があまり人を雇わないのか年中人数不足らしい。
俺と店長を除けば店員はわずか四名。
しかも一人休んでいて、カツカツの人数だ。
忙しさが半端ではない。
救いなのは店自体の面積が狭いため、当然テーブルやカウンターの数も相応に少ない。
故に一度に入れる客もそれほどでもないという所か。
「あ、長谷センパーイ。自分にも川神水一つくださーい」
「かしこまりました」
急いで、されど音も塵も立てず素早く酒を並べる棚の前に行く。

一通り接客マナーを知っている俺は、入って早々に主戦力扱いとなった。
レシピを渡され何故か二日目から厨房にも入れられた。
そして三日目以降は厨房とカウンターの接客の掛け持ちとなった。
はっきり言う。
途轍もなく忙しい。だがバイト代が凄い。
なるほど、これは短期で働くには適している。
俺が学生でなければだが。
「どうぞ、空のグラスはお下げしてもよろしいでしょうか？」
「・・・・・・本当に馴染んじゃって。もう倒れても知らないわよ」
どうやらマキさんは俺をつけていたらしく、数日前に俺がここで働いている途中に客として来た。
その翌日、今度は乾さんもマキさんについてきた。
とはいえ、マキさんは愛さんには俺がバイトしていることは内緒にしてくれているようで安心だ。
だが、来るたびに乾さんとマキさんはアルコールなど入っていないのに何故か酔った状態になる川神水をあまり酔わない程度に飲んで帰って行く。
大学生のマキさんはともかく未成年の乾さんが夜遅くまでバーで飲んでいていいも

のなのだろうか。
それを店長に聞いたら、マキさんという保護者がいるし、飲んでいるのは川神水だ。問題ない。
との事。寛大である。
「バイト終了まで後二週間、ようやく折り返しか・・・・・・」
マキさんや乾さんのグラスを持って厨房に戻る途中、一人呟く。
大丈夫だ。行ける。
少し勉強時間や効率は減ったが、それでもまだ余裕はある。
体力もまだ大丈夫だ。倒れるほどじゃない。
「長谷君。そろそろ上がりの時間だ、お疲れ様。
今日も助かったよ、また明日もよろしくね」
「あ、はい。お疲れ様です」
時間を見れば深夜二時。
学生が働いていい時間ではない。
だがそこは片瀬家の力と店長の寛大さでどうにかしてもらっている。
貴重な夜勤手当。これを逃す手はない。
俺は軽く息をついて、後片付けなどキリの良い所まで終わらせ、

他のスタッフに一声かけてロッカーへと戻り身支度を終えた後、店裏から出た。
そして出た途端、そこにはバイクを吹かすマキさんの姿が。
「おつかれさん。それじゃあ帰ろうぜ」
「・・・・・毎度思うんですけど、川神水飲んでバイクって飲酒運転にならないんですかね？」
「大丈夫だろ。それにふらつかない程度に飲んでるし問題ねぇよ」
そう言いながらスーツ姿のマキさんは俺にヘルメットを投げ渡して来た。
「そう言えば乾さんと片瀬さんは？」
「今日は乾は恋奈のホテルに泊まるんだってよ。仲のいいことで」
俺はヘルメットをかぶり、遠慮なくマキさんの後ろに座った。
正直マキさんの送迎は助かっている。
バイトでクタクタになった挙句、ここから俺の家までは結構距離があるのだ。
できれば早く帰って早く寝たい。貴重な睡眠時間を帰宅時間で消費したくはない。
「そんじゃ行くぞ、しっかり捕まってな」
「はい」
そうは言うもののやはり抱きつくわけには行かず、軽く腰に手を回す程度だ。
「ったく、振り落とされても文句言うなよ」

マキさんの運転は正直荒い。、
けれど疲れている俺を不器用に気遣ってくれているらしく、この仕事帰り時に限っては比較的安全運転である。
一人で乗っているとき程速度も出さないし、驚く程揺れや緩急の無い運転なのだ。
「いつもすいません。本当に助かってます」
俺はあまり大きな声を出さず、呟くように行った。
エンジンの音にかき消され、しかもマキさんはフルフェイスだ。
恐らく気づいてすらないだろう。
そう思っていたのだが
「気にすんな。お前は私の弟分だからな、いつだって面倒見てやるさ」
マキさんも俺と同じように呟くように言った。

大と仲直りして三週間後。

その日、大がバイトの期限が終わったことを理解した。
顔色が先日と雲泥の差なのだ。
元々大や周りの人間から大がバイトしていることを聞いたわけではない。
腰越も自分で調べてくれると言っておいて、大が何しているのかわかった途端手のひら返して内緒にしやがった。
だが、それは腰越が大の意思を尊重してのことだ。腹を立てる理由はない。
アタシが大のバイトの事を知ったのは一週間前。
軍団の一人がとあるバーで大が働いているのを見て携帯カメラで写真を保存していたからだ。
そいつがアタシに写真を見せてきた事がきっかけでわかってしまった。
「辻堂さん。なんだか今日の長谷君はソワソワしていませんか？」
「してるな。ものすごくしてる」
二時限目の授業が終わり、休み時間に入った。
ふと目だけで大の姿を追えば、大は挙動不審にソワソワしている。
しきりに鞄を気にしているというか、それでいてやたらアタシを見てくる。
その度にしょっちゅう大を見つめているアタシと視線が合い、互いに軽く赤面してしまうのだ。

あ、また目があった。

・・・・・・・・・・・照れるな。

「ふふ、ラブラブですねぇ。とてもいい事です」

「う、うっせぇ。ラブラブって言うな」

学園外ならば肯定している所だが、流石に学園内で言われると恥ずかしすぎる。

委員長はアタシと大が仲良くしていると事あるごとに今みたいな事を言うからタチが悪い。

また本人に借りがあるし悪気もないから余計に始末に負えない。

「ですが、さっきから落ち着きがありませんねぇ。

何か辻堂さんに用事でもあるのでは？」

多分そうだろう。

しかしここまで挙動不審な大は初めて見た。

さてさて、どうしたものか。

時間を見れば休み時間は後三分程度で終わる。

今から大の所に行って話を聞いたところで肝心のところまで話が進むとは思えない。

大自身も十分の休み時間程度で用事が終わるとは思っていないからこちらに来ないのだろう。

とするのなら、何かがあるとすれば昼休みか。
「・・・・・・勝負は昼休みか、ワクワクしてきたぜ」
大がアタシにどのような用事があるのかは判らないが、取り敢えず大と昼休みに何かが起こる。
多分悪い事は起きないはずだ。
だって大と仲直りしてからというものの、雨の日以外は屋上で毎日一緒にしているのだからこれもその延長線に違いない。
今日だってこのイベントを抜きにしても昼休みを楽しみに登校してきたのだし。
「やべぇよ。あの魔王、昼休みに誰か処刑するみたいだぜ・・・・・・」
「しかも凄く楽しそうタイ」
何か周囲に変な誤解が広がったようだがまぁ良い。
雑音を無視して昼休みまで期待に胸を膨らませておくことにしよう。

「で、何にも無かったわけっすね。はは、ザマァって感じ」
「お前いっぺんシバかれてみるか？」
時は二十時。
梓はアタシの家でくつろいでいた。
「ですけどそれなら今日の昼休みは何してたんですか？」
「一緒に屋上でアタシの作った弁当食べた」
「クソったれ、結局イチャついてんじゃん。
あ～あ、聞いて損した感じっす。時間返してくださいよ」
こいつ日に日にアタシに対して口汚くなってる気がする。
だがこれは舐められているというよりは、
仲良くなってアタシに対して気取らず素を見せるようになってきたという感じか。
まぁ多少気にはなるがそこは気にしないでおこう。
「でもさ、結局大が何に対して挙動不審なのかわからねぇんだよ。
梓、お前は知らないか？」
「知らねーっすよ。大体長谷センパイのする事を詮索しないんじゃなかったんですか」
それを言われると辛い。

確かにアタシは大のする事を詮索しないと言った。
しかし、それでもやっぱり気になるのである。
けれどまさか前言撤回などとみっともない真似をするわけにも行かない。
仕方ない。
時間に任せるしかないか。
「ところで辻堂センパイって指綺麗ですよね。
男共を殴り倒しまくってる人の手には見えねーっす」
「お、おい」
会話が途切れて少し長い間が空いた途端、梓が急にアタシの手を握った。
「それに爪もピンク色で傷一つない。
ネイルアートとかしないんですか？」
「え、やだよ。あれグロイし」
「あはは、まぁあれって男ウケも凄く悪いですしカレシいるなら正直やめたほうがいいっすね」
そりゃ悪いだろうよ。
前にマイが凄く気合入れてきたのを見せてきたが、
アタシには凄いという感情と気持ち悪いという評価しか下せなかった。

男子がイモムシみたいだと比喩していたが、なるほど、的を射ている。
「そうだ。辻堂センパイってこの指輪つけれます?」
梓は思い出したように自分の鞄から綺麗な化粧箱を取り出し、中から洒落た指輪を数個取り出した。
「随分沢山持ってんだな」
「あ。これは前のカツアゲで手に入れた金で買ったものじゃないっすよ」
「言わなくてもわかってるよ」
取り敢えず目にとまったハートの形をした宝石をはめ込まれたシルバーリングを手にとって指にはめてみる。
だがどうにもサイズが合わなかったらしく指先から下に進まない。
残念だ。結構可愛いデザインなのに。
「ありや、それじゃあこっちは入りますかね?」
「あ、可愛い」
次に梓が取り出したのは兎の模様が掘られたリング。
一々洒落ているデザインを持っているんだなこいつ。
アタシの知り合いは髑髏やら十字架みたいなゴツゴツしたのばかりなのに。
取り敢えず受け取ってはめてみる。

「ん、入った。サイズも丁度かな」
綺麗に入った。
全くスペースが余っている感じもなければ指を締め付けられている窮屈感もない。
ジャストな号だ。
「ふふ、辻堂センパイはこういうリング似合いますね」
「そりゃどうも」
取り敢えずいつまでも梓の指輪をはめておく訳にもいかない。
愛着がわく前に外して元の箱に戻す。
あとでこのリングを買った店を教えてもらおう。
「自分バイトで網引かされたりしてるんで少し荒れてるんですよね。
見てくださいよ、ここなんてタコできちゃって。おかげでリングが入らないんすよ」
そう言いながら指の関節を見せてきた。
確かに、全ての指の関節に小さいタコができている。
「もうこんなのダサくて最悪なんですけど、
前にこれを長谷センパイに見せてたら褒められたんすよね」
「バイト頑張ってるねってか」
「まんまそう言われました」

そりゃそうだ。
カツアゲしまくってたコイツが勤労意欲旺盛に頑張っている証拠がこのタコだ。
梓を気にかけている大もソレを見たら安心と共に嬉しくも思うだろう。
「へぇ。そりゃオメデト」
「む、何やら興味ないご様子」
当たり前だ。
何が悲しくてカレシと他の女の仲良しエピソードを聞かねばならん。
アタシの興味ゼロな態度を察した梓は少し苦笑いを浮かべた。
「で、長谷センパイの挙動不審な件はどうするんすか？
自分としては時間に任せるのが一番と思いますけど」
「それでいいよ。アタシも別に気にはなるけど急かす気はないし」
いつまでも大が踏みとどまっている筈もない。
近いうちに挙動不審となる理由も解決に向かうだろう。
「そっすか。じゃ、自分この後用事あるんでお暇しまっす」
そう言って梓は出していた箱をしまい、立ち上がる。
「ああ。送ろうか？」
「あはは、本当に辻堂センパイは男前っすね。

でも遠慮しますよ、別に自分はか弱くないんで」
「そうかい」
相変わらずな軽いノリでアタシの部屋から出る梓。
せめて玄関までは見送ろうとその背に続く。
階段を降り、すぐ隣の靴置き場で梓は自分のローファーを履く。
「そんじゃお邪魔しました～」
「ああ、お休み」
軽く手を振ってドアノブに手をかけた彼女を見送る。
その瞬間、梓は半分ドアを開いたところで止まった。
何か忘れ物か？
「辻堂センパイ」
「ん？　なんだ」
僅かに、本当に僅かに顔をこちらに向けた。
コチラからでは梓の顔はほとんど見えない。
左目がかすかに見える程度の角度だ。
けれど、それだけしか見えないにもかかわらず――――
「・・・・・・いえ、何でもないっす」

異様な殺意を感じた。
一瞬だった。一秒足らずの時間だけ、梓が凄まじい殺意をこちらに向けた。
理由はわからない。
だが間違いなく梓の敵意はこちらに向けられた筈。
「待て、今のは何だ」
まさかこのまま黙って返す訳にもいかない。
辻堂家を出た梓の後を追い、問い詰める。
梓はアタシに背を向けて数秒立ち止まる。
人気がなく、夜の暗闇に包まれた道の真ん中で佇んでいる。
・・・・・最悪ここで梓とやりあうのか。
そんな想像すらしてしまう緊張感だった。
それ程までに先ほどの梓の威圧は凄まじかった。
梓は僅かな間を置いた後、ゆっくりとこちらを向いた。
いつでも梓の攻撃に対応できるように警戒しつつ、その顔を見る。
「何だって、何の事っすか?」
いつも通りの飄々としたものだった。
表ヅラのいい、見るものに親しみを与えるなつっこい笑顔。

それが完全な作り物である事はアタシや大にはわかっている。
「何のこと、だと。しらばっくれるなよ」
「・・・・・・」
アタシの問いに梓は笑顔のまま表情を固める。
その不気味さは計り知れない。
全く思考も読めない。
警戒するアタシを見て梓はぼそりと口を開いた。
「ゴチャゴチャとうっせーんだよ、この幸せ者」
薄く目を開いて、能面のように薄気味悪い笑顔のままそう呟いた。
「なんだと?」
再び梓から向けられる殺意。
腰越に勝るとも劣らない明確な敵意に真っ向からぶつかる。
「いいですよねぇ辻堂センパイは。どんな事があっても長谷センパイの一番。
あ～あ、本当に羨ましいっす――――殺したくらいに」
「――――っ!」
梓が一瞬でアタシとの距離を詰め、ゼロ距離で顔を向け合う形になった。
不意ではない。事前に梓はアタシに敵意を向けていた。

故にこれは起こるべくして起こった展開だ。
そしてアタシは今、梓の動きを完全には見きれなかった。
こいつ、確実に冬の喧嘩の時よりも強くなっている。
梓は至近距離でアタシにメンチを切るだけて手は出してこない。
アタシもそれをにらみ返すのみで手は出さなかった。
それをどれだけ続けただろうか。
不意に誰か一般人が近づく気配をアタシと梓は察し、距離を置いた。
「なーんて、冗談っすよ。マジになんないでくださいよ」
梓はそれだけ言って再びこちらに背を向け帰路につく。
「どこまでが冗談だ」
それだけは確認したい。
梓は一瞬だけ足を止めた。
「はは、全部っすよ。そんじゃ今度こそマジで失礼しまっす～」
軽く手を振ってそのまま振り返らず歩いて離れていく梓。
アタシはその背中を姿が消えるまでにらみ続けた。
「全て冗談ってところが嘘なんだろうが」
何故、この日に梓に大のことで嫉妬されたのかはわからない。

けれど、今日の梓は明らかにアタシに対して殺意すら抱くほど嫉妬していた。
釈然としないものをしながらアタシは梓の背中が見えなくなってから同じく帰路についた。

「っていう訳で、辻堂センパイの指の号を調べてきましたよ」
「・・・・・・・え？」
頼んだ記憶がないのだけれど。
確かに俺は指輪を買おうと思いバイトに明け暮れた。
今では自分の体を度外視して働き続けたおかげで何と二十五万円程手元にある。
これはサラリーマン初任給より同じか少し上くらいだろうか。

ともかく、これで愛さんに指輪をプレゼントし、喧嘩の仲直りのきっかけにしよう。
と、先日まで画策していたのだが。
何だかんだで普通に仲直りしてしまった。
良い事だ、良い事なのだが俺の描いたドラマチックな指輪を渡すシーンは粉砕された。
しかも指輪を買う以前に俺は愛さんの指のサイズを知らなかった。
抜かりまくりである。
「大体あずの指と同じくらいっす。ほら、お店行った時にこれと同じサイズのを頼めば間違いないですよ」
そう言って乾さんはポケットから綺麗な兎模様のシルバーリングを取り出した。
「それ、辻堂センパイの指にぴったりサイズなんで。
採寸合わせが終わるまでセンパイが持っててください」
そう言ってニコニコと笑いながら彼女は俺のベッドに座った。
・・・・・今日の彼女は何かおかしい。
別段鋭いわけじゃない俺だけれど、それだけは何だか理解できた。
笑顔がぎこちないというか、どこか内心傷ついているような感じだ。
その無理して笑っている乾さんに俺は対応を考える。

「どうして俺が愛さんに指輪を買おうとしている事を知っているのかな？」
対応するにはまず相手が何故傷ついているかを理解することからだ。
俺は少しづつ核心に迫る事にした。
「ん～、恋奈様が酒に酔ってた時にぼやいてました。
つってもはっきり言ってたわけじゃないっすけど」
口が軽いわけではないし、俺が口止めもしてなかったからだろう。
俺はバイトを紹介してもらうために、バイトをする理由を誠意として伝えた。
故に片瀬さんだけは俺のバイトする理由を知っていたのだが。
「連日片瀬さんの家に泊まってたのはそれを聞き出すためだったんだね」
「・・・・・・・さぁ？」
恐らく乾さんがそれを聞き出すために敢えて酔わせたのだろう。
これで俺の動機を知っている理由はわかった。
では次の問題だ。
「何故乾さんがわざわざ愛さんの指輪の採寸を？」
俺は実の所バイト期間が終了する前から指輪を調べていた。
それを乾さんもデザインの方面で相談に乗っていて貰っていたのだが、
愛さんの指のサイズで相談したことは一度もない。

何故俺が悩んでいるという状態から愛さんの指のサイズのことに行き着いたのかは敢えて聞かない。

計算高く頭の回転のいい乾さんの事だ、相談した時の最初からわかっていたとしてもおかしくないからだ。

問題は何故頼んでもいないのにその採寸を手伝ってくれたのかというこなのだけれど。

「別に、長谷センパイが困ってたから手を貸しただけっす」

「乾さん」

嘘ではないだろう。

しかし本当のことを全て言っていない。

俺の少し問い詰める声色に乾さんは若干圧された。

そしてバツの悪そうに顔をそらして呟くようにいった。

「だって、辻堂センパイの事ばっかりで最近まともにあずの事かまってくれませんし。だったら不服ですけどお二人の事を橋渡ししてさっさとこんな状態終わらせたいなって・・・・・・」

確かに、俺は愛さんと喧嘩してからは愛さんの事ばかり考えていたし、愛さんのプレゼントのためにバイトし続けた。

「・・・・・・ふむ」
なるほど。
ここに来て自分の失態に気がついた。
「乾さん。この指輪は後一ヶ月と半くらい借りてていいかな？」
「え、何でそんなに」
「ちょっとね。まだ暫く愛さんへの指輪は買わないよ。
それと同じくらい大切な用事思い出したからさ」

「なぁ、結局大がバイトしてた理由って何だったんだろうな」
「知りませんよ」
「なぁ、何でようやくバイト終わったと思ったらまた大の奴バイト始めてんの？」
「だから知らねーっすよ」

センパイの部屋で辻堂センパイのサイズにフィットする指輪を渡してから、あの日の翌日からまた長谷センパイはバイトを始めた。

勿論場所はコネのある前に働いたバーだ。

「デートの時間がァ・・・・・・・」

「・・・・・・久しぶりの勉強会、楽しみにしてたのになぁ」

自分と辻堂センパイ、ふたりして愚痴る。

因みに辻堂センパイが何故ここを知っているかだが、長谷センパイが自ら打ち明けたらしい。

働いている理由までは言っていないようだけど。

「二人共、川神水どうぞ」

「あ、どもっす」

「ああ、さんきゅ」

俯いて落ち込んでいると、カウンターの方からバイト服であるスーツを来た長谷センパイが注文の品を持ってきた。

「あれ？　おい、大このカクテルは頼んでないけど」

川神水とは別に長谷センパイはこちらのテーブルに何やら綺麗なピンク色をしたカクテルを置いた。

それに気づいた辻堂センパイは厨房に戻ろうとする長谷センパイを呼び止める。
「それは俺からのおごりだよ。店長も毎日来てくれるからサービスしていいってさ」
「つってもアタシら未成年だし」
意外とまじめな辻堂センパイ。
だが自分は知ったことではないので取り敢えずストローで吸ってみる。
その綺麗な液体を口に含んだときノンアルコールである事がわかった。
まぁ当然か、長谷センパイもここの店長もそういう法律的ルールは守る。
時々隙間を縫ってかわそうとはするものの、ブチ破ることはしない。
今回もその例というわけだ。
「辻堂センパイ、これノンアルコールっすよ」
「そういう事、それじゃごゆっくり」
軽く微笑んでその場を去るセンパイ。
しかし数歩歩いた後、言い忘れたことがあったのか再び振り向いた。
「二人共、明日は学校もあるんだし早めに帰るんだよ」
「お前はアタシの母さんか」
辻堂センパイの言葉を聞いて少し笑いながら長谷センパイは今度こそ厨房に戻った。
その背中を見送った自分らは特に喋ることもなく奢りのカクテルを飲む。

ノンアルコールのカクテルってただのフルーツドリンクと同じじゃないのかな。

などと地味な疑問を抱きつつ、ただ静かに飲む。

「あのさ、明日学校あるとかアイツ言ってるけどアイツは何時に今日バイト終わるんだ？」

何時だったか。

金曜日と土曜日はかきいれ時だから確か朝まで仕事ってパターンが多いけれど、翌日が学校ある日は確か・・・・・・

「二時か三時くらいだったような」

「アホか」

じゃあいつ休んでいるのか。

確か週に一度休み貰ってるというか入れてるとは聞いたが、そんな日は見たことがない。

何故今またこんな過酷なバイト生活を再開したのか。

一度目は辻堂センパイの指輪の為だったのだが、今バイトしている理由はよくわからない。

まさか辻堂センパイへ贈ろうと思った指輪が想定以上に高かったなんてこともないとは思うけれど。

「お、お前ら来てたのか」
「あぁ？」
突然後ろから聞きなれた声がして振り向く。
相変わらずな辻堂センパイは目つきを鋭くして背後の人を睨みつけた。
「どもっす。皆殺しセンパイ」
「ああ、隣座るぜ」
辻堂センパイではなく自分の隣に座ることに特に理由はないだろう。
別にこちらのほうが近かったからとかだと思う。
「今日もっすか？」
「今日もだ。だがまぁ、明日は講義もねぇし問題はないな」
「毎度ご苦労さまです」
「別に苦労と思っちゃいねーよ」
今日も長谷センパイを送るという事だ。
長谷センパイが帰る時間は遅いし、寝不足の頭では正直危険がある。
その事を考えた皆殺しセンパイはできる限り自宅に送ることを決めていたらしい。
自分としても大学生で時間調整しやすい彼女がそうしてくれると心強い。
もっとも、これは辻堂センパイには知らせてないし教えるつもりもないけれど。

何気なく時計を見れば時刻は既に九時を回っていた。
流石にこれ以上いると店長に追い出されかねない。
仕方なく辻堂センパイを言い聞かせようとする。
「それにしても働いている大もいいなぁ。
あんな働き者な旦那、そういないよな・・・・・・」
「・・・・・もう時間ですから帰りますよ!」
「ちょ、何だよ。何で怒ってんだ?」
「怒ってねーっすよ」
相変わらずな辻堂センパイの腕を引っ張って会計を済ませる。
おしゃれな扉を開いて店を後にしようとする瞬間、何気なく振り向いて長谷センパイの姿を目に止めた。
その姿は一生懸命で。
一切の仕事への手抜きがなく、勤労とはこうあるべきだという見本に出来そうな働き振りだった。
ただ、やはり働きすぎだ。
目には隈がまたできているし、一般人は気づかないレベルだが足取りが少しふらついている。

こんなのをまた一ヶ月近くやってたら今度こそ倒れるんじゃないかという一抹の不安を感じた。

そして一ヶ月後。

「で、入院したと。馬鹿かアンタは」
「言い訳のしようもありません」
やっと二度目バイトの期日が終わり、翌日買い物をしての帰り道に突然俺は倒れたらしい。
幸いにして人通りの多い街中で倒れたおかげですぐに病院に運ばれた。
おかげで大事はない。
「過労ね。それ以外にありえないわ」
「ですよね。俺も思う」

店長も少しは休めと何度も言ってくれたのだが、それを聞かなかった俺が全て悪かった。

自分としてはもう少し行けると思ったのだが、思いのほかこの体は普通すぎたらしい。

点滴を打たれている自分の腕を見る。

「ほら、林檎。食欲があるようなら食べなさい」

「あ、ありがとう。頂きます」

目が覚めてまず聞かされたのは自分の体調ではなく姉ちゃんの説教だった。

一応バイトしている理由は全て話していて、尚且つ納得してくれていたのだが、流石に倒れたのはいけなかった。

泣きながら怒られてしまい、不謹慎かもしれないが姉ちゃんが俺を大切に思ってくれていることが改めて分かって嬉しかった。

そして姉ちゃんが帰った後、入れ違いに片瀬さんが来た。

彼女はどこから聞いたのか俺が入院したことを知っていて、果物カゴを手にお見舞いに来てくれた。

「アンタのお姉さんから聞いたけど、今日の夜には退院できるみたいね。

何はともあれしぶといその体に産んでくれた親に感謝しなさい」

親に感謝か。
その親の顔すらもう覚えていないのだけれど。
「う、うん。そうだね」
「・・・・・・あ」
片瀬さんはどうやら俺の反応を見たあとに俺自身の生い立ちを思い出したらしい。
かなり申し訳なさそうな顔をする。
別に悪気があって言ったわけでなく、話の流れでつい言ってしまったことなのだから罪悪感を感じる必要はないのだけれど。
「ごめん。無神経だったわ、謝らせて」
「いや、気にしないで」
こういう時に片瀬さんは偉いなぁと思う。
組織のトップをやっているからだろうか、自分の過ちは素直に受け止めて遺恨を残さないように素直に謝るその姿勢
俺が彼女に学ぶ事は多いと思う。
ともあれ、こうして見舞いに来てくれた彼女に頭を下げられるのは正直勘弁して欲しい。
「それで、何で辻堂の指輪代を稼いだあとにわざわざまたバイト始めたのよ。

私にも説明ないし、正直心当たりもないのだけれど」
俺が困っていることを察したのか、話題を変えてきた。
さて、これは言っていいことなのか？
考えるまでもない。俺と片瀬さんは互いに信頼関係を重視する仲だ。
例え言わなくとも俺たちの関係に亀裂は生まれない、しかし俺は片瀬さんを信頼しきっている。
ならば彼女の問いに対してお茶を濁す真似はしたくない。
「乾さんの分も稼ぎたいな、と思ってさ」
「はぁ？」
想定内の反応である。
だが片瀬さんからしたら想定外らしい。
呆気にとられた顔だ。
「前に乾さんと愛さんの指輪の会話した時なんだけどね、
その時の乾さんの表情が俺にとって何だか凄く辛くてさ、だから乾さんにもプレゼントしようかなって」
あの時、無理して笑って俺を気遣った乾さんの表情は何故か俺の心を揺さぶった。
日頃から俺に真っ直ぐ好きだと伝えてきて、俺についてまわる乾さん。

愛さんには申し訳ないけれど、彼女をないがしろにする事は俺には無理だ。
「呆れた。でも長谷らしいといえばそれまでね」
「俺らしいってなんなのさ」
「アンタが気にすることはないわ、アンタはそのままでいなさい」
抽象的すぎてわからん。
「で、二人に渡すプレゼントは用意しできてるわけ？」
「ああ、これなんだ」
俺はベッドの隣の棚に置かれた自分のリュックを手に取り、中身を漁る。
そのリュックの中には二つのこじんまりとした、けれどデザインの良い箱が二つあった。
その箱を二つ自分の膝に乗せ、蓋を開ける。
「・・・・・・へぇ、悪くないわね」
愛さんに渡す為の指輪。
これは一ヶ月かけてどれが愛さんに似合うか考えた。
そして行き着いた答えが、シルバーリングにセンスの良い絵柄で猫の姿が掘られた簡素なもの。
だが決して安物ではないし安っぽくもない。

現に片瀬さんがその指輪を見て中々の評価を下してくれた。
それだけで自信が出る。
「その指輪には触らないわ。最初にその指輪を手に取る女は辻堂であることがスジだしね。
そっちのが梓の？」
片瀬さんは指輪を触らず、箱の上から見るだけにした。
「うん。こっちは指輪じゃなくてピアスなんだけど」
何をプレゼントするかかなり迷ったのだ。
実の所乾さんはアクセサリーなど沢山持っているしセンスもいい。
これで大金かけてセンスのないプレゼントなどした暁には情けないことこの上ない。
取り敢えずこちらも箱を開けて片瀬さんに中を見せる。
「ふぅん。悪くないんじゃない？
ちょっと梓の好みとズレてる気がしない事もないけれど」
「え」
驚いた。しかし不思議な事ではない。
というより俺自身正直なところそんな気はしていた。
「とはいえデザインは悪くないわ、大丈夫。それなら梓も喜ぶわよ」

俺の動揺を見抜いた片瀬さんは優しく肯定してくれた。
こういう時に口先だけの励ましを送る彼女ではない、つまり本当に乾さんが喜んでくれると考えての言葉にちがいない。
「でも梓って確かピアス穴一つじゃなかった？」
そうなのだ。
この用意したプラチナダイヤで出来たシンプルなピアス。
ちゃんと左右付けるため計一セット分、つまり二個ある。
そして乾さんは片方の耳にしかピアス穴を空けていない。
どうしたものか。
「ん～、こういう時に私が受け取る側だった場合――――あ」
考察していた片瀬さんが不意に声を出す。
なんだろう。
「いや、いいわ。そのままプレゼントしてあげなさい。
多分梓なら新しいピアス穴は空けずに・・・・・・」
空けずになんなのだ。肝心なところを言ってくれない。
俺の疑問げな顔をみた片瀬さんは苦笑いを浮かべた。
「いいから心配しないでこれらをプレゼントしてあげなさい。

どっちもアンタらしい地味さだけどきっと喜ぶと思うから」
地味とは失敬な。
否定はできないが言われると地味に傷つく。
地味な人が地味に傷つく・・・・・・しょうもない。
「それじゃ、そろそろ時間だし私は失礼するわ。
せいぜい渡すときに修羅場にならないように気をつけるのね」
「忠告ありがとう、絶対楽しんでるよね？」
「気のせいよ」
互いに笑顔を向け合う、帰り支度をする片瀬さんを見送る。
片瀬さんは制服のままこちらに来たらしく、七里のセーラー服だ。
そして身支度を終え、俺の病室のドアに手をかけた。
「長谷。ちゃんと梓の手綱を握りなさいよ、あの子は本当に危ないんだから」
それだけ言って片瀬さんは病室から出て行った。
片瀬さんの最後の言葉。
俺には心当たりがある。
乾さんは確かに危うい所がある。
彼女の本質はやはり不良なのだ。

楽な方へ転がりたい、好きなことをしていたい。
そして異様なまでの加虐趣味。
少し人よりも強い好きなものを手に入れたがる当然の欲求願望。
それが俺と関わり始めて大分オブラートに包まれた。
しかし治っているわけじゃない。
あくまでも程度が弱くなっただけだ。
もし、もし俺と彼女がもっと早く。
それこそ愛さんより早く出会っていて、関わり続けていれば乾さんはまた別の進み方をしていたのかもしれない。
本当の意味で彼女はその歪さを克服する道もあっただろう。
俺が彼女に骨を折られることなく、愛さんに負ける勝負をしかけ、
今のように中途半端な不良となっている現状とは違う未来になっていたかもしれない。
しかし今は変えられない。
彼女の歪さは依然として残り、されど俺がそれを抑えている事になっている。
俺は愛さんへ渡す指輪、そして乾さんに渡すピアスを手に取る。
どちらもくすみ無い輝きがある。

高校生が買うにはとてつもない値段の高さだった。
だが、さて。これを私た時、彼女たちはどう思うだろうか？
「・・・・・・・喜んでくれれば嬉しいけど」
俺は喜んで欲しい。贈り物とはそういうものだろう。
しかし、選んだものは俺の主観にまみれたセンスによるものだ。
それが二人の趣味に合うとは限らない。
若干の不安がある。
だが片瀬さんは言った。
きっとどちらも喜んで貰えると。
無論不安は消えない。
しかし、それでも片瀬さんのその言葉が俺の心を遥かに軽くした。
今日の夜。
これを二人に渡そう。

長谷の体に大事なく良かった。
アイツの病室からでて思ったことはそれだった。
なんて事はない。
私がアイツにあのハードなバイトを推薦したのだ、ならば最後までアイツが働き終わるまで様子を把握しておくことは当然だ。
そのくらいの責任無くして仕事を回すことなどできない。
ただ、アイツの働き振りは常軌を逸していた。
まさかあそこまで休まず働き続けるとは思いもしなかったのだ。
店長や正規スタッフもその働き振りを見て、休めと警告していたことは知っている。
あそこの店はハードだがスタッフに過労はさせない。
だから安心して長谷を預けたのだが。
「ったく、アイツ。どれだけ梓と辻堂に惚れてるのやら」
見た感じ長谷が抱く想いの強さでは辻堂が大きく上回っているが、梓に対する気持ちも張り合える程度に強いようだ。
でなければあんな馬鹿な働き方をしてプレゼント代を稼ごうとは思わないだろう。
倒れるまで働いて、見れば随分とやつれてしまっていたが。

それでも目つきは相変わらず意思の強さを感じられた。
だったら大丈夫だ。
長谷は私の想像以上に私の紹介したバイトで働いてくれた。
おかげで私の信用はより確固たるものになった。
長谷は私の紹介したハードな代わりにワリの良いバイトで目的分の資金を得た。
素晴らしいギブアンドテイクだ。
流石長谷、ちゃんと信用を守ってくれた。
だが――――
「あ～あ、嫉妬しちゃうわね」
そんな打算が達成した満足感を塗りつぶすほど、胸にどす黒い嫉妬心があった。
長谷が汗を流しながら働くその姿を見るたびに胸が痛かった。
あの二人に、長谷にあれほど強く想われている二人に強烈な嫉妬心があった。
私も長谷も互いに硬い信頼感情を抱いている。
だが、信頼感情とは別に私はどうにも恋愛感情まで抱いてしまったようで。
もし私も梓と同じポジションにいたら長谷は私のために死ぬ気でバイトしてくれただろうか。
想像しただけで頬が緩む。

だが、そんな妄想を一喝。
有り得ないわけじゃない。けど、そんなのはゴメンである。
私のために体を壊されるのは好きじゃない。
好きな相手にそんなことをされるのは好きではないのだ。
勿論羨ましくは思うけれど。
「・・・・・・ともかく、頑張りなさい長谷。応援はしてやれないけど味方ならいつだってしてあげる」
独り言だ。
自分のスタンスを自分に言い聞かせているだけだ。
好きな相手の恋路の対象が自分でないのなら応援なんてしてやれない。
でも、アイツが困っているのを放ってはおけない。
力が足りなくて、アイツが挫折しそうならいつだって手を貸してやる。
ただ。
ありえないとは思うけれど。
もし次辻堂と長谷が別れたのなら私はどうするのだろう？
自分でもわからない感情を抱きながら、私は病院を後にした。

35話：三つの『あい』でＩ　ｌｏｖｅ　愛（後編）

「はぁ。もう本当に、この半年で俺は何回入退院を繰り返しているのやら」

夜八時、一人ぼやきながら帰路を辿る。

結局俺は昼の間だけ点滴や精密検査を受け、問題なしとされ帰宅許可がでた。

先生ももう俺を見るのは三度目だ、既に顔見知りのように気さくに話しかけてくれた。

それが良い事なのか悪いことなのかはわからないけれど。

閑話休題だ。

ともかく、俺は今日中にやらなければならない事がある。

だがさてどうしたものだろう。

やることはあるのだけれど、それが必ずしもやりたいことであるとは限らない。

宿題や課題、家事、仕事等等。やるにはある程度のモチベーションや動機、及び勇気が必要な事もある。

恐る恐る携帯を取り出して時間を見る。

やはり八時だ。二十四時的に考えれば二十時というわけだ。

「よ、よし。明日にしよう」
そうだ。
流石にこんな夜間に愛さんや乾さんを呼び出す。もしくは会いにいこうとするなんて相手に迷惑に違いない。
今日は色々あって仕方ないんだ。
うん、日が悪い。そして間も悪い。ただそれだけだったんだ。
よし、明日にしよう。びびってる訳じゃない。
びびってる訳じゃ無いんだ。

「お帰りヒロ。辻堂さんと梓ちゃん来てるわよ」
現実は常に逆境を押し付けてくる。
などとポエム臭い事を考えた。
そんな事を考えている状況ではないというのに。
「ただいま姉ちゃん。心配かけてごめんね」

「・・・・・心配かけてる事を自覚してるのはいいんだけど、反省はしてないんでしょうね」
姉ちゃんは少し俺を責めるような、珍しく皮肉げな言い回しをする。
勿論本人に悪気はないと思う。
俺は図星を突かれている。
その為否定も肯定もできない。
ただただ沈黙を守るのみ。
姉ちゃんはなにも言わずうつむく俺を少し困ったように見る。
「あのね、ヒロ。お姉ちゃんは別に責めてるわけじゃないの。
むしろ褒めてあげたいとすら思う」
一体どういう事なのか。
俺は黙って続きの言葉を待つ。
「彼女のためにあれだけのハードな仕事をこなせるのは凄いことよ。
姉として鼻が高いわ――――自分の体を蔑ろにしてなければね」
「そ、それは」
「ヒロ自身はそういうつもりは無いと言うつもりなんでしょ?
でも事実としてヒロは過労で倒れた。違う?」

違わない。
一理どころではない。姉に百理ある。
最早俺が何を言ったところで言い訳にしかならないのだ。
姉ちゃんは再び黙り、うつむく俺を見つめる。
その目を見ることは出来ない。
申し訳なさで姉に合わせる顔がないとはこの事だ。
「ごめん」
顔は合わせれないけれど、せめて詫びようと謝罪の言葉を言う。
口だけの謝罪のつもりはない。
気持ちを込めた。
「・・・・・・ヒロ」
それを姉ちゃんは感じ取ってくれたらしい。
僅かに抑揚のある声で俺の名を呼んだ。
「ヒロ、お姉ちゃんは貴方に心配させないでなんて言わないわ。
だって、ヒロが心配させる事をしなくともいつだって私が勝手に心配してるんだから」
まるで拗ねた子供に言い聞かせる母親のような、

反抗心すら抱かせない柔らかな物腰だ。
いつもの姉ちゃんらしくない。当然か、本心を言っているのだから。
「だからお姉ちゃんを思うのなら無茶だけはしないで。
ヒロが危険な目にあったり、体調を崩したりするのだけは本当に嫌なの」
本当に、全くもって俺には過ぎた姉ちゃんである。
俺は下げていた頭を持ち上げ、真っ直ぐ姉の目を見た。
「姉ちゃん、それは約束は出来ない」
本当に心配してくれたのだろう。
僅かに潤んでいる瞳が俺を写していた。
その姉の言葉を俺は真っ向から拒否した。
「俺にとって姉ちゃんや愛さん達は俺の命より大切なんだ」
口先だけの言葉だけで姉の言葉にうなづく事もアリだっただろう。
しかし俺はそれだけはしたくない。
「もし姉ちゃんが危険な目に合いそうなら、俺が代わりに危険な目に遭うことでそれを免れるのなら俺は喜んで飛び込む。
だから・・・・・ごめん、約束は出来ない」
誰にでも自己犠牲の精神を持っているわけではない。

それこそ見ず知らずの他人のために危険を肩代わりしようだなんて思わない。
しかし姉ちゃんや愛さん達は別だ。
俺が死ぬことで彼女達が死を免れるのなら喜んで死ねる。
この瞬間、日常の中で突然その選択が現れたとしても、
どれほど未練があっても彼女達の不幸を肩代わり出来るのなら喜んで身を差し出せる。
「この姉不幸もの」
潤んだままの瞳で姉ちゃんは俺を睨んで言った。
「言い返す言葉もないよ」
姉ちゃんは少し拗ねた顔をしながらも、俺に寄り俺を抱きしめてきた。
それに抵抗はせず、姉に身を任せる。
なんだろう。
久々に姉ちゃんのやわらかさを感じた気がする。
その優しい匂いと柔らかさに俺は子供のように安心感を感じた。
「心配かけてごめん、姉ちゃん」
「心配はいつもしてるって言ったばかりでしょ」
「そうだったね・・・・・ありがとう」

姉ちゃんは俺の首筋に顔を埋める。
姉ちゃんの呼吸を感じる。
「本当にヒロは・・・・・・お姉ちゃんがいないとダメなんだから」
俺は一生姉ちゃん離れできないだろうな。

「随分と仲のいい姉弟なんだな」
「冷やかさないでよ愛さん」
「悪い、皮肉とかで言ったわけじゃないんだ。むしろ羨ましいなと思ってさ」
俺はあの後、すぐに自室には戻らずリビングで姉ちゃんの晩御飯を用意した。
どうにも姉ちゃんは俺が心配で仕方なかったらしく、なにも食べずにずっと座って待っていたらしい。

そのせいで昼食すら採ってなかった。
二階で待たせた二人にはもしわけないけれど、俺は二人が許してくれる事を信じた。
そして姉ちゃんと超大盛りのナポリタンを食べたあと、洗い物は水につけたまま二階に急いで上がった。
当然目場所は俺の部屋。
まだ客人の姿は見ていないけれど、誰がいるのかは姉ちゃんが事前に教えてくれていた。
「でも、長谷センパイとお姉さんの仲の良さは少し普通の姉弟とは違うような」
「仲良し姉弟ですから」
「いや、答えになってねーっすから」
部屋に入れば乾さんと愛さんは俺を差し置いて勉強会を始めていた。
二人共不良なのに勉強会って、などと思わなくもない。
というか俺と姉ちゃんの会話を聞き耳立てていたあたり多分勉強会を始めたのはついさっきだろう。
「所で大、やっぱり倒れたんだな。言い訳はあるか？」
「ありません。過労で倒れたと診断受けました。調子こきすぎました」
「お～、恐妻家みたいっすね」

部屋に入るなり俺は速攻二人に土下座した。
何だか最近土下座することに抵抗感が無くなった気がする。
代わりにいかにして土下座スタイルをよりスタイリッシュに決めるかなどを気にし始めた。
こう、体を地に落とす瞬間に膝から着地するのだが。
その際のしゃがみ方の脱力加減をうんたらかんたら。
「理由を言え」
「え？」
「理由を言えって言ってんだ。何であんな無茶なバイトを二ヶ月も続けた？」
愛さんがシャーペンを置き、腕を組んで俺を問い詰める。
愛さんが基本的に俺の行動を探ることはない。
だからこそ今回はそれだけ愛さんが怒っているという事だろう。
「学力面で成績が下がってないのは流石だと思うけど、体を壊しちゃ本末転倒だろうが。お前鏡みてるか？　明らかにバイトし始める前より痩せたぞ」
本当にそうだろうか。
鏡は毎日身だしなみで見ているが痩せたかどうかは気にしたことはなかった。
一度言われれば気になるもので、俺は自室の手鏡をとって顔を映す。

・・・・・あまり判らないが、確かに頬の肉とかが少し減った気がする。
何より隈がやばい。
明らかに俺の顔に生気が満ちていない。
「長谷センパイ、正直自分も気になってるんですよね。
本当に何でバイトしてたんっすか？」
乾さんは最初一ヶ月のバイトではなく、二ヶ月目のバイトの事を言っているのだろう。
二ヶ月目のバイトの動機は片瀬さんと姉ちゃんしかしらない。
そして片瀬さんにそれを教えたのは今日だった。
だから乾さんでも調べてもわからなかったようだ。
どうする。ここで今渡すか？
座ってうつむき、考える。
まだ渡すシチュエーション、場所等を一切考えていなかった。
ただ、ある意味これほど渡しやすい状況もないだろう。
「わかった、説明するよ」
俺は自分の鞄を手元に持ってくる。
だがまだ中身は出さない。

「まず最初の一ヶ月のバイトの理由を話すよ」
何故一ヶ月目と二ヶ月目を区切る必要があるのか。
事情を知っている乾さんはともかく、愛さんは疑問げな顔をしている。
「俺と愛さんが喧嘩して、最初のあたりは一切口もきけなかったよね」
「あれは、悪かったと思ってる」
「いや、責める気は毛頭ないんだ。俺も悪かったし、前に言ったように全面的に愛さんの方が正しいんだから」
どうにも話の入り方が悪かったか。
「それで、どうにか愛さんと話をする為にと考えた結果がバイトだったんだ」
「どうしてアタシと話するのにバイトする必要があるんだ」
これも言い方が悪かった。
愛さんからしたらちんぷんかんぷんだろうし、乾さんも俺の下手くそな語りに苦笑している。
「バイトは手段であって目的じゃないんだ。
愛さんと話すためにはきっかけから作らないといけない。だからきっかけを作るものを買うためにバイトしたって事」
そう言って俺は鞄の中にある二つの箱のうちの一つを取り出す。

ソレはおしゃれな柄の描かれた上品な小箱。
ひと目で安物が入っているわけではないとわかる。
「別にきっかけを作るためだけが目的じゃない。
今までろくに愛さんに贈り物を渡せてなかった俺が単純にそれを叶えるためってのもあるんだ」
愛さんは俺が何故バイトしたのか、その箱を見て理解したらしい。
驚きの表情のまま固まっている。
心なしか緊張の汗をかいているようだ。俺もだが。
「愛さん。これが今の俺が愛さんに贈れる精一杯のプレゼントです。
受け取って欲しい」
右の手のひらを上にし、そこに箱を乗せる。
精一杯の強がりの笑みを浮かべ、男らしく堂々と俺は愛さんにその小箱を差し出した。
「・・・・・・あ、アタシ。そんな、いきなりそんな風に渡されても困る」
珍しい。愛さんが凄まじい程にテンパっている。
俺も正直いっぱいいっぱいな為、ここで受け取るの断られたら立ち直れなくなりそうなんだけど。

「大体、アタシにこんな高そうなもの貰う理由なんか――――」
「俺は愛さんの事が大好きなんだ。これ以上の理由なんかいらないよ」
愛さんに理由がなくとも俺には理由がある。
嘘も脚色も一切ない。生の感情を伝える。
真摯さを出すには必死さが必要な事もあるのだ。
「愛さん。これが俺の気持ちの全てじゃない、けれどこれはその一端なんだ。
俺の事を想うのなら受け取ってください」
愛さんの戸惑う目を俺は冷静に見る。
勿論内心穏やかではない。
緊張だってしまくっている。
ただ、それでも驚く程頭の中は澄んでいた。
「――――ッツ！　ずるいぞその言い方は！」
ずるくて結構。
俺にとって今一番キツイのはこれを受け取ってもらえない事だ。
それを回避するためなら口八丁並べまくってやる。
しかし俺はもう言いたいことはいった。
あとは愛さんの気持ち次第。

黙って小箱を愛さんに差し出す。
愛さんはその箱に手を伸ばす。
けれど触れるか触れないかの距離になったとたん手を引っ込める。
それを数回繰り返す。
「・・・・・・忘れてたよ、愛さん」
「え？」
じれったい。余りにもじれったすぎる。
牛歩もたまにはいいと思うけど、流石に今回はそんなのはパスだ。
俺は愛さんの少し伸ばしている手を無理やり掴んだ。
男に手を引っ張られたら無条件で殴り倒しそうな愛さんだが、俺は例外だったらしい。
そのままその手を俺の右手の小箱にかぶせる。
「男には強引さも必要だった。真摯さだけじゃ熱意は伝わらないよね」
その手を握り、無理やり小箱を掴ませる。
「ちょ、ちょっと待て」
「待たない。この小箱から俺は手を離すよ。
そこで愛さんがこれをいらないというのなら手の力を入れないままでいい」

そうすれば俺が小箱を手放した瞬間小箱は床に落下する。
そうなれば俺の自尊心など木っ端微塵。
立ち直れるかも怪しい。
しかしいつまでもこんな押して引いてを繰り返していられない。
「それじゃ、愛さん。俺は手を離すよ」
「あ、待て！」
待たない。
俺はゆっくりと小箱を乗せた右手を小箱から離す。
同時に愛さんの手を握る左手も開放した。
僅かに緊張が走る。
けれど、俺が手を離した所で小箱が落ちる音はしなかった。
愛さんがその手で小箱を握り締めたからだ。
そのまま愛さんは慌てて空いている手でも箱を掴み、両手でソレを胸まで持っていった。
「受け取ってくれてありがとう」
「バカ、礼をいうのはアタシの方だろう」
俺が半ば押し付けたものだから愛さんが礼を言う必要はないのだけれど。

「中、見ても良いか？」
「どうぞ。ソレは愛さんの為に買ったんだ、好みに合ってれば良いのだけれど」
愛さんは緊張した面持ちで慎重に小箱の蓋を開ける。
その中身を見た瞬間、愛さんは頬を緩ませた。
「綺麗」
その言葉を聞いた瞬間、一ヶ月の苦労が報われた気がした。
いや、気がしたなどという曖昧なものではない。確実に報われた。
中に丁重に設置されているシルバーリングを丁寧な手つきで取る。
その手で彼女は自分の薬指にはめた。
「サイズも丁度だ・・・・・・・」
「うん、乾さんに教えてもらったんだ。愛さんの指のサイズ」
「そっか、ありがとな梓」
感極まった顔で愛さんは乾さんを見た。
「・・・・・・別に、いいっすよ」
どこかすねたような態度の乾さん。
やはり目の前で愛さんへのプレゼントを渡したためだろう。
愛さんは喜びの感情で乾さんのその態度に気づかず、再びリングに目を戻す。

「猫が模様が掘られてるんだな」
その模様を嬉しそうに見つめる。
俺も乾さんも愛さんに話しかけない。
俺の想像以上に喜んでくれた。
それだけで俺はお腹いっぱいだ。
「大、これ高かっただろ」
「そうだね、安くはなかったかな」
嘘は言わない、しかし細かい値段などプレゼントを渡した女性に言うべきものでもない。
ここは日本語の便利さを利用させてもらった。
因みに値段は死ぬ気で働いたバイト一ヶ月分、二十五万也。
「ありがとう。ずっと、死ぬまで大事にするよ」
限りない本心からの言葉のようだ。
本当に、慈愛に満ちた目で俺とリングを見ている。
俺はそれに照れてしまった。
「婚約指輪はまだ渡せないけれど、当面はそれで許して欲しい。
これが俺の精一杯の気持ちです」

いつか、俺がもっと稼げるようになった時にもっと綺麗で本格的な指輪を婚約の証として贈ろう。

「嬉しい。本当に嬉しいよ」

瞳を潤ませながら俺にほほ笑みかけてくれる。

俺は頑張ってよかった。

そう思った。

「自分、今日はちょっと失礼します」

俺と愛さんが感極まっている時、部屋の片隅で乾さんの声が響いた。

ポジティブな俺たちとは対照的にネガティブな声質な乾さんの言葉。

俺は慌てて引き止める。

「ストップ。乾さん、帰っちゃう前にちょっとこっち来て」

「・・・・・・なんすか?」

大分拗ねているようで、目つきも悪い。

やはり用意しておいてよかった。

隣に座る乾さんから視線を外して再び鞄をあさった。

「乾さんにもプレゼントがあるんだ。これなんだけど」

愛さんの贈ったリングを買った店とは別の所で買ったピアス。

同じく何やらブランドのロゴなどが入った重厚な箱を乾さんに差し出した。
「え、え？」
慌てふためいている。
どうやら自分にまでプレゼントを贈られるとは思っていなかったらしい。
「俺が一ヶ月バイトした理由は愛さんへあのリングをプレゼントする為だ。
そして二ヶ月目の理由は・・・・・分かってくれたかな」
乾さんも俺の説明を聞いて理解したらしい。
目を見開いて俺の顔とプレゼントの間を何度も視線を移している。
だが俺はこのプレゼントを渡す前に伝えることがある。
「ごめん愛さん。彼女の目の前で別の女性にプレゼントを渡すなんて非常識だと自覚してる。
許して欲しい」
顔を愛さんに向け、頭を下げる。
呆れられただろうか、不実だと責められるだろうか。
俺はせめて誠意を見せようと、このピアスは愛さんの前で渡そうと決めていた。
「良いよ。梓なら、許す」
愛さんの、その柔らかな言葉に俺と乾さんは言葉を失った。

まさかここまであっさりと許してくれるとは思わなかった。
乾さんもそれに驚いているらしく、余計にテンパリ始めている。
「ありがとう。大好きだ愛さん」
「ああ、アタシもだ」
互いに微笑み合う。
本当に俺には過ぎた女性だと思う。
一生をかけて俺は愛さんに見合う男になるために頑張ろう。
「そういう訳です。乾さん、これを受け取ってくれるかな？」
「えっと、その」
未だ状況が把握できていないのだろう。
俺が愛さんにプレゼントを渡して、孤独感で拗ねた乾さんは帰ろうとした。
それを引き止めて俺が乾さんにもプレゼント。
しかも愛さんの許しも出た。
この流れに追いつけてないらしい。
「中身は、なんでしょう？」
「それは乾さんの手で開けて確認して欲しい」
愛さんの時と同じく箱を手の上に乗せ、差し出す。

「・・・・・本当に、自分なんかにいいんすか？」
「良いに決まってる。じゃなきゃ倒れるまでバイトなんかできないよ」
「ぐ、格好いいっす」
乾さんは恐る恐るといった感じで小箱を受け取った。
でもすぐには開けない。
受け取る勇気はあっても中身を見る勇気は持てない様子だ。
「何で、どうして辻堂センパイだけじゃなくあずにまでこんな高そうなものを用意してくれたんですか」
まだ中身を見てもいないのに乾さんはこれを高そうなものと決めつけた。
いや、確かに高い買い物だった。実質愛さんへのリングの値段と大差ない値段だったし。
「乾さんが俺にとって大切な人だからだよ」
彼女のためなら愛さん同様に死ねる。
乾さんのためならどんな労力だって惜しくないし、何だってできる。
だから俺は愛さんへ尽くす事に疑問を持たないように、乾さんのために頑張る事も疑問はなかった。
「――――ッ。嬉しいっす」

乾さんは精一杯の笑顔を見せてくれた。
実際に喜んでくれているのだろう。
顔は紅潮し、頬を緩ませている。
先ほどの拗ねていた面影は一切ない。
「喜んでくれるのはうれしいけれど、中身も見てほしいな。
一応バイト先の先輩方にも相談したんだけど、乾さんの趣味には合っているか自信ないんだ」
片瀬さんにも乾さんの好みとは少し違うと言われた。
その為本当に自信がない。
穏やかではない内心を隠しながら極めて冷静な態度で乾さんに小箱の開帳を促した。
乾さんも俺に急かされたからか、息を飲んで小箱の蓋を掴み開ける。
その中をゆっくりと彼女は確認した。
「わぁ・・・・・・」
そのリアクションは果たしてどっちの意味なのだろうか。
失望的な意味の方だったら割と傷つく。
十割傷つく。
けどその不安は杞憂だった様子。

乾さんは慎重に小箱の中のピアス二つを取り出し、手のひらの上に乗せた。
そして嬉しそうに見つめている。
「へぇ。おとなしめだけど綺麗だな」
愛さんがそのピアスを見ながら感想を言った。
確かに、改めて見ると本当におとなしめだ。
悪く言えば地味といった所だろうか。
「いえ、こういうのは上品で大人っぽいって言うんすよ」
ものは言いようだ。
だが一理ある。
過度な装飾もなく、プラチナとダイヤモンドでシックなデザインだ。
一見大人しいデザインなのだが、明らかに見れば安物の雰囲気はない。
「これ、つけてみてもいいですか？」
「うん。実用して欲しいから買ったんだし、時々でいいから付けてくれると嬉しいな」
「ふふ、だったら毎日つけますよ」
乾さんは現在付けているピアスを外し、アクセサリーを入れているボックスにしまう。
そのまま俺の贈ったピアスを手にとって慣れた手つきでピアスを着けた。

流石にピアスを着けた自分の姿を普通には見ることはできないので、俺は手鏡を渡す。

多分乾さんは自身の手鏡を持っていたのだろうからいらぬ気遣いだったのかもしれないけれど。

「ど、どうっすか。似合ってます？」

「似合ってるかって、そういうのはお前自身が一番わかってるんじゃないのか？」

「自分とか他人より長谷センパイの評価が気になってるんですよ」

そう言って照れ笑いしながら俺を見つめてくる。

正直照れる。

だが一度咳払いして乾さんの姿を改めて見てみる。

さて、あながち俺のセンスも捨てたものではなかったようだ。

少し派手目の乾さんだが、少し地味ながら上品なピアスが意外としっくりきている。

多分ピアス自身が持つ高級感とでも言うのだろうか、地味なはずなのに不思議な存在感が乾さんの魅力を引き立てている。

もっとも、これはあくまでも贈った側の贔屓目目線かもしれない。

知識をひけらかして凡百の言葉を述べるより、はっきりと一つの言葉を伝えたほうが良いのだろう。

「似合ってる。綺麗だよ、乾さん」
「・・・・・・ッッ!!」
ボンっと顔が赤くなった。
すごい、たまに愛さんも同じようなリアクションするけど乾さんがここまで照れたのは初めて見た。
そういえば、俺がこんなふうにストレートに好意を示したのは初めてかもしれない。
だからだろうか。
「そ、そっすか。嬉しいっす・・・・・・」
しきりに耳たぶ、というかピアスを指で揉みながら照れ隠しをしている。
普段は少し巻いている髪をいじっている癖が少し変わったようだ。
「所でさ、もう一つのピアス穴開けていなくて使えないピアスはどうするんだ。もう一つ穴を開けるのか？」
愛さんが俺と同じ疑問を口にした。
因みに愛さんはというと俺の贈った指輪をしきりに気にしている。
話しているとき以外はニマーっとした顔で指輪を見ていたり。
「え、開けませんよ」
「じゃあその未使用の方はどうするんだ」

開けないのか。
「大切にしまっておきます」
「お前それ御蔵入りってことじゃ・・・・・・」
「いいえ、観賞用っす。
実用するのは今付けているもの。そして未使用のままいつまでも綺麗なままで飾っておくのがこれ」
飾る。ピアスをか。
っていうか観賞用って、流石にそこまでされると贈った俺の方が照れるのだけれど。
「所で長谷センパイ、自分結構ピアス集めしてるんで何となくわかるんですけどこれかなり高かったんじゃ」
完全に愛さんの時と同じ流れだ。
またか、また苦しい言い逃れをする羽目になるのか。
「内緒。プレゼントしたものに値段を聞かないのはマナーだよ」
「あはは、そうでした」
総額十八万円くらいした。買ったとき悶絶した。
購入を考えて初めて知ったのだが、ピアスは実の所宝石を使った装飾品の割に特別高いジャンルではない。

それこそダイヤモンドを使って五万円いかないのがザラにある。
むしろ十万円を越えるものが少ないくらいだ。
それで、値段を敢えて見ずに乾さんに似合うのを直感で探した結果これを手にとった。
どうせバイト代を残す気もそれほどなかったため迷いなくそれを購入したわけだ。
一応まだ結構バイト代は残っているため、今度何かに使おう。
「あの、乾さん。何をしてるのかな」
プレゼントを二つとも無事渡せた上に喜んでもらえてめでたしめでたし。
とは行かなかった。
何やら乾さんがピアスを耳たぶにあるピアスを指でいじりながら俺に擦り寄ってきた。
「何って、お返しっすよ」
何で返すつもりなのか。
俺は意図が判らず対応に困る。
戸惑う俺をよそに乾さんはしなだれかかってき、その手で俺の服を脱がそうとしてきた。
突然の行為に慌てふためく。

「ちょ、お返しってそういう事!?」
急いで距離を置こうとする。
だが立ち上がる瞬間、足の裏を地につけたタイミングで乾さんに足を払われ空中に一瞬浮く。
現状を整理できない俺はこのまま受身すらできず尻から着地するのだろうかと思っていると、
乾さんが宙に浮く俺を正面から抱きかかえ、ベッドに投げ飛ばした。
「ぐっは」
痛くはない。
ただベッドの反発力で一瞬苦しかっただけだ。
急いで体制を立て直そうとする。
しかしそれより早く乾さんが仰向けで倒れている俺に覆いかぶさってきた。
「辻堂センパイ、今日こそいいっすよね」
何がいいのか。
俺は押し倒されて、見事に身動き取れない状態にされてから救いを求めるように愛さんを見る。
愛さんはというと、なにやら指のリングを見つめながら深く考えている様子。

「た、助け――――んむっ!?」
「ん、ちゅ・・・・・ぷぁ。ふふ、長谷センパイは今は喋っちゃだめっすよ」
愛さんに助けを求めた瞬間、俺の口を塞ぐためにキスされた。
「辻堂センパイ、早く決めてください。もっとも、イエスでもノーでももう止まる気はないですけど」
やばい。
このままモタモタしていると何やら人生が大きく変わりそうな気がする。
予感ではなく最早確信に近い。
だが助けを求めようにもしゃべると乾さんに黙らされる。
つまりこの状況は実質愛さんの決断次第。
俺は黙って愛さんの言葉を待った。
愛さんは考える。
そして十秒ほど思考した後、決意を秘めた目で言った。
「わかった。そうだな、梓の好きにしろ」
「・・・・・・やっと、この時を待ってたっすー!」
え、え。
何それ。ちょっと待ってよ。

「ふふ、それじゃあ長谷センパイ。今日こそ自分の初めてを貰ってください。
ピアスのお返しとかそういうんじゃないですけど、あずを好きにしちゃってどうぞ」
どうぞと言われても対応に困る。
そもそも俺はそんな事をする気など無かったわけで、いきなり色っぽい雰囲気にはいられても
「大、覚悟を決めろ。梓だって勇気出した末の行動だ、男なら汲み取ってやってくれ」
愛さんがベッドで押し倒されている俺の隣に座る。
そのまま、腕を塞がれた俺の服に手をかけゆっくりとずらしていく。
見れば愛さんも既に上着を脱いでいて、ほとんど下着姿だ。
「でも愛さん、本当にいいの？」
それだけを確認する。
俺は不誠実な人間かもしれない。
だが女性の体を傷つけることを美とはしない。
つまり、乾さんを抱くというのなら俺は乾さんが俺を拒否する日まで、彼女も愛さんと同様の存在になるわけだ。
ほとんどソレは二股に近い。
いわゆるクズと呼ばれる人種だろう。

だから俺は愛さんに確認する。
本当にいいのか、後悔しないのか。
彼女はその真意を理解しているのだろう。
指輪を大事そうに握り締め、凛々しい表情で頷いた。
「・・・・・・わかった。愛さん」
それが愛さんの決断ならば俺は引き止めない。
「乾さん、もう抵抗しないから自由にさせて貰えるかな?」
「はい、もちろんっす。自分が長谷センパイを襲うより、長谷センパイに抱かれる方が理想なんで」
俺の上から降りた乾さんはそのまま自然な動作で服を脱ぎ始める。
スカートを下ろし、黒いストッキングと黒い下着が見える。
「随分派手なもの着けてんだな」
愛さんがぎょっとした顔で言う。
けれど乾さんは何を今更と言わんばかりの表情だ。
「自分、長谷センパイと会う日はいつでも恥ずかしくないように勝負下着つけてましたよ?」
マジかよ。

乾さんは流れる手つきでシャツも脱ぎ、丁寧に畳む。
上も同じく黒で扇情的な所々透けているデザインだ。
いわゆる男性に性行為をイメージさせるセックスアピール力の高い下着というところか。
そしてその下着の効果は絶大だ。
正直恥ずかしいのだが興奮する。
「ほら、長谷センパイ。あずの裸なんてもうすぐ見れますから、長谷センパイも準備してください」
「え、と」
これから俺は乾さんを抱く。
それは愛さんも同意の上だ。
抱いたあとの事も勿論考えている。
体だけの関係ではなく、本当に俺達三人はそれぞれ誰かが離れる事を考えるまで切ってもきれない関係になる。
「大、愛してる。ずっと一緒だ」
愛さんは下着すら全て脱ぎ、一糸まとわぬ姿で俺を抱きしめる。
ダイレクトに伝わる彼女の肌の感触と暖かさ。

「でもそのずっと一緒の場所に梓も入る。
多分アタシは事あるごとに梓に嫉妬することもあるだろうけど、それでも梓も一緒にいても構わない」
二人きりの人生ではなく、三人で歩む人生を愛さんは選んだ。
二人がどれほど仲がいいのか俺は正直なところ把握しきれていない。
しかし愛さんが気に入らない、もしくは悪い人間を自分の隣に置くとは思えない。
「ただ、どんな事があってもアタシが大の一番だ。それだけを忘れなきゃ、梓を抱いても構わない」
一番とか二番とか、人に格付けするのは俺の望むところではない。
その言葉に頷きかねる。
愛さんも俺の考えを理解してくれている。
すぐに続きの言葉を紡ぐ。
「言い方がわるかったな。じゃあ言葉を変えるよ。
大、ずっとアタシを愛してくれ。アタシはそれだけでいい」
「うん。どんな事があっても俺は愛さんの事が大好きだ、これからもずっとそうだ」
「・・・・・・なら良い。ほら、梓」
愛さんは俺を離し、一度頬にキスをしてから乾さんを呼んだ。

俺は彼女の姿を確認する。
「うぅ、やっぱ最初って痛いんですよね。緊張してきたっすぅ・・・・・・・」
下着姿の乾さんは僅かに震えながら自分の体を抱きしめていた。
やはり初体験は怖いらしい。
性行為ではなく、その行為で味わうであろう痛みへの恐怖だろうが。
「大丈夫だって。アタシも手伝ってやるからさ。
ほら、来いよ。じゃねーとアタシから始めるぞ」
「う、それはダメ！　今日の一番目は自分からじゃないとその・・・・・・嫌っす」
必死に愛さんを食い止めつつ乾さんは俺に抱きついてきた。
彼女の柔らかさと甘い匂いが俺の意識を興奮の感情で灼く。
既に俺のモノは準備できていた。
それほど現状に性的興奮を覚えていた。
「長谷センパイ。自分の事、好きですか？」
甘えるように、けれど縋るように聞いてきた。
俺はこの言葉に今までどのような返答をしてきただろうか。
明確に好きと答えた記憶はない。
されど好意的な感情を示していた記憶はある。

でも今日は違う。
俺も、愛さんも覚悟を決めた。
本来あるはずだった人生を変える、その決断をした。
「うん。梓ちゃん、君が好きだ」
初めて下の名前で呼んだ。
梓ちゃんも呼称が変わったことに気づいたのだろう。
一気に表情を変える。
その表情は一言では表せないものだ。
ただ間違いなく、喜びというベクトルにある種類の表情であることだけはわかった。
「センパイ。センパイになら思い切り痛くされてもいいです。
長谷センパイの好きにあずを抱いてください」

●寸劇

「あの、辻堂さん。その指輪は？」
「ん、これか？　大に貰ったんだ」
後日、アタシが教室で指輪を見つめていると委員長が話しかけてきた。
どうにもこの指輪を貰ってからというもの、時間があればこれを見つめてニヤける癖ができた。
母さんに気持ち悪いからやめなさいと注意されたものの、無意識の事なので改善が難しい事この上ない。
「これはまた、学生が付けるには高そうですね
・・・・・・見た所戦闘力二十五万くらいでしょうか」
「なんで値段まで把握しかけてんだよ」
どういう鑑定眼を持っているのだこの委員長は。

そしてその目は見事に本物で、これはどうやら大が一ヶ月死に物狂いで働いた給料の値段とイコールしている。
「なぁ委員長。今度さ、指輪の磨き方とか教えてくれないか？
これ、一生大事にしたいからさ」
「ふふ、勿論ですとも。
いいですねぇ、ラブラブですねぇ」
いつもの委員長の言葉だ。
アタシと大が仲良くしているといつも嬉しそうにしてくれる。
その掛け値ない良い人ぶりにアタシは何度甘えたことか。
「ラブラブだもの」

「ねーねーあずにゃん。そのピアスどしたの？」
「これ？　好きな人から貰ったんだ」

片耳しかつけていないピアス。
そのピアスを指で触る癖がどうやら自分にできたらしい。
今日授業中に注意された上に、ピアスを没収されそうになったので謝り倒してそれだけは勘弁してもらった。
この後反省文も書く羽目になっているが仕方ない。
むしろそのくらいで済んで良かったと思うべきか。
「へ～、彼氏？」
今まで、彼氏はいるかと聞かれればノーと答えていた。
毎回自分はそのあとに好きな人はいると補足していた。
でも昨日の夜からは違う。
もう自分の片思いじゃない。
勿論普通の付き合いでもない。
だってそうだろう。
好きな男性には既に将来の約束をした女性がいる。
だけど、自分の席もそこにできた。
自分がセンパイと結婚できるかはわからない。
いや、そもそも日本の法律的に考えれば不可能だろう。

問題は山積みだ。
しかもその問題は解決できないものかもしれない。
それでも。けれども――――
「うん。彼氏だよ♪」
もう一人ぼっちでも、片思いでもない。
長谷センパイの隣にいられる事ができる。
それだけで自分は幸せだった。

３６話：ワンデイ！

「ゆうべはおたのしみでしたね」
「・・・・・・えぇと」
「ゆうべはおたのしみでしたね」
「あ、あの」
「おいやめろ梓、長谷先生は今完全に思考停止してるから何言っても無駄だ」
長谷センパイと精神的にも肉体的にも結ばれてから一日が経過。
行為のあった翌日に自分と辻堂センパイは再び長谷家にお邪魔した。
だが長谷センパイとの約束をしていなかったのが失敗だった。
どうにも長谷センパイは外出中だったらしく、帰るのも遅いらしい。
家についてからお姉さんに長谷センパイがいない事を知らされ、しぶしぶ帰ろうかとなった所で呼び止められた。
というより家に引きずり込まれた。
自分だけでなく辻堂センパイもである。
「何が無駄じゃ小娘ぇ！　私は冷静そのものじゃろうがいッッ！」

「そうですねー、長谷先生マジ冷静っすねー」
適当に宥める。
ずっとこんな調子である。
包み隠さず、正直に言えばこうである。
長谷センパイとセックスした事がバレてた。
そりゃそうだ。
その、昨日は初めてだったためちょっと声が出過ぎた。
長谷センパイもあずを痛がらせないように頑張ってくれたので凄い長谷センパイのが入る前の行為が凄かった。
あと・・・・・その、凄く気持ちよかった。
だから味をしめた訳じゃないけど今日もしたいなぁと思ってきたのだけれど。
「あ、自分ちょっと用事思い出したんでそろそろ帰りますね」
「待てこら」
立ち上がった瞬間辻堂センパイに手を掴まれた。
逃げれないか。
「・・・・・・」
ジトっとした目でこちらを見つめてくるお姉さん。

半目で品定めするような感じでちょっと嫌だ。
実際本当に品定めしてるっぽい。
「乾さん、貴女はこっち側だと思ってたんだけどね」
こっち側とは、つまり長谷センパイに気があるが辻堂センパイの存在で報われない立場という事か。
「肉体だけの遊びの関係・・・・・・って訳じゃないわね、ヒロに限って」
「当たり前だろ、大を舐めんな」
「舐める？　あ～、そう言えば辻堂さんは昨日大に念入りに舐められてたんですってね。下まで聞こえてたわよ」
「はうあ!?」
辻堂センパイが本気で慌てている。
顔を一瞬で真っ赤にして両手で頭を抱えた。
長谷センパイ以外に滅多に見せないその表情は同性の自分から見てもちょっと可愛い。
「で、どうなの乾さん。一応貴女の口から聞かせて欲しいんだけど」
はぐらかす事は無理そうだ。
そもそも隠すつもりもないのだけれど、それでも立場的にお姉さんにだけは言いにく

かった。
ならばこれはチャンスなのだろう。
「結婚とかはまだわからないけれど、あずが一緒にいたいのならいつまでも一緒にいようと
そう長谷センパイは言ってくれました」
日本の法律で重婚は罪だ。
故にここにいる限り自分と長谷センパイは結婚できない。
まさか辻堂センパイの座を奪おうとも思わない。
そもそも、自分と長谷センパイの馴れ初めから最悪なのだ。
夏の間は拉致したり海辺でバカ女ともども半殺しにしようとしたりした記憶がある。
冬に至っては自分が恋奈様裏切っていた事がバレた上に長谷センパイの肋骨を数本へし折った。
その後も散々迷惑かけて自分のとばっちりで不良のリンチを受けたりもした。
結婚できないとしたらこれも償いの一つなのだと思う。
ただ、自分がごねれば長谷センパイは重婚できる国に移住するプランを本気で立ててくれそうな気がするけど。
「・・・・・・うぅむ。浮気というには辻堂さんの許可あるから成り立たない。

肉体だけの関係かと思いきやヒロも乾さんも普通にイチャイチャしやがってる」
何やら自分と長谷センパイの関係を整理している様子。
このお姉さんのいいところは感情的にならないところだと思う。
基本他人の意見を尊重するし、理が通っていればそれを否定することはしない。
お姉さん自身が納得できるかどうかは別の話だけれど、感情的に否定するスタンスでないだけありがたい。
「あ～、乾さん。教職員からの質問だけどね、ちゃんと避妊した？」
「してなかったっす」
「あのジャリぶち殺す」
すいません長谷センパイ。
嘘言っておけばよかったと後悔した。
「じ、次回からはちゃんと避妊してね。
貴女はまだ高校二年生なんだから」
「え、あ。はい」
顔を真っ赤にして忠告してきた。
何というか、ソッチの事に対してウブな人の反応だ。
もしかしてお姉さんって処女？

「避妊とか以前にエッチな行為を止めはしないのかよ」
「止めたら言うことを聞いてくれるのかしら？」
「……一週間くらいなら」
「……」
辻堂センパイダメダメである。
お姉さんも若干呆れたように閉口している。
怒らないだけ優しい方だ。
「まぁ、なんにせよ本人同士や彼女である辻堂さんが納得しているのなら何も言わないわ。
好きになさい」
無理やり笑うお姉さん。
実際無理しているのは丸わかりだ、だってこめかみピクピクしているし。
「ただ、絶対に学園にバレないようにしてよね。
これでも私は先生なんだから」
「先生なのに生徒が異性行為してるのを黙認するのは良いのか？」
辻堂センパイの鋭い指摘。
けれどお姉さんはその問いに軽く笑う。

いやこういうのはほほ笑むというのだろう。
「いいのよ。だって不純ではないんでしょう？」
その言葉に辻堂センパイは驚く。
何だろう、自分には言葉通りの意味にしか受け取れないが、辻堂センパイにはそれ以上の意味があるように見える。
ともかく辻堂センパイは力強くうなづいた。
それをみて満足そうな顔をするお姉さん。
「それに私は先生である前にヒロのお姉ちゃんだしね。ヒロが幸せならそれが一番なのよ」

「私の幸せはどこにあるのよ!?」
「私が知るか。そんなことよりもう帰らせてくれぇ～
お前のその酒臭い息を嗅ぐだけで私まで二日酔いしそうなんだ」

「大体二股かけるのなら乾さんみたいな小娘じゃなくてムチムチで大人の色気溢れたお姉ちゃん選ぶでしょ普通!?
　道理が通らないってのはこういう事をいうのね！」
「ムチムチさならあの不良娘の方が上回っているとは思うし、お前そんなに大人の魅力はないぞ」
「うぃ～！　店員さーんジョッキおかわりまだー!?」
「あーむり私もう帰るわ・・・・・・おいこら手を離せ。
　イタタタマジ痛い手を離せ離して離してくださいせめて力緩めてくださいお願いしますから！」
「ファックファックファックガッデム！
　飲まずにいられるかこん畜生！」
　その夜、親友である保険医を連れて夜の酒場で大暴れする冴子の姿があったという。

「長谷センパイ、デートしましょうよぅ」
特に何か特別なわけでもない普通の日。
どうやら学園が終わって速攻稲村学園の辻堂軍団集会場に来たらしい。
相変わらず稲村学園生徒に偽装するためにウチの体操着を着ている。
ナイスブルマ。
正式に乾さんと交際することになった俺としてはここにうなづいてあげたいとは思うのだけれど
今日はちょっと日が悪い。
「悪いけどヒロシは俺達の勉強見てもらう事になってんだ、日を改めるんだな」
「黙れ、バカ女に聞いてないんだよ」
「あぁ!?」
何というか、俺は現在辻堂軍団のメンバーの勉強を見ていた。
どうやら中間テストがこのままだとやばいらしく、中間テストが原因で夏休みを補習塗れにされそうになっているらしい。
だがクミちゃんや他のメンバーは前から補習上等なところがあったのだが、どうにも愛さんを見習ったとの事。
つまり、去年の秋頃から普通に勉強面でも中の上より高い学業成績を手に入れた彼女

に憧れたとのこと。
向上精神あることは良い事だ。
俺はためらいなく手を貸す事にした。
「こらクミ、いきなり喧嘩してんじゃねぇ。さっさと机に戻れ」
「ぐ・・・・・わかりました愛さん」
因みに愛さんも相談されたらしく、面倒見のいい彼女も断れなかった。
故にこうして暫く彼らの勉強を俺たち二人は見ることになった。
それを梓ちゃんにも説明はしていたのだが、こうして時間を余しては集会場に訪れてくる。
「元々普段から勉強してないこいつ等が悪いんだし、それで長谷センパイ達が遊べないのはおかしいっす。
だーかーらー長谷センパイ、デート行きましょ?」
ブルマと薄くて白い体操着を着た梓ちゃんが俺の腕を胸にだく。
制服とかよりもダイレクトに体温や感触が伝わって一瞬息を飲んだ。
・・・・・俺、この下の地肌をダイレクトに触ったんだよな。
いやそれどころか舐めたり揉んだりした。
やばい、思い出したら変な精神状態になってきた。

彼女も俺が意識したことに気づいたらしく、何やら悪い笑みを浮かべた。
「あ～あ、長谷センパイがいいならどこにだって行くのになぁ。
どこにだって付いて行くし、何だってしていいんすけどねぇ～」
「「どこでも!?」」
「「何だってしても良い!!?」」
「テメェら集中しろ、アタシ帰るぞ」
明らかな誘いに外野が反応した。
それを愛さんは半ばキレ気味に鎮火する。
「ダメだ。引き受けたことを中途半端にはできない。
梓ちゃん、分かってくれないかな?」
若干前かがみになっているため格好は悪いが、ともかく約束を守る旨は伝える。
一度引き受けた仕事を投げ出すことは男らしくない。
何より信用に関わる。
だから誘惑を跳ね除ける。
梓ちゃんは俺のその考えを聞き、少し拗ねたように俺の腕から離れた。
「もういいっす。長谷センパイがそういうつれない事をいうなら自分にも考えがあるんで」

「考え？」
何を考えているのか分からない。
若干困惑しながら俺は梓ちゃんを観察していると、何やら七浜学園のリュックから自分の教科書とノートを広げだした。
それを空いている机に置き、開ける。
「長谷センパイ、あずも勉強します。ので、構ってください」
「そうきたか」
悪い手じゃない。
なるほど、むしろこれは上手い。
「わかった、分からない所があったら言ってね」
「長谷センセー、自分ここわかんないっす」
「早速か」
絶対わざとだろう。
梓ちゃんが指差した問いは絶対に今の彼女なら解けるレベルだ。
実際俺や愛さんと勉強しだしてからの彼女の成績も結構いいらしい。
だからこの問題が解けない筈がない。
「ほら、教えてくださいよ」

立っている俺を座ったまま上目遣いで見つめてくる。
しかもアングル的に襟のあいだから胸が見えそう。
っていうかこれもわざとに違いない。
女性には胸にも目があるという比喩があり、どうにも下心ある視線に敏感らしい。
俺は男だからわからないけれど、多分梓ちゃんほど鋭い子が俺の視線に気づかないとは思えない。
「えぇと。ここの公式は」
数学の事で質問してきたが、梓ちゃんは数学得意だったハズ。
だから絶対この問いなんて解ける筈。
ともあれそれを言って教えないなんてのも有り得ない訳で、とりあえず梓ちゃんのノートに公式を書いていく。
スラスラを書いている途中に梓ちゃんが俺のペンを握る手を掴んだ。
流石に手を掴まれては文字をかけない、意図が判らず彼女の顔を見る。
「・・・・・・誰も見てないっすね」
「何の事？」
俺の手を握ったままキョロキョロと周りを見渡す。
一体何をしたいのか分からない。

だが、次の瞬間その理由がわかった。

「えいっ」

「ツッ!?」

俺の手からペンを叩き落とし、空いた手のひらを梓ちゃん自身が自分の胸に鷲掴みにさせた。

つまり、梓ちゃんの手によって俺が彼女の胸を掴む形だ。

完全に困惑し、言葉をうしなう。

ただただ沈黙の中、心臓マッサージのテンポでもみもみと梓ちゃんが俺の手を握る。

俺の手が握られればイコール俺の手が彼女の胸を握る。

おっぱいやわっけー。

「・・・・・・長谷センパイ、なんか反応してくださいよ。

やってるこっちが恥ずかしいじゃないっすか」

そんなこと言われても。

顔は反応してなくとも体は正直なもので、少しづつ中腰になりつつある。

「やめなさい梓ちゃん。女の子がそういう事しちゃいけないよ」

極めて紳士に、それもとびきりの冷静さを装って彼女の胸から手を離す。

本当に惜しい、正直何時間でも揉みしだきたいのだけれど今はその時ではない。

実際もう辛抱たまらん。
が、いくらなんでもここで欲情してしまっては危ない。
実際彼女の狙いは俺の性欲を煽って、このまま俺とどこか行こうとすることだろう。
乗らんぞ、その手には。
この長谷大、本能ではなく理性の人なのだ。
「ぶー、長谷センパイそっけないっす。
もしかして自分魅力ない？」
「それはない、断じてない」
「う、即答。しかも凄く本心からの言葉っぽいっす」
本心からの言葉である。
所で本当に梓ちゃんをどうしたものか。
やっぱりここで勉強する気ないのは明らかだ。
困ったものだ。
そう頭を捻っていると、何やら後ろから気配が。
それもとびきり濃度が濃い。
こう、純粋クリアな水の中に墨汁ぶち込んだように後ろから目に見える黒い瘴気が漂ってくる。

梓ちゃんも気づいたようで、俺と一緒に壊れたブリキ人形のごとくギリギリと首を回す。

そこにはいた。

般若が。

「気づかれないとでも思ったのか？」

マジギレしていた、愛さんが。

どうやら俺にヘイトは向いていないらしく、殺気などは一切俺は感じない。

けれど隣の梓ちゃんにはやはり殺気が向けられているらしい。

ガタガタと半泣きで震えだした。

「一度抱かれたくらいで時と場所を選ばず盛りやがって」

「違うんです。ほら、こんなのいつも通りのスキンシップじゃないっすか・・・・・なぁんて？」

「遺言はそれだけか」

「わあああ！　撤退撤退！」

右拳を振り上げ、チョッピングライトの姿勢を取った愛さんを見てかつてない速度で逃げる梓ちゃん。

俺なんかには目で追えないレベルの速度だ。

愛さんにとっても想像以上の速度だったらしく、梓ちゃんの服に手を伸ばすもののその手は空を切った。
「ははッ、ついに魔王から逃げられたっす！
そんじゃ失礼しますね長谷センパイ、今夜楽しみにしてるんで」
最後に何やら色っぽい顔をしつつ投げキッスを俺にぶつけ、集会場から脱出した梓ちゃん。
っていうか、今夜来るのか・・・・・・
「チッ！　あのバカ梓、ここでヤキ入れ逃げたことを後悔させてやる」
愛さんは結構悔しかったらしく、心底忌々しげに舌打ち。
そしてそれ以外の俺を含めた教室にいる連中は唖然としていた。
「集中できねぇ」
「・・・・・・ごめん」
誰かの嘆きに俺は心から謝罪した。

「ピンク色の生活を送ってんのね、どうでもいいけど」
「お前が私生活だらしなくなって堕落するのは勝手だが、彼まで道連れにするのなら見過ごせないな」
昨日、ついに長谷センパイと結ばれたことを恋奈様に自慢しに行ったらこの返答である。
場所は江之死魔拠点。
元々本日は集会予定はなかったらしく、ここには恋奈様と部下が数人くらい。
因みに総災天センパイがここにいる理由だが、彼女は卒業した後も以前として江之死魔に残る元部下の様子が気になるらしくちょくちょく様子を見に来てたりする。
全く面倒見のいい人だ、どことなくその本質が長谷センパイに似ていて好印象ではあるが。
ともかく、本日はその顔出しの日に当たったようだ。
「堕落なんて、エッチぃ事で堕落するのなら辻堂センパイと付き合い始めてからなってるはずっしょ。

今更自分とそういうことしたからといって――――」

「辻堂とお前を一緒にするな。アイツは安心して長谷大を任せられるが、お前の場合妙に不安がつきまとう」

酷い言われようだ。

とはいえ確かに自分に辻堂センパイのような貫禄もなければ信用もないのは確かだ。

一度人を裏切った代償は信用に大きなダメージを与えた。

そのため自業自得ではある故に、それを指摘されても反抗心は沸かない。

「よくもまぁ辻堂がアンタとの二股を許したものね。

どういう心境の変化かしら」

「心境の変化なんてないっすよ。

元々辻堂センパイは冬に自分とやりあった時からあずの気持ちを汲み取ってくれてました」

だから冬から現在まで長谷センパイとベタベタしても直接的な妨害はしてこない。

本当に辻堂センパイには一生分の恩があるレベルだ。

一生彼女のパシリでも構わないとすら自分でも思う。

それほど自分は寛大な辻堂センパイに感謝している。

「ふはは、正直羨ましいっしょ？　ん？　ん？」

「ぶっ殺すぞ」
「死んでしまえ」
奥歯を砕けそうなレベルで噛み締めながら一般人が見たら失禁して逃げるレベルのメンチを切ってくる二人。
一般人ではない自分も僅かに恐怖を覚えた。
図に乗りすぎた。
「梓テメェ、自慢話ならヨソでやれや」
こちらの胸ぐらを掴みながら今にも殴らんとばかりの威圧を出す恋奈様。
というかやはり羨ましいのか。
でなければ普段冷静な恋奈様がここまで切れるわけないし。
「そうだな、マキあたりに今のようなテンションで言ってみたらどうだ？
ああそれがいい、今からマキを呼んできてやろう」
「やめてください死んでしまいます」
冗談じゃなくてマジで許してください。
あの人のことだけが本当に気がかりなのだ。
今の自分と長谷センパイとの関係を知られたらどういう事になるのか、まったく想像つかない。

殺されるイメージだけが付いて回る。
「ケッ、大体あのボンクラのどこが良いのか私には理解しかねるわね」
吐き捨てるように言う恋奈様。
その言葉にムっと来る。
しかしそう思ったのは自分だけではないようで。
「彼はボンクラなどではない。訂正してもらおうか」
結構マジになった総災天センパイが半ギレで恋奈様に食いかかる。
実際彼女は立場が立場なので長谷センパイをエコ贔屓している。
本人は長谷センパイの事を可愛い弟分だと言うが、自分にはそうは見えない。
総災天センパイの長谷センパイを見る目は好みの男性を見る女の目を見るものに似ているとは思うのだけれど。
閑話休題。
ともかく総災天センパイに詰め寄られた恋奈様は僅かに気圧された。
「・・・・・・本心じゃないわよ。気に障ったなら謝罪するわ」
そんな事は知っている。
恋奈様も長谷センパイの事を憎からず思っているのはわかりきっているし、なんて言ったってツンデレな人なのだ、今のも不器用な憎まれ口という所か。

だから自分は喰いかからなかった。
「いや・・・・・俺も殺気立っていたようだ、すまない」
総災天センパイも凄まじい冷静さで、恋奈様の言葉を聞くと何の後腐れもなく引く。
「ほらほらぁ、やっぱり総災天センパイも嫉妬してたんじゃないっすかぁ～」
「お前死にたいんだってな」
気まずい空気を消すためにあえてバカの振りをしたら想像以上の憎しみが帰ってきた。
こんな純粋な殺意をぶつけられたのはいつ以来か、
っていうか自分の思っていた以上にダメージがあったのか、本気できれつつある。
選ぶ会話を間違えたか。
「じょ、冗談っすよ。それに長谷センパイ前に言ってましたよ
最近総災天センパイに会えなくて寂しいなぁって」
嘘ではない。
というか事実だ。
寂しいとまで言ってないけれど、
時々素顔の方の総災天センパイを見ると別れ際にしょっちゅうこっちの総災天センパイを思い出して、元気にしているか気にしている。

「ヒ、ヒロ君ったらいくつになっても甘えん坊なんだから・・・・・・」
「ちょろすぎんだろ」
「ちょろすぎっすね」
マスクをしていても満面の笑みを浮かべている事がわかるぐらい喜んでいる。
やっぱりブラコンとかそういうのとは違うよなこの反応。
恋奈様も自分と同じ事を思ったらしく、微妙そうな表情をしている。
ともあれ、なんとか恋奈様と総災天センパイの気まずい空気は一切無くなった。
我ながら中々の空気の読め方である。
真の空気の読める人間とは、場合によってあえて空気を読まない行為をする人間だ。
総災天センパイは自分と恋奈様の視線に気づいて咳払いをする。
自分の世界に僅かに浸っていた事を自覚し、若干頬が赤い。
「まぁアンタと長谷の事はもう良いわ。ムナクソ悪いし」
「そうだな。忌々しいしここいらで話を変えたほうがいいだろう」
「なんて言い草だ！」
なんなのだこの人達は。
もっとノロケとか自慢とか聞いてくれてもいいではないか。
「それで恋奈。もうすぐ夏が始まるが、何かしら目標はあるのか？」

話を本当に変えるらしい。
恋奈様は総災天センパイの問いに片膝をテーブルについたまま気だるげに答える。
「辻堂落とし。これだけよ」
「それが何よりも難しいっすけどね」
辻堂センパイを倒す。
明確でシンプルだ、これ以上ない程に。
だが困難だ、これ以上ない程に。
「腰越には勝ち逃げされたし、まさか不良でもなくなった奴をいつまでも狙うわけにはいかない。
だったら不良の頂点を目指すには辻堂を倒す以外にもう選択肢はないでしょうが」
皆殺しセンパイは春の江之死魔との決闘でしがらみに決着がついた。
江之死魔総員で皆殺しセンパイ一人に挑み、壊滅。
その後、一人残った恋奈様に自分が協力し、第二ラウンドといったが結果的に圧倒的な実力差でやはりこちらが敗れた。
言い訳のしようもなく、真っ向から敗れた。
だから恋奈様も自分も皆殺しセンパイに遺恨はない。
自分はまだまだあの人には勝てるとは思えないし、喧嘩する理由もないから今後再戦

する気もない。
対して恋奈様といえば、やはり自分と同じく再戦は考えていない。
元々恋奈様の目的は湘南の不良の頂点に立つことだ。
その分かりやすい行為として辻堂センパイや皆殺しセンパイを倒すことなのだ。
故に不良を抜けた皆殺しセンパイを追っていても意味はない。
恋奈様はそこを履き違えはしなかった。
「それで、辻堂を倒す算段はついたのか？
辻堂も今年から三年生、時間の猶予はあと僅かだぞ」
「・・・・・・そんなの言われなくともわかってるってば」
ため息をつく恋奈様。
どうやら本気で辻堂センパイの攻略法が閃かない様子。
「はっきり言って去年より最悪よ。
腰越が不良抜けたせいで辻堂との潰し合いによる利用もできなくなったし」
最強格に最強格をぶつけ、その漁夫の利を狙う。
兵法における常識だ。
それも今年は期待できない。
「さらに万能なリョウは卒業して、梓は結局私にとっての切り札になり得たことにすら

気づかず脱退」

ギロリとこちらを睨む恋奈様。

まぁ、確かに江之死魔を裏切り謀反をしたあの日。

正直掘り返したくない長谷センパイを病院送りにしたあの日まで自分は本気の実力を恋奈様には見せていなかった。

辻堂センパイや皆殺しセンパイを倒せるタイミングまで誰にも自分の実力を隠したかったのだ。

だが結局そのチャンスは来ないまま恋奈様にそれをぶつける形でバレてしまった。

つまり前の皆殺しセンパイとの決着を除いて、一度も恋奈様の為に本気を出したことはなかった。

「ただ脱退するだけならまだしも、よりによって辻堂軍団に入りやがって。

辻堂だけでも厄介過ぎるのに、本気のアンタまで相手取るとかどんだけ手間なのよ・・・・・・」

本当に悩んでいるらしく、顔色が優れない。

「別に自分は辻堂センパイの命令がなければ恋奈様とやりあったりしませんって」

「でもアンタ、確か辻堂軍団が襲われた場合に限り喧嘩から逃げないって約束あったわよね」

案の定知られていた。
まぁ恋奈様の情報網なら当然バレることか。
「なるほど、状況は本当に去年より酷いようだな」
「ええ。まだ有望株なルーキーの情報も少ないし、このままじゃ正直やばいわ」
「へぇ、因みにその恋奈様を悩ませる理由の自分が一人でここにいますけどチャンスじゃないんすか？」
敢えてカマをかけてみる。
敵情視察のつもりはない、単純に恋奈様の反応を伺いたいだけだ。
恋奈様は一度ジロリとこちらを睨む。
だが一瞬だけで、すぐに目をそらした。
「江之死魔総員がいりゃチャンスだったわね。
アンタ、今日は舎弟共がいないのを確認してからここに来たんでしょうが」
「気づかれてましたか」
やはり看破されていた。
流石恋奈様だ、それでこそ一度は付いていこうと思っていた人である。
「因みに今自分が一生ついていきたい人は長谷センパイなわけで」
「殺すわよ」

心の声がどうやら表に出てしまったようだ。
本気で殺意を込めた視線と声がぶつけられた。
自重しよう。
「まぁアンタや辻堂を無力化しようと思えば手段はあるけれど」
「へぇ、それは気になるっすね」
「俺も聞いては見たいが、まさか敵であるお前に言うわけもないだろう」
興味深い。
一応聞くことにする。
「知りたい？　じゃあ教えてあげる。どうせ使わない手段だから知られても何の問題もないし」
こちらから目をそらしたまま、少し険しい顔で恋奈様は次の言葉を吐き捨てる。
「長谷大を人質にするのよ。ほら、アンタが江之死魔にいた頃に何度か試みたじゃない」
ああなるほど。確かに使い古した作戦だ。
しかも時間が経ち、長谷センパイと絆をさらに深めた辻堂センパイや、生涯傍にいることを決めた自分には強力な作戦だ。
これを遂行されたら自分も辻堂センパイもたまったものではない。
「――――やってみろよ」

先程自分は恋奈様にチャンスといったが、それはこちらも同じことだ。
ほぼ単独で江之死魔総長の恋奈様がすぐ傍にいる。
ここでこの人を潰せばそんな真似すら未然に防ぐ事ができるだろう。
ここでやるか？
「やめろ」
拳を作った瞬間、横から手を抑えられた。
総災天センパイだ。
彼女が目ざとく自分の動きに気づき、行為に移る前に止めてきた。
「事前に言っただろう。長谷大を人質にするという策は初めから使う気はないと」
言われて頭が冷える。
どうやら自分は長谷センパイと人質というワードに過剰反応したようだ。
「サーセンっす。どうも冬に長谷センパイが不良にリンチされた件がトラウマになって・・・・・・・」
あの騒動のせいで自分の中で長谷センパイの保護欲が異常なまでに高まってしまった。
事前に恋奈様自身が使わない手段だと言っていた事すら意識から消えるくらいに盲目的らしい。

「だが恋奈。お前がその手段を取らなくとも、お前の部下が独断でしないとも限らない。注意はしておけ。彼に何かあれば引退した俺は元より腰越も黙ってはいないぞ」

「言われなくとも既に警戒してるわよ」

結局恋奈様はむしろ長谷センパイを守る側に立っているらしい。

「長谷は辻堂やアンタにとって弱みであると同時に逆鱗でもある。しくじった際のリスクを考えれば触ろうとは思わないわよ」

懸命だ。

そうしてくれると実に助かる。

「それに、私自身もアイツには借りがあるし・・・・・・・アイツの信頼を裏切るのもどうかと思うし・・・・・・・」

そっちが本心か。

顔を赤くしてごにょごにょとドモる恋奈様。

傍から見てると恋する乙女そのものである。

これには自分も総災天センパイも呆れる。

ここまで不器用な好意を持って生まれた恋奈様を哀れとみるかキュートと見るか。

自分には可愛らしく映った。

「さぁてと、江之死魔視察も終わったし長谷センパイの所に向かいますか」
江之死魔アジトを後にし、夜の弁天橋で一人大きく背伸びする。
夏も近くなり、海を見に来る人が増えたのだろうカップルが目立ってきた。
去年の夏までの自分ならばどうでもいい存在だった。自分の歩く道に二人セットで並びやがってウザったいと思うくらいか。
去年の冬から昨日までの自分だったら羨望、もしくは妬みの存在だった。
幸せそうに愛を語らいやがって、死んでしまえと思っていた。
けれどここ数日の自分はもう違う。
羨みもしないし、目障りだとも思わない。
本当に風景の一部くらいにしか見えない。

見るとどうにも長谷センパイが恋しくなる。そんな風景だ。
こうしてはいられない。
明日は休みだ。だったらこんな所で時間を潰しているなどもったいない。
今日は夜通し長谷センパイに可愛がってもらおう。
そう決めて早速歩み始めた。
だが一歩足を踏み出した瞬間、正面には意外な人物が。
「や、梓ちゃん。こんばんわ」
学園帰りらしく鞄を片手に持ったまま制服姿の長谷センパイがいた。
「どうしてここに？」
家はこっちとは全く方向が違う。
そもそも江ノ島にでも用事がない限りこの橋に用はないはずだが。
「ん～、梓ちゃんならここにいると思ってね。
ほら、梓ちゃんって何だかんだで辻堂軍団大切にしてるからしょっちゅう他の不良チームの視察とかしてるし」
自分の行動パターンを覚えられていたらしい。
それだけ自分を見ていてくれている事がわかって嬉しいと思う反面、少し恥ずかしい。

「よしてくださいよ、あいつらなんてどうでもいいってば」
実際長谷センパイや辻堂センパイ、恋奈様と比べればアイツ等の事などどうでもいい。
ただ、アイツ等に何かあると長谷センパイや辻堂センパイが悲しんだり怒るから力を貸しているだけ。
心底お人好しなセンパイはそういう自分の腹黒い面をむしろ美化して見ている気がする。
そんな長谷センパイだから自分は好きになったのだろう。
「そんな事より何で自分を探してたんですか？」
「え？　だって梓ちゃんデートしたがっていたじゃない。
そんな可愛い彼女を迎えに行くのは彼氏の甲斐性じゃないの？」
質問を質問で返された。
しかしこの質問返しに不快感は一切ない。
むしろ長谷センパイが自分を彼女と見てくれている。
その事がわかる最高の質問だった。
「流石長谷センパイ、それじゃあ落ち合ったところでこれからデートっすね」
「そうだね。どこ行こうか、明日は休みだしバイト代の残りも結構ある。

行ける所は沢山ある」
長谷センパイは手を差し出し、自分はそれを握り締めた。
そして自分達は背景の一部となった。
そうだ、夜は長い。
まだお楽しみは後にとっておこう。
今はまだ彼氏彼女という関係を楽しむ時間だ、男と女の関係を楽しむのはまだ早い。
「じゃああそこの展望台行きましょうよ。自分長谷センパイが高所恐怖症なの知ってるんすよ?」
「・・・・・君はサディスティックだなぁ」
いきなり顔を青くする長谷センパイ。
その顔に笑い、より体をくっつけて腕を絡めた。
長谷センパイもそれに驚くこともなく、合わせるように腕を絡めてくれた。
「いいじゃないっすか。後でセンパイはあずを好きなだけ泣かせられるんですから」
「泣かせるというよりは鳴かせるという方が正しい気がしなくもない」
「ふふ、どちらにせよソレは後の楽しみ。今はあずとこの空気を楽しみましょうよ」
「それもそうだ。それじゃあ行こうか梓ちゃん」
「はい、行きましょう長谷センパイ」